

徳之島諸方言の名詞アクセントの記述的研究

金, 娥璘

<https://hdl.handle.net/2324/4784376>

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :



徳之島諸方言の
名詞アクセントの記述的研究

金アリン

目次

目次	i
第 1 章 序論	1
1.1 本研究の目的	1
1.2 徳之島の位置、系統、音素	1
1.3 本稿の構成と各章の概要	2
第 2 章 徳之島諸方言の名詞アクセントに関する先行研究	3
2.1 徳之島諸方言の名詞アクセントの共時的分析に関する先行研究	3
2.1.1 上村(1959)による徳之島諸方言のアクセント体系	3
2.1.2 平山・大島・中本(1966)による徳之島諸方言のアクセント体系	5
2.1.3 松原方言アクセント体系に関する議論	7
2.1.4 目手久方言、亀徳方言、山方言のアクセント体系	9
2.1.5 浅間方言のアクセント体系に関する議論	10
2.1.6 諸先行研究による徳之島諸方言の名詞アクセントの共時的分析に 対する本稿の考え	13
2.2 徳之島諸方言の名詞アクセントの通時的分析に関する先行研究	14
2.2.1 松森(2012)と「系列別語彙」	15
2.2.2 松森(2017)と C 系列 2 音節名詞の語頭音節の長母音化	16
2.2.3 北琉球祖語の名詞アクセント体系に関する先行研究らの仮説	18
第 3 章 徳之島諸方言の名詞アクセントの共時的分析	20
3.1 アクセント体系の記述の前に	20
3.1.1 調査地点及び調査方法	20
3.1.2 使用記号	21
3.1.3 徳之島諸方言の名詞アクセントに共通する特徴	23
3.1.3.1 徳之島諸方言における下降	23
3.1.3.2 徳之島諸方言における 3 種類の母音の伸び	24
3.1.3.2.1 /:/ の出現パターン	26
3.1.3.2.2 基底 1 モーラ語と最小語制限	29
3.1.3.2.3 通時的変化の名残と考えられる /:/	35
3.1.4 徳之島諸方言の名詞アクセント体系の分類	37

3.2	イ群の名詞アクセント体系	38
3.3	イ 1 群の名詞アクセント体系	39
3.3.1	Z2 の解釈	40
3.3.1.1	轟木方言の複合語アクセント規則と Z2 の母音の伸び	42
3.3.1.2	西阿木名、金見、面縄の Z2	44
3.3.2	Y1 の解釈	45
3.3.3	徳之島町手々の共時的アクセント	46
3.3.4	徳之島町金見の共時的アクセント	51
3.3.5	徳之島町山の共時的アクセント	54
3.3.6	徳之島町轟木の共時的アクセント	57
3.3.7	天城町兼久の共時的アクセント	61
3.3.8	天城町瀬滝の共時的アクセント	63
3.3.9	天城町西阿木名の共時的アクセント	67
3.3.10	伊仙町阿権の共時的アクセント	74
3.3.11	伊仙町面縄の共時的アクセント	79
3.3.12	徳之島町亀津の共時的アクセント	84
3.4	イ 2 群の名詞アクセント体系	87
3.4.1	伊仙町伊仙の共時的アクセント	88
3.5	イ 3 群の名詞アクセント体系	93
3.5.1	徳之島町母間の共時的アクセント	94
3.5.2	徳之島町井之川の共時的アクセント	96
3.6	ロ群の名詞アクセント体系	99
3.6.1	Z2 と Y1 の解釈	100
3.6.2	W 型の解釈	102
3.7	ロ 1 群の名詞アクセント体系	106
3.7.1	天城町与名間の共時的アクセント	106
3.8	ロ 2 群の名詞アクセント体系	112
3.8.1	徳之島町花徳の共時的アクセント	113
3.9	ロ 3 群の名詞アクセント体系	119
3.9.1	天城町松原の共時的アクセント	120
3.9.2	天城町岡前の共時的アクセント	126
3.10	ロ 4 群の名詞アクセント体系	130
3.10.1	伊仙町犬田布(當原)の共時的アクセント	131
3.11	ハ群の名詞アクセント体系	137
3.11.1	天城町浅間の共時的アクセント	138
3.11.1.1	浅間方言における /:/ と下降	140

3.11.1.2	V型の解釈	142
3.11.1.3	浅間方言の例外的なピッチパターンを持つ語例	143
3.11.1.4	上野(2014, 2015)の複合語と外来語アクセント資料の分析	147
3.12	共時的分析のまとめ	153
3.12.1	X2のC系列語に見られる下降に関する本稿の解釈	153
3.12.2	徳之島諸方言の名詞アクセント体系の分布	156
第4章	徳之島諸方言の名詞アクセントの通時的変遷	158
4.1	徳之島祖語のアクセント体系	158
4.2	徳之島諸方言の通時的変遷に関わる四つの変化	161
4.2.1	C2がA2もしくはB2に、B1がA1に合流(中和)する 「型の合流」	161
4.2.1.1	C2がA2もしくはB2に合流(中和)する「型の合流」	161
4.2.1.2	B1がA1に合流(中和)する「型の合流」	164
4.2.2	A型とC型における「山の後退」	166
4.2.3	型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる 「核の後退」	167
4.2.3.1	(4-4a)をトリガーに引き起こされる型の合流(中和)を 回避するための「核の後退」	168
4.2.3.2	(4-4b)をトリガーに引き起こされる型の合流(中和)を 回避するための「核の後退」	169
4.2.3.3	W型とドメインが「語」から「文節」になる変遷過程	172
4.2.4	音節内上昇と型の合流の回避(まとめ)	175
4.3	徳之島の各方言における通時的変遷	176
4.3.1	兼久、瀬滝、西阿木名方言アクセントの通時的変遷	177
4.3.2	亀津方言アクセントの通時的変遷	182
4.3.3	山方言アクセントの通時的変遷	185
4.3.4	金見方言アクセントの通時的変遷	188
4.3.5	手々方言アクセントの通時的変遷	191
4.3.6	轟木方言アクセントの通時的変遷	197
4.3.7	阿権方言アクセントの通時的変遷	203
4.3.8	面縄方言アクセントの通時的変遷	206
4.3.9	井之川方言アクセントの通時的変遷	209
4.3.10	母間方言アクセントの通時的変遷	214
4.3.11	伊仙方言アクセントと犬田布(當原)方言アクセントの通時的変遷	217
4.3.12	与名間方言アクセントの通時的変遷	226

4.3.13 花徳方言アクセントの通時的変遷.....	231
4.3.14 松原方言と岡前方言アクセントの通時的変遷.....	240
4.3.15 浅間方言アクセントの通時的変遷.....	249
4.4 通時的分析のまとめ	258
第5章 結論	261
5.1 各章のまとめ	261
5.2 残された課題	262
参考文献	264
謝辞	267

第1章 序論

1.1 本研究の目的

これまで、徳之島諸方言のアクセントは多型アクセント体系、もしくは語声調の方言であると記述されてきた。しかし、先行研究の内容を見ると徳之島諸方言のアクセントが非常に複雑な体系、あるいは規則を持つと分析されているものが多い。このような、徳之島諸方言におけるアクセント分析を困難にしている理由として、徳之島諸方言で散見される“母音の伸び”が関わっていると考えられる。特に早田(1995)、ローレンス(2015)、上野(2016)などの先行研究では、浅間方言と松原方言において、“母音の伸び”(=重音節)が規則的で義務的に生じており、このような“母音の伸び”がアクセントと深く関係しているという分析をしているなど、“母音の伸び”は徳之島諸方言のアクセント研究における一大テーマであると言えるだろう。

「徳之島諸方言の名詞アクセントの記述的研究」と題した本研究の目的は、上記のような問題意識からまずは“母音の伸び”について整理をしつつ、これまで調査がなされていない方言も含めた19の方言についてその名詞アクセント体系を新たに記述すること。それを基に、徳之島祖語から各方言に至るアクセントの成立過程を描くことを主な目的とするものである。

1.2 徳之島の位置、系統、音素

本稿で研究対象とする徳之島諸方言は鹿児島県の奄美群島の中で、奄美大島の南に位置する徳之島で話されている言語(方言)である¹。徳之島は現在の行政区分では徳之島町、天城町、伊仙町の三つの町に分かれている。島全体の人口は約21490人²であり、そのうち徳之島諸方言の話者と考えられる60歳以上の人口は約1万人くらいであると考えられる。

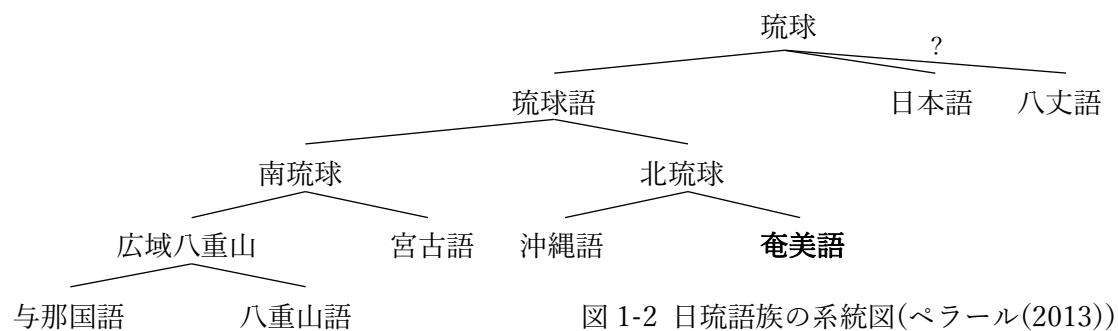
系統的に、徳之島方言は北琉球語の奄美語に属する方言である(図1-2)。



図 1-1 徳之島の位置

¹ https://eikounoayumi.jp/map_illustration/kyushu_okinawa/kagoshima/oshima.html(図 1-1 地図)

² <https://www.pref.kagoshima.jp/ac09/tokei/bunya/jinko/jinkoudoutyousa/geppou.html>(令和3年11月1日基準)



徳之島方言の(アクセント以外の)音韻的な特徴を簡単に述べる。まず、徳之島諸方言は2つの中舌の母音音素 /i/ と /ë/ を持つ。また、喉頭化子音 /ʔk/、/ʔt/、/ʔn/、/ʔm/、/ʔj/、/ʔw/、/ʔc/ があり、語頭において喉頭の緊張を伴う音による対立が見られる。本稿では母音については喉頭の緊張を伴う音による対立を認めない。徳之島の音素及び、本稿で使用されている音素表記に関しては Appendix 1 を参照して欲しい。

1.3 本稿の構成と各章の概要

本稿の構成は以下のとおりである。まず、第2章では第3章と第4章に関係している先行研究について検討する。第3章では、本稿で調査した19か所の徳之島諸方言のデータを元に徳之島諸方言の名詞アクセント体系を記述する。また、徳之島諸方言に現れる音声的な傾向に関係して現れる例外的なピッチパターンについて解説する。第4章では、第3章で得られたアクセント体系を基に徳之島祖語の体系を仮説として立て、徳之島祖語から現在の徳之島諸方言に至る変遷過程について論じる。第5章は本論全体のまとめであり、本稿で扱えなかったいくつかの課題について述べる。

第2章 徳之島諸方言の名詞アクセントに関する先行研究

2.1 徳之島諸方言の名詞アクセントの共時的分析に関する先行研究

徳之島諸方言の中で先行研究が名詞アクセントについて言及している方言は、筆者の知る限り、伊仙方言、目手久方言、埴原方言、上晴方言、亀津方言、亀徳方言、山方言、母間方言、花徳方言、平土野方言、松原方言、瀬滝方言、浅間方言がある。このうち筆者が調査した方言と一致するのは伊仙、亀津、山、母間、花徳、松原、瀬滝、浅間方言である。本節では徳之島諸方言の名詞アクセント(体系)が先行研究でどのように記述されているか見ていくことにする。

先行研究を見ていく中で本稿が目とする視点は、それぞれの先行研究が“母音の伸び”と“ピッチの下降”をどのように扱っているかであり、本稿と諸先行研究の立場の違いが明確になる部分でもある。そもそも、徳之島諸方言(そして徳之島を含む北琉球諸語)において、“母音の伸び”が多く観察(あるいは推定)されることは良く知られていることであり、本稿の資料から語例を抜粋すると、/ki:/ (木・瀬滝)、/ha:/ (浜・手々)、/bira:/ (葦・松原)、/ji:/ (色・伊仙)、/na:/ (きのこ・轟木)、/u/sa:gi/ (兎・西阿木名)³の下線部のようなものが挙がる。しかしながら、筆者が見るに先行研究はどれもこの“母音の伸び”の取り扱いに腐心しているように思われる。“音節”を、アクセント位置を計算するための単位として導入することで長母音(重音節)と短母音(軽音節)を同じように扱えるようにしたと思われる場合が多く、一部の先行研究では、長母音(重音節)の出現とその位置がアクセントに深く関係しているものであると分析したものもある。また、“ピッチの下降”を弁別的特徴と見るか否かも本稿が目とする視点であるが、先行研究では、下降の位置をアクセントの弁別的特徴としているものもあれば、語声調の方言として分析する中で下降を弁別的特徴としているものも多い(早田 1995 など)。上でも述べたように、この“母音の伸び”と“ピッチの下降”に関する観察と解釈こそが本稿と諸先行研究との決定的な違いであるので、以下ではその部分に注目しつつ先行研究を見ていくことにする。

2.1.1 上村(1959)による徳之島諸方言のアクセント体系

徳之島諸方言のうち、上村(1959)で言及されているのは、伊仙方言、亀徳方言、平土野方言の3方言である。上村(1959)は徳之島諸方言のアクセントに、(2-1)から(2-3)で見るような対立があるとしている。(2-1)から(2-3)は、上村(1959)でいう伊仙方言、亀徳方言、平土野方言のアクセントの対立を、筆者が表でまとめたものである。上村(1959)では、●を高い音節、○を低い音節と述べているが、例を見る限り丸の意味するものは、音節であったりモーラであったりと混ざっているようである。例えば、/ki:/ (木)のように重音節で現れる語例

³ /はピッチの下降、/はピッチの上昇、:は長母音の後半部をそれぞれ表す。

を、伊仙方言では、準2音節語と分類しているのに、亀徳方言では単音節語と分類されていたり、/uN/(海)が平土野方言で2音節語に分類されていたりするような具合である。(2-1)から(2-3)では、/ki:(木)のように必ず長母音(重音節)で現れるとしている部分には下線を引いて表すことにする。

まず、伊仙方言は、単音節語(準2音節語)が2種の型、2音節語が3種の型、3音節語が4種の型、4音節語が4種の型に分かれるとされている。

(2-1) 上村(1959)における伊仙方言のアクセント体系

単音節語 (準2音節語)	2音節語	3音節語	4音節語
<u>○●</u> ~ <u>○○</u> ▲	○●~○●△	○○●~○○●△	○○○●~○○○○▲
<u>●●</u> ~ <u>●●</u> △	○○~○○▲	○●○~○●○△	○○●○~○○●○△
	●○~●○△	●○○~●○○△	○●○○~○●○○△
		●●○~●●○△	●●○○~●●○○△

次に、亀徳方言は、単音節語が2種の型、2音節語が3種の型、3音節語が4種の型、4音節語が4種の型に分かれる。

(2-2) 上村(1959)における亀徳方言のアクセント体系

単音節語	2音節語	3音節語	4音節語
○~●△	○●~○●△	○○●~○○●△	○○○●~○○○●△
<u>○○</u> ~ <u>○○</u> △	○○~○○△	○●○~○●○△	○○●○~○○●○△
	●○~●○△	○○○~○○○△	○○○○~○○○○△
		●●○~●●○△	●●○○~●●○○△

最後に、平土野方言は、単音節語が2種の型、2音節語が3種の型、3音節語が5種の型、4音節語が4種の型に分かれる。

(2-3) 上村(1959)における平土野方言のアクセント体系

単音節語	2音節語	3音節語	4音節語
<u>○●</u> ~ <u>○●</u> △	○●~○●△	○○●~○○●△	○○●○
<u>●●</u> ~ <u>●●</u> △	○○~○○△	○●○~○●○△	○●○○
	●○~●○△	○●○~○●○△	○●●●
		○○●~○○●△	●●○○
		●○○~●○○△	

2.1.2 平山・大島・中本(1966)による徳之島諸方言のアクセント体系

平山・大島・中本(1966)で言及されているのは、伊仙方言(中伊仙西方言)、埴原方言、上晴方言、亀津方言、山方言、母間方言、平土野方言、松原方言、瀬滝方言の8方言である。平山・大島・中本(1966)では、徳之島諸方言のアクセントを、拍(モーラ)を数えの単位とする、下がり目が弁別的な多型アクセントであると記述している⁴。モーラを単位としているので、/hana/(花)と/ha:(歯)が同じ2モーラ語として扱われている。(2-4)から(2-7)は、平山・大島・中本(1966)に挙げられている徳之島諸方言のアクセント体系である。

(2-4)は中伊仙西方言のアクセント体系である。なお、中伊仙西とは伊仙集落を中・西・東の三つの地区に分けた場合の、中伊仙地区の西側と意味であると考えられる。平山らの記述によると地区によるアクセントの違いはないとのことである。

(2-4) 平山・大島・中本(1966)における中伊仙西方言のアクセント体系⁵

拍	音韻論的解釈	反省的型 (実際のピッチパターン)	語例
2	/○○]/	○●～○●△, <u>○●</u>	?usi~?usinu (牛) ⁶ , ha: (葉)
	/○]○/	●○～●○△	hasi~hasinu (箸)
	/○○=]/	○●～○○▲, <u>○●</u>	hana~hananu (花), ha: (歯)
3	/○○○]/	○○●～○○●△	mukadi~mukadinu (箸)
	/○○]○/	○●○～○●○△	kibusi~kibusinu (煙)
	/○]○○/	●○○～●○○△	hwuQku~hwuQkunu (袋)
	/○○○=]/	○○○●～○○○▲	nada:~nada:nu (涙)

次の(2-5)は亀津方言のアクセント体系である。埴原方言と上晴方言は、亀津方言と同じアクセント体系であると記述されている。一部のアクセント型において、モーラの半ばに弁別的な下がり目があることに注意が必要である。

⁴ 平山・大島・中本(1966)では、名詞と動詞、形容詞を分けて分析していないため、厳密には本稿が対象とする“名詞”アクセントの記述とは対象が異なるかも知れない。しかし、挙げられている例を見るとある型に一定の品詞が集中するということもなさそうなので、ここでは名詞アクセントに関する先行研究として述べておくことにする。

⁵ ○は低、●は高。] は弁別的な下がり目である。=]は、1モーラ助詞/nu/の次に下がり目が来ることを表すものである。助詞は三角で表し、△は低、▲は高である。重音節の場合は下線で示す(以下に同じ)。

⁶ 本稿では母音/a,i,u,e,o,ï,ë/における喉頭の緊張を伴う/?/を認めていないが、ここでは平山・大島・中本(1966)に従い/?usi/と記す。

(2-5) 平山・大島・中本(1966)における亀津方言のアクセント体系

拍	音韻論的解釈	反省的型 (実際のピッチパターン)	語例
2	/○○/	○●～○●▲, <u>●●</u> ～ <u>●●</u> ▲	hana~hananu (鼻), kī: (毛)
	/○Φ/	○●～○●△, <u>○●</u> ～ <u>○●</u> △	hana~hananu (花), kī: (木)
	/○]○/	●○～●○△	kagī (陰)
3	/○○○/	○●●～○●●▲	kībusi~kībusinu (煙)
	/○○○Φ/	○○●～○○●△	kagami~kagaminu (鏡)
	/○○]○/	○●○～○●○△	ʔusagi (兎)
	/○]○○/	●○○～●○○△	hwuQku (袋)

(2-6)は母間方言のアクセント体系である。山方言もこの母間方言と同じアクセント体系であると記述されている。(2-5)の亀津方言の分析と同じく、一部のアクセント型において、モーラの半ばに弁別的な下がり目があることに注意が必要である。

(2-6) 平山・大島・中本(1966)における母間方言のアクセント体系

拍	音韻論的解釈	反省的型 (実際のピッチパターン)	語例
2	/○○/	○●～○●▲, <u>●●</u> ～ <u>●●</u> ▲	hana (鼻), kī: (毛)
	/○Φ/	○●～○●△, <u>○●</u> ～ <u>○●</u> △	hana (花), kī: (木)
	/○]○/	●○～●○△	kui (声)
3	/○○○/	○●●～○●●▲	kībusi (煙)
	/○○○]/	○○●～○○●△	kagami (鏡)
	/○○]○/	○●○～○●○△	mukadī (むかで)
	/○]○○/	●○○～●○○△	guNdza (鯨)

(2-7)は平土野方言のアクセント体系である。松原方言と瀬滝方言も、平土野方言と同じアクセント体系であると記述されている。

(2-7) 平山・大島・中本(1966)における平土野方言のアクセント体系

拍	音韻論的解釈	反省的型 (実際のピッチパターン)	語例
2	/○○/	○●～○●▲, ●●～●●▲	hana (鼻), kī: (毛)
	/○○]/	○●～○●△, ○●～○●△	hana (花), kī: (木)
	/○]○/	●○～●○△	hwunī (舟)
3	/○○○/	○●●～○●●▲	kacjo: (鰹)
	/○○○]/	○○●～○○●△	jiNga (男)
	/○○]○/	○●○～○●○△	kibusī (煙)
	/○]○○/	●○○～●○○△	guNdza (鯨)

2.1.3 松原方言アクセント体系に関する議論

2.1.1 節で見たように平山・大島・中本(1966)では、松原方言が(2-7)の平土野方言と同じアクセント体系であると言及されているが、具体的な語例やデータがほとんど示されていない。松原方言の名詞アクセントに関してまとめた記述資料とともに論じたものは崎村(1982)が最初ということになる。崎村氏は、徳之島諸方言を南部方言、北西部方言、東部方言の3類に区分し、各類の代表として伊仙町目手久方言、天城町松原方言、徳之島町亀徳方言の大まかな概要(音韻とアクセント、語法、語彙)を、連作で発表している(崎村 1981, 1982, 1983)。松原方言に関して述べた崎村(1982)はその連作のうちの2番目の論考である。松原方言のアクセント体系に関して崎村(1982)はシラビームを単位とした3型アクセントであると解釈し、各型の調値(a類、b類、c類)について以下のように定義している。

(2-8) 崎村(1982)による松原方言のアクセント(調値)の定義

- a類は「昇」調：語の第2シラビーム以降が高。第2シラビームがなければ、第1シラビームが高。
- b類は「低」調：語の第2シラビームまでが低。第2シラビームがなければ、第1シラビームが低。
- c類は「高」調：第1シラビームが降、または、第1シラビーム以降が高。

しかし、この論文は早田(1995)からの厳しい批判を受けた。具体的な批判の内容としては、「共時論の研究に初めから通時論が混入していて恣意的な分類と多くの資料の放棄を将来し、共時的分析のすべてを残念ながらぶち壊しにしていること」(133p)、そして長音節(重音節)と短音節(軽音節)の配置に関して配慮せず、音節構造とピッチ形との関係が分からないことが挙げられている。このような批判に続いて、早田(1995)では崎村(1982)の資料を再分析し、松原方言のアクセントを崎村(1982)と同じく 3種の単語声調 を持つと定義した。

しかし、単語の共時的な所属は崎村(1982)とは大きく異なるものである。(2-9)は早田(1995)による松原方言のアクセント(調値)の定義であり、(2-10)は松原方言のピッチ付与規則で、同じ型であっても音節構造によって実際に付与されるピッチパターンが変わるという解釈である。なお、早田(1995)で「この方言の自立語は必ず一個は長音節を含まなければいけないようである」(133p)と述べられていることは“母音の伸び”の取り扱いに関係しており注目すべき点であろう。

(2-9) 早田(1995)による松原方言のアクセント(調値)の定義⁷

	1 音節	2 音節	3 音節	4 音節
a 類 高平調	—□	—□□	—□□□	—□□□□
b 類 上昇調	/□	/□□	/□□□	/□□□□
c 類 <u>下降調</u>	\□	\□□	\□□□	\□□□□

(2-10) 早田(1995)による松原方言のピッチ付与規則

- a 高平調名詞につき、語頭の短音節を(それがあれば)「低」にし、他はすべて「高」にせよ。
- b 上昇調名詞につき、語頭の2モーラを「低」にし、他のモーラを(それがあれば)すべて「高」にせよ。
- c 上昇調名詞につき、語頭の2モーラを「高低」にし、それより前のモーラを(それがあれば)すべて「低」にせよ。
- (c2 音節の上昇調名詞につき、第1音節が喉頭化音で始まる長母音で第2音節が短音節の時は、第1音節を「下降調」、第2音節を「低」にせよ。)

上野(1997)では、早田(1995)による崎村(1982)への批判の主旨には賛同しながらも、早田(1995)の解釈が結局は崎村(1982)の調査報告(データ)に依存するものであると指摘し、崎村(1982)のデータの確認調査を実際に行っている。その結果、崎村(1982)のデータと異なる部分が多く見つかったため、崎村(1982)のデータを元にしていた早田(1995)の解釈にも修正すべき点があるとした。(2-11)は上野(1997)による、早田(1995)のピッチ付与規則の修正案である。しかし、上野(1997)の分析においても、松原方言が3型アクセント(3つの型からなる)体系であるという見解には変わりがなく、同じ類であっても音節構造によって実際に付与されるピッチパターンが変わるという解釈も早田(1995)と同じである。

⁷ 他の先行研究と本稿の第3章と第4章においては、○はモーラを表すので、区別のために早田(1995)の表記を変更して音節は□で表す。□(音節)が重音節か軽音節かは問わない(以下に同じ)。

(2-11) 上野(1997)の松原方言の音調型派生規則

a 類 : 第 1 音節が長音節の時はそこから上げよ。第 1 音節が短音節の時は第 2 音節から上げよ。(パターンを図示するならば、 —)

b 類 : 第 1 音節が長音節の時は第 2 音節から上げよ。第 1 音節が単音節の時は第 3 音節から上げよ。ただし、低平調になる場合は、最終音節を上昇調にせよ。($\nearrow$)

c 類 : 最後の長音節で上げ、その音節内で下げよ。($\nearrow \searrow$)

その後、崎村(2001)では上記の早田氏と上野氏の批判に対し、一部の内容(特に上野(1997)のデータと食い違いがある部分)に関しては反論しつつも、「(崎村氏本人のものより)より妥当な 3 型音調の生成規則を求めたもの」と評している。加えて崎村(2001)では松原方言の外来語のアクセント資料を公表している。

2.1.4 目手久方言、亀徳方言、山方言のアクセント体系

崎村氏による目手久方言(崎村(1981))と亀徳方言(崎村(1983))に関する論考と、山方言のアクセントに関する論考である橋尾(1988)について述べる。

前述したように、崎村氏の論考は 3 連作で公表されており、このうち松原方言に関する論考(崎村(1982))に関しては、上記のとおり早田氏と上野氏の批判を受けている。亀徳方言について書かれた崎村(1983)においても、通時論を参考に共時的なデータを取捨選択するといった批判を受けたのと同様の研究方法を取っているので、松原方言の場合と同じ批判がなされるものであると本稿は考える。(2-12)は、崎村(1983)の亀徳方言のアクセント体系である。崎村(1983)では亀徳方言のアクセントを、シラビームを単位とした 3 型アクセントと解釈している。

(2-12) 崎村(1982)による亀徳方言のアクセント(調値)の定義

a 類は「平」調：語の第 2 シラビーム以降が高。第 2 シラビームがなければ、第 1 シラビームが高。

b 類は「昇」調：語の末尾のシラビームが高。

c 類は「降」調：語の末尾からシラビームが高。

崎村(1981)は、目手久方言のアクセントに関して、平山・大島・中本(1966)の中伊仙西方言のアクセント体系(2-4)と同じであると解釈している(崎村(1981))。つまり、拍(モーラ)を数えの単位とする、下がり目が弁別的な多型アクセントと見ている。

橋尾(1988)は、崎村氏の研究手法(通時論を参考に共時的なデータを取捨選択する方法)にそのまま従っている。それを勘案するとしても、肝心の分析の部分では 2 音節語だけを取り上げて類別語彙との対応関係を論じた後、それを該当方言のアクセント体系であると結論付けている点で、論外である。橋尾(1988)によるアクセント体系に関してはこれ以上触れ

ないことにする。

2.1.5 浅間方言のアクセント体系に関する議論

浅間方言は徳之島で最も方言データが蓄積されている方言と言え、これまでに発表されたアクセントに関する論考も多い。特に上野氏による一連の研究(上野(1977, 2000, 2003, 2014, 2015, 2016, 2017a, 2017b, 2017c, 2018a, 2018b))があり、膨大な方言資料が公開されている。ここでは名詞アクセントに絞り、先行研究を見ていくことにする。浅間方言の名詞アクセントについての初めて報告と言えるのは柴田(1960)である。柴田(1960)の内容は主に音素体系とシラビーム・モーラ体系に関するものであり、アクセントに関しては「アクセント記号の読み方」として、5モーラ語の7つの型が例示されており、5モーラ以外の語はこれに準ずると述べている。

(2-13) 柴田(1960)⁸

○○○○○	○○○○○(●●●●●)
○○○○[○	○○○○●
○○○[○○	{ ○○○●○ ○○○●●
○○[○○○	{ ○○●○○ ○○●●○
○○○○]○	●●●●○
○○○]○○	●●●○○
○○]○○○	●●○○○

柴田(1960)の資料に解釈を加えたのが早田(1977: 注 26)である。早田(1977: 注 26)では、浅間方言を“高起と低起の二つの語声調”であり、“アクセントはない”という解釈を提示した。早田氏のいう“アクセントはない”は、言い方に変えれば、“アクセント核を持たない”体系という意味である。浅間方言のピッチ付与規則に関しては、「『(0)高起語名詞は高、他は低、(1)その名詞内に長(2モーラ)音節がなければ、名詞・複合成分名詞の最終音節を長く、(2)高起語名詞末短音節は低に、(3)低起語名詞に続く助詞の第1モーラ(音節?)は高に、助詞がなければ名詞の最終モーラを高にする』という順序づけられた規則がある」と考える。」(早田 1977: 358-359) と述べている。音節構造によって実際に付与されるピッチパターンが変わるという解釈は早田(1995)の松原方言の場合と同じである。

その後、上野(1977)で金田一語彙をすべて調べた浅間方言の名詞アクセント資料が発表

⁸ [はピッチの上昇、]はピッチの下降。○○○○○(●●●●●)の部分は平調であるため高●か低○か決められないという著者の考えに基づくものと考えられる。

されたのであるが、この時点では上野氏本人は浅間方言の資料に見られるピッチパターンをすべて書き出して整理するにとどまり、解釈は付けてはいない。上野(1977)では、浅間方言の自立語は必ず「重音節」を一つ含み、低起式名詞が高起式の「この」などが前接する連体構造に入ると、名詞も高く続いてその重音節を境に単独形の「上昇」が「下降」に交替する現象に着目し、(2-14)のように浅間方言のピッチパターンを整理した。後に、上野(2000)では、前述した交替を起こす位置はその単語の「最後の重音節」の位置であるとしている。(2-14)の a と b は、連体構造の被修飾部で同じ姿で実現するピッチパターンであるとのことである。

(2-14) 上野(1977)の浅間方言のピッチパターンのまとめ⁹

	I	II	III	IV
a0	[□	[□□	[□□□	[□□□□
b0	∧□	□∧□	□□∧□	(□□□∧□)
a1		[□]□	[□]□□	[□]□□□
b1		□[□	□[□]□	□[□]□□
a2			[□□]□	[□□]□□
b2			□□[□	□□[□]□
a3				□□□]□
b3				□□□[□

(2-14)の上野(1977)で浅間方言のピッチパターンを書き出したものを、早田(1995)はアクセントを解釈したものと考えたようで、これに対して以下の3つの点について批判している。(1)狭義のアクセント方言と捉えてピッチの変わり目が高起式なら下がり目、低起式なら上がり目とする解釈は、現実の言語・方言で見たこともなく、信じられない、(2)(すべてを等しく音節で整理するだけで、軽音節と重音節を分けた)音節構造を一顧だにしていない、(3)本来分けるべき名詞と形容詞、動詞を全部込みになっている、と述べている。早田(1995)は、上野(1977)の資料のうち、名詞の資料を分析して浅間方言を 2 型単語声調体系 と結論付けている。(2-15)は、早田(1995)による浅間方言のアクセント体系であり、(2-16)は浅間方言のピッチ付与規則である。

(2-15) 早田(1995)による浅間方言のアクセント体系

	1 音節	2 音節	3 音節	4 音節
a 類 高平調	—□	—□□	—□□□	—□□□□
b 類 上昇調	/□	/□□	/□□□	/□□□□

⁹ [はピッチの上昇、]はピッチの下降、∧は音節内上昇。

(2-16) 早田(1995)による浅間方言のピッチ付与規則

- a1 高平調の単語は、語末に短音節(連続)があればそれをすべて「低」にし、それより左すべてを「高」にせよ。
- a2 3音節以上の単語の語末の2長音節連続は「高低」、それより左は「高」にせよ。
- b1 上昇調の単語は、語末モーラのみ「高」にし、他はすべて「低」にせよ。
- b2 語末の1音節は、それより左に3モーラ以上あれば、「高」にせよ。
- b3 語末の2音節は、それより左に3モーラ以上あれば、「高低」にせよ。
- b4 語末の2短音節連続は「高低」にせよ。

上野(2016)は、上野(1977)で解釈されずにいた浅間方言の名詞アクセントに、解釈を加えたものである。(2-17)は上野(2016)で示された浅間方言の名詞アクセント体系である。論文中で上野氏自身が述べている通り、「一度も報告されたことのない独自のタイプ」であるという分析になっている。まず、A型とB型は高起式、C型からH型は低起式という式の対立がある。また、高起平進型「┐」(A型)、高起下降型「\」(B型)、(低起)上昇下降型「^」(C型)、低起高進型「┘」(D型～H型)の4つの語声調の対立がある中で、他の型と違い、低起高進型「┘」(D型～H型)は必ず上げ核がありその位置によって弁別性がある、という体系である。

(2-17) 上野(2016)による浅間方言のアクセント体系

- A型：高起平進型、「┐」。高く始まって平進し、固有の下降は持たない。
- B型：高起下降型、「\」。高く始まり、語頭から2モーラを含む音節末で下降する。
- C型：低起上昇下降型(「低起」は省略可)、「^」。語頭から2モーラ目を含む音節まで低く進み、次の音節で上昇してその直後で下降せる。
- D型：低起高進型、「┘」。語頭から1音節低く進み、次の音節で上昇する。上昇の直前の音節に上げ核あり。その1型。
- E型：低起高進型2型、語頭から2音節低く進み、次の音節で上昇する。
- F型：低起高進型3型、語頭から3音節低く進み、次の音節で上昇する。
- G型：低起高進型4型、語頭から4音節低く進み、次の音節で上昇する。
- H型：低起高進型5型、語頭から5音節低く進み、次の音節で上昇する。

また、(2-17)の分析において「重音節は高さを保つことができるのに対して、短い軽音節はそれができずに低くなる結果、軽音節の存在があたかも下げ核があるかのごとき様相を呈する」(上野 2016: 227)と、重音節と軽音節の振る舞いの違いについて言及している。上野(1977)から、上野氏の分析において一貫しているのは、浅間方言の自立語には重音節を少なくとも一つは含むという配列規則があることと、音節構造とアクセントとの間に関係性が認められるという考えである。これは、上野氏だけではなく、前述した早田(1995)と以下

のローレンス(2009, 2015, 2020)でも共通する考えのようである。ローレンス(2015)では、
「浅間方言の各語形は少なくとも一つの重音節(長母音か二重音節を含むか、撥音か促音で
終わる音節)がなければならない」(ローレンス 2015: 1) としており、浅間方言の単純名詞
について、重音節の位置と音調型を基準にすると、その多くが(2-18)の三つの語類に分類で
きると述べている。

(2-18) ローレンス(2015)による浅間方言の単純名詞の分類

A 語類：語頭から高く、第2拍を含む音節は重音節である。(kadzʷi (風))

B 語類：語末音節が重音節で、4拍以下の単語の場合は語末拍が、5拍の単語の場合は語末
音節が高い。(kusja[a (草))

C 語類：前語末拍を含む音節が重音節で、4拍以下の単語の場合は語末拍が、5拍の単語の
場合は語末音節が高い。(haa[ma(浜))

ここで特筆しておくべき事項でもあり、結果的に先行研究の問題とも言えるのは、柴田
(1960)から始まる浅間方言の資料及び論考が、すべて一人の話者から得られたデータによ
るものであるということである。本稿の話者の一人でもある浅 A は、非常に伝統的で厳格
な方言を使う方であるため、諸先行研究でも本稿でも非常に頼りにしている話者である。し
かしながら、この話者は、(本稿の調査結果から言うと)浅間方言においてはフリーバリエー
ションで現れても現れなくてもよい“母音の伸び”について、すべて伸ばした方のバリエー
ントで発音する方であった。つまり本稿による調査の結果、先行研究では配列規則があるとまで
言われてきた“母音の伸び”には個人差が指摘できるのである。この点については、当然なが
ら話者の側に何か問題があるというような話では全くなく、諸先行研究を行った研究者側
の問題であるということはあらかじめここで明確にしておきたいが、この浅間方言の調査
にかかわる重要な内容に関しては、他の話者から得られたデータとの比較も含めつつ第3章
(特に 3.11.1 節)で詳しく述べることにする。

2.1.6 諸先行研究による徳之島諸方言の名詞アクセントの共時的分析に対する本稿の考え

以上、徳之島諸方言の名詞アクセント体系に関する先行研究について述べた。冒頭で述べ
たように、本稿と先行研究らとの根本的な違いは、“母音の伸び”と“ピッチの下降”に関する
観察と解釈にある。具体的には第3章で論じるが、ここでも簡単に述べておくことにする。

まず、“母音の伸び”について述べる。本稿の調査によると徳之島諸方言の“母音の伸び”に
は、3種類の母音の伸びが存在し、この3種類の母音の伸びを一括して同等に扱うことはで
きない。徳之島諸方言に見られる母音の伸びには、①どのような条件でも常に出現するもの、
②出現の有無や位置がフリーバリエーションで現れるもの、③規則的に出現するが、一定の
条件下では出現の有無がフリーバリエーションで現れるものがある。本稿ではこれらの母
音の伸びについて、①を基底から辞書的に存在する母音の伸び、②を表層で単純な音声現象

として生じる母音の伸び、③を基底にあるアクセント情報に關係して表層に生じたと考えられる母音の伸び、という様に分析および分類をしている。

先行研究では、上記のような母音の伸びを特に区別せずに論じている。特に、②の出現の有無や位置がフリーバリエーションで現れる母音の伸びが問題になる。例えば、伊仙方言で「色」を意味する/ji:ru/という語があるが、この語に含まれる長母音を「箒」を意味する語である/hoRki/に含まれる長母音と同じように、基底から辞書的に存在するものと解釈すると、基底では2モーラであると考えられる/ji:ru/を、3モーラ語として扱うことになる¹⁰。これを避けるためにだろうか、アクセントの単位を「音節」と考える先行研究が多いが、こうなると今度は/hoRki/と/ji:ru/を同じ2音節語として扱うことになる。しかしながら、第3章で詳しく説明するが、徳之島諸方言のアクセントの数えの単位は“モーラ”であると考えられるため、音節で数えるとアクセントの体系性を正確に把握できなくなると考える。結局のところ、これは徳之島諸方言における母音の伸びの性質を正しく観察できていないため生じる問題である。

また、②の表層で単純な音声現象として生じる母音の伸びが生じるか否かには、個人差と方言差がある。先行研究で扱われている松原方言と浅間方言は徳之島諸方言の中でも母音の伸びが挿入される頻度が高い方言であるが、やはり個人差はあり、フリーバリエーションで現れる。2.1.3節で述べたように、浅間方言の話者である浅Aは、この②の母音の伸びを(義務的・規則的に見えるほど)極めて多く挿入して発音する話者である。一方、徳之島諸方言のなかでも井之川方言や母間方言では②の母音の伸びがあまり現れない。

“ピッチの下降”に関しても同じである。徳之島諸方言において、下降の有無と位置は基本的にフリーバリエーションで現れる。一部、通時的変遷の名残として下降が特定の語彙グループの特定の位置に現れるように見える場合もあるが、これは通時的な合流の過程で起きる一時的な現象であると考えられる(3.12.1節を参照)。

このように、徳之島諸方言の共時的アクセント体系に関する分析の妥当性を論じる以前に、そもそものデータ記述・観察の段階で諸先行研究と本稿には非常に大きな違いがあるのだということは強調しておきたい。

2.2 徳之島諸方言の名詞アクセントの通時的分析に関する先行研究

本稿では第4章において徳之島祖語から現在の徳之島諸方言に至る通時的変遷過程について考察する。先行研究には徳之島諸方言に絞って徳之島祖語からの変化を議論したものはないが、関連する通時論の論考があるので、以下では本稿に關係する論文を見ていくことにする。

¹⁰ あとで詳しく説明するが、/:/が②の母音の伸び、/R/が①の母音の伸びをそれぞれ意味する。

2.2.1 松森(2012)と「系列別語彙」

松森(2012)は、徳之島諸方言を含む琉球諸語のアクセント研究において大きな転機となった論文である。松森(2012)で提案されたのは「系列別語彙」と呼ばれる、琉球語調査のための語彙リストである。

「系列別語彙」が提案される以前の研究は、主に本土方言の祖語(=日本祖語)に想定される「類別語彙(=金田一語彙)」(金田一 1974、など)を使用して行われてきた。しかし、琉球諸語の 2 音節名詞において本土方言では想定できない“類”の分裂と合流が観察されることが、服部(1958[1959], 1979)によって報告される。具体的には、「類別語彙」2 音節名詞の 3・4・5 類が二つに分裂し、「1・2/3・4・5/3・4・5」のように合流しているという内容である。その後、松森(1998)の研究により、北琉球諸語で 2 音節名詞が服部(1958[1959], 1979)の観察のとおり分裂・合流していることが明らかになった。続く、松森(2000a)では、2 音節名詞のみならず、3 音節名詞においても「1・2/4・5/4・5・6・7」のように、4・5 類が二つに分裂しそれぞれ違う型に合流していることが証明されたのである。その後、宮古島の多良間方言における 3 型アクセントの発見により、北琉球諸語に見られる上記のような「類別語彙」との“ずれ”が、北琉球諸語だけではなく南琉球諸語でも同じく観察されることが明らかになった(松森(2010))。以上のことにより、琉球語の祖体系が本土方言の祖体系(=日本祖語)とはその成立の段階から異なる分裂・合流を遂げていたことが明らかになり、琉球祖語は日本祖語から派生したのではなく、日本語と琉球語の共通祖語(=日琉諸語)から枝分かれしていることが分かったのである。そして、琉球祖語の段階から存在したと推定される三つの語彙群は、本土方言の「類別語彙」とは区別されるべきとの考えから、松森(2000b, 2009, 2010)の考察を経て、松森(2012)で「系列別語彙」が提案されたのである。

「系列別語彙」は A 系列、B 系列、C 系列の三つの系列で呼ばれており、本稿の調査によると、徳之島諸方言においては、大体この系列のとおり語彙グループが形成されている。また、「系列別語彙」はそれまでの「類別語彙」による調査ではデータが拍数の少ない語に偏りがちになっていた点を補完し、長い拍数を持つ語を調査リストに盛り込むことで、各方言での総合的な音韻分析をある程度可能にしたという調査上の利点もある¹¹。本稿では、松森(2012)で提案された「系列別語彙」を利用し調査を行った。そして、上記のような通時論の研究に基づく調査リストであったからこそ、共時的な記述に留まらず、本稿の第 4 章のような通時的分析が可能であったと考える。そもそも、松森(2012)の「系列別語彙」の目的が、琉球祖語にまで遡ることができると推定される同源語のリストを調査の現場で使用してもらうことであるの考えると、本稿の Appendix2-20 で提示する徳之島の 19 地点のアクセントデータは、今後の通時的研究にも寄与するものであると考える。

¹¹ 第 4 章でも述べるが、「系列別語彙」のリストでは、基底 4 モーラ語の語数が少なく、語例の系列が特定の系列に偏っている傾向にある(A 系列の基底 4 モーラ語が見つからない)。今後、A 系列の基底 4 モーラ語がリストに追加されることを期待したい。

2.2.2 松森(2017)と C 系列 2 音節名詞の語頭音節の長母音化

松森(2017)は「系列別語彙」の C 系列 2 音節名詞の語頭音節が長母音であらわれることにたいして、この長母音が北琉球祖語の段階で長母音化したと主張するものである。本稿においてもこれに関係する部分があるので、取り上げて説明する。

北琉球祖語の一部の 2 音節名詞において、首里方言の/wu:ki/(桶)や/i:cji/(息)のように、語頭音節の母音が長くなっている体系があり、この長母音にアクセントが関係していることは、服部(1932[1959])で初めて指摘されたものである。その後、服部(1979)ではこの長母音が、日本祖語(その後の研究の進展を踏まえると日琉祖語¹²)の段階から存在したと論じた。それに対して、松森(2017)は、(1)服部(1979)で取り上げられた体系が、すべて北琉球の方言ばかりであること、(2)このような語頭音節の長母音が、なぜ、名詞の 2 音節名詞にしか観察されないかという体系的な考察が欠けていると批判している。

松森(2017)は、まず、このような語例が「系列別語彙」の C 系列 2 音節語に属することを述べたうえで、南琉球諸語でこのような報告がないという事実から、C 系列 2 音節語の語頭に見られる長母音が日琉祖語ではなく、北琉球祖語の段階で生じたと論じている。そして、このような長母音が生じた理由を、北琉球祖語のアクセント体系に求めている。その内容を簡略に説明する。松森(2017)では、琉球祖語のプロソディー体系が、A 系列は*LLH、B 系列は*LHL、C 系列は*HLL であったと考える。この体系から北琉球祖語になるとき、A 系列は語頭隆起を起こし*LLH から*HLH になり、B 系列と C 系列は 1 モーラ分山が後退し、それぞれ*LLH、*LHL になる。その過程で A 系列と C 系列の 2 音節語の単独形が同じになる((2-19)の波下線)。(2-19)は松森(2017: 10)からの引用である。

(2-19) 松森(2017)の北琉球祖語の一段階前のアクセントと体系(仮説)¹³

	2 音節名詞 単独形 (助詞付き)	3 音節名詞 単独形
A 系列 (*HLH)	* <u>μ</u> μ (μ μ μ)	* μ μ μ
B 系列 (*LLH)	* μ μ	* μ μ μ
C 系列 (*LHL)	* μ μ	* μ μ μ

松森(2017)は、C 系列の 2 音節語が A 系列と 2 音節語との区別を明確にするために、C

¹² 2.2.1 節で述べたように、その後の研究により、日本語と琉球語の系統関係に関する解釈が当時と変わったため、この部分を日本祖語ではなく日琉祖語に直す。

¹³ 上付きの線は、高音調を意味し、μ はモーラを意味する。

系列 2 音節名詞の語頭音節が長母音化し、そこに上昇調(LH)が実現されたと主張する。また、2 音節名詞の語頭音節が長母音化した理由として、同じ体系内の C 系列 3 音節名詞と同じような型(LHL)を実現させるためと論じた。この結果、北琉球祖語は(2-20)のような体系になると推定している。

(2-20) 松森(2017)の北琉球祖語のアクセント体系(仮説)

	2 音節名詞 単独形 (助詞付き)	3 音節名詞 単独形
A 系列	* $\bar{\mu} \mu$ ($\bar{\mu} \mu \bar{\mu}$)	* $\bar{\mu} \mu \bar{\mu}$
B 系列	* $\mu \bar{\mu}$	$\mu \mu \bar{\mu}$
C 系列	* $\mu : \bar{\mu}$	$\mu \bar{\mu} \mu$

他の北琉球諸方言と同じく徳之島諸方言においても、C 系列 2 音節語の語頭音節に長母音が観察される。本稿のデータから抜粋すれば、轟木方言で「鍋」を意味する /naʎ:ʎbi/ や面縄方言で「鳥」を意味する /gaʎ:ʎra/ のような例で、松森(2017)で問題にしているものと同じである。本稿では、C 系列の 2 音節語の長母音化の理由を、C 系列 2 音節語(本稿の Z 型の基底 2 モーラ語)と A 系列 2 音節語(本稿の X 型の基底 2 モーラ語)の中和を避けるためと考えており、松森(2017)とほぼ同じ結論に達している¹⁴。ただし、本稿では松森(2017)が通時論の研究の中で仮説として提示している C 系列の 2 音節語の長母音化の理由を、現在の轟木方言の“共時的体系内での言語実験”により明らかにしている。簡略にその内容を説明しておく、Z 型(低起式・“-2”)の基底 2 モーラ語([Oʎ:O])は単独形の場合には義務的に 2 モーラ目に母音の伸びが生じる。しかし、Z 型の基底 2 モーラ語([Oʎ:O])が X 型(高起式・“0”)の基底 2 モーラ語(OO)と中和しない環境(i.e. 複合語の一要素になった時)に置かれた時には、2 モーラ目に現れる母音の伸びが義務的ではなくなり、語頭音節が短母音化する。裏を返せば、Z 型の基底 2 モーラ語([Oʎ:O])は X 型の基底 2 モーラ語(OO)と中和を避けるために、1 モーラ目の母音を伸ばしているということになる。

松森(2017)が主張するように、このような長母音化が北琉球祖語の段階で起きたとする

¹⁴ Lawrence(2016)でも、C 系列 2 音節名詞の語頭音節が長母音化する理由を、同じ体系内の A 系列との区別のためとしている。Lawrence(2016)が提示する北琉球祖語の体系において、A 系列と C 系列の 2 音節名詞が HH という同じピッチパターンを持っていたため、両方の区別を明確にするために C 系列の 2 音節名詞が長母音化したと述べている。この考え方自体には本稿も同意するが、次節(2.2.3 節)で述べるように、Lawrence(2016)の推論は、全体としては元にしたデータの記述・観察に問題があるため、ここでは大きくは取り上げなかった。

ならば、轟木方言を含む徳之島諸方言(後述するイ1群、ロ1群、ロ2群)は北琉球祖語のC系列の体系をそのまま受け継いでいるということになる。具体的な内容に関しては第3章(特に3.3.1節)を参照して欲しい。

2.2.3 北琉球祖語の名詞アクセント体系に関する先行研究らの仮説

最後に先行研究で述べられている、北琉球祖語のアクセント体系の仮説に関して触れて置くことにする。本稿の第4章では、第3章で見る徳之島諸方言の共時的体系から徳之島祖語のアクセント体系を推定し、徳之島祖語から現在の諸方言に至る通時的変遷過程を描いている。系統関係を考えた時に、徳之島祖語は北琉球祖語からある種の変遷過程を経て成り立ったものであるため、本稿と以下の北琉球祖語のアクセント体系に関する先行研究の関係性は高いものとする。

まず、(2-21)は(2-20)でも見た、松森(2017)による北琉球祖語のアクセント体系である。A系列が*HL *HLH、B系列が*LH *LLH、C系列が*LHL *LHLの音調であったと推論している。

(2-21(=2-20)) 松森(2017)の北琉球祖語のアクセント体系(仮説)

	2音節名詞 単独形(助詞付き)	3音節名詞 単独形
A系列	* $\bar{\mu} \mu$ ($\bar{\mu} \mu \bar{\mu}$)	* $\bar{\mu} \mu \bar{\mu}$
B系列	* $\mu \bar{\mu}$	$\mu \mu \bar{\mu}$
C系列	* $\mu \bar{\mu}$	$\mu \bar{\mu} \mu$

もう一つは、ローレンス(2009)とLawrence(2016)による北琉球祖語のアクセント体系である(2-22)。特に、Lawrence(2016)は、沖縄本土に位置する今帰仁方言と徳之島の浅間方言のアクセント及び母音延長のプロセス(vowel lengthening process)から、この二つの方言に繋がる祖語のアクセント体系を推論している。方言の系統関係を考えた時に今帰仁方言と浅間方言の祖型は北琉球祖語のアクセント体系ということになる。Lawrence(2016)が推測する北琉球祖語の具体的なピッチパターンは(2-23)のとおりである。

(2-22) Lawrence(2016)の北琉球祖語のアクセント体系(仮説)

	2 音節名詞	3 音節名詞
A 系列	$\bar{\mu} \bar{\mu} \bar{}$	$\bar{\mu} \bar{\mu} \bar{\mu}$
B 系列	$\mu \mu \bar{}$	$\mu \mu \mu \bar{}$
C 系列	$\mu \bar{\mu}$	$\mu \mu \bar{\mu}$

(2-23)

A 系列：前から 2 番目の母音が長く、前から 2 モーラが高い。

B 系列：最後の母音が長く、最後のモーラが高い。

C 系列：後ろから 2 番目の母音が長く、最後の 2 モーラが高い。

この Lawrence(2016)は三つの大きな問題を抱えていると考える。一つは、今帰仁方言と浅間方言のデータのみをみて、北琉球語全体の祖体系を描いていることである。二つ目は、2.1.4 節と 2.1.5 節で述べたように、浅間方言を含む徳之島諸方言の“母音の伸び”にはフリーバリエーションで現れるものがあることである。つまり、Lawrence(2016)が前提としている「浅間方言の各語形は少なくとも一つの重音節(長母音か二重音節を含むか、撥音か促音で終わる音節)がなければならない」(ローレンス 2015: 1) というルールは浅間方言に存在せず、Lawrence(2016)の言う母音延長のプロセス(vowel lengthening process)もこの事実に基づき修正されるべきである。三つ目は、本稿の研究によると浅間方言は徳之島諸方言の中では最も変化が進んだと考えられるアクセント体系を持つため、浅間方言が“古形”であるとは考えられない。三つ目の問題点に関しては第 4 章を参照してほしい。

第3章 徳之島諸方言の名詞アクセントの共時的分析

3.1 アクセント体系の記述の前に

3.1.1 調査地点及び調査方法

本章では徳之島諸方言の共時的なアクセント体系を記述する。調査地点は徳之島町の手々、金見、山、轟木、花徳、母間、井之川、亀津の8集落と天城町の与名間、松原、岡前、浅間、兼久、瀬滝、西阿木名の7集落、そして、伊仙町の犬田布(當原)¹⁵、阿権、伊仙、面縄の4集落の、計19地点である(図.3-1)。本稿で扱うデータは2013年9月から2019年3月までに著者自身の調査によって得られたもので、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」約250語と関連語彙、および、それらに助詞を付けたときのアクセントである(Appendix 2~20を参照)。



図.3-1 調査地点の位置

¹⁵ 犬田布には犬田布と當原の二つの集落があり、調査を行ったのは當原集落である。犬田布集落と當原集落はアクセントが異なる可能性があるため、正確にはすべて犬田布(當原)と記すべきであるが、便利上、語例や表、図には犬田布とだけ表記する。

調査方法は、まず、松森(2012)の「系列別語彙」を元に各地点で語彙調査を行った後、得られたネイティブワードに 1 モーラ助詞と 2 モーラ助詞を付けて発音してもらう形式である。助詞付きは、基本的に 1 モーラ助詞には nu(が、の)、2 モーラ助詞には kara(から)を用いて調査したが、地点によっては ga(が、の)、juka(より)、gadi(まで)などを用いて調査した場所もある。いずれの助詞も 1 モーラ助詞は nu(が、の)と、2 モーラ助詞は kara(から)と同じアクセントになることを確認している。また、方言によっては 3 モーラ以上の助詞(例えば、浅間方言の karaNba(からも))を用いて調査を行っている。徳之島諸方言で広く見られる母音の伸び(長母音の後半部)に関しては、語単独と助詞付きで母音の伸びが一定に保持される場合、話者に該当語彙を使って複合語を作ってもらい、複合語においても母音の伸びが現れるのか確認している。このような、母音の伸びの確認は調査が可能な限り行ったが、方言によっては細かく確認が取れていない地点もある。徳之島の母音の伸びに関しては 3-3.1.3.2 節にて詳しく述べることにする。

3.1.2 使用記号

本稿で使用している音素表記に関しては Appendix 1 を参照のこと。(3-1)は Appendix で各方言のデータを記録する時、または本文中で各方言の語例を引用したり、説明したりする際に使用する記号の一覧である。

(3-1) 使用記号一覧

使用記号	説明
[	アクセント核(昇り核)。アクセント核が置かれるモーラの直前に付して核の位置を示す。基本的には本記号の位置でピッチが上昇する。
∧	ピッチの上昇を表す。徳之島諸方言では、想定されるアクセント核の位置と実際にピッチが上昇する位置が、何らかの要因によってずれる場合がある。このような場合に、ピッチ上昇が観察される位置を表示するために使用する。
∨	ピッチの下降を表す。
○	長母音の後半部/R/、/;/、/:/以外の不特定のモーラを表す。○は 1 モーラ、○○は 2 モーラといった具合である。
△	助詞のモーラを表す。△は 1 モーラ助詞、△△は 2 モーラ助詞といった具合である。
H	モーラの具体的な音調を表すもので、H は High(高音調)を表す。
L	モーラ具体的な音調を表すもので、L は Low(低音調)を表す。
R	徳之島諸方言に観察される長母音の後半部の中で、基底から辞書的に存在するもの。本文中では/R/と、/ /に入れて書く。

:	徳之島諸方言に観察される長母音の後半部の中で、表層で単純な音声現象として生じるもの。本文中では/:/と、//に入れて書く。
;	徳之島諸方言に観察される長母音の後半部の中で、基底にあるアクセント情報に関係して表層に生じたと考えられるもの。本文中では/;/と、//に入れて書く。
^	調査の関係上/:/か/R/かが断定できない場合、:^のように/:/の後ろにこの記号を付けた形で表示する。
×	上付きの×は、実例あるいはアクセント型ではなく仮定した語例およびアクセント型であることを示す。
e.g. / e.g.	e.g.は語例を指す。同一語でピッチパターンがフリーバリエーションとして複数現れる場合、観察されたすべての語例を並べて記録する。その際、語例と語例の間に/を入れ区切りとする。

(3-2)は、語例を引用の仕方を表したものである。本文中に特別な説明がない場合、語に関する情報を(3-2a)のような順番で並べている。アクセント型とモーラ数を表す時は、アクセント型の後ろに語の基底形のモーラ数を付けて表す。Z型の基底3モーラ語をZ3と書くといった具合である。実際の語例の示し方を(3-2b)に示す。基本的には2モーラ助詞付きまでを本文中では例として用いるが、3モーラ以上の助詞付きの語例を提示する必要がある場合、2モーラ助詞付きの後ろに3モーラ以上の助詞付きの語例を追記する。なお、該当方言にインフォーマントが複数人おり、どのインフォーマントから得られた発音かを記す場合は方言名の後ろに話者情報を追記する(3-2c)。

(3-2)

a.

調査項目 (意味)	アクセント型 とモーラ数	語単独	1 モーラ 助詞付き	2 モーラ 助詞付き	(方言名)
--------------	-----------------	-----	---------------	---------------	-------

b.

兎	Z3	u[sa\gi	u[sa\ginu	u[sa\gikara	(轟木)
舟	X2	hu\ni	hu\ninu	hu\nikara	(与名間)

c.

島	V2	sīma[:	sīma:[nu	sīmaka:[ra	sīmaka[raN\ba	(浅間・浅A)
				sīmaju:[ka		

3.1.3 徳之島諸方言の名詞アクセントに共通する特徴

各方言の名詞アクセント体系を記述する前に、調査したすべての徳之島諸方言の名詞アクセントに共通する特徴をまとめて述べる(3-3)。

(3-3) 徳之島諸方言の名詞アクセントに共通する特徴

- 徳之島諸方言のアクセントは、高低アクセントであり、**昇り核**を持つ。
- アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。
- ピッチ下降の位置はアクセント的に有意味ではない。
- 徳之島諸方言のアクセント核の位置は、語の**基底形**において、**モーラ**を単位として計算される。

(3-3c)に関しては 3.1.3.1 節にて、(3-3d)に関しては 3.1.3.2 節にて詳しく説明する。特に(3-3d)は第 2 章で述べた先行研究と本稿が大きく異なる部分であり、筆者による徳之島諸方言の名詞アクセントの分析において要となる部分でもある。

3.1.3.1 徳之島諸方言における下降

徳之島諸方言において、ピッチの下降はアクセント的に有意味な情報ではない。(3-4)は同一語で下降の有無と位置がフリーバリエーションで現れる例、あるいは、語単独、1 モーラ助詞付き、2 モーラ助詞付きで下降の有無と位置が様々に現れる例を集めたものである。このような例は著者が調査したすべての方言で見られるもので、アクセント型による偏りもない。

(3-4)

葉	X1	ha	ha:nu	ha:ka\ra / ha:kara	(手々)
やどかり	Z3	a[maN / a[ma\N	a[ma\Nnu	a[ma\Nkara	(金見)
鳥・鶏	X2	tu\i / tui	tuiga		(山)
甕	X2	kami / ka\mi	ka\mi\inu	ka\mi\kara	(轟木)
南京豆 (落花生)	Y3	dzima[mi	dzima[mi\inu	dzima[mi\ju\ka	(花徳)
種	Y2	ta[ni	ta[ni\inu	ta[ni\kara	(母間)
角	Y2	cji[no	cji[nonu / cji[no\inu	cji[no\ka\ra	(井之川)
筥	X3	hoR\ki	hoR\kinu / hoR\ki\inu	hoR\ki\kara	(亀津)
白髪	Z3	si[ra\gi / si[ragi	si[ragi\inu	si[ragi\kara	(面縄)

今年	X3	kutu\si	kutu\sinu	kutu\sikara / kutusika\ra	(伊仙)
垢	X3	huNgu	huNgunu / huNgu\ngu	huNguka\ra	(阿権)
しゃもじ	Y3	misi[ge	misi[gega / misi[ge\ga		(犬田布)
涎	X3	juda\ji	juda\jinu	juda\jikara / judajika\ra	(西阿木名)
夜	Y3	juR[ru	juR[ru\;nu	juR[rukara / juR[ru\;kara	(瀬滝)
橋	X2	hasi	ha\sinu / hasi\ngu	hasi\kara	(兼久)
火	X3	maRtsi / maR\tsi	maR\tsinu	maR\tsikara	(浅間 浅 B)
牙	Y3	jadzi[ba	jadzi[ba;nu	jadzi[baka\ra	(岡前)
今年	Z3	ku[tusi / ku[tu\si	ku[tusinu	ku[tu;sikara	(松原)
油	Y3	abu[ra	abu[ra\;nu	abu[raka\;ra	(与名間)

(3-4)で見るような例があることが、下降がアクセント的に有意味ではないという証拠であると言えるが、それ以外にも証拠を付け加えるとすれば、ピッチ下降の違いによるミニマルペアが見つからないこと、話者が複数人いる場合に同一語でも話者によって下降の位置が違ふ場合があること、下がり目の位置でアクセント型を認定した場合に徳之島諸方言に共通する(対応がある)語彙グループを見出すことができないことが挙げられる。これらの事実は全て徳之島諸方言において下降がアクセント的意味を持たないということを示す証拠になり得る。

3.1.3.2 徳之島諸方言における 3 種類の母音の伸び

徳之島諸方言の音声及び音韻における一番の特徴は長母音が多く観察されることである。本稿では徳之島諸方言のアクセントを分析するに当たって、まず、徳之島諸方言に見られる母音の伸び(長母音の後半部)を(3-5)のように三つに分類する。

(3-5) 徳之島諸方言における三つの母音の伸び

- 基底から辞書的に存在する母音の伸び /R/
- 表層で単純な音声現象として生じる母音の伸び /:/
- 基底にあるアクセント情報に関係して表層に生じたと考えられる母音の伸び /:/

(3-3d)で述べたように、徳之島諸方言のアクセント核の位置は、語の**基底形**において**モーラ**を単位として数えるため、該当する語が基底で何モーラになるかを見極めることがアクセント研究の重要なポイントになる。(3-5a)/R/は基底から辞書的に存在するものなので、基底形のモーラ数を数える時に/R/も1モーラ分としてカウントする。一方、(3-5b)/:/と(3-5c)/:/は表層で付加された母音の伸びであるため、基底形のモーラ数を数える時はカウントしない。

(3-5)の3種類の母音の伸びはそれぞれ現れ方に差があり、その現れ方を観察することによって区別することができる。まず、(3-5a)/R/は基底から辞書的に存在するものであるため、いかなる環境においても母音の伸びが維持される。/hoRki/(箒)にどんな助詞が付こうが、/ha:hoRki/(赤箒)や/kuruhoRki/(黒箒)のように複合語にしようが、/R/がなくなることはない。一方、(3-5b)/:/は表層で単純な音声現象として生じるもので、母音の伸びの有無はフリーバリエーションで現れる。徳之島諸方言のデータを見ると、同じ語でも/:/がある場合と無い場合で2パターン発音がある例が多く見られる。また、語単独と助詞付き、そして該当する語を利用し作った複合語を並べてみた時に、一方にだけ/:/が現れ、一方には/:/が現れない例は数えきれないほど沢山観察される。(3-5c)/:/は、語の基底にあるアクセント情報に関係して表層で生じたと考えられる母音の伸びであるため、特定の型の、特定の位置に規則的かつ義務的に現れる。そのため、母音の伸びが現れる場所を見ると/:/か否かは容易に判断することができる。/:/のようにフリーバリエーションで現れるわけではないので、/R/との区別が難しい場合もあるが、/:/を含む語に一定の操作をかけると/:/の出現が義務的ではなくなるため、/R/と区別することができる。これに関する詳しい説明は3.3.1.1節にて後述する。

本稿では、上記した3種の母音の伸びの現れ方を基準に、語単独、助詞付きや複合語で、母音の伸びの有無に変化がなかったものは/R/、母音の伸びがフリーバリエーションで現れるものは/:/、特定の型の、特定の位置に規則的かつ義務的に現れるものは/:/で、区別して記述することにする。調査語彙に現れる母音の伸びが3種の母音の伸びのうちどれに当たるかを網羅的に調べた集落は、金見、亀津、母間、轟木、伊仙、面縄、花徳、浅間の8か所である。他の徳之島諸方言においては徹底的な調査は行っておらず、本稿のデータの中には/R/か/:/かはっきりしないものもある¹⁶。次節で見る/:/の出現パターン及び上記した8か所の徳之島諸方言における同語源の語例から、語に現れる母音の伸びが/:/であろうと筆者が予想するが、/:/である決定的な証拠(母音の伸びがフリーバリエーションである証拠)がない場合がある。この場合、定義上では/R/と記述するべきであるが、ここは筆者の分析を優先し/R/と書かず/:/と記述したうえで、/R/かもしれないという表示として、/:/に^ (ハット)を付ける。また、上記した8か所のデータにおいても、調査漏れがあり/R/か/:/かはっきりしない例に関しては/:/に^を付けておくことにする(3-6)。

¹⁶ /:/は出現場所で分かる。

(3-6)

舟	X2	hu:^\nĩ	hu:^\nnĩnu	hu:^\nnĩkara	(手々)
角	Y2	cji[no/!^	cji[no/!^\\nu	cji[no/!^\\kara	(瀬滝)
俵	Y2	to:^[ra	to:^[ra\\nu		(花徳)

3.1.3.2.1 /:/の出現パターン

/R/や/;/とは異なり、単純な音声現象として表層で生じる/:/はアクセントと直接は関係しない母音の伸びである¹⁷。(3-7)は同じ語でも/:/の有無によるバリエーションが観察される例を各方言から集めたものである。前述したように/:/の有無はフリーバリエーションで現れるが、/:/の有無がアクセント核(昇り核)の位置に影響をすることはしない。

(3-7)

島	Y2	si[ma / si[ma:	si[ma:\\nu	si[maka\\ra	(手々)
臼	X2	u:\\si / usi	u:\\sinu	u:\\sikara	(金見)
亀	Y2	ka[mĩ: / ka[mĩ	ka[mĩ:ga	-	(山)
夜中	Z4	juna[sa:\\na / juna[sa\\na	juna[sa\\nanu	juna[sa\\nakara	(轟木)
卵	X2	ku\\ga / ku:\\ga	ku\\ganu / ku:\\ganu	ku:\\gakara	(花徳)
腹	X2	wata / wata:	watanu	-	(母間)
昨日	Y2	ki[nu	ki[nu\\nu / ki[nu:\\nu	ki[nuka\\ra	(井之川)
夜	Y2	ju[ru / ju:[ru	ju[ru\\nu	ju[ru\\kara	(亀津)
針	X2	ha\\ri / ha:\\ri	ha\\rinu	-	(面縄)
色	Y2	ji[ru / ji:[ru	ji[ru\\nu	-	(伊仙)
網	Y2	a[mi / a[mi/!	a[mi\\nu / a[mi:\\nu	a[mika\\ra	(阿権)
畑	Y3	haQ[te/! / haQ[te	haQ[te\\nu / haQ[te\\:nu	-	(犬田布)
兎	Z3	u[sa:\\gi / u[sa\\gi	u[sa:\\ginu	u[sa\\gikara	(西阿木名)
鹽	Y2	ta[re / ta[re/!	ta[renu	ta[re/!\\kara	(瀬滝)

¹⁷ アクセントに基づくピッチ変動が引き金となって現れるという意味でアクセントと全く無関係ではないが、/;/がアクセントと直接的な関係がある音韻規則による伸びであるのに対して、/:/は音声的な現象にすぎない。

			/ ta[re/:\nu		
麦	Y2	mu[gi	mu[gi\nu	mu[gi\kara	(兼久)
				/ mu[gi\kara	
髪・頭	Y3	kara:[dzi	kara[dzi\nu	kara:[dzi\kara	(浅間・浅 B)
		/ kara[dzi			
腰周り	Y3	gama[ku	gama:[kunu	gama:[kukara	(岡前)
		/ gama:[ku			
かぼちゃ	Y3	cjibu[ru/:	cjibu:[runu	cjibu[ru\kara	(松原)
		/ cjibu:[ru			
鼻血	Z3	ha[na:dzi	ha[na:dzinu	ha[na:dzikara	(与名間)
		/ ha[nadzi			

/:/の実際の音の長さは、半長([·])から 1 モーラ分の長さ([:])まで、集落または個人によって様々である。また、/:/の出現頻度も集落によって差があり、筆者の観察だと井之川や亀津、母間あたりでは出現頻度が少なく、浅間や手々、金見などでは出現頻度が高い。/:/の出現頻度は話者が感じる、各集落の方言に対する印象にも繋がっていると考えられる。本稿に協力して下さったインフォーマント達によると、井之川や亀津、母間周辺の言葉は速い(もしくは荒い)、浅間や金見、手々周辺の言葉は遅い(もしくは鈍い)という印象があるという。/:/はアクセントには関係しない母音の伸びであるが、各集落の方言を特徴付ける何かであることは確かであり、音声的な特徴がその方言の印象にもたらす影響という今後の研究が望まれる部分である。ここでは、本稿のデータで/:/が現れる例を見て、/:/の出現パターンを簡略に述べておくことにする。(3-8)は 2 モーラ語を例に/:/が論理的に現れ得るパターンをすべて書き出して簡略にまとめたものである。(3-9)は(3-8)の実際の例である。なお、(3-8a)のなかで上付きの×を付けたものについては論理的にはあり得るが、実際のデータではこのような分析ができる例がないというパターンであって、(3-9)の後で詳しく述べる。

(3-8)

a. ピッチ変動に伴い現れるパターン。

- a1. 下降に伴うもの $\overline{\text{O}}:\text{V}\underline{\text{O}}$ $\overline{\text{O}}\text{V}:\underline{\text{O}}$ $\overline{\text{O}}\underline{\text{O}}\text{V}:$ $\underline{\text{O}}[\underline{\text{O}}\text{V}:$
a2. 上昇に伴うもの $\underline{\text{O}}[\underline{\text{O}}:$ $\underline{\text{O}}[\underline{\text{O}}\text{V}:$ $\times \underline{\text{O}}\text{V}:\underline{\text{O}}$
a3. 上昇の直前に母音の伸びが現れるもの $\underline{\text{O}}:\underline{\text{O}}$

b. ピッチ変動が無い場合の語末に/:/が現れるパターン。 $\overline{\text{O}}\underline{\text{O}}:(\text{HH:})$ $\times \underline{\text{O}}\underline{\text{O}}:(\times \text{LL:})$

(3-9)

a1.	○:○	梢・サトウ キビの先端	X2	<u>sju:Vra</u>	sju:Vranu	-	(花徳)
	○V:○	露	X2	<u>?cjiV:ju</u>	?cjiV:junu	?cjiV:jukara	(金見)
	○○V:	蓆	X2	musju	musjuVnu	-	(面縄)
				/ <u>musjuV:</u>			
	○[○V:	畑	Y2	ha[te	ha[teV:nu	ha[teV:kara	(岡前)
				/ <u>ha[teV:</u>			
a2.	○[○:	麦	Y2	<u>mu[gi:</u>	mu[ginu	-	(伊仙)
	○[○/:	網	Y2	a[mi	a[miVnu	a[mikaVra	(阿権)
				/ <u>a[mi/:</u>		/ a[mi:Vnu	
a3.	○:[○	舟	Y2	<u>hu:[nī</u>	hu:[nīVnu	hu:[nīVnkara	(浅間 ・浅B)
b.	○○:	草履	X2	<u>sjabā:</u>	sjabā:Vnu	sjabakaV:ra	(浅間 ・浅A)

徳之島諸方言において一見すると(3-8a2) /×○/○/のパターンに見える、語頭から 2 番目にある母音の伸びは、単純な音声的な母音の伸び/:/ではなく、アクセント型に関係しているもの/[○/○/と解釈される。これは、手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、与名間、花徳に特徴的な Z2 において見られるパターンである。Z2 についての具体的な説明は 3.3.1.1 節にて後述する。また、(3-8a2)の/○[○/:/においても、方言によっては単純な音声的な母音の伸び/:/ではなく、アクセント型に関係しているもの/○○[:/と解釈される。与名間、花徳、松原、岡前、犬田布(當原)における W 型と浅間における V 型のアクセントがそれである。これらの方言は/○[○/と/○○[:/のアクセントの対立が認められる方言である。同じく、具体的な説明は 3.6.2 節と 3.11.1.2 節で後述する。

(3-8b)/○○:/はピッチ変動が無く語末に/:/が現れるパターンである。徳之島諸方言において低起式の語は必ず昇り核を持つ(=低起式無核の型がない)ので、ピッチ変動が無いのは高起式の場合に限られる。そのため、/○○:/の実際の音調は/HH:/のみ現れ/×LL:/は存在しない。このように語末に/:/が現れるピッチパターンというのは、(上の例では見やすさを重視して 2 モーラの場合を示したが、) 実は徳之島諸方言全体を通して基底 1 モーラ語で非常に多く観察されるものである。すなわち、/○:/あるいは/H:/というパターンが徳之島諸方言全体でよく見られる。その一方で、基底 2 モーラ以上の語について(3-8b)/○○:/のパターンが特徴的に現れるのは浅間方言だけである。浅間以外の方言では兼久、面縄、阿権、西阿木名、岡前で数例見られるのみであり、ほとんど見られない。なお、基底 1 モーラ語で/○:/のようなピッチパターンが多く観察されるのは、「最小語制限」と言われるような音韻規則と関係していると考えられる。

3.1.3.2.2 基底 1 モーラ語と最小語制限

まず、徳之島諸方言の基底 1 モーラ語について述べる。X1 は浅間方言を除きすべての徳之島諸方言に見られる。X 型は高起式で、アクセント核を持たない型である。X1 の音調は /H/ であるが、前述したように、語末に /:/ が現れることが非常に多い。Y1 は、浅間¹⁸と、母間、井之川方言を除く、手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、亀津、伊仙、与名間、花徳、松原、岡前、犬田布(當原)方言で見られる。Y 型は低起式であり後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持つ型である。低起式である Y1(Y 型の基底 1 モーラ語)のアクセント核は語頭に置かれることになるが([○])、Y1 の実際のピッチパターンは 1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、後ろから数えて 1 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するパターン([○/;])で現れる。これは、昇り核の位置でピッチが上昇する([○])と高起式である X1(○)と表層で中和してしまうため、表層で X1 との中和を避けてアクセント核を実現するためにこのようなピッチパターンを持つようになったと考えられる。Y1 に関する詳しい説明は 3.3.2 節にて後述することとする。(3-10)は徳之島諸方言の基底 1 モーラ語(X1 と Y1)の例である。

(3-10)

葉	X1	ha:	ha:nu	ha:kara	(金見)
豚	X1	?wa / ?wa\:	?wa\ :nu	?wa\ :kara	(伊仙)
尾	X1	du: / du	du:\nu	du:ka\ra	(母間)
魚	X1	?ju:^	?ju:^nu	?ju:^ka\ra	(瀬滝)
齒	Y1	[ha/;	[ha/;\nu	[ha/;\kara	(金見)
潮	Y1	[sju/;	[sju/;\nu	[sju/;\kara	(面縄)
			/ [sju/;nu		
竹	Y1	[dē/;	[dē/;\nu	[dē/;\kara	(花徳)
垢	Y1	[ha/;^	[ha/;^\nu	[ha/;^\kara	(与名間)

Y1 の語が表層で 2 モーラになるのはアクセント核によるピッチ上昇を実現するためであると考えられるが、X1 が表層で、2 モーラで発音されるのは「最小語制限」が関係していると考えられる。本稿でいう「最小語制限」とは、すべての語が 2 モーラ以上にならない(=1 モーラ語の禁止)という音韻規則である。徳之島諸方言において最小語制限を持つと考えられる方言は西阿木名方言と浅間方言である。西阿木名方言と浅間方言以外の徳之島諸方言では、基底 1 モーラ語をそのまま 1 モーラで短く発音される例がかなり見られる。特に語単独の場合、井之川、母間、亀津、轟木方言で短く発音される傾向がある。一方、兼久、瀬滝、阿権、松原、岡前、犬田布(當原)、与名間方言では、語単独でも助

¹⁸ 浅間方言の伝統的な語彙には基底 1 モーラ語がない。浅間方言に関しては後述する。

詞付きでも基底 1 モーラ語が 2 モーラで発音される傾向が非常に強い。しかし、これらの方言では、少数ながらも 1 モーラで発音される例が観察されるため、西阿木名方言と浅間方言のように最小語制限があるとは言い切れない。最小語制限を持つと考えられる西阿木名方言と浅間方言であるが、この二つの方言における最小語制限はその振る舞いに差があり、西阿木名方言は表層レベルでの最小語制限があると考えられ、浅間方言は基底レベルでの最小語制限があると考えられる。

まず、西阿木名方言の最小語制限から説明する。西阿木名方言は、すべての語が表層で 2 モーラ以上にならない(=表層にて 1 モーラ語の禁止)という「最小語制限」を持つと考えられる。(3-11)は西阿木名方言の基底 1 モーラ語の例である。西阿木名方言の最小語制限のドメインは「語」であり、単独だけではなく助詞を付けた時も母音が短くなることなく保持される。

(3-11) 西阿木名方言の基底 1 モーラ語の語例

葉	X1	ha:ˆ	ha:ˆ\ɲu	ha:ˆka\ra	(西阿木名)
魚	X1	ʔju:ˆ	ʔju:ˆ\ɲu	ʔju:ˆka\ra	(西阿木名)
齒	Y1	[ha/;ˆ	[ha/;ˆ\ɲu	[ha;ˆ/ka\ra ¹⁹	(西阿木名)
目	Y1	[mĩ/;ˆ	[mĩ/;ˆ\ɲu	[mĩ;ˆ/ka\ra	(西阿木名)

(3-11)に使用した記号について説明する。(3-11)の語末にある母音の伸びは最小語制限という音韻規則によるもので、(3-5)で説明した徳之島諸方言における三つの母音の伸びのうちどれにも当てはまらない。最小語制限による母音の伸びを指す記号を別に準備した方が良いかもしれないが、表層レベルでの最小語制限が認められる方言が西阿木名方言のみであることと、記号が乱雑になってしまうのを避けるという観点から、本稿では表層で単純な音声現象として生じる母音の伸びを表す/:/を使って記しておくことにする。最小語制限による母音の伸びと表層で単純な音声現象として生じる母音の伸び/:/は、語の基底にある情報と関係なく表層で付加されるという点で共通している。

西阿木名方言の Y1 の語末にある母音の伸びは最小語制限のよるものとアクセント核の実現のためという理由が両方考えられるが、最小語制限を待たない徳之島諸方言においても Y1 は必ず 2 モーラになるので、本稿では Y1 の 2 モーラ目の母音の伸びをアクセント核の実現のためという解釈を優先した表示/:/にしておくことにする。結果的に西阿木名方言の基底 1 モーラ語の語末にある母音の伸びは、(3-11)で見るように X1 は/:/で、Y1 は/:/で表記することになる。

次に、浅間方言の最小語制限について述べる。浅間方言には、すべての語が基底で 2 モーラ

¹⁹ 西阿木名方言で、Y1 に 2 モーラ助詞が付いた場合、ピッチの上昇が 1 モーラ分後ろに現れることがある。詳しくは 3.3.9 にて説明する。

以上にならなければならない(=基底にて 1 モーラ語の禁止)という「最小語制限」を持つと考えられる。(3-12)は浅間方言の、他方言での基底 1 モーラ語に相当する語例である。最小語制限のドメインも西阿木名方言と同じく「語」であり、単独だけではなく助詞を付けた時も母音が短くなることなく保持される。浅間方言の最小語制限は基底で、すべての語が 2 モーラ以上にならなければならない(=表層にて 1 モーラ語の禁止)というもので、浅間方言(の伝統的語彙)には基底 1 モーラ語が存在しないと考えられる。

(3-12)

葉	X2	haR	haR\̃nu	haRka\̃:ra	-	(浅間・浅 A)
魚	X2	?juVR / ?ju\̃R	?juVRnu	?juVRkara	-	(浅間・浅 C)
目	V2	mī[R	mīR[nu	mīRka:[ra	-	(浅間・浅 A)
湯	V2	ju[R	juR[nu	juRka[ra	juRka[ra\̃Nba	(浅間・浅 B)

浅間方言が「最小語制限」を持ち、すべての語が基底で 2 モーラ以上の長さを持つと考えられるのは、最小語制限に起因すると考えられる母音の伸びが、基底形の/R/のように振る舞うためである。徳之島諸方言一般と同様に浅間方言においてもアクセント核の位置は語の基底形を基準にモーラを単位とし数えるのであるが、浅間方言ではアクセント核の位置を計算する時に、該当する母音の伸びをカウントしている。

浅間方言で/R/をアクセント核の位置を計算するときにカウントしていることを証明するために、仮にこれらの語が持つ母音の伸びを、表層レベルでの最小語制限による母音の伸び(西阿木名の説明で、/:/で表記するとしたもの)であると仮定してアクセント核の位置を計算してみることにする(3-13)。

(3-13) 浅間の 2 モーラ目の母音の伸びを仮に/:/と考えた場合

葉	×X1	×ha:	×ha:\̃nu	×ha:ka\̃:ra	-	(浅間・浅 A)
魚	×X1	×?ju: / ×?ju\̃:	×?ju\̃:nu	×?ju\̃:kara	-	(浅間・浅 C)
目	×V1	×[mī/;	×mī:[nu	×mī:ka:[ra	-	(浅間・浅 A)
湯	×V1	×[ju/;	×ju:[nu	×ju:ka[ra	×ju:ka/ra[Nba	(浅間・浅 B)

浅間方言における“基底 1 モーラ語”(=他方言での基底 1 モーラ語相当語)には X 型と V 型の二つの型の対立が認められる²⁰。X 型は他の徳之島諸方言と同じく高起式であり、アクセント核を持たない型である。浅間方言の V 型は基底の前から数えて 4 番目のモーラに昇り核を持つ型で(“+4”)、アクセントのドメインは文節である。浅間方言の V 型は文節が 3 モーラ以下である時は文節末のモーラにアクセント核が置かれ、文節が 4 モーラ以上の場

²⁰ 浅間方言のアクセント体系の詳細については 3.10 を参照して頂きたい。

合には前から数えて 4 番目のモーラに昇り核が置かれる。しかし、(3-13)の/ $\times$ ju:ka[ra\Nba/(湯からも)は前から数えて 4 番目ではなく、3 番目のモーラの直前でピッチが上昇する。(3-14)を見ながら詳しく説明する。

(3-14)

a. / $\times$ [ju/;/ (湯・ $\times$ V 1)

語単独	1 モーラ助詞付き (-が)	2 モーラ助詞付き (-から)	4 モーラ助詞付き (-からも)
$\times$ [ju/; 1	$\times$ ju: [nu 1 2	$\times$ ju: ka [ra 1 2 3	$\times$ ju: ka ra [N /ba 1 2 3 4 5

b. /dzimami/;/ (南京豆・V3・浅 A)

語単独	1 モーラ助詞付き (-が)	2 モーラ助詞付き (-から)	2 モーラ助詞付き (-も)
dzī ma [mī/; 1 2 3	dzī ma mī: [nu 1 2 3 4	dzī ma mī [ka:\ ra 1 2 3 4 5	dzī ma mī [N /ba 1 2 3 4 5

c. /ju[R/ (湯・V 2)

語単独	1 モーラ助詞付き (-が)	2 モーラ助詞付き (-から)	4 モーラ助詞付き (-からも)
ju [R 1 2	ju R [nu 1 2 3	ju R ka [ra 1 2 3 4	ju R ka [ra\ N ba 1 2 3 4 5 6

(3-14a)は最小語制限によって生じたと考えられる母音の伸びを、表層で付加された音声的伸び/;/であると解釈した場合の例である。V 型は文節が 3 モーラ以下である時は文節末モーラにアクセント核が置かれ、文節が 4 モーラ以上の場合には前から数えて 4 番目のモーラに昇り核が置かれるので、(3-14a)の/ $\times$ ju:karaNba/(湯からも)のアクセント核は撥音/N/に置かれるはずである。浅間方言では撥音/N/を含む特殊モーラにアクセント核が置かれる場合、アクセント核の位置よりピッチ上昇の位置が 1 モーラ分後ろに後退する傾向が強い²¹。(3-14b)の/dzimamiN[ba/(南京豆も)を見ると、前から 4 番目のモーラである撥音/N/ではなく、/ba/でピッチが上昇していることが確認できる。これに従って(3-14a)の/ $\times$ ju:karaNba/のアクセント核の位置を計算すると、/ $\times$ ju:kara[N/ba/のように、/N/にアクセ

²¹ 浅 C の発音の場合、ピッチ上昇の位置が 1 モーラ分後ろに後退せず、/N/の直前でピッチが上昇しているのではないかと考えられる語例がある。詳しくは 3.11.1.3 を参照。なお、(3-14)はすべて浅 A から得られた語例である。

ント核が置かれ、/ba/の直前でピッチの上昇が起こることが想定される。しかし、実際のピッチ上昇は(3-12)/juRka[ra\Nba/のように、/ra/の直前に現れる。

(3-14c)は、そもそもは最小語制限によって引き延ばされたと考えられる母音の伸びを、基底からある母音の伸び/R/と同じように数えていると解釈したものである。(3-14c)の/juRka[ra\Nba/を見ると、前から数えて4番目のモーラである/ra/にアクセント核が置かれている。そして、この位置こそ、実際のピッチ上昇に相応するアクセント核の位置である。/juRka[ra\Nba/だけではなく、語単独/ju[R/、1モーラ助詞付き/juR[nu/、2モーラ助詞付き/juRka[ra/でも、アクセント核の位置と実際のピッチ上昇の位置に矛盾がない。

アクセント核の位置を計算する時、そもそもは最小語制限によって生じていたと考えられる母音の伸び/:/を、今では基底からある母音の伸び/R/と同じように数えているならば、アクセントの面で両者を区別することができない。徳之島諸方言一般と同様に浅間方言においてもアクセント核の位置は語の基底形を基準にモーラを単位とし数えるのであれば、該当する母音の伸び(長母音の後半部)をアクセント核の位置を計算する時にカウントしているのだから、その母音の伸びは語の基底形に含まれているものであると考えるべきである。浅間方言のもともとは最小語制限によって生じたと考えられる母音の伸びをすべて基底からあるものとして、/R/を用いて表記すると(3-13)は上記した(3-15(=3-12))のように書き換えることができる。結果、アクセントの面で浅間方言には基底 1 モーラ語が存在しないという分析になる。

(3-15(=3-12))

葉	X2	haR	haR\Nu	haRka\ra	-	(浅間・浅A)
魚	X2	?juR / ?ju\NR	?ju\NRnu	?ju\NRkara	-	(浅間・浅C)
目	V2	mī[R	mīR[nu	mīRka:[ra	-	(浅間・浅A)
湯	V2	ju[R	juR[nu	juRka[ra	juRka[ra\Nba	(浅間・浅B)

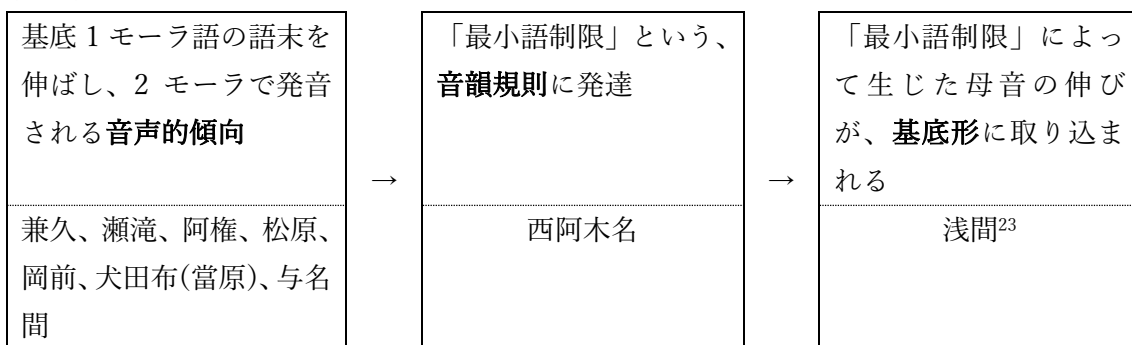
最小語制限があるという点で共通している西阿木名方言と浅間方言の決定的な差は、西阿木名では最小語制限によって引き延ばされた母音の伸びが基底に反映する(している)という決定的な証拠がない所である。浅間方言と同じく、西阿木名方言も最小語制限のドメインは語で、助詞付きの時にも最小語制限による母音の伸びが生じる。そのため、本稿のデータだけでは、西阿木名方言の基底 1 モーラ語の語末の母音の伸びが、音声的なもの(/:/)なのか、それとも基底の段階からあるもの(/R/)なのか判断できないのが事実である。浅間方言のように最小語制限による母音の伸びが基底に反映するという決定的な証拠も存在せず、また、すべて母音の伸びが音声的なものという確証もない。浅間方言のようにすべて基底で2モーラ以上の語かも知れないし、基底 1 モーラ語が最小語制限により伸びたものと、(最小語制限による伸びが基底に反映した)基底 2 モーラの語が混ざっている可能性もある。そこで、本稿では基底に存在するかも知れないという意味で、音声的伸びを表す/:/の後ろ

に[^](ハット)を付けておくことにする。浅間方言と西阿木名方言のアクセントに関する詳しい記述はそれぞれ 3.11.1 節と、3.3.9 節を参照して頂きたい。

徳之島諸方言の基底 1 モーラ語(浅間方言では語末モーラが/R/である基底 2 モーラ語に相当)を見渡すと、最小語制限とそこからの展開についての通時的変遷を描くことができる。前述したように、徳之島諸方言における基底 1 モーラ語、特に X1 の発音には地域差がある。語単独の場合、井之川、母間、亀津、轟木方言で短く発音される傾向がある²²一方、兼久、瀬滝、阿権、松原、岡前、犬田布(當原)、与名間方言では、語単独でも助詞付きでも基底 1 モーラ語が 2 モーラで発音される傾向が非常に強い。これらの方言では、少数ながらも 1 モーラで発音される例が観察されるため、西阿木名方言のように最小語制限があるとは言いきれない。しかし、このような強い**音声的傾向**が最小語制限のような**音韻規則**に繋がって行くのではないかと考えることができる。ただの音声的な癖や傾向として現れていた語末の母音の伸びが、その傾向が強まるうちに義務的なものと解釈され「最小語制限」という音韻規則が成り立つ。そして、「最小語制限」によって引き延ばされた母音は、世代を下るうちに基底からある長母音と区別が付かなくなり、結果として、基底形に取り込まれる。

最小語制限が基底形に取り込まれるトリガーになるのは、最小語制限のドメインが「語」であることであると考えられる。仮にドメインが文節であるなら名詞に助詞が付いた時などでは短く 1 モーラで発音されるはずで、母語を習得する次世代としては、語の伸び縮みを手掛かりとし、最小語制限がかかっていない語の元の形(すなわち、基底形)を把握することができると考えられる。一方、「語」がドメインである場合には助詞を付けた時でも最小語制限がかかり、全体として 2 モーラで伸びた形で現れる頻度が高くなると予想される。次世代としては、語の元の形(基底形)を把握することが困難になり、結果的に元から基底形に/R/を持つ語と、最小語制限によって 2 モーラに引き延ばされた語が区別されずに 2 モーラの基底を持つ語と判断されることになる。

(3-16)



²² 助詞付きの場合、徳之島諸方言すべてにおいて伸びる傾向がある。

²³ あくまでも「最小語制限」の展開の例として出したに過ぎず、アクセント(もしくは、アクセントドメイン)の通時的変遷を示すものではない。

3.1.3.2.3 通時的变化の名残と考えられる/ɿ/

最後に/ɿ/の出現パターンの中で通時的变化の名残と考えられるパターンについて述べる。(3-17)は徳之島諸方言の調査で確認した/○:○/の例をすべて集めたものである。/○:○/はピッチ変動が無く、語頭モーラの後ろに/ɿ:/が現れるパターン (/H:H/) である。このようなパターンは基底 3 モーラ以上では例がなく、基底 2 モーラ語の中でも主に系列別語彙の C 系列の語に現れる。

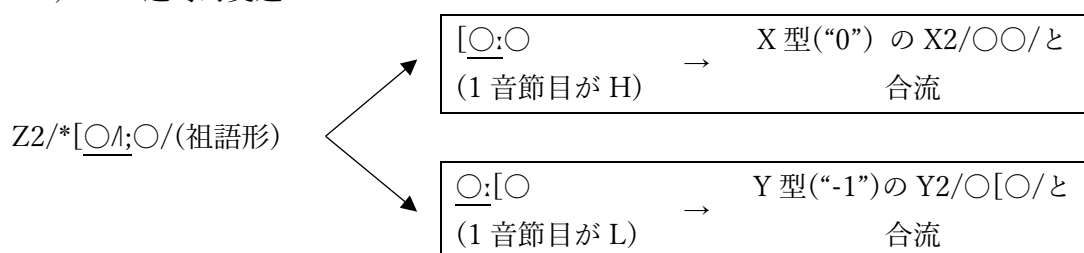
(3-17)

息	X2	C 系列	i:ˆki	i:ˆkinu	i:ˆkikara	(岡前)
臼	X2	C 系列	u:ˆsɿ	u:ˆsɿnu	u:ˆsɿkara	(岡前)
火	X2	C 系列	ʔma:ˆtsɿ	ʔma:ˆtsɿnu	ʔma:ˆtsɿkara	(岡前)
息	X2	C 系列	i:ˆki	i:ˆkinu	i:ˆkikara	(松原)
火	X2	C 系列	ʔma:ˆcɿ	ʔma:ˆcɿnu	ʔma:ˆcɿkara	(松原)
杵	X2	C 系列	cɿ:ˆcɿ	cɿ:ˆcɿnu	cɿ:ˆcɿkara	(松原)
太陽	X2	C 系列	tiːda / ti:da	tiːdanu	tiːdakara	(亀津)
牙	X2	A 系列	ki:ˆba	ki:ˆbaga	-	(山)
牙	X2	A 系列	kiːba / ki:ba	ki:banu	ki:bakara	(与名間)

徳之島諸方言における Z 型と系列別語彙の C 系列は深く関係しており、多くの場合、徳之島諸方言の Z 型の語は C 系列の語と一致する。徳之島諸方言において Z 型は後ろから 2 番目に昇り核を持ち、語をアクセントのドメインとする。Z 型の基底 2 モーラ語(Z2)は表層で 1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを表層 3 モーラにしつつ、後ろから数えて 2 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチ上昇する(/[○Λ;○/])。Z2 の語がなぜ表層でこのようなピッチパターンを持つかに関しては 3.3.1 節にて詳しく後述する。

本稿では徳之島祖語の Z2/*[○Λ;○/の語頭にある音節(下線部)が、音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的变化によって、徳之島祖語の Z2 は通時的に X2 や Y2 と合流したと考える(3-18)²⁴。

(3-18) Z2 の通時的変遷



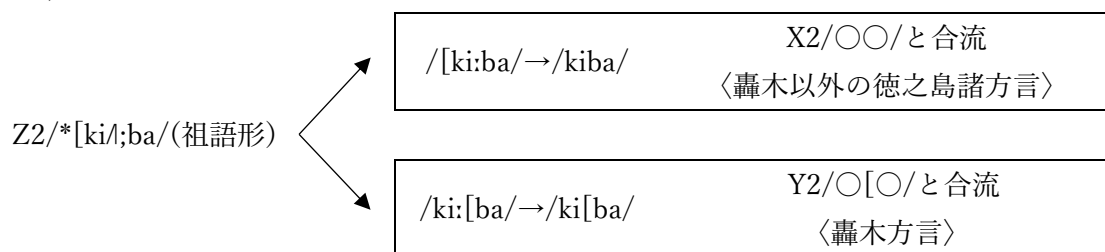
²⁴ 徳之島祖語の Z2 を、本稿の第 4 章では C 型の基底 2 モーラ語(C2)と言い換えている。

(3-18)の祖語形の Z2 表層形/○Λ;○/で、/;/を含む音節全体が同じ高さになる時、音節の高さは H になる場合と、L になる場合がある。1 音節目が H になる場合はピッチの上昇が語頭に現れ、結果的に高起式である X2/○○/と合流する。1 音節目が L になる場合はピッチの上昇が語末モーラの直前に現れ、結果的に後ろから 1 モーラ目に昇り核を持つ Y2/○○/と合流する。

Z2/[○Λ;○/が、X2/[○:○/や Y2/○:○/と合流すると、Z2 のアクセント核の実現のために生じたと考えられる/;/は、単純な音声的伸び/;/と解釈され義務的ではなくなることになる。実際、現在の徳之島諸方言の C 系列の X2 と Y2 を観察すると、語頭モーラの後ろに/;/が現れず、表層 2 モーラで発音されるパターンがある。語頭モーラの後ろに/;/が現れるパターンは、大体/○:○/もしくは/○:Λ○/のようにピッチ変動を伴う。(3-8a)で説明したように、/;/はピッチ変動時に生じやすいことから、本節で問題にしている語頭モーラの後ろに現れる/;/が、ピッチ変動に伴って生じたものか、祖語形である Z2/[○Λ;○/の/;/から由来したものか区別することができない。これに対して(3-17)の例のような、ピッチ変動無しで語頭モーラの後ろに/;/が現れるパターン(/H:H/)は、ピッチ変動が無いゆえに祖語形である Z2/[○Λ;○/の/;/から由来したという解釈のみ可能で、このパターンの/;/は通時的な名残りとして母音の伸びが残存するものと考えられる。

(3-17)の中で唯一の系列別語彙 A 系列である/ki^Λba//ki:ba/(牙・与名間)、/ki:^Λba/(牙・山)は徳之島祖語では Z 型 (C 系列相当) であったと推測される例であって、(3-17)の表には実質的に C 系列 (相当) の語しか存在しないということになる。「牙」は、轟木以外の徳之島諸方言では X 型で、轟木方言では Y 型である。(3-18)の Z2 の通時的変遷を前提に牙の祖語形を復元すると(3-19)のようになる。(3-19)の*/[kiΛ;ba/(祖語形)からの通時的変化を想定すると、(3-17)の/ki^Λba//ki:ba/(牙・与名間)、/ki:^Λba/(牙・山)に現れる/;/も、(3-17)の他の例と同じく、通時的変化の名残りであると判断することができる。以上、/;/の出現パターンを説明するために徳之島の通時的変化に少し触れたが、徳之島諸方言の通時的変遷に関しては第 4 章通時論で詳しく述べることにする。

(3-19)



3.1.4 徳之島諸方言の名詞アクセント体系の分類

本稿では徳之島諸方言の名詞アクセント体系について、類似したアクセント体系を持つ方言ごとにまとめて記述していく。結論から言うと、徳之島諸方言は大きく三つに分けて記述することができる。アクセント体系の三つのグループ（大区分）をイ群、ロ群、ハ群と名付ける(3-20)。本稿で使う徳之島諸方言のアクセント型の名前は、X 型、Y 型、Z 型、そしてW型である。X 型、Y 型、Z 型はそれぞれ「系列別語彙」の A 系列、B 系列、C 系列と密接に関係している。W型は X 型、Y 型、Z 型のアクセントが通時的変遷を経て(もしくはその過程で)生じたと考えられる型である。イ群は X 型、Y 型、Z 型で構成された 3 型アクセント体系を持つ方言群、ロ群は X 型、Y 型、Z 型、W型で構成された 4 型アクセント体系を持つ方言群、ハ群は X 型、Y 型、V 型で構成された 3 型アクセント体系を持つ方言(群)²⁵である。(3-20)に各アクセント体系におけるアクセント型の数を【 】の中に記し、その横にアクセント体系を構成する型を並べて記す。(3-20)に各アクセント体系におけるアクセント型の数を【 】の中に記し、その横にアクセント体系を構成する型を並べて記す。

また、徳之島諸方言のアクセント体系の分類においては、各方言の共時的アクセント体系に Y1、Z2 が有るか否か（通時的に言えば Y1、Z2 が残っているかどうか）が重要なポイントとなる。各方言での Y1、Z2 の有無を〈 〉に入れて表すこととする。徳之島諸方言の中で Z3 が存在しないのは犬田布(當原)方言と伊仙方言の 2 集落のみであるため、犬田布(當原)と伊仙にだけ Z3 が存在しないことだけは追加で〈 〉に記しておく。()は該当するアクセント体系が本稿の何節で記述されるかを記したものである。

- (3-20) イ群. 【3 型】X 型、Y 型、Z 型 (3.2 節)
・イ 1 群. X 型、Y 型、Z 型 〈Y1・Z2 有〉 (3.3 節)
手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、亀津
・イ 2 群. X 型、Y 型、Z 型 〈Y1 有、Z2・Z3 無〉 (3.4 節)
伊仙
・イ 3 群. X 型、Y 型、Z 型 〈Y1・Z2 無〉 (3.5 節)
母間、井之川
ロ群. 【4 型】X 型、Y 型、W 型、Z 型 (3.6 節)
・ロ 1 群. X 型、Y 型、W 型、Z 型 〈Y1・Z2 有〉 (3.7 節)
与名間
・ロ 2 群. X 型、Y 型、W 型、Z 型 〈Y1・Z2 有〉 (3.8 節)
花徳
・ロ 3 群. X 型、Y 型、W 型、Z 型 〈Y1 有、Z2 無〉 (3.9 節)
松原、岡前

²⁵ 筆者が調査した方言の中では浅間だけがハ群に分類される。

・ロ 4 群. X 型、Y 型、W 型、Z 型〈Y1 有・Z2・Z3 無〉 (3.10 節)

犬田布(當原)

ハ群. 【3 型】X 型、V 型、Y 型 (3.11 節)

浅間

3.2 イ群の名詞アクセント体系



図 3-2 イ群に属する集落の位置

イ群は三つのタイプの 3 型アクセントを持つ方言を一つの群としてまとめたものである。イ群に該当する地域は手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、伊仙、亀津、井之川、亀津の 13 集落で、イ群は徳之島諸方言の中で最も多く、そして広くみられる名詞アクセント体系と言える。さらに同じ名詞アクセント体系を持つ方言で下位区分すると、手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、亀津(イ 1 群)、伊仙(イ 2 群)、井之川と母間(イ 3 群)とで三つの群に分けることができる。イ 1 群、イ 2 群、イ 3 群の差はアクセント体系に Z2、Y1 が有るか否かである。イ 1 群は Y1 と Z2 があるアクセント体系で、イ 2 群はイ 1 群のアクセント体系から見て Z2 と Z3 がない体系である。イ 3 群は、イ 1 群のアクセント体系から見て Y1 と Z2 がないアクセント体系である。

3.3 イ 1 群の名詞アクセント体系



図 3-3 イ 1 群に属する集落の位置(灰色塗り)

最初にイ 1 群の名詞アクセント体系から説明する。(3-21)は手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄の名詞アクセント体系である。イ群の名詞アクセントは昇り核を持つ 3 型アクセントである。X 型は高起式であり、Y 型と Z 型は低起式である。X 型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、Z 型は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは基本的には「語」であるが、方言によっては、フリーバリエーションとして、助詞にピッチ上昇がずれ込むパターンもある。アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。

(3-21) 手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、亀津の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○△;	○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	[○△;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	[○△;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z 型 (-2) 低起式	基底	/	[○○	○[○○	○○[○○
	表層単独		[○△;○	○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き		[○△;○△	○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き		[○△;○△△	○[○○△△	○○[○○△△

すべてのアクセント型において、3 モーラ以上の語ではアクセント核の位置とそれによるピッチ上昇が実現される位置に違いがないが、語のモーラ数が短くなると、次節で述べるような違いが生じる。

3.3.1 Z2 の解釈

(3-21)から分かるように、Z 型は昇り核が後ろから 2 番目に来る型であり、Z2 の基底で昇り核は語頭に付いている([○○])。しかし、Z2 の昇り核の位置でピッチが上昇すると X2 と表層でのピッチパターン同じになってしまう。本稿では X2 と Z2 の中和を避けるために、Z2 が 1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 3 モーラにしつつ、後ろから数えて 2 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチ上昇している([○△;○])と考える。Z2 の 2 モーラ目にある、規則的かつ義務的に出現する母音の伸びを /;/ で記す。Z2 で現れる /;/ は、(3-5)で前述した「基底にあるアクセント情報に関して表層に生じたと考えられる母音の伸び」に当たるもので、表層単独で発音された場合と同じく、助詞付きの場合も必ず 2 モーラ目に母音の伸びが生じ、その前でピッチの上昇が起こる。

Z 型は X 型と違い低起式であるので、表層単独の場合の Z2 の音調は LHL もしくは LHH になる²⁶。各方言での Z2 の例を(3-22)に示す。

²⁶ 松森(2017)では、北琉球祖語の Z2 の音調(=C 系列 2 音節名詞)が LHL になる理由について、「体系内の同系列の 3 音節名詞と同じ型を内部に実現させるため」(松森 2017: 1)と述べており、この部分においては本稿の徳之島諸方言における Z2 の音調に対する考えと違いがある。もっとも、上記の考え方自体は

(3-22) Z2 の語例

きのこ	Z2	[na/; \ba	[na/; \banu	[na/; \bakara	(手々)
卵	Z2	[ku/; \ga	[ku/; \ganu	[ku/; \gakara	(金見)
砂糖	Z2	[sa/; \ta	[sa/; \taga	-	(山)
鍋	Z2	[na/; \bī	[na/; \binu	[na/; \bīkara	(轟木)
烏	Z2	[ga/; \ra	[ga/; ra \nu	[ga/; ra \kara	(面縄)
紐	Z2	[ʔkju/; \bi	[ʔkju/; \binu	[ʔkju/; \bikara	(阿権)
バツタ	Z2	[ga/; \ta	[ga/; \tanu	[ga/; \takara	(兼久)
とんぼ	Z2	[bī/; \tu	[bī/; \tunu	[bī/; \tukara	(瀬滝)
火	Z2	[ma/; \cji	[ma/; \cjinu	[ma/; \cjikara	(西阿木名)

Z2 が X2 との中和を避けるために、1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 3 モーラにしつつ、後ろから数えて 2 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチ上昇すると解釈するのであれば、「Z 型と X 型が中和しない環境下では母音の伸びが規則的かつ義務的に出現する必然性はない」という仮説が成り立つ。実際、イ群のすべての徳之島諸方言で Z3 と Z4 の語ではこのような母音の伸びが現れない。

(3-23) 徳之島諸方言の Z3 と Z4 の例

兎	Z3	u[sa \gi	u[sa \ginu	u[sa \gikara	(轟木)
刀	Z3	ka[ta \na	ka[ta \nanu	ka[ta \nakara	(面縄)
薬	Z3	ku[su \ri	ku[su \rinu	ku[su \rikara	(阿権)
夜中	Z4	juna[sa \na/juna[sa \na	juna[sa \nanu	juna[sa \nakara	(轟木)
雷	Z4	kami[na \ri	kami[na \rinu	kami[na \rikara	(金見)
鋸	Z4	noR[gi	noR[gi \nu	noR[gi \rika \ra	(手々)

Z 型のアクセントのドメインは語であるため、Z2 は語単独の場合は無論、助詞付きの場合でも X2 と中和する。そこで、Z2 の語が X2 と中和しない環境下でどのようなピッチパターンが現れるかを知るため、複合名詞アクセントの調査を行った。注目すべき所は Z2 の語が複合名詞の一部になった時にどのような母音の伸びが現れるかである。イ 1 群の中で代表的に調査を行った方言は轟木方言であり、調査は X2、Y2、Z2 の語をそれぞれ組み合わせ

本稿の第 4 章でいう(4-4d)「同調的な変化」と通じる部分があるが、本稿でいう「同調的な変化」というのは、Z2 の音調(=C 系列 2 音節名詞)ではなく、浅間方言における V3/○○○[; /を説明するために導入しているものである。

て複合名詞を作り、それを発音していただく形で行った。なお、本稿は名詞だけをアクセント研究の対象としているので、以下、複合語と書いた場合はすべて複合名詞を指している。

3.3.1.1 轟木方言の複合語アクセント規則と Z2 の母音の伸び²⁷

轟木方言の複合語アクセント規則²⁸は「前部要素決定型」である。以下、複合語の後部要素に関係なく、前部要素が高起式(X型)である場合、複合語はX型(“0”)になり、前部要素が低起式(Y型、Z型)である場合、複合語はZ型(“-2”)になる(3-24)。前部要素が高く始まるか低く始まるかの違いがそれを含む複合語においても規則的に反映される(保存される)という点で「高起 / 低起の式保存」という規則性があると言える²⁹。(3-25)に各アクセント型の2モーラ語をそれぞれ組合わせ複合語にした例を示す。

(3-24) 轟木方言の複合語アクセント規則

前部要素が「高起式(X型)」 → 複合語はX型

前部要素が「低起式(Y型、Z型)」 → 複合語はZ型

(3-25) 轟木方言の複合語アクセントの語例

前部要素			後部要素		複合語	
高起式	X型	aR(赤)	X型	kamī(甕)	X型	aRgamī
	X型	aR(赤)	Y型	si[ru(汁)	X型	aRsi ru
	X型	aR(赤)	Z型	[na/;bī(鍋)	X型	aRnabī
低起式	Y型	mi[sju(味噌)	X型	kamī(甕)	Z型	misju[kamī
	Y型	mi[sju(味噌)	Y型	si[ru(汁)	Z型	misju[siru
	Y型	mi[sju(味噌)	Z型	[na/;bī(鍋)	Z型	misju[nabī
	Z型	[sa/;ta(砂糖)	X型	kamī(甕)	Z型	sata[kamī
	Z型	[na/;ba(きのこ)	Y型	si[ru(汁)	Z型	naba[siru
	Z型	[na/;ba(きのこ)	Z型	[na/;bī(鍋)	Z型	naba[nabī

²⁷ 3.3.6 節で説明する轟木方言のアクセント体系及び、本節で説明する複合語アクセント規則、Z2 の母音の伸びに関する分析は、2017 年 7 月に以下の研究会で発表した内容を含んでいる。

金アリン(2017)「徳之島轟木方言の名詞アクセントと C 系列 2 音節名詞の長母音」第 271 回筑紫日本語研究会 於：九州大学九重共同研修所 2017 年 7 月。

²⁸ 轟木方言の複合語アクセントのデータは 2017 年 2 月に著者自身の調査によって得られたもので、3.3.6 で後述する轟 B に協力していただいた。

²⁹ 「高起 / 低起の式保存」は上野(2014)で使われた用語である。浅間方言の複合語アクセントでもこのような規則性が認められる。詳しくは、3.11.1.4 節を参照。

次に、Z2 が複合語の一部になった場合において、Z2 の表層単独と助詞付きで現れる 2 モーラ目の母音の伸びがどのように現れるかに注目し説明する。(3-26)は、(3-25)から Z2 の語を含む複合語だけ取り出し表にしたものである。

(3-26)

	前部要素		後部要素		複合語	
a.	aR (赤)	X2	[na/;bī (鍋)	Z2	aRnabī (赤い鍋)	X4
b.	[sa/;ta (砂糖)	Z2	kamī (甕)	X2	sata[kamī (砂糖甕)	Z4
c.	[na/;ba (きのこ)	Z2	si[ru (汁)	Y2	naba[siru (きのこ汁)	Z4
d.	[na/;ba (きのこ)	Z2	[na/;bī (鍋)	Z2	naba[nabī (きのこ鍋)	Z4

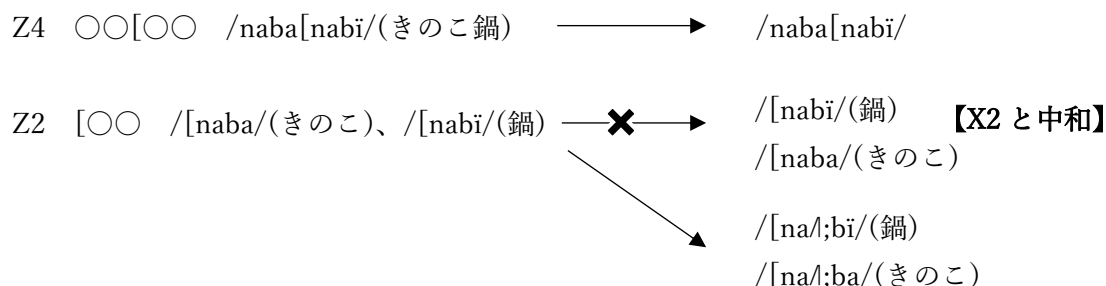
(3-26)の下線部をみると、Z2 の語である/[na/;bī/(鍋)、/[sa/;ta/(砂糖)、/[na/;ba/(きのこ)は語単独では必ず長母音を含むことが分かる。しかし、複合語の一部になった時は同じ語であっても長母音が現れない。これは以下の二つ内容を示している。

まず、(3-26)の Z2 の基底形が 3 モーラではなく、2 モーラであるということである。2 モーラ目にある長母音の後半部が基底から辞書的にあるもの/R/なら、いかなる環境においても長母音が現れるはずである。(3-26)のように同じ語で長母音の有無にバリエーションがあると言うことは、Z2 である/[na/;bī/(鍋)、/[sa/;ta/(砂糖)、/[na/;ba/(きのこ)が基底から 3 モーラ語/naRbī/(鍋)、/saRta/(砂糖)、/naRba/(きのこ)ではないという証拠であり、Z2 に現れる母音の伸びが何らかの原因によって表層で付与されたものであることを示している。

次に、Z2 の語単独と助詞付きの場合に規則的かつ義務的に出現していた母音の伸びが、複合語の一部になった時には現れなかったという点である。これは、上述した「Z2 が X2 と中和しない環境下では母音の伸びが現れる必然性はない」という仮説に合致する状況であることを示している。(3-26)の中で前部要素と後部要素が両方とも Z2 の語である(3-26d)を取り上げてもう少し詳しく説明すると、(3-24)の複合語アクセント規則から予想できるように、前部要素が Z 型である複合語/naba[nabī/(きのこ鍋)は Z 型である。複合語である/naba[nabī/(きのこ鍋)は Z4 の語であるため、Z 型と X 型が中和する環境ではない。仮説とおり、このような環境においては母音の伸びが現れる必然性はなく、/naba[nabī/(きのこ鍋)を含む(3-26)の複合語すべてにおいて長母音は現れない。

以上のことから、本稿の Z2 の関する解釈を、(3-26d)を例にまとめたものが(3-27)である。

(3-27)



(3-27)の「きのこ」と「鍋」の基底形は Z2/[naba/(きのこ)、Z2/[nabi/(鍋)と考えられ、この2語で構成されている複合語「きのこ鍋」の基底形は Z4/naba[nabi/(きのこ鍋)と考えられる。「きのこ鍋」は基底のアクセント核がそのまま表層に反映され、表層でも /naba[nabi/と発音される。一方、Z2/[naba/(きのこ)と Z2/[nabi/(鍋)の場合、アクセント核の位置でそのままピッチ上昇してしまうと、/[nabi/(鍋)、/[naba/(きのこ)のように/HH/となり、表層で X2 と中和してしまう。X2 との中和を避けるため、1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを表層 3 モーラにしつつ、後ろから数えて 2 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチ上昇させ、/[na/;bi/(鍋),/[na/;ba/(きのこ)という発音になっていると考えられる。

3.3.1.2 西阿木名、金見、面縄の Z2

前節ではイ 1 群の徳之島諸方言の中から代表的に轟木方言を調査し Z2 が X2 と中和しない環境下では母音の伸びが現れないことを確認した。轟木方言以外のイ 1 群の徳之島諸方言においては体系的な複合語アクセント調査は行っていないが、調査の過程で得られた一部の複合語の例から、轟木方言以外の西阿木名、金見、面縄の Z2 も轟木方言と同じであろうことが予想される。

(3-28)

Z2 の語	複合語	
[ha/;li (針)	nu[ibai (縫い針) hu:ba/;li (大きい針)	(西阿木名)
[ma/;vri / ma/;ri (尻)	a:\mari ((猿の)赤い尻)	(面縄)
[ni/;vbu (ひしゃく)	a:\ni/;bu (赤いひしゃく)	(面縄)
[na/;bi / [na/;vbi (鍋)	sisi[na/;bi (肉鍋) mi:\nabi (新しい鍋)	(面縄)
[nu/;vmi (蚤)	a:\numi (赤い蚤)	(面縄)
[ga/;vra (烏)	a:\gara (赤い烏) kuru[ga/;vra (黒い烏)	(面縄)
[ka/;vgo (籠)	tuikago (烏籠)	(金見)
[sa/;vta (砂糖)	sata[a:\dzi (砂糖味)	(金見)
[na/;vha (那覇)	naha[gu/;cji (那覇口(那覇言葉))	(金見)
[ha/;li (針)	hai[ba/;ku (針箱)	(金見)

(3-28)の下線部を見ると、Z2 の 2 モーラ目に出現する母音の伸びが複合語の一部になった時には現れないことが分かる。(3-26)と同じく、環境によって長母音の現れにバリエーションがあることは、(3-28)の語が基底から 3 モーラ語ではないという証拠であり、基底では 2 モーラである語が何らかの原因によって 3 モーラに引き伸ばされたことを示唆している。そして、その原因というのは、轟木方言と同じく表層で X2 と中和しないようにすることであると本稿は考える。

轟木、西阿木名、面縄、金見以外のイ 1 群に属する他の徳之島諸方言の Z2 においても同じ理由で 2 モーラ目に /:/ が生じたであろうと考えられるが、これらの方言の Z2 に関する具体的な調査は今後の課題とする。

3.3.2 Y1 の解釈

次に基底形が 1 モーラである語について述べるが、Z 型は後ろから 2 番目に昇り核を持つ型で、Z1 ではモーラの数足りないため存在しないと解釈できる。X1 は高起式でアクセント核を持たないため、表層単独の場合の音調は H で、3.1.3.2.2 で述べたように /:/ が挿入され H: と発音される場合もある。結局のところ基底形が 1 モーラである語の中でアクセントの方向からの解釈が必要なのは Y1 だけである。Y1 は 1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、後ろから数えて 1 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇する。表層単独の場合の音調は LH になる。Y1 のピッチパターンは前述した Z2 の前半(1 モーラと 2 モーラ目にある母音の伸び)と類似している。なお、このような Y1 のピッチパターンはイ 1 群のみならず、徳之島諸方言全体で広く観察されるものである。(3-29)にイ 1 群での Y1 の例を示す。

(3-29) Y1 の語例

湯	Y1	[ju/;	[ju/;\nu	[ju/;\kara	(手々)
貝	Y1	[mja/;	[mja/;\nu	[mja/;\kara	(金見)
權	Y1	[jo/;	[jo/;\ga	-	(山)
手	Y1	[ti/;	[ti/;\nu	[ti/;\kara	(轟木)
			[ti/;\ga		
潮	Y1	[sju/;	[sju/;\nu	[sju/;\ka\ra	(面縄)
			/ [sju/;\nu		
木	Y1	[ki/;	[ki/;\nu	[ki/;\ka\ra	(阿権)
家	Y1	[ja/;	[ja/;\nu	[ja/;\ka\ra	(兼久)
目	Y1	[mi/;	[mi/;\nu	[mi/;\ka\ra	(瀬滝)
齒	Y1	[ha/;	[ha/;\nu	[ha/;\ka\ra	(西阿木名)

Y1 の 2 モーラ目に基底にはない規則的かつ義務的な母音の伸びが見られるのは、Z2 と同じく表層でのアクセント型の中和を避けるために生じたものと解釈できる。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持つ型で、Y1 の基底で昇り核は語頭に付いている([○])。しかし、Y1 の昇り核の位置でピッチが上昇すると、表層形が X1 と同じ/H/になってしまう。X 型との中和を避けるために、Y1 が 1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、後ろから数えて 1 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇する([○/])といったピッチパターンを持つと考えられる。

Y1 に関しては 3.3.1.1 のような体系的な複合語の調査を行うことができなかったが、金見、山、轟木、面縄の調査の過程で得られた一部の複合語の例から、Y1 が基底では 1 モーラ語であることを確認できる。金見、山、轟木、面縄以外のイ 1 群に属する方言でも同じであろうと推測できるが、これに関しては今後、追加調査が求められる。(3-30)は金見、山、轟木、面縄の調査で得られた Y1 を含む複合語の例である。

(3-30)

Y1 の語	複合語	
[ha/; (歯)]	mi: <u>ba</u> (新しい歯)	(金見)
[ju/; (湯)]	icja <u>ju</u> (熱い湯)	(金見)
[sju/; (潮)]	u: <u>sju</u> (大潮)	(面縄)
[t̥i/; (手)]	ʔkwa:t̥i (小さい手)	(面縄)
[k̥i/; (木)]	u: <u>k̥i</u> (大きい木)	(面縄)
[sja/; (舌)]	a: <u>sja</u> (赤い舌)	(面縄)
[de/; (竹)]	ʔkwa: <u>de</u> (小さい竹)	(轟木)
[hu/; (穂)]	ina <u>hu</u> (稲穂)	(山)

(3-30)の下線部を見ると、Y1 の 2 モーラ目に出現する規則的かつ義務的な母音の伸び/;/が複合語の一部になった時には現れないことが分かる。Z2 のところでも述べたように、環境によって長母音の現れにバリエーションがあることは、(3-30)の語が基底から 2 モーラ語ではないという証拠であり、基底では 1 モーラである語が何らかの理由によって 2 モーラに引き伸ばされたことを示唆している。そして、その理由は表層で X 型 (X1) との中和を避けるためであると本稿は考える。

3.3.3 徳之島町手々の共時的アクセント

徳之島町手々(てて)は徳之島の北端に位置する集落である。手々の人口は 2021 年 9 月の時点で 93 人であり、そのうち手々方言の話者であると考えられる 60 歳以上の人口は 64 人

³⁰である。本節で扱うデータは2016年9月の著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、240語とその助詞付きである(Appendix 2を参照)。インフォーマントは以下の通りである。主な話者は手Aであり、手Bに補助していただく形で調査を行った。

(3-31) 手A 昭和17年生まれ(調査時73歳) 男性 外住歴2年
手B 大正20年生まれ(調査時89歳) 女性 外住歴4年

手々方言のアクセント体系は3.3で前述したように、他のイ1群に属する方言と同じく、昇り核を持つ3型アクセントである。X型は高起式であり、Y型とZ型は低起式である。X型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y型は後ろから1番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、Z型は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは「語」で、アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-21)の手々方言を含むイ1群のアクセント体系を(3-32)にあらためて示す。(3-33)は手々方言のアクセント型別の語例を示したものである。なお、Y4については存在を確認できていない。

(3-32(=3-21)) 手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、亀津の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X型(0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y型(-1) 低起式	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○△;	○[○	○○[○	○○○[○
	1モーラ助詞付き	[○△;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2モーラ助詞付き	[○△;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z型(-2) 低起式	基底	/	[○○	○[○○	○○[○○
	表層単独		[○△;○	○[○○	○○[○○
	1モーラ助詞付き		[○△;○△	○[○○△	○○[○○△
	2モーラ助詞付き		[○△;○△△	○[○○△△	○○[○○△△

³⁰ 各集落の総人口と集落の60歳以上の人口に関する情報は、徳之島の各役場(徳之島町役場、天城町役場、伊仙町役場)に問い合わせて情報提供いただいたものである。

(3-33) 手々方言の名詞アクセント型別の語例

手々		1	2	3	4
X 型	表層単独	ha (葉)	ka:\mĩ (甕)	koRdzi (麴)	haRtu\ki / haRtu\ki (暁)
	-nu(が(の))	ha:nu	ka\mĩnu	koRdzinu	haRtu\kinu
	-kara(から)	ha:ka\ra / ha:kara	ka\mĩkara	koRdzikara	haRtu\kikara
Y 型	表層単独	[ja/; (家)	wu[gi / wu[gi: (サトウキビ)	kibu[si (煙)	(○○○[○])
	-nu(が(の))	[ja/;\nu	wu[gi;\nu	kibu[si\nu	(○○○[○△])
	-kara(から)	[ja/;kara	wu[gika\ra	kibu[si\kara	(○○○[○△△])
Z 型	表層単独		[ma/;\cji (松)	ka[ra\dzi / ka[ra:\dzi (頭)	juna[sa\na / juna[sa\;na (夜中)
	-nu(が(の))		[ma/;\cjinu	ka[ra:\dzinu	juna[sa\nanu
	-kara(から)		[ma/;\cjikara	ka[ra:\dzikara	juna[sa\nakara

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では、手々の語例の中で、特徴的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-34)で Y1 の例から見ていくことにする。

(3-34)

- a. 湯 Y1 [ju/; [ju/;\nu [ju/;\kara (手々)
目 Y1 [mĩ/; [mĩ/;\nu [mĩ/;ka\ra (手々)
b. 貝 Y1 [mja/; [mja/;\nu [mja/;\kara (手々)

(3-34a)の「湯」と「目」は(3-33)で見た基本的なパターンであり、1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、後ろから数えて 1 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇し、表層単独の場合のピッチパターンは LH になる。手々方言は語がドメインであるため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく 2 モーラ目の /;/ から上昇する。しかし、(3-34b)の「貝」の例において助詞の /kara/ を付けた場合に、/[mja/;\kara/ (貝から) のように /ka/ の前でピッチが上昇し、/[mja/; は LL で現れる。これは徳之島諸方言で広く観察される、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる³¹。

³¹ 助詞 /kara/ を付けた場合に助詞にピッチの山がずれ込む例外と言える /○;[△△/ のピッチパターンが現れ、助詞 /nu/ を付けた場合にはこのような例外は現れない。多くの徳之島諸方言においても同様の傾向で、

手々方言で助詞にピッチの上昇がずれ込む発音が観察される例は(3-34b)の「貝」の場合だけであるが、上記のような音声的傾向が進んだ結果として語のアクセント型が変更されてしまった（されつつある）と考えられる例がある。(3-35)は語単独のアクセントがX2とZ2で揺れている例である。

(3-35)

a.	ひしゃく	Z2	[nī/; \bu / nī: \bu	[nī/; \bunu	[nī/; \bukara	(手々)
	来年	Z2	[ja/; \nī / ja: \nī	[ja/; \nīnu	[ja/; \nīkara	(手々)
	鍋	Z2	[na/; \bī / na: \bī	[na/; \bīnu	[na/; \bīkara	(手々)
	烏	Z2	[ga/; \ra / ga: \ra	[ga/; \ranu	[ga/; \rakara	(手々)
b.	薪	X2	to \N / [to/; \N	to \Nnu	to \Nkara	(手々)

(3-35)に挙げた例はすべてC系列の語であり共時的なアクセント型としてはZ型が予測される。しかし、共時的にはZ型(Z2)とX型(X2)が混在する分析とせざるを得ない。まず、(3-35a)は元々Z型(Z2)の/[○/; ○/であった語の単独形が、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により、語頭音節がHHで発音されるようになってきていると考えられる例である。「ひしゃく」であれば単独形が/[nī/; \bu/と/nī: \bu/の間で揺れている。このように単独形では発音が揺れているが、助詞付きでは発音が(3-33)で示したZ型のピッチパターンで安定しているため、(3-35a)の語例はZ型(Z2)に分類できる。次に(3-35b)は(3-35a)と同じく単独形の発音が揺れており、「薪」であれば/to \N/と/[to/; \N/の二つが現れる。しかし、助詞付きのピッチパターンが安定してX型で現れるためX2という分類になる。これらを比較したときに、(3-35a)に見られる揺れが進行した結果が(3-35b)であるというのが本稿の考えである。(3-18)でも前述したように、本稿ではこのような音声的傾向が徳之島諸方言におけるアクセントの通時的变化のトリガーになったと考えている。詳しくは第4章通時論を参照して頂きたい。

上記の(3-35)は母音の伸び/;/を含む語彙についてであったが、同じ音声的傾向により、例外的なパターンが現れるのが促音/Q/が関係する場合である。促音/Q/は特殊モーラであるという点で、母音の伸び/;/と共通している。(3-36)は/Q/を含む4モーラの語で同様の傾向により、例外的なピッチパターンを見せると考えられる例である。(3-36)の「雲丹」と「親子」は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つZ型(Z4)であって、実際のピッチパターンが(/Q/の一つ前の)後ろから3番目のモーラにあたる/cji/あるいは/ja/の前から上昇しているものであると考える。このような例外的なピッチパターンが現れるのは、特殊モーラを含む音節(この例では促音/Q/)の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向によるものと考えられる。

このような例外は/kara/を付けた場合に多く観察されるのだが、その理由は今のところ定かではない。

(3-36)

雲丹	Z4	ga/ɕji[Q\ɕji	ga/ɕji[Q\ɕjinu	ga/ɕji[Q\ɕjikara	(手々)
親子	Z4	u/ɕja[Q\ɕkwa	u/ɕja[Q\ɕkwanu	u/ɕja[Q\ɕkwakara	(手々)

上の (3-36) はピッチの上昇位置がアクセント核の位置 (すなわち/Q/) と一致しなくても、アクセント型自体の中和は偶然にして起きない環境にあったが、後ろから 2 番目に促音/Q/を含む Z 型の語で同様の音声的傾向が現れる(現れた)とすると、多くの場合は、X 型もしくは Y 型と中和し区別がつかなくなる(通時的に言えば合流)。例えば(3-37)はすべて C 系列の語であり、系列別語彙の考え方に基づくると共時的なアクセント型として Z 型が予測される語である。「蓬」は元々 Z 型 (Z3) の /○[Q○/であったと考えられる語の単独形が、音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により、促音/Q/を含む語頭音節が HH で発音されるようになったと考えられる例である。「畑」は促音/Q/を含む語頭音節が LL で発音されるようになった³²と考えられる例で、結果的に「蓬」は X 型に、「畑」は Y 型に中和したと考えられる。なお、(3-36)の「親子」は山方言(3-48)、轟木方言(3-53)、西阿木名方言(3-75)、阿権方言(3-84)、面縄方言(3-92)、亀津方言(3-98)、井之川方言(3-114)でも同じピッチパターンで現れ、徳之島諸方言において、Z 型の語だが表層のピッチパターンが例外的なものとして分析される代表的な語例である。

(3-37)

蓬	X3	huQ\tsi	huQ\tsinu	huQ\tsikara	(手々)
畑	Y3	haQ[te	haQ[te\ːnu	haQ[te\ːkara	(手々)

(3-38)の「おでき」は、共時的なアクセント型としては Z 型が予測される C 系列の語が、(3-36)(3-37)と同じ音声的傾向によって、促音/Q/を含む語頭音節が HH になり、結果として X 型と Z 型の揺れとして現れていると考えられる例である。促音/Q/と母音の伸び;/:/という違いはあるが、(3-35)と並行的な現象であると言える。

(3-38)

おでき	Z3	nuQ\tu/ nu[Q\tu	nu[Q\ːtunu	nu[Q\ːtukara	(手々)
-----	----	-----------------	------------	--------------	------

/nuQ\tu/と/nu[Q\tu/のように単独形では発音が揺れているが、助詞付きでは発音が(3-33)で示した Z 型のピッチパターンで安定しているため、(3-38)の語例は Z 型(Z3)に分類で

³² アクセント核 (があったと想定される) の位置でのピッチパターンが LH (音節内上昇) から LL になる変化が見られるので、音韻的にアクセント核が特殊モーラ (ここでは/Q/) の直前モーラに移動したという分析は取らない。もしアクセント核が直前に移動するのであれば、LH から HH になる変化しか予測されないからである。他の方言でも同様。

きる。

最後に、(3-39)の例について説明する。(3-39)は手々方言の Y2 の語例であるが、ピッチパターンにバリエーションが認められる。

(3-39)

a.	袖	Y2	su[di	su[dinu	su[dikara	(手々)
	羽	Y2	ha[nĩ	ha[nĩnu	ha[nĩkara	(手々)
b.	花	Y2	<u>ha[na/:</u>	ha[na:\nu	ha[naka\ra	(手々)
	腕	Y2	<u>u[di/:</u>	u[di:\nu	u[dika\ra	(手々)
c.	暇	Y2	ma[du: / <u>ma[du/:</u>	ma[du:\nu	ma[duka\ra	(手々)
	畠	Y2	ha[ru: / <u>ha[ru/:</u>	ha[ru:\nu / ha[ru:\nu	ha[ruka\ra	(手々)

(3-39a)の「袖」と「羽」後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち実際のピッチ上昇もアクセント核の位置で現れ、ピッチパターンは LH になる(○[○]。これが(3-33)の語例で見た Y2 の代表的なピッチパターンである。一方、(3-39b)はアクセント核が置かれるモーラの後ろに/:/が現れ、アクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇が観察される例である。「花」と「腕」の表層単独の場合、アクセント核が置かれる/na/と/di/の後ろに/:/が現れ、アクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇が観察される。この場合ピッチパターンは LLH になる(○[○/:]。これは、アクセント核(昇り核)でピッチが上昇する際に、通常の 1 モーラ分の長さより音価が長くなる音声的な現象に起因するものと考えられる。語末に現れる/:/の長さは半長から 1 モーラ分の長さ([:]~[:])で観察される。これらの(3-39a)と(3-39b)は表層形でのピッチパターンこそ違いがそれぞれ異なるアクセント型ではない。(3-39c)の「暇」と「畠」の語単独形を見ると、同一語で(3-39a)と(3-39b)でみたピッチパターンがフリーバリエーションで両方現れている(○[○~○[○/:]。 (3-39b)と(3-39c)で見られる/○[○/:]のようなピッチパターンは徳之島諸方言の中ではイ群の瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、伊仙方言でも観察されるものであり、これらの方言では/○[○/と/○[○/:]はあくまでも Y2 の音声的なバリエーションに過ぎないが、後述する口群の方言では、/○[○/と/○[○/:]が異なるアクセント型を成している。詳しくは 3.6 節で後述する。

3.3.4 徳之島町金見の共時的アクセント

徳之島町金見(かなみ)は徳之島東北部に位置する集落である。金見の人口は 2021 年 9 月の時点で 68 人であり、そのうち金見方言の話者であると考えられる 60 歳以上の人口は 45 人である。本章で扱うデータは 2015 年 11 月と 2017 年 9 月の著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、247 語とその助詞付きである(Appendix 3 を参照)。インフォーマ

ントは以下の通りである。主な話者は金 A であり、金 B に補助していただく形で調査を行った。金 A と金 B は家族関係にある。

- (3-40) 金 A 昭和 22 年生まれ（初回調査時 68 歳、2 回目調査時 70 歳）男性 生え抜き
金 B 大正 9 年生まれ（調査時 94 歳）女性 生え抜き

金見方言のアクセント体系は 3.3 で前述したように、他のイ 1 群に属する方言を同じく、昇り核を持つ 3 型アクセントである。X 型は高起式であり、Y 型と Z 型は低起式である。X 型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、Z 型は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは「語」で、アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-21)の金見方言を含むイ 1 群のアクセント体系を(3-41)に改めて示す。(3-42)は金見方言のアクセント型別の語例を示したものである。

- (3-41(=3-21)) 手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、亀津の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○△;	○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	[○△;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	[○△;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z 型 (-2) 低起式	基底		[○○	○[○○	○○[○○
	表層単独		[○△;○	○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き		[○△;○△	○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き		[○△;○△△	○[○○△△	○○[○○△△

- (3-42) 金見方言アクセントの型別語例

金見		1	2	3	4
X 型	表層単独	ʔju (魚)	mui (丘)	haNmë (ご飯)	aRtu\ːki (暁)
	-nu(が(の))	ʔju:nu	muinu	haNmënu	aRtu\ːkinu
	-kara(から)	ʔju:kara	muikara	haNmëkara	aRtu\ːkikara

Y 型	表層単独	[dē/;(竹)	u[gi (サトウキビ)	kuju[mi(暦)	noRgi[ri (鋸)
	-nu(が(の))	[dē/;ga	u[gi;\nu	kuju[mini	noRgi[ri\nu
	-kara(から)	[de/;kara	u[gika\ra	kuju[mikara	noRgi[ri\n:kara
Z 型	表層単独		[na/;\bi(鍋)	ka[ra\dzi(髪)	juna[sa\na (夜中)
	-nu(が(の))		[na/;\binu	ka[ra\dzinu	juna[sa\n:nanu
	-kara(から)		[na/;\bikara	ka[ra\dzikara	juna[sa\n:nakara

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。金見の語例の中で、特徴的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-43)の Z2 の例から見ていくことにする。

(3-43)

薪	Z2	[to/;\N	[to/;\Nnu	[to/;\Nkara	(金見)
蚤	Z2	[nu/;\N	[nu/;\Nnu	[nu/;\Nkara	(金見)

金見を含むイ 1 群の Z2 は、1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 3 モーラにしつつ、後ろから数えて 2 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチ上昇する。したがって表層単独の場合のピッチパターンは LHL もしくは LHH になる。(3-43)の「薪」と「蚤」は(3-42)で示したような金見の Z2 の基本的なピッチパターンを持つが、3 モーラ音節あるいは超重音節(superheavy syllable)になるという点において、Z2 を持つ徳之島諸方言(イ 1 群とロ 1 群)の中でも特徴的な例である。

まず、前提として「薪」と「蚤」の 2 モーラ目にある;/が/R/ではないことを確認する。/[to/;\N/(薪)と/[nu/;\N/(蚤)に、それぞれ/aR/(赤)を付けた複合語の例が、/aR\doN/(赤い薪)、/aR\nuN/(赤い蚤)である。/aR\doN/(赤い薪)と/aR\nuN/(赤い蚤)の下線部を見ると、母音の伸びが現れない。/[to/;\N/(薪)と/[nu/;\N/(蚤)の 2 モーラ目にある長母音の後半部が基底から辞書的にあるもの/R/なら、いかなる環境においても長母音が現れるはずなので、母音の伸びが現れないということは/[to/;\N/(薪)と/[nu/;\N/(蚤)の 2 モーラ目にある母音の伸びが/R/ではないことを示している。/R/ではない母音の伸びが、特定の型の、特定の位置に規則的かつ義務的に現れることから、/[to/;\N/(薪)と/[nu/;\N/(蚤)の 2 モーラ目にある母音の伸びが、;/であることは間違いない。

本土の東京方言などと同じく(窪蘭(1998))、徳之島諸方言の伝統方言にも基本的には超重音節(superheavy syllable)を回避する傾向があると考えられる。金見を除く他の徳之島諸方言のデータの中で超重音節(superheavy syllable)が現れる例は 1 例もなく、金見においても、Z2 である(3-43)の「薪」と「蚤」の 2 例を除き、超重音節(superheavy syllable)が現れる例はない。これは、金見方言で超重音節(superheavy syllable)を回避するという傾向より、

アクセント型を実現することが優先されたため、Z2 にだけ超重音節(superheavy syllable)が許容されたものと考えられる。次に(3-44)の例について述べる。

(3-44)

袋	Z3	hu[Q\ko	hu[Q\konu	hu[Q\kokara	(金見・金 B)
袋	X3	huQ\ko	huQ\konu	huQ\kokara	(金見・金 A)

(3-44)は、話者間でアクセント型が揺れる例である。(3-44)「袋」は金 B は/hu[Q\ko/(袋)と、Z 型で発音し、金 A は/huQ\ko/(袋)と、X 型で発音する。金 B は調査当時 90 代で、金 A は調査当時 60 代(2 回目の調査時に 70 歳)であったため、「袋」の発音の差には世代差が反映されたものと考えられる。なお、「袋」は C 系列の語であり、系列別語彙の観点から見て Z 型が予測される語でなので、「袋」は上の世代である金 B の発音の通り、伝統的に Z 型の語であることに間違いないだろう。以上のことから、金見方言の「袋」は/hu[Q\ko/(袋・Z3)から/huQ\ko/(袋)に変化したと言える。このような変化は、手々方言でも言及している、特殊モーラにアクセント核を置くのを避け、特殊モーラを含む音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向によるものと考えられる。/hu[Q\ko/の促音/Q/を含む音節(下線部)を HH にすると/huQ\ko/になり、結果的に X 型に中和することになる。このような音声的傾向は徳之島諸方言で広くみられるもので、各方言でこのような例が散見される。

3.3.5 徳之島町山の共時的アクセント

徳之島町山(さん)は徳之島の東北に位置する集落である。山の人口は 2021 年 9 月の時点で 318 人であり、そのうち山方言の話者であると考えられる 60 歳以上の人口は 213 人である。山は細かく言うと四つの集落で構成されており、南から海岸線に沿って、畦(あぜ)、港川(みなとがわ)、内千川(うちかわ)、里(さと)の順に集落が連なっている。本節ではこの四つの集落のうち、港川を中心に記述する。畦、港川、内千川、山里に方言差があるかは分からない。港川の人口は 106 人であり、そのうち方言話者であると考えられる 60 歳以上の人口は 75 人である。本節で扱うデータは 2013 年 9 月と 2013 年 12 月の著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、221 語とその助詞付きである(Appendix 4 を参照)。助詞付きは、1 モーラ助詞の ga(が、の)を用いて調査したが、他の徳之島諸方言の調査で一般的に使用している nu(が、の)と同じアクセントになることを確認している³³。なお、山集落では

³³ ちなみに述べておくと、山はいわゆるガノ交替がある集落であり、人や動物には ga を、植物や無生物には nu を主格として用いる。話者によると植物や無生物に ga を用いる時は取り立ての意味が生じるといふ。

語に 2 モーラ助詞を付けたパターンが調査できていない。インフォーマントは以下の通りである。主な話者は山 A であり、山 B に補助していただく形で調査を行った。山 A と山 B は兄弟である。

(3-45) 山 A 昭和 7 年生まれ (調査時 81 歳) 男性 生え抜き

山 B 昭和 9 年生まれ (調査時 79 歳) 男性 外住歴 約 5~6 年

山方言のアクセント体系は 3.3 で前述したように、他のイ 1 群に属する方言と同じく、昇り核を持つ 3 型アクセントである。X 型は高起式であり、Y 型と Z 型は低起式である。X 型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、Z 型は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは「語」で、アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-21)の山方言を含むイ 1 群のアクセント体系を (3-46) にあらためて示す。(3-47)は山方言のアクセント型別の語例を示したものである。なお、Y4 については存在を確認できていない。

(3-46(=3-21)) 手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、亀津の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○△;	○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	[○△;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	[○△;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z 型 (-2) 低起式	基底	/	[○○	○[○○	○○[○○
	表層単独		[○△;○	○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き		[○△;○△	○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き		[○△;○△△	○[○○△△	○○[○○△△

(3-47) 山方言アクセントの型別語例

山		1	2	3	4
X 型	表層単独	kī (木)	utu (音)	hanadzī (鼻血)	aRtu\ki (暁)
	-nu(が(の))	kī\ga	utuga	hanadziga	aRtu\kiga
Y 型	表層単独	[ja/; (家)	wu[gi (サトウキビ)	kuga[nī (黄金)	(○○○[○])
	-nu(が(の))	[ja/; \ga	wu[gi: \ga	kuga[nīga	(○○○[○△])
Z 型	表層単独		[na/; \bī (鍋)	ga[tsi\tsi (雲丹)	noko[giri (鋸)
	-nu(が(の))		[na/; \bīga	ga[tsi\tsiga	noko[giri \ga

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では、山の語例の中で、特徴的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-48)の語例から見ていくことにする。

(3-48)

親子 Z4 u/ja[Q\kwa u[jaQ\kwaga (山)

(3-48)は語中の促音/Q/にアクセント核が置かれていると考えられる例である。(3-48)「親子」は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つZ型(Z4)であろうが、実際のピッチパターンは(/Q/の一つ前の)後ろから3番目のモーラにあたる/ja/の前から上昇する。(3-46(=3-21))のアクセント体系から見て、このような例外的なピッチパターンが現れるのは、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、特殊モーラ(ここでは促音/Q/)を含む音節全体を同じ高さにするという音声的傾向によるものと考えられる。このような音声的傾向は徳之島諸方言で広くみられるものである。

(3-48)の「親子」は偶然にして違うのだが、後ろから2番目に促音/Q/を含むZ型の語で同様の音声的傾向が現れる場合、X型もしくはY型と中和する(通時的に言えば合流する)環境であることが多い。例えば、(3-49)はC系列の語であり、共時的なアクセント型としてはZ型が予測される語が、音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により、促音/Q/を含む語頭音節がHHで発音されるようになったと考えられる例である。

(3-49)

袋 X3 haQ\ko haQ\koga (山)
 蓆 X3 muQ\su muQ\suga (山)

(3-48)「親子」は(3-49)と同じ音声的な変化が起こっても、アクセント体系に中和する型(後ろから3番目に昇り核が来るアクセント型)がない環境である(あった)ため、Z型以外の

ほかのアクセント型に吸収されることなく、Z型の中で表層形が例外的なパターンを示す語として残っているものと考えられる。なお、(3-48)の「親子」は手々方言(3-36)、轟木方言(3-53)、西阿木名方言(3-75)、阿権方言(3-84)、面縄方言(3-92)、亀津方言(3-98)、井之川方言(3-114)でも同じピッチパターンで現れ、徳之島諸方言において、Z型の語だが表層のピッチパターンが例外的なものとして分析される代表的な語例である。

3.3.6 徳之島町轟木の共時的アクセント

徳之島町轟木(とどろき)は徳之島の北の中央部、徳之島町と天城町の間位置する集落であり、本稿で調査対象としている地点では唯一海を持たない集落である。轟木の人口は2021年9月の時点で148人であり、そのうち轟木方言の話者であると考えられる60歳以上の人口は109人である。本節で扱うデータは2014年10月と2017年2月の著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、246語とその助詞付きである(Appendix 5を参照)。インフォーマントは(3-49)の通りである。

轟木方言の調査では、2014年に轟Aから名詞のアクセントと名詞に助詞ga(が、の)を付けたアクセントを調査した後、そのデータを元に一部の語彙を抜粋し、2017年に轟Aと轟B両方に助詞nu(が、の)とkara(から)を付けたアクセントを追加で調査した。3.1.1で前述したとおり、轟木においても1モーラ助詞のga(が、の)とnu(が、の)が同じアクセントになることは確認している。

- (3-50) 轟A 昭和38年生まれ(初回調査時51歳、2回目調査時55歳) 男性 外住歴5年
轟B 昭和13年生まれ(調査時79歳) 男性 生え抜き

轟木方言のアクセント体系は3.3で前述したように、他のイ1群に属する方言と同じく、昇り核を持つ3型アクセントである。X型は高起式であり、Y型とZ型は低起式である。X型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y型は後ろから1番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、Z型は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは「語」で、アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-21)の轟木方言を含むイ1群のアクセント体系を(3-51)にあらためて示す。(3-52)は轟木方言のアクセント型別の語例を示したものである。なお、Y4については存在を確認できていない。

(3-51(=3-21)) 手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、亀津の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○/;	○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	[○/;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	[○/;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z 型 (-2) 低起式	基底		[○○	○[○○	○○[○○
	表層単独		[○/;○	○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き		[○/;○△	○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き		[○/;○△△	○[○○△△	○○[○○△△

(3-52) 轟木アクセントの型別語例

轟木		1	2	3	4
X 型 語例	表層単独	ha(葉)	kami/ka\mi(甕)	kunucji(九つ)	aRtu\ki(暁)
	-nu(が(の))	ha\neu	ka\mi\u	kunucji\neu	aRtu\kinu
	-kara(から)	ha:\kara	ka\mi\kara	kunucji\kara	aRtu\kikara
Y 型 語例	表層単独	[dē/;(竹)	u[gi (サトウキビ)	kuju[mi(暦)	(○○○[○)
	-nu(が(の))	[dē/;ga	u[ginu	kuju[mi\neu	(○○○[○△)
	-kara(から)	(○;[△△)	u[gikara	kuju[mi\kara	(○○○[○△△)
Z 型 語例	表層単独		[na/;\bi(鍋)	ka[ra\dzi(髪)	juna[sa:\na / juna[sa\na (夜中)
	-nu(が(の))		[na/;\bi\u	ka[ra\dzinu	juna[sa\neu
	-kara(から)		[na/;\bi\kara	ka[ra\dzikara / ka[radzikara	juna[sa\nekara

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では、轟木の語例の中で、特徴的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-53)の語例から見ていくことにする。

(3-53)

a.	手	Y1	[t̥i/;	[t̥i/;\nu	[t̥i/;\kara	(轟木)
				[t̥i/;\ga		
	サトウキビ	Y2	u[gi	u[ginu	u[gikara	(轟木)
				u[giga		
b.	家	Y1	[ja/;	[ja/;ga / [ja/;\ga	-	(轟木)
	犬	Y2	i[N	i[N/\nu	-	(轟木)
	耳	Y2	mi[N	mi[N\ga / mi[N/\ga	-	(轟木)

(3-53a)の「手」と「サトウキビ」は(3-52)で見た、轟木方言のY型の基本的なパターンで、語の後ろから数えて1モーラ目にアクセント核を置く。そして、アクセント核の位置でピッチが上昇する。Y1である「手」は1モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを2モーラにしつつ、後ろから数えて1モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇し、表層単独の場合のピッチパターンはLHになる。轟木方言は語がドメインであるため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく2モーラ目から上昇する。しかし、(3-53b)の「家」例において1モーラ助詞 nu を付けた場合に、/[ja/;\ga/(家が)のように/ga/の前でピッチが上昇し、/[ja/;はLLで現れる。同じく、「犬」と「耳」例においても1モーラ助詞 nu を付けた場合に、/i[N/\nu/(犬が)のように/\nu/の前でピッチが上昇し、/i[N/はLLで現れ、/mi[N/\ga/(耳が)のように/ga/の前でピッチが上昇し、/mi[N/はLLで現れる。これは徳之島諸方言で広く観察される、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。このような音声的傾向が、表層における例外的なピッチパターンが現れる原因になったと考えられる例が(3-54)である。

(3-54)

親子	Z4	u/ja[Q\kwa	u/ja[Q\kwaga	(轟木)
漁に行くとき使	Z5	obo/ro[N\ku	obo/ro[N\kuga	(轟木)
う小さいかご				

(3-54)の「親子」と「漁に行くとき使う小さいかご」は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つZ型(Z4・Z5)であって、実際のピッチパターンは(/Q/の一つ前の)後ろから3番目のモーラにあたる/ja/あるいは/ro/の前から上昇しているものであると考える。このような例外的なピッチパターンが現れるのは、促音/Q/や撥音/N/のような特殊モーラを含む音節での音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向によるものと考えられる。(3-54)はピッチの上昇位置がアクセント核の位置(すなわち/Q/)と一致しなくても、アクセント型自体の中和は偶然にして起きない環境にあったが、後ろから2番

目に促音/Q/を含む Z 型の語で同様の音声的傾向が現れる(現れた)とすると、多くの場合は、X 型もしくは Y 型と中和し区別がつかなくなる(通時的に言えば合流)。例えば(3-55)はすべて C 系列の語であり、系列別語彙の考え方に基づく共時的なアクセント型として Z 型が予測される語である。「蓆」は元々 Z 型 (Z3) の /○[Q○/であったと考えられる語の単独形が、音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により、促音/Q/を含む語頭音節が HH で発音されるようになったと考えられる例である。「枕」は促音/Q/を含む語頭音節が LL で発音されるようになったと考えられる例で、結果的に「蓆」は X 型に、「枕」は Y 型に中和したと考えられる。

(3-55)

蓆	X3	muQsju	muQsjunu	muQsjuka\ra	(轟木・轟 B)
			muQsjuga		
枕	Y3	maQ[kwa	maQ[kwa\neu	maQ[kwaka\ra	(轟木)
			maQ[kwaga		

なお、(3-54)の「親子」は手々方言(3-36)、山方言(3-48)、西阿木名方言(3-76)、阿権方言(3-85)、面縄方言(3-93)、亀津方言(3-99)、井之川方言(3-115)でも同じピッチパターンで現れ、徳之島諸方言において、Z 型の語だが表層のピッチパターンが例外的なものとして分析される代表的な語例である。(3-56)は(3-53)と(3-54)で説明したのと同じ音声的傾向が話者間での揺れとして現れる例である。

(3-56)

a.	蛸	Y1	[to/;	[to/;ga	-	(轟木・轟 A)
	蛸	X1	to: ^	to: ^\neu	to: ^\kara	(轟木・轟 B)
				to: ^\ga		
	着物	Y2	ki[N	ki[N\neu	ki[N/kara	(轟木・轟 A)
				ki[N\ga		
	着物	X2	kiN	ki\Nneu	kiN\kara	(轟木・轟 B)
				kiN\ga		
b.	柱	Z2	[ha/;\ra	[ha/;\ranu	[ha/;\raga	(轟木・轟 A)
	柱	X2	ha\ra	ha\ranu	ha\rakara	(轟木・轟 B)
				ha\raga		
	籠	Z2	[ti/;\ru	[ti/;\runu	[ti/;\rukara	(轟木・轟 A)
				[ti/;\ruga		
	籠	X2	ti:\ru / ti\ru	ti:\runu	ti\rukara	(轟木・轟 B)
				ti:\ruga		

話者轟 A は調査当時 50 代で、話者轟 B は調査当時 70 代だった話者であるが、金見方言の(3-44)の例のように単純に世代差によるものとは言えない。(3-56a)の「蛸」「着物」は B 系列の語で、系列別語彙の観点から見て Y 型が予測される語であり、(3-56b)の「柱」「籠」は C 系列の語で、系列別語彙の観点から見て Z 型が予測される語である。(3-56)を見ると、轟 A は「蛸」「着物」は Y 型で、「柱」「籠」は Z 型で発音している一方、轟 B は(3-56)の語すべてを X 型で発音している。轟 A の方が系列別語彙で予測される発音と一致しており、轟 B より若い世代である、轟 A の方が伝統的なピッチパターンを持っていると考えられる。

(3-56)で挙げた話者間で異なる発音が見られる例も、(3-53)と(3-54)で前述した、特殊モーラを含む音節での音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向によるものと考えられる。(3-56a)の轟 A から得られた Y 型の語例である/[to/;/(蛸)と/ki[N/(/着物)の LH というピッチパターンをもとにして特殊モーラ/;/と/N/を含む音節(下線部)が HH になった場合、/×to:/(/蛸)と/×kiN/(/着物)は X 型と中和する。これは轟 B の語例、/to:/(/蛸)と/kiN/(/着物)とピッチパターンである。また、(3-56b)の轟 A から得られた Z 型の語例である/[ha/;/\ra/(/柱)と/[ti/;/\ru/(/籠)も、特殊モーラ/;/を含む音節(下線部)が HH で発音されると、ピッチ上昇のない/×ha\ra/(/柱)と/×ti\ru/(/籠)になり、結果的に X 型と中和する。実際これは轟 B から得られた X 型の/ha\ra/(/柱)、/ti\ru/(/ti\ru/(/籠)と同じピッチパターンである。以上のことから(3-56)の語例が、通時的に轟 A のような音節内上昇があるピッチパターンから轟 B のような音節内上昇が避けられ音節全体が HH になるピッチパターン発音へと変化していったと推測することができる。

3.3.7 天城町兼久の共時的アクセント

天城町兼久(かねく)は徳之島の西の中央辺りに位置する集落である。兼久の人口は 2021 年 9 月の時点で 679 人であり、そのうち兼久方言の話者であると考えられる 60 歳以上の人口は 366 人である。本節で扱うデータは 2015 年 11 月の著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、243 語とその助詞付きである(Appendix 6 を参照)。インフォーマントは(3-57)の通りである。

(3-57) 兼 A 昭和 11 年生まれ(調査時 79 歳) 男性 生え抜き

兼久方言のアクセント体系は 3.3 で前述したように、他のイ 1 群に属する方言と同じく、昇り核を持つ 3 型アクセントである。X 型は高起式であり、Y 型と Z 型は低起式である。X 型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、Z 型は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは「語」で、アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-21)の兼久方言を含むイ 1 群のアクセント体系を(3-58)にあらためて示す。(3-59)は兼久方言のアクセント

型別の語例を示したものである。

(3-58(=3-21)) 手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、亀津の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○/;	○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	[○/;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	[○/;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z 型 (-2) 低起式	基底		[○○	○[○○	○○[○○
	表層単独		[○/;○	○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き		[○/;○△	○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き		[○/;○△△	○[○○△△	○○[○○△△

(3-59) 兼久方言アクセントの型別語例

兼久		1	2	3	4
X 型	表層単独	ha:^(葉)	ka\ldzi(風)	hana\ldzi(鼻血)	uQka\N(頭)
	-nu(が(の))	ha:^\nu	kadzi\^nu	hanadzi\^nu	uQka\^Nnu
	-kara(から)	ha:^\ka\ra	kadzika\ra	hanadzika\ra	uQka\^Nkara
Y 型	表層単独	[wi/;(桶)	ha[te(畑)	kuju[mi(暦)	toRgu[ra(台所・母屋 と独立した家屋)
	-nu(が(の))	[wi/;\nu	ha[te\^nu	kuju[mi\^nu	toRgu[ra\^nu
	-kara(から)	[wi/;\kara	ha[teka\ra	kuju[mika\ra	toRgu[ra\kara
Z 型	表層単独		[ja/;\ni(来年)	u[sa\gi(兎)	juna[sa\^na(夜中)
	-nu(が(の))		[ja/;\ninu	u[sa\ginu	juna[sa\^nanu
	-kara(から)		[ja/;\nikara	u[sa\gikara	juna[sa\^nakara

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では、兼久の語例の中で、特徴的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-60)の語例から見ていくことにする。

(3-60)

a.	蛸	Y1	[to/;	[to/;\nu	[to/;ka\ra	(兼久)
	歯	Y1	[ha/;	[ha/;nu	[ha/;kara	(兼久)
b.	木	Y1	[ki/;	[ki/;nu	[ki/;kara	(兼久)
	穂	Y1	[hu/;	[hu/;\nu	[hu/;ka\ra	(兼久)
c.	目	Y1	[mi/;	[mi/;\nu	[mi/;ka\ra / [mi/;ka\ra	(兼久)

(3-60a)の「蛸」と「歯」は(3-59)で見た基本的なパターンであり、1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを2 モーラにしつつ、後ろから数えて1 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇し、表層単独の場合のピッチパターンはLHになる。兼久方言は語がドメインであるため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく2 モーラ目の/;/から上昇する。しかし、(3-60b)の「木」と「穂」の例において助詞の/kara/を付けた場合に、/[ki/;kara/(木から)]、/[hu/;ka\ra/(穂から)]のように/ka/の前でピッチが上昇し、/[ki/;/と/[hu/;/はLLで現れる。(3-60c)の「目」は同じ語でピッチ上昇の位置にバリエーションが現れる。「目」の例において助詞の/kara/を付けた場合に、/[mi/;ka\ra/(目から)]のように、語の2 モーラ目の/;/から上昇し、/[mi/;/がLHで現れるピッチパターンと、/[mi/;ka\ra/(目から)]のように/ka/の前でピッチが上昇し、/[mi/;/はLLで現れるピッチパターンがある。(3-60a)を基準に(3-60b)の/[ki/;kara/(木から)]、/[hu/;ka\ra/(穂から)]および、(3-60c)「目」の/[mi/;ka\ra/(目から)]のピッチパターンを見ると、(3-60b)と(3-60c)は特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。このような音声的傾向は徳之島諸方言で広く観察されるものである。

3.3.8 天城町瀬滝の共時的アクセント

天城町瀬滝(せたき)は徳之島の西の中央辺りに位置する集落である。瀬滝の人口は2021年9月の時点で527人であり、そのうち瀬滝方言の話者であると考えられる60歳以上の人口は267人である。本節で扱うデータは2015年11月の著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、238語とその助詞付きである(Appendix 7を参照)。インフォーマントは(3-61)の通りである。

(3-61) 瀬 A 大正8年生まれ(調査時95歳)女性 生え抜き

瀬滝方言のアクセント体系は3.3で前述したように、他のイ1群に属する方言と同じく、昇り核を持つ3型アクセントである。X型は高起式であり、Y型とZ型は低起式である。X型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y型は後ろから1番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、Z型は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは「語」

で、アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-21)の瀬滝方言を含むイ1群のアクセント体系を(3-62)にあらためて示す。(3-63)は瀬滝方言のアクセント型別の語例を示したものである。なお、Y4については存在を確認できていない。

(3-62(=3-21)) 手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、亀津の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○/;	○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	[○/;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	[○/;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z 型 (-2) 低起式	基底		[○○	○[○○	○○[○○
	表層単独		[○/;○	○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き		[○/;○△	○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き		[○/;○△△	○[○○△△	○○[○○△△

(3-63) 瀬滝方言アクセントの型別語例

瀬滝		1	2	3	4
X 型	表層単独	mē(前)	hani(羽)	kibu\si(煙)	uQkaN(頭)
	-nu(が(の))	mē:\nu	haninu	kibu\sinu / kibusin	uQkaNnu
	-kara(から)	mē\kara	hanika\ra	kibusika\ra	uQkaNkara
Y 型	表層単独	[kī/;(木)	wu[gi (サトウキビ)	wuna[gu(女)	(○○○[○)
	-nu(が(の))	[kī/;\nu	wu[gi\Nu	wuna[gu\Nu	(○○○[○△)
	-kara(から)	[kī;/ka\ra	wu[gika\ra	wuna[guka\ra	(○○○[○△△)
Z 型	表層単独		[ga/;\ta(バツタ)	ka[ra\dzi(頭)	juna[sa\na(夜中)
	-nu(が(の))		[ga/;\tanu	ka[ra\dzinu	juna[sa\nanu
	-kara(から)		[ga/;takara	ka[ra\dzikara	juna[sanakara

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では瀬滝の語例の中で、特徴

的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-64)の語例から見ていくことにする。

(3-64)

a.	山	Y2	ja[ma	ja[manu	ja[makara	(瀬滝)
	踵	Y2	a[du	a[du\ngu	a[duka\ra	(瀬滝)
b.	涙	Y2	<u>na[da/:</u>	na[da\ngu	na[daka\ra	(瀬滝)
	肩	Y2	<u>ka[ta/:</u>	ka[ta\ngu	ka[taka\ra	(瀬滝)
c.	雨	Y2	a[mĩ / <u>a[mĩ/:</u>	a[mĩ\ngu	a[mĩka\ra	(瀬滝)
	雲	Y2	ku[mo / <u>ku[mo/:</u>	ku[mo\ngu	ku[moka\ra	(瀬滝)

(3-64)は瀬滝方言の Y2 の例である。(3-64a)の「山」と「踵」ように Y2 は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち、実際のピッチ上昇もアクセント核の位置で現れる(ピッチパターンは LH(○[○])).これが(3-63)でみた Y2 のピッチパターンである。一方、(3-64b)は単独形でアクセント核が置かれるモーラの後ろに/:/が現れ、アクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇が観察される例である。「涙」と「肩」の表層単独の場合、アクセント核が置かれる/da/と/ta/の後ろに/:/が現れ、アクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇が観察される。この場合ピッチパターンは LLH になる(○[○/]).これは、アクセント核(昇り核)でピッチが上昇する際に、通常の 1 モーラ分の長さより音価が長くなる音声的な現象に起因するものと考えられる。語末に現れる/:/の長さは半長から 1 モーラ分の長さ([ː]~[ː])で観察される。

表層形でのピッチパターンは違うが(3-64a)と(3-64b)はそれぞれ異なる型ではない。(3-64c)の「雨」と「雲」の単独形を見ると、同一語で(3-64a)と(3-64b)でみたピッチパターンがフリーバリエーションで両方現れている(○[○~○[○/]).このような例はイ群の手々、西阿木名、阿権、面縄、伊仙方言でも Y2 のピッチのバリエーションとして音声的に現れる。

(3-65)

a.	波	Y2	na[mi/:	na[mi/:\ngu	<u>na[mi/ka\ra</u>	(瀬滝)
	脛	Y2	si[ni/:	si[ni/:\ngu	<u>si[ni/ka\ra</u>	(瀬滝)
	種	Y2	ta[ni/:	ta[ni/:\ngu	<u>ta[ni/ka\ra</u>	(瀬滝)
b.	盥	Y2	ta[re / ta[re/:	ta[rengu / ta[re/:\ngu	<u>ta[re/ka\ra</u>	(瀬滝)
	角	Y2	cji[no/ː^	cji[no/ː^ngu	<u>cji[no/ː^ka\ra</u>	(瀬滝)

次に助詞/kara/を付けた時のピッチ上昇の位置が例外的なピッチパターンを見せる例について説明する。(3-65a)は助詞/kara/を付けた時のピッチ上昇の位置が、アクセント核が置かれる位置から 1 モーラ後ろに現れる例である。(3-65a)の「波」「脛」「種」において助

詞の/kara/を付けた場合に、波線部の/na[mi/ka\ra/ (波から)、/si[ni/ka\ra/ (脛から)、/ta[ni/kara/ (種から)のように/ka/の前でピッチが上昇する(○○[△△])。このようなピッチパターンは(3-64)に助詞/kara/を付けた場合のピッチパターン、例えば/ja[makara/ (山から)や/a[duka\ra/ (踵から)のようなものから、(3-65b)に助詞/kara/を付けた場合のピッチパターン、例えば、/ta[re/!\kara/ (盥から)や/cji[no/!\kara/ (角から)のようなピッチパターンを経て成立したものと本稿は考えるのだが、この通時的な変遷について以下でもう少し詳しく説明しておく。まず、(3-63)でみた、Y2 の 2 モーラ助詞付きの基本的なピッチパターン/○[○△△/から始まるとすると、アクセント核が置かれるモーラの後ろに/;/を伴ってアクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたってピッチが上昇する(/○[○/!\△△/)パターンが現れる。これは、(3-64)の表層単独の例で説明した音声的傾向で、表層単独の場合に限らず、助詞/nu/と/kara/を付けた場合でも現れる。つづいて、/○[○/!\△△/から、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという、徳之島諸方言で広く観察される音声的傾向により、/○[○/!\△△/の、/;/を含む音節(下線部)が LL で発音されるようになり、結果/○[○/!\△△/になる。/○[○/!\△△/の/;/であるが、3.1.3.2.1 節で述べたとおり、/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れなくてもよい。以上の過程を経て、Y2 の 2 モーラ助詞付きのピッチパターンは、最終的に/○[○/!\△△/のようになると考えられる。結果的に、最初の/○[○△△/からみると、ピッチ上昇の位置が、アクセント核が置かれる位置から 1 モーラ後ろに現れるようになると考えられるのである。瀬滝方言においては、上で見たような、/○[○△△/と/○[○/!\△△/、/○[○/!\△△/のピッチパターンは Y2 の 2 モーラ助詞付きの音声的なバリエーションとして現れる。本稿では、こうした Y 型のピッチの山が助詞の方にずれ込む音声的傾向(あるいは変化)が、通時的に Y2(“-1”)の語が口群の W2(“+3”)へと変わり、また、アクセントのドメインが語から文節へと変化する音声的土台となったと考えている。詳しくは第 4 章通時論を参照して頂きたい。

(3-66)は前述した特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が、Y1 のピッチパターンに影響している例である。

(3-66)

a.	手	Y1	[tī/;	[tī/;nu	[tī/;kara	(瀬滝)
b.	木	Y1	[kī/;	[kī/;\nu	<u>[kī/!\ka\ra</u>	(瀬滝)
	湯	Y1	[ju/;	[ju/;\nu	<u>[ju/!\ka\ra</u>	(瀬滝)

(3-66a)の「手」は(3-63)で見た基本的なパターンであり、1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、後ろから数えて 1 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇し、表層単独の場合のピッチパターンは LH になる。瀬滝方言は語がドメインであるため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく 2 モーラ目の/;/から上昇する。しかし、

(3-66b)の「木」と「湯」の例において助詞の/kara/を付けた場合に、/[k̥i:/kara/ (木から)、/[j̥u:/ka\ra/ (湯から)のように/kara/の前でピッチが上昇し、/[k̥i:/と/[j̥u:/は LL で現れる。調査データの中に瀬滝方言の Y1 は全部で 8 語あるのだが、(3-66a)のように/kara/を付けた場合に/;/の前でピッチ上昇するパターンになる例はここに挙げた「手」のみで、8 語中 7 語は(3-66b)のようなピッチパターンになる。

最後に、上述したものの類例であって、かつ、特殊モーラとして撥音を持つ語を (3-67) に示す。

(3-67)

耳 Y2 mi[N mi[N\ɲu mi[Nka\ra / mi[N/ka\ra (瀬滝)

(3-67)の「耳」の例において助詞の/kara/を付けた場合には、/mi[Nka\ra/ (耳から)のように語の 2 モーラ目の/N/からピッチが上昇して/mi[N/が LH で現れるピッチパターンと、/mi[N/ka\ra/ (耳から)のように/ka/の前でピッチが上昇して/mi[N/が LL で現れるピッチパターンがあり、ピッチ上昇の位置にバリエーションが見られる。(3-67)も、徳之島諸方言で広く見られる特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が反映している例であると考えられる。

3.3.9 天城町西阿木名の共時的アクセント

天城町西阿木名(にしあぎな)は徳之島の西の中央辺りに位置する集落である。西阿木名の人口は 2021 年 9 月の時点で 303 人であり、そのうち西阿木名方言の話者であると考えられる 60 歳以上の人口は 167 人である。本節で扱うデータは 2015 年 10 月の著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、253 語とその助詞付きである(Appendix 8 を参照)。インフォーマントは(3-68)の通りで、二人は夫婦である。

(3-68) 西 A 昭和 6 年生まれ (調査時 84 歳) 男性 生え抜き

西 B 昭和 10 年生まれ (調査時 80 歳) 女性 生え抜き

西阿木名方言のアクセント体系は 3.3 節で前述したように、他のイ 1 群に属する方言と同じく、昇り核を持つ 3 型アクセントである。X 型は高起式であり、Y 型と Z 型は低起式である。X 型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、Z 型は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは「語」で、アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-21)の西阿木名方言を含むイ 1 群のアクセント体系を (3-69) にあらためて示す。(3-70)は西阿木名方言のアクセント型別の語例を示したものである。なお、Y4 については存在を確

認できていない。

(3-69(=3-21)) 手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、亀津
の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○Λ;	○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	[○Λ;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	[○Λ;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z 型 (-2) 低起式	基底		[○○	○[○○	○○[○○
	表層単独		[○Λ;○	○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き		[○Λ;○△	○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き		[○Λ;○△△	○[○○△△	○○[○○△△

(3-70) 西阿木名アクセントの型別語例

西阿木名		1	2	3	4
X 型	表層単独	ha:^(葉)	ka\mī(甕)	kibu\si(煙)	iri\dzumi(刺青)
	-nu(が(の))	ha:^\nu	ka\mīnu	kibu\sinu	iri\dzuminu
	-kara(から)	ha:^\ka\ra	ka\mīkara	kībusika\ra	irīdzumika\ra
Y 型	表層単独	[haΛ;^(歯)	ka[mī: ~ kami[:(亀)	nasa[kī(情け)	(○○○[○)
	-nu(が(の))	[haΛ;^\nu	ka[mī\nu	nasa[kī\nu	(○○○[○△)
	-kara(から)	[ha:^\ka\ra	kamī[ka\ra	nasa[kīka\ra	(○○○[○△△)
Z 型	表層単独		[maΛ;\cjī(火)	u[na\gi(うなぎ)	sīti[mī\ti(朝)
	-nu(が(の))		[maΛ;\cjīnu	u[na\ginu	sīti[mī\tinu
	-kara(から)		[maΛ;\cjīkara	u[na\gīkara	sīti[mī\vikara

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では西阿木名の語例の中で、特徴的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-71)の語例から見ていくことにする。

(3-71)

a.	去年	Y2	ku[dzu	ku[dzu:\nu	ku[dzu:\kara	(西阿木名)
	夜	Y2	ju[ru	ju[ru:\nu	ju[ru:\kara	(西阿木名)
b.	涙	Y2	na[da / <u>na[da]l:</u>	na[da\nu	na[daka\ra	(西阿木名)
				/ <u>na[da]l:\nu</u>	/ na[da/ka\ra	
	花	Y2	ha[na / <u>ha[na]l:</u>	ha[na:\nu	ha[na/ka\ra	(西阿木名)
				/ <u>ha[na]l:\nu</u>		

(3-71)は西阿木名方言の Y2 の例である。(3-71a)の「去年」と「夜」ように Y2 は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち、実際のピッチ上昇もアクセント核の位置で現れる。この場合ピッチパターンは LH になる(○[○])。これが(3-70)でみた Y2 のピッチパターンである。西阿木名を含むイ 1 群のアクセントのドメインは「語」であるため、助詞/nu/と/kara/を付けた場合でもアクセント核の位置は変わらず語末モーラであり、アクセント核の位置からピッチ上昇する。一方、(3-71b)の「涙」と「花」では、ピッチパターンにバリエーションが見られる。一つは、(3-71a)の例と同じピッチパターンで、/na[da/(涙)と/ha[na/(花)のように、単独形であっても助詞付きであっても語の後ろから 1 番目(語末)のモーラにある昇り核の位置でピッチが上昇するものである。もう一つは、表層単独の/na[da]l:/(涙)と/ha[na]l:/(花)のように、アクセント核が置かれるモーラの後ろに/:/が現れ、アクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇するピッチパターンである。この場合、表層単独のピッチパターンは LLH になる(○[○/]). 助詞の/nu/を付けた場合のピッチパターンも表層単独の場合と同じく、/na[da\nu/(涙が)と/ha[na:\nu/(花が)のように、後ろから 1 番目(語末)のモーラにある昇り核の位置でピッチが上昇するパターンと、/na[da]l:\nu/(涙が)と/ha[na]l:\nu/(花が)のようにアクセント核が置かれるモーラの後ろに/:/が現れ、アクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇するピッチパターンが現れる。これは、アクセント核(昇り核)でピッチが上昇する際に、通常の 1 モーラ分の長さより音価が長くなる音声的な現象に起因するものと考えられる。語末に現れる/:/の長さは半長から 1 モーラ分の長さ([.V~[:V])で観察される。

/○[○/と/○[○/、そして 1 モーラ助詞付きの/○[○△/と/○[○/△/は同一語でフリーバリエーションとして現れる。このような例は徳之島諸方言の中では手々、瀬滝、阿権、面縄、伊仙方言でも観察されるものであり、これらの方言において/○[○/と/○[○/は音声的なバリエーションに過ぎず、異なるアクセント型にはならない。

次に助詞/kara/を付けた時のピッチ上昇の位置が例外的なピッチパターンを見せる例について説明する(3-72)。

(3-72)

a.	花	Y2	ha[na	ha[na:\nu	<u>ha[na/ka\ra</u>	(西阿木名)
			/ ha[na/:	/ ha[na/:\nu		
	涙	Y2	na[da	na[da:\nu	na[daka\ra	(西阿木名)
			/ na[da/:	/ na[da/:\nu	<u>/ na[da/ka\ra</u>	
b.	子供	Y2	wa[re	wa[re:\nu	<u>wa[re/ka\ra</u>	(西阿木名)

(3-72a)の波線部は助詞/kara/を付けた時のピッチ上昇の位置が、アクセント核が置かれる位置から1モーラ後ろに現れる例である。(3-72a)の「花」「涙」において助詞の/kara/を付けた場合に、/ha[na/ka\ra/(波から)、/na[da/ka\ra/(涙から)のように/ka/の前でピッチが上昇する(〇〇[△△])。このようなピッチパターンは(3-71a)に助詞/kara/を付けた場合のピッチパターン、例えば/ku[dzu:\kara/(去年から)や/ju[ru:\kara/(夜から)のようなものから、(3-72b)に助詞/kara/を付けた場合のピッチパターン、例えば、/wa[re/ka\ra/(子供から)のようなピッチパターンを経て成立したものと本稿は考えるのだが、この通時的な変遷について以下でもう少し詳しく説明しておく。まず、(3-70)でみた、Y2の2モーラ助詞付きの基本的なピッチパターン/〇[〇△△/から始まるとすると、アクセント核が置かれるモーラの後ろに/:/を伴ってアクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたってピッチが上昇する(/〇[〇/:△△/)パターンが現れる。これは、(3-71)の表層単独の例で説明した音声的傾向で、表層単独の場合に限らず、助詞/nu/と/kara/を付けた場合でも現れる。つづいて、/〇[〇/:△△/から、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという、徳之島諸方言で広く観察される音声的傾向により、/〇[〇/:△△/の、/:/を含む音節(下線部)がLLで発音されるようになり、結果/〇[〇/:△△/になる。/〇[〇/:△△/の/:/であるが、3.1.3.2.1節で述べたとおり、/:/はフリーバリエーションで現れるものであり、/:/が現れなくてもよい。以上の過程を経て、Y2の2モーラ助詞付きのピッチパターンは、最終的に/〇[〇/:△△/のようになると考えられる。結果的に、最初の/〇[〇△△/からみると、ピッチ上昇の位置が、アクセント核が置かれる位置から1モーラ後ろに現れるようになると考えられるのである。西阿木名方言においては、上で見たような、/〇[〇△△/と/〇[〇/:△△/、/〇[〇/:△△/のピッチパターンはY2の2モーラ助詞付きの音声的なバリエーションとして現れる。本稿では、こうしたY型のピッチの山が助詞の方にずれ込む音声的傾向(あるいは変化)が、通時的にY2(“-1”)の語が口群のW2(“+3”)へと変わり、また、アクセントのドメインが語から文節へと変化する音声的土台となったと考えている。詳しくは第4章通時論を参照して頂きたい。

(3-73)は前述した特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという音声的傾向が、Y1のピッチパターンにも反映されていると考えられる例である。

(3-73)

貝	Y1	[mja/;	[mja/;\nu	<u>[mja;/ka\ra</u>	(西阿木名)
歯	Y1	[ha/;	[ha/;\nu	<u>[ha;/ka\ra</u>	(西阿木名)

(3-69)で見るように、西阿木名方言を含むイ 1 群の Y1 の基本的なピッチパターンはモーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、後ろから数えて 1 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するというものである。表層単独の場合のピッチパターンは LH になる。西阿木名方言を含むイ 1 群は「語」をドメインとするため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく 2 モーラ目の /:/ から上昇するピッチパターンが現れるはずである。しかし、(3-73)の「貝」と「歯」の例に助詞の /kara/ を付けた場合に、/[mja;/ka\ra/(貝から)、/[ha;/ka\ra/(歯から)のように /ka/ の前でピッチが上昇し、/[mja;/と/[ha;/は LL で現れる。これは、前述した特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ (HH もしくは LL) にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。西阿木名方言の Y1 では、助詞の /kara/ を付けた場合のピッチパターンがすべて(3-73)の下線部のようなピッチパターンになる。規則的な例外と言える。(3-74)は語末に /N/ がある Y 型の例である。

(3-74)

a.	犬	Y2	i[N	i[N\vu	<u>i[N/ka\ra</u>	(西阿木名)
	耳	Y2	mi[N	mi[Nnu	<u>mi[N/ka\ra</u>	(西阿木名)
				/ mi[N\vu		
b.	苺	Y3	icju[N / <u>i/cju[N</u>	icju[N\vu	<u>i/cju[N\kara</u>	(西阿木名)
				/ i/cju[N\vu		
	蚊	Y3	gadza[N	<u>ga/dza[Nnu</u>	<u>gadza[N/ka\ra</u>	(西阿木名)
			/ <u>ga/dza[N</u>			

(3-74a)は語末に /N/ がある Y2 の例である。「犬」と「耳」の例において助詞の /kara/ を付けた場合に、/i[N/ka\ra/(犬から)と/mi[N/ka\ra/(耳から)のように /ka/ の前でピッチが上昇し、/i[N/と/mi[N/の部分は LL で現れる。(3-74b)は語末に /N/ がある Y3 の例である。「苺」と「蚊」の例を見ると、表層単独の場合と助詞 /nu/ と /kara/ を付けた場合のピッチパターンにバリエーションが見られる。まず、表層単独のピッチパターンを見ると、/icju[N/(苺)と/gadza[N/(蚊)のように、語末の /N/ の前でピッチが上昇するパターンが見られる。このパターンが、(3-70)で見た西阿木名の Y3 の基本的なピッチパターンである。一方、表層単独では/i/cju[N/(苺)と/ga/dza[N/(蚊)のように、/cju/や/dza/の前(すなわちアクセント核より前)でピッチが上昇し、/cju[N/と/dza[N/の部分は HH で現れるパターンも見られる。助詞 /nu/ と /kara/ を付けた場合、/icju[N\vu/(苺が)のように、Y3 の基本的なピッチパターンで現れる場合と、/i/cju[N\vu/(苺が)、/i/cju[N\kara/(苺から)、/ga/dza[Nnu/(蚊が)のよう

に/cju/や/dza/の前でピッチが上昇し、/cju[N]/と/dza[N]/の部分が HH で現れるパターン、/gadza[N/ka\ra/(蚊から)のように/ka/の前でピッチが上昇し、/dza[N]/の部分は LL で現れるパターンが、フリーバリエーションとして現れる。(3-74)の下線部、つまり、西阿木名のアクセント体系からみて例外的なピッチパターンは、(3-72)で述べた、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。このような音声的傾向は徳之島諸方言で広く見られるものである。

(3-74b)の「苺」と「蚊」を Y 型(Y3)に分類している理由について補足する。これら「苺」と「蚊」が、/icju[N]/(苺)と/gadza[N]/(蚊)のようなピッチパターンを基本とする Y3 であるとする、前述したように、音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向から/i/cju[N]/(苺)と/ga/dza[N]/(蚊)という、アクセント核の前で上昇するピッチパターンが現れる理由を説明することができる。しかし、これらを×/i[cjuN]/(苺)と×/ga[dzaN]/(蚊)³⁴のようなピッチパターンを基本とする Z3 とした場合には×/i[cjuN]/(苺)と×/ga[dzaN]/(蚊)、×/ga[dzaN/ka\ra/(蚊から)のようなアクセント核より後にピッチが上昇するパターンになる理由を説明できない。

次に、上述したものの類例であって、かつ、特殊モーラとして/R/を持つ語を (3-75) に示す。

(3-75)

蛸	Y2	to[R	to[R\ɳu	<u>to[R/ka\ra</u>	(西阿木名)
櫛	Z3	<u>sa[R/ki</u> / sa[R\ɳki	<u>sa[R/kinu</u>	sa[Rkika\ra	(西阿木名)

(3-75)は語に/R/を含む語例である。まず、「蛸」に助詞の/kara/を付けた場合のピッチパターンを見ると、/to[R/ka\ra/(蛸から)のように/ka/の前でピッチが上昇し、/to[R/の部分は LL で現れる。(3-74a)「犬」と「耳」と同じピッチパターンである。「櫛」はピッチパターンにバリエーションが見られる。/sa[R\ɳki/と/sa[Rkika\ra/(櫛から)は、後ろから 2 モーラ目の/R/の前でピッチが上昇する。このパターンが、(3-70)で見た西阿木名の Z3 の基本的なピッチパターンである。一方、/sa[R/ki/(櫛)と/sa[R/kinu/(櫛が)は/ki/の前でピッチが上昇し、/sa[R/は LL で現れる。(3-75)の下線部は、(3-72)で述べた、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。

「櫛」のアクセント型について補足すると、「櫛」が/sa[R\ɳki/(櫛)のようなピッチパターンを基本とする Z3 であるとする、前述したように、音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向から/sa[R/ki/(苺)という、アクセント核の前で上昇するピッ

³⁴ /icju[N]/(苺)と/gadza[N]/(蚊)を、Z3 と分類したと仮定して書き換えたもの。

(3-77)

袋	X3	huQ\ku	huQ\kunu	huQ\kukara	(西阿木名)
糸	Y3	iQ[cju	iQ[cju\;nu	iQ[cju\;kara	(西阿木名)

なお、(3-76)の「親子」は手々方言(3-36)、山方言(3-48)、轟木方言(3-54)、阿権方言(3-85)、面縄方言(3-93)、亀津方言(3-99)、井之川方言(3-115)でも同じピッチパターンで現れ、徳之島諸方言において、Z型の語だが表層のピッチパターンが例外的なものとして分析される代表的な語例である。

3.3.10 伊仙町阿権の共時的アクセント

伊仙町阿権(あごん)は徳之島の南部に位置する集落である。阿権の人口は2021年9月の時点で273人であり、そのうち阿権方言の話者であると考えられる60歳以上の人口は137人である。本節で扱うデータは2015年11月と2016年10月の著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、245語とその助詞付きである(Appendix 9を参照)。インフォーマントは(3-78)の通りである。

(3-78) 阿 A 昭和12年生まれ(初回調査時78歳、2回目調査時79歳)女性 生え抜き

阿権方言のアクセント体系は3.3節で前述したように、他のイ1群に属する方言と同じく、昇り核を持つ3型アクセントである。X型は高起式であり、Y型とZ型は低起式である。X型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y型は後ろから1番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、Z型は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは「語」で、アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-21)の阿権方言を含むイ1群のアクセント体系を(3-79)にあらためて示す。(3-80)は阿権方言のアクセント型別の語例を示したものである。

(3-79(=3-21)) 手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、亀津の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○/;	○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	[○/;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	[○/;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z 型 (-2) 低起式	基底		[○○	○[○○	○○[○○
	表層単独		[○/;○	○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き		[○/;○△	○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き		[○/;○△△	○[○○△△	○○[○○△△

(3-80) 阿権アクセントの型別語例

阿権		1	2	3	4
X 型	表層単独	hwa:^(葉)	kadzī(風)	kibu\si(煙)	aRtu\ki(暁)
	-nu(が(の))	hwa:^\nu	kadzī\ngu	kibu\sinu	aRtu\kinu
	-kara(から)	hwa:^\ka\ra	kadzīka\ra	kibu\sikara	aRtu\kikara
Y 型	表層単独	[ki/; (木)	na[da (涙)	kuju[mi (暦)	noRgi[ri (鋸)
	-nu(が(の))	[ki/;\nu	na[da\ngu	kuju[mi\ngu	noRgi[ri\ngu
	-kara(から)	[ki/;\ka\ra	na[daka\ra	kuju[mika\ra	noRgi[rika\ra
Z 型	表層単独		[ja/;\nī (来年)	ka[ta\na (刀)	juna[sa\na (夜中)
	-nu(が(の))		[ja/;\nīnu	ka[ta\nganu	juna[sa\nganu
	-kara(から)		[ja/;\nīkara	ka[ta\ngakara	juna[sa\ngakara

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では阿権の語例の中で、特徴的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-81)の語例から見ていくことにする。

(3-81)

a.	涙	Y2	na[da	na[da\ɲu	na[daka\ra	(阿権)
b.	畑	Y2	ha[te / <u>ha[te/ɪ:</u>	ha[te\ɲu	<u>ha[te/ɪ:\kara</u>	(阿権)
				/ <u>ha[te/ɪ:\ɲu</u>		
	子供	Y2	wa[re / <u>wa[re/ɪ:</u>	wa[re\ɲu	wa[re\kara	(阿権)
				/ <u>wa[re/ɪ:\ɲu</u>	/ <u>wa[re/ɪ:\kara</u>	

(3-81)は阿権方言の Y2 の例である。(3-81a)の「涙」のように Y2 は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち、実際のピッチ上昇もアクセント核の位置で現れる。この場合ピッチパターンは LH になる(○[○])。これが(3-80)でみた Y2 のピッチパターンである。阿権を含むイ 1 群のアクセントのドメインは「語」であるため、助詞/nu/と/kara/を付けた場合でもアクセント核の位置は変わらず語末モーラであり、アクセント核の位置からピッチ上昇する。一方、(3-81b)の「畑」と「子供」では、ピッチパターンにバリエーションが見られる。一つは、(3-81a)の例と同じピッチパターンで、/ha[te/(畑)と/wa[re/(子供)のように、単独形であっても助詞付きであっても語の後ろから 1 番目(語末)のモーラにある昇り核の位置でピッチが上昇するものである。もう一つは、表層単独の/ha[te/ɪ:(畑)と/wa[re/ɪ:(子供)のように、アクセント核が置かれるモーラの後ろに/:/が現れ、アクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇するピッチパターンである。この場合、表層単独のピッチパターンは LLH になる(○[○/ɪ:]。助詞の/nu/と/kara/を付けた場合のピッチパターンも表層単独の場合と同じく、/ha[te\ɲu/(畑が)と/wa[re\ɲu/(子供が)、そして/wa[re\kara/(子供から)のように、後ろから 1 番目(語末)のモーラにある昇り核の位置でピッチが上昇するパターンと、/ha[te/ɪ:\ɲu/(畑が)と/wa[re/ɪ:\ɲu/(子供が)、そして/ha[te/ɪ:\kara/(畑から)と/wa[re/ɪ:\kara/(子供から)のようにアクセント核が置かれるモーラの後ろに/:/が現れ、アクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇するピッチパターンが現れる。これは、アクセント核(昇り核)でピッチが上昇する際に、通常の 1 モーラ分の長さより音価が長くなる音声的な現象に起因するものと考えられる。語末に現れる/:/の長さは半長から 1 モーラ分の長さ([·]~[:])で観察される。

/○[○/と/○[○/ɪ:/、そして 1 モーラ助詞付きの/○[○△/と/○[○/ɪ:△/、2 モーラ助詞付きの/○[○△△/と/○[○/ɪ:△△/は同一語でフリーバリエーションとして現れる。このような例は徳之島諸方言の中では手々、瀬滝、西阿木名、面縄、伊仙方言でも観察されるものであり、これらの方言において/○[○/と/○[○/ɪ:/は音声的なバリエーションに過ぎず、異なるアクセント型にはならない。

次に(3-82)を見る。(3-82)は Y1 に 2 モーラ助詞を付けた場合のピッチ上昇の位置に音声的なバリエーションが見られる語例である。

(3-82)

a.	木	Y1	[ki/;	[ki/;\nu	[ki/;ka\ra	(阿権)
b.	潮・海水	Y1	[sju/;	[sju/;\nu	<u>[sju/;ka\ra</u>	(阿権)
c.	歯	Y1	[hwa/;	[hwa/;\nu	[hwa/;\kara	(阿権)
					<u>/ hwa/;\kara</u>	

(3-82a)で見ると、阿権方言を含むイ 1 群の Y1 の基本的なピッチパターンはモーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、後ろから数えて 1 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するというものである。表層単独の場合のピッチパターンは LH になる。阿権方言を含むイ 1 群は「語」をドメインとするため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく 2 モーラ目の /;/ から上昇するピッチパターンが現れるはずである。しかし、(3-82b)の「潮・海水」の例に助詞の /kara/ を付けた場合に、/[sju/;ka\ra/(潮・海水から)のように /ka/ の前でピッチが上昇し、/[sju/;は LL で現れる。(3-82c)「歯」の例に助詞の /kara/ を付けた場合は(3-82a)と同じピッチパターンである /[hwa/;\kara/(歯から)と(3-82b)と同じピッチパターンである /hwa/;\kara/(歯から)が両方現れる。これは、前述した特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。次の(3-83)は(3-82b)と類似した語例で、語末が /N/ である例である。 /;/ と /N/ は両方とも特殊モーラである点において共通している。(3-83)の「着物」に助詞の /kara/ を付けた場合、/ki[N/ka\ra/(着物から)のように /ka/ の前でピッチが上昇し、/kiN/は LL で現れる。

(3-83)

着物	Y2	ki[N	ki[N\vu	ki[N/ka\ra	(阿権)
----	----	------	---------	------------	------

(3-84)は上記のような音声的傾向が進んだ結果として語のアクセント型が変更されてしまった(されつつある)と考えられる例で、語単独のアクセントが X2 と Z2 で揺れる。

(3-84)

鳥	X2	ga\ra / [ga/;\ra	ga\ranu	ga\rakara	(阿権)
松	X2	ma\tsu / [ma/;\tsu	ma\tsu	ma\tsukara	(阿権)

(3-84)に挙げた「鳥」と「松」は C 系列の語であり共時的なアクセント型としては Z 型が予測される。しかし、共時的には Z 型(Z2)と X 型(X2)のピッチパターンが混在する分析とせざるを得ない。まず、(3-84)は元々 Z 型(Z2)の / [○/;○/ であった語の単独形が、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により、語頭音節が HH で発音されるようになってきていると考えられる例である。「鳥」は単独形

が/ga\ra/と/[ga/;\ra/の間で、「松」は単独形が/ma\tsu/と/[ma/;\tsu/の間で揺れている。

このように単独形では発音が揺れているが、助詞付きでは発音が(3-79)で示した X 型のピッチパターンで安定しているため、(3-84) の語例はアクセント型としては X 型(X2)に分類できる。

上記の(3-84)は母音の伸び/;/を含む語彙についてであったが、同じ音声的傾向により、例外的なパターンが現れるのが促音/Q/が関係する場合である。促音/Q/は特殊モーラであるという点で、母音の伸び/;/と共通している。

(3-85)は/Q/を含む 4 モーラの語で同様の傾向により、例外的なピッチパターンを見せると考えられる例である。(3-85)の「親子」はピッチパターンにバリエーションが見られる。一つは、/uja[Q\kwa/(親子)と/uja[Q\kwanu/(親子が)、/uja[Q\kwakara/(親子から)のように、後ろから 2 モーラ目の/Q/の前でピッチが上昇するパターンである。このパターンが、(3-79)で見た阿権方言の Z3 の基本的なピッチパターンである。もう一つは/u/ja[Q\kwa/(親子)と/u/ja[Q\kwakara/(親子から)のように (/Q/の一つ前の) 後ろから 3 番目のモーラにあたる/ja/の前から上昇しているもので、/Q/を含む音節である/ja[Q/は HH で現れる。このような例外的なピッチパターンが現れるのは、上記した、特殊モーラを含む音節での音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向によるものと考えられる。

(3-85)

親子	Z4	uja[Q\kwa	uja[Q\kwanu	uja[Q\kwakara	(阿権)
		/u/ja[Q\kwa		/u/ja[Q\kwakara	

上の (3-85) はピッチの上昇位置がアクセント核の位置 (すなわち/Q/) と一致しなくても、アクセント型自体の中和は偶然にして起きない環境にあったが、後ろから 2 番目に促音/Q/を含む Z 型の語で同様の音声的傾向が現れる(現れた)とすると、多くの場合は、X 型もしくは Y 型と中和し区別がつかなくなる(通時的に言えば合流)。例えば(3-86)は二つとも C 系列の語であり、系列別語彙の考え方に基づく共時的なアクセント型として Z 型が予測される語である。「ごちそう」は元々 Z 型 (Z3) の /○[Q○/であったと考えられる語の単独形が、音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により、促音/Q/を含む語頭音節が HH で発音されるようになったと考えられる例である。「目下の人・弟」は促音/Q/を含む語頭音節が LL で発音されるようになったと考えられる例で、結果的に「ごちそう」は X 型に、「目下の人・弟」は Y 型に中和したと考えられる。

(3-86)

ごちそう	X3	kwaQ\ki	kwaQ\kinu	kwaQ\kikara	(阿権)
目下の人・弟	Y3	uQ[tu	uQ[tu\neu	uQ[tuka\ra	(阿権)

なお、(3-85)の「親子」は手々方言(3-36)、山方言(3-48)、轟木方言(3-54)、西阿木名方言(3-76)、面縄方言(3-93)、亀津方言(3-99)、井之川方言(3-115)でも同じピッチパターンで現れ、徳之島諸方言において、Z型の語だが表層のピッチパターンが例外的なものとして分析される代表的な語例である。

3.3.11 伊仙町面縄の共時的アクセント

伊仙町面縄(おもなわ)は徳之島南部に位置する集落である。面縄の人口は2021年9月の時点で650人であり、そのうち面縄方言の話者であると考えられる60歳以上の人口は291人である。本節で扱うデータは2014年5月と2017年2月の著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、238語とその助詞付きである(Appendix 10を参照)。インフォーマントは(3-87)の通りである。

面縄方言の調査では、2014年に面Aから名詞のアクセントと名詞に助詞nu(が、の)を付けたアクセントを調査した後、そのデータを元に一部の語彙を抜粋し、2017年に面Bに名詞のアクセントと助詞nu(が、の)を付けたアクセントが面Aの発音と一致することを確認した上で、kara(から)を付けたアクセントを追加で調査した。そのため、助詞/kara/を付けた場合の語例が他の徳之島諸方言に比べ少ない。

(3-87) 面A 昭和12年生まれ(調査時83歳)男性 高校卒業後、職業柄退職時まで徳之島を含む鹿児島県内を転々とする。

面B 昭和7年生まれ(調査時85歳)男性 高校卒業後、職業柄退職時まで徳之島を含む鹿児島県内を転々とする。

面縄方言のアクセント体系は3.3節で前述したように、他のイ1群に属する方言と同じく、昇り核を持つ3型アクセントである。X型は高起式であり、Y型とZ型は低起式である。X型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y型は後ろから1番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、Z型は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは「語」で、アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-21)の面縄方言を含むイ1群のアクセント体系を(3-88)にあらためて示す。(3-89)は面縄方言のアクセント型別の語例を示したものである。

(3-88(=3-21)) 手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、亀津の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○/;	○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	[○/;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	[○/;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z 型 (-2) 低起式	基底		[○○	○[○○	○○[○○
	表層単独		[○/;○	○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き		[○/;○△	○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き		[○/;○△△	○[○○△△	○○[○○△△

(3-89) 面縄アクセントの型別語例

面縄		1	2	3	4
X 型	表層単独	cju:(人)	hu\ñi(骨)	kibu\si(煙)	uQkaN / uQ\kaN(頭)
	-nu(が(の))	cju\ñu / cju:\ñu	hu\ñinu	kibu\sinu	uQkaNnu / uQ\kaNnu
	-kara(から)	cju:ka\ra	hu\ñikara	kibu\sikara	uQ\kaNkara
Y 型	表層単独	[to/; (蛸)	a[mī (飴)	misi[ge (しゃもじ)	toRgu[ra (台所・母屋と独立した家屋(面 A))
	-nu(が(の))	[to/;\ñu	a[mī\ñu	misi[ge\ñu	toRgu[ra\ñu
	-kara(から)	[to/;ka\ra	a[mika\ra	misi[ge\kara	toRgu[ra\kara
Z 型	表層単独		[?ma/;^\tsi (火)	ka[ta\na (刀)	sutu[mī\ti (朝)
	-nu(が(の))		[?ma/;^\tsinu	ka[ta\nanu	sutu[mī\tinu
	-kara(から)		[?ma/;^\tsikara	ka[ta\nakara	sutu[mī\तिकara

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では面縄の語例の中で、特徴的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-90)の語例から

見ていくことにする。

(3-90)

a.	種	Y2	ta[nĩ	ta[nĩ\ɲu	ta[nĩka\ɲra	(面縄)
b.	麦	Y2	mu[gi / <u>mu[gi/</u>	mu[gi\ɲu	-	(面縄)
	池	Y2	i[ki / <u>i[ki/</u>	i[ki\ɲu	i[kika\ɲra	(面縄)
				/ <u>i[ki/</u> \ɲu		

(3-90)は面縄方言の Y2 の例である。(3-90a)の「種」のように Y2 は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち、実際のピッチ上昇もアクセント核の位置で現れる。この場合ピッチパターンは LH になる(○[○])。これが(3-89)でみた Y2 のピッチパターンである。阿権を含むイ 1 群のアクセントのドメインは「語」であるため、助詞/nu/と/kara/を付けた場合でもアクセント核の位置は変わらず語末モーラであり、アクセント核の位置からピッチ上昇する。一方、(3-90b)の「麦」と「池」では、ピッチパターンにバリエーションが見られる。一つは、(3-90a)の例と同じピッチパターンで、/mu[gi/(麦)と/i[ki/(池)のように、語の後ろから 1 番目(語末)のモーラにある昇り核の位置でピッチが上昇するものである。もう一つは、表層単独の/mu[gi//(麦)と/i[ki//(池)のように、アクセント核が置かれるモーラの後ろに/:/が現れ、アクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇するピッチパターンである。この場合、表層単独のピッチパターンは LLH になる(○[○/])。助詞の/nu/を付けた場合のピッチパターンも表層単独の場合と同じく、/mu[gi\ɲu/(麦)と/i[ki\ɲu/(池)のように、後ろから 1 番目(語末)のモーラにある昇り核の位置でピッチが上昇するパターンと、/i[ki/\ɲu/(池)のようにアクセント核が置かれるモーラの後ろに/:/が現れ、アクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇するピッチパターンが現れる。これは、アクセント核(昇り核)でピッチが上昇する際に、通常の 1 モーラ分の長さより音価が長くなる音声的な現象に起因するものと考えられる。語末に現れる/:/の長さは半長から 1 モーラ分の長さ([·]~[:])で観察される。

面縄方言において/○[○/と/○[○/、そして 1 モーラ助詞付きの/○[○△/と/○[○/△/は同一語でフリーバリエーションとして現れる。このような例は徳之島諸方言の中では手々、瀬滝、西阿木名、阿権、伊仙方言でも観察されるものであり、これらの方言において/○[○/と/○[○/は音声的なバリエーションに過ぎず、異なるアクセント型にはならない。

(3-91)

a.	肉	Y2	si[si/	<u>si[si/</u> \nu	-	(面縄)
	太陽	Y2	ti[da/	<u>ti[da/</u> \nu	-	(面縄)
b.	花	Y2	ha[na/	ha[na\ɲu	ha[na\kara	(面縄)
				/ <u>ha[na/</u> \ɲu	/ <u>ha[na/</u> :ka\ɲra	

次に助詞/nu/と/kara/を付けた時のピッチ上昇の位置が例外的なピッチパターンを見せる例について説明する。(3-91a)の波線部は助詞/nu/を付けた時のピッチ上昇の位置が、アクセント核が置かれる位置から1モーラ後ろに現れる例である。(3-91a)の「肉」「太陽」において助詞の/nu/を付けた場合に、/si[si/nu/ (肉が)、/ti[da/nu/ (太陽が)のように/nu/の前でピッチが上昇する(〇〇[△)。このようなピッチパターンは(3-90a)に助詞/nu/と/kara/を付けた場合のピッチパターン、/ta[ni\vu/ (種が)と/ta[nika\ra/ (種から)のようなものから、(3-91b)に助詞/nu/と/kara/を付けた場合のピッチパターン、/ha[na/:\nu/ (花が)と/ha[na/ka\ra/ (花から)のようなピッチパターンを経て成立したものと本稿は考えるのだが、この通時的な変遷について以下でもう少し詳しく説明しておく。まず、(3-88)でみた、Y2の2モーラ助詞付きの基本的なピッチパターン/〇[〇△/と/〇[〇△△/から始まるとすると、アクセント核が置かれるモーラの後ろに/:/を伴ってアクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたってピッチが上昇するパターン、/〇[〇△:/と/〇[〇△:/△/が現れる。つづいて、/〇[〇△:/と/〇[〇△:/△/から、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという、徳之島諸方言で広く観察される音声的傾向により、/〇[〇△:/と/〇[〇△:/△/の、/:/を含む音節(下線部)がLLで発音されるようになり、結果/〇[〇△:/と/〇[〇△:/△/になる。/〇[〇△:/と/〇[〇△:/△/の/:/であるが、3.1.3.2.1節で述べたとおり、/:/はフリーバリエーションで現れるものであり、/:/が現れなくてもよい。以上の過程を経て、Y2の2モーラ助詞付きのピッチパターンは、最終的に/〇[〇△:/と/〇[〇△:/△/のようになると考えられる。結果的に、最初の/〇[〇△:/と/〇[〇△:/△/からみると、ピッチ上昇の位置が、アクセント核が置かれる位置から1モーラ後ろに現れるようになると考えられるのである。面縄方言においては、上で見たような、/〇[〇△:/と/〇[〇△:/△/、/〇[〇△:/△/のピッチパターンはY2の1モーラ助詞付きの音声的なバリエーションとして現れる。2モーラ助詞付きの場合、助詞/kara/のデータが少なくはあるが、/〇[〇△:/と/〇[〇△:/△/のピッチパターンが音声的なバリエーションとして現れる。

(3-92)は前述した特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという音声的傾向が、Y1のピッチパターンにも反映されていると考えられる例である。

(3-92)

a.	蛸	Y1	[to/;	[to/;\nu	[to/;ka\ra	(面縄)
b.	齒	Y1	[hwa/;	[hwa/;\nu	[hwa/;ka\ra	(面縄)
				/ [hwa/\nu	/ [hwa/ka\ra	

(3-92a)で見ると、面縄方言を含むイ1群のY1の基本的なピッチパターンはモーラ目の母音を伸ばして、語の長さを2モーラにしつつ、後ろから数えて1モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するというものである。表層単独の場合のピッチパターンは

LH になる。面縄方言を含むイ 1 群は「語」をドメインとするため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく 2 モーラ目の /:/ から上昇するピッチパターンが現れるはずである。しかし、(3-92b) の「歯」の例に助詞の /kara/ を付けた場合に、/[hwa; /ka\ra/ (歯から) のように /ka/ の前でピッチが上昇し、/[hwa; / は LL で現れる。これは、前述した特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ (HH もしくは LL) にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。また、「歯」に助詞の /nu/ を付けた場合、/[hwa /nu/ (歯が) のように /nu/ の前でピッチが上昇するパターンが現れる ([○ΛΔ])。これは、(3-91) で前述した Y2 の通時的な変遷と同じような過程で成り立ったピッチパターンと考えられる。(3-92a) のような Y1 の基本的な / [○Λ; Δ/ から、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により / [○Λ; Δ/ の /:/ を含む音節 (下線部) が LL で発音されるようになり、結果 / [○; ΛΔ/ になる。アクセント情報に基づき Y1 の語末に生じていた /:/ は、 /:/ の前でピッチが上昇しなくなったことによって /:/ に認識されるようになると考えられる。 /:/ はフリーバリエーションで現れるものであり、 /:/ が現れなくてもよい。以上の過程を経て、Y2 の 2 モーラ助詞付きのピッチパターンは、最終的に / [○ΛΔ/ のようになると考えられる。このような、通時的な変遷を想定すると、(3-92b) の「歯」に助詞 /nu/ を付けた場合のピッチパターンに、/[hwa /; \nu/ (歯が) と / [hwa /nu/ (歯が) のようなバリエーションが現れるか説明することができる。本稿では、こうした Y 型のピッチの山が助詞の方にずれ込む音声的傾向 (あるいは変化) が、通時的に Y2 (“-1”) の語が口群の W2 (“+3”) へと変わり、また、アクセントのドメインが語から文節へと変化する音声的土台となったと考えている。詳しくは第 4 章通時論を参照して頂きたい。

(3-93) は /Q/ を含む 4 モーラの語で、前述した特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ (HH もしくは LL) にするという音声的傾向により、例外的なピッチパターンを見せると考えられる例である。(3-93) の「親子」は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ Z 型 (Z4) であって、実際のピッチパターンが (/Q/ の一つ前の) 後ろから 3 番目のモーラにあたる /ja/ の前から上昇しているものであると考える。この場合、/u/ ja [Q\kwa/ (親子) の中で /Q/ を含む音節である /ja [Q/ は HH で現れる。

(3-93)

親子 Z4 u/ ja [Q\kwa u/ ja [Q\kwa nu u/ ja [Q\kwakara (面縄)

上の (3-93) はピッチの上昇位置がアクセント核の位置 (すなわち /Q/) と一致しなくても、アクセント型自体の中和は偶然にして起きない環境にあったが、後ろから 2 番目に促音 /Q/ を含む Z 型の語で同様の音声的傾向が現れる (現れた) とすると、多くの場合は、X 型もしくは Y 型と中和し区別がつかなくなる (通時的に言えば合流)。例えば (3-94) の「袋」は C 系列の語であり、系列別語彙の考え方に基づく共時的なアクセント型として Z 型が予測される語である。「袋」は元々 Z 型 (Z3) の /○ [Q○/ であつたと考えられる語の単独形が、音

節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により、促音/Q/を含む語頭音節が HH で発音されるようになったと考えられる例である。結果的に「袋」は X 型に中和したと考えられる。

(3-94)

袋 X3 huQ\ku huQ\kunu huQ\kukara (面縄)

なお、(3-93)の「親子」は手々方言(3-36)、山方言(3-48)、轟木方言(3-54)、西阿木名方言(3-76)、阿権方言(3-85)、亀津方言(3-99)、井之川方言(3-115)でも同じピッチパターンで現れ、徳之島諸方言において、Z 型の語だが表層のピッチパターンが例外的なものとして分析される代表的な語例である。

3.3.12 徳之島町亀津の共時的アクセント

徳之島町亀津(かめつ)は徳之島の東に位置する徳之島町の南部に位置する集落である。亀津は徳之島町の役場がある徳之島町の中心地であり、人口は 2021 年 9 月の時点で 5408 人である。人口面で徳之島の中で一番大きい町である。亀津の 60 歳以上の人口は 1759 人であるが、他の集落からの移住が多い地域であるため、亀津方言の伝統的な話者の数を推測するのは難しい。本章で扱うデータは 2015 年 1 月と 2017 年 2 月に著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査した、244 語とその助詞付きである(Appendix 11 を参照)。インフォーマントは(3-95)の通りである。

(3-95) 亀 A 昭和 25 年生まれ(初回調査時 65 歳、2 回目調査時 67 歳) 男性
外住歴 4 年

亀津方言のアクセント体系は 3.4 節で前述したように、昇り核を持つ 3 型アクセントである。X 型は高起式であり、Y 型と Z 型は低起式である。X 型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、Z 型は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは「語」で、アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-21)の亀津方言を含むイ 2 群のアクセント体系を(3-96)にあらためて示す。(3-97)は亀津方言のアクセント型別の語例を示したものである。

(3-96(=3-21)) 手々、金見、山、轟木、兼久、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、亀津の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○/;	○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	[○/;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	[○/;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z 型 (-2) 低起式	基底		[○○	○[○○	○○[○○
	表層単独		[○/;○	○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き		[○/;○△	○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き		[○/;○△△	○[○○△△	○○[○○△△

(3-97) 亀津アクセントの型別語例

亀津		1	2	3	4
X 型	表層単独	hu / hu:(帆)	hu\ŋi(舟)	kugani(黄金)	aRtu\ki(暁)
	-nu(が(の))	hunu	hu\ŋinu	kuganiinu	aRtu\kinu
	-kara(から)	hu:kara	hu\ŋikara	kugani:kara	aRtu\kikara
Y 型	表層単独	[ju/;(湯)	na[da(涙)	hasa[mi(鉄)	toRgu[ra(台所・母屋 と独立した家屋)
	-nu(が(の))	[ju/;\nu	na[da\nu	hasa[mi\nu	toRgu[ra\nu
	-kara(から)	[ju/;\kara	na[da\kara	hasa[mi\kara	toRgu[ra\kara
Z 型	表層単独		[ju/;\ni (雲丹の一種)	u[na\gi(鰻)	sutu[mi\ti(朝)
	-nu(が(の))		[ju/;\ninu	u[na\ginu	sutu[mi\tinu
	-kara(から)		[ju/;\nikara	u[na\gikara	sutu[mi\तिकara

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では亀津の語例の中で、特徴的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-98)の語例から見ていくことにする。

(3-98)

松	Z2	ma:\tsu	ma:tsu\nu	[ma/;\tsukara	(亀津)
		/ [ma/;\tsu	/ [ma/;\tsunu		

(3-98)の「松」はC系列の語であり共時的なアクセント型としてはZ型が予測される。しかし、共時的にはZ型(Z2)とX型(X2)のピッチパターンが混在する分析とせざるを得ない。まず、(3-84)は元々Z型(Z2)の/[○Λ;○/であった語の単独形が、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという音声的傾向により、語頭音節がHHで発音されるようになってきていると考えられる。通時的には、上記のような音声的傾向が進むと、結果としてZ2/[○Λ;○/はX2/○○/に中和すると考えられる。

(3-98)の「松」をZ型(Z2)に分類している理由について補足する。「松」が/[ma/;\tsu/(松)のようなピッチパターンを基本とするZ2であるとする、前述したように、音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向から/ma:\tsu/(松)という、高起式で、かつアクセント核(昇り核)を持たないピッチパターンが現れる理由を説明することができる。しかし、「松」を×/matsu/(松)のようなHHのピッチパターンを基本とするX2とした場合には×/ma/;\tsu/(松)のようにピッチの上昇が生じ、かつ2モーラ目に規則的であり義務的な母音の伸びが生じるピッチパターンが現れる理由を説明できない。

(3-99)は/Q/を含む4モーラの語で、前述した特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという音声的傾向により、例外的なピッチパターンを見せると考えられる例である。

(3-99)

親子	Z4	u/ja[Q\kwa	u/ja[Q\kwa nu	u/ja[Q\kwakara	(亀津)
----	----	------------	---------------	----------------	------

(3-99)の「親子」は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つZ型(Z4)であって、実際のピッチパターンが(/Q/の一つ前の)後ろから3番目のモーラにあたる/ja/の前から上昇しているものであると考える。この場合、/u/ja[Q\kwa/(親子)の/Q/を含む音節である/ja[Q/はHHで現れる。

(3-99)はピッチの上昇位置がアクセント核の位置(すなわち/Q/)と一致しなくても、アクセント型自体の中和は偶然にして起きない環境にあったが、後ろから2番目に促音/Q/を含むZ型の語で同様の音声的傾向が現れる(現れた)とすると、多くの場合は、X型もしくはY型と中和し区別がつかなくなる(通時的に言えば合流)。例えば(3-100)の「袋」はC系列の語であり、系列別語彙の考え方に基づく共時的なアクセント型としてZ型が予測される語である。「袋」は元々Z型(Z3)の/○[Q○/であったと考えられる語の単独形が、音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により、促音/Q/を含む語頭音節がHHで発音されるようになったと考えられる例である。結果的に「袋」はX型に中和し

たと考えられる。

(3-100)

袋 X3 huQ\ku huQ\kunu huQ\kukara (亀津)

なお、(3-99)の「親子」は手々方言(3-36)、山方言(3-48)、轟木方言(3-54)、西阿木名方言(3-76)、阿権方言(3-85)、面縄方言(3-93)、井之川方言(3-115)でも同じピッチパターンで現れ、徳之島諸方言において、Z型の語だが表層のピッチパターンが例外的なものとして分析される代表的な語例である。

3.4 イ2群の名詞アクセント体系



図 3-4 イ2群に属する集落の位置(灰色塗り)

イ2群に該当する地域は伊仙のみである。イ2群のアクセント型は3.3節のイ1群のアクセント体系と類似しているが、イ2群はアクセント体系にZ2とZ3を持たない体系である。伊仙方言のアクセントについては次節で詳しく説明する。

3.4.1 伊仙町伊仙の共時的アクセント

伊仙町伊仙(いせん)は徳之島の最南端に位置する集落である。伊仙は伊仙町の役場がある、伊仙町の中心地であり、人口は 2021 年 9 月の時点で 2040 人である。伊仙の 60 歳以上の人口は 863 人であるが、他の集落からの移住が多い地域であるため、伊仙方言の伝統的な話者の数を推測するのは難しい。伊仙は細かく言うと西伊仙(にしいせん)、中伊仙(なかいせん)、東伊仙(ひがしいせん)の三つの地区で構成されている。本節ではこの三つの地区のうち、中伊仙を中心に記述する。話者によると、三つの地区の中でも多少方言差があるとのことであるが、アクセント体系に方言差があるかについては定かではない。また、伊仙方言は口 3 群の犬田布の當原方言(3.9)と深く関係がある。犬田布は二つの集落で構成されているのであるが、犬田布(當原)の話者によると、そのうち犬田布岬に位置する當原(とうばる)は、約 260 年前に伊仙町伊仙から移住してきた人々の集落であるとのことである。これによると、伊仙方言と犬田布の當原方言は約 260 年前に枝分かれしたことになる。

本章で扱うデータは 2014 年 5 月と 2017 年 2 月に著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査した、243 語とその助詞付きである(Appendix 12 を参照)。インフォーマントは(3-101)の通りである。伊仙方言の調査では、2014 年に伊 A から名詞のアクセントと名詞に助詞 nu(が、の)を付けたアクセントを調査した後、そのデータを元に一部の語彙を抜粋し、2017 年に伊 B に名詞のアクセントと助詞 nu(が、の)を付けたアクセントが伊 A の発音と一致することを確認した上で、kara(から)を付けたアクセントを追加で調査した。そのため、助詞/kara/を付けた場合の調査データが他の徳之島諸方言に比べ少ない。

(3-101) 伊 A 昭和 7 年生まれ(調査時 83 歳)男性 高校卒業後、職業柄退職時まで徳之島を含む鹿児島県内を転々とする。

伊 B 昭和 16 年生まれ(調査時 77 歳)男性 高校卒業後、職業柄退職時まで徳之島を含む鹿児島県内を転々とする。

伊仙方言のアクセント体系は昇り核を持つ 3 型アクセントである。X 型は高起式であり、Y 型と Z 型は低起式である。X 型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、Z 型は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは「語」で、アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-102)は伊仙方言(イ 2 群)のアクセント体系である。(3-103)は伊仙方言のアクセント型別の語例を示したものである。

(3-102) 伊仙の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○Λ;	○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	[○Λ;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	[○Λ;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z 型 (-2) 低起式	基底				○○[○○
	表層単独				○○[○○
	1 モーラ助詞付き				○○[○○△
	2 モーラ助詞付き				○○[○○△△

(3-103) 伊仙アクセントの型別語例

伊仙		1	2	3	4
X 型	表層単独	ʔju (魚)	kadzī (風)	tata\mī (畳)	kuRnʉtsī (九つ)
	-nu(が(の))	ʔju\ʉnu	kadzī\ʉnu	tatamī\ʉnu	kuRnʉtsīnu
	-kara(から)	ʔjuka\ra	kadzīka\ra	tatamīka\ra	kuRnʉtsīkara
Y 型	表層単独	[kīΛ; (木)	ni[cja (土)	usa[gi (兎)	noRgi[ri (鋸)
	-nu(が(の))	[kī;Λnu	ni[cjanu	usa[gi\ʉnu	noRgi[ri\ʉnu
	-kara(から)	[kī;Λkara	ni[cjakara	usa[gi\kara	noRgi[rika\ra
Z 型	表層単独				sīti[mī\ʉti (朝)
	-nu(が(の))				sīti[mī\ʉtinu
	-kara(から)				sīti[mī\ʉtikara

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では面縄の語例の中で、特徴的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-104)の語例から見ていくことにする。

(3-104)

a.	土	Y2	ni[cja	ni[cjanu	ni[cjakara	(伊仙)
	腹	Y2	wa[ta	wa[tanu	wa[taka\ra	(伊仙)
b.	涙	Y2	na[da / <u>na[da/</u> :	na[danu	na[daka\ra	(伊仙)
	肉	Y2	si[si / <u>si[si/</u> :	si[sinu	si[sikara	(伊仙)

(3-104a)の「土」と「腹」は後ろから1番目(語末)のモーラに昇り核を持ち実際のピッチ上昇もアクセント核の位置で現れ、ピッチパターンはLHになる(○[○])。これが(3-103)の語例で見たY2の代表的なピッチパターンである。一方、(3-104b)は(3-104a)のピッチパターンと共に、アクセント核が置かれるモーラの後ろに/:/が現れ、アクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇が観察される例である。「涙」と「肉」の表層単独の場合、アクセント核が置かれる/da/と/si/の後ろに/:/が現れ、アクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇が観察される。この場合ピッチパターンはLLHになる(○[○/]). これは、アクセント核(昇り核)でピッチが上昇する際に、通常の1モーラ分の長さより音価が長くなる音声的な現象に起因するものと考えられる。語末に現れる/:/の長さは半長から1モーラ分の長さ([:]~[:])で観察される。(3-104b)で見られる/○[○/:/のようなピッチパターンは徳之島諸方言の中ではイ群の手々、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄方言でも観察されるものであり、これらの方言では/○[○/と/○[○/:/はあくまでもY2の音声的なバリエーションに過ぎない。そして以下で見る(3-105)と(3-106)は、徳之島諸方言で広く観察される、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという音声的傾向の影響で例外的なピッチパターンが現れると考えられる例である。まず、長母音が関係する(3-105)のY1の語例から説明する。

(3-105)

a.	蛸	Y1	[to/;	<u>[to;/nu</u>	<u>[to;/kara</u>	(伊仙)
	木	Y1	[ki/;	<u>[ki;/nu</u>	<u>[ki;/kara</u>	(伊仙)
	目	Y1	[mi/;	<u>[mi;/nu</u>	<u>[mi;/ka\ra</u>	(伊仙)
b.	帆	Y1	[hu/;	<u>[hu;/nu</u> / [hu/;\nu	-	(伊仙)

(3-102)で見るように、伊仙方言のY1の基本的なピッチパターンはモーラ目の母音を伸ばして、語の長さを2モーラにしつつ、後ろから数えて1モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するというものである。表層単独の場合のピッチパターンはLHになる。伊仙方言は「語」をドメインとするため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく2モーラ目の/:/から上昇するピッチパターンが現れるはずである。しかし、(3-105a)の「蛸」「木」「目」の例に助詞の/nu/と/kara/を付けた場合に、/[to;/nu/(蛸が)と/[to;/kara/(蛸から)、/[ki;/nu/(木が)と/[ki;/kara/(木から)、/[mi;/nu/(目が)と/[mi;/ka\ra/(目から)のように

/nu/と/ka/の前でピッチが上昇し、それぞれの語の初頭音節/[to;]/[ki;]/[mi;]は LL で現れる。これは、前述した特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。(3-105b)の「帆」に助詞の/nu/を付けた場合には、/[hu/;Nnu/(帆が)のような Y1 の基本的なピッチパターンと共に、/[hu;Nnu/のように、/[hu;]が HH で現れるパターンが見られる。これも、(3-105a)で説明したのと同じ音声的傾向によって例外的なピッチパターンが現れ、結果的に助詞/nu/を付けた場合のピッチパターンが Y1 と X1 で揺れているものと考えられる。通時的に上記のような音声的傾向が進むと、結果として Y1/[○/は X1/○/に中和すると考えられる。伊仙方言の Y1 では、(3-105b)を除き、助詞を付けた場合のピッチパターンがすべて(3-105a)の下線部のようなピッチパターンになる。

アクセントドメインについてだが、Y1 だけみると、「語」がドメインである決定的な証拠がないことは認めざるをえない。同じく Y 型の Y2 と Y3 が「語」をドメインとすること、また、同方言で「文節」をドメインとする W 型(“+3”)には分析できないことから、Y1 も「語」ドメイン(+音声的傾向)で分析しているが、共時的に Y 型のなかで Y1 だけが「文節」ドメインである可能性が論理的には残っている。W 型に関しては、3.6.2 節にて後述する。

続いての(3-106)は語末に撥音がある Y2 と Y3 の語のピッチパターンに前述した音声的傾向が影響していると考えられる例である。

(3-106)

a.	着物	Y2	ki[N	<u>ki[N/nu</u>	<u>ki[N/ka\ra</u>	(伊仙)
	耳	Y2	mi[N	<u>mi[N/nu</u>	<u>mi[N/ka\ra</u>	(伊仙)
	薪	Y2	to[N	<u>to[N/nu</u>	to[Nkara	(伊仙)
				/ to[Nnu\:		
b.	蚊	Y3	gadza[N	gadza[Nnu	<u>ga/dza[Nka\ra</u>	(伊仙)
				/ gadza[N/nu	/ gadza[Nka\ra	
	とさか・	Y3	<u>ka/ga[N</u>	<u>ka/ga[Nnu</u>	<u>kaga[N/ka\ra</u>	(伊仙)
	たてがみ					
	みかん	Y3	<u>?ku/ni[N</u>	<u>?ku/ni[Nnu</u>	-	(伊仙)
				/ ?kuni[N/nu		
	苺	Y3	icju[N	<u>icju[N/nu</u>	<u>icju[N/ka\ra</u>	(伊仙)

(3-106a)は語末に/N/がある Y2 の例であり、(3-106b)は語末に/N/がある Y3 の例である。以下では下線を引いた語例と波線を引いた語例に注目しつつ説明する。

(3-102)の伊仙方言の Y 型の基本的なピッチパターンは、後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち、アクセント核が置かれたモーラの前でピッチが上昇する。伊仙方言は「語」をドメインとするため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく、語の後ろから 1 番

目(語末)のモーラである/N/の前から上昇するピッチパターンが現れるはずである。しかし、(3-106)の語例では、例外的なピッチパターンが現れる。まず、(3-106)の下線を引いた語例について説明する。(3-106a)の/to[N/nu/(薪が)、(3-106b)の/ga/dza[Nka\ra/(蚊から)、/ka/ga[N/(とさか・たてがみ)、/ka/ga[Nnu/(とさか・たてがみが)、/?ku/ni[N/(みかん)、/?ku/ni[Nnu/(みかんが)はすべて、アクセント核の位置より 1 モーラ前からピッチが上昇する語例で、/N/を含む音節は HH で現れる。次に、(3-106)の波線を引いた語例を見る。(3-106a) の /ki[N/nu/(着物が)、/ki[N/ka\ra/(着物から)、/mi[N/nu/(耳が)、/mi[N/ka\ra/(耳から)と(3-106b)の/gadza[N/nu/(蚊から)、/kaga[N/ka\ra/(とさか・たてがみから)、/?kuni[N/nu/(みかんが)、/icju[N/nu/(苺が)、/icju[N/ka\ra/(苺から)はすべて、アクセント核の位置より 1 モーラ後ろからピッチが上昇する語例で、/N/を含む音節は LL で現れる。(3-106)の下線部と波線部はピッチが上昇する位置は異なるが、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が反映されたものと考えられるという点で共通している。前述したように、このような音声的傾向は徳之島諸方言で広く見られるものである。

3.5 イ 3 群の名詞アクセント体系



図 3-5 イ 3 群に属する集落の位置(灰色塗り)

イ 3 群に該当する地域は母間と井之川である。最初にイ 3 群の名詞アクセント体系から説明する。(3-107)は母間と井之川の名詞アクセント体系である。イ 3 群の名詞アクセントは昇り核を持つ 3 型アクセントである。X 型は高起式であり、Y 型と Z 型は低起式である。X 型は無核でアクセント核を持たない(0)。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(-1)、Z 型は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ(-2)。ドメインは基本的には「語」であるが、方言によっては、フリーバリエーションとして、助詞にピッチ上昇がずれ込むパターンもある。アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。イ 1 群 (3.3 節) とイ 2 群 (3.4 節) のアクセント体系と類似しているが、イ 3 群はイ 1 群からみて、Y1 と Z2 を持たないアクセント体系である。

(3-107) 母間、井之川の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式	基底		○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独		○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き		○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き		○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z 型 (-2) 低起式	基底			○[○○	○○[○○
	表層単独			○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き			○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き			○[○○△△	○○[○○△△

3.5.1 徳之島町母間の共時的アクセント

徳之島町母間(ぼま)は徳之島の東部、徳之島町の中央部に位置する集落である。母間は細かく言うと四つの集落で構成されており、海岸線にそって南から池間(いけま)、反川(たんかわ)、大当(おおあたり)、花時名(けときな)の順に集落が連なっている。母間の人口は 2021 年 9 月の時点で、4 つの集落を合わせて 774 人であり、そのうち母間方言の話者であると考えられる 60 歳以上の人口は 469 人である。母間と括られてはいるが、集落ごとに細かな方言差はあるようである。本節では母間の四つの集落のうち、大当の名詞アクセントを中心に記述する。本章で扱うデータは 2015 年 1 月と 2017 年 2 月に著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査した、220 語とその助詞付きである(Appendix 13 を参照)。インフォーマントは(3-108)の通りである。

母間方言の調査では、2014 年に母 A から名詞のアクセントと名詞に助詞 nu(が、の)を付けたアクセントを調査した後、そのデータを元に一部の語彙を抜粋し、2017 年に母 B に名詞のアクセントと助詞 nu(が、の)を付けたアクセントが母 A の発音と一致することを確認した上で、kara(から)を付けたアクセントを追加で調査した。そのため、本稿の資料では母間の助詞/kara/を付けた場合の調査データが他の徳之島諸方言に比べ少ない。

(3-108) 母 A 昭和 13 年生まれ(調査時 75 歳) 女性 外住歴 12 年

母 B 昭和 12 年生まれ(調査時 79 歳) 女性 生え抜き

母間方言のアクセント体系は 3.5 節で前述したように、昇り核を持つ 3 型アクセントで

ある。X型は高起式であり、Y型とZ型は低起式である。X型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y型は後ろから1番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、Z型は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは「語」で、アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-107)の母間方言を含むイ3群のアクセント体系を(3-109)にあらためて示す。(3-110)は母間方言のアクセント型別の語例を示したものである。なお、Y4については存在を確認できていない。

(3-109(=3-107)) 母間、井之川の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X型 (0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y型 (-1) 低起式	基底		○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独		○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き		○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き		○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z型 (-2) 低起式	基底			○[○○	○○[○○
	表層単独			○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き			○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き			○[○○△△	○○[○○△△

(3-110) 母間アクセントの型別語例

母間		1	2	3	4
X型	表層単独	tī(手)	hu\ñi(骨)	usagi(兎)	uQkaN(頭)
	-nu(が(の))	tī\ñu	hu\ñinu	usaginu	uQkaN\ñu
	-kara(から)	tī:\kara	hu\ñikara	usa\gikara	uQkaNkara
Y型	表層単独		ta[nī(種)	kuju[mi(暦)	(○○○[○)
	-nu(が(の))		ta[nī\ñu	kuju[mi\ñu	(○○○[○△)
	-kara(から)		ta[nīkara	kuju[mi\kara	(○○○[○△△)
Z型	表層単独			ka[ra\ɖzi(髪)	sīti[mī\ɖti(朝)
	-nu(が(の))			ka[ra\ɖzinu	sīti[mī\ɖtinu
	-kara(から)			ka[ra\ɖzikara	sīti[mī\ɖtikara

母間方言の調査データには他の徳之島諸方言とは違い、追加説明が必要な例外的な語例ないしピッチパターンは観察されなかった。

3.5.2 徳之島町井之川の共時的アクセント

徳之島町井之川(いのかわ)は徳之島の東部、徳之島町の中央部に位置する集落である。井之川の人口は2021年9月の時点で369人であり、そのうち井之川方言の話者であると考えられる60歳以上の人口は247人である。本節で扱うデータは2013年9月の著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、223語とその助詞付きである(Appendix 14を参照)。インフォーマントは(3-111)の通りである。

(3-111) 井 A 昭和5年生まれ(調査時83歳)男性 高校卒業後、職業柄退職時まで徳之島を含む鹿児島県内を転々とする。

井之川方言のアクセント体系は3.5節で前述したように、昇り核を持つ3型アクセントである。X型は高起式であり、Y型とZ型は低起式である。X型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y型は後ろから1番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、Z型は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは「語」で、アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-107)の井之川方言を含むイ3群のアクセント体系を(3-112)にあらためて示す。(3-113)は井之川方言のアクセント型別の語例を示したものである。なお、Y4については存在を確認できていない。

(3-112(=3-107)) 母間、井之川の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X型(0) 高起式	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y型(-1) 低起式	基底		○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独		○[○	○○[○	○○○[○
	1モーラ助詞付き		○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2モーラ助詞付き		○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
Z型(-2) 低起式	基底			○[○○	○○[○○
	表層単独			○[○○	○○[○○
	1モーラ助詞付き			○[○○△	○○[○○△
	2モーラ助詞付き			○[○○△△	○○[○○△△

(3-113) 井之川アクセントの型別語例

井之川		1	2	3	4
X 型	表層単独	ha(歯)	ha\ra(柱)	aNdza(下駄)	aRtu\ki(暁)
	-nu(が(の))	ha\neu	ha\ranu	aNdza\neu	aRtu\kinu
	-kara(から)	ha\kara	ha\rakara	aNdzaka\ra	aRtu\kikara
Y 型	表層単独		ta[ni(種)	kibu[si(煙)	(○○○[○])
	-nu(が(の))		ta[ninu	kibu[sinu	(○○○[○△])
	-kara(から)		ta[nika\ra	kibu[sikara	(○○○[○△△])
Z 型	表層単独			ni[giri(右)	noR[giri(鋸)
	-nu(が(の))			ni[girinu	noR[girinu / noR[giri\neu
	-kara(から)			ni[girikara	noR[girika\ra

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。(3-114)は/Q/を含む4モーラの語で、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向により、例外的なピッチパターンを見せると考えられる例である

(3-114)

親子 Z4 u/ja[Q\kwa u/ja[Q\kwa nu u/ja[Q\kwakara (井之川)

(3-114)の「親子」は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つZ型(Z4)であって、実際のピッチパターンが(/Q/の一つ前の)後ろから3番目のモーラにあたる/ja/の前から上昇しているものであると考える。この場合、/u/ja[Q\kwa/(親子)の/Q/を含む音節である/ja[Q/はHHで現れる。特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにする音声的傾向は徳之島諸方言において広く観察されるものである。

上の(3-114)はピッチの上昇位置がアクセント核の位置(すなわち/Q/)と一致しなくても、アクセント型自体の中和は偶然にして起きない環境にあったが、後ろから2番目に促音/Q/を含むZ型の語で同様の音声的傾向が現れる(現れた)とすると、多くの場合は、X型もしくはY型と中和し区別がつかなくなる(通時的に言えば合流)。例えば(3-115)の「袋」と「火」は両方ともC系列の語であり、系列別語彙の考え方に基づく共時的なアクセント型としてZ型が予測される語である。「袋」と「火」は元々Z型(Z3)の/○[Q○/であったと考えられる語の単独形が、音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により、促音/Q/を含む語頭音節がHHで発音されるようになったと考えられる例である。結果的に「袋」と「火」はX型に中和したと考えられる。

(3-115)

袋	X3	huQ\ku	huQ\kunu	huQ\kukara	(井之川)
火	X3	?maQ\cji	?maQ\cjinu	?maQ\cjikara	(井之川)

なお、(3-115)の「親子」は手々方言(3-36)、山方言(3-48)、轟木方言(3-54)、西阿木名方言(3-76)、阿権方言(3-85)、亀津方言(3-99)でも同じピッチパターンで現れ、徳之島諸方言において、Z型の語だが表層のピッチパターンが例外的なものとして分析される代表的な語例である。

3.6 ロ群の名詞アクセント体系

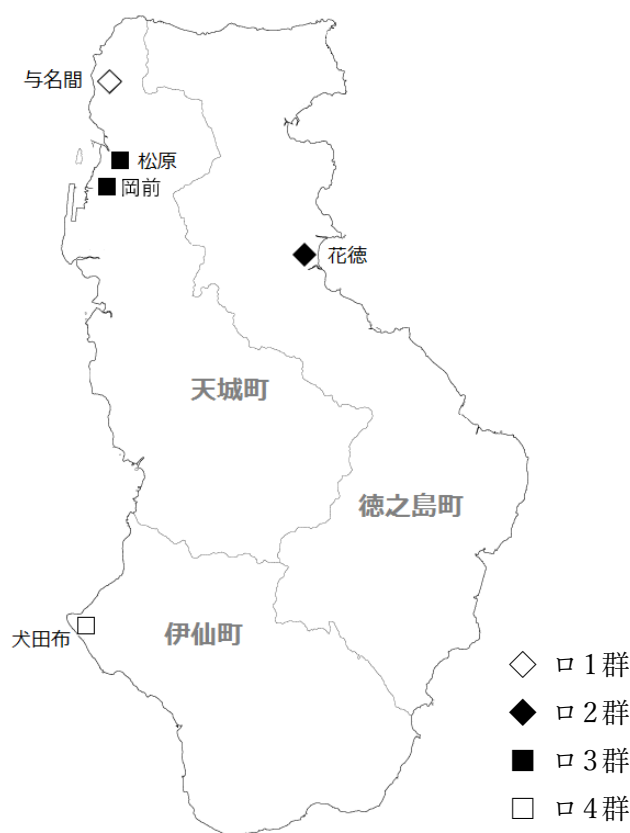


図 3-6 ロ群に属する集落の位置

ロ群は四つのタイプの 4 型アクセントを持つ方言を一つの群としてまとめたものである。ロ群に該当する地域は与名間、花徳、松原、岡前、犬田布(當原)の 5 集落である。ロ群の下位区分はアクセント体系に Z2、Z3 が有るか否かと、W 型のアクセントドメインが「語」か「文節」であるかを基準に区分している。Z2、Z3 が有るか否かを基準に分けると、ロ 1 群と、ロ 2 群は Z2、Z3 があるアクセント体系で、ロ 3 群はロ 1 群のアクセント体系から見て Z2 がない体系、そして、ロ 4 群は、ロ 1 群のアクセント体系から見て Z2 と Z3 がないアクセント体系である。また、ロ群に特徴的なアクセント型として W 型(“+3”)があるのだが、この型のアクセントドメインが「語」か「文節」であるかを基準に分けると、ロ 1 群の W 型は「語」をドメインとする体系であり、ロ 2 群、ロ 3 群、ロ 4 群は「文節」をドメインとする体系である。以上の基準で分けたロ群について、集落名でいうと与名間(ロ 1 群)、花徳(ロ 2 群)、松原、岡前(ロ 3 群)、犬田布(當原)(ロ 4 群)の 4 つのグループに分けることができ、ロ群の中では松原と岡前だけが同じアクセント体系を持っていると考えられる。

ロ群の名詞アクセント体系を包括的に説明する。ロ群の名詞アクセントは昇り核を持つ 4 型アクセントである。X 型は高起式であり、Y 型と W 型、Z 型は低起式である。X 型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち

(“-1”)、W 型は前から数えて 3 番目のモーラに昇り核を持ち(“+3”)、そして、Z 型は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは基本的には「語」であるが、方言によっては、フリーバリエーションとして、助詞にピッチ上昇がずれ込むパターンもある。W 型の場合、ロ 1 群は「語」を、ロ 2 群、ロ 3 群、ロ 4 群は「文節」をドメインとする。アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。

ロ群は 4 型アクセント体系を持つが、厳密にはロ 1 群とロ 2 群でのみ、基底 2 モーラ語で 4 つのアクセント型の対立を持つ。ロ 3 群、ロ 4 群のアクセント体系は、ロ 1 群とロ 2 群の体系から通時的変遷の結果、Z2 もしくは Z3 が他の型に中和したことで出来上がったと考えられる体系で、厳密にいうと、体系内で 4 つのアクセント型の対立を直接観察することのできない変則的な 4 型アクセント体系であると言える。徳之島諸方言のアクセントの通時的変遷については第 4 章を参照していただきたい。

3.6.1 Z2 と Y1 の解釈

ロ群に属する諸方言で Z2 がある方言は与名間方言(ロ 1 群)と花徳方言(ロ 2 群)である。Y1 はロ群のすべてのロ群に属する諸方言にある。Z2 と Y1 のピッチパターンについては、イ群(3.2 節)で説明したものと同じであるが、あらためて、ここで簡単な説明をしておくことにする。

Z 型は昇り核が後ろから 2 番目に来る型であり、Z2 の基底で昇り核は語頭に付いている([○○])。しかし、Z2 の昇り核の位置でピッチが上昇すると X2 と表層でのピッチパターン同じになってしまう。本稿では X2 と Z2 の中和を避けるために、Z2 が 1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 3 モーラにしつつ、後ろから数えて 2 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチ上昇している([○/;○])と考える。Z2 の 2 モーラ目にある、規則的かつ義務的に出現する母音の伸びを /;/ で記す。Z2 で現れる /;/ は、(3-5)で前述した「基底にあるアクセント情報に関係して表層に生じたと考えられる母音の伸び」に当たるもので、表層単独で発音された場合と同じく、助詞付きの場合も必ず 2 モーラ目に母音の伸びが生じ、その前でピッチの上昇が起こる。Z 型は X 型と違い低起式であるので、表層単独の場合の Z2 の音調は LHL もしくは LHH になる。与名間方言(ロ 1 群)と花徳方言(ロ 2 群)の Z2 の例を(3-116)に示す。

(3-116) Z2 の語例

卵	Z2	[ku/;\\ga	[ku/;\\ganu	[ku/;\\gakara	(与名間)
太陽	Z2	[ti/;\\da	[ti/;\\danu	[ti/;\\dakara	(与名間)
蓬	Z2	[hu/;\\cji	[hu/;\\cjinu	[hu/;\\cijjuka	(花徳)
来年	Z2	[ja/;\\ne	[ja/;\\nenu	[ja/;\\nejuka	(花徳)

3.3.1.1 節では、イ 1 群の轟木方言の複合語アクセントの例から、①Z2 の 2 モーラ目に現

れる母音の伸びが、Z2 が複合語の一部になった場合には現れないことから、Z2 の 2 モーラ目の母音の伸びは/R/ではないということ、また、②Z2 が X2 と中和しない環境下(すなわち、複合語の一部になった場合)では Z2 に母音の伸びが現れないことから、Z2 の 2 モーラ目の母音の伸びが、X2 と Z2 の中和を避けるために生じたと考えられる母音の伸び(/;/)であることを述べた。与名間方言と花徳方言では轟木で行ったような体系的な複合語アクセント調査は行っていないが、花徳の調査の過程で得られた一部の複合語の例から、花徳方言の Z2 も轟木方言と同じく基底では 2 モーラ語であることを確認できる(3-117)。

(3-117)

Z2 の語	複合語	
[na/;]ba (きのこ)	<u>naba</u> /dzi\ru (きのこ汁)	(花徳)
[ju/;]nī (雲丹)	ʔkwa:ju <u>nigwa</u> (小さい雲丹) ³⁶	(花徳)

(3-117)の下線部を見ると、Z2 の 2 モーラ目に出現する母音の伸びが複合語の一部になった時には現れないことが分かる。環境によって長母音の現れにバリエーションがあることは、(3-117)の語が基底から 3 モーラ語ではないという証拠であり、基底では 2 モーラである語が何らかの原因によって 3 モーラに引き伸ばされたことを示唆している。そして、その原因というのは、轟木方言と同じく表層で X2 と中和しないようにすることであると本稿は考える。与名間方言の Z2 においても同じ理由で 2 モーラ目に/;/が生じたであろうと推測できるが、これらの方言の Z2 に関する具体的な調査は今後、追加調査が求められる。

Y1 は 1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、後ろから数えて 1 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するピッチパターンを持つ。表層単独の場合の音調は LH になる。Y1 のピッチパターンは前述した Z2 の前半(1 モーラと 2 モーラ目にある母音の伸び)と類似している。なお、このような Y1 のピッチパターンは口群のみならず、徳之島諸方言全体で広く観察されるものである。(3-118)に口群での Y1 の例を示す。

(3-118) Y1 の語例

木	Y1	[kī/;	[kī/;\nu	[kī;/ka\ra	(与名間)
目	Y1	[mī/;	[mī/;\nu	-	(花徳)
手	Y1	[tī/;	[tī/;\nu	[tī;/kara	(松原)
家	Y1	[ja/;	[ja/;\nu	[ja;/ka\ra	(岡前)
潮	Y1	[sju/;	[sju/;\ga	[sju;/ka\ra	(犬田布)

Y1 の 2 モーラ目に基底にはない規則的かつ義務的な母音の伸びが見られるのは、Z2 と

³⁶ gwa は指小辞

同じく表層でのアクセント型の中和を避けるために生じたものと解釈できる。Y型は後ろから1番目(語末)のモーラに昇り核を持つ型で、Y1の基底で昇り核は語頭に付いている([○])。しかし、Y1の昇り核の位置でピッチが上昇すると、表層形がX1と同じ/H/になってしまう。X型との中和を避けるために、Y1が1モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを2モーラにしつつ、後ろから数えて1モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇する([○/])といったピッチパターンを持つと考えられる。Y1のドメインは「語」であるため、助詞付きの場合も、表層単独の場合と同じく必ず1モーラ目の後ろに母音の伸びが生じ、その前でピッチ上昇するピッチパターンになるはずであるが、(3-118)の助詞付きは、実際にピッチが上昇する位置が、予想されるピッチ上昇の位置と異なるピッチパターンも見られる。このような例に関しては各方言のアクセント記述を参照していただきたい。

口群のY1に関しても3.3.1.1節のような体系的な複合語の調査を行うことができなかったが、花徳と犬田布(當原)の調査の過程で得られた一部の複合語の例から、Y1が基底では1モーラ語であることを確認できる。花徳と犬田布(當原)以外の口群に属する方言でも同じであろうと推測できるが、これに関しても今後、追加調査が求められる。(3-119)は花徳と犬田布(當原)の調査で得られたY1を含む複合語の例である。

(3-119)

Y1の語	複合語	
[ha/; (葉)]	a:ha (赤い葉) kuru <u>ha</u> (黒い葉)	(花徳)
[sju/; (下)]	juka <u>sja</u> (床下)	(花徳)
[ki/; (木)]	a:gi (赤木)	(犬田布)
[ju/; (湯)]	ji:ju (良い湯)	(犬田布)

(3-119)の下線部を見ると、Y1の2モーラ目に出現する規則的かつ義務的な母音の伸び/;/が複合語の一部になった時には現れないことが分かる。Z2のところでも述べたように、環境によって長母音の現れにバリエーションがあることは、(3-119)の語が基底から2モーラ語ではないという証拠であり、基底では1モーラである語が何らかの理由によって2モーラに引き伸ばされたことを示唆している。そして、その理由は表層でX1との中和を避けるためであると本稿は考える。

3.6.2 W型の解釈

口群に特徴的に見られるW型は前から3番目のモーラに昇り核を持つアクセント型である。口群はX型、Y型、W型、Z型の4つの型を持つのであるが、前述したアクセント型の定義からわかるようにW3とY3が、そしてW4とZ4が中和する。具体的に説明すると、W3は前から3番目のモーラにアクセント核が置かれ(○○[○])、Y3はドメインである「語」の後ろから1番目のモーラ(語末)にアクセント核が置かれる(○○[○])。結果的にW3とY3

のアクセント核が置かれる位置が同じになり、この二つは中和する。また、W4 は前から 3 番目のモーラにアクセント核が置かれ(〇〇[〇〇])、Z4 はドメインである「語」の後ろから 2 番目のモーラにアクセント核が置かれる(〇〇[〇〇])。Y4 と Z4 のアクセント核が置かれる位置が同じになり、W4 と Z4 が中和する³⁷。

W1 はドメインが「語」である与名間方言の場合、アクセント核を実現するためのモーラ数が足りないため存在しないものと考えられるが、ドメインが「文節」であると考えられる諸方言においても W1 は現れない。具体的に説明すると、ドメインが「文節」である W1 に 2 モーラ助詞を付けた場合に予想されるピッチパターンは/〇△[△/であるが、このような語例は口群に所属する方言では見つかっていない。結果的に、本稿のデータにおいて、口群の W 型として他のアクセント型と明確に区別されるのは W2 のみということになる。

W2 のピッチパターンは(3-120)に示すように、各方言のドメインの違いなどによって多少異なる。各方言での W 型のドメインを「」に入れて表す。

(3-120) 口群の W2 のピッチパターン³⁸

	与名間「語」	松原、岡前「文節」	花徳、犬田布(當原)「文節」
基底	〇〇[	〇〇[	〇〇[
表層単独	〇〇[;	〇〇[;	〇△〇[~ 〇〇[;
1 モーラ助詞付き	〇〇[;△	〇〇[△	〇〇[△
2 モーラ助詞付き	<u>〇〇[△△</u>	〇〇[△△	〇〇[△△

W 型は前から 3 番目のモーラに昇り核を持つ型で、W2 のアクセント核は 2 モーラ目の後ろ(=3 モーラ目の前)に置かれている。W2 の表層単独の場合、基底にあるアクセント核を表層で実現するために必要なモーラ数が足りないため、以下のようなピッチパターンになると考えられる。一つ目は、W2 の 2 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 3 モーラにしつつ、前から数えて 3 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇する(〇〇[;)といったピッチパターンである。このパターンは与名間、松原、岡前方言で観察される。二つ目は、最も右である語末モーラの前でピッチが上昇するといったピッチパターンである(〇△〇[)。こ

³⁷ 3 モーラ以上の語の場合、W 型(“+3”)のドメインが、「語」であっても、「文節」であっても、アクセント核は助詞ではなく語中にあるため、ドメインに関係なく口群の W3 と Y3、W4 と Z4 は中和する。

³⁸ /〇〇[/の語末モーラの後ろに付いている [は、基底でアクセント核が前から数えて 3 モーラ目にあることを示すものである。W2 の基底形が 3 モーラ以下であるため臨時的に語末に [を付ける。W2 の基底形の長さが 3 モーラに満たなくとも、語自体には依然として「W 型」という“タグ”が付いているものとする。W 型の語には“+3”の位置に昇り核を置くというルールがあるため、語の 2 モーラ目の母音を伸ばし語の長さを補うか、ドメインが「文節」である方言で、語に助詞が付き文節全体の長さが 3 モーラ以上になった場合に、この昇り核の位置でピッチが上昇する。本文で述べた通り、2 モーラ目の母音を伸ばさない傾向が強い方言に置いては、/〇△〇[/のように最も右である語末モーラの前でピッチが上昇する。

のパターンは花徳と犬田布(當原)で観察されるもので、花徳と犬田布(當原)の両方で/○○[;と/○Λ○[/がフリーバリエーションで現れる。助詞付きの場合は、ドメインが「語」である与名間方言と、「文節」である松原、岡前、花徳、犬田布(當原)方言で差があり、1 モーラ助詞付きのピッチパターンは、与名間方言は/○○[;△/で、松原、岡前、花徳、犬田布(當原)方言は/○○[△/で現れる。2 モーラ助詞付きの場合、ドメインが「語」である与名間方言のピッチパターンは/○○[;△△/であると予想されるが、実際に観察されるピッチパターンは/○○[△△/で現れる。これに関しては 3.7 節で詳しく述べる。

通時的観点から見ると、W2(○○[)は Y2 のようなピッチパターン(○[○)から発展したものと考えられる。イ群の手々、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、伊仙方言で観察される Y2 のピッチパターンは、/○[○/のように語末モーラにアクセント核が置かれ、アクセント核の位置でピッチ上昇する基本的なパターンと、/○[○Λ:/のようにアクセント核が置かれる語末の後ろに/;/が現れてアクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇するパターンがフリーバリエーションとして現れる。/○[○Λ:/は、アクセント核(昇り核)でピッチが上昇する際に、通常の 1 モーラ分の長さより音価が長くなる音声的な現象に起因するものと考えられる。これらの方言では/○[○/と/○[○Λ:/はあくまでも Y2 の音声的なバリエーションに過ぎない。しかし、ロ群の諸方言では、/○[○/と/○[○Λ:/ (に起因すると思われる/○○[;/) について、前者は Y2 で、後者は W2 で異なるアクセント型に分類することができる。(3-121)は、与名間、松原、岡前方言でミニマルペアを成す「花」と「鼻」の例である。これらの方言で「花」は W2 で、「鼻」は Y2 に分類される。

(3-121)

a.	花	W2	hana[;	hana[;nu	hana[ka:]ra	(与名間)
	鼻	Y2	ha[na:ˆ	ha[na:ˆnu	ha[na:ˆkara	(与名間)
b.	花	W2	hana[;	hana:[nu	hana[ka]:ra	(松原)
	鼻	Y2	ha[na	ha[nanu	ha[nakara	(松原)
c.	花	W2	hana[;	hana:[nu	hana[ka]:ra	(岡前)
	鼻	Y2	ha[na	ha[na:nu	ha[na:kara	(岡前)

また、系列別語彙の観点からも Y2 と W2 が弁別性のある独立したアクセント型であると言える。例えば、(3-122)与名間方言の場合、Y2 の語例 58 語中 34 語が A 系列の語で、系列の偏りが見られる。また、W2 の語例 27 語中 24 語が B 系列の語で、明らかに B 系列に偏っていることが分かる³⁹。

³⁹ ちなみに、与名間方言の 2 モーラ語は全部で 129 語あり、そのうち A 系列の語が 36 語、B 系列の語が 48 語、C 系列の語が 38 語である。

(3-122) 与名間方言の Y2 と W2 の系列別語数

	A 系列	B 系列	C 系列	系列不明	計
Y2	34	8	11	5	58
W2	1	24	1	1	27

与名間のみならず、口群の諸方言の Y2 と W2 には系列の偏りが観察されるのであるが、これは、特定の語彙グループが何らかの要因によって、グループごとピッチパターンが変化した結果、Y2 もしくは W2 のようなピッチパターンになったことを示唆するものである。徳之島諸方言一般において、A 系列は X 型と密接に関係しており、B 系列は Y 型と密接に関係がある。そのような中で、与名間方言では共時的に X 型になることが期待される語彙グループ(A 系列の語)が Y2 で現れ、共時的に Y 型になることが期待される語彙グループ(B 系列の語)が W2 で現れているのである。W2(○○D)は Y2 のようなピッチパターン(○[○])から発展したものと考えられるが、通時的にみて、祖語の Y2 が Y2 と W2 の二つに分かれたのではなく、Y2 は祖語の X2 から、W2 は祖語の Y2 から変化したものと見ることができる⁴⁰。つまり、Y2 と W2 の語彙というのは通時的にみて祖語の段階から異なるアクセント型を成していたものが玉突き式 (X2⇒Y2⇒W2) の変化をしたと考えられるのである。この点については、徳之島諸方言における通時的変遷に関しての詳しい説明をしている第 4 章を参照していただきたい。

⁴⁰ 本稿の第 4 章では、徳之島祖語の X2 を A 型の基底 2 モーラ語(A2)に、徳之島祖語の Y2 を B 型の基底 2 モーラ語(B2)に言い換えている。なお、徳之島祖語の Z2 は C 型の基底 2 モーラ語(C2)に言い換えている。

3.7 ロ1群の名詞アクセント体系

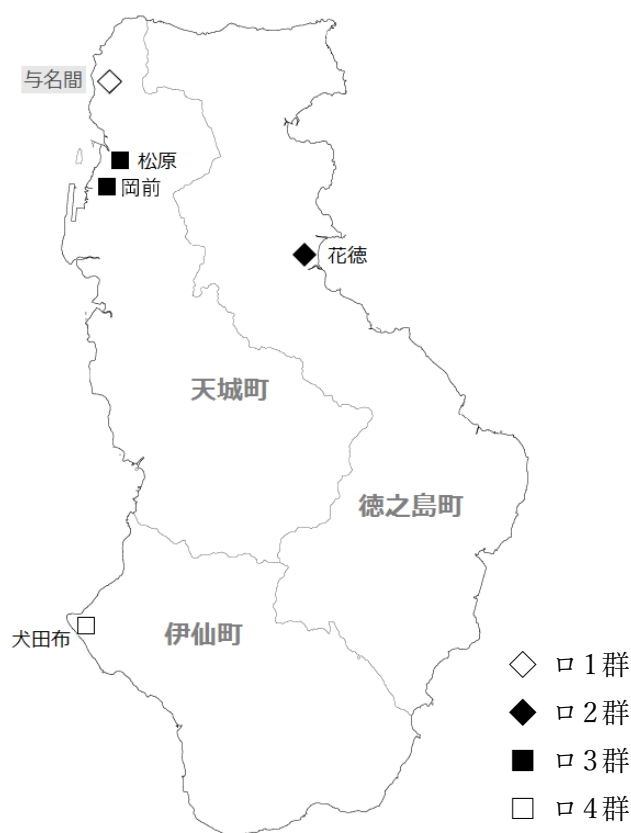


図 3-7 ロ1群(与名間)集落の位置(灰色塗り)

ロ1群に該当する地域は与名間である。ロ1群のアクセントはロ群の中でもアクセント体系にZ2とZ3を持ち、かつ、W型のドメインがX型とY型、Z型と同じく「語」であるアクセント体系である。与名間方言のアクセントについては次節で詳しく説明する。

3.7.1 天城町与名間の共時的アクセント

天城町与名間(よなま)は徳之島の西部、天城町の北部に位置する集落である。与名間の人口は2021年9月の時点で245人であり、そのうち与名間方言の話者であると考えられる60歳以上の人口は113人である。本節で扱うデータは2015年11月の著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、246語とその助詞付きである(Appendix 15を参照)。インフォーマントは(3-123)の通りである。

(3-123) 与 A 昭和22年生まれ(調査時68歳)女性 外住歴4年

与名間方言の名詞アクセントは昇り核を持つ4型アクセントである。X型は高起式であ

り、Y 型と W 型、Z 型は低起式である。X 型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、W 型は前から 3 番目のモーラに昇り核を持ち(“+3”)、そして、Z 型は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。ドメインは基本的には「語」であるが、助詞にピッチ上昇がずれ込むパターンも見られる。他の徳之島諸方言を同じく、与名間方言においてもアクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。3.6 節で前述したように、アクセント型の定義からみて W3 と Y3 が、そして W4 と Z4 が中和する。本節では通時的観点から W3 と Y3 は Y3 で、W4 と Z4 は Z4 で代表して記述する。(3-124)に与名間方言(ロ 1 群)のアクセント体系を示す。(3-125)は与名間方言のアクセント型別の語例を示したものである。なお、Y4 については存在を確認できていない。

(3-124) 与名間の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式 「語」	基底		○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式 「語」	基底	[○	○[○	○○[○	(○○○[○)
	表層単独	[○△;	○[○	○○[○	(○○○[○)
	1 モーラ助詞付き	[○△;△	○[○△	○○[○△	(○○○[○△)
	2 モーラ助詞付き	[○△;△△	○[○△△	○○[○△△	(○○○[○△△)
W 型 (+3) 低起式 「語」	基底		○○[		
	表層単独		○○[;		
	1 モーラ助詞付き		○○[;△		
	2 モーラ助詞付き		○○[;△△		
Z 型 (-2) 低起式 「語」	基底		[○○	○[○○	○○[○○
	表層単独		[○△;○	○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き		[○△;○△	○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き		[○△;○△△	○[○○△△	○○[○○△△

(3-125) 与名間アクセントの型別語例

与名間		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式 「語」	表層単独	ʔju (魚)	cji:Nju / cji\N:ju (露)	haNmë (食料・主食)	kaminari (雷)
	-nu(が(の))	ʔju:nu	cji\N:junu	haNmënu	kaminarinu
	-kara(から)	ʔju:kara	cji\N:jukara	haNmëkara	kaminarikara
Y 型 (-1) 低起式 「語」	表層単独	[ki/; (木)	ni[gi (棘)	kaga[mi (鏡)	(○○○[○)
	-nu(が(の))	[ki/;\nu	ni[gi:nu	kaga[mi:\nu	(○○○[○△)
	-kara(から)	[ki:/ka\ra	ni[gi:kara	kaga[mika\ra	(○○○[○△△)
W 型 (+3) 低起式 「文節」	表層単独		kabi[; (カビ)		
	-nu(が(の))		kabi[;\nu		
	-kara(から)		kabi[;ka\ra		
Z 型 (-2) 低起式 「語」	表層単独		[ha/;\ma (浜)	ka[mado / ka[ma:do (竈)	situ[mĩ:^\ti (朝)
	-nu(が(の))		[ha/;\manu	ka[ma:donu	situ[mĩ:^\tinu
	-kara(から)		[ha/;\makara	ka[madokara	situ[mĩ:^\tikara

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では与名間の語例の中で、特徴的、または例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-126)と(3-127)の語例から見ていくことにする。(3-126)と(3-127)は、徳之島諸方言にて広く観察される、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向の影響で例外的なピッチパターンが現れると考えられる例である。まず、(3-126)の Y1 の語例から説明する。

(3-126)

- a. 蛸 Y1 [to/; [to/;\nu [to;/ka\ra (与名間)
木 Y1 [ki/; [ki/;\nu [ki;/ka\ra (与名間)
b. 潮・海水 Y1 [sju/; [sju/;\nu [sju;/ka\ra (与名間)

与名間方言の Y1 の基本的なピッチパターンは 1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、後ろから数えて 1 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するというものである。表層単独の場合のピッチパターンは LH になる。与名間方言の Y 型は「語」をドメインとするため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく 2 モーラ目の /:/ から上昇するピッチパターンが現れるはずである。しかし、(3-126a)の「蛸」と「木」の例に助詞の /kara/ を付けた場合に、/[to;/kara/(蛸から)、/[ki;/kara/(木から)のように /nu/ と /ka/ の前でピッチが上昇し、/[to;/ と /ki;/ は LL で現れる。これは、前述した特殊モーラを含む音

節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。一方、(3-126b)の「潮・海水」に助詞の/nu/を付けた場合には、/[sju/ka\ra/ (潮・海水から)のように、/[sju/の後ろにある/;/が現れず、/ka/の前でピッチが上昇するピッチパターンが現れる([○△△])。この(3-126b)のパターンは、Y1 に 2 モーラ助詞を付けた場合に予測されるピッチパターンである×/[○△△/から、(3-126a)の/[to/ka\ra/ (蛸から)および/[ki/ka\ra/ (木から)のようなピッチパターンを経て成立したものと本稿は考えるのだが、この通時的な変遷について以下でもう少し詳しく説明しておく。まず、Y1 の 2 モーラ助詞付きの場合に予想される基本的なピッチパターン×/[○△△/から、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により×/[○△△/の/;/を含む音節(下線部)が LL で発音されるようになり、結果(3-126a)のような/[○△△/になる。アクセント情報に基づき Y1 の語末に生じていた/;/は、/;/の前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになると考えられる。3.1.3.2.1 節で述べたとおり、/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れなくてもよいということになる。以上の過程を経て、Y1 の 2 モーラ助詞付きのピッチパターンは、最終的に(3-126b)のような/[○△△/のようになると考えられる。このような、通時的な変遷を想定すると、(3-126b)の「潮・海水」の例外的なピッチパターンを説明することができる。なお、与名間方言では Y1 に 2 モーラ助詞を付けた場合に予測されるピッチパターンである/[○△△/のようなピッチパターンは観察されず、(3-126)でみた/[○△△/と/[○△△/だけが観察された。

(3-127)は前述した音声的傾向が、語末に/N/がある、Y2 の語のピッチパターンに影響していると考えられる例である。

(3-127)

a.	蚤	Y2	nu[N	nu[N\Nu	nu[N\kara	(与名間)
	薪	Y2	to[N	to[N\Nu	to[Nka\ra	(与名間)
b.	着物	Y2	ki[N	ki[N\Nu	<u>ki[N/ka\ra</u>	(与名間)
	私	Y2	wa[N	wa[Nnu	<u>wa[N/ka\ra</u>	(与名間)
	耳	Y2	mi[N	mi[N\Nu	<u>mi[N/ka\ra</u>	(与名間)

(3-127a)は与名間方言の Y 型の基本的なピッチパターンで、後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち、アクセント核が置かれたモーラの前でピッチが上昇する。(3-127b)は例外的なピッチパターンが現れる語例である。(3-127b)の下線部を見ると、/ki[N/ka\ra/ (着物から)、/wa[N/ka\ra/ (私から)、/mi[N/ka\ra/ (耳から)のようにアクセント核の位置より 1 モーラ後からピッチが上昇する語例で、/N/を含む音節は LL で現れる。特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。

以下に示す(3-128)は W2 の例である。

(3-128)

a.	カビ	W2	kabi[;	kabi[;\nu	kabi[;ka:\ra	(与名間)
b.	花	W2	hana[;	hana[;nu	<u>hana[ka:\ra</u>	(与名間)
	亀	W2	kami[;	kami[;\nu	<u>kami[ka:\ra</u>	(与名間)

与名間方言の W2 の基本的なピッチパターンは 2 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、前から数えて 3 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するというものである。表層単独の場合のピッチパターンは LLH になる。与名間方言の W 型は「語」をドメインとするため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく 3 モーラ目にある /:/ の前から上昇するピッチパターンが現れる。しかし、(3-128b)の「花」と「亀」に助詞の /kara/ を付けた場合に、/hana[ka:\ra/ (花から)、/kami[ka:\ra/ (亀から) のようなパターンがみられる。これは、前述した(3-126b)の「潮・海水」の例と同じような過程で成り立ったピッチパターンと考えられる。(3-128a)で見た W2 の基本的な /○○[;\triangle\triangle/ から、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により /○○[;\triangle\triangle/ の /:/ を含む音節(下線部)が LL で発音されるようになり、結果、 $\times$ /○○[;\triangle\triangle/ になる。アクセント情報に基づき W1 の語末に生じていた /:/ は、 /:/ の前でピッチが上昇しなくなったことによって /:/ に認識されるようになると考えられる。3.1.3.2.1 節で述べたとおり、 /:/ はフリーバリエーションで現れるものであり、 /:/ が現れなくてもよい。以上の過程を経て、W2 の 2 モーラ助詞付きのピッチパターンは、最終的に(3-128b)のような /○○[\triangle\triangle/ になると考えられる。このような、通時的な変遷を想定すると、(3-128b)の「花」「亀」に助詞 /kara/ を付けた場合のピッチパターンが、/hana[ka:\ra/ (花から) および /kami[ka:\ra/ (亀から) になることを説明することができる。与名間方言の W2 に 2 モーラ助詞を付けた場合のピッチパターンは、(3-128a)の「カビ」を除きすべて(3-128b)と同じピッチパターンで現れる。本稿では、(3-126b)と(3-128b)でみた、ピッチの山が助詞の方にずれ込む音声的傾向(あるいは変化)が、通時的に Y2(“-1”)の語が W2(“+3”)へと変わり、また、アクセントのドメインが語から文節へと変化するトリガーとなったと考えている。詳しくは第 4 章通時論を参照して頂きたい。

(3-129)は /Q/ を含む 4 モーラの語で、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向により、例外的なピッチパターンを見せると考えられる例である

(3-129)

親子	Z4	u/ja[Q\kwa	u/ja[Q\kwa nu	u/ja[Q\kwakara	(与名間)
----	----	------------	---------------	----------------	-------

(3-129)の「親子」は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つZ型(Z4)であって、実際のピッチパターンが(/Q/の一つ前の)後ろから3番目のモーラにあたる/ja/の前から上昇しているものであると考える。この場合、/u/ ja[Q]kwa/(親子)の/Q/を含む音節である/ja[Q/はHHで現れる。特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにする音声的傾向は徳之島諸方言において広く観察されるものである。

上の(3-129)はピッチの上昇位置がアクセント核の位置(すなわち/Q/)と一致しなくても、アクセント型自体の中和は偶然にして起きない環境にあったが、後ろから2番目に促音/Q/を含むZ型の語で同様の音声的傾向が現れる(現れた)とすると、多くの場合は、X型もしくはY型と中和し区別がつかなくなる(通時的に言えば合流)。例えば(3-130)の「糸」はC系列の語であり、系列別語彙の考え方に基づくると共時的なアクセント型としてZ型が予測される語である。「糸」は元々Z型(Z3)の/○[Q○/であったと考えられる語の単独形が、音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により、促音/Q/を含む語頭音節がLLで発音されるようになったと考えられる例である。結果的に「糸」はY型に中和したと考えられる。

(3-130)

糸 Y3 iQ[cju\:^ iQ[cju\:^nu iQ[cju\:^kara (与名間)

なお、(3-129)の「親子」はI群の諸方言⁴¹や花徳においても同じピッチパターンで現れ、徳之島諸方言において、Z型の語だが表層のピッチパターンが例外的なものとして分析される代表的な語例である。

⁴¹ 手々方言(3-36)、山方言(3-48)、轟木方言(3-54)、西阿木名方言(3-76)、阿権方言(3-85)、亀津方言(3-99)、井之川方言(3-115)

3.8 ロ 2 群の名詞アクセント体系

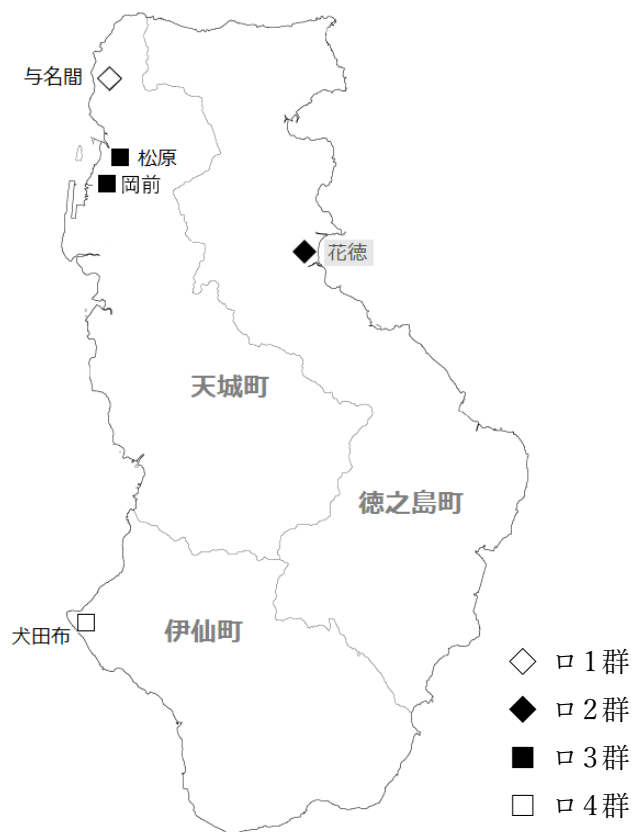


図 3-8 ロ 2 群(花徳)集落の位置(灰色塗り)

ロ 2 群に該当する地域は花徳である。ロ 2 群のアクセントはロ群の中でも Z2 と Z3 を持ち、かつ、W 型のドメインが「文節」であるアクセント体系である。花徳方言のアクセントについては次節で詳しく説明する。

3.8.1 徳之島町花徳の共時的アクセント

徳之島町花徳(けとく)は徳之島の東部、徳之島町の中央部に位置する集落である。花徳の人口は 2021 年 9 月の時点で 652 人であり、そのうち花徳方言の話者であると考えられる 60 歳以上の人口は 496 人である。本節で扱うデータは 2015 年 5 月と 2015 年 7 月、2017 年 2 月の著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、233 語とその助詞付きである(Appendix 16 を参照)。インフォーマントは(3-131)の通りである。主な話者は花 A であり、花 B に補助していただく形で調査を行った。花 A と花 B は親戚関係にある。

花徳方言の調査では、2014 年に名詞のアクセントと名詞に助詞 nu(が、の)を付けたアクセントを調査した後、そのデータを元に一部の語彙を抜粋し、2017 年に kara(から)を付けたアクセントを追加で調査した。そのため、kara(から)を付けた場合の語例が他の徳之島諸方言に比べ少ないのだが、2 モーラ助詞付きの語例として、juka(より)や gadi(まで)を付けた場合のアクセントも調べている。それにより 2 モーラ助詞 kara(から)をつけた場合のアクセントが juka(より)、gadi(まで)を付けた場合のアクセントと同じになることを確認できた。

- (3-131) 花 A 昭和 21 年生まれ(初回調査時 69 歳、2 回目調査時 71 歳) 女性 外住歴 7 年
花 B 昭和 18 年生まれ(初回調査時 72 歳、2 回目調査時 74 歳) 女性 外住歴 7 年

花徳方言の名詞アクセントは昇り核を持つ 4 型アクセントである。X 型は高起式であり、Y 型と W 型、Z 型は低起式である。X 型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持つ(“-1”)。W 型は前から 3 番目のモーラに昇り核を持ち(“+3”)。そして、Z 型は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。アクセントのドメインは、X 型、Y 型、Z 型では「語」で、W 型は「文節」である。3.6 節で前述したように、アクセント型の定義からみて W3 と Y3 が、そして W4 と Z4 が中和する。本節では通時的観点から W3 と Y3 は Y3 で、W4 と Z4 は Z4 で代表し記述する。他の徳之島諸方言を同じく、花徳方言においてもアクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-132)に花徳方言(=ロ 2 群)のアクセント体系を示す。(3-133)は花徳方言のアクセント型別の語例を示したものである。なお、Y4 については存在を確認できていない。

(3-132) 花徳の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式 「語」	基底	○	○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式 「語」	基底	[○	○[○	○○[○	(○○○[○)
	表層単独	[○△;	○[○	○○[○	(○○○[○)
	1 モーラ助詞付き	[○△;△	○[○△	○○[○△	(○○○[○△)
	2 モーラ助詞付き	[○△;△△	○[○△△	○○[○△△	(○○○[○△△)
W 型 (+3) 低起式 「文節」	基底		○○[		
	表層単独		○△○[		
	1 モーラ助詞付き		○○[△		
	2 モーラ助詞付き		○○[△△		
Z 型 (-2) 低起式 「語」	基底		[○○	○[○○	○○[○○
	表層単独		[○△;○	○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き		[○△;○△	○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き		[○△;○△△	○[○○△△	○○[○○△△

(3-133) 花徳アクセントの型別語例

花徳		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式 「語」	表層単独	?wa (豚)	iŋki (息)	oR\sa (あおさ)	aRtu\ki (暁)
	-nu(が(の))	?wa\ŋnu / ?wa:\ŋnu	iŋkinu	oR\sanu	aRtu\kinu
	-kara(から)	?wa:\kara	iŋkikara	oR\sakara	aRtukika\ra
Y 型 (-1) 低起式 「語」	表層単独	[ki/; (木)	ha[na (鼻)	hasa[mi (鋏)	(○○○[○)
	-nu(が(の))	[ki/;\ŋnu	ha[na\ŋnu	hasa[mi\ŋnu	(○○○[○△)
	-kara(から)	[ki;/ka\ra	ha[naka\ra	hasa[mika\ra	(○○○[○△△)
W 型 (+3) 低起式 「文節」	表層単独		i[gi (棘)		
	-nu(が(の))		igi[nu		
	-kara(から)		igi[ka\ra		
Z 型 (-2) 低起式 「語」	表層単独		[ju/;\ni (雲丹)	i[cju\bi (苺)	juna[sa\na (夜中)
	-nu(が(の))		[ju/;\ninu	i[cju\binu	juna[sa\nanu
	-kara(から)		[ju/;\nikara	i[cju\bikara	juna[sanaka\ra

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では花徳方言の語例の中で、特徴的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-134)で Y2 の語例から見ていくことにする。

(3-134)

a.	にんにく	Y2	hu[ru	hu[ru\ɳu	hu[ruga\ɳdi	(花徳)
b.	ほくろ	Y2	a[da / <u>a[da]</u> :	a[da\ɳu	a[daka\ɳra	(花徳)
				/ a[da:\ɳu		
	島	Y2	si[ma / <u>si[ma]</u> :	si[ma\ɳu	si[maka\ɳra	(花徳)

花徳方言の Y2 の基本的なピッチパターンは、後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち、実際のピッチ上昇もアクセント核の位置で現れる。この場合、表層単独のピッチパターンは/hu[ru/(にんにく)のように、LH になる(○[○])。Y 型のドメインは「語」であるため、助詞を付けた場合も表層単独と同じく、/hu[ru\ɳu/(にんにくが)と/hu[ruga\ɳdi/(にんにくから)のように、語の後ろから 1 番目(語末)のモーラの前でピッチが上昇する。(3-134b)は、表層単独の場合に、花徳の Y2 の基本的なピッチパターン(○[○])と共に、/a[da]:(ほくろ)と/si[ma]:(島)のような、アクセント核が置かれるモーラの後ろに/:/が現れ、アクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇するピッチパターンがフリーバリエーションとして現れる。この場合のピッチパターンは LLH になる(○[○]/:)。このような例は徳之島諸方言の中ではイ群の手々、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、伊仙方言とロ群の犬田布(當原)方言でも観察されるものであり、これらの方言において/○[○]/と/○[○]/:は音声的なバリエーションに過ぎない。

一方、(3-135)で見る W 型はドメインである「文節」の、前から数えて 3 番目にあるモーラにアクセント核を置く。3.6.2 節で述べたように、ロ群の W2 の表層単独の場合、W2 の 2 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 3 モーラにしつつ、前から数えて 3 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するピッチパターン(○○[;])と、最も右である語末モーラの前でピッチが上昇するといったピッチパターン(○M○[)で、二通りのピッチパターンが観察される。花徳と犬田布(當原)では、/○M○[/と/○○[;]/の両方がフリーバリエーションで現れる。

(3-135)

a.	酒	W2	sa/ki[	saki[nu	saki[ka\ɳra	(花徳)
b.	星	W2	husi[;	husi[nu	husi[gadi	(花徳)
c.	草履	W2	sa/ba[/ <u>saba</u>];	saba[nu	saba[ka\ɳra	(花徳)
	煤	W2	si/si[/ <u>sisi</u>];	sisi[nu	-	(花徳)
	烏賊	W2	i/kja[/ <u>ikja</u>];	ikja[nu	-	(花徳)

(3-135a)の「酒」は、表層単独が/○△○/で現れる語例であり、(3-135b)の「星」は、表層単独が/○○[/で現れる語例である。(3-135c)は、同一語で○△○/と/○○[/の両方がフリーバリエーションで現れる語例である。

W2 の/○△○/(LH)、/○○[/:(LLH)は、それぞれ(3-134)の Y2 の/○△/(LH)、/○△△/:(LLH)と、基底にあるアクセント核の位置こそ違えど、表層では同じピッチパターンになる。表層単独では W2 と Y2 が中和していると言える。Y2 と W2 は助詞を付けた場合のピッチパターンが異なる。Y2 は「語」の後ろから 1 番目(語末)のモーラの前からピッチが上昇する、/○△△/、/○△△△/のピッチパターンで、W2 は「文節」の前から 3 番目のモーラの前からピッチが上昇する、/○○△/、/○○△△/のピッチパターンで現れ、二つのアクセント型を区別することができる。

(3-136)は、徳之島諸方言にて広く観察される、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向の影響で例外的なピッチパターンが現れると考えられる Y1 の例である。

(3-136)

a.	木	Y1	[kī/;	[kī/;\nu	<u>[kī/ka\ra</u>	(花徳)
	下	Y1	[sju/;	<u>[sju/\nu</u>	<u>[sju/ka\ra</u>	(花徳)
b.	歯	Y1	[ha/;	<u>[ha/\nu</u>	<u>[ha/ka\ra</u>	(花徳)

花徳方言の Y1 の基本的なピッチパターンは 1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、後ろから数えて 1 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するというものである。表層単独の場合のピッチパターンは LH になる。花徳方言の Y 型は「語」をドメインとするため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく 2 モーラ目の/;/から上昇するピッチパターンが現れるはずである。しかし、(3-136a)の「木」と「下」の例の下線部を見ると、助詞/nu/と/kara/を付けた場合に、/[kī/ka\ra/(木から)、/[sju/\nu/(下が)、/[sju/ka\ra/(下から)、のように/nu/と/ka/の前でピッチが上昇し、/[kī/、/[sju/は LL で現れる。これは、前述した特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。一方、(3-136b)の「歯」に助詞/nu/と/kara/を付けた場合には、/[ha/\nu/(歯が)、/[ha/ka\ra/(歯から)のように、/[ha/の後ろにある/;/が現れず、/nu/と/ka/の前でピッチが上昇するピッチパターンが現れる([○△△、[○△△△)。この(3-136b)は、Y1 に助詞を付けた場合に予測されるピッチパターン、×/[○△;/△/と×/[○△;/△△/から、(3-136a)の/[kī/ka\ra/(木から)、/[sju/\nu/(下が)、/[sju/ka\ra/(下から)、のようなピッチパターンを経て成立したものと本稿は考えるのだが、この通時的な変遷について以下でもう少し詳しく説明しておく。まず、Y1 の助詞付きの場合に予想される基本的なピッチパターン×/[○△;/△/と×/[○△;/△△/から、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により×/[○△;/△/と×/[○△;/△△/の

/:/を含む音節(下線部)が LL で発音されるようになり、結果(3-136a)のような/[○;Λ△/と/[○;Λ△△/になる。アクセント情報に基づき Y1 の語末に生じていた/:/は、/:/の前でピッチが上昇しなくなったことによって/:/に認識されるようになると考えられる。3.1.3.2.1 節で述べたとおり、/:/はフリーバリエーションで現れるものであり、/:/が現れなくてもよい。以上の過程を経て、Y1 の 2 モーラ助詞付きのピッチパターンは、最終的に(3-136b)のピッチパターン、/[○Λ△/と/[○Λ△△/になると考えられる。(3-136)では割愛したが、助詞/gadi/と/kara/を付けた場合も、(3-136)と同じピッチパターンが見られる。例えば、(3-136a)の「木」と「下」は/gadi/と/juka/を付けた場合でも、/[kī;Λga\di/(木まで)、/[kī;Λju\ka/(木より)、/[sju;Λga\di/(下まで)、/[sju;Λju\ka/(下より)のように、/ga/と/ju/の前でピッチが上昇し、/[kī;/および/[sju;/の部分は LL で現れるピッチパターンが見られる。また、(3-136b)の/[ha/ka\ra/(歯から)と同じピッチパターンが見られる例としては、/[ha/Λga\di/(葉まで)があり、この例も、前述したような通時的変遷を想定することで説明することができる。

(3-137)は Y2 に、助詞/gadi/と/juka/を付けた場合に例外的なピッチパターンが現れる例である。

(3-137)

a.	花	Y2	ha[na	ha[na\ngu	ha[naga\di	(花徳)
b.	飴	Y2	a[mī	a[mī\ngu	a[mī/Λga\di	(花徳)
	音	Y2	u[tu	u[tu\ngu	u[tu/ju\ka	(花徳)
c.	豆	Y2	ma[mī	ma[mī\ngu	ma[mīju\ka / ma[mī/ju\ka	(花徳)
	麦	Y2	mu[gi	mu[gi\ngu	mu[giju\ka / mu[gi/ju\ka	(花徳)
	草	Y2	ku[sa	ku[sa\ngu	ku[saju\ka / ku[sa/ju\ka	(花徳)

Y2 の基本的なピッチパターンは(3-137a)の「花」に見られるような、後ろから数えて 1 モーラ目(語末)の前からピッチが上昇するというものである。(3-137b)と(3-137c)の下線部は Y2 の語に助詞/gadi/と/juka/を付けた場合に、アクセント核が置かれる位置から 1 モーラ後ろでピッチ上昇が見られる例である。(3-137b)の「飴」は助詞/gadi/を付けた場合に/ga/の前でピッチが上昇するパターンで、「音」は助詞/juka/を付けた場合に/ju/の前でピッチが上昇するパターンである。(3-137c)は「豆」、「麦」、「草」に助詞/juka/を付けた場合、/ma[mīju\ka/(豆から)、/mu[giju\ka/(麦から)、/ku[saju\ka/(草から)のように、後ろから数えて 1 モーラ目(語末)の前からピッチが上昇する Y2 の基本的なピッチパターンと、/ma[mī/ju\ka/(豆から)、/mu[gi/ju\ka/(麦から)、/ku[sa/ju\ka/(草から)のように、アクセント核が置かれる位置から 1 モーラ後ろである/ju/の前でピッチが上昇するパターンがフリーバリエーションで現れる例である。(3-137)の下線部のついては以下のような通時的な変遷の過程を想定することで説明することができる。まず、Y2 の助詞付きの場合に予想される基本的なピッチパターン/○[○△△/から、(3-134)で見たように、アクセント核が置か

れるモーラの後ろ(語末)に/:/が現れ、アクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたって上昇するようになり×/○[○/Δ△/になると仮定する。特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により×/○[○/Δ△/の/:/を含む音節(下線部)が LL で発音されるようになり、×/○[○/Δ△/になる。3.1.3.2.1 節で述べたとおり、/:/はフリーバリエーションで現れるものであり、/:/が現れなくても良い。以上の過程を経て、Y2 の 2 モーラ助詞付きのピッチパターンは、最終的に(3-137)の下線部で見ると○[○/Δ△/のようになると考えられる。結果的に(3-137)の下線部は、W 型の 2 モーラ助詞を付けた場合のピッチパターンと同じになる。このように 2 モーラ助詞付きの場合では発音が Y 型と W 型で揺れているが、単独形と 1 モーラ助詞付きでは発音が(3-132)で示した Y 型のピッチパターンで安定しているため、(3-137) の語例は Y 型 (Y2) に分類できる。

(3-138)

着物 Y2 ki[N ki[N\ɳu ki[N/ga\di (花徳)

(3-138)の/ki[N/ga\di/(着物まで)は、助詞/gadi/を付けた場合に/ga/の前でピッチが上昇し、/ki[N/が LL で現れる(○[○/Δ△)。この撥音を含んだ語例も、前述した、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。(3-139)は/Q/を含む 4 モーラの語で、(3-138)と同じ音声的傾向により、例外的なピッチパターンを見せると考えられる例である

(3-139)

親子 Z4 u/ja[Q\kwa u/ja[Q\kwa nu - (花徳)

(3-139)の「親子」は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ Z 型(Z4)であって、実際のピッチパターンが(/Q/の一つ前の) 後ろから 3 番目のモーラにあたる/ja/の前から上昇しているものであると考える。この場合、/u/ja[Q\kwa/(親子)の/Q/を含む音節である/ja[Q/は HH で現れる。なお、この「親子」はイ群の諸方言や与名間においても同じピッチパターンで現れ、徳之島諸方言において、Z 型の語だが表層のピッチパターンが例外的なものとして分析される代表的な語例である。

上の (3-139) はピッチの上昇位置がアクセント核の位置(すなわち/Q/)と一致しなくても、アクセント型自体の中和は偶然にして起きない環境にあったが、後ろから 2 番目に促音/Q/を含む Z 型の語で同様の音声的傾向が現れる(現れた)とすると、多くの場合は、X 型もしくは Y 型と中和し区別がつかなくなる(通時的に言えば合流)。例えば(3-140)は二つとも C 系列の語であり、系列別語彙の考え方に基づくと共時的なアクセント型として Z 型が予測される語である。「バッタ」は元々 Z 型 (Z3) の/○[Q○/であったと考えられる語の単

独形が、音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により、促音/Q/を含む語頭音節が HH で発音されるようになったと考えられる例である。「糸」は促音/Q/を含む語頭音節が LL で発音されるようになったと考えられる例で、結果的に「バッタ」は X 型に、「糸」は Y 型に中和したと考えられる。

(3-140)

バッタ	X3	gaQ\ta	gaQ\tanu	gaQ\takara gaQ\tagadi gaQ\tajuka	(花徳)
糸	Y3	iQ[cju	iQ[cju\ngu	iQ[cjuju\ka	(花徳)

3.9 ロ 3 群の名詞アクセント体系

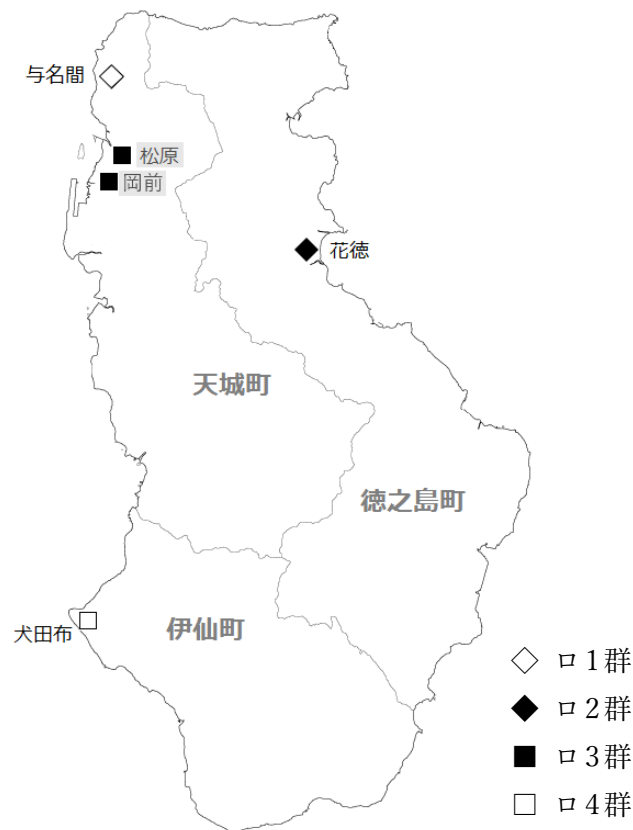


図 3-9 ロ 3 群に属する集落の位置(灰色塗り)

ロ 3 群に該当する地域は松原と岡前である。ロ 3 群はロ 1 群のアクセント体系から見て Z2 が不在のアクセント体系である。W 型のアクセントドメインが「語」か「文節」であるかを基準にすると、ロ 3 群は「文節」をドメインとする体系である。

ロ 3 群の名詞アクセント体系について説明する。(3-141)は松原と岡前の名詞アクセント

体系である。ロ 3 群の名詞アクセントは昇り核を持つ 4 型アクセントである。X 型は高起式であり、Y 型と W 型、Z 型は低起式である。X 型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、W 型は前から 3 番目のモーラに昇り核を持ち(“+3”)、そして、Z 型は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。

(3-141) 松原、岡前の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式 「語」	基底	○	○○	○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式 「語」	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○△;	○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	[○△;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	[○△;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
W 型 (+3) 低起式 「文節」	基底		○○[		
	表層単独		○○[;		
	1 モーラ助詞付き		○○[△		
	2 モーラ助詞付き		○○[△△		
Z 型 (-2) 低起式 「語」	基底			○[○○	○○[○○
	表層単独			○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き			○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き			○[○○△△	○○[○○△△

3.9.1 天城町松原の共時的アクセント⁴²

天城町松原(まつばら)は徳之島の西部、天城町の北部に位置する集落である。松原の人口は 2021 年 9 月の時点で 845 人であり、そのうち松原方言の話者であると考えられる 60 歳以上の人口は 496 人である。本節で扱うデータは 2015 年 7 月の著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、240 語とその助詞付きである(Appendix 17 を参照)。インフォーマントは(3-142)の通りである。

⁴² 第 2 章で述べたように、松原方言の名詞アクセントに関する共時的記述に関しては崎村(1982, 2001)、早田(1995)、上野(1997)の論考がある。

(3-142) 松 A 昭和 12 年生まれ (調査時 78 歳) 女性 生え抜き

松原方言の名詞アクセントは 3.9 節で前述したように、昇り核を持つ 4 型アクセントである。X 型は高起式であり、Y 型と W 型、Z 型は低起式である。X 型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、W 型は前から 3 番目のモーラに昇り核を持ち(“+3”)、そして、Z 型は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。アクセントのドメインは、X 型、Y 型、Z 型では「語」で、W 型は「文節」である。3.6 節で前述したように、アクセント型の定義からみて W3 と Y3 が、そして W4 と Z4 が中和する。本節では通時的観点から W3 と Y3 は Y3 で、W4 と Z4 は Z4 で代表し記述する。アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-139)の松原方言を含む口 3 群のアクセント体系を (3-143) にあらためて示す。(3-144)は松原方言のアクセント型別の語例を示したものである。なお、Y4 については存在を確認できていない。

(3-143(=3-139)) 松原、岡前の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式 「語」	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式 「語」	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○△;	○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	[○△;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	[○△;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
W 型 (+3) 低起式 「文節」	基底		○○[		
	表層単独		○○[;		
	1 モーラ助詞付き		○○[△		
	2 モーラ助詞付き		○○[△△		
Z 型 (-2) 低起式 「語」	基底			○[○○	○○[○○
	表層単独			○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き			○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き			○[○○△△	○○[○○△△

(3-144) 松原アクセントの型別語例

松原		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式 「語」	表層単独	ʔcju (人)	usi (臼)	koRdzi (麴)	kuRnucji (九つ)
	-nu(が(の))	ʔcju:nu	usinu	koRdzinu	kuRnucjinu
	-kara(から)	ʔcju:kara	usikara	koRdzikara	kuRnucjikara
Y 型 (-1) 低起式 「語」	表層単独	[mja/; (貝)	nĩ[gi (棘)	maku[ra (枕)	(○○○[○)
	-nu(が(の))	[mja;/nu	nĩ[ginu	maku[ranu	(○○○[○△)
	-kara(から)	[mja;/ka\\ra	nĩ[gi:kara	maku[rakara	(○○○[○△△)
W 型 (+3) 低起式 「文節」	表層単独		madu[: (暇)		
	-nu(が(の))		madu[nu		
	-kara(から)		madu[ka\\ra		
Z 型 (-2) 低起式 「語」	表層単独			nĩ[gi:ri (右)	situ[mĩti (朝)
	-nu(が(の))			nĩ[ginu	situ[mĩtinu
	-kara(から)			nĩ[gi:rikara	situ[mĩtika\\ra

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では松原方言の語例の中で、特徴的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-145)の Y1 の語例から見ていくことにする。

(3-145)

a.	垢	Y1	[ha/;	<u>[ha;/nu</u>	<u>[ha;/ka\\ra</u>	(松原)
	貝	Y1	[mja/;	<u>[mja;/nu</u>	<u>[mja;/ka\\ra</u>	(松原)
b.	南	Y1	[hwě/;	<u>[hwě;/nu</u>	<u>[hwě;/ka\\ra</u>	(松原)

松原方言の Y1 の基本的なピッチパターンは 1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、後ろから数えて 1 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するというものである。表層単独の場合のピッチパターンは LH になる。松原方言の Y 型は「語」をドメインとするため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく 2 モーラ目の /:/ から上昇するピッチパターンが現れることが予想される。しかし、(3-145a)の「垢」と「貝」の例の下線部を見ると、助詞 /nu/ と /kara/ を付けた場合に、/[ha;/nu/(垢が)、/[ha;/ka\\ra/(垢から)と、/[mja;/nu/(貝が)、/[mja;/ka\\ra/(貝から)のように /nu/ と /ka/ の前でピッチが上昇し、/[ha;/、/[mja;/は LL で現れる。これは、音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするとという音声的傾向が反映されたものと考えられる。このような音声的傾向は徳之島諸方言に広くみられるものである。一方、(3-145b)の「南」に助詞 /nu/ と /kara/ を付けた場合には、/[hwě;/nu/(南が)、/[hwě;/ka\\ra/(南から)のように、/[hwě/の後ろにある /:/ が現れず、/nu/ と /ka/ の前でピッチが上昇するピッチパターンが現れる([○△△、

[○△△]。(3-145b)は、Y1 に助詞を付けた場合に予測されるピッチパターン、×/[○△;△/と×/[○△;△△/から、(3-145a)の/[ha;Anu/(垢が)、/[ha;ka\ra/(垢から)と、/[mja;Anu/(貝が)、/[mja;ka\ra/(貝から)、のようなピッチパターンを経て成立したものと本稿は考えるのだが、この通時的な変遷について以下でもう少し詳しく説明しておく。まず、Y1 の助詞付きの場合に予想される基本的なピッチパターン×/[○△;△/と×/[○△;△△/から、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により×/[○△;△/と×/[○△;△△/の/;/を含む音節(下線部)が LL で発音されるようになり、結果(3-145a)のような/[○△;△/と/[○△;△△/になる。アクセント情報に基づき Y1 の語末に生じていた/;/は、/;/の前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになると考えられる。3.1.3.2.1 節で述べたとおり、/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れなくてもよい。以上の過程を経て、Y1 の 2 モーラ助詞付きのピッチパターンは、最終的に(3-145b)のような/[○△△/と/[○△△△/のようになると考えられる。このような、通時的な変遷を想定すると、(3-145b)の「南」の例外的なピッチパターンを説明することができる。松原方言の Y1 の語は、(3-145b)の「南」の例以外、すべて(3-145a)のようなピッチパターンで現れる。規則的な例外と言える。

アクセントドメインについてだが、Y1 だけみると、「語」がドメインである決定的な証拠がないことは認めざるをえない。同じく Y 型の Y2 と Y3 が「語」をドメインとすること、また、同方言で「文節」をドメインとする W 型には分析できないことから、Y1 も「語」ドメイン(+音声的傾向)で分析しているが、共時的に Y 型の中で Y1 だけが「文節」ドメインである可能性が論理的には残っている。

次の(3-146)は Y2 の語末に特殊モーラ/N/と特殊モーラ相当と考えられる/i/を持ち、例外的なピッチパターンが観察される語例である⁴³。

(3-146)

a.	にんにく	Y2	hwi[ru	hwi[runu	hwi[rukara	(松原)
b.	着物	Y2	ki[N	ki[N/nu	ki[N/ka\ra	(松原)
	薪	Y2	to[N	to[N/nu	to[N/kara	(松原)
c.	声	Y2	ku[i	ku[i/nu	ku[i/kara	(松原)
	針	Y2	ha[i	ha[i/nu	ha[i/kara	(松原)

松原方言の Y 型の基本的なピッチパターンは後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち、アクセント核が置かれたモーラの前でピッチが上昇するというもので、(3-146a)の/hwi[ru/(にんにく)のように、表層単独形は LH で現れる。Y 型のアクセントのドメインは

⁴³ 松原方言にて語末の/i/は特殊モーラである。語末の/i/が特殊モーラとして振る舞う方言は松原、岡前、浅間方言があり、この 3 集落は地理的に隣接している。

「語」であるため、助詞を付けた場合も、/hwĩ[runu/(にんにくが)と/hwĩ[rakara/(にんにくから)のように、語の後ろから1番目(語末)のモーラの前からピッチが上昇する。

一方、(3-146b)と(3-146c)は、例外的なピッチパターンが現れる例である。(3-146b)は語末に/N/を持つ語で、助詞/nu/と/kara/を付けた場合のピッチパターンは、/ki[N/nu/(着物が)、/ki[N/ka\\:ra/(着物から)、/to[N/nu/(薪が)、/to[N/kara/(薪から)のように、アクセント核の位置より1モーラ後ろの位置でピッチが上昇し、/ki[N/と/to[N/はLLで現れる。(3-146c)は語末に特殊モーラ相当と考えられる/i/を持つ語で、(3-146b)と同じく、助詞/nu/と/kara/を付けた場合のピッチパターンは、/ku[i/nu/(声が)、/ku[i/kara/(声から)と、/ha[i/nu/(針が)、/ha[i/kara/(針から)のようなピッチパターンになる。これは、(3-145)で前述した、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。

次の(3-147)は語末に特殊モーラである/N/と特殊モーラ相当と考えられる/i/があるY3の語例で、(3-146)のY2に見られるのと類似したピッチパターンを示す。

(3-147)

a.	枕	Y3	maku[ra	maku[ranu	maku[rakara	(松原)
b.	蚊	Y3	gadza[N	gadza[N/nu	gadza[N/kara	(松原)
	とさか	Y3	kaga[N	kaga[N/nu	kaga[N/kara	(松原)
c.	左	Y3	sidza[i	sidza[i/nu	sidza[i/kara	(松原)
	水溜り・池	Y3	kumu[i	kumu[i/nu	kumu[i/kara	(松原)

Y3の基本的なピッチパターンは、(3-147a)の/maku[ra/(枕)、/maku[ranu/(枕が)、/maku[rakara/(枕から)のように、「語」の後ろから1番目(語末)のモーラの前からピッチが上昇するパターンである。一方、(3-147b)と(3-147c)は、語末に特殊モーラである/N/と特殊モーラ相当と考えられる/i/がある語で、例外的なピッチパターンが現れる語例である。まず、(3-147b)は語末に/N/を持つ語で、助詞/nu/と/kara/を付けた場合のピッチパターンは、/gadza[N/nu/(蚊が)、/gadza[N/kara/(蚊から)と、/kaga[N/nu/(とさかが)、/kaga[N/kara/(とさかから)のように、アクセント核の位置より1モーラ後ろの位置でピッチが上昇し、/dza[N/と/ga[N/の部分はLLで現れる。次に、(3-147c)は語末に特殊モーラ相当と考えられる/i/を持つ語で、(3-147b)と同じく助詞/nu/と/kara/を付けた場合のピッチパターンは、/sidza[i/nu/(左が)、/sidza[i/kara/(左から)と、/kumu[i/nu/(水溜り・池が)、/kumu[i/kara/(水溜り・池から)のようなアクセント核の位置より1モーラ後ろの位置でピッチが上昇するピッチパターンになる。(3-147)も、前述した(3-146)のY2の語のように、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという音声的傾向が反映され、例外的なピッチパターンが見える例であると考えられる。しかし、語末に当該の/i/を持つ語でもすべての語が(3-146c)や(3-147c)のように例外的なピ

ッチパターンで現れるわけではない(3-148)。

(3-148)

薬 Y3 kusju[i] kusju[inu] kusju[ikara] (松原)

(3-148)の「薬」は、語末に/i/を持つ Y3 の語であるが、(3-147c)のようなピッチパターンではなく、アクセント核が置かれる、後ろから 1 番目のモーラの前からピッチが上昇する。(3-147a)でみるような Y3 の基本的なピッチパターンである。松原方言では、(3-146)と(3-147)の、語末に/N/と/i/を持つ語の単独形と、(3-147)の「薬」の例を除く、特殊モーラを含む音節すべてにおいて、音節内上昇が現れる語例はない。松原方言では、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が強く反映されていると考えられるが、それでもこれはあくまでも傾向であり絶対的な規則ではないと考えている⁴⁴。

最後に W2 の単独形が例外的なピッチパターンを見せる例について説明する(3-149)。

(3-149)

a. 島 W2 sima[; sima[nu sima[ka\ra (松原)
b. 種 W2 ta/ni tañi[nu tañi[ka\ra (松原)

W 型はドメインである「文節」の前から数えて 3 番目のモーラにアクセント核を置く。(3-149a)は W2 の基本的なピッチパターンである。W2 の単独形では、基底にあるアクセント核を表層で実現するために必要なモーラ数が足りないため、W2 の 2 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 3 モーラにしつつ、前から数えて 3 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇する(○○[;:)。一方、(3-149b)の「種」は、/ta/ni/((種))のように語末モーラの前でピッチが上昇するピッチパターンで現れる。このパターンは松原方言と同じロ群である花徳と犬田布(當原)で観察されるものと類似している。花徳と犬田布(當原)の両方では/○○[;/と/○/○[/がフリーバリエーションで現れる。ただし、このようなピッチパターンで現れる語は、松原方言では、(3-149b)の「種」1 例のみであるため、花徳や犬田布(當原)のようにフリーバリエーションとして分析せず、例外とするほかないと考えている。

⁴⁴ Y1 についてだけは規則化されている(「文節」がドメインになっている)ことによるかもしれないのは本文中でも述べたとおりである。

3.9.2 天城町岡前の共時的アクセント

天城町岡前(おかぜん)は徳之島の西部、天城町の北部に位置する集落である。岡前の人口は2021年9月の時点で643人であり、そのうち岡前方言の話者であると考えられる60歳以上の人口は231人である。本節で扱うデータは2016年9月の著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、236語とその助詞付きである(Appendix 18を参照)。インフォーマントは(3-150)の通りである。

(3-150) 岡 A 昭和7年生まれ(調査時84歳)女性 生え抜き

岡前方言の名詞アクセントは3.9節で前述したように、昇り核を持つ4型アクセントである。X型は高起式であり、Y型とW型、Z型は低起式である。X型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y型は後ろから1番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、W型は前から3番目のモーラに昇り核を持ち(“+3”)、そして、Z型は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。アクセントのドメインは、X型、Y型、Z型では「語」で、W型は「文節」である。3.6節で前述したように、アクセント型の定義からみてW3とY3が、そしてW4とZ4が中和する。本節では通時的観点からW3とY3はY3で、W4とZ4はZ4で代表し記述する。アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-139)の岡前方言を含むロ3群のアクセント体系を(3-151)にあらためて示す。(3-152)は岡前方言のアクセント型別の語例を示したものである。なお、X4については存在を確認できていない。

(3-151(=3-139)) 松原、岡前の名詞アクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式 「語」	基底	○	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式 「語」	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○△;	○[○	○○[○	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	[○△;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	[○△;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
W 型 (+3) 低起式 「文節」	基底		○○[		
	表層単独		○○[;		
	1 モーラ助詞付き		○○[△		
	2 モーラ助詞付き		○○[△△		
Z 型 (-2) 低起式 「語」	基底			○[○○	○○[○○
	表層単独			○[○○	○○[○○
	1 モーラ助詞付き			○[○○△	○○[○○△
	2 モーラ助詞付き			○[○○△△	○○[○○△△

(3-152) 岡前アクセントの型別語例

岡前		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式 「語」	表層単独	ha: / ha (葉)	tsi\ju (露)	koRdzi (翹・カビ)	(○○○○)
	-nu(が(の))	ha:nu	tsi\junu	koRdzinu	(○○○○△)
	-kara(から)	ha:kara	tsi\jukara	koRdzikara	(○○○○△△)
Y 型 (-1) 低起式 「語」	表層単独	[hwě/; (南)	ga[ma (洞窟)	habu[ra (蝶)	ujaQ[kwa (親子)
	-nu(が(の))	[hwě;/nu	ga[ma:nu	habu[ranu	ujaQ[kwanu
	-kara(から)	[hwě;/ka\ra	ga[ma:kara	habu[raka\ra	ujaQ[kwaka\ra
W 型 (+3) 低起式 「文節」	表層単独		ami[; (雨)		
	-nu(が(の))		ami:[nu		
	-kara(から)		ami:[ka\ra		
Z 型 (-2) 低起式 「語」	表層単独			ku[tusi (今年)	juna[sa\na (夜中)
	-nu(が(の))			ku[tu:sinu	juna[sa\nanu
	-kara(から)			ku[tusika\ra	juna[sanaka\ra

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では、岡前方言の語例の中で、特徴的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-153)の語例から見ていくことにする。

(3-153)

南	Y1	[hwë/;	<u>[hwë;/nu</u>	<u>[hwë;/ka\ra</u>	(岡前)
歯	Y1	[ha/;	<u>[ha;/nu</u>	<u>[ha;/kara</u>	(岡前)

岡前方言の Y1 の基本的なピッチパターンは 1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、後ろから数えて 1 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するというものである。表層単独の場合のピッチパターンは LH になる。岡前方言の Y 型は「語」をドメインとするため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく 2 モーラ目の /;/ から上昇するピッチパターンが現れることが予想される。しかし、(3-153)の「南」と「歯」の例の下線部を見ると、助詞 /nu/ と /kara/ を付けた場合に、/[hwë;/nu/(南が)、/[hwë;/ka\ra/(南から)と、/[ha;/nu/(歯が)、/[ha;/kara/(歯から)のように /nu/ と /ka/ の前でピッチが上昇し、/[hwë;/、/[ha;/は LL で現れる。これは、音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。このような音声的傾向は徳之島諸方言に広くみられるものである。岡前方言の Y1 の語は、すべて(3-153)のようなピッチパターンで現れる。本稿ではこれを規則的な例外と見ているが、Y1 だけみると、「語」がドメインである決定的な証拠がないことは認めざるをえない。同じく Y 型の Y2 と Y3 が「語」をドメインとすること、また、同方言で「文節」をドメインとする W 型には分析できないことから、Y1 も「語」ドメイン (+音声的傾向) で分析しているが、共時的に Y 型のなかで Y1 だけが「文節」ドメインである可能性が論理的には残っている。

次の(3-154)は松原方言の (3-146) と同様に Y2 の語末に特殊モーラ (相当) である /N/ と /i/ がある語例で、岡前方言のアクセント体系から見て例外的なピッチパターンが観察される。

(3-154)

a.	星	Y2	hu[si	hu[sinu	hu[si:kara	(岡前)
b.	着物	Y2	ki[N	ki[N/nu	ki[N/ka\ra	(岡前)
	耳	Y2	mi[N	mi[N/nu	mi[N/kara	(岡前)
c.	ソテツの実	Y2	na[i	na[i/nu	na[i/kara	(岡前)
	針	Y2	ha[i	ha[i/nu	ha[i/kara	(岡前)

岡前方言の Y 型の基本的なピッチパターンは後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を

持ち、アクセント核が置かれたモーラの前でピッチが上昇するというもので、(3-154a)の/hu[si/(星)のように、表層単独形は LH で現れる。Y 型のアクセントのドメインは「語」であるため、助詞を付けた場合も、/hu[sinu/(星が)と/hu[si:kara/(星から)のように、後ろから 1 番目(語末)のモーラの前からピッチが上昇する。一方、(3-154b)と(3-154c)は、例外的なピッチパターンが現れる例である。(3-154b)は語末に/N/を持つ語で、助詞/nu/と/kara/を付けた場合のピッチパターンは、/ki[N/nu/(着物が)、/ki[N/ka\ra/(着物から)、/mi[N/nu/(耳が)、/mi[N/kara/(耳から)のように、アクセント核の位置より 1 モーラ後ろの位置でピッチが上昇し、/ki[N/と/mi[N/は LL で現れる。(3-154c)は語末に特殊モーラ相当の/i/を持つ語で、(3-154b)と同じく、助詞/nu/と/kara/を付けた場合のピッチパターンは、/na[i/nu/(ソテツの実が)、/na[i/kara/(ソテツの実から)と、/ha[i/nu/(針が)、/ha[i/kara/(針から)のようなピッチパターンになる。これは、(3-153)で前述した、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。

次の(3-155)は語末に特殊モーラ(相当)である/N/と/i/がある語例 Y3 の語例で、上記の(3-154)と同じようなピッチパターンになる。

(3-155)

a.	蝶	Y3	habu[ra	habu[ranu	habu[raka\ra	(岡前)
b1.	蚊	Y3	gadza[N	gadza[N/nu	gadza[N/kara	(岡前)
	虱	Y3	sira[N	sira[N/nu	sira[N/kara	(岡前)
b2.	やどかり	Y3	ama[N	ama[N/nu	ama[Nkara	(岡前)
					/ ama[N/kara	
c.	鋤	Y3	idza[i	idza[i/nu	idza[i/kara	(岡前)
	薬	Y3	?kusju[i	?kusju[i/nu	?kusju[i/kara	(岡前)

Y3 の基本的なピッチパターンは、(3-155a)の/habu[ra/(蝶)、/habu[ranu/(蝶が)、/habu[raka\ra/(蝶から)のように、「語」の後ろから 1 番目(語末)のモーラの前からピッチが上昇するパターンである。一方、(3-155b1)、(3-155b2)、(3-155c)は、語末に特殊モーラ(相当)である/N/と/i/がある語で、例外的なピッチパターンが現れる。(3-155b1)は語末に/N/を持つ語で、助詞/nu/と/kara/を付けた場合のピッチパターンは、/gadza[N/nu/(蚊が)、/gadza[N/kara/(蚊から)と、/sira[N/nu/(虱が)、/sira[N/kara/(虱から)のように、アクセント核の位置より 1 モーラ後ろの位置でピッチが上昇し、/dza[N/と/ga[N/は LL で現れる。(3-155c)は語末に/i/を持つ語で、助詞/nu/と/kara/を付けた場合のピッチパターンは、/idza[i/nu/(鋤が)、/idza[i/kara/(鋤から)と、/?kusju[i/nu/(薬が)、/?kusju[i/kara/(薬から)のようなピッチパターンになる。これも前述した、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が反映されたものと考え

えられる。(3-155b2)の「やどかり」は、助詞/kara/を付けた場合のピッチパターンが、/ama[Nkara/(やどかりから)と/ama[N/kara/(やどかりから)で、二通り観察される例である。この例から、岡前方言において、/N/や/i/(のような特殊モーラ)が語末に来るとき、必ず特殊モーラ(ここでは/N/と/i/)が同じ高さ(LL)にならなければならないという規則になっているわけではないことが分かる。

岡前方言では、(3-154)と(3-155)の、語末に/N/と/i/を持つ語の単独形と、(3-155b2)の/ama[Nkara/(やどかり)を除く、特殊モーラを含む音節すべてにおいて、音節内上昇が現れる例は観察されない。岡前方言では、上記したような音声的傾向が強く反映されていると考えられるが、それでも、/ama[Nkara/(やどかり)のような語例から、これが音声的傾向であり、絶対的な規則ではないことが伺える。

3.10 ロ4群の名詞アクセント体系

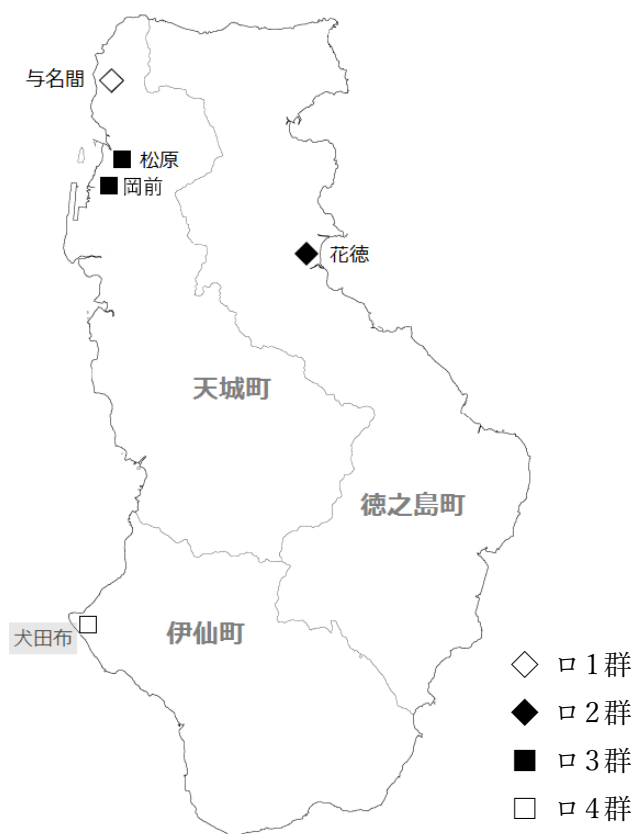


図 3-10 ロ4群(犬田布)集落の位置(灰色塗り)

ロ4群に該当する地域は犬田布(當原)である。ロ3群はロ1群のアクセント体系から見てZ2とZ3がないアクセント体系である。W型のアクセントドメインが「語」か「文節」であるかという点、ロ4群は「文節」をドメインとする体系である。

3.10.1 伊仙町犬田布(當原)の共時的アクセント

伊仙町犬田布(いぬたぶ)は徳之島の南部、伊仙町の西部に位置する集落である。犬田布は二つの集落で構成されており、犬田布岬に近い方が當原(とうばる)、より内陸に位置するのが犬田布(いんたぶ)である。本節では當原を中心に記述する。犬 A によると、當原は約 260 年前に伊仙町伊仙から移住してきた人々の集落で、犬田布(いんたぶ)集落とは多少方言が異なるとのことである。これによると、伊仙方言と犬田布の當原方言は約 260 年前に枝分かれたことになる。犬田布全体の人口は 2021 年 9 月の時点で 245 人であり、そのうち犬田布方言の話者であると考えられる 60 歳以上の人口は 113 人である。犬田布集落を除く當原集落だけの人口と話者数は不明である。本節で扱うデータは 2014 年 11 月と 2017 年 2 月に著者自身の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査した、256 語とその助詞付きである(Appendix 19 を参照)。インフォーマントは(3-156)の通りである。

犬田布(當原)方言の調査では、2014 年に名詞のアクセントと名詞に助詞 ga(が、の)と kara(から)を付けたアクセントを調査した後、そのデータを元に一部の語彙を抜粋し、2017 年に nu(が、の)を付けたアクセントを追加で調査した。そのため、nu(が、の)を付けた場合の語例が他の徳之島諸方言に比べ少ない。1 モーラ助詞である、nu(が、の)と ga(が、の)は同じアクセントになる。

(3-156) 犬 A 昭和 8 年生まれ(初回調査時 81 歳、2 回目調査時 83 歳) 男性 外住歴 4 年

犬田布(當原)方言の名詞アクセントは昇り核を持つ 4 型アクセントである。X 型は高起式であり、Y 型、W 型、Z 型は低起式である。X 型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y 型は後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、W 型は前から 3 番目のモーラに昇り核を持ち(“+3”)、そして、Z 型は後ろから数えて 2 番目のモーラに昇り核を持つ(“-2”)。アクセントのドメインは、X 型、Y 型、Z 型では「語」で、W 型は「文節」である。アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。(3-157)に犬田布(當原)方言(ロ 4 群)のアクセント体系を示す。(3-158)は犬田布(當原)方言のアクセント型別の語例を示したものである。

(3-157) 犬田布(當原)のアクセント体系

		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式 「語」	基底	○ ⁰	○○ ⁰	○○○ ⁰	○○○○ ⁰
	表層単独	○	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○△	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○△△	○○△△	○○○△△	○○○○△△
Y 型 (-1) 低起式 「語」	基底	[○	○[○	○○[○	(○○○[○)
	表層単独	[○/;	○[○	○○[○	(○○○[○)
	1 モーラ助詞付き	[○/;△	○[○△	○○[○△	(○○○[○△)
	2 モーラ助詞付き	[○/;△△	○[○△△	○○[○△△	(○○○[○△△)
W 型 (+3) 低起式 「文節」	基底		○○[		
	表層単独		○/○[~ ○○[;		
	1 モーラ助詞付き		○○[;△		
	2 モーラ助詞付き		○○[△△		
Z 型 (-2) 低起式 「語」	基底				○○[○○
	表層単独				○○[○○
	1 モーラ助詞付き				○○[○○△
	2 モーラ助詞付き				○○[○○△△

(3-158) 犬田布(當原)アクセントの型別語例

犬田布		1	2	3	4
X 型 (0) 高起式 「語」	表層単独	wī (上)	kadzī (風)	tata\mī (畳)	toRgura (台所・母屋と独立した家屋)
	-nu(が(の))	wī\ga	kadzī\ga kadzī\nu	tata\mīga tata\mīnu	toRgura\ga
	-kara(から)	wī\kara	kadzīka\ra	tatamīka\ra	toRgura:ka\ra
Y 型 (-1) 低起式 「語」	表層単独	[ja/; (家)	ku[dzu (去年)	hasa[mi (鋏)	noRgi[ri (鋸)
	-nu(が(の))	[ja;/ga	ku[dzu\;ga	hasa[mi\ga	noRgi[ri\ga noRgi[ri\nu
	-kara(から)	[ja;/ka\ra	ku[dzu\;kara	hasa[mika\ra	noRgi[rika\ra
W 型 (+3) 低起式 「文節」	表層単独		ku[mu (雲)		
	-nu(が(の))		kumu[ga		
	-kara(から)		kumu[ka\ra		

Z 型 (-2) 低起式 「語」	表層単独				juna[sa\na (夜中)
	-nu(が(の))				juna[sa\naga juna[sa\nanu
	-kara(から)				juna[sa\nakara

基本的には上記の体系に収まっているが、例外もある。以下では犬田布(當原)方言の語例の中で、特徴的または、例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-159)の語例から見ていくことにする。(3-159)は犬田布(當原)方言の Y2 の語である。

(3-159)

a.	鍋	Y2	na:[bī	na:[bī\ga	na:[bī\kara	(犬田布)
	踵	Y2	a[du	a[duga	a[dukara	(犬田布)
b.	味噌	Y2	mi[sjuʌ:	mi[sju\ga	mi[sjuka\ra	(犬田布)
	糠	Y2	nu[kaʌ:	nu[kaga	nu[kaka\ra	(犬田布)

(3-159a)と(3-159b)は犬田布(當原)の Y2 の例である。(3-159a)の「鍋」、「踵」の例で見るように、犬田布(當原)方言の Y2 の基本的なピッチパターンは、後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち、実際のピッチ上昇もアクセント核の位置で現れる。この場合、表層単独のピッチパターンは LH になる(○[○])。((3-159a)の「鍋」の場合は音声的な伸びが出ているので表層では LLH のピッチパターンである。) Y 型のドメインは「語」であるため、助詞を付けた場合も表層単独と同じく、語の後ろから 1 番目(語末)のモーラの前でピッチが上昇する。(3-159b)の「味噌」、「糠」は表層単独の場合のピッチパターンが、/mi[sjuʌ:/ (味噌)と/nu[kaʌ:/ (糠)のように、アクセント核が置かれるモーラの後ろに/:/が現れ、音声的にはアクセント核が置かれるモーラを含む音節全体にわたっての上昇が観察されるが、この場合のピッチパターンは LLH と解釈できる(○[○ʌ:]). なぜなら、このような例は徳之島諸方言の中ではイ群の手々、瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、伊仙方言とロ群の花徳方言でも観察されるものであり、これらの方言において/○[○/と/○[○ʌ:/は音声的なバリエーションに過ぎないからである。

一方、(3-160)は W2 の例で、表層単独形が表面上(3-159)のピッチパターンと同じになる。(3-160)で見る W 型はドメインである「文節」の前から数えて 3 番目にあるモーラにアクセント核を置く。3.6.2 節で述べたように、ロ群の W2 の表層単独の場合、W2 の 2 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 3 モーラにしつつ、前から数えて 3 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するピッチパターン(○○[:])と、最も右である語末モーラの前でピッチが上昇するといったピッチパターン(○ʌ○[)で、二通りのピッチパターンが観察される。花徳と犬田布(當原)では、/○○[:]/と/○ʌ○[/の両方がフリーバリエーションで現れる。

(3-160)

a.	鎌	W2	ka/ma[	kama[ga	kama[ka\ra	(犬田布)
b.	傘・笠	W2	kasa[;	kasa:[ga	kasa[ka\ra	(犬田布)
c.	花	W2	ha/na[/ hana[;	hana[ga	hana[ka\ra	(犬田布)
				hana[nu		
	亀	W2	ka/mi[/ kami[;	kami[ga	kami[ka\ra	(犬田布)

(3-160a)の「鎌」は、表層単独が/○△○[/で現れる語例であり、(3-160b)の「傘・笠」は、表層単独が/○○[/;で現れる語例である。(3-160c)の「花」、「亀」は、同一語で/○○[/;と/○△○[/の両方がフリーバリエーションで現れる語例である。

W2 の/○△○[/ (LH)、/○○[/; (LLH)は、(3-159)の Y2 の/○△○[/ (LH)、/○△○△[/ (LLH)と、基底にあるアクセント核の位置こそ違えど、表層では同じピッチパターンになる。表層単独では W2 と Y2 が中和していると言える。ただし、Y2 と W2 は助詞を付けた場合のピッチパターンが異なる。Y2 は「語」の後ろから 1 番目(語末)のモーラの前からピッチが上昇する、/○△○△[/、/○△○△△[/のピッチパターンで現れ、W2 は「文節」の前から 3 番目のモーラの前からピッチが上昇する、/○○△△[/、/○○△△△[/のピッチパターンで現れるため、助詞付きの場合に二つのアクセント型を区別することができる。

(3-161)は、徳之島諸方言にて広く観察される、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向の影響で例外的なピッチパターンが現れると考えられる例である。

(3-161)

a.	湯	Y1	[ju/;	<u>[ju:/ga</u>	<u>[ju:/kara</u>	(犬田布)
	潮	Y1	[sju/;	<u>[sju:/ga</u>	<u>[sju:/ka\ra</u>	(犬田布)
b.	目	Y1	[mi/;	<u>[mi:/ga</u>	<u>[mi:/ka\ra</u>	(犬田布)
	木	Y1	[ki/;	[ki:/ga	[ki:/ka\ra	(犬田布)
				[ki:/nu / <u>[ki:/nu</u>		

犬田布(當原)方言の Y1 の基本的なピッチパターンは 1 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、後ろから数えて 1 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するというものである。表層単独の場合のピッチパターンは LH になる。Y 型は「語」をドメインとするため、助詞を付けた時にも表層単独の場合と同じく 2 モーラ目の /;/ から上昇するピッチパターンが現れるはずである。しかし、(3-161a)の「湯」と「潮」の下線部を見ると、助詞 /nu/ と /kara/ を付けた場合に、/[ju:/ga/(湯が)、/[ju:/kara/(湯から)、/[sju:/ga/(潮が)、/[sju:/ka\ra/(潮から)、のように /nu/ と /ka/ の前でピッチが上昇し、/[ju:/、/[sju:/は LL で現れる。これは、前述した特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節

全体を同じ高さにするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。一方、(3-161b)の「目」と「木」に助詞/nu/と/kara/を付けた場合、/[mi/ɡa/ (目が)、/[mi/ka\ra/ (目から)と、/[ki/nu/ (木が)のように、/[mi/と/[ki/の後ろにある/;/が現れず、/nu/と/ka/の前でピッチが上昇する([○/△、[○/△△)。このような(3-161b)の波線部に見られる単語単独の語末に/;/が現れないパターンは、Y1 に助詞を付けた場合に予測されるピッチパターン、×/[○/△/と×/[○/△△/から、(3-161a)の/[ju/ɡa/ (湯が)、/[ju/ka\ra/ (湯から)、/[sju/ɡa/ (潮が)、/[sju/ka\ra/ (潮から)のようなピッチパターンを経て成立したものと本稿は考えるのだが、この通時的な変遷について以下でもう少し詳しく説明しておく。まず、Y1 の助詞付きの場合に予想される基本的なピッチパターン×/[○/△/と×/[○/△△/から、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により×/[○/△/と×/[○/△△/の/;/を含む音節(下線部)が LL で発音されるようになり、結果(3-135a)のような/[○/△/と/[○/△△/になる。アクセント情報に基づき Y1 の語末に生じていた/;/は、/;/の前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになると考えられる。3.1.3.2.1 節で述べたとおり、/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れなくてもよい。以上の過程を経て、Y1 の助詞付きのピッチパターンは、最終的に(3-161b)の一部にみられる/;/ (および/;/) が無い場合のピッチパターン、すなわち/[○/△/と/[○/△△/になると考えられる。犬田布(當原)方言の Y1 の語は、すべて(3-161)のようなピッチパターンで現れる。本稿ではこれを規則的な例外と見ているが、Y1 だけみると、「語」がドメインである決定的な証拠がないことは認めざるをえない。同じく Y 型の Y2 と Y3 が「語」をドメインとすること、また、同方言で「文節」をドメインとする W 型には分析できないことから、Y1 も「語」ドメイン (+音声的傾向) で分析しているが、共時的に Y 型のなかで Y1 だけが「文節」ドメインである可能性が論理的には残っている。

次の(3-162)は、語末に/N/がある Y3 の語例である。この例も(3-161)と同じく、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が反映された語例と考えられる。

(3-162)

a.	刀	Y3	kata[na	kata[na\ga	kata[na\kara	(犬田布)
b.	虱	Y3	sira[N	sira[N\ga	sira[N\kara	(犬田布)
	みかん	Y3	kuni[N	kuni[N\ga	kuni[N\kara	(犬田布)

(3-162a)の「刀」で見ると、犬田布(當原)方言の Y 型の基本的なピッチパターンは後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち、アクセント核が置かれたモーラの前でピッチが上昇する。一方、(3-162b)は、助詞付きの場合に、例外的なピッチパターンが現れる例である。(3-162b)は語末に/N/を持つ Y3 の語で、助詞/nu/と/kara/を付けた場合のピッチパターンは、/sira[N\ga/ (虱が)、/sira[N\kara/ (虱から)と、/kuni[N\ga/ (みかんが)、

/kuni[N]/kara/(みかんから)のようにアクセント核の位置より 1 モーラ後ろの位置でピッチが上昇し、/ra[N]/と/ni[N]/は LL で現れる。これも同様に、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向が反映されたものであると考えられ、このようなピッチパターンは、犬田布(當原)方言に限らず多くの徳之島諸方言で観察されるものである。

3.11 ハ群の名詞アクセント体系



図 3-11 ハ群(浅間)集落の位置

ハ群に分類される方言は浅間方言のみである。浅間方言の名詞アクセント体系は昇り核を持つ 3 型アクセントである。浅間方言のアクセント体系 X 型、Y 型、V 型の 3 つのアクセント型を持つ。徳之島諸方言のなかで唯一 Z 型を持たない体系であり、かつ、唯一 V 型を持つ体系である。V 型のアクセントドメインは「文節」である。

第 2 章で述べたように、浅間方言のアクセントの共時的記述に関しては、柴田(1960)や、上野(1977)を初めとする上野氏による一連の調査資料及び先行研究がある。また、早田(1995)やローレンス・岡村(2008)など、多くの研究報告がなされている。通時的研究としては、ローレンス(2009)がある。徳之島のアクセントに関する多くの研究が浅間方言に集中していると言える状況である。諸先行研究と本稿の浅間方言の共時的記述に関する決定的な違いは、本稿では浅間方言に現れる母音の伸び(長母音の後半部)を 3.1.3.2 で述べたように三つに分類したことにある。筆者は浅間方言を含む徳之島諸方言のアクセント核の位置は、語の基底形においてモーラを単位として数えると考えており、該当する語が基底で何モーラになるかを見極めることがアクセント研究の要であると考え。本稿では徳之島諸方言の基底形のモーラ数を数える時に、語に辞書的に存在すると考えられる /R/ だけを残し、表

層で付加された母音の伸びである/:/と/;/は排除している。浅間方言のアクセント体系についての詳しい説明は次節で述べる。

3.11.1 天城町浅間の共時的アクセント⁴⁵

天城町浅間(あさま)は徳之島の西部、天城町の中央辺りに位置する集落である。浅間の人口は2021年9月の時点で852人であり、そのうち浅間方言の話者であると考えられる60歳以上の人口は412人である。本節で扱うデータは2015年7月、2015年10月、2015年11月に著者自身で実施した3回の調査によって得られたものである。データは他の集落と同様、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」を中心に調査したもので、245語とその助詞付きである(Appendix 20を参照)。インフォーマントは(3-163)の通りである。このうち、浅Aは前述した先行研究でも話者として協力してくださっている岡村隆博氏である。岡村氏はローレンス・岡村(2008)の著者でもある。浅Bと浅Cの二人は岡村氏から伝統的な浅間方言の話者として紹介いただいた方々である。

浅間方言の調査では、浅Aと浅Bに名詞のアクセントと名詞に助詞 nu(が、の)と kara(から)を付けたアクセントを調査した後、そのデータを元に一部の語彙を抜粋し、浅Cに確認のためのアクセント調査を行った。そのため、浅Aと浅Bに比べ浅Cのデータが少ない。また、浅Aには、一部の語彙を抜粋し、助詞 karaNba(からも)を付けたアクセントについても追加調査を行っている。

(3-163) 浅A 昭和11年生まれ(調査時79歳) 男性 中学卒業後、他の地域の高校に進学、その後、職業柄退職時まで徳之島を含む鹿児島県内を転々とする。

浅B 昭和14年生まれ(調査時76歳) 男性 外住歴 約15年

浅C 昭和11年生まれ(調査時79歳) 男性 生え抜き

浅間方言の名詞アクセントは昇り核を持つ3型アクセント体系である。X型は高起式であり、Y型とV型は低起式である。X型は無核でアクセント核を持たない(“0”)。Y型は後ろから1番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(“-1”)、V型は前から4番目のモーラに昇り核を持つ(“+4”)。ドメインは、X型とY型は「語」であり、V型は「文節」である。他の徳之島諸方言と同じく、与名間方言においてもアクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない。3.1.3.2.2 節で前述したように、浅間方言は最小語制限を持つ方言であり、また、最小語制限による母音の伸びが通時的に基底に取り込まれたと考えられるため、浅間方言には共時的に基底1モーラ語が存在しない。また、アクセント型の定義からみて

⁴⁵ 本節で説明する浅間方言のアクセント体系は、2015年11月に以下の研究会で発表した内容を含んでいる。

金アリン(2015)「徳之島浅間方言の名詞アクセント」『日本語レキシコンの音韻特性』第2回プロジェクト研究発表会 於：南山大学 2015年11月。

V4 と Y4 のアクセント核の位置が同じになり中和していると考えられる。後述する複合語アクセントと外来語アクセントの分析からV型が浅間のデフォルトになる型であると考えられるため、本節ではV4 と Y4 のうちV4 を代表にして記述する。

(3-164)に浅間方言(ハ群)のアクセント体系を示す。(3-165)は浅間方言のアクセント型別の語例を示したものである。本節では、浅間方言の語例に必ず話者情報を併記することにする。これは本稿のほかの方言と違って話者が3人おり、さらには話者によって表層の音形、とくに“母音の伸び”の出現傾向が異なるためである。

(3-164) 浅間のアクセント体系

		2	3	4
X型 (0) 高起式 「語」	基底	○○	○○○	○○○○
	表層単独	○○	○○○	○○○○
	1 モーラ助詞付き	○○△	○○○△	○○○○△
	2 モーラ助詞付き	○○△△	○○○△△	○○○○△△
V型 (+4) 低起式 「文節」	基底	○○[	○○○[	○○○[○
	表層単独	○○[;	○○○[;	○○○[○
	1 モーラ助詞付き	○○[△	○○○[△	○○○[○△
	2 モーラ助詞付き	○○△[△	○○○[△△	○○○[○△△
	4 モーラ助詞付き	○○△[△△△	○○○[△△△△	○○○[○△△△△
Y型 (-1) 低起式 「語」	基底	○[○	○○[○	
	表層単独	○[○	○○[○	
	1 モーラ助詞付き	○[○△	○○[○△	
	2 モーラ助詞付き	○[○△△	○○[○△△	

(3-165) 浅間アクセントの型別語例

浅間		2	3	4
X型 (0) 高起式 「語」	表層単独	kadzī: (風・浅A)	kību\si (煙・浅C)	nai\kami (雷・浅A)
	-nu(が(の))	kadzī:\nu	kību\sinu	nai\kaminu
	-kara(から)	kadzika:\ra	kību\sikara	nai\kamikara
V型 (+4) 低起式 「文節」	表層単独	sīma[; (島・浅A)	hasjami[; (鉄・浅B)	junasja:[na (夜中・浅A)
	-nu(が(の))	sīma:[nu	hasjami:[nu	junasja:[na\nu
	-kara(から)	sīmaka:[ra	hasjami[ka\ra	junasja:[na\kara
	-karaNba(からも)	sīmaka[raN\ba		

Y 型 (-1) 低起式 「語」	表層単独	ha:[ra (柱・浅 C)	gatsi:[tsi (雲丹・浅 B)	
	-nu(が(の))	ha:[ra\nu	gatsi:[tsi\nu	
	-kara(から)	ha:[ra\kara	gatsi:[tsi\kara	

3.11.1.1 浅間方言における/:/と下降

3.1.3 節で前述したように浅間方言を含む徳之島諸方言において/:/とピッチ下降はアクセント的に有意な情報ではない。前述したことの繰り返しになるが、本節では、もう一度浅間方言における/:/と下降が、アクセント的に有意な情報ではないことについて説明する。3.11 節でも述べたように、この内容が本稿と先行研究の主張の異なりにつながっており、重要なポイントであるからである。

まず、浅間方言における/:/について説明する。本稿では、徳之島諸方言における/:/は、表層で生じる単純な音声現象であり、アクセントの分析の上では必要のない情報であると解釈している。しかし、上野(1977, 2014, 2015, 2016)やローレンス(2009, 2015)などの先行研究では重音節⁴⁶を非常に重要な音韻的情報(アクセントに関わる情報)という分析をしている。先行研究の内容に関しては、第 2 章を参照していただきたい。

徳之島諸方言の/:/の出現頻度は集落または個人によって差がある。浅間方言は筆者の調査した地域の中で最も/:/の出現頻度が高い方言の一つではあるが、それでも、/:/の出現頻度には話者間で個人差が見られる。浅間方言のすべてのデータを話者別にみると、浅 A のデータでは/sira/(坂・浅 A)の 1 例を除く、すべての語例で/:/が現れる。また、浅 A の発音における/:/の出現には一定のパターンのようなものが観察される。浅 A の発音では/:/が、X 型の語単独の場合は語末に、それ以外の場合はピッチ上昇の直前またはピッチ下降時に必ず現れているのである。浅 A は上野氏やローレンス氏の話者でもある。アクセントの解釈は異なれど、浅 A の発音に関する観察としては、筆者も先行研究と同じく規則的な母音の伸び(先行研究の言い方に合わせるなら、重音節)を確認している。一方、浅 B と浅 C の発音は浅 A と異なり、/:/が現れない例もかなり多く観察される。特に、3 名の話者のうち、唯一外住歴のない浅 C の発音では、調査した語数が 47 語と、他の 2 名に比べ 5 分の 1 程度にも関わらず、語単独もしくは助詞付きの場合に/:/が出現しないパターンが 28 語見られる⁴⁷。

⁴⁶ 先行研究でいう重音節は、特殊モーラである/N/,/Q/,/R/や特殊モーラ相当の/i/,そして、本稿でいう/:/と/:/を含む音節を指すものである。

⁴⁷ 上野(2016: 211)の脚注で、氏は「浅間の話者数人に初期の段階で簡単な調査をして、いずれも岡村と同じアクセントであることも確認済みである。」と述べている。ここでいう簡単な調査がどういったものかは具体的なデータが示されていないため判断できないが、少なくとも、筆者が調査した限りでは、浅 B と浅 C の発音は浅 A と異なる部分がある。具体的には、母音の伸び/:/の有無と位置、ピッチ下降の有無と位置が話者間で一定ではなく、発音にバリエーションが認められる。

(3-166)は話者間で/./の有無に差が見られるアクセント型別語例である。ここでの下線は他の話者の発音と比較した時に、/./が現れない例を示している。

(3-166)

a.	袖	X2	sjudī:	sjudī:\nu	sjudika:\ra	(浅間・浅 A)
	袖	X2	<u>sjudī</u>	sjudī:\nu	sjudika:\ra	(浅間・浅 B)
	袖	X2	<u>sjudī</u>	sjudī:\nu	sjudī:\kara	(浅間・浅 C)
b.	煙	X3	kību:\sī	kību:\sīnu	-	(浅間・浅 A)
	煙	X3	kību:\sī	kību:\sīnu	kību:\sīkara	(浅間・浅 B)
	煙	X3	<u>kību:\sī</u>	<u>kību:\sīnu</u>	<u>kību:\sīkara</u>	(浅間・浅 C)
c.	島	V2	sīma[;	sīma:[nu	sīmaka:[ra	(浅間・浅 A)
	島	V2	sīma[;	sīma:[nu	sīmaka:[ra	(浅間・浅 B)
	島	V2	sima[;	<u>sima[nu</u>	<u>simaka[ra</u>	(浅間・浅 C)
d.	南京豆	V3	dzīmamī[;	dzīmamī:[nu	dzīmamī[ka:\ra	(浅間・浅 A)
	南京豆	V3	dzīmamī[;	dzīmamī:[nu	<u>dzīmamī[ka\ra</u>	(浅間・浅 B)
	南京豆	V3	dzīmamī[;	dzīmamī:[nu	<u>dzīmamī[ka\ra</u>	(浅間・浅 C)
e.	朝	V4	sītumī:[tī	sītumī:[tī\nu	sītumī:[tī\kara	(浅間・浅 A)
	朝	V4	sītumī:[tī	sītumī:[tī\nu	sītumī:[tī\kara	(浅間・浅 B)
	朝	V4	sītumī:[tī	<u>sītumī[tī\nu</u>	<u>sītumī[tīka\ra</u>	(浅間・浅 C)
			/ <u>sītumī[tī</u>			
f.	卵	Y2	ku:[ga	ku:[ga\nu	ku:[ga\kara	(浅間・浅 A)
	卵	Y2	ku:[ga	ku:[ga\nu	ku:[ga\kara	(浅間・浅 B)
	卵	Y2	ku:[ga	ku:[ga\nu	<u>ku[ga\kara</u>	(浅間・浅 C)
g.	蝶・蛾	Y3	habī:[ru	habī:[ru\nu	habī:[ru\kara	(浅間・浅 A)
	蝶・蛾	Y3	habī:[ru	habī:[ru\nu	habī:[ru\kara	(浅間・浅 B)
	蝶・蛾	Y3	<u>habī[ru</u>	<u>habī[ru\nu</u>	<u>habī[ru\kara</u>	(浅間・浅 C)

(3-166)の下線部を見ると、話者間で/./の有無に差が見られる。例えば、(3-166g)の「蝶・蛾」の場合、浅 A と浅 B では、語単独と助詞付きすべてにおいて、ピッチ上昇の直前で/./が現れるが、浅 C では語単独と助詞付きすべてに/./が現れない。同じ話者の発音であっても、同一語で/./の現れにバリエーションが見られる語例もある。例えば、(3-166e)の「朝」の場合、浅 B では助詞/kara/を付けた/sītumī:[tī\kara/と/sītumī[tī\kara/において、/./の有無がフリーバリエーションとして現れる。浅 C も同じく、表層単独形である/sītumī:[tī/と/sītumī[tī/において、/./の有無がフリーバリエーションとして現れている。このように、話者間、または、話者個人の中で/./の有無にバリエーションが生じるということは、/./で示

す母音の伸びが、義務的な母音の伸びではないことを示すものである。

(3-167)は話者間で下降の有無に差が見られるアクセント型別語例である。下線部は他の話者の発音と比較した時、下降が現れない例を示している。

(3-167)

a.	棘	X2	Ngï:	Ngï:\nu	Ngïka:\ra	(浅間・浅 A)
	棘	X2	Ngï	Ngï\nu	Ngï\kara	(浅間・浅 B)
					/ <u>Ngïkara</u>	
b.	箱	X2	haku:	haku:\nu	hakuka:\ra	(浅間・浅 A)
	箱	X2	haku	haku\nu	haku\ka:ra	(浅間・浅 B)
					/ <u>hakuka:ra</u>	
c.	海	X2	<u>uN</u>	uN\nu	uN\kara	(浅間・浅 A)
	海	X2	<u>uN</u> / u\N	u\Nnu	u\Nkara	(浅間・浅 B)
	海	X2	<u>uN</u>	u\Nnu	uN\kara	(浅間・浅 C)
d.	白	X2	u:\sï	u:\sïnu	u:\sïkara	(浅間・浅 A)
	白	X2	<u>usï:</u>	usï:\nu	usïka:\ra	(浅間・浅 B)
e.	火	X2	?ma:\tsï	?ma:\tsïnu	?ma:\tsïkara	(浅間・浅 A)
	火	X2	?ma\tsï	?ma:\tsïnu	?ma:\tsïkara	(浅間・浅 B)
					/ <u>?ma:tsï</u>	

(3-167)の下線部を見ると、話者間で下降の有無に差が見られる。例えば、(3-167d)の「白」の語独語の場合、浅 A では、/u/の後ろに下降が見られるが、浅 B では、語単独では下降が見られない。同じ話者の発音であっても、同一語で下降の有無にバリエーションが見られる語例もある。例えば、(3-167a)の「棘」の場合、浅 B では助詞/kara/を付けた/Ngï\kara/と/Ngïkara/において、下降の有無がフリーバリエーションとして現れる。このように、話者間、または、話者個人の中で下降の有無にバリエーションが生じるということは、下降がアクセント的に重要な情報ではないことを示唆するものである。繰り返しになるが、/:/とピッチ下降の有無と位置がフリーバリエーションで現れるのは、浅間に限らず本稿で調べた19か所の徳之島諸方言全体に共通している。

3.11.1.2 V型の解釈

浅間方言(ハ群)に特徴的に見られるV型は、「文節」をドメインとし、基底で前から4番目のモーラに昇り核を持つアクセント型である。前述したように、アクセント型の定義からみてV4とY4のアクセント核の位置が同じになり中和する。具体的に説明すると、V4は前から4番目のモーラにアクセント核が置かれ(○○○[○])、Y4はドメインである「語」の後ろから1番目のモーラ(語末)にアクセント核が置かれる(○○○[○])。結果的にV4とY4

のアクセント核が置かれる位置が同じになり、この二つは中和する。(3-168)は浅間方言の V2 と V3 の語例である。

(3-168)⁴⁸

a.	夜	V2	juru/!;	juru:/nu[	juruka:[ra	juruka:[raN\ba	(浅間・浅 B)
	腕	V3	kaina/!;	kaina:[nu	kaina[ka\!;ra	-	(浅間・浅 B)
b.	声	V2	ku/i[	kui/nu[	kuika:[ra	-	(浅間・浅 A)
	蚊	V3	gadza/N[	gadzaN[nu	gadzaN[kara	-	(浅間・浅 A)

V2 と V3 の語単独や助詞付きの基底形が 4 モーラに満たなくとも、語自体には依然として「V 型」という指定があると考えられる。V 型の語には前から数えて 4 番目のモーラ(“+4”)に昇り核を置くという指定があるため、基底形が 4 モーラに満たない場合においても表層ではアクセント核の実現のために以下のようなピッチパターンを取る。まず、語単独の場合に現れるピッチパターンで、語末の母音を伸ばし、超重音節を作らない範囲で、語の長さを補う方法である。(3-168a)の「夜」と「腕」の単独形を見ると、V2 の/juru/!;/(夜)や V3 の/kaina/!;/(腕)のように、語末モーラの母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、長母音の後半の前からピッチが上昇している。(3-168b)の「声」と「蚊」は語末に特殊モーラ(もしくは特殊モーラ相当の/i/)を持つ語である。(3-168a)のように語末モーラを 2 モーラにすると、語末音節が超重音節になってしまうため、母音の伸びが生じないと考えられる。

一方、助詞付きで、文節のモーラ数が基底 3 モーラ以下の場合には、最も右である文節末モーラの前でピッチが上昇するといったピッチパターンになる。(3-168)の「夜」と「声」に 1 モーラ助詞である/nu/を付けた場合、/juru:/nu[/(夜が)と/kui/nu[/(声が)のように、文節のモーラ数が基底 3 モーラになる。この場合、最も右である文節末である/nu/の前でピッチが上昇する。V2 に 2 モーラ以上の助詞を付けた場合や、V3 に 1 モーラ以上の助詞を付けた場合は、文節のモーラ数が基底で 4 モーラ以上になるので、上記した V 型の定義通り、「文節」の前から数えて 4 番目のモーラの直前でピッチが上昇する。

3.11.1.3 浅間方言の例外的なピッチパターンを持つ語例

浅間方言のピッチパターンは、基本的に(3-164)で提示した体系に収まっているが、例外もある。以下では浅間方言の語例の中で例外的なピッチパターンを見せる例に関して説明する。まず、(3-169)は Y2 の語末に特殊モーラ/N/と特殊モーラ相当と考えられる/i/を持ち、例外的なピッチパターンが観察される語例である。

⁴⁸ V2 の/○○[/と V3 の/○○○[/で語末モーラの後ろに付いている [は、基底でアクセント核が前から数えて 4 モーラ目にあることを示すものである。V2 と V3 の基底形が 4 モーラ以下であるため臨時的に語末に [を付ける。

(3-169)

a.	蓬	Y2	hu:[tsi	hu:[tsi\ngu	hu:[tsi\kara	(浅間・浅 B)
b.	椀	Y2	wa[N	wa[N/nu	wa[N/ka\ra	(浅間・浅 C)
c.	尻	Y2	ma[i	ma[i/nu	ma[i/ka\ra	(浅間・浅 A)
	ソテツの実	Y2	na[i	na[i/nu	na[i/ka\ra	(浅間・浅 A)

浅間方言の Y 型の基本的なピッチパターンは後ろから 1 番目(語末)のモーラに昇り核を持ち、アクセント核が置かれたモーラの前でピッチが上昇するというもので、(3-169a)の /hu:[tsi/(蓬)のように、単独形は LH で現れる。Y 型のアクセントのドメインは「語」であるため、助詞を付けた場合も、/hu:[tsi\ngu/(蓬が)と /hu:[tsi\kara/(蓬から)のように、語の後ろから 1 番目(語末)のモーラの前からピッチが上昇する。

一方、(3-169b)と(3-169c)は、例外的なピッチパターンが現れる例である。(3-169b)は語末に /N/ を持つ語で、助詞 /nu/ と /kara/ を付けた場合のピッチパターンは、/wa[N/nu/(椀が)、/wa[N/ka\ra/(椀から)のように、アクセント核の位置より 1 モーラ後ろの位置でピッチが上昇し、/wa[N/は LL で現れる。(3-169c)は語末に特殊モーラ相当と考えられる /i/ を持つ語で、(3-169b)と同じく、助詞 /nu/ と /kara/ を付けた場合のピッチパターンは、/ma[i/nu/(尻が)、/ma[i/ka\ra/(尻から)と、/na[i/nu/(ソテツの実が)、/na[i/ka\ra/(ソテツの実から)のようなピッチパターンになる。これは、徳之島諸方言に広く一般的にみられる特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が反映されたものと考えられる。この傾向はあくまで傾向であり、規則でないことは次の (3-170) からわかる。(3-170)は、(3-169b, c)と同じく語末に特殊モーラである /N/ と /R/、また特殊モーラ相当と考えられる /i/ を持つ語例であるが、助詞を付けた時のピッチパターンが、(3-169b, c)のような、上記の音声的傾向から予測される例外的なピッチパターンにならない場合を含む語例である。なお、(3-170)の語例はすべて浅 C から得られたもので、浅 A と浅 B の発音ではすべて V 型になる語である。

(3-170)

a.	犬	Y2	i[N	i[N/nu	<u>i[Nkara</u>	(浅間・浅 C)
	湯	Y2	ju[R	ju[R/nu	<u>ju[Rkara</u>	(浅間・浅 C)
	蚊	Y3	gadza[N	gadza[N/nu	<u>gadza[N\kara</u>	(浅間・浅 C)
b.	薬	Y3	kusju[i	<u>kusju[inu</u>	<u>kusju[i\kara</u>	(浅間・浅 C)

(3-170a)の「犬」と「蚊」に助詞 /nu/ を付けた場合のピッチパターンは、/i[N/nu/(犬が)、/gadza[N/nu/(蚊が)のように、アクセント核の位置より 1 モーラ後ろの位置でピッチが上昇し、特殊モーラを含む音節である /i[N/、/dza[N/は LL で現れる。語末に /R/ を持つ「湯」も、特殊モーラという点においては /N/ と同じであり、助詞 /nu/ を付けた場合のピッチパタ

ーンは/ju[R/nu/(湯が)と、「犬」と「蚊」の例と同じくアクセント核の位置より 1 モーラ後ろの位置でピッチが上昇する。特殊モーラを含む音節である/ju[R/は LL で現れ、(3-169b, c)と同様のピッチパターンであると言える。しかし、これらの語に助詞/kara/を付けた場合は、/i[Nkara/(犬から)、/ju[Rkara/(湯から)、/gadza[N\kara/(蚊から)のように、語の後ろから 1 番目のモーラの前からピッチが上昇する。これは、(3-164)で見た浅間方言アクセントの Y 型の基本的なピッチパターンであり、例外的なピッチパターンを作り出す音声的傾向は反映されていない。(3-170b)の「薬」では助詞/nu/と/kara/を付けた場合のピッチパターンが、いずれも後ろから 1 番目のモーラの直前からピッチが上昇するという Y 型の基本的なピッチパターンになる。これらの例から、浅間方言では、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向が強く反映されていると考えられるが、それでもこれはあくまでも傾向であり絶対的な規則ではないと考えている。

最初に述べたように、(3-170)の語例はすべて浅 C から得られたもので、浅 A と浅 B の発音ではすべて V 型になる語である。上記では、(3-170)を Y 型の語であると解釈しており、結果的に(3-170)の語例を話者間でアクセント型が異なる例として処理していることになる。しかし、(3-170)を浅 A と浅 B と同じく V 型の語であると考えた場合、以下のような解釈もできる。(3-170a)の/i[Nkara/(犬から)、/ju[Rkara/(湯から)、/gadza[N\kara/(蚊から)と(3-170b)の/kusju[inu/(薬が)、/kusju[i\kara/(薬から)のドメインが二つに分かれているという解釈である。ドメインの境目を | で表し、(3-170)を書き換えると、(3-171)のようになる。

(3-171)

a.	犬	V2 ?	i/N[	iN/nu[	<u>i/N[kara</u>	(浅間・浅 C)
	湯	V2 ?	ju/R[	juR/nu[	<u>ju/R[kara</u>	(浅間・浅 C)
	蚊	V3 ?	gadza/N[	gadzaN[nu	<u>gadza/N[\kara</u>	(浅間・浅 C)
b.	薬	V3 ?	kusju/i[	<u>kusju/i[nu</u>	<u>kusju/i[\kara</u>	(浅間・浅 C)

(3-171)の/i/N[| kara/(犬から)、/ju/R[| kara/(湯から)、/gadza/N[| \kara/(蚊から)と/kusju/i[| nu/(薬が)、/kusju/i[| \kara/(薬から)のように、語と助詞の間にドメインの境目 | があり、アクセントのドメインが二つに分かれていると考えるなら、/i/N[/(犬)、/ju/R[/(湯)、/gadza/N[/(蚊)、/kusju/i[/(薬)の語末モーラの直前でピッチが上昇するのは V 型の語単独の場合の基本的なピッチパターンが現れているものと解釈することができる。

「犬」、「湯」、「蚊」、「薬」の語例を(3-170)のように Y 型の語であると解釈すると、徳之島諸方言に広く一般的にみられる音声的傾向で説明することができるという点で利点がある一方で、(3-171)のように V 型の語であるとする解釈すると、話者間でアクセント型が異なるという解釈を避けられるという点で利点がある。どちらの解釈にもそれなりに利点がある。

あり、どちらの解釈をとるべきか完全に決めることはできない。

浅間方言で見られる「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ (HH もしくは LL) にするという音声的傾向」について少し補足する。(3-169)の例は、特殊モーラを含む音節が LL になり、その結果、ピッチ上昇の位置がアクセント核の位置より 1 モーラ後ろにずれる例である。例外的なピッチパターンになるのでこのようなパターンが目立っているが、特殊モーラを含む音節が HH になったと考えられる例もある。(3-172)の例は C 系列の、2 モーラ目に /R/ を持つ 3 モーラ語で、アクセントは共時的に X 型である。浅間方言の C 系列の 3 モーラ語は一般的に Y 型と対応しており、C 系列の 3 モーラ語が X 型になるのは以下の 3 語(5 例)のみである。2 モーラ目に /R/ を持つという点が共通していることは注目に値する。

(3-172)

扇・団扇	X3	o\Ŗgi	o\Ŗginu	o\Ŗgikara	(浅間・浅 A)
扇・団扇	X3	o\Ŗgi	o\Ŗginu	o\Ŗgikara	(浅間・浅 B)
あおさ	X3	oR\sj̥a	oR\sj̥anu	oR\sj̥akara	(浅間・浅 A)
あおさ	X3	oR\sa	oR\sanu	oR\sakara	(浅間・浅 B)
一つ	X3	ʔt̥i\Ŗts̥i	ʔt̥i\Ŗts̥inu	-	(浅間・浅 A)

C 系列の語は、系列別語彙の考え方に基づく共時的なアクセント型として、イ群やロ群に見るような、Z 型が予測される語である。浅間方言では C 系列の語において、アクセントの山が 1 モーラ後ろに後退するという変化が起き、今の Y 型となったと考えられる(/○[○○/→/○○[○/])。 (3-172)の元のピッチパターンが Z 型/○[○○/であると想定すると、×/o[Ŗgi/(扇・団扇・浅 A), ×/o[Ŗsj̥a/(あおさ・浅 A), ×/ʔt̥i[Ŗts̥i/(一つ・浅 A)になる。/R/を含む音節(下線部)が、音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により、/o[Ŗ/、/o[Ŗ/、/ʔt̥i[Ŗ/が HH で発音されるようになったと考え、(3-172)のようなピッチパターンになる。結果的に(3-172)の 3 語は X 型に中和したと考えられる。通時的变化に関して詳しくは第 4 章を参照していただきたい。

上記のように「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ (HH もしくは LL) にするという音声的傾向」が現れていると考えられるパターンに関して詳しく述べたのは、次節で説明する複合語と外来語のアクセント規則と、前述した音声的傾向が関係している部分があるからである。次の(3-173)も、複合語アクセントと関係があると考えられる例外である。(3-173)において、浅 A のデータでは、/toRgu[ra/(台所・母屋と独立した家屋)に助詞/kara/を付けた場合に、アクセント核が置かれる/ra/ではなく、1 モーラ後ろの/ka/の前でピッチが上昇する/toRgu[ra/ka\ra/という例外的なパターンを示す。浅 B と浅 C では、/toRgu[ra\kara/(台所・母屋と独立した家屋から・浅 B)、/toRgu[raka\ra/(台所・母屋と独立した家屋から・浅 C)のように、前から数えて 4 番目のモーラである/ra/の前で

ピッチが上昇するという基本的なパターンである。

(3-173)

台所・母屋と 独立した家屋	V4	toRgu[ra:	toRgu[ra:\nu	<u>toRgu[ra/ka\ra</u>	(浅間・浅 A)
台所・母屋と 独立した家屋	V4	toRgu[ra	toRgu[ra\nu	toRgu[ra\kara	(浅間・浅 B)
台所・母屋と 独立した家屋	V4	toRgu[ra	toRgu[ra\nu	toRgu[ra\kara	(浅間・浅 C)

(3-173)に挙げた「台所・母屋と独立した家屋」は、アクセント核に係る音節に特殊モーラを含む語ではないので、このようなピッチパターンが現れる理由を(3-169)で説明したような音声的傾向では説明できない。/toRgu[ra:/ (台所・母屋と独立した家屋) と助詞の /kara/ を別の語とした上で、複合語アクセントのパターンが例外的に現れた例だと考えれば、(3-173)がこのようなピッチパターンで現れることが、ある程度説明できる。次節で述べる複合語アクセント規則に従うと、前部要素が低起式であり、かつ、前部要素が4モーラ以上である場合は、前部要素と後部要素の境界でピッチが上昇する。/toRgu[ra:/ (台所・母屋と独立した家屋) は低起式であり、4モーラ以上の語であるので、/toRgu[ra:/ (台所・母屋と独立した家屋) が前部要素となる複合語のアクセントは、前部要素と後部要素の境界でピッチが上昇するはずである。/kara/ を複合語の後部要素であると考えれば(話者がそのように捉えて発音しているならば)、前部要素と後部要素の境界である/ka/の前のモーラの直前でピッチが上昇するピッチパターンもあり得る。

3.11.1.4 上野(2014, 2015)の複合語と外来語アクセント資料の分析

上野(2016)では、名詞アクセントの体系を描く際に、ネイティブワード(伝統的な方言語彙)、複合語、外来語を区別せず、すべての語類を含めた名詞アクセント体系を提示している。しかし、筆者はネイティブワード、複合語、外来語を分けて分析すべきであると考え。なぜなら、複合語と外来語のピッチパターンにはネイティブワードのデータとは異なる規則を見出すことができるからである。本節では、上野(2014)の複合語アクセントの資料と上野(2015)の外来語アクセントの資料を、(3-164)で提示した浅間方言の3型アクセントを元に分析した結果について述べる。まず、外来語アクセントから説明する。(3-174)は本稿による浅間方言の外来語アクセント規則である。(3-174b)で見るように、低起式の場合、語の長さによってピッチパターンに違いが出る。

(3-174) 浅間方言の外来語アクセント規則

- a. 高く始まる語(高起式)は「X型(“0”)」になる。
- b. 低く始まる語(低起式)は、語の長さによって以下のようなアクセント型になる。
 - b1. 3モーラ以下の語は「Y型(“-1”)」になる。
 - b2. 4モーラ以上の語は「V型(“+4”)」になる。

(3-174)について補足する。4モーラ語の場合、語末モーラと前から数えて4番目になるモーラが同じになるため、(3-174b1)と(3-174b2)のどちらでも解釈することができるが、以下で述べる、外来語アクセント(3-174)と複合語アクセント(3-179)の例外になる語例のピッチパターンから見ると、浅間方言のデフォルトのアクセント型はV型であると考えられるため、ここでは、4モーラ語を(3-174b2)で解釈する。また、アクセント核が置かれることが予想される位置に特殊モーラである、/N/、/Q/、/R/と、特殊モーラ相当である/i/がある場合に、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により、特殊モーラを含む音節はLLになる。よって、ピッチ上昇はアクセント核の位置より1モーラ分後ろにずれる。(3-169)と同じパターンである。(3-175)に浅間方言の外来語の例を示す。語例は前述したとおりすべて上野(2015)からの引用であるが、アクセント核及びピッチ上昇、ピッチ下降を表す記号は本稿の解釈および表示方法に合わせて変更した。アクセント核が置かれることが予想される位置に特殊モーラがある例は、モーラ数の後ろに(特)を付けて記す。

(3-175)

	モーラ数 (基底)	語例	助詞付き(から)
(3-173a) 高 起式 「X型」	2	[アVマ(とプロ.アマチュア)]	[アVマから]
	3	[パナVマ]	[パナーVマから]
	4	[パンスト]	[パンストーVから]
	5	[ステンレス]	[ステンレーVスから]
	6	[ステンレス]	[ステンレーVスから]
	7	[ソフトクリーVム]	[ソフトクリーVムから]
(3-173b1) 低 起式 「Y型」	2	ガー[ス(ガス)]	ガー[スVから]
	3	アイ[ヌ]	アイ[ヌVから]
	3(特)	スキ[ー]	スキ[ーVから]
(3-173b2) 低 起式 「V型」	4	コンビ[ニ]	コンビ[ニ]から
	4(特)	エアコ[ン]	エアコ[ンVから]
	5	シンデ[レーVラ(シンデレラ)]	シンデ[レーVラから]
	5(特)	カルシュ[ーVム(カルシウム)]	カルシュ[ーVムから]

	6	パイナ[プー]ル (パイナップル)	パイナ[プー]ルから
	6(特)	アナウ[ン]サー	アナウ[ン]サーから

上野(2015)のデータをすべて検討した結果、(3-174)の外来語アクセント規則の例外になるものは、1077 語中 15 例 (1.4%) だけである⁴⁹。例外になる語を見ると、3 モーラ語であって (3-174) の規則が Y 型を予測するのだが、浅間方言のデフォルトと考えられる V 型になる例がコレラ¹ー・コレラー¹から(コレラ)、ラッパ¹ー・ラッパ¹ー¹から(ラッパ)、ロシヤ¹ー・ロシヤ¹ー¹から(ロシア)の 3 例あり、助詞/から/を付けた時のピッチパターンがアクセント核の位置より 1 モーラ分後ろにずれるのは、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向によるものと考えられる。同様に、特殊モーラを含む音節が HH になる例が、ユニ¹ホー¹ム、ロン¹ドンの 2 例ある。この 5 例を除くと、(3-174)で説明できないのは、1077 語中以下の(3-176)に示した 10 例 (0.9%) のみになる。浅間方言で外来語がどういった基準で高起式もしくは低起式になるかに関してはまだ明らかではない。これに関しては今後の課題とする。

(3-176)

カリフォル¹ニヤ¹ー(カリフォルニア)、ジンキス¹カン、トラベル¹ミン(薬)、ハーモニ¹カー(ハーモニカ)、バクテリ¹ヤー(バクテリア)、プラネタ¹リューム(プラネタリウム)、プロレス¹ラー、ヘリコプ¹ター、ヨーグル¹トー、ドア¹ー・ドア¹ー¹から(ドア)

次に複合語アクセントに関して説明する。(3-177)は本稿による浅間方言の複合語アクセント規則である。浅間方言は「前部要素決定型」の複合語アクセント規則を持つ。(3-177)をみると、前部要素が高起式の場合、複合語も高起式(X 型)に、前部要素が低起式の場合、複合語も低起式(V 型、境界表示)になる。上野(2014)では、これを「高起 / 低起の式保存」と呼んでおり、「前部要素が高く始まるか低く始まるかの違いが、それを含む複合語においても規則的に反映される(保存される)ことをさす」(上野 2014, p.143) と述べている。この「高起 / 低起の式保存」に関しては、筆者も同じ意見である。筆者と上野(2014)の違いは、前部要素が低起式(Y 型、V 型)である場合、語の長さによってピッチパターンに違いが出るという部分、すなわち (3-177b1) と (3-177b2) の予測ができる点にある。

⁴⁹ 同一語でピッチパターンが 2 つ見られる例は、2 語と数えている。また、オレンジ[ジュースや消防[ポンプなどの例は、(3-177)の複合語アクセント規則に従うものと考えられるため、例外と処理しカウントしていない。

(3-177)

- a. 前部要素が「**高起式**(X 型)」 → 「X 型」
- b. 前部要素が「**低起式**(Y 型・V 型)」
 - b1. 前部要素が 2 モーラ以下 → 「V 型」
 - b2. 前部要素が 4 モーラ以上 → 「境界表示」 (= 前部要素と後部要素の境界で上昇)
(前部要素が 3 モーラである場合、b1 と b2 の両方の解釈が可能)

(3-177)について補足する。前部要素が 3 モーラである場合、4 モーラ目が、後部要素の 1 モーラ目になり、(3-177b1)の「V 型」と、(3-177b2)の「境界表示」で予測するピッチ上昇の位置が同じになるため、どちらでも解釈することができる。また、(3-177b1)で、複合語が 4 モーラであり、アクセント核が置かれることが予想される位置に特殊モーラである、/N/、/Q/、/R/と、特殊モーラ相当である語末の/i/がある場合は、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的傾向により、特殊モーラを含む音節は LL もしくは HH になる。(3-178)は浅間方言の複合語の語例である。語例は前述したとおりすべて上野(2014)からの引用であるが、アクセント核及びピッチ上昇、ピッチ下降を表す記号は本稿の解釈・表示方法に合わせて変更した。アクセント核が置かれることが予想される位置に特殊モーラがある例は、モーラ数の後ろに(特)を付けて記す。

(3-178)⁵⁰

式	モーラ数	前部要素	後部要素	複合語	
高起式	2	kabi:(紙)	haku:(箱)	X 型	kabi:\baku
	3	'iwa:\te(岩手)	keN(県)	X 型	'iwatekeN
	4	'u:sIma: (〔奄美〕大島)	kuci:(口(言葉))	X 型	'u:sImagu:\cI
低起式	2	kumI[: (米)	misju[: (味噌)	V 型	kumImi[sju:
	2	na:[ha(那覇)	kucI:(口(言葉))	V 型	nahagu:[cI
	2(特)	na:[ha(那覇)	miNjo[: (民謡)	V 型	nahami[N/jo:
	2(特)	sjo[i(醤油)	bi[N(瓶)	V 型	sjoI/bi[N
	3	'aNba[: (油)	kuci:(口(言葉))	V 型	'aNba[gu:]cI
	3	'ehji:[me(愛媛)	keN(県)	V 型	'ehjime[keN
	4	'icjuki[na: (糸木名)	kuci:(口(言葉))	境界表示	'icjukina[gu:]cI
	4	haNzI[N(芋)	hatE[: (畑)	境界表示	haNzIN[batE:

⁵⁰ 上野(2014)の表記で、本稿と異なる部分について説明する。' は声門閉鎖音[ʔ]、P,T,C,K,M,N は喉頭緊張化音、I,E は中舌の[i]と[ɜ],: は[:]を意味する。以下、上野(2014)からの引用はすべてこれに従う。

上野(2014)の資料の中には、三つ以上の語からなると考えられる複合語の例も含まれている。このような例の場合、(3-179)のような規則があると考えられる。(3-180)は三つ以上の語からなる複合語の例である。ここでの例も上野(2014)からの引用であるが、アクセント核及びピッチ上昇、ピッチ下降を表す記号は本稿の解釈・表示方法に合わせ変更している。また、/ は、筆者が書き加えたもので、各要素の境界を示すものである。

(3-179)

- a. 1 番目の要素が「高起式(X 型)」 → 「X 型」
- b. 1 番目の要素が「低起式(Y 型・V 型)」 → 「境界表示」
 - b1. 1 番目の要素が 2 モーラ以下 → 2 番目の要素と 3 番目の要素の境界で上昇
 - b2. 1 番目の要素が 3 モーラ以上 → 1 番目の要素と 2 番目の要素の境界で上昇

(3-180)

前部要素(1 番目)			複合語
高起式	kjo:\to 京都		kjo:to/geizjucI/daiga:\ku (京都芸術大学)
	sIri:\cI 私立		sIri:\cI/sIka/daiga:\ku (私立歯科大学)
低起式	2 モーラ	na:[ha 那覇	naha/hu:cI[/mucCI (那覇よもぎ餅)
	2 モーラ	na:[ha 那覇	naha/kjo:gi[/zjo:(那覇競技場)
	3 モーラ	mija:[gi 宮城	mijagi[/kjo:iku/daiga:\ku (宮城教育大学)
	3 モーラ	'azja:[ma 浅間	'azjama[/hu:cI/mucCI (浅間もよぎ餅)
	4 モーラ	to:kjo: 東京	to:kjo:[/'ika/sIka/daiga:\ku (東京医療歯科大学)
	4 モーラ	daiga:[ku 大学	daigaku[/iN/zIdai (大学院時代)

以上の複合語アクセント規則を踏まえて、上野(2014)のデータをすべて検討した結果、(3-177)と(3-179)の複合語アクセント規則の例外になるものは、約 1240 語中 82 例(6.6%)である⁵¹。その例外になる語を見ると、まず、「高起 / 低起の式保存」の例外とみられる例が 10 例ある。これは、上野(2014)でも取り上げられている例外である。(3-181)は、上野(2014)の表「(4) 式保存の例外」の引用である⁵²。(3-181)を本稿のアクセント体系に照らして見ると、すべて「V 型」になる語である。「V 型」は、おそらく、浅間方言のデフォルトになる型であると考えられる。

⁵¹ 外来語アクセントと同じく、同一語でピッチパターンが 2 つ見られる例は、2 語と数えている。

⁵² 上野(2014)の表「(4) 式保存の例外」には、Cf.で、水で始まる、「高起 / 低起の式保存」の例外にならない語例が載っているがここでは省略する。それ以外は原文のまま。

(3-181)

複合語	浅間方言	前部要素	浅間方言	後部要素	浅間方言
中柱 (大黒柱)	na:ja:[ba:]ra, na:ba:[ra]	中	[na:]	柱	ha:[ra]
中指	na:'wI:[bI]	中	[na:]	指	['wI:]bI
烏籠	tuika:[gu]	烏	[tui]	籠	(稀) ka:[gu]
風車 (おもちゃ)	kazjagu[ru:]ma	風	[kazjI:]	車	Kuruma[:]
酒樽	(稀)sjakIda:[ru]	酒	[sjakI:]	樽	ta:[ru]
酒瓶	sjakIgwI[N[	酒	[sjakI:]	瓶	bi[N[, kwI[N[
酒甕 (- がめ)	sjakIgwI[N[, (稀) sjakIga:[mI]	酒	[sjakI:]	甕	ka:[mI]
水薬	mIzIgu[sjui]	水	[mIzI:]	薬	kusju[i]
水甕	mIzIga:[mI]	水	[mIzI:]	甕	ka:[mI]
伊予みかん	'ijogu[nIN]	伊予	(新) ['i(:)]jo	みかん	KunI[N[, (新) [mikaN]

また、(3-177)と(3-179)の複合語アクセント規則の例外になるものには、前部要素が複合語として扱われることで、全体が 3 要素以上の複合語として扱われていると考えられる語例がある。例えば、前部要素が、/tokunu[sIma:/(徳之島)、/Kikai[zIma:/(喜界島)、/hokkai[do/(北海道)、/ocjano[mi:VzI/(お茶の水(大学))である語である。これらの語は、/tokunu[/sIma:/(徳之島)、/Kikai[/zIma:/(喜界島)、/hokkai[/do/(北海道)、/ocjano[/mi:VzI/(お茶の水(大学))のように、二つの要素からなる複合語として扱われているものと考えられる。そのため、これらの語の後ろにどんな語(要素)がついても、その語は 3 つ以上の要素からなる複合語になる。(3-179)の規則に従えば、上記の語の 1 番目の要素は、/tokunu/、/Kikai/、/hokkai/、/ocjano/で、1 番目の要素が 3 モーラ以上あるため、これらの語の後ろに他の語(要素)がついた時には、1 番目の要素と 2 番目の要素の境目でピッチが上昇するはずである。実際の上野(2014)での語例を見ると、/tokunu[/sIma/keNkju:/(徳之島研究)、/Kikai[zImarazI:Vo/(喜界島ラジオ)、/hokkai[/do:/kaNko:/(北海道観光)、/ocjano[/mi:VzI/daiga:\ku/(お茶の水(大学))のように 1 番目の要素と 2 番目の要素の境目でピッチが上昇する。このようなパターンで説明できるのが、(3-177)と(3-179)の複合語アクセント規則の例外になる 82 例中 63 例である。「高起 / 低起の式保存」の例外とみられる 10 例と合わせると、82 例中 73 例に関してはそれなりの説明が可能ということになり、本稿の分析において完全な例外と言えるものは約 1240 語中 9 語 (0.7%) のみということ

になる⁵³。

3.12 共時的分析のまとめ

本章では、徳之島の 19 地点の名詞アクセント体系の記述を行った。本節では、そのまとめとして、徳之島諸方言の名詞アクセント体系の分布について述べる。その前に、徳之島諸方言の一部の方言で見られる、X2 の C 系列語に特徴的に現れる語頭モーラの直後の下降に関して、本稿の解釈を付け加えておくことにする。

3.12.1 X2 の C 系列語に見られる下降に関する本稿の解釈

徳之島諸方言のうち、兼久方言、西阿木名方言、阿権方言、面縄方言、伊仙方言の X2 の語例において、語頭モーラの直後に下降が現れる発話(○\○)が観察される。このような語例は C 系列語に集中的にみられ、A 系列・B 系列の X2 ではほとんど見られないという系列の偏りがある。このような傾向は特に西阿木名方言と阿権方言で著しく、一見すると、(3-182a) の C 系列の X2 と、(3-182b) の A 系列・B 系列の X2 の間にピッチの下降によるアクセントの対立があるようにさえ見える。しかし、本稿はこのような X2 の C 系列語にみられる下降は、通時的な名残として習慣的に現れるものであり、アクセントの弁別的な下降ではないと考える。

(3-182)

a.	柱	X2	C 系列	ha\ra	ha\ranu	ha\rakara	(西阿木名)
	きのこ	X2	C 系列	na\ba	na\banu	na\bakara	(阿権)
b.	羽	X2	A 系列	hani	hani\ngu	hanika\ra	(西阿木名)
	匂い	X2	A 系列	kadza	kadza\ngu	kadzaka\ra	(阿権)

西阿木名方言と阿権方言の共時的なアクセント体系において、(3-182a)と(3-182b)の間に下降位置による対立を認めた場合には以下のような問題点が考えられる。まず、昇り核を持つ他の型と違い、/×○]○/だけ、ピッチの下がり目が弁別的な型ということになる⁵⁴。同じ体系内に 2 種類のアクセント核(昇り核と、おそらく下げ核)を持つという分析である。また、このような分析をしてしまうと、話者が/×○]○/のアクセント核によるピッチの下降と徳之島諸方言においてフリーバリエーションで現れるピッチの下降(3.1.3.1 節)という 2 種

⁵³ ローレンス(2015)では、浅間方言の長い複合名詞の音調付与と、語に指小辞/gwaR/を付けた指小語形のピッチパターンの分析が、また、ローレンス(2020)では、語に/muN/(者・物)を付けた時のピッチパターンの分析がなされているが、長い複合名詞はもちろんのこと、指小辞/gwaR/と/muN/(者・物)も複合語の後部要素(最後の要素)だと考えると、ローレンス(2015, 2020)に載っているデータも、(3-177)と(3-179)の複合語アクセント規則からほとんどの例を説明することができる。

⁵⁴] は、弁別的な下がり目(おそらく、下げ核)を意味する。

類の下降を区別しているということになるが、一般化して区別することは難しいように思われる。ゆえに、本稿ではこのような分析は取らない。

X2 の C 系列語に集中的に見られるピッチの下降は何に起因するものであるかを考えてみると、X2 の C 系列語の通時的な変遷にその理由を求めることが出来る。第 4 章で詳しく述べるが、本稿では徳之島祖語の Z2*/[○Λ;○/の語頭にある音節(下線部)が、音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さにするという音声的变化によって、徳之島祖語の Z2 は通時的に X2 や Y2 と合流したと考える(3-183(=3-18))⁵⁵。

(3-183(=3-18)) Z2 の通時的変遷



徳之島諸方言に見られる Z2 を見ると、多くの場合/[○Λ;○/の下線部のようにピッチ上昇が起きた後、1 モーラ後ろにピッチの下降が現れる。これは(語末が特殊モーラである語例以外の)Z3 や Z4 の場合でも同じで、/○[○Λ;○/の下線部のようにピッチの下降が観察される(3-184a)。このように、ピッチ上昇位置の 1 モーラ後に生じる下降は、Z 型のアクセントによるピッチの上昇を聴覚的に目立たせるために生じているものであると考えられる。Z2 の例は少ないが、(3-184b)の下線を引いた語例のように、ピッチ上昇の 1 モーラ後にピッチの下降が現れない語例も観察されるので、Z 型におけるピッチの下降が義務的なものではないことは確かである。

(3-184)

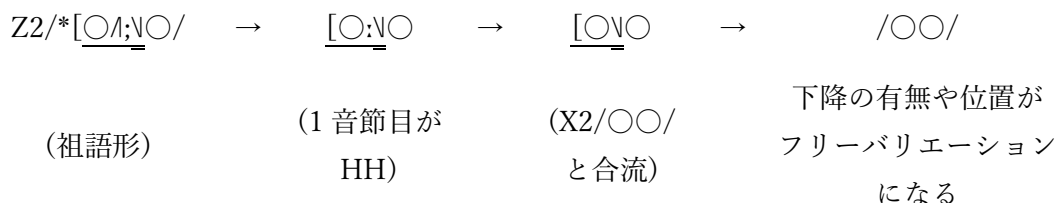
a.	バツタ	Z2	[gaΛ;ʋta	[gaΛ;ʋtanu	[gaΛ;ʋtakara	(手々)
	刀	Z3	ka[taʋna	ka[taʋnanu	ka[taʋnakara	(面縄)
	朝	Z4	situ[mī:ʋti	situ[mīʋtinu	situ[mīʋtikara	(轟木)
			/ situ[mīʋti	situ[mīʋtiga		
b.	鍋	Z2	[naΛ;bi / [naΛ;ʋbi	[naΛ;ʋbinu	[naΛ;biʋkara	(面縄)
	鏡	Z3	ka[gami	ka[gaʋminu	ka[gaʋmikara	(瀬滝)
	雷	Z4	nai[gami	nai[gaminu	nai[gamikara	(手々)

これを踏まえたうえで、(3-184a)の/[○Λ;○/のようなピッチパターンを持っていたと考え

⁵⁵ 徳之島祖語の Z2 を、本稿の第 4 章では C 型の基底 2 モーラ語(C2)と言い換えている。

られる徳之島祖語の Z2 が、X2 に合流する場合に想定される通時的変遷を(3-185)で確認する。

(3-185) Z2 の通時的変遷



祖語形 Z2/*[○Λ;V○]/の 1 音節目(下線部)は、/*[○;V○]/のような HH のピッチパターンになる。/*[○;V○]/の 2 モーラ目にある、アクセント情報に基づき生じていた/;/は、/;/の前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになると考えられる([○;V○])。3.1.3 節で述べたとおり、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。以上の過程を経て、祖語形 Z2 は最終的に/[○;V○]/もしくは/[○V○]/になり、X2 に合流(中和)したと考えられるわけだが、通時的変遷過程から見た共時的体系がこの時点にあるのが西阿木名方言と阿権方言であり、下降が習慣的に残っている状態にあると考えられる。

さらに言うと、/[○V○]/が/○○/になった(=下降がフリーバリエーションで現れるようになった)と考えられる方言が瀬滝方言である。(3-186)の下線を引いた語例のように、瀬滝方言の X2 の C 系列語において下降の有無と位置はフリーバリエーションで現れる。徳之島諸方言の通時的変遷に関する詳しい分析は第 4 章を参照してほしい。

(3-186)

針	X2	C 系列	<u>hai</u>	ha\inu	<u>haikara</u>	(瀬滝)
きのこ	X2	C 系列	na\ba	na\banu / <u>naba\nu</u>	na\bakara	(瀬滝)
煤	X2	C 系列	<u>susu</u>	<u>susunu</u>	<u>susukara</u>	(瀬滝)
影・陰	X2	C 系列	ka\gi	ka\gi <u>nu</u> / <u>kagi<u>nu</u></u>	ka\gikara	(瀬滝)

3.12.2 徳之島諸方言の名詞アクセント体系の分布

まず、徳之島諸方言のアクセント型による分類について確認する。徳之島諸方言は、アクセント体系と、それを構成するアクセント型の種類によって、イ群、ロ群、ハ群と、大きく三つに分けて記述することができる(大区分)。イ群はX型、Y型、Z型で構成された3型アクセント体系を持つ方言群、ロ群はX型、Y型、Z型、W型で構成された4型アクセント体系を持つ方言群、ハ群はX型、Y型、V型で構成された3型アクセント体系を持つ方言である。また、Y1、Z2、Z3の有無やアクセントドメインの違いをもとに、イ群をイ1群、イ2群、イ3群に分けることができ、ロ群をロ1群、ロ2群、ロ3群、ロ4群に分けることができる(小区分)。図.3-12は、上記のように分類し、記述した地域が、それぞれ徳之島のどこに位置するかを記したものである。

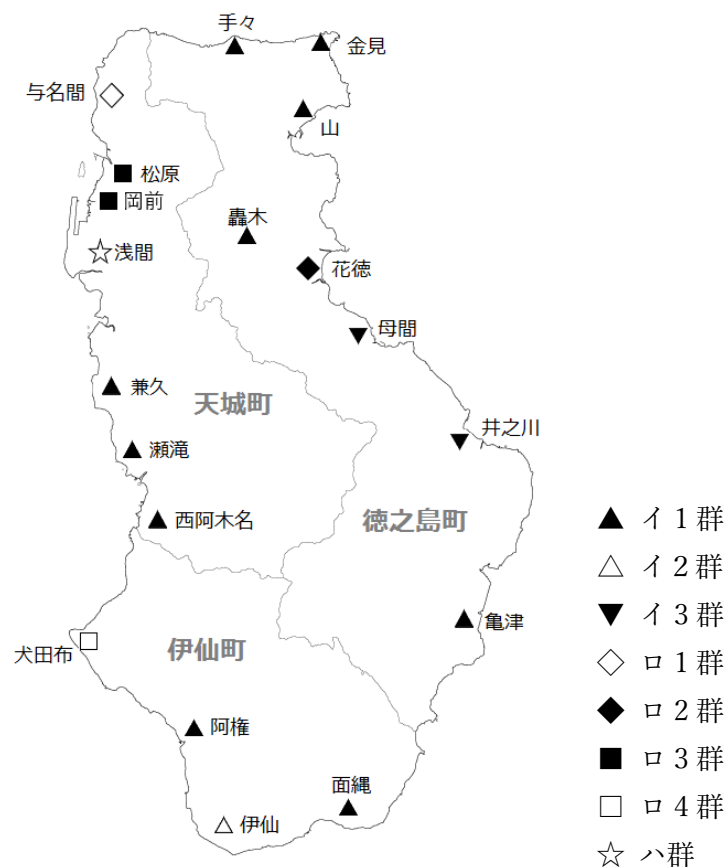


図 3-12 徳之島諸方言の名詞アクセントの分布

図.3-12を見ると、同じ群のアクセント体系が特定の地域に固まっているという地理的分布にはなっていない。このような分布をもとに通時的視点から考えると、徳之島諸方言においては、ある特定の地域にある時点で起こった特異な変化、あるいは共通の改新を一定の地域内の方言が受け継ぐような通時的変遷を経たという過程は考えにくい。実際、徳之島諸方言のアクセントの通時的変遷は、各方言が、その方言内で言語学的に起こって不自然ではな

い変化を積み重ねて個々に変遷を遂げた結果であると考えられる。したがって、上記の大区分も全体としてはあくまでも共時的な視点での分類であって、通時的に同じ祖方言の共通の改新を共有しているという主張は含んでいない。松原と岡前のように非常に近接している集落で同じ小区分になっているところについては同じ祖方言を想定できると思われるが、徳之島全体を俯瞰すると、基本的には徳之島祖語から言語学的に起こりやすい変化が別々の地域で起きた場合に似たアクセント体系（大区分）になっている地域（＝島）であると考えている。

徳之島諸方言のアクセントの通時的変遷を説明するとき、重要なキーワードとなるのが、二つの音声現象である。一つは、手々や瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、伊仙などの Y2 で観察される、アクセント核(昇り核)でピッチが上昇する際に、通常の 1 モーラ分の長さより音価が長くなる音声的な現象である。もう一つは、徳之島諸方言において広く観察される、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという現象(音声的傾向)である。徳之島諸方言で共時的に観察されるこの二つの音声現象が、どのようにアクセントの通時的変遷に繋がっていくのかに関しては、次章で詳しく述べることとする。

第4章 徳之島諸方言の名詞アクセントの通時的変遷

4.1 徳之島祖語のアクセント体系

本章では徳之島諸方言の名詞アクセントの通時的変遷について述べる。第3章の最後に述べた通り(3.12節)、徳之島諸方言のアクセント体系は、各方言が、共通する祖方言(徳之島祖語)から、各方言内で自律的变化を積み重ねて個々に変遷を遂げた結果、第3章で述べたような現在のアクセント体系に至ったと考えられる。本節では徳之島祖語から各方言への変遷過程について述べる前に、本稿で仮定する、徳之島祖語のアクセント祖体系を説明することにする。

徳之島祖語のアクセント体系は「昇り核を持つ3型アクセント体系」であったと考える。本稿では、徳之島祖語のアクセント型を松森(2012)の「系列別語彙」に合わせA型、B型、C型と名付けることにする。A型は高起式であり、B型とC型は低起式である。A型は語頭にアクセント核を持ち(+1)、B型は後ろから1番目(語末)のモーラに昇り核を持ち(-1)、C型は後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つ(-2)。ドメインは「語」で、アクセントの山はドメインにつき一つだけで、重起伏は許されない(4-1)。

(4-1) 徳之島祖語のアクセント祖体系(仮説)

徳之島祖語		1	2	3	4
A型(+1) 高起式	基底	[○	[○○	[○○○	[○○○○
	表層単独	[○	[○○	[○○○	[○○○○
	1モーラ助詞付き	[○△	[○○△	[○○○△	[○○○○△
	2モーラ助詞付き	[○△△	[○○△△	[○○○△△	[○○○○△△
B型(-1) 低起式	基底	[○	○[○	○○[○	○○○[○
	表層単独	[○Λ;	○[○	○○[○	○○○[○
	1モーラ助詞付き	[○Λ;△	○[○△	○○[○△	○○○[○△
	2モーラ助詞付き	[○Λ;△△	○[○△△	○○[○△△	○○○[○△△
C型(-2) 低起式	基底		[○○	○[○○	○○[○○
	表層単独		[○Λ;○	○[○○	○○[○○
	1モーラ助詞付き		[○Λ;○△	○[○○△	○○[○○△
	2モーラ助詞付き		[○Λ;○△△	○[○○△△	○○[○○△△

徳之島祖語のアクセント体系は、第3章で述べたイ1群のアクセント体系と類似したものである。ただし、イ1群のアクセント体系のX型は高起式で、無核であるのに対し、徳之島祖語のA型は、語頭にアクセント核を持っていたと仮定する方が通時的な変遷過程をより明確に説明することができる。具体的には、祖語のA型と現在の徳之島諸方言のX型

を比較した時に想定できる、「山の後退」と関係しているが、これに関しては 4.2.2 節で詳しく述べることにする。第 3 章で見た徳之島諸方言のアクセントの共時的な分析で、X 型を徳之島祖語の A 型のような、語頭にアクセント核を持つ型(“+1”)と分析しない理由は、各方言の共時的体系で語頭モーラに昇り核があるという分析をする積極的な理由がないためである。

徳之島祖語の A 型が語頭にアクセント核を持っていたとすると、A1(A 型の基底 1 モーラ語)と B1(B 型の基底 1 モーラ語)、また、A2(A 型の基底 2 モーラ語)と C2(A 型の基底 2 モーラ語)⁵⁶の差は、高起か低起かという「式」の差にある。また、本稿では、徳之島祖語の A 型、B 型、C 型は現在の徳之島諸方言の X 型、Y 型、Z 型に密接に関連しているものであると考える。もし、徳之島祖語が全く変化せず現在に至ったとするならば、その方言は共時的に X 型、Y 型、Z 型と限りなく類似した 3 型アクセント体系として分析される体系であったであろうと仮定する。

徳之島祖語の A 型、B 型、C 型の所属語は、基本的に松森(2012)の「系列別語彙」に準ずるものと仮定する。本稿の Appendix 2~20 には、各語例に共時的なアクセント型と基底のモーラ数と共に、松森(2012)の「系列別語彙」でどの系列に値する語であるかが併記している。通時的観点から通時的変遷を辿るためには、徳之島諸方言の各語例が同語源であることが重要である。本稿では、松森(2012)の「系列別語彙」に記載されている喜界島赤連、沖永良部島知名、沖縄本島金武の語形を参考にし、同語源と考えられるものにだけ A(A 系列)、B(B 系列)、C(C 系列)と印を付けている。本章で考察の対象とするものはこのような、松森(2012)の「系列別語彙」と同語源と考えられる語である。

(4-1)で見た徳之島祖語のアクセント体系は松森(2017)が予測する北琉球祖語のアクセント体系と類似した部分がある。特に B 系列と C 系列に関しては本稿で主張する徳之島祖語の形と一致している。

(2-20(=4-2)) 松森(2017)の北琉球祖語のアクセント体系(仮説)⁵⁷

	2 音節名詞 単独形 (助詞付き)	3 音節名詞 単独形
A 系列	* $\bar{\mu} \mu$ ($\bar{\mu} \mu \bar{\mu}$)	* $\bar{\mu} \mu \bar{\mu}$
B 系列	* $\mu \bar{\mu}$	$\mu \mu \bar{\mu}$
C 系列	* $\mu : \bar{\mu}$	$\mu \bar{\mu} \mu$

⁵⁶ 徳之島祖語においても、現在の徳之島諸方言と同じく、アクセント型とモーラ数を表す時は、アクセント型の後ろに語の基底形のモーラ数を付けて表す。C 型の基底 3 モーラ語を C3 と書くといった具合である。

⁵⁷ 上付きの線は、高音調を意味し、 μ はモーラを意味する。

松森(2017)の主張する北琉球祖語のアクセント体系と本稿の徳之島祖語のアクセント体系が異なる部分について述べると、まず、A 系列のピッチパターンの違いである。松森(2017)では、南琉球方言と北琉球方言の共通祖語である琉球祖語が、A 系列に*LLH、B 系列に*LHL、C 系列に*HLL のようなプロソディー体系を持っていたという仮説を提示している。(4-2)の A 系列のピッチパターンは*LLH から「語頭隆起」した*HLH が北琉球祖語の A 系列のピッチパターンとして立てられているように思う。(4-2)から見れば、(4-1)の本稿が仮定する徳之島祖語の A 型のピッチパターンは北琉球祖語の*HLH から「同化の変化」によって*HHH へと移り変わったものと位置づけられそうである⁵⁸。松森(2017)に関しては、第 2 章を参照して欲しい。

最後に、本章で分析の対象とするデータや、使用する記号や語例の示し方に関して述べる。本章で分析の対象とするのは、徳之島諸方言の基底 1 モーラから 3 モーラの語である(Appendix 2~20 を参照)。基底 4 モーラ語に関しては語数も少なく、語例の系列が、特定の系列に偏っている(A 系列の基底 4 モーラ語が見つからない)ため、今回は分析の対象から外す。使用する記号は、基本的に第 3 章の(3-1)と同じであるが、徳之島祖語のアクセントには、現実に観察されたものではなく、「想定されるもの」という意味で、*(アスタリスク)を付けて記すことにする。語例の示し方に関しては、第 3 章の(3-2)の形式に加えて、何系列であるかを追加して示すことにする(4-3)。

(4-3)

a.

調査項目 (意味)	アクセント型 とモーラ数	系列	語単独	1 モーラ 助詞付き	2 モーラ 助詞付き	(方言名)
--------------	-----------------	----	-----	---------------	---------------	-------

b.

兎	Z3	C 系列	u[savgi	u[savginu	u[savgikara	(轟木)
舟	X2	C 系列	hu\ñi	hu\ñinu	hu\ñikara	(与名間)

c.

島	V2	B 系列	sīma[:	sīma:[nu	sīmaka:[ra	sīmaka[raN\ba	(浅間・浅 A)
					sīmaju:[ka		

⁵⁸ 「語頭隆起」や「同化の法則」は金田一(1974[2005])で述べられている類型的に起こりやすい変化の一つである。金田一(1974[2005])の「語頭隆起」や「同化の変化」に関する説明を引用すると以下のようである(●は高、○は低、|はピッチの下がり目、をそれぞれ意味している)。「変化の方向は、時に、型としては明瞭に聞き取れる形へと変化する。例えば○○○のような型は語の始まりがはっきりしないので嫌われ、●|○○のような型に変化しやすい。〈語頭隆起の変化〉」(546p)。「●|○○のような型では、第一拍に引きずられて、第二拍も高い●●|○(HHL)になりやすい。…(中略)…《同化の変化》」(546p)。

4.2 徳之島諸方言の通時的変遷に関わる四つの変化

上記の徳之島祖語のアクセント体系（4-1）から現在の徳之島諸方言のアクセント体系に至ったと考えた時、徳之島の各方言で起きたと考えられる具体的な変化をまとめると、(4-4)のような四つの変化が起こっていると考えられる。変化が起きる順序や四つのうちのどの変化が起きてどの変化が起きていないかについては方言差がある。

(4-4) 通時的に徳之島諸方言に起こったと考えられる変化

- a. C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」
- b. A 型と C 型における「山の後退」(※付随的に「核の後退」をも引き起こす)
- c. 型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」
- d. 同じアクセント型に所属する語彙が持つピッチパターンを同じようにしようとする「同調的な変化」

(4-4)の中で、(4-4a)は調査した徳之島諸方言すべてにどこかの時点で起こった⁵⁹と考えられる変化であり、(4-4b)と(4-4c)は方言ごとに起こったり起こらなかったりしたと考えられる変化である。(4-4d)は、調査した徳之島諸方言で唯一浅間方言にだけ起こったと考えられる変化である。以下では、(4-4)で述べた変化のうち(4-4a-c)について原理とともに詳しく説明する。(4-4d)は主に浅間方言に起こったと考えられるものなので、4.3.15 節にて、浅間方言における通時的変遷を説明する際に、合わせて述べることとする。

4.2.1 C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流(中和)する「型の合流」

本節では、徳之島祖語から現在の徳之島諸方言に至る過程で、C2 の語が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流(中和)する通時的な変遷に関して説明する(4-4a)。この変化には「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」が深く関係している。

4.2.1.1 C2 が A2 もしくは B2 に合流(中和)する「型の合流」

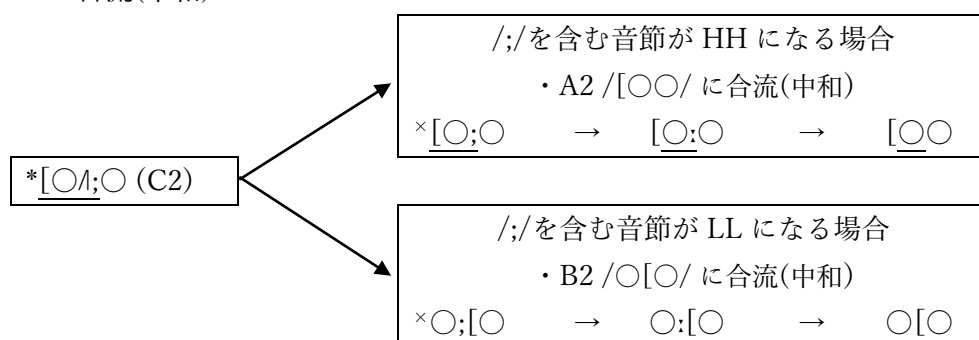
まず、C2 の表層形のピッチパターンについて説明する。徳之島祖語における C2 は現在の徳之島諸方言(イ 1 群、ロ 1 群、ロ 2 群)で見られる Z2(cf. 3.3.1 節)と同じ解釈が可能である。(4-1)の祖体系で見ると C2 の基底で昇り核は語頭に付いている(*[○○])。しかし、C2 の昇り核の位置でピッチが上昇すると A2 と表層でのピッチパターン同じになってしまう。本稿では、現在の徳之島諸方言の Z2 と同様、A2 と C2 の中和を避けるために、C2 が 1 モーラ目の母音を伸ばして語の長さを 3 モーラにしつつ、後ろから数えて 2 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチ上昇している(*[○A;○])と考える。C2 で現れる /:/ は、

⁵⁹ 祖語で起こったという意味ではない。

第3章の(3-5)で前述した「基底にあるアクセント情報に関して表層に生じたと考えられる母音の伸び」に当たるもので、C2の2モーラ目にある母音の伸びを/;/で記すことにする。現在の徳之島諸方言と同じく、C型はA型と違い低起式であるので、表層単独の場合のC2の音調はLHLもしくはLHHになる。このように、徳之島祖語において、A2とC2の中和を避けるために生じたと考えられる/;/ではあるが、C2に音節内上昇が含まれることになり、徳之島諸方言に広くみられる「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという音声的傾向」によって、C2がA2もしくはB2に合流(中和)するという通時的な変化が生じ、次第に短母音化していったと考えられる。

C2がA2もしくはB2に合流(中和)するトリガーとなった、「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという音声的傾向」は、現在の徳之島諸方言において広く一般的に観察される音声現象であり、徳之島諸方言の、アクセント体系からみて例外となるピッチパターンの多くがこのような音声的傾向と関係している。このような音声的傾向は、基本的には特殊モーラである/N/、/R/、/Q/、そして特殊モーラ相当である語末の/i/に関わるものであるが、C2の表層形(*[○A;○])に見られる母音の伸び(長母音の後半部)である/;/にも、影響を与える。C2(*[○A;○])の/;/は、「基底にあるアクセント情報に関して表層に生じたと考えられる母音の伸び」であるが、特殊モーラという意味で、/N/、/R/、/Q/、そして特殊モーラ相当の語末の/i/と共通している。徳之島祖語のC2において、現在の徳之島諸方言で広く観察されるのと同じく「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという音声的傾向」により、C2の1音節目全体が同じ高さになったと仮定すると、C2は(4-5)のようにA2もしくはB2に合流(中和)することになる。

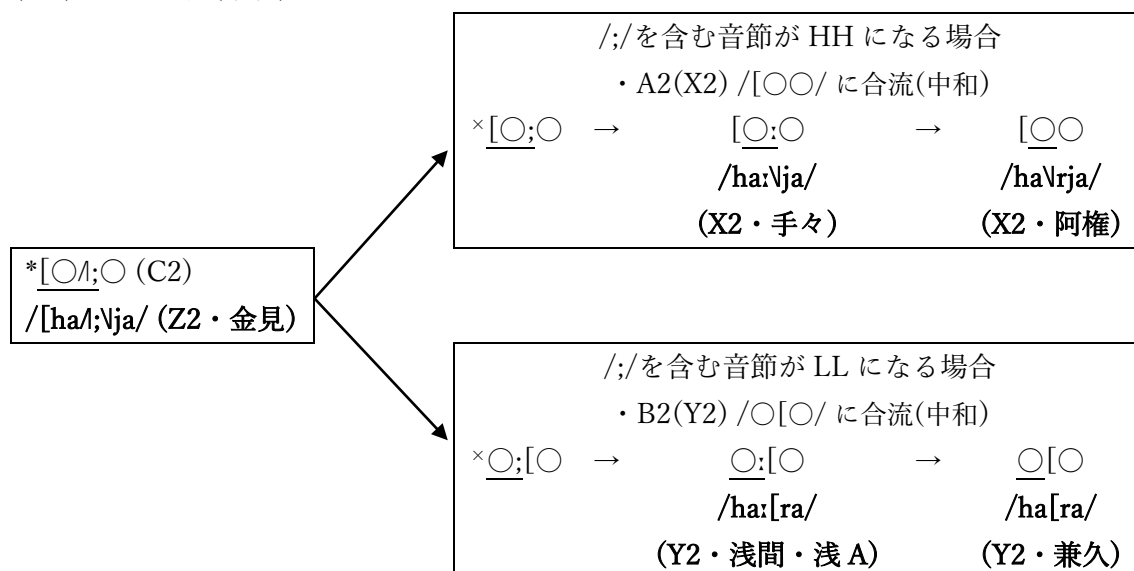
(4-5) C2の合流(中和)



まず、/;/を含む音節がHHになる場合、C2/*[○A;○]の1音節目(下線部)は、/ $\times[\underline{\text{○}};\text{○}]/$ のようなHHのピッチパターンになる。/ $\times[\underline{\text{○}};\text{○}]/$ の2モーラ目にある、アクセント情報に基づき生じていた/;/は、/;/の前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになると考えられる($[\underline{\text{○}};\text{○}]$)。3.1.3.2.1節で述べたとおり、徳之島諸方言において

/:/はフリーバリエーションで現れるものであり、/:/が現れても、現れなくてもよい。以上の過程を経て、C2 は最終的に/[○:○/もしくは/[○○/になり、A2 に合流(中和)したと考えられる。また、/:/を含む音節が LL になる場合、C2/*[○:/○/の 1 音節目(下線部)は、/×○:[○/のような LL のピッチパターンになる。/×○:[○/の 2 モーラ目にある、アクセント情報に基づき生じていた/:/は、/:/の前でピッチが上昇しなくなったことによって/:/に認識されるようになると考えられる(○:○)。徳之島諸方言において/:/はフリーバリエーションで現れるものであり、/:/が現れても、現れなくてもよい。以上の過程を経て、C2 は最終的に/○:○/もしくは、/○[○/になり B2 に合流(中和)したと考えられる。(4-6)は(4-5)の C2 の合流(中和)するプロセスを、C 系列の基底 2 モーラ語である「柱」を例に示したものである。変遷の各段階にあると考えられる現在の徳之島の諸方言において実際に観察される語例を太字にして一緒に示す。

(4-6) C2 の合流(中和)



C2 が、A2 に合流(中和)するか、B2 に合流(中和)するかは、方言によってバリエーションがあり、予測はできない。主に A2 に合流(中和)する方言もあれば、B2 に合流(中和)する方言もある。また、A2 と B2 両方に同じくらいの割合で合流(中和)したと考えられる方言もある。これに関しては、4.3 節の各方言での通時的変化の記述で詳しく述べることにする。

上記で説明した C2 が A2 もしくは B2 に合流(中和)する変化のトリガーとなる「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」は、すべての徳之島諸方言で見られる現象ではあるが、方言によって音声的傾向が強く現れる方言とそうではない方言がある。(4-7)は、各方言のアクセント体系における Z2 というアクセント型の有無と、Z2 と表層のピッチパターンが同じになる Z3 のう

ちで特に 2 モーラ目に/R/を持つ語(○[R○])の有無を比較した表である。(4-5)の/*[○A;○/(C2)と同じく、/*○[R○/(C3)に上記した音声的傾向が反映されると、/*○[R○/(C3)は、A3(*[○R○])もしくは、B3(*○R[○])と中和する。一般的に音声的現象は言語全体に影響するものであるので、/*○[R○/(C3)が A3 と B3 に中和する変化と、/*[○A;○/(C2)が A2 と B2 に中和する変化は、同じように起こると考えられる。上記した音声的傾向が強く現れる方言では、/*○[R○/(C3)の他の型への合流(中和)も進み、また同時に、/*[○A;○/(C2)も他の型へ合流(中和)し、なくなると予想される。一方、上記した音声的傾向が比較的弱く現れる方言では、/*○[R○/(C3)が他の型に合流(中和)せず、/○[R○/のピッチパターンを保っている語例が観察され、また、/*[○A;○/(C2)も他の型と合流(中和)せず、徳之島諸方言のアクセント体系に Z2 として維持されると予想される。

(4-7)

方言	金見	山	面縄	阿権	西阿木名	瀬滝	兼久	与名間	花徳	
/[○A;○/(Z2)	有	有	有	有	有	有	有	有	有	
/○[R○/(Z3)	有	有	有	有	有	有	有	有	有	
方言	轟木	手々	亀津	伊仙	母間	井之川	松原	岡前	犬田布	浅間
/[○A;○/(Z2)	有	有	有	無	無	無	無	無	無	無
/○[R○/(Z3)	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無

(4-7)を見ると、上記で予想した通り、ほとんどの方言で Z2([○A;○])の有無と、/○[R○/(Z3)の語例の有無に相関性が認められる。しかし、轟木、手々、亀津方言では共時的なアクセント体系に Z2([○A;○])が存在する一方で、/○[R○/(Z3)の語例は見つからない。単純にデータ不足である可能性もあるが、Z2([○A;○])と/○[R○/(Z3)のアクセント型に占める割合が影響している可能性も考えられる。すなわち、アクセント型の観点から考えると、/○[R○/(Z3)の場合、/○[R○/は Z3 の一部を構成するに過ぎず、この構造の語が他の型に中和しても、Z3 というアクセント型には 2 モーラ目に/R/を含まない語例も多数あるため、Z3 というアクセント型自体がなくなることはないが、Z2([○A;○])の場合、すべての語例が 2 モーラ目に;/;/を含むため、Z2([○A;○])の語が他の型に中和すると、Z2 というアクセント型自体がなくなってしまう。/○[R○/(Z3)の合流(中和)よりも Z2([○A;○])の合流(中和)の方が、アクセント体系全体に及ぼす影響は大きく、これを回避するという音韻的な動機があることが、轟木、手々、亀津方言で、/○[R○/(Z3)の語例の中和が進んだ一方、Z2([○A;○])の語は中和せずに残存することになった原因ではないだろうか。

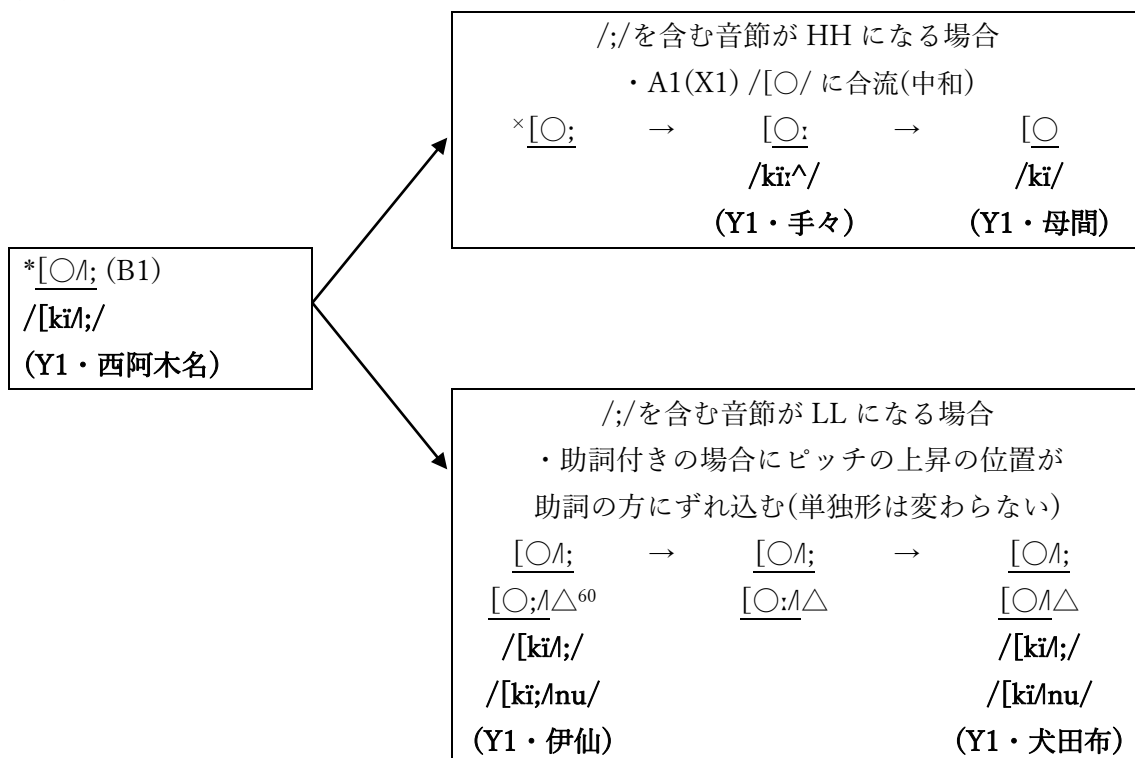
4.2.1.2 B1 が A1 に合流(中和)する「型の合流」

B1 の表層形が/*[○A;/のようなピッチパターン(音節内上昇が現れるピッチパターン)になっているのは、前述した C2 の表層形が/*[○A;○/のようなピッチパターンになるのと同

じく A1 と B1 の中和を避けるために 生じたものであると考えられる。これは、3.3.2 節で述べた、現在の徳之島諸方言(イ 3 群を除く)で見られる Y1 と同じ解釈である。

B1 が A1 に中和する変化も、C2 が A2 もしくは B2 に合流するのと同じ原理で説明することが出来る。前述した、「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」によって、B1/*[○Λ;/が HH になると A1 に合流する。一方、B1/*[○Λ;/が LL になる場合は、中和するアクセント型が存在しないため、A1 と B1 の型の対立は保たれることになる。しかし、B1/*[○Λ;/が LL になることで、助詞付きの場合のピッチ上昇の位置が、複数の方言において/[○;Λ△/や/[○Λ△/のように、(アクセントドメインが「語」であるにもかかわらず) 助詞の方にずれ込むというピッチパターンが生じる。これが、伊仙、犬田布、岡前、松原方言で規則的な例外として観察される Y1 のピッチパターンである。このような例外的なピッチパターンは、ドメインが「語」から「文節」になる変遷過程と関係していると考えられるので、4.2.3.3 節でこれについて説明する際に合わせて詳しく述べることにする。以上を踏まえ、B1 の通時的変化のプロセスを B 系列の基底 1 モーラ語である「木」を例に示したのが(4-8)である。各段階において、実際の徳之島諸方言で観察される語例を太字にして一緒に示す。

(4-8)



⁶⁰ / [○;Λ△/と/[○Λ△/のどちらで記しても良いような段階にあると考えられるが、本稿及び本稿のデータではこれを Y1 の例外的なピッチパターンとして分析しているので、;/の方で表記している。

4.2.2 A 型と C 型における「山の後退」

徳之島祖語から現在の徳之島諸方言に至る変遷過程において、音調の山の位置(付随的に昇り核の位置)が 1 モーラ分後ろに後退する現象、つまり「山の後退」が起こったと考えられる(4-4b)。このような「山の後退」は金田一(1954[1975])や Uwano(2012)でも言われているように、日本語諸方言において一般的に見られる変化の一つである。金田一(1954[1975])では、「山の後退」について(音調の山の後退は)「起こりやすいアクセント変化の一つと見てよいと思う。元来高い発音は低い発音より労力を伴う。このような拍は、少しでも後へ送って発音しようとすることは、自然だからである。」(57p)と述べている。

徳之島諸方言の通時的変遷過程で想定される「山の後退」は、基本的にはアクセント体系全体に起こるような、大きな流れである。しかし、B 型は元々アクセント核が語末に置かれる型であるため、B 型では「山の後退」が生じなかったと考えられる。次節(4.2.3 節)で見るように、B 型に((4-4b)ではなく)(4-4c)の「核の後退」が起きる場合、/○○[:/(W2)のように、語末モーラを伸ばして上昇すると言ったパターンになることが想定される。しかし、(4-4b)の「山の後退」においては、(4-4c)の「核の後退」のような変化は生じない。これは、(4-4c)の「核の後退」には型の合流(中和)を回避するという音韻的な動機があるのに対し、(4-4b)の「山の後退」は、発音上の利便性によって自然に生じる変化であるためだと考えられる。/○○[:/(W2)のようなピッチパターンは徳之島諸方言で忌避される音節内上昇を含むため、音節内上昇が生じるという欠点を上回るほどの利点あるいは動機(つまり、ここでは型の合流(中和)を避けること)がない限り、/○○[:/(W2)を生み出すような変化は生じないものとする。結果的に(4-4b)の「山の後退」は、A 型と C 型だけに起こる変化であるということになる。(4-9)に(4-4b)の「山の後退」による A 型と C 型の具体的な変化を見る。

(4-9)

a. A 型の「山の後退」

A1	A2	A3		A1	A2→B2	A3→C3
*[○	*[○○	*[○○○	→	*[○	*○[○	*○[○○

b. C 型の「山の後退」

C2	C3		C2→B2	C3→B3
*[○○ (表層単独 [○/;○)	*○[○○	→	*○[○ (表層単独 ○[○)	*○○[○

(4-4b)の「山の後退」が起きると、語頭モーラに昇り核を置く A 型の場合、A2/*[○○/は

B2/*○[○/に、A3/*[○○○/は C3/*○[○○/に合流する。後ろから 2 番目のモーラに昇り核を置く C 型の場合、C2/*[○○/(基底形)は B2/*○[○/に、C3/*○[○○/は B3/*○○[○/に合流する。A1/*[○/の場合、音節内上昇を作ってまで「山の後退」をしなければいけない積極的な理由がないため、「山の後退」は起きない。

徳之島諸方言の中には C 型にのみ「山の後退」が起き、A 型には起きなかったと考えられる方言がある。伊仙・犬田布(當原)祖語⁶¹、阿権、面縄方言である。これらの方言では、(4-4b)による「山の後退」が生じる前に、A 型が「語頭モーラに昇り核を置く(+1)」型から、「無核でアクセント核を持たない(“0”)」型へと変わったと考えられる。徳之島諸方言において、低起式は Y/Z の対立(イ群)、Y/W/Z の対立(ロ群)、Y/V 型(ハ群)と、アクセント型の対立があるのに対し、高起式である X 型には対立するアクセント型が存在しない。これは、本稿で仮定する(4-1)徳之島祖語の体系でも同じで、低起式は B/C の対立があるのに対し、高起式である A 型には対立するアクセント型が存在しない。つまり、高起式である A 型は、そもそもアクセント核の位置がアクセントの弁別に寄与しない型であると言える。A 型における語頭のアクセント核は、言語の経済性という観点においては余分な情報であるため、徳之島祖語の段階で「語頭モーラに昇り核を置く(+1)」という、アクセント核の位置に指定があったとしても、世代を下るうちに高起式であるという「式」の意識だけが残し、アクセント核が語頭にあるという認識が薄れていくと想定することができる⁶²。(4-4b)の「山の後退」が起きる前に A 型がすでに「高起式でアクセント核を持たない(“0”)」型になっているなら、音調の山の位置が 1 モーラ分後ろに後退する「山の後退」は起きない。高起式無核は基本的に高平らな音調であって山が無いからである。このように、伊仙・犬田布(當原)祖語、阿権、面縄方言においては、C 型のみに(4-4b)の「山の後退」が起きたと解釈することができる。

4.2.3 型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」

徳之島諸方言の通時的変遷過程において、型の合流(中和)を回避するためと考えられる「核の後退」が観察される。型の合流(中和)を引き起こす原因となる変化は、前述した(4-

⁶¹ 犬田布(當原)集落は約 260 年前に伊仙から移住してきた人々の集落であり、共通祖語を持つと考えられる。

⁶² 徳之島祖語における「式」が、北琉球祖語や琉球祖語、あるいは日琉祖語から受け継いだものであるか、それとも徳之島祖語の段階で新たに生じたものなのかは、本稿のデータからは分からない。ただ、「式」の成立時期に関して一つ手がかりになりそうなのが、C2 のピッチパターンである。本稿の分析では、少なくとも C2/[○○/が A2/[○○/との中和を避けるために、/[○/;○/のピッチパターンを持つようになった時点では、すでに、C2 が低起式であるという認識があったのではないかと考える。本稿では、C2 の 1 音節目が LH になった理由を A 型と C 型の「式」の違いであると解釈するからである。C2 が/[○/;○/になったのは、少なくとも徳之島祖語が成立する前の段階と考えられるので、徳之島祖語が成立する前から「式」によるアクセント型の対立があったと考えることができる。

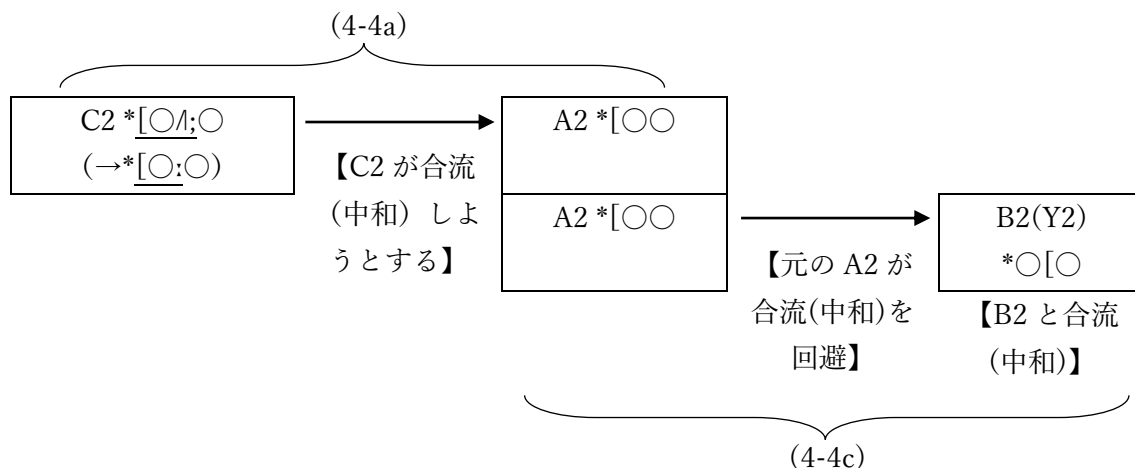
4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」と(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》の二つである。このような変化の結果、アクセント型が合流(中和)しようとする時、そのまま合流(中和)を許容したと考えられる方言もある一方、合流(中和)を避けるためにアクセント核の位置が 1 モーラ分後ろにずれる、すなわち「核の後退」が起こったと考えられる方言がある。以下では、徳之島諸方言で観察される型の合流(中和)を回避する変化のパターンについて説明していくことにする。

4.2.3.1 (4-4a)をトリガーに引き起こされる型の合流(中和)を回避するための「核の後退」

徳之島諸方言の通時的変遷過程において想定される連鎖的な変化を見る。これは(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》をトリガーに引き起こされるものであり、(4-4a)に続けて、型の合流(中和)を回避するために(4-4c)の「核の後退」が起きるものである。

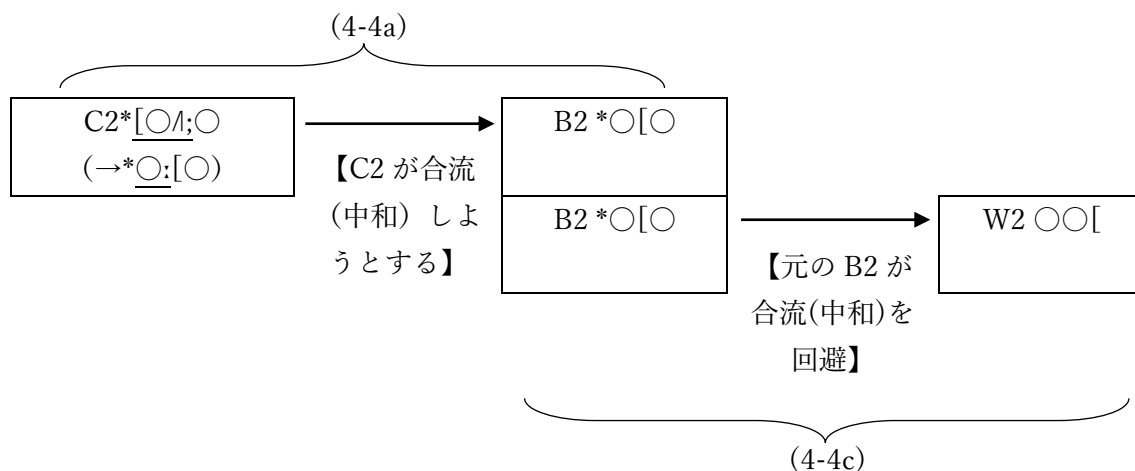
まず、C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が HH になり、A2 に合流(中和)しようとした場合に「核の後退」が起きたと考えられるパターンから説明する。C2 が A2 に合流しようとする場合、A2 は C2 との合流を回避し、1 モーラ分、核が後退する。その結果、C2 が A2 になり、元々の A2 は B2(Y2)になるという、玉突き式の変化が起こる(4-10)。

(4-10)



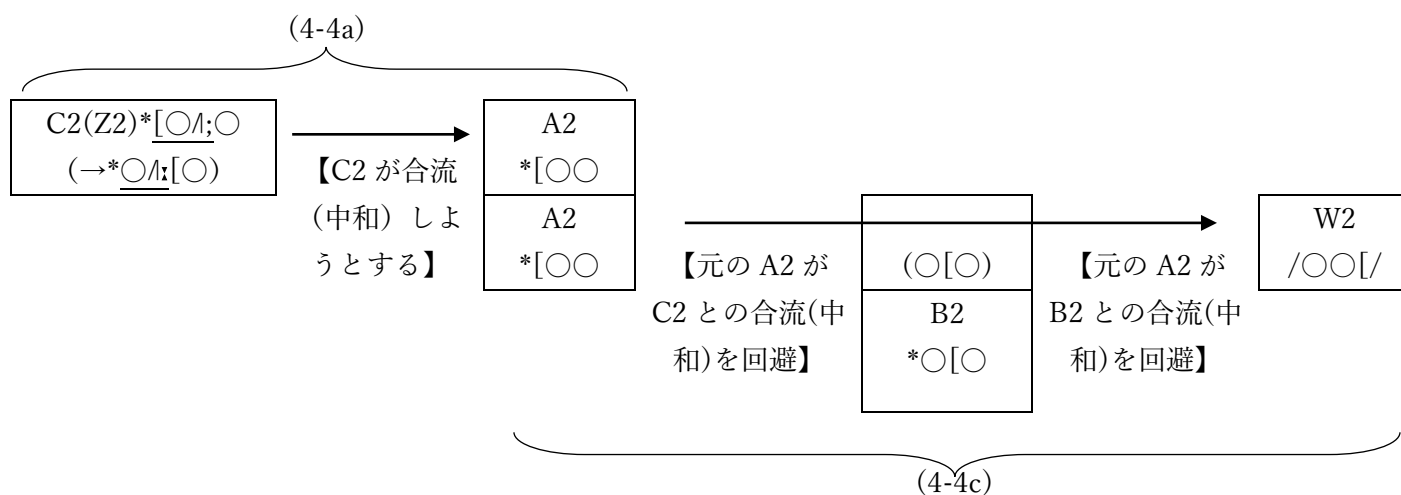
次の(4-11)は、C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が LL になり、B2 に合流(中和)しようとした場合に「山の後退」が起きたと考えられるパターンである。C2 が B2 に合流しようとする場合にも、B2 は C2 との合流を回避し、1 モーラ分、核が後退する。その結果、C2 が B2 になり、元々の B2 は現在の徳之島諸方言における W2(“+3”)になるという、玉突き式の変化が起こる。

(4-11)



最後に、花徳方言に見られる型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」について説明する。花徳方言は、C2 が A2 に合流しようとする場合、A2 は C2 との合流を回避し、1 モーラ分、核が後退しようとする。しかし、今度はそのまま A2 が B2 と合流してしまうことになるため、その合流を回避し、もう 1 モーラ分、核が後退したと考えられる。結果的に、A2 は 2 モーラ分、核が後退し、現在の徳之島諸方言における W2(“+3”)になる(4-12)。

(4-12)



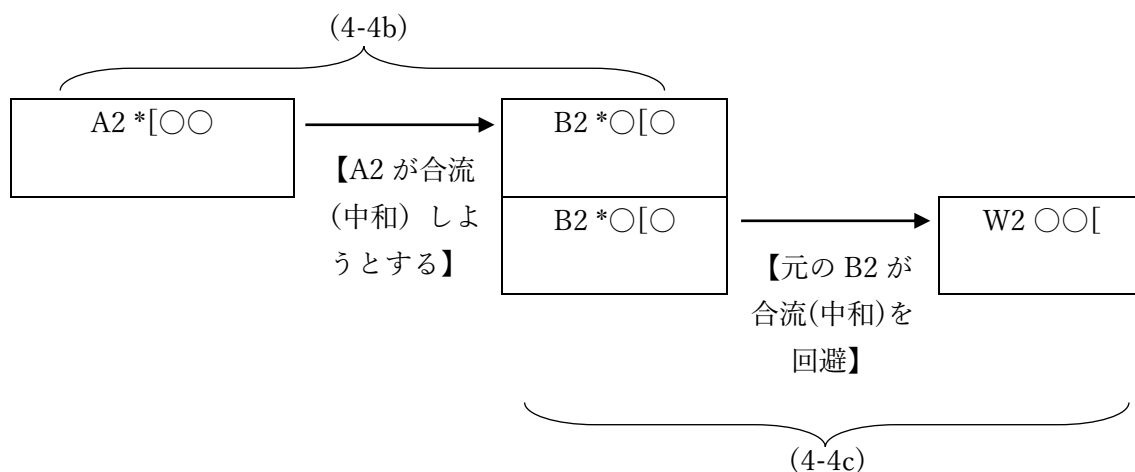
4.2.3.2 (4-4b)をトリガーに引き起こされる型の合流(中和)を回避するための「核の後退」

徳之島諸方言の通時的変遷過程において想定される、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》をトリガーに引き起こされる型の合流(中和)を回避するための「核の後退」のパターンを見ていくことにする。

まず、(4-4b)の変化により A2/*[○○/が B2/*○[○/に合流(中和)しようとすることで引

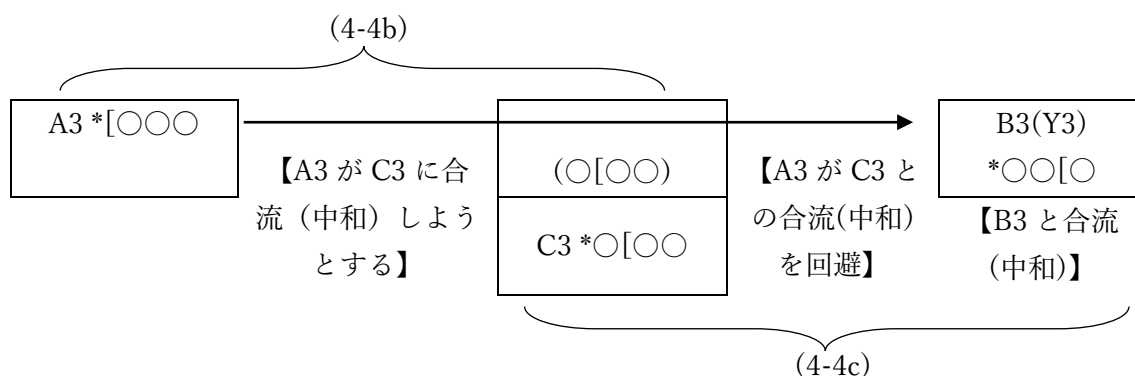
き起こされる「核の後退」について説明する。A2 が B2 に合流しようとする場合、元の B2 は A2 との合流を回避し、1 モーラ分、核が後退する。その結果、A2 が B2 になり、元の B2 は W2/○○[/になるという、玉突き式の変化が起こる(4-13)。

(4-13)



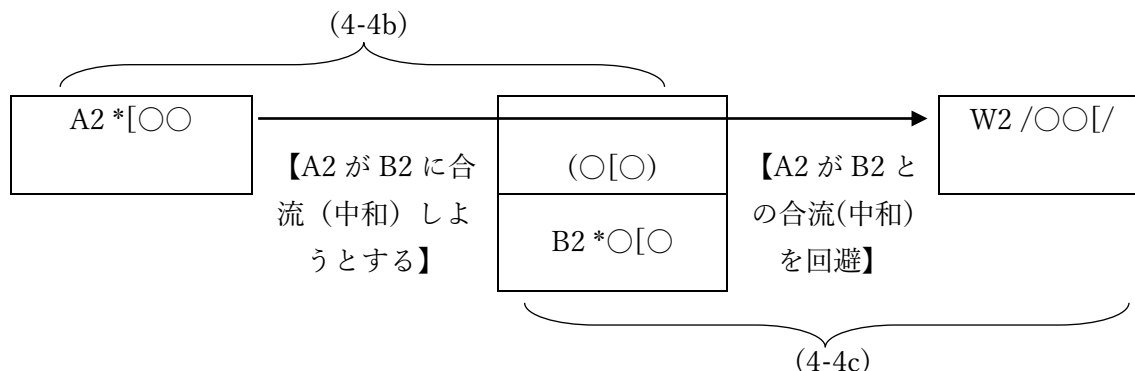
次の(4-14)は、(4-4b)の変化により A3/*[/○○○/が C3/*○[/○○/に合流(中和)をしようとした時に、A3 が C3 との合流(中和)を回避し、もう 1 モーラ分、核の後退が起きると考えられるパターンである(4-4c)。結果的に A3/*[/○○○/は、/○[/○○/を飛ばして B3/*○[/○○/になる変化が起こる。

(4-14)



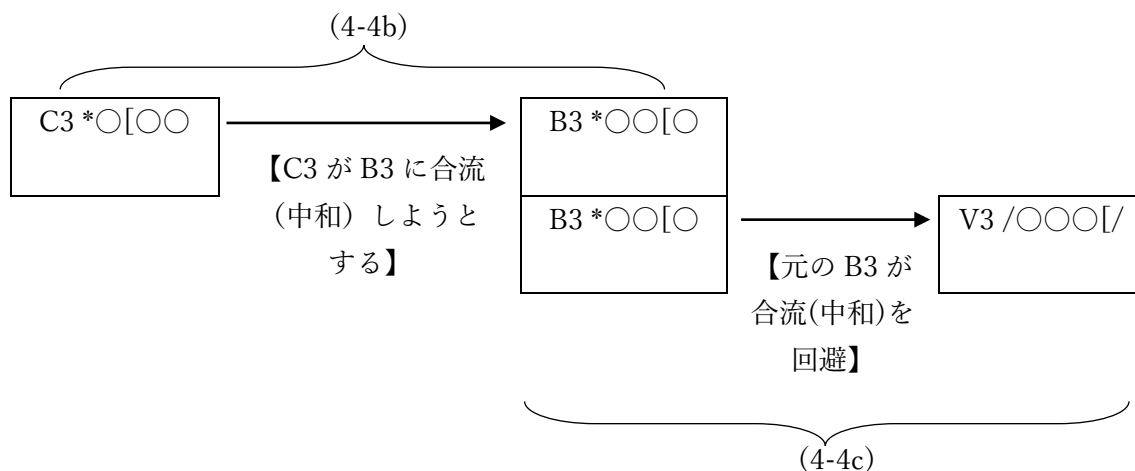
今度は、花徳方言に見られる「核の後退」パターンである。(4-4b)の変化により A2/*[/○○/が B2/*○[/○/に合流 (中和) しようとする時に、A2 が B2 との合流(中和)を回避し、もう 1 モーラ分、山が後退すると考えられる(4-4c)。結果的に A2/*[/○○/は、/○[/○/を飛ばして W2/○○[//になる変化が起こる(4-15)。

(4-15)



最後は、浅間方言にのみ見られる「核の後退」のパターンである。(4-4b)の「山の後退」により C3/*○[○○]/が B3/*○○[○]/に合流(中和)しそうな場合、浅間以外の方言ではそのまま C3 は B3 に合流する。しかし、浅間では B3 が C3 との合流(中和)を回避し、1 モーラ分、核が後退する。その結果、C3 が B3 になり、元々の B3 は V3/○○○[/]になるという、玉突き式の変化が起こる(4-16)。

(4-16)



B2/*○[○]/が W2/○○[/](表層単独形は/○○[/])になる「核の後退」は多くの徳之島諸方言で見られる変化である一方、B3/*○○[○]/が V3/○○○[/](表層単独形は/○○○[/])になる「核の後退」は、浅間のみで見られる変化である。それは、徳之島諸方言における/○[○]A:/と/×○○[○]A:/というピッチパターンの音声的な現れ方の差に関係しているものであると考える。本稿では、W2 のピッチパターン(○○[/])が、B2 が W2 になる際に何の前提もなしにいきなり生じたものではなく、現在の手々や瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、伊仙方言などの Y2 で観察される音声的な揺れ、すなわち、アクセント核(昇り核)の位置でピッチが上昇する際に通常の 1 モーラ分の長さより音価が長くなるという音声的な揺れ(○

[○ ~ ○[○/:]がその土台となったと考える。つまり、他の型から B2 への中和が起きそうになった時に、そもそもは音声的な揺れに過ぎなかった/○[○/と/○[○/:]が、/○[○/は B2(共時的には Y2)に、/○[○/:]は W2(○○[])に再解釈されることで、現在の徳之島諸方言における Y2 と W2 という別々のアクセント型として確立したと考えられる。一方、現在の徳之島諸方言の Y3 では、Y2 で見られるような音声的な揺れ(×○○[○ ~ ×○○[○/])が観察されない。これは B2 と異なり、他の型から B3 への中和が起きそうになったとしても/○○○[/という新たなアクセント型を確立(実現)させるための音声的な土台が存在しなかったことを意味する。そのため他の型から B3(Y3)への中和が起きるような場面では、型の合流(中和)を回避するための「核の後退」が起きず、合流が完了すると考えられる。ただし、徳之島諸方言で唯一、浅間方言にのみ/*○○[○/ (B3(Y3)) が/○○○[/ (V3)になる変化が生じたと考えられる。これは、(4-4d)の「同調的变化」によるもので、2 モーラ語と 3 モーラ語のいずれもが他のアクセント型との合流を避けようとする場合に、同じアクセント型に所属する語彙のピッチパターンの類似性を維持 (=同調) しようとするのが優先された結果、Y2 で見られるような音声的な揺れ(○○[○ ~ ×○○[○/])がないにもかかわらず、/○○○[/ という新たなアクセント型 (浅間の基底 3 モーラ語における V 型) が生じたと考えられる。これに関しては、4.3.15 節で詳しく説明する。

4.2.3.3 W 型とドメインが「語」から「文節」になる変遷過程

4.2.3.1 節と 4.2.3.2 節で注目すべきなのは、元々の B2 であった語から 1 モーラ分核が後退した結果、W 型という新たなアクセント型が生じたと考えられる点である⁶³。W 型は、ドメインを「語」もしくは「文節」とし、前から数えて 3 番目のモーラに昇り核を持つアクセント型で、徳之島諸方言の共時的分類に従うと、ロ群に属する方言に観察されるアクセント型である。W 型のピッチパターンについて再確認するために、3.6.2 節で述べた(3-120)の W2 のピッチパターンを(4-17)に改めて示す。

(4-17=(3-120)) ロ群の W2 のピッチパターン

	与名間「語」	松原、岡前「文節」	花徳、犬田布(當原)「文節」
基底	○○[	○○[	○○[
表層単独	○○[;	○○[;	○○[~ ○○[;
1 モーラ助詞付き	○○[;△	○○[△	○○[△
2 モーラ助詞付き	○○[△△	○○[△△	○○[△△

⁶³ 浅間方言の V 型は通時的に W 型から変化したものであると考えられるため、本節で述べる W 型のアクセントドメインに関する議論は浅間方言の V 型にも関係するものである。詳しくは 4.3.15 節で述べる。

W 型の表層単独形には方言によって異なる二つのピッチパターンが見られる。一つ目は、W2 の 2 モーラ目の母音を伸ばして語の長さを 3 モーラにしつつ、前から数えて 3 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するピッチパターン(〇〇[;])で、もう一つは、最も右である語末モーラの前でピッチが上昇するといったピッチパターン(〇Λ〇[])である。助詞付きの場合、与名間方言で語に/nu/を付けた場合を除き、すべての方言において、ピッチの上昇位置が助詞の直前で上昇する。W 型のアクセントのドメインに注目すると、与名間では「語」であり、松原、岡前、花徳、犬田布(當原)では「文節」であることが分かる。通時的に、W2 は B2/*〇[〇/から変化したものであることを念頭に置くと、アクセントのドメインが「語」から「文節」に変わったことを意味する。与名間はアクセントのドメインが「語」から「文節」に変化する途中であると位置付けることが出来る。ただし、花徳方言の W2 は通時的に B2 ではなく A2 から変化したと考えられるものなので注意が必要である。これに関しては、(4-12)で前述した通りである。(4-18)に B2 から W2 への通時的変遷と、それに伴う、アクセントドメインの「語」から「文節」への変化過程を、B 系列の基底 2 モーラ語である「種」を意味する語を例にして示す。各段階において、実際の徳之島諸方言(与名間、松原、岡前、犬田布(當原))で観察される W2 の語例を太字にして一緒に示す。

(4-18)

	B2 /*〇[〇/ →	W2 /〇〇[/
表層単独	*〇[〇 →	〇〇[; → *〇Λ〇[; → *〇Λ〇[→ 〇Λ〇[/tanĩ[;/ (与名間) /ta[nĩ/ (犬田布)
1 モーラ 助詞付き	*〇[〇Δ →	〇〇[;Δ → *〇〇[;[Δ → 〇〇[Δ → 〇〇[Δ tanĩ[;\\nu (与名間) tanĩ[\\nu (岡前) tanĩ[\\nu (松原)
2 モーラ 助詞付き	*〇[〇ΔΔ →	*〇〇[;ΔΔ → *〇〇[;[ΔΔ → 〇〇[ΔΔ → 〇〇[ΔΔ tanĩ[ka\\ra (岡前) tanĩ[ka\\ra (犬田布)
ドメイン	「語」	「語」 「文節」

W2 におけるドメインの「語」から「文節」への変化過程には、(4-4a)で説明した「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にする」という音声的傾向」が深く関係していると考えられる。W2 の表層単独形/〇〇[;]において、特殊モーラを含む音節(下線部)が HH になり、*/〇Λ〇[;]になる。語末の/;/は、/;/前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになる(〇Λ〇[;]). 徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/は現れても、現れなくてもよ

い。以上の過程を経て、現在の犬田布（當原）や花徳方言で観察されるような、/○△○/ というピッチパターンになる。次に、1 モーラ助詞付きを例に、助詞付きのピッチパターンの変化について述べる。/○○[:△/にそのまま、1 モーラ助詞が付く場合のピッチパターンは/○○[:△/である。この時点ではまだアクセントのドメインは「語」のままである。ここから、上記で説明した音声的傾向により、/○○[:△/の特殊モーラを含む音節(下線部)が LL になり、×/○○[:△/になる。語末の/;/は、/;/前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになる(○○[:△)。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/は現れても、現れなくてもよい。以上の過程を経て、現在の松原、岡前、犬田布(當原)や花徳方言で観察されるような、/○○[△/というピッチパターンになる。このような変化を経て、/○○[:△/~○○[△/のピッチ上昇の位置は助詞にずれ込むことになり、アクセントのドメインは「文節」へと変化したと考えられる。与名間方言は、1 モーラ助詞付きでは、前述したようなドメインの「語」から「文節」への変化が起きず、2 モーラ助詞付きの場合にはドメインの「語」から「文節」への変化が起こった方言であると位置付けられる。与名間方言の W2 は 1 モーラ助詞付きで/○○[:△/だが、2 モーラ助詞付きでは/○○[△△/であり、助詞の長さによってドメインが異なるという特徴があるのは前述したところである (3.7.1 節)。

4.2.1.2 節で前述した、B1 の助詞付きでピッチ上昇の位置が助詞の方にずれ込む現象も、前述した W2 の変遷過程と基本的に同じものであると考えられる。B1 の 1 モーラ助詞付きを例に説明すると、B1*/[○△:/の音節内上昇(下線部)が上記で説明した音声的傾向により、/[○△:/の特殊モーラを含む音節(下線部)が LL になり、/[○△:/になる。語末の/;/は、/;/前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになる([○△△)。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものなので、/;/は現れても、現れなくてもよい。以上の過程を経て、現在の伊仙、犬田布（當原）、岡前、松原方言で規則的例外として観察される Y1 のピッチパターンが生じる。

(4-19) B1 の/;/を含む音節が LL になる場合

	B1 /[○△/	
表層単独	*[○△;	
1 モーラ 助詞付き	*[○△;△ →	[○△△ → [○△△ → [○△△ /[kī;Anu/(木が) (伊仙) [kī;Anu/(木が) (犬田布)
2 モーラ 助詞付き	*[○△;△△ →	[○△△△ → [○△△△ → [○△△△ /[kī;lkara/(木が) (岡前) [hwě/ka\ra/(南から) (松原)

アクセントドメインについてだが、伊仙、犬田布（當原）、岡前、松原方言における Y1

も W2 と同じく、ドメインが「語」から「文節」へと変化したと分析することが可能である。しかし、伊仙、犬田布（當原）、岡前、松原方言の共時的なアクセント体系では、Y1 のドメインを「語」とし、助詞付きの場合にピッチ上昇の位置が助詞の方にずれ込むピッチパターンに関しては、規則的な例外として処理している。これは、各方言のアクセント体系において、Y 型の Y2 と Y3 が「語」をドメインとすること、また、各方言で「文節」をドメインとする W 型（“+3”）には分析できないことから、Y1 も「語」ドメイン（+音声的傾向）で分析しているが、通時的な変遷過程を鑑みると、Y 型の中で Y1 だけが「文節」ドメインである可能性も論理的には残っている。

4.2.4 音節内上昇と型の合流の回避（まとめ）

ここまで述べた通時的な変化を、変化の動機という観点から見ると、音韻的な理由が基になっている①アクセント型の合流(中和)を回避するために生じる変化(=(4-4c)および徳之島祖語に至る前段階での C2 の音調の変化)があり、音声的な理由が基になっている②音節内上昇を回避するために生じる変化(=(4-4a))、さらには、発音上の利便性によって生じる③「山の後退」(=(4-4b))という変化もある。この三つの変化のうちどれを優先させるかは、時代によって、そして方言によって様々な様相で現れ、徳之島諸方言のアクセント体系が今のように分岐する原因になったと考えられる。以下、上記の①~③を軸にもう一度、徳之島方言におけるアクセントの変遷過程を整理する。①~③で一番特筆すべき変化は、音韻的な理由が基になっている「①アクセント型の合流(中和)を回避するために生じる変化」である。これによって引き起こされたと考えられる具体的な変化の例が(4-20)である。

(4-20)

- a. 徳之島祖語のアクセント体系になる前の段階において、C2/*[○○/(基底)が A2/*[○○/と合流(中和)するのを回避するために C2/*[○Λ;○/(表層単独)のピッチパターンを持つようになる。
- b. (4-4a)をトリガーに引き起こされる型の合流(中和)を回避するための「核の後退」
 - b1. C2 が A2 に、元々の A2 が B2 になる。
 - b2. C2 が B2 に、元々の B2 が W2/○○[:/(表層単独)になる。花徳方言の場合には、A2 が B2 との合流を回避し、もう 1 モーラ分、山の後退を起こすことで W2/○○[:/(表層単独)となる。
- c. (4-4b)をトリガーに引き起こされる型の合流(中和)を回避するための「核の後退」
 - c1. A2 が B2 になり、元々の B2 が W2/○○[:/(表層単独)となる。
 - c2. A3/*[○○○/は、/*○[○○/との合流を回避し B3/*○○[○/になる。
 - c3. C3 が B3 になり、元々の B3 が V2/○○○○[:/(表層単独)になる

(4-20)で注目すべきは、①ではアクセント型の合流(中和)を回避するために、C2/*[○Λ;○/や W2/○○○:/、V3/○○○○:/の下線部のような「音節内上昇」を作り出している点である。忌避されるような発音を自ら作り出しているのであるから、「型の合流(中和)を回避」というのは非常に音韻的に強い動機であったと考えられる。しかし、①の変化後の変遷過程を見ると、やはり音声的に「音節内上昇」があるのは好まれずに②の音節内上昇を回避する方向へと移り変わって行くことが伺える。そしてその過程で、一部の方言の W2/○○○:/や B1(Y1)/*[○Λ;:/では、アクセントのドメインが「語」から「文節」に変化するという現象が生じる。

以下の4.3節では、4.2節で説明した変化を基に徳之島の各方言で起きたと考えられる通時的な変化について説明する。

4.3 徳之島の各方言における通時的変遷

本節では徳之島の各方言で起きたと考えられる通時的変遷について説明する。伊仙と犬田布(當原)のように、通時的に関わりがあることが明らかな方言や、アクセント体系やその変遷過程、地理的な面から共通祖語を見出せそうな方言はまとめて記述する。もっとも、徳之島諸方言のアクセント体系を俯瞰すると、関連している方言は少数であって、むしろ、共通する祖方言(徳之島祖語)から、各方言が自律的变化を積み重ねて個々に変遷を遂げた結果、現在のアクセント体系の分布に至ったというのが本稿の基本的な考えである。

以下、各方言のアクセント型における基底1モーラから基底3モーラまでの語例が、A系列、B系列、C系列のうちどの系列に属するかを数えた表を提示し、その語例の数を根拠に各方言でどのような通時的変化が起きたかを述べることにする。例えば、(4-21)のような表である。縦軸は該当の語例が各方言の共時的なアクセントで、どの型の語であるかを表すもので、横軸は該当の語例がどの系列に属するかを表すものである。参考までに、不明としたのは、松森(2012)と同語源ではないと考えられる語の数である。4.1節で述べたように、本稿では徳之島祖語のアクセント体系を、A型、B型、C型を持つ3型アクセントであると仮定しており、もし、徳之島祖語が全く変化せず現在に至ったとするならば、その方言は共時的にX型、Y型、Z型と限りなく類似した3型アクセント体系として分析される体系であったであろうと考えている。また、A型、B型、C型の所属語は、基本的に松森(2012)の「系列別語彙」に準ずるものと仮定するので、徳之島祖語から変化を遂げていない(限りなく徳之島祖語に近い)アクセント体系は、(4-21)のチェックマーク記した箇所(✓)、基底2モーラ語で言えば、A2-X2、B2-Y2、C2-Z2に語例が集中しているはずであるという前提を元に論を展開する⁶⁴。

⁶⁴ なお、基底1モーラ語のC1については、徳之島祖語から各方言が分かれる前の段階で合流したものか、na:ka(「中」・金武方言(松森(2012)))からna:(「中」・徳之島諸方言)のように、語の形態変化に伴い、基底のモーラ数が変わったものであると推測される。どちらにしても、本稿では基底1モーラ語のC系列の関しては触れない。

(4-21)

a.基底 1 モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	✓			
Y1		✓		

b.基底 2 モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	✓			
Y2		✓		
Z2			✓	

c.基底 3 モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	✓			
Y3		✓		
Z3			✓	

なお、次節から提示する各方言の表と(4-21)が異なる分布を見せる部分に関しては、以下のような印を数字またはセルに付けて表すことにする(4-22)。このような印を付けている部分こそが、その方言で通時的な変化が生じたと考えられる部分であるとも言える。

(4-22)

内容	表示方法
基底 1 モーラから基底 3 モーラまでの語例を系列別で見た時に、一番語例の多い部分	太文字
(4-4a)《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》が起きたと考えられる部分	太線で囲む
(4-4b)《A 型と C 型における「山の後退」》が起きたと考えられる部分	灰色塗りにする
(4-4c)《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》が起きたと考えられる部分	二重線で囲む
基底 3 モーラ語で、2 モーラ目に特殊モーラを持つ語例が集中的にみられる部分	二重下線
通時的変遷過程が推定できない部分(言語接触の可能性はある)	波下線

4.3.1 兼久、瀬滝、西阿木名方言アクセントの通時的変遷

兼久、瀬滝、西阿木名は天城町南部に位置する集落である。この 3 集落は、アクセント体系や変遷過程、地理的な面から共通祖語を見出すことが出来そうである⁶⁵。兼久、瀬滝、

⁶⁵ ただし、西阿木名と瀬滝集落の間には秋利神川という、徳之島で一番大きい川がある。もしかしたら、西阿木名と、兼久・瀬滝集落は祖語を別に立てなければいけないかも知れない。

西阿木名方言のアクセント体系はX型、Y型、Z型を持つ3型アクセントである(3.3.7節、3.3.8節、3.3.9節を参照)。まず、(4-23)の兼久方言から説明する。

(4-23) 兼久方言

a. 基底1モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	10	3	3	2
Y1	0	8	1	1

b. 基底2モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	30	4	23	2
Y2	8	41	13	1
Z2	0	0	4	0

c. 基底3モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	19	0	2	4
Y3	1	19	5	1
Z3	0	3	23	1

(4-23b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合にはZ2に集中すると考えられるC系列の語が、祖語のA型に対応するX型に23例、祖語のB型に対応するY型に13例見られる。兼久方言は、(4-4a)の《C2がA2もしくはB2に、B1がA1に合流するという「型の合流(中和)」》が起こったと考えられる。4.2節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-24)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、兼久方言のC系列の基底2モーラ語の例である。

(4-24)

露	X2	C系列	tsu\ju	tsu\junu	tsu\jukara	(兼久)
柱	Y2	C系列	ha[ra	ha[ra\nu	ha[raka\ra	(兼久)

「露」は、C2/*[○Λ;○/の1音節目がHHになったことでA2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった2モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。「柱」はC2/*[○Λ;○/の1音節目がLLになったことでB2(Y2)になったと考えられる。「露」と同じく、元々あった2モーラ目の母音の伸び/;/は、/*○;[○/→/○:[○/~/[○[○/過程を踏み短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2はA2もしくはB2に合流(中和)し、ゆくゆくは体系からなくなるものと推測されるが、兼久方言ではC2が完全にはA2とB2に合流せず、現在のアクセント体系にZ2として残留している体系であると考えられる。なお、C2がA2とB2のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、兼久

方言では、B2(Y2)より A2(X2)への合流の方が多い傾向にある。

一方、(4-23a)の B1 が A1(X1)に合流したと考えられる例は 3 例で、基底 2 モーラ語に比べて合流した語例の比率は少ない。しかし、兼久方言の Y1 の例を見ると、助詞/kara/を付けた時に、「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」により、特殊モーラを含む音節の音節全体が LL になることで生じたと考えられる例外的なピッチパターンが観察される。(4-25)の下線部がそうである。このようなピッチパターンから B1 においても、②音節内上昇を回避するために生じる変化は起きていると考えることが出来る。ただし、このような特殊モーラを含む音節が LL になる変化は、特殊モーラを含む音節の音節全体が HH になる場合、すなわち B1 が A1 に合流する方向の変化と違ってアクセント型の合流を引き起こすものではない。

(4-25)

湯	Y1	B 系列	[ju/;	[ju/;\nu	<u>[ju;/ka\ra</u>	(兼久)
手	Y1	B 系列	[ti/;	[ti/;\nu	<u>[ti;/kara</u>	(兼久)

次に瀬滝方言の通時的変遷について説明する(4-26)。瀬滝方言も兼久方言と同じく、(4-26b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 28 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 4 例見られる。

(4-26) 瀬滝方言

a.基底 1 モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	10	1	3	1
Y1	0	8	0	0

b.基底 2 モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	31	1	28	6
Y2	2	40	4	5
Z2	0	0	4	2

c.基底 3 モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	16	0	1	5
Y3	1	18	9	1
Z3	1	5	24	2

こういった、C 系列の語の分布から、瀬滝方言でも、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》が起こったと考えられる。前述した兼久方言と同じく(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-27)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、瀬滝方言の C 系列の基底 2 モーラ語のである。

(4-27)

砂糖	X2	C 系列	sa\ta	sa\tnu	sa\takara / satakara	(瀬滝)
子供	Y2	C 系列	wa[re	wa[re\ntu	wa[re\kara	(瀬滝)

「砂糖」は、C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が HH になったことで A2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。「子供」は C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が LL になったことで B2(Y2)になったと考えられる。「砂糖」と同じく、元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*○;[○/→/○:[○/~[○[○/の過程を踏み短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 は A2 もしくは B2 に合流(中和)し、ゆくゆくは体系からなくなるものと推測されるが、瀬滝方言では C2 が完全に A2 と B2 に合流せず、現在のアクセント体系に Z2 として残留している体系であると考えられる。なお、C2 が A2 と B2 のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、瀬滝方言では、B2(Y2)より A2(X2)に合流する割合が高い。

一方、(4-26a)の B1 が A1(X1)に合流したと考えられる例は 1 例のみで、基底 2 モーラ語に比べて合流した語例が少ない。しかし、先に述べた兼久方言のように、瀬滝方言でも Y1 に助詞/kara/を付けた時に、「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」により、特殊モーラを含む音節の音節全体が LL になることで生じたと考えられる例外的なピッチパターンが観察される。(4-28)の下線部がそうである。このようなピッチパターンから B1 においても、②音節内上昇を回避するために生じる変化は起きていると考えることが出来る。ただし、このような特殊モーラを含む音節が LL になる変化は、特殊モーラを含む音節の音節全体が HH になる場合、すなわち B1 が A1 に合流する方向の変化と違ってアクセント型の合流を引き起こすものではない。

(4-28)

蛸	Y1	B 系列	[to/;	[to/;nu	<u>[to:/kara</u>	(瀬滝)
菌	Y1	B 系列	[ha/;	[ha/;\nu	<u>[ha:/ka\ra</u>	(瀬滝)

今度は西阿木名方言の通時的変遷について説明する(4-29)。西阿木名方言も、前述した瀬滝方言や兼久方言と同じ通時的な変遷を遂げたと考えられる。

(4-29) 西阿木名方言

a. 基底 1 モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	11	1	3	2
Y1	0	8	0	0

b. 基底 2 モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	34	1	27	10
Y2	2	41	5	3
Z2	0	0	4	1

c. 基底 3 モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	19	0	2	5
Y3	0	21	14	1
Z3	0	5	18	5

(4-29b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型 27 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 5 例見られる。こういった、C 系列の語の分布から、西阿木名方言においても、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》が起きたと考えられる。前述した兼久方言と瀬滝方言のように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-30)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、西阿木名方言の C 系列の基底 2 モーラ語の例であり、(4-4a)によりそれぞれ X 型(A 型)と Y 型(B 型)に中和(合流)したと考えられるものである。

(4-30)

柱	X2	C	ha\ra	ha\ranu	ha\rakara	(西阿木名)
昨日	Y2	C	ki[nu	ki[nu:\nu	ki[nu:\kara	(西阿木名)

「柱」は、C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が HH になったことで A2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏み短母音化したと考えられる。「昨日」は C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が LL になったことで B2(Y2)になったと考えられる。「柱」と同じく、元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*○;[○/→/○:[○/~/○[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 は A2 もしくは B2 に合流(中和)し、ゆくゆくは体系からなくなるものと推測されるが、西阿木名方言では C2 が完全に A2 と B2 に合流せず、現在のアクセント体系に Z2 として残留している体系であると考えられる。なお、C2 が A2 と B2 のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、西阿木名方言では、B2(Y2)より A2(X2)に合流する割合が高い。

一方、(4-29a)の B1 が A1 に合流したと考えられる例は 1 例 (=B1 で X1 の 1 例) のみで、基底 2 モーラ語に比べて合流した語例が少ない。しかし、西阿木名方言では、Y1 に助詞 /kara/ を付けた時に、「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ (HH もしくは LL) にするという音声的傾向」により、特殊モーラを含む音節の音節全体が LL になることで生じたと考えられる例外的なピッチパターンが、調査したすべての語例で規則的に現れる。(4-31)の下線部がそうである。このようなピッチパターンから B1 においても、②音節内上昇を回避するために生じる変化は起きていると考えることが出来る。ただし、このような特殊モーラを含む音節が LL になる変化は、特殊モーラを含む音節の音節全体が HH になる場合、すなわち B1 が A1 に合流する方向の変化と違ってアクセント型の合流を引き起こすものではない。

(4-31)

歯	Y1	B 系列	[ha/;	[ha/;\nu	<u>[ha;/ka\ra</u>	(西阿木名)
木	Y1	B 系列	[ki/;	[ki/;\nu	<u>[ki;/ka\ra</u>	(西阿木名)

4.3.2 亀津方言アクセントの通時的変遷

亀津は徳之島町南部に位置する集落である。亀津方言のアクセント体系は X 型、Y 型、Z 型を持つ 3 型アクセントである(3.3.12 節を参照)。(4-32)は亀津方言のアクセント型における基底 1 モーラから基底 3 モーラまでの語例が、A 系列、B 系列、C 系列のうちどの系列に属するかを数えた表である。

(4-32) 亀津方言

a.基底 1 モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	9	6	2	3
Y1	1	3	1	0

b.基底 2 モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	1	4	23	6
Y2	37	39	9	12
Z2	0	0	2	1

c.基底 3 モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	10	4	9	2
Y3	1	13	5	3
Z3	5	3	17	1

まず、(4-32a)と(4-32b)の太線で囲んだ部分から説明する。(4-32b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 23 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 9 例見られ、祖

語の C 型に対応する Z 型には 2 例のみ見られる。こういった、C 系列の語の分布から、亀津方言では、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》が起きたと考えられる。4.2 節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-33)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、亀津方言の C 系列の基底 2 モーラ語の例である。

(4-33)

骨	X2	C 系列	hu\ñi	hu\ñinu	hu\ñikara	(亀津)
畑	Y2	C 系列	ha[te	ha[te\ñu	ha[tekara	(亀津)

「骨」は、C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が HH になったことで A2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏み短母音化したと考えられる。「畑」は C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が LL になったことで B2(Y2)になったと考えられる。「骨」と同じく、元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*○;[○/→/○:[○/~/[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 は A2 もしくは B2 に合流(中和)し、ゆくゆくは体系からなくなるものと推測されるが、亀津方言では C2 が完全に A2 と B2 に合流せず、現在のアクセント体系に Z2 として残留していると考えられる。なお、C2 が A2 と B2 のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、亀津方言では、B2 より A2 に合流する割合が高い。

また、(4-32a)を見ると B1 が A1 に合流したと考えられる例は 6 例あり、B1 においても(4-4a)の変化が見られる。このような変化は、(4-32b)と同じく、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-34)は亀津方言の B 系列の X1 の例である。

(4-34)

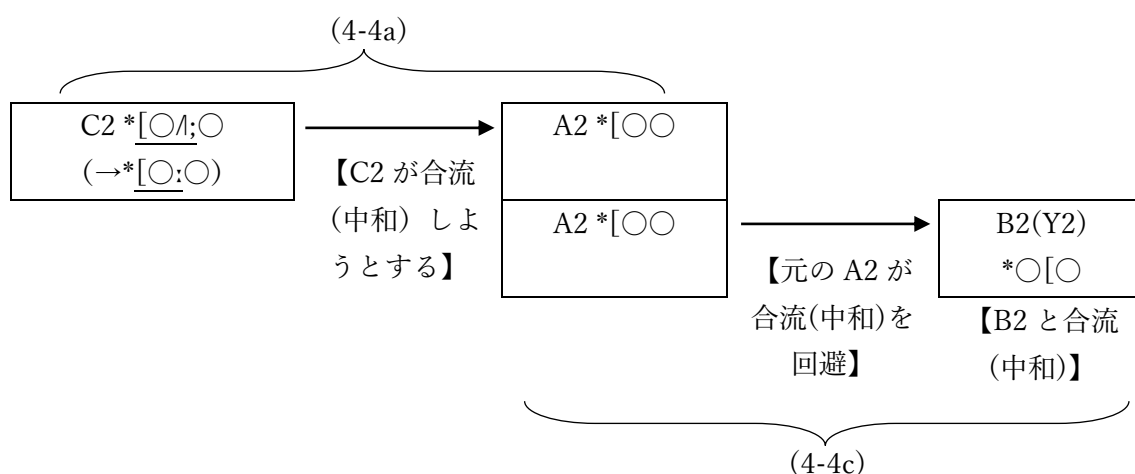
目	X1	B 系列	mī	mī\ñu	mī\ñ:kara	(亀津)
貝	X1	B 系列	nja:	nja:nu	nja:kara	(亀津)

「目」と「貝」は、B1/*[○Λ;/が HH になったことで A1(X1)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;/→/[○:/~/[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものなので、(4-34)の「目」と「貝」のように、/[○:/と/[○/の両パターンが現れる。

次に、(4-32b)の基底 2 モーラ語の A 系列のうち、二重線で囲んでいる部分について説明する。この部分には(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》が生じていると考えられる。(4-32b)の二重線で囲んでいる部分の語

例数を確認すると、徳之島祖語から変化がなかった場合には X2 に集中すると考えられる A 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 1 例のみ見られ、祖語の B 型に対応する Y 型に 37 例見られる。このような語例の分布から、A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/に合流したことが伺える。亀津方言では、(4-4a)の変化により、C2 が A2 に合流しようとする場合、A2 は C2 との合流を回避し、1 モーラ分、核が後退したと考えられる(4-4c)。その結果、C2 が A2 になり、元々の A2 は B2 になるという、玉突き式の変化が起こったと考えられる(4-35(=4-10))。(4-36)は、このような変化により合流(中和)したと考えられる、A 系列の Y2 の語例である。

(4-35(=4-10))



(4-36)

西	Y2	A 系列	ji[ri	ji[rinu	ji[rikara	(亀津)
にんにく	Y2	A 系列	hu[ru	hu[runu	hu[rukara	(亀津)

最後に(4-32c)の基底 3 モーラの C 系列語について補足説明する。(4-32c)の二重下線の部分を見ると、Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型にも 9 例見られる。この 9 例は、すべて 2 モーラ目に特殊モーラを持つ語例である。(4-37)に例を示す。

(4-37)

箒	X3	C 系列	hoR\ki	hoR\kinu	hoR\kikara	(亀津)
				/ hoRki\nu		
袋	X3	C 系列	huQ\ku	huQ\kunu	huQ\kukara	(亀津)

これは、徳之島諸方言で広くみられる「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音

節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」が影響しているものと考えられる。「箒」と「袋」は元々Z 型(Z3)の/○[R○/と/○[Q○/であったと考えられる語の単独形が、上記の音声的傾向により、/R/と/Q/を含む語頭音節が HH で発音されるようになったと考えられる例である。このような例の場合、/○[R○/と/○[Q○/の語が X 型に中和しても、Z3 には 2 モーラ目に/R/と/Q/を含まない語例も多数あるため、中和によってアクセント体系に含まれるアクセント型の数と内容(定義)が変わることはない。すなわち、アクセント体系の通時的変遷には直接影響するものではない。表層のピッチパターンが Z3 と同じである C2(Z2)の場合とは事情が異なっている。

4.3.3 山方言アクセントの通時的変遷

山は徳之島町の北部に位置する集落である。山方言のアクセント体系はX型、Y型、Z型を持つ 3 型アクセントである(3.3.5 節を参照) (4-38)は山方言のアクセント型における基底 1 モーラから基底 3 モーラまでの語例が、A 系列、B 系列、C 系列のうちどの系列に属するかを数えた表である。

(4-38) 山方言

a.基底 1 モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	9	4	3	1
Y1	2	5	1	0

b.基底 2 モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	4	3	18	2
Y2	29	38	9	9
Z2	0	0	6	0

c.基底 3 モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	10	0	7	3
Y3	2	16	3	3
Z3	4	2	17	4

まず、(4-38a)と(4-38b)の太線で囲んだ部分から説明する。(4-38b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 18 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 9 例見られ、祖語の C 型に対応する Z 型には 6 例見られる。こういった、C 系列の語の分布から、山方言では、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》が起きたと考えられる。4.2 節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-39)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、山方言の C 系列の基底 2 モーラ語の例である。

(4-39)

骨	X2	C 系列	hu:\nĩ	hu\ñĩga	(山)
たんこぶ	Y2	C 系列	da[gu	da[gu:\n̥ga	(山)

「骨」は、C2/*[○:/の 1 音節目が HH になったことで A2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、*/[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏み短母音化したと考えられる。「たんこぶ」は C2/*[○:/の 1 音節目が LL になったことで B2(Y2)になったと考えられる。「骨」と同じく、元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*○;[○/→/○:[○/~/○[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 の語は A2 もしくは B2 に合流(中和)し、ゆくゆくは型自体が体系からなくなる過程にあるものと推測されるが、山方言では C2 が完全に A2 と B2 に合流せず、現在のアクセント体系に Z2 として残留していると考えられる。なお、C2 が A2 と B2 のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、山方言では、B2(Y2)より A2(X2)に合流する割合が高い。

また(4-38a)を見ると、基底 1 モーラの B 系列語 9 例中 B1 が A1(X1)に合流したと考えられる例が 4 例あり、B1 においても(4-4a)の変化が見られる。このような変化は、(4-38b)と同じく、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-40)は山方言の B 系列の X1 の例である。

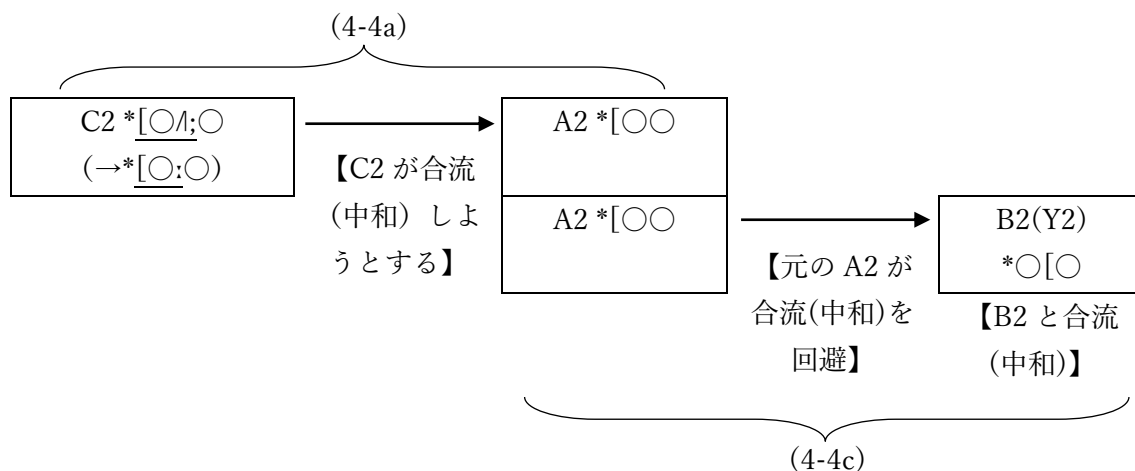
(4-40)

木	X1	B 系列	kĩ	kĩ\̥:ga	(山)
湯	X1	B 系列	ju:	ju:\̥ga	(山)

「木」と「湯」は、B1/*[○:/が HH になったことで A1(X1)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、*/[○;:/→/[○:/~/[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものなので、(4-40)の「木」と「湯」のように、/[○:/と/[○/が両パターン現れる。

次に、(4-38b)の基底 2 モーラ語の A 系列語のうち二重線で囲んでいる部分について説明する。二重線で囲んでいる部分の語例数を確認すると、徳之島祖語から変化がなかった場合には X2 に集中すると考えられる A 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型には 4 例しか見られず、祖語の B 型に対応する Y 型に 29 例見られる。山方言では、(4-4a)の変化により、C2 が A2 に合流しようとする場合、A2 は C2 との合流を回避し、1 モーラ分、核が後退したと考えられる(4-4c)。その結果、C2 が A2 になり、元々の A2 は B2 になるという、玉突き式の変化が起こったと考えられる(4-41(=4-10))。(4-42)は、このような変化により合流(中和)したと考えられる、A 系列の Y2 の語例である。

(4-41(=4-10))



(4-42)

酒	Y2	A 系列	sa[kī	sa[kīga	(山)
箱	Y2	A 系列	ha[ku	ha[ku:ŋga	(山)

最後に(4-38c)の基底 3 モーラの C 系列語について補足説明する。(4-38c)の二重下線の部分を見ると、Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型にも 7 例見られる。この 7 例はすべて、2 モーラ目に特殊モーラを持つ語例である。(4-43)に例を示す。

(4-43)

箒	X3	C 系列	hoR\ki	hoR\kiga	(山)
袋	X3	C 系列	haQ\ko	haQ\koga	(山)

このような語例には、徳之島諸方言で広くみられる「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」が影響しているものと考えられる。例えば(4-43)に挙げた「箒」と「袋」は、元々Z 型(Z3)の単独形/○[R○/と/○[Q○/であったと考えられる。この単独形から上記の音声的傾向により、/R/と/Q/を含む語頭音節が HH で発音されるようになったと推定される例である。このような例の場合、/○[R○/と/○[Q○/の語が X 型に中和しても、Z3 には 2 モーラ目に/R/および/Q/を含まない語例も多数あるため、このような中和はアクセント体系自体の通時的変遷には影響しないものである。表層のピッチパターンが Z3 と同じである C2(Z2)の場合とは事情が異なっている。

4.3.4 金見方言アクセントの通時的変遷

金見は徳之島町の北部に位置する集落である。金見方言のアクセント体系はX型、Y型、Z型を持つ3型アクセントである(3.3.4節を参照)。(4-44)は金見方言のアクセント型における基底1モーラから基底3モーラまでの語例が、A系列、B系列、C系列のうちどの系列に属するかを数えた表である。

(4-44) 金見方言

a.基底1モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	7	0	1	0
Y1	3	10	3	0

b.基底2モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	3	0	8	0
Y2	39	46	8	4
Z2	0	1	26	2

c.基底3モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	7	0	6	0
Y3	2	17	7	2
Z3	10	4	20	2

まず、(4-44b)の太線で囲んだ部分から説明する。(4-44b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合にはZ2に集中すると考えられるC系列の語が、祖語のA型に対応するX型に8例、祖語のB型に対応するY型に8例、祖語のC型に対応するZ型に26例見られる。C系列の語がZ型に対応する例の方が多いが、全体の3分の1ほどの語例がX型またはY型で見られる。こういった、C系列の語例の分布から、金見方言では、(4-4a)の《C2がA2もしくはB2に、B1がA1に合流するという「型の合流(中和)」》が少し進んだと考えられる。4.2節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-45)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、金見方言のC系列の基底2モーラ語の例である。

(4-45)

息	X2	C系列	i\ki	i:\kinu	i:\kikara	(金見)
鹽	Y2	C系列	ta[re	ta[re\neu	ta[reka\ra	(金見)

「息」は、C2/*[OA;O/の1音節目がHHになったことでA2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった2モーラ目の母音の伸び/;:/は、/*[O;O/→/[O:O/~/[OO/の過程を踏み短母音化したと考えられる。「鹽」はC2/*[OA;O/の1音節目がLLになったことでB2(Y2)になったと考えられる。「息」と同じく、元々あった2モーラ目の母音の伸び

/:/は、/*○:[○/→/○:[○/~○[○/過程を踏み短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/:/はフリーバリエーションで現れるものであり、/:/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 の語は A2 もしくは B2 に合流(中和)し、ゆくゆくは型自体が体系からなくなる過程にあるものと推測されるが、金見方言では C2 が A2 と B2 に合流する変化が進まず、現在のアクセント体系においても Z2 として勢力を持っているものと考えられる。また、(4-45a)を見ると B1 が A1(X1)に合流したと考えられる例は見られない。これからも、金見方言で(4-4a)の変化があまり進んでいない様子が伺える。

次に(4-44b-c)の灰色塗りの部分について説明する。ここは(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が生じたと考えられる部分である。(4-46)に(4-9)の表を改めて示し、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》の内容を再確認する。(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が起きると、語頭モーラに昇り核を置く A 型の場合、A2/*[○○/は B2/*○[○/に、A3/*[○○○/は C3/*○[○○/に合流する。後ろから 2 番目のモーラに昇り核を置く C 型の場合、C2/*[○○/(基底形)は B2/*○[○/に、C3/*○[○○/は B3/*○○[○/に合流する。A1/*[○/の場合、音節内上昇を作ってまで「山の後退」をしなければいけない積極的な理由がないため、「山の後退」は起きない。

(4-46(=4-9))

a. A 型の「山の後退」

A1	A2	A3	→	A1	A2→B2	A3→C3
*[○	*[○○	*[○○○		*[○	*○[○	*○[○○

b. C 型の「山の後退」

C2	C3	→	C2→B2	C3→B3
*[○○ (表層単独 [○A;○)	*○[○○		*○[○ (表層単独 ○[○)	*○○[○

まず、A 系列語から見ていくことにする。(4-44b)の A 系列の基底 2 モーラ語を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には X2 に集中すると考えられる A 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 3 例、祖語の B 型に対応する Y 型には 39 例見られる。(4-44c)の A 系列の基底 3 モーラ語を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には X3 に集中すると考えられる A 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 7 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 2 例、祖語の C 型に対応する Z 型に 10 例見られる。この中で、X 型と Y 型の 9 例は、2 モーラ目に特殊モーラを持つ語例であるので(4-45)で別に論じることにし、例外と処理すると、A 系列の基底 3 モーラ語も Z 型に集中していることになる。このような分

布から、金見方言では A2/*[○○/は B2(Y2)/○[○/に、A3/*[○○○/は C3(Z3)/○[○○/に合流する、(4-4b)の「山の後退」が起きたと解釈することが出来る。

次に C 系列の基底 2 モーラ語に起きた、(4-4b)の「山の後退」について説明する(4-44b の灰色塗りの部分)。C2/*[○○/(基底形)が B2(Y2)/○[○/に合流する変化に関しては、前述した(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》と(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》がともに C2 が B2 に合流することを予測する。しかし、金見方言では(4-44b)の基底 2 モーラの C 系列語の分布から、(4-4a)と(4-4b)のうちどちらが先に起こったかを予想することができる。(4-44b)を見ると、基底 2 モーラの C 系列語が、祖語の A 型に対応する X 型に 8 例見られる。まとまった数の語例が X 型に見られるということは、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》の方が先に起こり、C2 の多くが A2 もしくは B2 に合流した後、C 系列全体に(4-4b)の「山の後退」が生じたと考えることができる。もし、(4-4b)が先に起きているなら、C2 が B2(Y2)の方に合流してしまい、A2(X2)に語例が観察されないと考えられるからである。とはいえ、前述したように金見方言では C 系列の語が Z 型に一番多くみられるので、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》の変化もそれほど進んではいないと考えられる。

今度は、C 系列の基底 3 モーラ語に起きた(4-4b)の「山の後退」について説明する。(4-41c)の灰色塗りの部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z3 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 6 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 7 例、祖語の C 型に対応する Z 型に 20 例見られる。徳之島祖語から変化がなかった場合の予測と一致するが、Y 型にも 7 例ほど見られるので、C3/*○[○○/が B3(Y3)/○[○/に合流する、(4-4b)の「山の後退」が少々進んだと考えられる。A 系列語と B 系列語の語例の分布を比較すると、金見方言は C 型より A 型で(4-4b)の「山の後退」が著しい方言であると考えられる。(4-47) は(4-4b)の「山の後退」により合流したと考えられる例をまとめたものである。

(4-47)

〈A2→B2〉	坂	Y2	A 系列	hi[ra	hi[ranu	hi[rakara	(金見)
〈A3→C3〉	煙	Z3	A 系列	kī[bu:si	kī[bu:sinu	kī[bu:sikara	(金見)
〈C2→B2〉	昨日	Y2	C 系列	ki[nu	ki[nu:\nu	ki[nu:\kara	(金見)
〈C3→B3〉	顎	Y3	C 系列	utu[gë	utu[gë\nu	utu[gë\kara	(金見)

最後に(4-44c)の基底 3 モーラの語例について補足説明する。(4-44c)の二重下線の部分を見ると、X 型の A 系列語である 7 例と C 系列語である 6 例、Y 型の A 系列の 2 例すべてが、2 モーラ目に特殊モーラを持つ語例である(4-48)。このような例が X 型もしくは Y 型あることには、徳之島諸方言で広くみられる「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避

け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」が影響しているものと考えられる。

(4-48)

a.	扇	X3	C 系列	oR\gi	oR\ginu	oR\gikara	(金見)
	袋	X3	C 系列	huQ\ku	huQ\kunu	huQ\kukara	(金見・金 A)
b.	ご飯	X3	A 系列	haNmë	haNmënu	haNmëkara	(金見)
	二つ	X3	A 系列	?taRcji	?taRcjinu	?taRcjikara	(金見)
c.	鍬	Y3	A 系列	toR[gë	toR[gë\ :nu	toR[gë\ :kara	(金見)
	膝小僧	Y3	A 系列	cjiQ[sï	cjiQ[sïnu	cjiQ[sïkara	(金見)

(4-48a) の「扇」と「袋」は、元々 Z 型 (Z3) の単独形/○[R○/と/○[Q○/であったと考えられる。この単独形から上記の音声的傾向により、/R/と/Q/を含む語頭音節が HH で発音されるようになったと推定される例である。このような例の場合、/○[R○/と/○[Q○/の語が X 型に中和しても、Z3 には 2 モーラ目に/R/と/Q/を含まない語例も多数あるため、中和によってアクセント体系に含まれるアクセント型の数と内容(定義)が変わることはない。すなわち、アクセント体系の通時的変遷には直接影響するものではない。表層のピッチパターンが Z3 と同じである C2(Z2)の場合とは事情が異なっている。

(4-48b)の「ご飯」と「二つ」は、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》より A3/[○○○/から C3/○[○○/に合流する時に変化せず、残留したものと考えられる。A3/[haNmë/が C3×/ha[Nmë/になると音節内上昇が生じる。基本的に徳之島諸方言において音節内上昇は忌避されるものであり、その中でも語中における音節内上昇は、語末の音節内上昇より忌避される傾向が強い。また、(4-48c)の「鍬」と「膝小僧」は、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》により C3(Z3)に合流した語(A3/[○R○/・/[○Q○/→ C3/○[R○/・/○[Q○/)が、「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」により、/R/と/Q/を含む語頭音節が LL で発音されるようになったと推定される例である。

4.3.5 手々方言アクセントの通時的変遷

手々は徳之島町の最北に位置する集落である。手々方言のアクセント体系は X 型、Y 型、Z 型を持つ 3 型アクセントである(3.3.3 節を参照)。(4-49)は手々方言のアクセント型における基底 1 モーラから基底 3 モーラまでの語例が、A 系列、B 系列、C 系列のうちどの系列に属するかを数えた表である。

(4-49) 手々方言

a. 基底 1 モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	8	5	3	1
Y1	1	4	0	0

b. 基底 2 モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	2	1	22	8
Y2	37	41	3	6
Z2	0	1	7	0

c. 基底 3 モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	6	1	7	4
Y3	10	17	7	3
Z3	1	5	19	1

まず、(4-49a)と(4-49b)の太線で囲んだ部分から説明する。(4-49b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 22 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 3 例、祖語の C 型に対応する Z 型に 7 例見られる。こういった C 系列の語の分布から、手々方言では(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》が起きたと考えられる。4.2 節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-50)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、手々方言の C 系列の基底 2 モーラ語の例である。

(4-50)

柱	X2	C 系列	ha:\ja	ha\janu	ha\jakara	(手々)
盥	Y2	C 系列	ta[re	ta[re\:\nu	ta[re\:\kara	(手々)

「柱」は、C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が HH になったことで A2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏み短母音化したと考えられる。「盥」は C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が LL になったことで B2(Y2)になったと考えられる。「柱」と同じく、元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*○;[○/→/○:[○/~/[○[○/過程を踏み短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 の語は A2 もしくは B2 に合流(中和)し、ゆくゆくは型自体が体系からなくなる過程にあるものと推測されるが、手々方言では C2 が完全に A2 と B2 に合流せず、現在のアクセント体系に Z2 として残留していると考えられる。なお、C2 が A2 と B2 のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、手々方言では、B2(Y2)より A2(X2)に合流する割合が非常に高い。

また、(4-49a)を見ると B1 が A1(X1)に合流したと考えられる例は 5 例あり、B1 においても(4-4a)の変化が見られる。このような変化は、(4-49b)と同じく、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-51)は手々方言の B 系列の X1 の例である。

(4-51)

手	X1	B 系列	t̥iː^	t̥iː^\\nu	t̥iː^ka\\ra	(手々)
穂	X1	B 系列	hu	huː\\nu	huː\\kara	(手々)

「手」と「穂」は、B1/*[○/;が HH になったことで A1(X1)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;:/は、/*[○;:/→/[○:/~/[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。徳之島諸方言において/;:/はフリーバリエーションで現れるものなので、(4-51)の「手」と「穂」のように、/[○:/と/[○/が両パターン現れる。

次に、(4-49b-c)の灰色塗りの部分について説明する。ここは(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が生じたと考えられる部分である。(4-52)に(4-9)の表を改めて示し、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》の内容を再確認する。(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が起きると、語頭モーラに昇り核を置く A 型の場合、A2/*[○○/は B2/*○[○/に、A3/*[○○○/は C3/*○[○○/に合流する。後ろから 2 番目のモーラに昇り核を置く C 型の場合、C2/*[○○/(基底形)は B2/*○[○/に、C3/*○[○○/は B3/*○[○/に合流する。A1/*[○/の場合、音節内上昇を作ってまで「山の後退」をしなければいけない積極的な理由がないため、「山の後退」は起きない。

(4-52(=4-9))

a. A 型の「山の後退」

A1	A2	A3		A1	A2→B2	A3→C3
*[○	*[○○	*[○○○	→	*[○	*○[○	*○[○○

b. C 型の「山の後退」

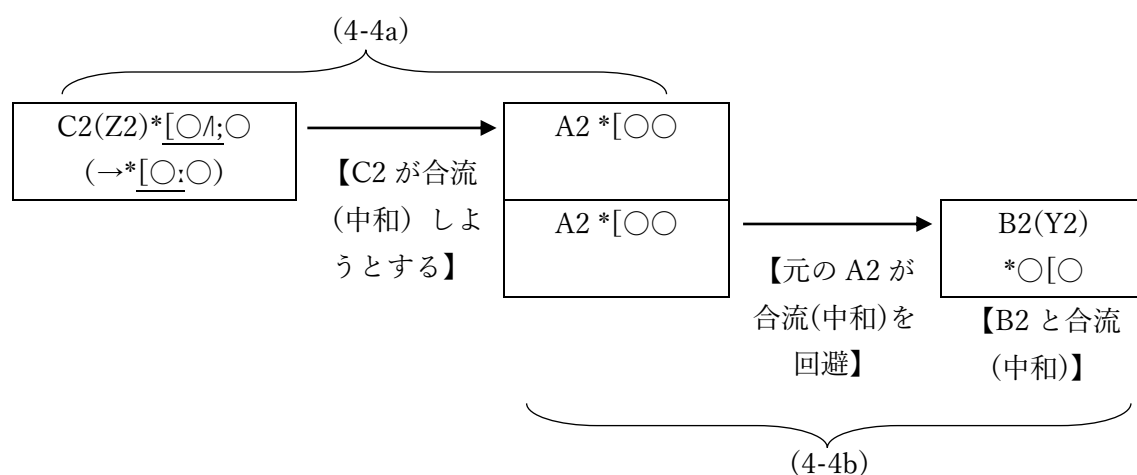
C2	C3		C2→B2	C3→B3
*[○○ (表層単独 [○/;○)	*○[○○	→	*○[○ (表層単独 ○[○)	*○○[○

まず、A 系列の基底 2 モーラ語で起きた(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》について説明する(4-49b)。(4-49b)の灰色塗るか二重線で囲んでいる部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には X2 に集中すると考えられる A 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 37 例見られ、Y 型に集中している。このような語例の分布から、

A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/に合流するしたことが伺える。この変化の原因には、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》と(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》が考えられ、両者がともに A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/に合流することを予測するため、どちらが変化の主因であるか判断できない。

(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が③発音上の利便性によって生じる「山の後退」である一方、(4-4c)の「核の後退」は①アクセント型の合流(中和)を回避するために生じる連鎖的な変化である。A2 が B2(Y2)に合流する理由を(4-4c)の「核の後退」と解釈するならば、A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/に合流するトリガーとなったのは、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》であると考えられる。C2 が A2 に合流しようとする場合、A2 は C2 との合流を回避し、1 モーラ分、核が後退する。その結果、C2 が A2 になり、元々の A2 は B2 になるという、玉突き式の変化が起こる。(4-53)に(4-10)で見た基底 2 モーラ語の変遷過程を示す。

(4-53(=4-10))



次に、(4-41c)の A 系列の基底 3 モーラ語について見ていくことにする。(4-41c)の A 系列の基底 3 モーラ語の語例の分布を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には X3 に集中すると考えられる A 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 10 例見られ、Y 型に集中している。A 系列の場合、A3/*[○○○/から変化をしつつも C3/○[○○/との合流回避もすることで、結果として B3(Y3)/○○[○/になるという、2 段階の変化が起こったと考えられる。手々と隣接する金見方言⁶⁶を見ると、手々方言では Y3 になっている A 系列の語が、金見方言においては Z3 になる語が多い(4-52)。

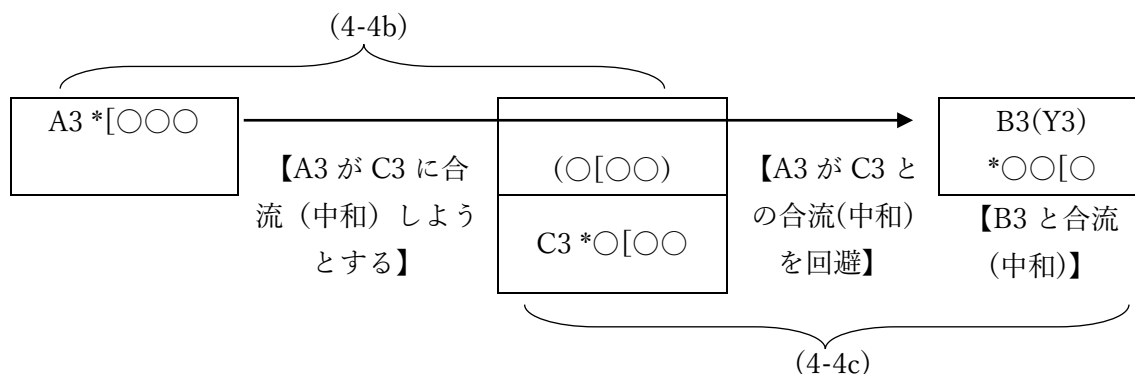
⁶⁶ 所属語彙の類似性と地理的近接性から、おそらく手々方言と金見方言は共通祖語を持つ。

(4-54)

a.	煙	Y3	A 系列	kibu[si	kibu[si\ɲu	kibu[si\ɲkara	(手々)
	黄金	Y3	A 系列	kuga[ni	kuga[ni\ɲu	kuga[nika\ɲra	(手々)
	鼻血	Y3	A 系列	hana[dzi	hana[dzinu	hana[dzikara	(手々)
b.	煙	Z3	A 系列	ki[bu:si	ki[bu:sinu	ki[bu:sikara	(金見)
	黄金	Z3	A 系列	ku[ga:ni	ku[ga:ninu	ku[ga:nikara	(金見)
	鼻血	Z3	A 系列	ha[na:dzi	ha[na:dzinu	ha[na:dzikara	(金見)

(4-54b)の金見方言の場合、A3/*[○○○/が C3(Z3)/○[○○/に合流したと考えられる。一方、手々方言は、金見方言のように A3/*[○○○/が「山の後退」を起こし/○[○○/になろうとしたが、それだと C3/*○[○○/と合流してしまうため、それを回避するためにもう 1 モーラ分の「核の後退」を起こし、/○○[○/になったものとする。細かく言えば A3/*[○○○/がピッチパターンを変えようとする (/○[○○/になろうとする) のは③発音上の利便性によって生じる「山の後退」(=(4-4b))が、最終的に/○[○○/ではなく/○○[○/になる過程では、①アクセント型の合流(中和)を回避するために生じる「核の後退」(=(4-4c))が関わっていると言える。上記のような変化の結果、A3/*[○○○/は最終的に B3(Y3)/○○[○/に合流する。B3 (Y3) との合流を回避しなかった理由については 4.2.3.2 節を参照してほしい。(4-55)に(4-14)で見た基底 3 モーラの A 系列語の変遷過程を示す⁶⁷。

(4-55(=4-14))



続けて、C 系列の基底 2 モーラ語に起きた(4-4b)の「山の後退」について説明する(4-49b)。手々方言では、C 系列の基底 2 モーラ語の語例の分布から、(4-4a)と(4-4b)のうちどちらが先に起こったかを予想することができる。C2/*[○○/(基底形)が B2(Y2)/○[○/に合流する変化に関しては、前述した(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合

⁶⁷ このような変遷過程を踏んだと考えられる方言は、手々方言以外には花徳方言、轟木方言がある。

流するという「型の合流(中和)」と(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が共通して予測する内容である。(4-49b)を見ると、基底 2 モーラの C 系列語は、A 型に対応する X 型に 22 例、祖語の B 型に対応する Y 型には 3 例見られ、C2 が B2 より A2(X2)の方に合流する割合が高かったことが分かる。C 系列の語が X 型にまとまった数で見られるということは、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》の方が先に起こり、C2 の多くが A2 もしくは B2 に合流した後、C 系列全体に(4-4b)の「山の後退」が生じたと考えることができる。もし、(4-4b)が先に起きているなら、C2 が B2(Y2)の方に合流してしまい、A2(X2)にまとまった数の語例が観察されないと考えられるからである。

また、C 系列の基底 3 モーラ語の分布を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z3 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 7 例見られる。C3/*○[○○/が B3(Y3)/○○[○/になる(4-4b)の「山の後退」が進んでいると捉えられそうである。A 系列語と B 系列語の語例の分布を比較すると、手々方言は C 型より A 型で(4-4b)の「山の後退」が著しい方言であると考えられる。ここまで説明した(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》により合流(中和)したと考えられる語例を(4-56)にまとめて示すことにする。

(4-56)

〈A2→B2〉	羽	Y2	A 系列	ha[nĩ	ha[nĩnu	ha[nĩkara	(手々)
〈A3→C3〉	涎	Z3	A 系列	ju[dai	ju[dai\̃nu	ju[daikara	(手々)
〈A3→(C3)→B3〉	煙	Y3	A 系列	kĩbu[si	kĩbu[si\̃nu	kĩbu[si\̃kara	(手々)
〈C2→B2〉	鹽	Y2	C 系列	ta[re	ta[re\̃:nu	ta[re\̃:kara	(手々)
〈C3→B3〉	しゃもじ	Y3	C 系列	misi[ge	misi[ge\̃:nu	misi[ge\̃:kara	(手々)

最後に(4-49c)の基底 3 モーラの X 型について補足説明する(二重下線の部分)。X3 は A 系列に 6 例、C 系列に 7 例見られ、ほとんどの語が A 系列と C 系列の語である。そして、この 13 中 12 例もが、2 モーラ目に特殊モーラを持つ(4-57)のような語である。このような例が X 型にあることには、徳之島諸方言で広くみられる「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」が影響しているものと考えられる。

(4-57)

a.	翹	X3	A 系列	koRdzi	koRdzinu	koRdzikara	(手々)
b.	あおさ	X3	C 系列	oR\̃sa	oR\̃sanu	oR\̃sakara	(手々)
	息	X3	C 系列	iQ\̃ki	iQ\̃kinu	iQ\̃kikara	(手々)

(4-57a)の「麴」は、(4-4b)の「山の後退」により A3/*[○○○/から○[○○/に「山の後退」が起こる時に変化せず、残留したものと考えられる。A3/[koRdzi/が C3[×]/ko[Rdzi/になると音節内上昇が生じる。基本的に徳之島諸方言において音節内上昇は忌避されるものであり、その中でも語中における音節内上昇は、語末の音節内上昇より忌避される傾向が強い。

一方、(4-57b)の「あおさ」と「息」は元々Z 型(Z3)の単独形/○[R○/と/○[Q○/であったと考えられる。この単独形から上記の音声的傾向により、/R/と/Q/を含む語頭音節がHHで発音されるようになったと推定される例である。このような例の場合、/○[R○/と/○[Q○/の語がX型に中和しても、Z3には2モーラ目に/R/および/Q/を含まない語例も多数あるため、このような中和はアクセント体系自体の通時的変遷には影響しないものである。

4.3.6 轟木方言アクセントの通時的変遷

轟木方言は徳之島の北の中央部、徳之島町と天城町の間に位置する集落である。轟木方言のアクセント体系はX型、Y型、Z型を持つ3型アクセントである(3.3.6節を参照)。(4-58)は轟木方言のアクセント型における基底1モーラから基底3モーラまでの語例が、A系列、B系列、C系列のうちどの系列に属するかを数えた表である。

(4-58) 轟木方言

a.基底1モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	7	5	4	5
Y1	2	5	0	2

b.基底2モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	0	1	14	2
Y2	39	41	7	9
Z2	0	1	17	2

c.基底3モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	1	0	4	2
Y3	12	17	7	5
Z3	0	3	16	4

まず、(4-58a)と(4-58b)の太線で囲んだ部分から説明する。(4-58b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合にはZ2に集中すると考えられるC系列の語が、祖語のA型に対応するX型に14例、祖語のB型に対応するY型に7例、祖語のC型に対応するZ型に17例見られる。C系列の語がZ型に対応する例が比較多いが、約半数くらいの語が、A2(X2)とB2(Y2)に合流(中和)したことが伺える。こういった変化は、(4-4a)の《C2がA2もしくはB2に、B1がA1に合流するという「型の合流(中和)」》が起

きたためであると考えられる。4.2 節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-59)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、轟木方言の C 系列の基底 2 モーラ語の例であり、(4-4a)によりそれぞれ X 型(A 型)と Y 型(B 型)に中和(合流)したと考えられるものである。

(4-59)

息	X2	C 系列	iŋki	iŋkinu	iŋkikara	(轟木)
				iŋkiga		
声	Y2	C 系列	ku[i	ku[inu	ku[ikara	(轟木)
				ku[iŋga		

「息」は、C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が HH になったことで A2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。「声」は C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が LL になったことで B2(Y2)になったと考えられる。「息」と同じく、元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*○;[○/→/○:[○/~/[○[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 の語は A2 もしくは B2 に合流(中和)し、ゆくゆくは型自体が体系からなくなる過程にあるものと推測されるが、轟木方言では C2 が完全に A2 と B2 に合流せず、現在のアクセント体系に Z2 として残留していると考えられる。なお、C2 が A2 と B2 のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、轟木方言では、B2 より A2 に合流する語例が比較的多い。

また、(4-58a)を見ると B1 が A1 に合流したと考えられる例は 5 例あり、B1 においても(4-4a)の変化が見られる。このような変化は、(4-58b)と同じく、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-60)は轟木方言の B 系列の X1 の例である。

(4-60)

蛸	X1	B 系列	to:ˆ	to:ˆ\nu	to:ˆ\kara	(轟木・轟 B)
				to:ˆ\ga		
木	X1	B 系列	kĩ\:/ kī	kĩ\vu	kĩ\kara	(轟木)
				kĩ\ga		

「蛸」と「木」は、B1/*[○Λ;/が HH になったことで A1(X1)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;/→/[○:/~/[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものなので、(4-58)の「蛸」と「木」のように、/[○:/と/[○/の両パターンが現れる。

次に(4-58b-c)の灰色塗りの部分について説明する。ここは(4-4b)の《A型とC型における「山の後退」》が生じたと考えられる部分である。(4-61)に(4-9)の表を改めて示し、(4-4b)の《A型とC型における「山の後退」》の内容を再確認する。(4-4b)の《A型とC型における「山の後退」》が起きると、語頭モーラに昇り核を置くA型の場合、A2/*[○○/はB2/*○[○/に、A3/*[○○○/はC3/*○[○○/に合流する。後ろから2番目のモーラに昇り核を置くC型の場合、C2/*[○○/(基底形)はB2/*○[○/に、C3/*○[○○/はB3/*○○[○/に合流する。A1/*[○/の場合、音節内上昇を作ってまで「山の後退」をしなければいけない積極的な理由がないため、「山の後退」は起きない。

(4-61(=4-9))

a. A型の「山の後退」

A1	A2	A3	→	A1	A2→B2	A3→C3
*[○	*[○○	*[○○○		*[○	*○[○	*○[○○

b. C型の「山の後退」

C2	C3	→	C2→B2	C3→B3
*[○○ (表層単独 [○A;○)	*○[○○		*○[○ (表層単独 ○[○)	*○○[○

まず、A系列の基底2モーラ語で起きた(4-4b)の「山の後退」から説明する(4-58b)。(4-58b)のA系列の灰色塗りの部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合にはX2に集中すると考えられるA系列の語が祖語のB型に対応するY型に39例見られ、Y型に集中している。このような語例の分布からA2/*[○○/がB2(Y2)/○[○/へ合流したことが伺える。この変化の原因には(4-4b)の《A型とC型における「山の後退」》と、(4-4c)の《型の合流(中和)》を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」が考えられる。轟木方言では、このうち(4-4b)の「山の後退」が変化の主因であると考えられる。

なぜなら、(4-4b)の「山の後退」とは異なり、(4-4c)の「核の後退」は、アクセント型の合流(中和)を回避するために生じる連鎖的な変化である。ここで、(4-4c)の「核の後退」を引き起こすトリガーとなり得る変化は、(4-4a)のC2がA2(X2)に合流(中和)する変化である。しかし、(4-58b)を見ると、C2がA2(X2)に合流したと考えられる語例数は14例だけで、轟木方言においては(4-4a)の変化が進んでいるとは言えない。(4-4a)の変化が進んでいないのに、(4-4a)に影響されての連鎖的な変化である(4-4c)の変化が進むかどうかには疑問が残る。しかし、実際にA2/*[○○/がB2(Y2)/○[○/に合流(中和)したと考えられる語例数は39例もあり、その変化が著しい。ここは、(4-4b)の《A型とC型における「山の後退」》のほうが変化の主因であると考えるのが妥当であろう。

次に、(4-58c)の A 系列の基底 3 モーラ語について見ていくことにする。(4-58c)の A 系列の基底 3 モーラ語の語例の分布を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には X3 に集中すると考えられる A 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 12 例見られ、Y 型に集中している。A 系列の場合、A3/*[○○○/から変化をしつつも C3/○[○○/との合流回避もすることで、結果として B3(Y3)/○○[○/になるという、2 段階の変化が起こったと考えられる。金見方言⁶⁸を見ると、轟木方言では Y3 になっている A 系列の語が、金見方言においては Z3 になる語が多い(4-62)。

(4-62)

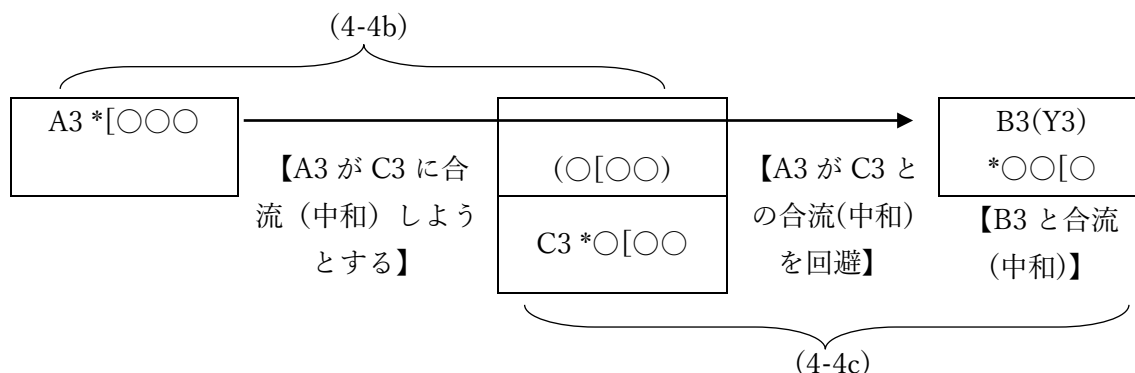
a.	煙	Y3	A 系列	kibu[si	kibu[si\ɲu	kibu[si\kara	(轟木)
	鼻血	Y3	A 系列	hana[dzi	hana[dzi\ga		(轟木)
	涎	Y3	A 系列	juda[i	juda[inu	juda[ikara	(轟木)
					juda[iga		
b.	煙	Z3	A 系列	kī[bu:si	kī[bu:sinu	kī[bu:sikara	(金見)
	鼻血	Z3	A 系列	ha[na:dzi	ha[na:dzinu	ha[na:dzikara	(金見)
	涎	Z3	A 系列	ju[dai	ju[dainu	ju[daikara	(金見)

(4-62b)の金見方言の場合、A3/*[○○○/が C3(Z3)/○[○○/に合流したと考えられる。一方、轟木方言は、金見方言のように A3/*[○○○/が「山の後退」を起こし/○[○○/になろうとしたが、それだと C3/*○[○○/と合流してしまうため、それを回避するためにもう 1 モーラ分の「核の後退」を起こし、B3(Y3)/○○[○/になったものとする。細かく言えば A3/*[○○○/がピッチパターンを変えようとする (/○[○○/になろうとする) のは③発音上の利便性によって生じる「山の後退」(=(4-4b))が、最終的に/○[○○/ではなく/○○[○/になる過程では、①アクセント型の合流(中和)を回避するために生じる「核の後退」(=(4-4c))が関わっていると言える。上記のような変化の結果、A3/*[○○○/は最終的に B3(Y3)/○○[○/に合流する。B3(Y3)との合流を回避しなかった理由については 4.2.3.2 節を参照してほしい。(4-63)に(4-14)で見た基底 3 モーラの A 系列語の変遷過程を示す⁶⁹。

⁶⁸ 手々方言と金見方言のように、轟木方言も(徳之島祖語以降の)共通祖語を持つと主張しているものではないが、(4-62)の例においては、金見方言と轟木方言の所属語彙が類似しており、類似の変化過程を経たのではないかと推測される。

⁶⁹ このような変遷過程を踏んだと考えられる方言は、轟木方言以外には花徳方言、手々方言がある。

(4-63(=4-14))



続けて、C 系列の基底 2 モーラ語に起きた(4-4b)の「山の後退」のタイミングについて説明する(4-58b)。轟木方言では、C 系列の基底 2 モーラ語の語例の分布（太線で囲まれた部分）から、(4-4a)と(4-4b)のうちどちらが先に起こったかを予想することができる。C2/*[○○/(基底形)が B2(Y2)/○[○/に合流する変化に関しては、前述した(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》と(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が共通して予測する内容である。(4-58b)を見ると、基底 2 モーラの C 系列語が、A 型に対応する X 型に 14 例、祖語の B 型に対応する Y 型には 7 例見られ、C2 が B2 より A2(X2)の方に合流する割合が高い。C 系列の語が X 型にまとまった数で見られるということは、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》の方が先に起こり、C2 の多くが A2 もしくは B2 に合流した後、C 系列全体に(4-4b)の「山の後退」が生じたと考えることができる。もし、(4-4b)が先に起きているなら、C2 が B2(Y2)の方に合流してしまい、A2(X2)にまとまった数の語例が観察されないと考えられるからである。

今度は、(4-58c)の C 系列の基底 3 モーラ語のうち灰色塗りの部分について説明する。C 系列の基底 3 モーラ語の分布を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z3 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 7 例見られる。C3/*○[○○/が B3(Y3)/○○[○/になる(4-4b)の「山の後退」が進んでいる途中であると捉えられそうである。A 系列語と C 系列語の語例の分布を比較すると、轟木方言は C 型より A 型で(4-4b)の「山の後退」が著しい方言であると考えられる。ここまで説明した(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》により合流(中和)したと考えられる語例を(4-64)にまとめて示すことにする。

(4-64)

〈A2→B2〉	牙	Y2	A 系列	ki[ba	ki[ba\ga	(轟木)
〈A3→(C3)→B3〉	右	Y3	A 系列	nigi[ri	nigi[ri\ga	(轟木)
〈C2→B2〉	子供	Y2	C 系列	wa:[re / wa[re	wa:[rega	(轟木)

〈C3→B3〉 情け Y3 C 系列 nasa:[kī / nasa[kī nasa:[kīga (轟木)

最後に、基底 3 モーラ語のうちで 2 モーラ目に特殊モーラを持つ語例について説明する((4-58c)の二重下線の部分)。C 系列語における X3 の 4 例中 3 例と Y3 の 7 例中 5 例が 2 モーラ目に特殊モーラを持つ(4-65)に挙げたような語例である。

(4-65)⁷⁰

- | | | | | | | | |
|----|------|----|------|---------|-----------|-------------|----------|
| a. | 蓆 | X3 | C 系列 | muQsju | muQsjunu | muQsjuka\ra | (轟木・轟 B) |
| | | | | | muQsjuga | | |
| | あおさ | X3 | C 系列 | oR\sa | oR\sanu | oR\sakara | (轟木) |
| | | | | | oR\saga | | |
| b. | 蓆 | Y3 | C 系列 | muR[sju | muR[sjuga | | (轟木・轟 A) |
| | 畑 | Y3 | C 系列 | haQ[te | haQ[te\ga | | (轟木) |
| | たてがみ | Y3 | C 系列 | gaN[gi | gaN[gi\ga | | (轟木) |

このような例が X 型もしくは Y 型にあることには、徳之島諸方言で広くみられる「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」が影響しているものと考えられる。まず、(4-65a)の「蓆(轟 B)」、「あおさ」を見ると、元々 Z 型 (Z3) の単独形/○[R○/と/○[Q○/であったと考えられる。この単独形から上記の音声的傾向により、/R/と/Q/を含む語頭音節が HH で発音されるようになったと推定される例である。このような例の場合、/○[R○/と/○[Q○/の語が X 型に中和しても、Z3 には 2 モーラ目に/R/および/Q/を含まない語例も多数あるため、このような中和はアクセント体系自体の通時的変遷には影響しないものである。

一方、(4-65b)の「蓆(轟 A)」、「畑」、「たてがみ」が C2/*○[○○/から B2(Y2)/○○[○/へ合流する変化に関しては、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》と「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」の両方で説明することができ、どちらが変化の主因であるか判断できない。ただ、仮に(4-65b)のような語例が「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」によるものであるならば、元々 Z 型 (Z3) の単独形/○[R○/と/○[Q○/であった語が、上記の音声的傾向により、/R/と/Q/を含む語頭音節が LL で発音されるようになり Y3 に合流したと考えることが出来る。このような解釈をするなら、轟木方言において C 型における(4-4b)の「山の後退」は、あまり進んでいないということになる。他の徳之島諸方言(手々、金見方言など)においても C 型における(4-4b)の「山の後退」は、A 型における(4-4b)の「山の後退」より進んでいない

⁷⁰ 「蓆」のアクセント型が話者間で揺れる理由に関しては、3.3.6 節を参照。

場合があり、轟木方言でも同じ傾向があるのかも知れない。

4.3.7 阿権方言アクセントの通時的変遷

阿権は徳之島の南部に位置する集落である。阿権方言のアクセント体系はX型、Y型、Z型を持つ3型アクセントである(3.3.10節を参照)。(4-66)は阿権方言のアクセント型における基底1モーラから基底3モーラまでの語例が、A系列、B系列、C系列のうちどの系列に属するかを数えた表である。

(4-66) 阿権方言

a.基底1モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	10	1	5	2
Y1	0	9	0	0

b.基底2モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	36	1	27	8
Y2	2	42	8	6
Z2	0	0	4	2

c.基底3モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	18	1	0	2
Y3	0	20	11	3
Z3	0	4	16	1

まず、(4-66a)と(4-66b)の太線で囲んだ部分から説明する。(4-66b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合にはZ2に集中すると考えられるC系列の語が、祖語のA型に対応するX型に27例、祖語のB型に対応するY型に8例、祖語のC型に対応するZ型に4例見られる。こういったC系列の語の分布から、阿権方言では(4-4a)の《C2がA2もしくはB2に、B1がA1に合流するという「型の合流(中和)」》が起きたと考えられる。4.2節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-67)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、阿権方言のC系列の基底2モーラ語の例である。

(4-67)

浜	X2	C系列	ha\ma	ha\manu	ha\makara	(阿権)
子供	Y2	C系列	wa[re	wa[re:\nu	wa[re\kara	(阿権)
			/wa[re\:	/wa[re\:\nu	/wa[re\:\kara	

「浜」は、C2/*[○\:/の1音節目がHHになったことでA2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった2モーラ目の母音の伸び/;:/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○○/の

過程を踏んで短母音化したと考えられる。「子供」は C2/*[○/;○/の 1 音節目が LL になったことで B2(Y2)になったと考えられる。「浜」と同じく、元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*○;[○/→/○:[○/~○[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 の語は A2 もしくは B2 に合流(中和)し、ゆくゆくは型自体が体系からなくなる過程にあるものと推測されるが、阿権方言では C2 が完全に A2 と B2 に合流せず、現在のアクセント体系に Z2 として残留していると考えられる。なお、C2 が A2 と B2 のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、阿権方言では、B2(Y2)より A2(X2)に合流する割合が非常に高い。

一方、(4-66a)の B1 が A1(X1)に合流したと考えられる例は 1 例のみで、基底 2 モーラ語に比べて合流した語例の比率は少ない。しかし、阿権方言の Y1 の例を見ると、助詞 /kara/ を付けた時に、「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ (HH もしくは LL) にするという音声的傾向」により、特殊モーラを含む音節の音節全体が LL になることで、(4-68)の下線部のような例外的なピッチパターンが観察される。ここでは、基底 2 モーラ語と同じく、基底 1 モーラ語においても、②音節内上昇を回避するために生じる変化が起きていると考えられる。ただし、このような特殊モーラを含む音節が LL になる変化は、特殊モーラを含む音節の音節全体が HH になる場合、すなわち B1 が A1 に合流する方向の変化と違ってアクセント型の合流を引き起こすものではない。

(4-68)

潮・海水	Y1	B 系列	[sju/;	[sju/;\nu	<u>[sju;/ka\ra</u>	(阿権)
蛸	Y1	B 系列	[to/;	[to/;\nu	<u>[to;/ka\ra</u>	(阿権)

次に(4-66b-c)の灰色塗りの部分について説明する。阿権方言は C 型にのみ「山の後退」が起き、A 型には起きなかったと考えられる方言である。(4-69)に(4-9)の表を改めて示し、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》の内容を再確認する。(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が起きると、語頭モーラに昇り核を置く A 型の場合、A2/*[○○/は B2/*○[○/に、A3/*[○○○/は C3/*○[○○/に合流する。後ろから 2 番目のモーラに昇り核を置く C 型の場合、C2/*[○○/(基底形)は B2/*○[○/に、C3/*○[○○/は B3/*○[○/に合流する。A1/*[○/の場合、音節内上昇を作ってまで「山の後退」をしなければいけない積極的な理由がないため、「山の後退」は起きない。

(4-69(=4-9))

a. A 型の「山の後退」

A1	A2	A3		A1	A2→B2	A3→C3
*[○	*[○○	*[○○○	→	*[○	*○[○	*○[○○

b. C 型の「山の後退」

C2	C3		C2→B2	C3→B3
*[○○ (表層単独 [○/;○)	*○[○○	→	*○[○ (表層単独 ○[○)	*○○[○

これを踏まえて阿権方言の A 系列語を見ると、阿権方言では A 型の「山の後退」が起きていないことが分かる。(4-4b)の「山の後退」が起きる前に A 型がすでに「高起式でアクセント核を持たない(“0”)」型になっており、C 型のみに(4-4b)の「山の後退」が起きたと解釈することができる。(4.2.2 節を参照)

次に C 系列の基底 2 モーラ語に起きた(4-4b)の「山の後退」のタイミングについて説明する(4-66b)。阿権方言では基底 2 モーラの C 系列語の分布(太線で囲まれた部分)から、(4-4a)と(4-4b)のうちどちらが先に起こったかを予想することができる。C2/*[○○/(基底形)が B2(Y2)/○[○/に合流する変化に関しては、前述した(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》と(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が共通して予測する内容である。(4-66b)を見ると、基底 2 モーラの C 系列語は、A 型に対応する X 型に 27 例、祖語の B 型に対応する Y 型には 8 例見られる。C 系列の語が X 型にまとまった数で見られるということは、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》の方が先に起こり、C2 の多くが A2 もしくは B2 に合流した後、C 系列全体に(4-4b)の「山の後退」が生じたと考えることができる。もし、(4-4b)が先に起きているなら、C2 が B2(Y2)の方に合流してしまい、A2(X2)にまとまった数の語例が観察されないと考えられるからである。

今度は、C 系列の基底 3 モーラ語について見ていくことにする。(4-66c)の灰色塗りの部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z3 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 11 例見られ、C3/*○[○○/が B3(Y3)/○○[○/になる(4-4b)の「山の後退」の変化が起きていると捉えられそうである。おそらく通時的には変化の途中であろうと考えられる。ここまで説明した(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》により合流(中和)したと考えられる語例を(4-70)にまとめて示すことにする。

(4-70)

〈C2→B2〉 畑 Y2 C 系列 ha[te ha[te\ɲu ha[te/ɪ\kara (阿権)
/ ha[te/ɪ: / ha[te/ɪ:\ɲu
〈C3→B3〉 しゃもじ Y3 C 系列 misi[ge misi[ge\ɲu misi[ge\ɪ:kara (阿権)

4.3.8 面縄方言アクセントの通時的変遷

面縄は徳之島の徳之島の南部に位置する集落である。面縄方言のアクセント体系はX型、Y型、Z型を持つ 3 型アクセントである(3.3.11 節を参照)。(4-71)は面縄方言のアクセント型における基底 1 モーラから基底 3 モーラまでの語例が、A 系列、B 系列、C 系列のうちのどの系列に属するかを数えた表である。

(4-71) 面縄方言

a.基底 1 モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	10	1	5	3
Y1	0	8	1	2

b.基底 2 モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	28	5	21	8
Y2	6	25	7	5
Z2	0	1	8	1

c.基底 3 モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	12	2	1	3
Y3	1	17	14	3
Z3	1	3	10	3

まず、(4-71b)の太線で囲んだ部分から説明する。(4-71b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 21 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 7 例、祖語の C 型に対応する Z 型に 8 例見られる。こういった C 系列の語の分布から、面縄方言では(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》が起きたと考えられる。4.2 節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-72)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、面縄方言の C 系列の基底 2 モーラ語の例である。

(4-72)

砂糖 X2 C 系列 sa\ta sa\tanu (面縄)
昨日 Y2 C 系列 ki:[nu / ki:[nu ki:[nu\ɲu (面縄)

「砂糖」は、C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が HH になったことで A2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。「昨日」は C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が LL になったことで B2(Y2)になったと考えられる。「砂糖」と同じく、元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*○;[○/→/○:[○/~[○[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 の語は A2 もしくは B2 に合流(中和)し、ゆくゆくは型自体が体系からなくなる過程にあるものと推測されるが、面縄方言では C2 が完全に A2 と B2 に合流せず、現在のアクセント体系に Z2 として残留していると考えられる。なお、C2 が A2 と B2 のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、面縄方言では、B2(Y2)より A2(X2)に合流する割合が高い。

一方、(4-71a)の B1 が A1(X1)に合流したと考えられる例は 1 例のみで、基底 2 モーラ語に比べて合流した語例の比率は少ない。しかし、面縄方言の Y1 の例を見ると、助詞を付けた時に、「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」により、特殊モーラを含む音節の音節全体が LL になることで生じたと考えられる例外的なピッチパターンが観察される。(4-73)の下線部がそうである。C2 が A2 もしくは B2 に合流する変化には及ばないが、B1 においても、②音節内上昇を回避するために生じる変化の影響を受けているようである。ただし、このような特殊モーラを含む音節が LL になる変化は、特殊モーラを含む音節の音節全体が HH になる場合、すなわち B1 が A1 に合流する方向の変化と違ってアクセント型の合流を引き起こすものではない。

(4-73)

齒	Y1	B 系列	[hwaΛ;	[hwaΛ;\nu	[hwaΛ;ka\ra	(面縄)
			/ [hwa/nu	/ [hwa;ka\ra		

次に(4-71)の灰色塗りの部分について説明する。面縄方言は C 型にのみ「山の後退」が起き、A 型には起きなかったと考えられる方言である。(4-74)に(4-9)の表を改めて示し、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が起きると、語頭モーラに昇り核を置く A 型の場合、A2/*[○○/は B2/*○[○/に、A3/*[○○○/は C3/*○[○○/に合流する。後ろから 2 番目のモーラに昇り核を置く C 型の場合、C2/*[○○/(基底形)は B2/*○[○/に、C3/*○[○○/は B3/*○○[○/に合流する。A1/*[○/の場合、音節内上昇を作ってまで「山の後退」をしなければいけない積極的な理由がないため、「山の後退」は起きない。

(4-74(=4-9))

a. A 型の「山の後退」

A1	A2	A3		A1	A2→B2	A3→C3
*[○	*[○○	*[○○○	→	*[○	*○[○	*○[○○

b. C 型の「山の後退」

C2	C3		C2→B2	C3→B3
*[○○ (表層単独 [○/;○)	*○[○○	→	*○[○ (表層単独 ○[○)	*○○[○

これを踏まえて面縄方言の A 系列語を見ると、面縄方言では A 型の「山の後退」が起きていないことが分かる。(4-4b)の「山の後退」が起きる前に A 型がすでに「高起式でアクセント核を持たない(“0”)」型になっており、C 型のみに(4-4b)の「山の後退」が起きたと解釈することができる。(4.2.2 節を参照)

次に C 系列の基底 2 モーラ語に起きた(4-4b)の「山の後退」のタイミングについて説明する(4-71b)。面縄方言では基底 2 モーラの C 系列語の分布(太線で囲まれた部分)から、(4-4a)と(4-4b)のうちどちらが先に起こったかを予想することができる。C2/*[○○/(基底形)が B2(Y2)/○[○/に合流する変化に関しては、前述した(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》と(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が共通して予測する内容である。(4-71b)を見ると、基底 2 モーラの C 系列語は、A 型に対応する X 型に 21 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 7 例見られる。C 系列の語が X 型にまとまった数で見られるということは、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》の方が先に起こり、C2 の多くが A2 もしくは B2 に合流した後、C 系列全体に(4-4b)の「山の後退」が生じたと考えることができる。もし、(4-4b)が先に起きているなら、C2 が B2(Y2)の方に合流してしまい、A2(X2)にまとまった数の語例が観察されないと考えられるからである。

今度は、C 系列の基底 3 モーラ語について見ていくことにする。(4-71c)の灰色塗りの部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z3 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 14 例見られ、C3/*○[○○/が B3(Y3)/○○[○/になる(4-4b)の「山の後退」の変化が起きていると捉えられそうである。おそらく通時的には変化の途中であろうと考えられる。ここまで説明した(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》により合流(中和)したと考えられる語例を(4-75)にまとめて示すことにする。

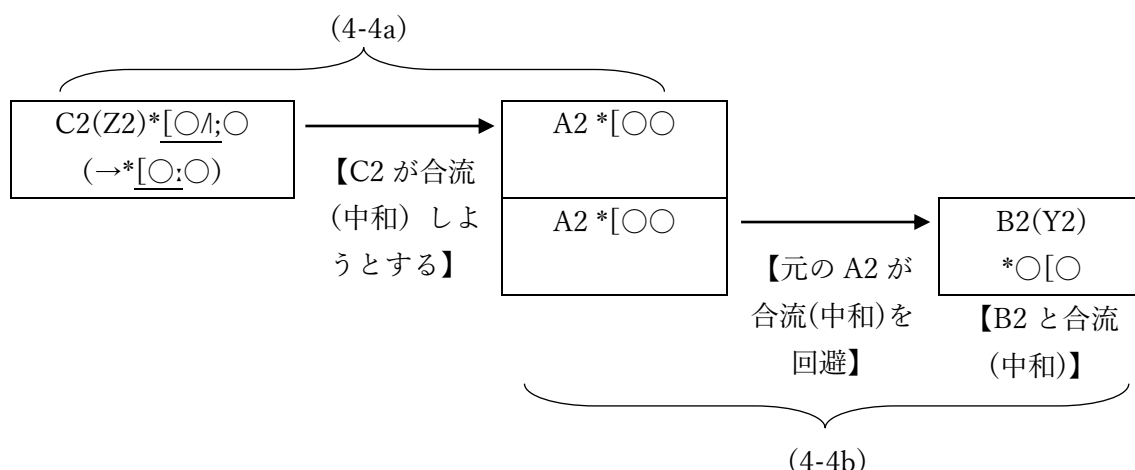
(4-75)

〈C2→B2〉 たんこぶ Y2 C 系列 ga[bu ga[bu\nu (面縄)

〈C3→B3〉 しゃもじ Y3 C 系列 misi[ge misi[ge\\nu misi[ge\\kara (面縄)

次に、(4-71b)の基底 2 モーラ語の A 系列について説明する(二重線で囲んでいる部分)。(4-71b)の二重線で囲んでいる部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には X2 に集中すると考えられる A 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 6 例見られる。全体から見れば少数であるが、A2/*[○○/の一部が B2(Y2)/○[○/に合流した様子が伺える部分である。このような変化は、(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「山の後退」》に当たるもので、①アクセント型の合流(中和)を回避するために生じる変化の一つである。(4-76)に(4-10)で見た、C2 が A2 になり、元々の A2 は B2(Y2)になるという、玉突き式の変化過程をもう一度示す。(4-77)は、このような変化により合流(中和)したと考えられる、A 系列の Y2 の語例である。

(4-76(=4-10))



(4-77)

種	Y2	A 系列	ta[nĩ	ta[nĩ\\nu	ta[nĩka\\ra	(面縄)
飴	Y2	A 系列	a[mĩ	a[mĩ\\nu	a[mĩka\\ra	(面縄)

4.3.9 井之川方言アクセントの通時的変遷

井之川方言は徳之島町の中央部に位置する集落である。井之川方言のアクセント体系は X 型、Y 型、Z 型を持つ 3 型アクセントである(3.5.2 節を参照)。井之川方言は祖語の体系から B1(Y1)と C2(Z2)が他の型に合流(中和)して無くなったアクセント体系を持つ。(4-78)は井之川方言のアクセント型における基底 1 モーラから基底 3 モーラまでの語例が、A 系列、B 系列、C 系列のうちどの系列に属するかを数えた表である。祖体系から見て合流(中和)したと考えられる Y1 と Z2 は表の外側に見え消しで記す。

(4-78) 井之川方言

a. 基底 1 モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	10	10	3	3
𐄂𐄂	𐄂	𐄂	𐄂	𐄂

b. 基底 2 モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	1	4	27	9
Y2	36	36	7	9
Z2	𐄂	𐄂	𐄂	𐄂

c. 基底 3 モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	8	3	7	2
Y3	2	14	3	2
Z3	6	5	20	7

まず、(4-78a)と(4-78b)の太線で囲んだ部分から説明する。(4-78b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 27 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 7 例見られ、C2 が完全に A2 と B2 に合流(中和)したことが分かる。こういった C 系列語の分布から井之川方言では(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》が起きたと考えられる。4.2 節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-79)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、井之川方言の C 系列の基底 2 モーラ語の例である。

(4-79)

猿	X2	C 系列	sa\u ru	sa\u runu	sa\u rukara	(井之川)
昨日	Y2	C 系列	ki\u nu	ki\u nu\u nu	ki\u nuka\u ra	(井之川)
				/ ki\u nu: \u nu		

「猿」は、C2/*[○l;○/の 1 音節目が HH になったことで A2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。「昨日」は C2/*[○l;○/の 1 音節目が LL になったことで B2(Y2)になったと考えられる。「猿」と同じく、元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*○;[○/→/[○:○/~/[○[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 は A2 もしくは B2 に合流(中和)し、アクセント体系から C2(Z2)がなくなるという変化をもたらしたと考えられる。なお、C2 が A2 と B2 のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、井之川方言では、B2(Y2)より A2(X2)に合流する割合が非常に高い。

また、(4-78a)を見ると B1 が A1 に合流(中和)し、アクセント体系から B1(Y1)が無くなったことが伺える。このような変化は、(4-78b)の場合と同じく、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。このような変化の結果、B1 は A1 に合流(中和)しアクセント体系から B1(Y1)がなくなるという変化をもたらしたと考えられる。(4-80)は井之川方言の B 系列の X1 の例である。

(4-80)

穂	X1	B 系列	hu	hu\ɲu	hu:\kara	(井之川)
家	X1	B 系列	ja	ja\ɲu	ja:kɒɾa	(井之川)

「穂」と「家」は、B1/*[○/;が HH になったことで A1(X1)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;/→/[○:/~/[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものなので、(4-80)の「穂」と「家」のように、/[○:/と/[○/の両パターンが現れる。

次に、(4-78b-c)の灰色塗りの部分について説明する。ここは(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が生じたと考えられる部分である。(4-81)に(4-9)の表を改めて示し、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》の内容を再確認する。(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が起きると、語頭モーラに昇り核を置く A 型の場合、A2/*[○○/は B2/*○[○/に、A3/*[○○○/は C3/*○[○○/に合流する。後ろから 2 番目のモーラに昇り核を置く C 型の場合、C2/*[○○/(基底形)は B2/*○[○/に、C3/*○[○○/は B3/*○[○/に合流する。A1/*[○/の場合、音節内上昇を作ってまで「山の後退」をしなければいけない積極的な理由がないため、「山の後退」は起きない。

(4-81(=4-9)

a. A 型の「山の後退」

A1	A2	A3		A1	A2→B2	A3→C3
*[○	*[○○	*[○○○	→	*[○	*○[○	*○[○○

b. C 型の「山の後退」

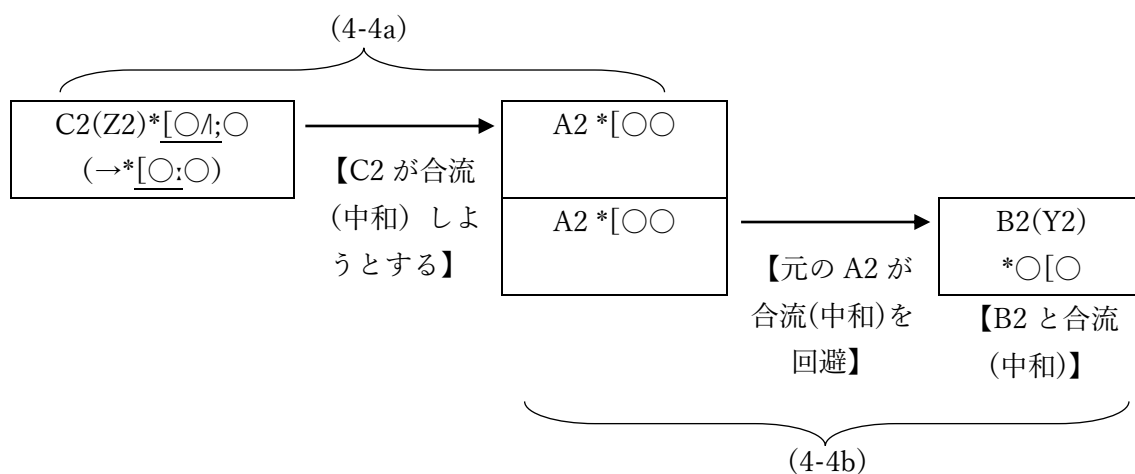
C2	C3		C2→B2	C3→B3
*[○○ (表層単独 [○/;○)	*○[○○	→	*○[○ (表層単独 ○[○)	*○○[○

まず、A 系列の基底 2 モーラ語で起きた(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》について説明する(4-78b)。(4-78b)の灰色塗りかつ二重線で囲んでいる部分を見ると、徳

之島祖語から変化がなかった場合には X2 に集中すると考えられる A 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 36 例見られ、Y 型に集中している。このような語例の分布から、A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/に合流するしたことが伺える。この変化の原因には、(4-4b) の《A 型と C 型における「山の後退」》と(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》が考えられ、両者がともに A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/に合流することを予測するため、どちらが変化の主因であるか判断できない。

(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が③発音上の利便性によって生じる「山の後退」である一方、(4-4c)の「核の後退」は①アクセント型の合流(中和)を回避するために生じる連鎖的な変化である。A2 が B2(Y2)に合流する理由を(4-4c)の「核の後退」と解釈するならば、A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/に合流するトリガーとなったのは、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》であると考えられる。C2 が A2 に合流しようとする場合、A2 は C2 との合流を回避し、1 モーラ分、核が後退する。その結果、C2 が A2 になり、元々の A2 は B2 になるという、玉突き式の変化が起こる。(4-82)に(4-10)で見た基底 2 モーラ語の変遷過程を示す。

(4-82(=4-10))



基底 3 モーラ語の A 系列の場合は、祖語の A 型に対応する X 型に 8 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 2 例、祖語の C 型に対応する Z 型に 6 例見られる。このうち X3 の 8 例はすべて 2 モーラ目に特殊モーラを持つ語例であり、X3 でかつこの構造を持つ語は(4-4b)の「山の後退」が起きる場合には音節内上昇を作ることになるため、それを避けた結果、取り残されるという、取り残される理由が説明できる語例である。詳しくは(4-84)で後述する。この X3 の 8 例を(4-4b)の「山の後退」における規則的例外と考えると、A3/*[○○○/から C3(Z3)/○[○○/に合流する変化があったとみることができる。

続けて、C 系列の基底 2 モーラ語に起きた(4-4b)の「山の後退」について説明する(4-78b)。井之川方言では、C 系列の基底 2 モーラ語の語例の分布から、(4-4a)と(4-4b)のう

ちどちらが先に起こったかを予想することができる。C2/*[○○/(基底形)が B2(Y2)/○○/に合流する変化に関しては、前述した(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》と(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が共通して予測する内容である。(4-78b)を見ると、基底 2 モーラの C 系列語は、A 型に対応する X 型に 27 例、祖語の B 型に対応する Y 型には 7 例見られ、C2 が B2 より A2(X2)の方に合流する割合が高かったことが分かる。C 系列の語が X 型にまとまった数で見られるということは、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》の方が先に起こり、C2 の多くが A2 もしくは B2 に合流した後、C 系列全体に(4-4b)の「山の後退」が生じたと考えることができる。もし、(4-4b)が先に起きているなら、C2 が B2(Y2)の方に合流してしまい、A2(X2)にまとまった数の語例が観察されないと考えられるからである。

また、C 系列の基底 3 モーラ語の分布を見ると、基底 3 モーラの C 系列の語は、祖語の B 型に対応する Y 型には 3 例見られるのみで、殆どの語例が Z3 に集中している(4-78c)。C3/*○[○○/が B3(Y3)/○○[○/に合流する変化が進んでいるとは考え難い。A 系列語と C 系列語の語例の分布を比較すると、井之川方言は C 型より A 型で(4-4b)の「山の後退」が著しい方言であると考えられる。(4-83)は(4-4b)の「山の後退」により中和したと考えられる例をまとめたものである。

(4-83)

〈A2→B2〉	星	Y2	A 系列	hu[si	hu[sinu	hu[sikara	(井之川)
〈A3→C3〉	黄金	Z3	A 系列	ku[ganī	ku[ganīnu	ku[ganīkara	(井之川)
〈C2→B2〉	糸	Y2	C 系列	i[tu	i[tu\̃nu	i[tuka\̃ra	(井之川)
〈C3→B3〉	顎	Y3	C 系列	utu[gē	utu[gē\̃nu	utu[gēka\̃ra	(井之川)

最後に基底 3 モーラの X 型について補足説明する(二重下線の部分)。X3 は A 系列に 8 例、C 系列に 7 例見られ、この A 系列と C 系列の語すべてが 2 モーラ目に特殊モーラを持つ、(4-84)のような語である。このような例が X 型にあることには、徳之島諸方言で広くみられる「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」が影響しているものと考えられる。

(4-84)

a.	蓆	X3	C 系列	muQ\̃sju	muQ\̃sjunu	muQ\̃sjukara	(井之川)
	扇	X3	C 系列	o\̃Rgi	o\̃Rginu	o\̃Rgikara	(井之川)
b.	食料・主食	X3	A 系列	haNmē	haNmēnu	haNmēkara	(井之川)
	カビ・麴	X3	A 系列	koRdzi	koRdzinu	koRdzikara	(井之川)

(4-84a)の「蓆」と「扇」は元々Z型(Z3)の/○[R○/と/○[Q○/であったと考えられる語の単独形が、上記の音声的傾向により、/R/と/Q/を含む語頭音節がHHで発音されるようになったと考えられる例である。このような例の場合、/○[R○/と/○[Q○/の語がX型に中和しても、Z3には2モーラ目に/R/と/Q/を含まない語例も多数あるため、中和によってアクセント体系に含まれるアクセント型の数と内容(定義)が変わることはない。すなわち、アクセント体系の通時的変遷には直接影響するものではない。

一方、(4-84b)の「食料・主食」と「カビ・麴」は(4-4b)の《A型とC型における「山の後退」》によりA3/[○○○/からC3/*○[○○/に合流する時に変化せず、残留したものと考えられる。A3/[koRdzi/がC3/*ko[Rdzi/になると音節内上昇が生じる。基本的に徳之島諸方言において音節内上昇は忌避されるものであり、その中でも語中における音節内上昇は、語末の音節内上昇より忌避される傾向が強い。

4.3.10 母間方言アクセントの通時的変遷

母間方言は徳之島町の中央部に位置する集落である。母間方言のアクセント体系はX型、Y型、Z型を持つ3型アクセントであり、母間方言は通時的に見て祖語の体系からB1(Y1)とC2(Z2)が他の型に合流(中和)して無くなったアクセント体系を持つ(3.5.1節を参照)。(4-85)は母間方言のアクセント型における基底1モーラから基底3モーラまでの語例が、A系列、B系列、C系列のうちどの系列に属するかを数えた表である。祖体系から見て合流(中和)したと考えられるY1とZ2は表の外側に見え消しで記す。

(4-85) 母間方言

a. 基底1モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	8	9	3	2
Y1	θ	θ	θ	θ

b. 基底2モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	18	22	34	7
Y2	16	17	5	2
Z2	θ	θ	θ	θ

c. 基底3モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	9	5	10	2
Y3	2	11	2	6
Z3	0	4	13	0

まず、(4-85a)と(4-85b)の太線で囲んだ部分から説明する。(4-85b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合にはZ2に集中すると考えられるC系列の語が、祖語のA型に対応するX型に34例、祖語のB型に対応するY型に5例見られ、C2(Z2)が完全にA2(X2)とB2(Y2)に合流(中和)したことが分かる。こういったC系列語

の分布から母間方言では(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》が起きたと考えられる。4.2 節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-86)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、母間方言の C 系列の基底 2 モーラ語の例である。

(4-86)

松	X2	C 系列	ma\cji	ma\cjinu	(母間)
灸	Y2	C 系列	ja[cju	ja[cju\neu	(母間)

「松」は、C2/*[○/;○/の 1 音節目が HH になったことで A2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。「灸」は C2/*[○/;○/の 1 音節目が LL になったことで B2(Y2)になったと考えられる。「松」と同じく、元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 は A2 もしくは B2 に合流(中和)し、アクセント体系から C2(Z2)がなくなるという変化をもたらしたと考えられる。なお、C2 が A2 と B2 のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、母間方言では、B2 より A2 に合流する割合が非常に高い。

また、(4-85a)を見ると B1 が A1 に合流(中和)して無くなったことが伺える。このような変化は、(4-85b)の場合と同じく、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-87)は母間方言の B 系列の X1 の例である。

(4-87)

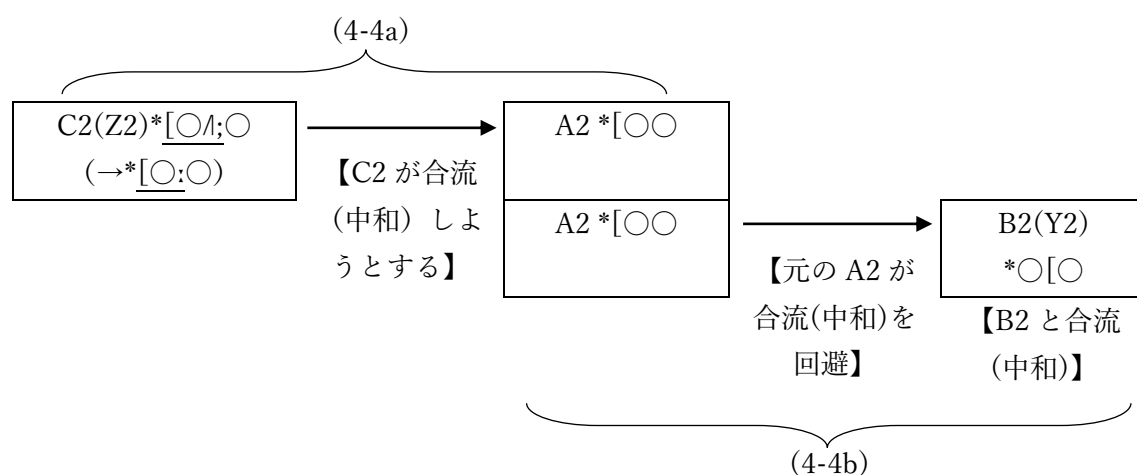
湯	X1	B 系列	ju:/ju	ju:\neu	ju:\kara	(母間)
手	X1	B 系列	tī	tī\neu	tī:\kara	(母間)

「湯」と「手」は、B1/*[○/;○/が HH になったことで A1(X1)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものなので、(4-87)の「湯」と「手」のように、/[○:○/と/[○○/の両パターンが現れる。

次に、(4-85b)の基底 2 モーラ語の A 系列について説明する(二重線で囲んでいる部分)。(4-85b)の二重線で囲んでいる部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には X2 に集中すると考えられる A 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 18 例見られ、祖語の B 型に対応する Y 型に 16 例見られる。ここから推測できるのは、A2/*[○○/の一部が B2(Y2)/○[○/に合流したということである。このような変化は、(4-4c)の《型の合流(中

和)を回避するために引き起こされたと考えられる「山の後退」》に当たるもので、①アクセント型の合流(中和)を回避するために生じる変化の一つである。このような変化が進むと、A2 は B2 に完全に合流(中和)していくものと推測されるが、母間方言ではまた変化の途中であると考えられる。(4-88)に(4-10)で見た、C2 が A2 になり、元々の A2 は B2 になるという、玉突き式の変化過程をもう一度示す。(4-89)は、このような変化により合流(中和)したと考えられる、A 系列の Y2 の語例である。

(4-88(=4-10))



(4-89)

種	Y2	A 系列	ta[nĩ	ta[nĩ\̃nu	ta[nĩkara	(母間)
友	Y2	A 系列	du[si	du[sinu	du[sikara	(母間)

次に(4-85c)の基底 3 モーラの C 系列語について補足説明する。(4-85c)の二重下線の部分を見ると、Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型にも 10 例見られる。この 10 例中 5 例は、2 モーラ目に特殊モーラを持つ語例である。(4-90)に例を示す。

(4-90)

あおさ	X3	C 系列	oR\sa	oR\sanu	(母間)
バツタ	X3	C 系列	gaQ\ta	gaQ\tanu	(母間)

このような例が X 型にあることには、徳之島諸方言で広くみられる「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」が影響しているものと考えられる。「あおさ」と「バツタ」は元々 Z 型 (Z3) の /○[R○/ と /○[Q○/ であったと考えられる語の単独形が、上記の音声的傾向により、/R/ と /Q/ を

含む語頭音節が HH で発音されるようになったと考えられる例である。このような例の場合、/○[R○/と/○[Q○/の語が X 型に中和しても、Z3 には 2 モーラ目に/R/と/Q/を含まない語例も多数あるため、中和によってアクセント体系に含まれるアクセント型の数と内容(定義)が変わることはない。すなわち、アクセント体系の通時的変遷には直接影響するものではない。(4-85a)の Y1 と(4-85b)の Z2 における(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》がアクセント体系に変化をもたらしたのと対照的である。

最後に(4-85b)の基底 2 モーラの B 系列語について述べておく(波下線の部分)。徳之島祖語から変化がなかった場合には Y2 に集中すると考えられる B 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 22 例見られる。これについては通時的な説明が難しい。単純に考えれば、B2*/○[○/から A2*/[○○/に合流していることになるが、このような変化は類型論的に不自然な変化である。もし、B2*/○[○/から A2*/[○○/に合流するような変化過程を想像するならば、*/○[○/(LH)が山の後退を起こし、*/○○/(LL)になった後、語頭隆起し、*/[○○/(HL)になるような変化を想定しなければいけないのであるが、このような変化を徳之島諸方言において想定する根拠がない。Y2 に集中すると考えられる B 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型にまとまった数で見られる方言は母間方言以外に犬田布(當原)方言も挙げられるが、犬田布(當原)方言においても今のところ B2*/○[○/から A2*/[○○/に合流するような変化過程を、根拠を持って説明することはできない。

母間の話者である母 A によると、母間は昔から人の出入りが激しかったとのことであった。「半分くらいの人はずっと別の集落にルーツを持つのではないか。」というようなことをおっしゃっていた。この話が示唆するのは母間に言語(方言)接触があったということであり、母間の基底 2 モーラの B 系列語の分布には、自律的变化だけではなく、言語接触による変化も関わっているかも知れない。この可能性に関しては、今後の課題としたい。

4.3.11 伊仙方言アクセントと犬田布(當原)方言アクセントの通時的変遷

伊仙と犬田布(當原)は伊仙町に位置する集落である。犬田布(當原)方言の話者である犬 A によると、當原集落は約 260 年前に伊仙町伊仙から移住してきた人々の集落で、元々の犬田布集落の人々が話す犬田布(犬田布)方言とは多少方言が異なるとのことである。この話が正しいとすると、現在の伊仙方言と犬田布(當原)方言は共通祖語を持つ方言であり、約 260 年前に枝分かれしたことになる。伊仙方言のアクセント体系は X 型、Y 型、Z 型を持つ 3 型アクセントであり、通時的に見て祖語の体系から B1(Y1)、C2(Z2)、C3(Z3)が他の型に合流(中和)し無くなったアクセント体系を持つ(3.4.1 節を参照)。また、犬田布(當原)方言のアクセント体系は X 型、Y 型、W 型、Z 型を持つ 4 型アクセントである(3.10.1 節を参照)。犬田布(當原)方言もまた通時的に見て祖語の体系から B1(Y1)、C2(Z2)、C3(Z3)が他の型に合流(中和)し無くなったアクセント体系を持つという点で伊仙方言と共通している(3.10.1 節を参照)。

両方言で同じ様相を見せる部分は、伊仙方言と犬田布(當原)が分岐する前の共通祖語(伊仙・犬田布(當原)祖語)の段階で生じた変化であると考えられ、伊仙方言と犬田布(當原)方言で異なる様相を見せる部分については、伊仙方言と犬田布(當原)が分岐した後生じた変化であると考えられる。伊仙方言と犬田布(當原)方言が分岐したのは 260 年前であるので、その後、それぞれの方言で起きた変化は、比較的最近起こったものであると言えるだろう。(4-91)と(4-92)は伊仙方言と犬田布(當原)方言のアクセント型における基底 1 モーラから基底 3 モーラまでの語例が、A 系列、B 系列、C 系列のうちどの系列に属するかを数えた表である。祖体系から見て合流(中和)したと考えられる Z2 と Z3 は表の外側に見え消しで記す。

(4-91) 伊仙方言

a.基底 1 モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	8	1	5	3
Y1	2	9	0	2

b.基底 2 モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	25	2	18	7
Y2	12	38	12	5
Z2	θ	θ	θ	θ

c.基底 3 モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	16	0	2	3
Y3	1	25	32	4
Z3	θ	θ	θ	θ

(4-92) 犬田布(當原)方言

a.基底 1 モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	11	1	5	3
Y1	0	8	0	1

b.基底 2 モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	33	11	19	16
Y2	0	13	9	1
W2	2	19	2	4
Z2	θ	θ	θ	θ

c.基底 3 モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	15	2	4	4
Y3	0	20	29	11
Z3	θ	θ	θ	θ

まずは、伊仙方言と犬田布(當原)方言に共通して起きたと考えられる変化から論じる。

(4-91b)と(4-92b)の、太線で囲んだ部分から説明する。伊仙方言の(4-91b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 18 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 12 例見られる。犬田布方言の(4-92)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 19 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 9 例見られ、C 系列の語であって A 型および B 型に合流した語の比率が似ていることから、伊仙と犬田布(當原)方言で C2 が A2(X2)と B2(Y2)に合流(中和)したことが伺える。加えて、共時的に X2 にある語、Y2 にある語が両方言でほぼ共通していることもその傍証である。こういった変化は、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》が原因であると考えられる。4.2 節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-93)と(4-94)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、伊仙方言と犬田布(當原)方言の C 系列の基底 2 モーラ語の例であり、(4-4a)によりそれぞれX型(A型)とY型(B型)に中和(合流)したと考えられるものである。

(4-93)

浜	X2	C 系列	ha\ma	ha\manu	(伊仙)
甕	Y2	C 系列	ka[mī	ka[mīnu	(伊仙)

(4-94)

煤	X2	C 系列	sīsī	sīsī\ga	sīsī\kara	(犬田布(當原))
きのこ	Y2	C 系列	na:[ba	na:[ba\ga	na:[baka\ra	(犬田布(當原))

(4-93)の「浜」と(4-94)の「煤」は、C2/*[○/;○/の 1 音節目が HH になったことで A2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。(4-93)の「甕」と(4-94)の「きのこ」は C2/*[○/;○/の 1 音節目が LL になったことで B2(Y2)になったと考えられる。(4-93)の「浜」と(4-94)の「煤」と同じく、元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*○;[○/→/○:[○/~[○[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 の語は A2 もしくは B2 に合流(中和)し無くなったと考えられる。なお、C2 が A2 と B2 のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、伊仙方言と犬田布(當原)方言では、B2(Y2)より A2(X2)に合流する割合が比較的高い。

一方、(4-91a)と(4-92a)の B1 が A1(X1)に合流したと考えられる例は、両方言共に 1 例のみで特殊モーラを含む音節が HH になる変化は生じていないと考えられる。しかし Y1

の例を見ると、(4-95)と(4-96)の下線部のような例外的なピッチパターンが観察される。これは、助詞を付けた時に特殊モーラを含む音節が LL になることで生じた変化であると考えられるもので、B1 においても、②音節内上昇を回避するために生じる変化は起きると思うことが出来る。ただし、このような特殊モーラを含む音節が LL になる変化は、特殊モーラを含む音節の音節全体が HH になる場合、すなわち B1 が A1 に合流する方向の変化と違ってアクセント型の合流を引き起こすものではない。

(4-95)

蛸 Y1 B 系列 [to/; [to;/nu [to;/kara (伊仙)
木 Y1 B 系列 [ki/; [ki;/nu [ki;/kara (伊仙)

(4-96)

木 Y1 B 系列 [ki/; [ki;/ga [ki;/ka\ra (犬田布(當原)
[ki;/nu / [ki;/nu
湯 Y1 B 系列 [ju/; [ju;/ga [ju;/kara (犬田布(當原)

次に(4-91)と(4-92)の灰色塗りの部分について説明する。ここは(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が生じたと考えられる部分である。(4-97)に(4-9)の表を改めて示し、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》の内容を再確認する。(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が起きると、語頭モーラに昇り核を置く A 型の場合、A2/*[○○/は B2/*[○○/に、A3/*[○○○/は C3/*[○○○/に合流する。後ろから 2 番目のモーラに昇り核を置く C 型の場合、C2/*[○○/(基底形)は B2/*[○○/に、C3/*[○○○/は B3/*[○○○/に合流する。A1/*[○/の場合、音節内上昇を作ってまで「山の後退」をしなければいけない積極的な理由がないため、「山の後退」は起きない。

(4-97(=4-9))

a. A 型の「山の後退」

A1	A2	A3	→	A1	A2→B2	A3→C3
*[○	*[○○	*[○○○		*[○	*[○○	*[○○○

b. C 型の「山の後退」

C2	C3	→	C2→B2	C3→B3
*[○○ (表層単独 [○/;○)	*[○○○		*[○○ (表層単独 ○○)	*[○○○

まず、伊仙方言と犬田布(當原)方言の A 系列語を見ると、伊仙方言と犬田布(當原)方言では A 型の「山の後退」が起きていないことが分かる。(4-4b)の「山の後退」が起きる前に A 型がすでに「高起式でアクセント核を持たない(“0”)」型になっており、C 型のみに(4-4b)の「山の後退」が起きたと解釈することができる(4.2.2 節を参照)。伊仙方言では、 $A2^*/[○○/$ が $B2^*/○○/$ に合流したと考えられる例(Y2 の A 系列語)が 12 例見られるが、これは後述する、(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》に関係する合流である。金田一(1977[2005]: 546)で指摘されているように、アクセントの一般的な変化として、同一の型に属する語に変化が起こる場合、すべて同一方向へ変化することが想定される。(4-4b)の変化においても、A 型の基底の 2 モーラ語にのみに変化が生じ、基底 3 モーラ語では変化が生じないことはないだろう。(4-92c)を見ると、伊仙方言では $A3^*/[○○○/$ が $C3^*/○[○○/$ に合流する(4-4b)の「山の後退」が起こっていないことが分かるので、 $A2^*/[○○/$ が $B2^*/○[○/$ に合流したと考えられる 12 例に関しても、(4-4b)の「山の後退」が生じたという解釈は取らない。

次に、C 系列の基底 2 モーラ語に起きた(4-4b)の「山の後退」について説明する。 $C2^*/[○○/$ (基底形)が $B2(Y2)/○[○/$ に合流する変化に関しては、前述した(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》と(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》がともに $C2^*/[○○/$ (基底形)の $B2^*/○[○/$ への合流を予測する。しかし、伊仙方言と犬田布(當原)方言では、(4-91b)と(4-92b)の基底 2 モーラの C 系列語の分布から、(4-4a)と(4-4b)のうちどちらが先に起こったかを予想することができる。(4-91b)の伊仙方言の表を見ると、基底 2 モーラの C 系列語は、A 型に対応する X 型に 18 例、祖語の B 型に対応する Y 型には 12 例見られる。また、(4-92b)の犬田布(當原)方言の表を見ると、基底 2 モーラの C 系列語は、A 型に対応する X 型に 19 例、祖語の B 型に対応する Y 型には 9 例見られる。C 系列の語が X 型にまとまった数で見られるということは、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》の方が先に起こり、C2 の多くが A2 もしくは B2 に合流した後、C 系列全体に(4-4b)の「山の後退」が生じたと考えることができる。もし、(4-4b)が先に起きているなら、C2 が B2(Y2)の方に合流してしまい、A2(X2)にまとまった数の語例が観察されないと考えられるからである。

今度は、C 系列の基底 3 モーラ語に起きた(4-4b)の「山の後退」について説明する。(4-91b)の伊仙方言の表を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z3 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 32 例見られる。(4-92c)の犬田布(當原)方言の場合も、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z3 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 29 例見られる。このような分布から、伊仙方言と犬田布(當原)方言では $C3^*/○[○○/$ が $B3(Y3)/○○[○/$ になる(4-4b)の「山の後退」が起きていると考えられ、その結果、C3 が B3(Y3)に完全に合流(中和)したと考えられる。(4-98)は、 $B3(Y3)/○○[○/$ に合流(中和)したと考えられる C 系列の Y3 の語例であ

る。

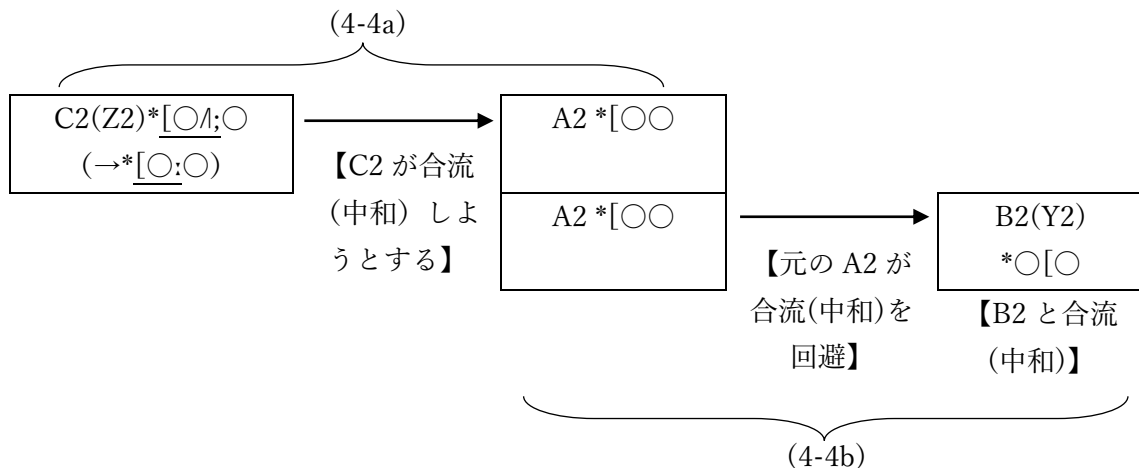
(4-98)

〈C3→B3〉	刀	Y3	C 系列	kata[na	kata[na\ɲu	kata[na\ɲa	(伊仙)
〈C3→B3〉	腰周り	Y3	C 系列	gama[ku	gama[ku\ga	gama[ku\kara	(犬田布 (當原))

ここからは伊仙方言と犬田布(當原)方言で異なる様相を見せる部分について述べる。すなわち、以下で説明する変化は伊仙方言と犬田布(當原)方言が分岐した後に起きた変化であると考えられる。

まず、伊仙方言から説明する。(4-91b)の基底 2 モーラ語の A 系列の二重線で囲んでいる部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には X2 に集中すると考えられる A 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 12 例見られる。このような語例の分布から、全体の 3 分の 1 程度の語が、A2/*[○○/から B2(Y2)/○[○/に合流したことが分かる。これは、(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》に当たるもので、①アクセント型の合流(中和)を回避するために生じる変化の一つである。(4-99)に(4-10)で見た、C2 が A2 になり、元々の A2 は B2(Y2)になるという、玉突き式の変化過程をもう一度示す。(4-100)は、このような変化により合流(中和)したと考えられる、A 系列の Y2 の語例である。

(4-99(=4-10))



(4-100)

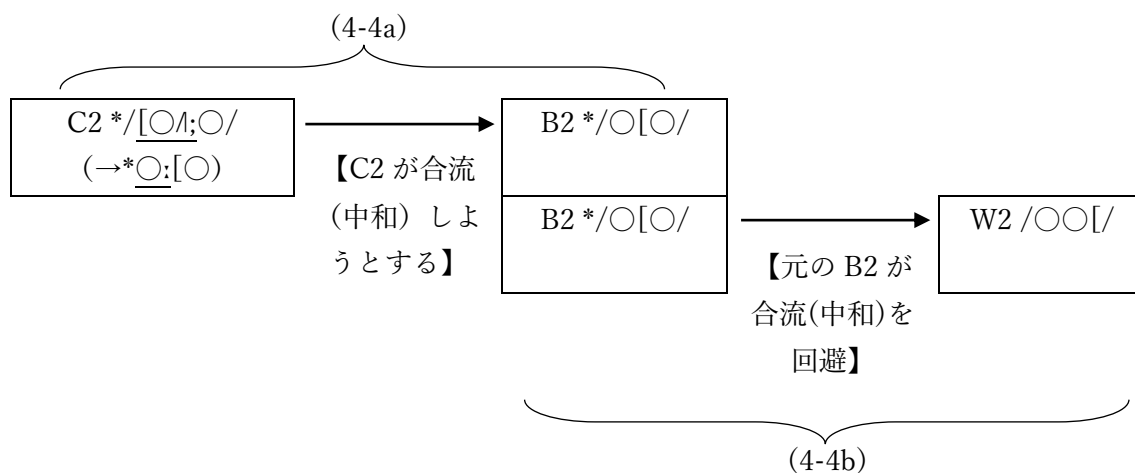
夫	Y2	A 系列	wu[tu	wu[tu\ɲu	(伊仙)
石	Y2	A 系列	i[si	i[sinu	(伊仙)

次に犬田布(當原)方言について説明する。(4-92b)の基底 2 モーラ語の B 系列の二重線

で囲んでいる部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Y2 に集中すると考えられる B 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 11 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 13 例、そして W 型に 19 例見られる。このような分布から、B2 の一部が W2 に変化したり A2(X2)に合流したりしていることが分かる。まずは、B2/*○[○/が W2/○○[/に变化したと考えられる部分から見ていくことにする。

B2/*○[○/が W2/○○[/になる変化は、(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》が関わっていると考えられる。4.2.2 節で述べたように、/○○[/;(W2)のようなピッチパターンは徳之島諸方言で忌避される音節内上昇を含むため、音節内上昇が生じるという欠点を上回るほどの利点あるいは動機(つまり、ここでは型の合流(中和)を避けること)がない限り、/○○[/;(W2)を生み出すような変化は生じないものとする。つまり、B2/*○[○/が W2/○○[/になる変化には(4-4b)の「核の後退」ではなく、(4-4c)の「核の後退」が関わっていると考える。そうすると、B2 が「核の後退」を起こすように圧迫する(合流しようとする)変化があったと考えられる。犬田布(當原)方言でそのトリガーになったと想定されるのが、(4-4a)の C2/*[○○/(基底形)が B2(Y2)/○[○/になる変化である。(4-101)に(4-11)で見た、C2 が B2 になり、元々の B2 は W2 になるという、玉突き式の変化過程をもう一度示す。(4-102)は、このような変化により合流(中和)したと考えられる、B 系列の W2 の語例である。しかし、(4-4a)の変化で、C2 が B2(Y2)より A2(X2)の方に多く合流したのにも関わらず、連鎖的变化である(4-4c)の「核の後退」が A2 ではなく B2 で生じた理由に関しては説明することができない。この部分に関しては今後の課題とする。

(4-101(=4-11))



(4-102)

腹 W2 B 系列 wa[ta wata[ga wata[ka\ra (犬田布(當原))
/ wata[;

雲	W2	B 系列	ku[mu	kumu[ga	kumu[ka\ra	(犬田布(當原))
傘・笠	W2	B 系列	kasa[;	kasa:[ga	kasa[ka\ra	(犬田布(當原))

(4-101)で注目すべきなのは、元々の B2 であった語から 1 モーラ分山が後退した結果、W 型(“+3”)という新たなアクセント型が生じたと考えられる点である。犬田布(當原)方言 W 型はアクセントのドメインを「文節」とし、前から数えて 3 番目のモーラに昇り核を持つアクセント型である。表層単独形は/○△[/~/○○[;/で、二つのピッチパターンがフリーバリエーションで現れる。通時的に、W2 は B2/*○[○/から変化したものであることを念頭に置くと、アクセントのドメインが「語」から「文節」に変わったことを意味する。

(4-103)に B2 から W2 への通時的変遷と、それに伴うアクセントドメインの変化過程を、B 系列の基底 2 モーラ語である「花」を意味する語を例にして示す。各段階において、犬田布(當原)方言で観察される W2 の語例を太字にして一緒に示す。

(4-103)

	B2 /*○[○/ →	W2 /○○[/	
表層単独	*○[○ →	○○[; → <u>×○<u>△</u></u> ; → ○ <u>△</u> ;	○ <u>△</u> [ha/na [
1 モーラ 助詞付き	*○[○△ →	×○○[;△ → ×○○ <u>;</u> [△ → ×○○:[△ →	○○[△ hana [nu
2 モーラ 助詞付き	*○[○△△ →	×○○[;△△ → ×○○ <u>;</u> [△△ → ×○○:[△△ →	○○[△△ hana [ka\ra
ドメイン	「語」	「語」	「文節」

W2 におけるドメインの「語」から「文節」への変化過程には、(4-4a)で説明した「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にする」という音声的傾向」が深く関係していると考えられる。W2 の表層単独形は/○○△[/において、特殊モーラを含む音節(下線部)が HH になり、×/○△[/になる。語末の/;/は、/;/前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになる(○△:/)。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/は現れても、現れなくてもよい。以上の過程を経て、現在の犬田布(當原)方言で観察されるような、/○△[/というピッチパターンになる。次に、1 モーラ助詞付きを例に、助詞付きのピッチパターンの変化について述べる。/○○[;/にそのまま、1 モーラ助詞が付く場合のピッチパターンは/○○[;/△/である。この時点ではまだアクセントのドメインは「語」のままである。ここから、上記で説明した音声的傾向により、/○○;[△/の特殊モーラを含む音節(下線部)が LL になり、×/○○;[△/になる。語末の/;/は、/;/前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになる(○△:[△)。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで

現れるものであり、/:/は現れても、現れなくてもよい。以上の過程を経て、現在観察されるような、/○○[△/というピッチパターンになる。以上のような変化を経て、/○○:[△/~○○[△/のピッチ上昇の位置は助詞にずれ込むことになり、アクセントのドメインは「文節」へと変化したと考えられる。

B2/*○[○/が W2/○○[/に変化したと考えられる部分については上記で述べたとおりであるが、Y2 に集中すると考えられる B 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型になっている 11 例については通時的な説明が難しい。単純に考えれば、B2*/○[○/から A2(X2)/[○○/に合流していることになるが、このような変化は類型論的に不自然な変化である。もし、B2*/○[○/から A2(X2)/[○○/に合流するような変化過程を想像するならば、*/○[○/(LH)が山の後退を起こし、*/○○/(LL)になった後、語頭隆起し、*/[○○/(HL)になるような変化を想定しなければいけないのであるが、このような変化を徳之島諸方言において想定する根拠がない。Y2 に集中すると考えられる B 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型にまとまった数で見られる方言は犬田布(當原)方言以外にも母間方言が挙げられるが、母間方言においても今のところ B2*/○[○/から A2(X2)/[○○/に合流するような変化過程を、根拠を持って説明することはできない。なお、本節の冒頭で述べたように、犬田布の當原集落は伊仙集落からの移住であるため、移住した人々の方言(伊仙・犬田布(當原)祖語)と元々その地に住んでいた犬田布の犬田布集落の方言(犬田布(犬田布)祖語)との言語接触が起きた可能性がある。犬田布(當原)方言における基底 2 モーラの B 系列語の分布には、自律的变化だけではなく、言語接触による変化も関わっているのではないかと疑われる部分である。しかし、本稿の調査では犬田布の犬田布集落の調査を行っていないため、言語接触したかについての検証ができない。これに関しては、今後の課題としたい。

4.3.12 与名間方言アクセントの通時的変遷

与名間は天城町の最北部に位置する集落である。与名間方言のアクセント体系はX型、Y型、W型、Z型を持つ4型アクセントである(3.7.1節を参照)。(4-104)は与名間方言のアクセント型における基底1モーラから基底3モーラまでの語例が、A系列、B系列、C系列のうちどの系列に属するかを数えた表である。

(4-104) 与名間方言

a.基底1モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	10	4	3	1
Y1	0	7	0	0

b.基底2モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	1	0	12	3
Y2	34	10	8	5
W2	1	34	1	1
Z2	0	0	17	0

c.基底3モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	9	0	4	0
Y3	0	17	14	4
Z3	11	4	15	3

まず、(4-104b)の太線で囲んだ部分から説明する。与名間方言の(4-104b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合にはZ2に集中すると考えられるC系列の語が、祖語のC型に対応するZ型には17例、祖語のA型に対応するX型に12例、祖語のB型に対応するY型に8例見られる。C2全体の語例数からすると約半数くらいの語が、A2(X2)とB2(Y2)に合流(中和)したことが伺える。こういった変化は、(4-4a)の《C2がA2もしくはB2に、B1がA1に合流するという「型の合流(中和)」》が起きたためであると考えられる。4.2節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-105)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、与名間方言のC系列の基底2モーラ語の例であり、(4-4a)によりそれぞれX型(A型)とY型(B型)に中和(合流)したと考えられるものである。

(4-105)

骨	X2	C系列	huʋːˀnĩ	huʋːˀnĩnu	huʋːˀnĩkara	(与名間)
畑	Y2	C系列	ha[te	ha[teʋːnu	ha[teʋːkara	(与名間)

(4-105)の「骨」は、C2/*[○ʌ;○/の1音節目がHHになったことでA2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった2モーラ目の母音の伸び/;:/は、/*[○;○/→/[○:○/~

/[○○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。(4-105)の「畑」は C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が LL になったことで B2(Y2)になったと考えられる語例である。(4-105)の「骨」と同じく、元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*○;[○/→/○:[○/~○[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 の語は A2 もしくは B2 に合流(中和)し、ゆくゆくは型自体が体系からなくなる過程にあるものと推測されるが、与名間方言では C2 が完全に A2 と B2 に合流せず、現在のアクセント体系に Z2 として残留していると考えられる。なお、C2 が A2 と B2 のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、与名間方言では、B2(Y2)より A2(X2)に合流する割合が少し高い。

(4-104a)を見ると、B1 が A1(X1)に合流したと考えられる例は 4 例あり、数は少ないが(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》が起きている様子が伺える(4-106a)。また、与名間方言の Y1 の例を見ると、助詞/kara/を付けた時に、「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」により、特殊モーラを含む音節の音節全体が LL になることで、生じたと考えられる例外的なピッチパターンが観察される。(4-106b)の下線部がそうである。このようなピッチパターンから B1 においても、②音節内上昇を回避するために生じる変化は起きていると考えることが出来る。ただし、このような特殊モーラを含む音節が LL になる変化は、特殊モーラを含む音節の音節全体が HH になる場合、すなわち B1 が A1 に合流する方向の変化と違ってアクセント型の合流を引き起こすものではないということである。

(4-106)

a.	南	X1	B 系列	hwë:	hwë:nu	hwëka\ra	(与名間)
	穂	X1	B 系列	hu: / hu	hu:nu	hu:kara	(与名間)
b.	潮・海水	Y1	B 系列	[sju/;	[sju/;\nu	<u>[sju/ka\ra</u>	(与名間)
	木	Y1	B 系列	[ki/;	[ki/;\nu	<u>[ki/ka\ra</u>	(与名間)

次に(4-104b-c)の灰色塗りの部分について説明する。ここは(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が生じたと考えられる部分である。(4-107)に(4-9)の表を改めて示し、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》の内容を再確認する。(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が起きると、語頭モーラに昇り核を置く A 型の場合、A2/*[○○/は B2/*○[○/に、A3/*[○○○/は C3/*○[○○/に合流する。後ろから 2 番目のモーラに昇り核を置く C 型の場合、C2/*[○○/(基底形)は B2/*○[○/に、C3/*○[○○/は B3/*○[○/に合流する。A1/*[○/の場合、音節内上昇を作ってまで「山の後退」をしなければいけない積極的な理由がないため、「山の後退」は起きない。

(4-107(=4-9))

a. A 型の「山の後退」

A1	A2	A3		A1	A2→B2	A3→C3
*[○	*[○○	*[○○○	→	*[○	*○[○	*○[○○

b. C 型の「山の後退」

C2	C3		C2→B2	C3→B3
*[○○ (表層単独 [○/;○)	*○[○○	→	*○[○ (表層単独 ○[○)	*○○[○

まず、A 系列の基底 2 モーラ語で起きた(4-4b)の「山の後退」から説明する(4-104b)。(4-104b)の A 系列の灰色塗りの部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には X2 に集中すると考えられる A 系列の語が祖語の B 型に対応する Y 型に 34 例見られ、Y 型に集中している。このような語例の分布から A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/へ合流したことが伺える。この変化の原因には(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》と、(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》が考えられる。与名間方言では、このうち(4-4b)の「山の後退」が変化の主因であると考えられる。

なぜなら、(4-4b)の「山の後退」とは異なり、(4-4c)の「核の後退」は、アクセント型の合流(中和)を回避するために生じる連鎖的な変化である。ここで、(4-4c)の「核の後退」を引き起こすトリガーとなり得る変化は、(4-4a)の C2 が A2(X2)に合流(中和)する変化である。しかし、(4-104b)を見ると、C2 が A2(X2)に合流したと考えられる語例数は 12 例だけで、与名間方言においては(4-4a)の変化が進んでいるとは言えない。(4-4a)の変化が進んでいないのに、(4-4a)に影響されての連鎖的な変化である(4-4c)の変化が進むかどうかには疑問が残る。しかし、実際に A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/に合流(中和)したと考えられる語例数は 34 例もあり、その変化が著しい。ここは、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》のほうが変化の主因であると考えるのが妥当であろう。同じく A 系列の基底 3 モーラ語の場合にも、徳之島祖語から変化がなかった場合には X3 に集中すると考えられる A 系列語が、祖語の C 型に対応する Z 型に 11 例見られ、A3/*[○○○/が C3(Z3)/○[○○/になる「山の後退」が起きていると考えられる(4-104c)。

次に、C 系列の基底 2 モーラ語で起きた(4-4b)の「山の後退」について説明する(4-104b)。C2/*[○○/(基底形)が B2(Y2)/○[○/に合流する変化に関しては、前述した(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》と(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》がともに C2/*[○○/(基底形)の B2/*○[○/への合流を予測する。しかし、与名間方言では(4-104b)の基底 2 モーラの C 系列語の分布から、(4-4a)と(4-4b)のうちどちらが先に起こったかを予想することができる。(4-104b)を見る

と、C 系列の基底 2 モーラ語は、A 型に対応する X 型に 12 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 8 例、祖語の C 型に対応する Z 型に 17 例見られる。C 系列の語が X 型にまとまった数で見られるということは、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》の方が先に起こり、C2 の多くが A2 もしくは B2 に合流した後、C 系列全体に(4-4b)の「山の後退」が生じたと考えられる。もし、(4-4b)が先に起きているなら、C2 が B2(Y2)の方に合流してしまい、A2(X2)にまとまった数の語例が観察されないと考えられるからである。

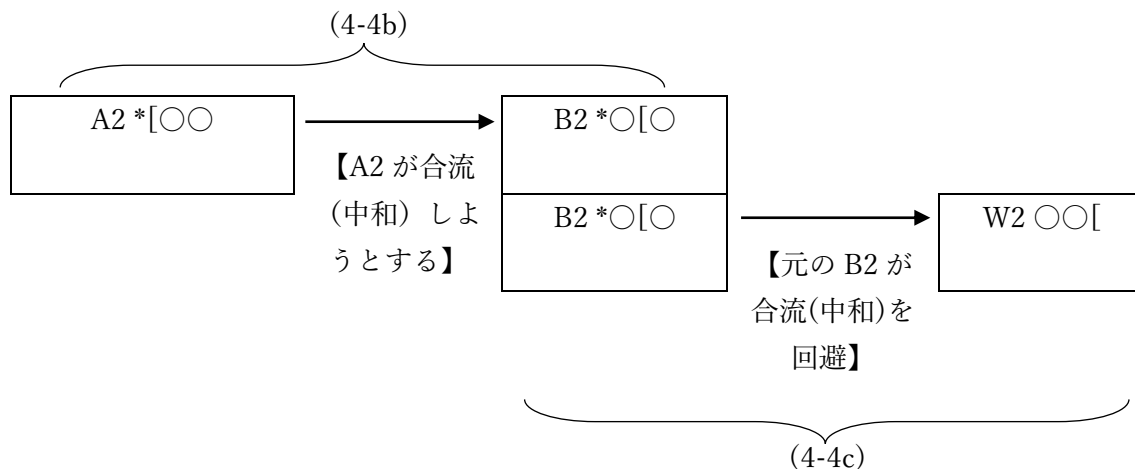
C 系列の基底 3 モーラ語の場合、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z3 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 14 例見られる。このような分布から、与名間方言では一部の語で、C3/*○[○○/が B3(Y3)/○○[○/になる(4-4b)の「山の後退」が起きていると考えられる。最後に(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》により合流(中和)したと考えられる語例を、(4-108)にまとめて示しておくことにする。

(4-108)

〈A2→B2〉	傷	Y2	A 系列	ki[dzi	ki[dzi:nu	ki[dzi:kara	(与名間)
〈A3→C3〉	東	Z3	A 系列	a[ga:ˆri	a[ga:ˆrinu	a[ga:ˆrikara	(与名間)
〈C2→B2〉	昨日	Y2	C 系列	ki[nu	ki[nu\ːnu	ki[nu\ːkara	(与名間)
〈C3→B3〉	顎	Y3	C 系列	utu[gë\ˆ	utu[gë\ˆnu	utu[gë\ˆkara	(与名間)

続いて、(4-104b)の基底 2 モーラの B 系列語のうち、二重線で囲んでいる部分について説明する。この部分には(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》が生じていると考えられる。(4-104b)の二重線で囲んでいる部分の語例数を確認すると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Y2 に集中すると考えられる B 系列の語が W 型に 34 例見られる。このような語例の分布から B2(Y2)の多くが W2 に合流したということが伺える。与名間方言では(4-4b)の変化により A2 が B2 に合流しようとする時、元の B2 は A2 との合流を回避し、1 モーラ分、核が後退したと考えられる(4-4c)。その結果、A2/*[○○/が B2(Y2)/○○[○/になり、元々の B2/*[○○/は W2/○○[//になるという、玉突き式の変化が起こる(4-109(=4-13))。(4-110)は、このような変化により合流(中和)したと考えられる、B 系列の W2 の語例である。

(4-109(=4-13))



(4-110)

角	W2	B 系列	cjino[;	cjino[;\nu	cjino[ka\ra	(与名間)
波	W2	B 系列	nami[;	nami[;\nu	nami[ka\ra	(与名間)

ここで、注目すべきなのは、元々の B2 であった語から 1 モーラ分山が後退した結果、W 型(“+3”)という新たなアクセント型が生じたと考えられる点である。与名間方言の W 型はアクセントのドメインを「語」とし、前から数えて 3 番目のモーラに昇り核を持つアクセント型である。表層単独形は/○○[;/である。与名間方言と同じく W 型を持つ。もっとも、口群の方言では、W 型のドメインが「文節」になっていることが多い。4.2.2 節の(4-17)で説明したように、通時的に B2 が W2 に変化する過程でアクセントのドメインが「語」から「文節」に変わると考えられるのであるが、与名間方言はドメインが変化するその過程の途中にあると位置づけることができそうである。

最後に基底 3 モーラ語のうちで 2 モーラ目に特殊モーラを持つ語例について説明する((4-104c)の二重下線部分)。与名間方言では、X3 の語例(A 系列の X3 である 9 例と C 系列の X3 である 4 例)の全てが 2 モーラ目に特殊モーラを持つ。(4-111)に挙げたような語例である。

(4-111)

a. 箒	X3	C 系列	hoR\ki	hoR\kinu	hoR\kikara	(与名間)
扇・団扇	X3	C 系列	oR\gi	oR\ginu	oR\gikara	(与名間)
b. 食料・主食	X3	A 系列	haNmë	haNmënu	haNmëkara	(与名間)
麴	X3	A 系列	koRdzi	koRdzinu	koRdzikara	(与名間)

このような例が X 型にあることには、徳之島諸方言で広くみられる「特殊モーラを含む

音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」が影響しているものと考えられる。(4-111a)から説明することにする。(4-111a)の「箒」と「扇・団扇」は元々Z 型 (Z3) の単独形/○[R○/と/○[Q○/であったと考えられる。この単独形から上記の音声的傾向により、/R/と/Q/を含む語頭音節が HH で発音されるようになったと推定される例である。このような例の場合、/○[R○/と/○[Q○/の語がX 型に中和しても、Z3 には 2 モーラ目に/R/と/Q/を含まない語例も多数あるため、中和によってアクセント体系に含まれるアクセント型の数と内容(定義)が変わることはない。すなわち、アクセント体系の通時的変遷には直接影響するものではない。一方、(4-111b)の「食料・主食」と「麴」は、前述した(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》により A3/*[○○○/から C3/*○[○○/に合流する時に変化せず、残留したものと考えられる。もし仮に、A3/[haNmë/が C3/×ha[Nmë/になるとすると音節内上昇が生じてしまうのが残留した理由であったのだろう。基本的に徳之島諸方言において音節内上昇は忌避されるものであり、その中でも語中における音節内上昇は、語末の音節内上昇より忌避される傾向が強い。

4.3.13 花徳方言アクセントの通時的変遷

花徳方言は徳之島町の中央部に位置する集落である。花徳方言のアクセント体系はX型、Y型、W 型、Z型を持つ 4 型アクセントである(3.8.1 節を参照)。(4-112)は花徳方言のアクセント型における基底 1 モーラから基底 3 モーラまでの語例が、A 系列、B 系列、C 系列のうちどの系列に属するかを数えた表である。

(4-112) 花徳方言

a.基底 1 モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	<u>5</u>	1	3	3
Y1	<u>5</u>	9	0	0

b.基底 2 モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	1	3	24	5
Y2	10	34	6	4
W2	23	4	2	2
Z2	0	0	4	1

c.基底 3 モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	<u>5</u>	0	<u>7</u>	1
Y3	10	8	6	4
Z3	0	3	18	3

まず、(4-112b)の太線で囲んだ部分から説明する。(4-112b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、

祖語の A 型に対応する X 型に 24 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 6 例、祖語の C 型に対応する Z 型に 4 例見られる。こういった C 系列の語の分布から、花徳方言では(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》が起きたと考えられる。4.2 節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-113)に示す語例は花徳方言の C 系列の基底 2 モーラ語の例であり、(4-4a)によりそれぞれ X 型(A 型)と Y 型(B 型)に中和(合流)したと考えられるものである。

(4-113)

息	X2	C 系列	iŋki	iŋkinu	iŋkikara	(花徳)
昨日	Y2	C 系列	ki:[nu	ki:[nu\ŋnu		(花徳)

「息」は、C2/*[○/;○/の 1 音節目が HH になったことで A2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。「昨日」は C2/*[○/;○/の 1 音節目が LL になったことで B2(Y2)になったと考えられる。「息」と同じく、元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 の語は A2 もしくは B2 に合流(中和)し、ゆくゆくは型自体が体系からなくなる過程にあるものと推測されるが、花徳方言では C2 が完全に A2 と B2 に合流せず、現在のアクセント体系に Z2 として残留していると考えられる。なお、C2 が A2 と B2 のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、花徳方言では、B2 より A2 に合流する割合が非常に高い。

一方、(4-112a)の B1 が A1(X1)に合流したと考えられる例は、1 例のみで特殊モーラを含む音節が HH になる変化は生じていないと考えられる。しかし Y1 の例を見ると、(4-114)の下線部のような例外的なピッチパターンが観察される。これは、助詞を付けた時に特殊モーラを含む音節が LL になることで生じた変化であると考えられるもので、B1 においても、②音節内上昇を回避するために生じる変化は起きていると考えることが出来る。ただし、このような特殊モーラを含む音節が LL になる変化は、特殊モーラを含む音節の音節全体が HH になる場合、すなわち B1 が A1 に合流する方向の変化と違ってアクセント型の合流を引き起こすものではないということである。

(4-114)

蛸	Y1	B 系列	[to/;	<u>[to;/nu</u>	<u>[to;/ka\ra</u>	(花徳)
歯	Y1	B 系列	[ha/;	<u>[ha;/nu</u>	<u>[ha;/ka\ra</u>	(花徳)

次に、(4-112b-c)の灰色塗りの部分について説明する。この部分は、(4-4b)の《A 型と

C 型における「山の後退」が起きていると考えられる部分である。(4-115)に(4-9)の表を改めて示し、(4-4b)の「山の後退」の内容を再確認する。(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が起きると、語頭モーラに昇り核を置く A 型の場合、A2/*[○○/は B2/*○[○/に、A3/*[○○○/は C3/*○[○○/に合流する。後ろから 2 番目のモーラに昇り核を置く C 型の場合、C2/*[○○/(基底形)は B2/*○[○/に、C3/*○[○○/は B3/*○○[○/に合流する。A1/*[○/の場合、音節内上昇を作ってまで「山の後退」をしなければいけない積極的な理由がないため、「山の後退」は起きない。

(4-115(=4-9))

a. A 型の「山の後退」

A1	A2	A3		A1	A2→B2	A3→C3
*[○	*[○○	*[○○○	→	*[○	*○[○	*○[○○

b. C 型の「山の後退」

C2	C3		C2→B2	C3→B3
*[○○ (表層単独 [○A;○)	*○[○○	→	*○[○ (表層単独 ○[○)	*○○[○

まず、A 系列の基底 2 モーラ語で起きた(4-4b)の「山の後退」から説明する。(4-112b)の二重線で囲んでいる部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には X2 に集中すると考えられる A 系列の語が B 型に対応する Y 型に 10 例、W 型に 23 例見られる。この語例の分布から、A2 が B2(Y2)に合流、または W2 に変化したこと伺える。元々の A2 は(詳しくは後述するが)(4-4b)の「山の後退」もしくは(4-4c)の「核の後退」により B2(Y2)に変化するものが一部ありつつ、B2(Y1)を飛ばして W2 になるものもあることを念頭において考えると、Y 型と W 型を合わせた 33 例で、A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/になろうとする方向での(4-4b)の「山の後退」が起きたと考えられる。この変化の原因には(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》と、(4-4a)をトリガーにし引き起こされる(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》が考えられるわけだが、花徳方言における語例の分布から見てどちらも可能性があり、どちらが変化の主因であるかは判断できない。

A 系列の基底 3 モーラ語の場合は、徳之島祖語から変化がなかった場合には X3 に集中すると考えられる A 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 10 例見られ、Y 型に集中している。A 系列の場合、A3/*[○○○/から変化をしつつも C3/*○[○○/との合流回避もすることで、結果として B3(Y3)/○○[○/になるという、2 段階の変化が起こったと考えられる。花徳方言を金見方言と比較してみると、花徳方言では Y3 になっている A 系列の

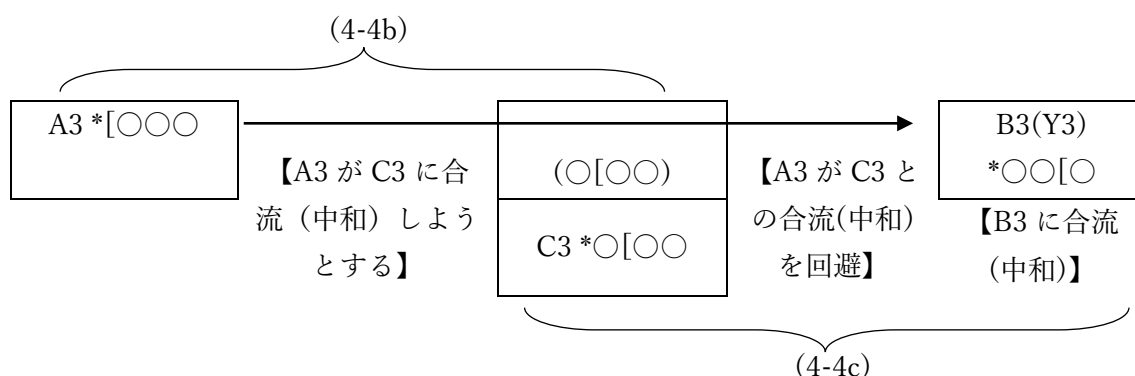
語が、金見方言においては Z3 になる語が多い(4-116)⁷¹。

(4-116)

a.	煙	Y3	A 系列	kibu[si	kibu[sinu		(花徳)
	鼻血	Y3	A 系列	hana[dzi	hana[dzinu		(花徳)
	涎	Y3	A 系列	juda[i	juda[inu		(花徳)
b.	煙	Z3	A 系列	kī[bu:si	kī[bu:sinu	kī[bu:sikara	(金見)
	鼻血	Z3	A 系列	ha[na:dzi	ha[na:dzinu	ha[na:dzikara	(金見)
	涎	Z3	A 系列	ju[dai	ju[dainu	ju[daikara	(金見)

(4-116b)の金見方言の場合、A3/*[○○○/が C3(Z3)/○[○○/に合流したと考えられる。一方、花徳方言は、金見方言のように A3/*[○○○/が「山の後退」を起こし/○[○○/になろうとしたが、それだと C3/*○[○○/と合流してしまうため、それを回避するためにもう 1 モーラ分の「核の後退」を起こし、/○○[○/になったものとする。細かく言えば A3/*[○○○/がピッチパターンを変えようとする (/○[○○/になろうとする) のは③発音上の利便性によって生じる「山の後退」(=(4-4b))が、最終的に/○[○○/ではなく/○○[○/になる過程では、①アクセント型の合流(中和)を回避するために生じる「核の後退」(=(4-4c))が関わっていると言える。上記のような変化の結果、A3/*[○○○/は最終的に B3(Y3)/○○[○/に合流する。B3(Y3)との合流を回避しなかった理由については 4.2.3.2 節を参照。(4-117)に(4-14)で見た花徳方言における基底 3 モーラの A 系列語の変遷過程を示す⁷²。

(4-117(=4-14))



⁷¹ 手々方言と金見方言のように、花徳方言も(徳之島祖語以降の)共通祖語を持つと主張しているものではないが、(4-116)の例においては、金見方言と花徳方言の所属語彙が類似しており、類似の変化過程を経たのではないかと推測される。

⁷² このような変遷過程を踏んだと考えられる方言は、花徳方言以外には手々方言、轟木方言がある。

次に C 系列の基底 2 モーラ語に起きた(4-4b)の「山の後退」のタイミングについて説明する(4-112b)。花徳方言では基底 2 モーラの C 系列語の分布（太線で囲まれた部分）から、(4-4a)と(4-4b)のうちどちらが先に起こったかを予想することができる。C2/*[○○/(基底形)が B2(Y2)/○[○/に合流する変化に関しては、前述した(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》と(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が共通して予測する内容である。(4-112b)を見ると、基底 2 モーラの C 系列語は、A 型に対応する X 型に 24 例、祖語の B 型に対応する Y 型には 6 例見られる。C 系列の語が X 型にまとまった数で見られるということは、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》の方が先に起こり、C2 の多くが A2 もしくは B2 に合流した後、C 系列全体に(4-4b)の「山の後退」が生じたと考えられることができる。もし、(4-4b)が先に起きているなら、C2 が B2(Y2)の方に合流してしまい、A2(X2)にまとまった数の語例が観察されないと考えられるからである。

今度は、C 系列の基底 3 モーラ語について見ていくことにする。(4-112c)の灰色塗りの部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z3 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 6 例見られ、C3/*○[○○/が B3(Y3)/○○[○/になる(4-4b)の「山の後退」の変化が起きていると捉えられそうである。おそらく通時的には変化の途中でであろうと考えられる。ここまで説明した(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》により合流(中和)したと考えられる語例を(4-118)にまとめて示すことにする。

(4-118)

〈A2→B2〉	鼻	Y2	A 系列	ha[na	ha[na\ɳu	ha[naka\ɾa	(花徳)
〈A2→(B2)→W2〉	棘	W2	A 系列	i[gi[	igi[ɳu	igi[ka\ɾa	(花徳)
〈A3→(C3)→B3〉	右	Y3	A 系列	nigi[ri	nigi[rinu	nigi[rika\ɾa	(花徳)
〈C2→B2〉	子供	Y2	C 系列	wa:[re	wa:[re\ɳu		(花徳)
〈C3→B3〉	腰周り	Y3	C 系列	gama[ku	gama[ku\ɳu	gama[kuka\ɾa	(花徳)

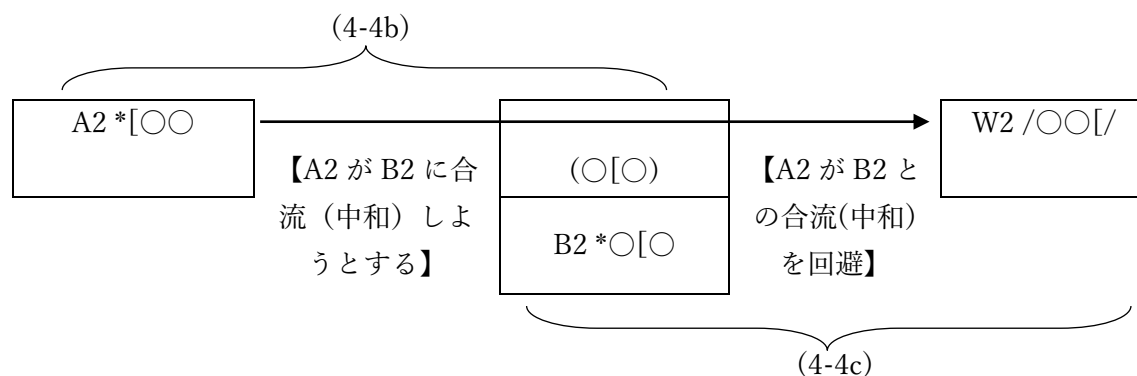
次に、(4-112b)の二重線で囲んでいる部分について説明する。この二重線で囲んだ部分には(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》が生じていると考えられる。(4-112b)の二重線で囲んでいる部分の語例数をもう一度確認すると、徳之島祖語から変化がなかった場合には X2 に集中すると考えられる A 系列の語が B 型に対応する Y 型に 10 例、W 型に 23 例見られる。この語例の分布から、A2 が B2(Y2)に合流、または W2 に変化したこと伺えることについてはすでに述べた。

元々の A2 は B2(Y2)に変化するものが一部ありつつ、後述する(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》により B2(Y1)を飛ばして W2 になるものもあることを念頭において考えると、Y 型と W 型を合わせた 33 例で、

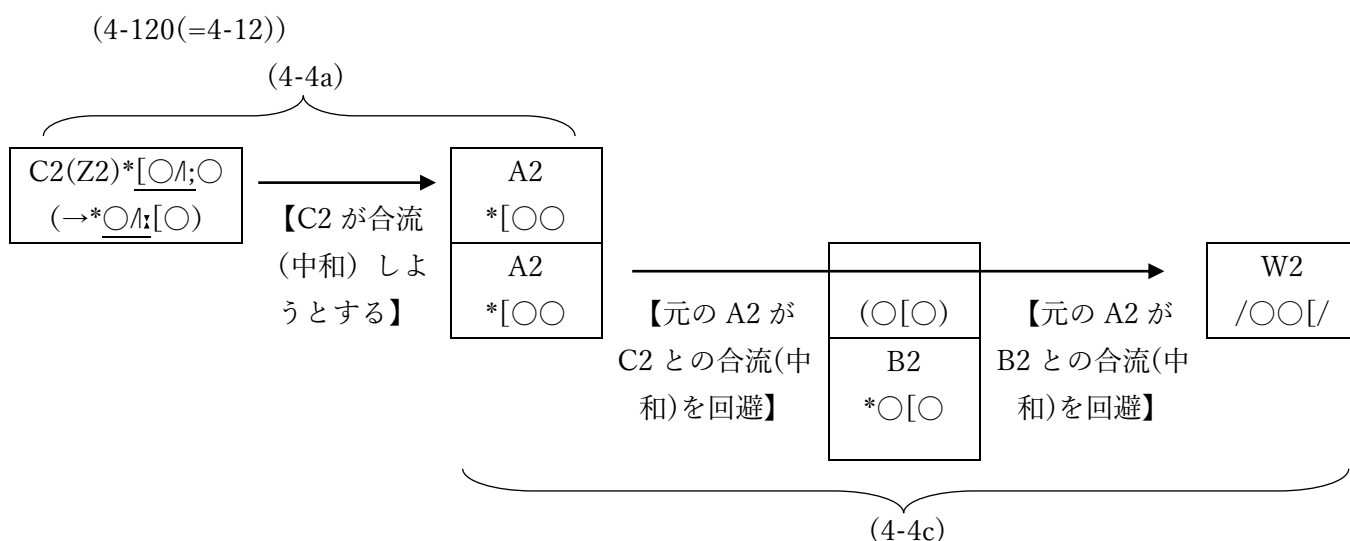
A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/になろうとする方向での(4-4b)の「山の後退」または (4-4c)の「核の後退」が起きたと考えられるが、これらのうちでどちらが変化の主因であるかは判断できないので、以下では両方について説明する。

まず、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が A2/*[○○/が B2/*○[○/に変化
する原因になったと考える場合の通時的な変遷過程を説明する。(4-4b)の変化により
A2/*[○○/が B2/*○[○/に合流 (中和) しようとする時に、一部は合流したが、A2 の一
部は B2 との合流(中和)を回避して、もう 1 モーラ分、山が後退すると考えられる(4-4c)。
結果的に A2/*[○○/の一部には、/○[○/を飛ばして W2/○○[/になる変化が起こる。(4-
119)に(4-15)でみた、花徳方言における基底 2 モーラの A 系列語の変遷過程を改めて示す。

(4-119(=4-15))



そして次に、(4-4a)をトリガーにし引き起こされる、(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》が、A2/*[○○/が B2/*○[○/に変化
する原因になったと考える場合の通時的な変遷過程を説明する。(4-4a)により、C2 が A2
に合流しようとする場合、A2 の一部は C2 との合流を回避し、1 モーラ分、核が後退し
ようとする。しかし、今度はそのまま A2 が B2 と合流してしまうことになるため、A2
の一部は B2 と合流したが、一部がその合流を回避し、もう 1 モーラ分、核が後退したと
考えられる。結果的に、A2 は 2 モーラ分、核が後退し、現在の徳之島諸方言における
W2(+3)になる(4-120(=4-12))。



(4-121)は、(4-119)もしくは(4-120)のような変化により合流(中和)したと考えられる、A系列の W2 の語例である。

(4-121)

草履	W2	A 系列	sa/ba[/ saba[;	saba[nu	saba[ka\ra	(花徳)
棘	W2	A 系列	i/agi[	igi[nu	igi[ka\ra	(花徳)

(4-119)もしくは(4-120)で注目すべきなのは、上記のような変化の結果、一部の語が B2*/O[O]/との合流を躲すために W 型(“+3”)という新たなアクセント型が生じさせたと考えられる点である。花徳方言 W 型はアクセントのドメインを「文節」とし、前から数えて 3 番目のモーラに昇り核を持つアクセント型である。表層単独形は/OΛO[/~/OO[/で、二つのピッチパターンがフリーバリエーションで現れる。通時的に、W2 は A2*/[OO]/から B2*/O[O]/との合流を躲して変化したものであることを念頭に置くと、アクセントのドメインが「語」から「文節」に変わったことを意味する。

(4-122)に A2 から B2*/O[O]/との合流を躲して W2 になる通時的変遷と、それに伴う、アクセントドメインの「語」から「文節」への変化過程を、A 系列の基底 2 モーラ語である「草履」を意味する語を例にして示す。各段階において、花徳方言で観察される W2 の語例を太字にして一緒に示す。

(4-122)

	A2 */[○○/ →	B2 */○[○/ →	W2 /○○[/ ○○[; saba[;	
表層単独	[○○ →	*○[○ →	○○[; → *○ <u>○</u> ; → *○ <u>○</u> :	○ <u>○</u> [sa/ba[
1 モーラ 助詞付き	[○○ →	*○[○△ →	*○○[;△ → *○○ <u>;</u> [△ → *○○:[△ →	○○[△ saba[nu
2 モーラ 助詞付き	[○○ →	*○[○△△ →	*○○[;△△ → *○○ <u>;</u> [△△ → *○○:[△△ →	○○[△△ saba[ka\ra
ドメイン	「語」	「語」	「語」	「文節」

W2 におけるドメインの「語」から「文節」への変化過程には、(4-4a)で説明した「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にする」という音声的傾向」が深く関係していると考えられる。W2 の表層単独形は/○○[;/において、特殊モーラを含む音節(下線部)が HH になり、*/○○;:/になる。語末の/;/は、/;/前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになる(○○:)。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/は現れても、現れなくてもよい。以上の過程を経て、現在の花徳方言で観察されるような、/○○[/というピッチパターンになる。次に、1 モーラ助詞付きを例に、助詞付きのピッチパターンの変化について述べる。/○○[;/にそのまま、1 モーラ助詞が付く場合のピッチパターンは/○○[;/△/である。この時点ではまだアクセントのドメインは「語」のままである。ここから、上記で説明した音声的傾向により、/○○[;/△/の特殊モーラを含む音節(下線部)が LL になり、*/○○;;△/になる。語末の/;/は、/;/前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになる(○○;[△)。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/は現れても、現れなくてもよい。以上の過程を経て、現在観察されるような、/○○[△/というピッチパターンになる。以上のような変化を経て、/○○:[△/~○○[△/のピッチ上昇の位置は助詞にずれ込むことになり、アクセントのドメインは「文節」へと変化したと考えられる。表層単独形のドメインの解釈もそれに合わせて「文節」に変化することになる。

上記の A2 が W2 になる通時的変遷と関係して、(4-112a)の太文字に下線を引いている部分について補足説明する。徳之島祖語から変化がなかった場合には X1 に集中すると考えられる A 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 5 例見られる。A 系列の語が全部で 10 例であることを考えると、半数に当たる数である。語例の分布から考えると A1*/[○/が B1(Y1)/[○△;/ (表層形)に合流しているとも考えられる部分である。徳之島諸方言において、このように音節内上昇を生じさせる変化は忌避されるものである。本稿では、音節内上昇を生じさせる変化は、音韻的に強い動機がないと生じないものであると考える。そして、(4-112a)で見る A1*/[○/が B1(Y1)/[○△;/ (表層形)に合流する変化には、A2/[○○/

が W2/○○[/になる変化に音調の形を合わせるといふ動機があったと考えられる。つまり、A1 と同じ A 型である A2 の語が、2 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 3 モーラにしつつ、前から数えて 3 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇する(○○[:])といったピッチパターンを持つようになったため、A1 も A2 と同じようなピッチパターンを実現させるために、母音を伸ばして、語の長さを 2 モーラにしつつ、2 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇する(○[:])といったピッチパターンを持つようになったという解釈である。このような「同調的な変化」の結果、A1*/[○/が B1(Y1)/[○Λ/(表層形)に合流すると考えられる。もっとも、このような「同調的な変化」は(4-4d)に当たるもので、浅間方言でその傾向が著しいと考えているわけだが、ここで述べた花徳方言の基底 1 モーラの A 系列語においては、浅間方言と違い全体の語例数が少ないため、このような変化があると確信することはできない。今後詳しい調査が必要である。

最後に基底 3 モーラ語のうち 2 モーラ目に特殊モーラを持つ語例について説明する((4-112c)の二重下線部分)。花徳方言では、X3 の語例すべて(A 系列の X3 である 5 例と C 系列の X3 である 7 例)が 2 モーラ目に特殊モーラを持つ。(4-123)に挙げたような語例である。

(4-123)

a.	あおさ	X3	C 系列	oR\sa	oR\sanu	oR\sakara	(花徳)
	バツタ	X3	C 系列	gaQ\ta	gaQ\tanu	gaQ\takara	(花徳)
b.	二つ	X3	A 系列	taRcji			(花徳)
	三つ	X3	A 系列	miRcji			(花徳)

このような例が X 型にあることには、徳之島諸方言で広くみられる「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」が影響しているものと考えられる。(4-123a)から説明することにする。(4-123a)の「あおさ」と「バツタ」は元々 Z 型(Z3)の単独形/○[R○/と/○[Q○/であったと考えられる。この単独形から上記の音声的傾向により、/R/と/Q/を含む語頭音節が HH で発音されるようになったと推定される例である。このような例の場合、/○[R○/と/○[Q○/の語が X 型に中和しても、Z3 には 2 モーラ目に/R/と/Q/を含まない語例も多数あるため、中和によってアクセント体系に含まれるアクセント型の数と内容(定義)が変わることはない。すなわち、アクセント体系の通時的変遷には直接影響するものではない。一方、(4-123b)の「二つ」と「三つ」は、前述した(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》により A3/[○○○/が/○[○○/に合流しようとするような動きをした時に変化せず、残留したものと考えられる。例えば、A3/[taRcji/が/*ta[Rcji/のようなピッチパターンになろうとすれば音節内上昇が生じるわけで、それを回避しようとしたというわけである。基本的に徳之島諸方言において音節内上昇は忌避されるものであり、その中でも語中における音節内

上昇は、語末の音節内上昇より忌避される傾向が強い⁷³。

4.3.14 松原方言と岡前方言アクセントの通時的変遷

松原、岡前は天城町の北部に位置する集落である。この 2 集落は、アクセント体系や型の所属語彙、通時的変遷過程、地理的な面から共通祖語を見出すことが出来そうである。松原方言と岡前方言のアクセント体系はX型、Y型、W型、Z型を持つ4型アクセントである(3.9.1 節、3.9.2 節を参照)。(4-124)と(4-125)は松原方言と岡前方言のアクセント型における基底1モーラから基底3モーラまでの語例が、A系列、B系列、C系列のうちどの系列に属するかを数えた表である。祖体系から見て合流(中和)したと考えられるY1とZ2は表の外側に見え消しで記す。

(4-124) 松原方言

a.基底1モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	10	1	4	3
Y1	0	9	0	1

b.基底2モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	1	0	5	5
Y2	35	9	29	10
W2	2	35	1	0
Z2	θ	θ	θ	θ

c.基底3モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	<u>10</u>	0	<u>3</u>	0
Y3	0	21	27	4
Z3	5	0	0	2

⁷³ ちなみに、A系列のX3の語を見ると5例すべて数字を表す語である。本文のような理由も考えられるが、この語例に関しては、単に慣用的に残っているだけかも知れない。

(4-125) 岡前方言

a. 基底 1 モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	10	0	4	2
Y1	0	8	0	1

b. 基底 2 モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	3	0	8	2
Y2	34	10	26	4
W2	1	33	1	0
Z2	θ	θ	θ	θ

c. 基底 3 モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	<u>10</u>	0	<u>3</u>	2
Y3	2	21	24	8
Z3	4	0	2	3

最初に(4-124b)と(4-125b)の太線で囲んだ部分から説明する。松原方言の(4-124b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 5 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 29 例見られる。岡前方言の(4-125b)の太線で囲んだ部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 8 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 26 例見られ、C 系列の語であって A 型および B 型に合流した語の比率が似ていることから、松原方言と岡前方言で C2 が A2(X2)と B2(Y2)に合流(中和)したことが伺える。加えて、共時的に X2 にある語、Y2 にある語が両方言でほぼ共通していることもその傍証である。こういった変化は、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》が起きたためであると考えられる。4.2 節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-126)と(4-127)は(4-4a)により中和(合流)したと考えられる、松原方言と岡前方言の C 系列の基底 2 モーラ語の例であり、(4-4a)によりそれぞれ X 型(A 型)と Y 型(B 型)に中和(合流)したと考えられるものである。

(4-126)

白	X2	C 系列	usi	usinu	usikara	(松原)
畑	Y2	C 系列	ha[te	ha[tenu	ha[tekara	(松原)

(4-127)

右	X2	C 系列	mi\gi	mi\ginu	mi\gikara	(岡前)
水	Y2	C 系列	mi[dzĩ	mi[dzĩnu	mi[dzĩkara	(岡前)

(4-126)の「白」と(4-127)の「右」は、C2/*[○Λ;○/の1音節目がHHになったことでA2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった2モーラ目の母音の伸び/;/は、/*[○;○/→/[○:○/~/[○○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。(4-126)の「畑」と(4-127)の「水」はC2/*[○Λ;○/の1音節目がLLになったことでB2(Y2)になったと考えられる。(4-126)の「白」と(4-127)の「右」と同じく、元々あった2モーラ目の母音の伸び/;/は、/*○;[○/→/○:[○/~/○[○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2の語はA2もしくはB2に合流(中和)して無くなったと考えられる。なお、C2がA2とB2のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、松原方言と岡前方言では、A2(X2)よりB2(Y2)に合流する割合が非常に高い。

一方、(4-124a)と(4-125a)のB1がA1(X1)に合流したと考えられる例は、松原方言の1例のみで特殊モーラを含む音節がHHになる変化は生じていないと考えられる。しかしY1の例を見ると、(4-128)と(4-129)の下線部のように、アクセント核の位置からピッチの上昇が1モーラ分後ろに生じるという、例外的なピッチパターンが観察される。これは、助詞を付けた時に特殊モーラを含む音節がLLになることで生じた変化であると考えられるもので、B1においても、②音節内上昇を回避するために生じる変化は起きていると考えることが出来る。ただし、このような特殊モーラを含む音節がLLになる変化は、特殊モーラを含む音節の音節全体がHHになる場合、すなわちB1がA1に合流する方向の変化と違ってアクセント型の合流を引き起こすものではない。

(4-128)

南	Y1	B 系列	[hwēΛ;	<u>[hwēΛnu</u>	<u>[hwēΛka\ra</u>	(松原)
齒	Y1	B 系列	[haΛ;	<u>[haΛnu</u>	<u>[haΛka\ra</u>	(松原)

(4-129)

木	Y1	B 系列	[kīΛ;	<u>[kīΛnu</u>	<u>[kīΛkara</u>	(岡前)
湯	Y1	B 系列	[juΛ;	<u>[juΛnu</u>	<u>[juΛka\ra</u>	(岡前)

次に、(4-124a)と(4-125a)の灰色塗りの部分について説明する。ここは、(4-4b)の《A型とC型における「山の後退」》が生じたと考えられる部分である。(4-130)に(4-9)の表を改めて示し、(4-4b)の《A型とC型における「山の後退」》の内容を再確認する。(4-4b)の《A型とC型における「山の後退」》が起きると、語頭モーラに昇り核を置くA型の場合、A2/*[○○/はB2/*○[○/に、A3/*[○○○/はC3/*○[○○/に合流する。後ろから2番目のモーラに昇り核を置くC型の場合、C2/*[○○/(基底形)はB2/*○[○/に、C3/*○[○○/はB3/*○○[○/に合流する。A1/*[○/の場合、音節内上昇を作ってまで「山の後退」を

しなければいけない積極的な理由がないため、「山の後退」は起きない。

(4-130(=4-9))

a. A 型の「山の後退」

A1	A2	A3		A1	A2→B2	A3→C3
*[○	*[○○	*[○○○	→	*[○	*○[○	*○[○○

b. C 型の「山の後退」

C2	C3		C2→B2	C3→B3
*[○○ (表層単独 [○/;○)	*○[○○	→	*○[○ (表層単独 ○[○)	*○○[○

まず、A 系列の基底 2 モーラ語で起きた(4-4b)の「山の後退」から説明する。(4-124b)と(4-125b)を見ると、松原方言では、徳之島祖語から変化がなかった場合には X2 に集中すると考えられる A 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 35 例見られる。岡前方言においても A 系列の語が Y 型に 34 例見られ、両方言共に Y 型に集中していることが分かる。このような語例の分布から A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/へ合流したことが伺える。A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/へ合流する原因には(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》と、(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》が考えられる。松原方言と岡前方言では、このうち(4-4b)の「山の後退」が変化の主因であると考えられる。

(4-4b)の「山の後退」とは異なり、(4-4c)の「核の後退」は、アクセント型の合流(中和)を回避するために生じる連鎖的な変化である。ここで、(4-4c)の「核の後退」を引き起こすトリガーとなり得る変化は、(4-4a)の C2 が A2(X2)に合流(中和)する変化である。しかし、(4-124b)と(4-125b)を見ると、C2 が A2(X2)に合流したと考えられる語例数は松原方言で 5 例、岡前方言で 8 例だけである。前述したように、松原方言と岡前方言では、A2(X2)より B2(Y2)に合流する割合が非常に高く、C2 のほとんどが B2(Y2)に合流している。C2 が A2(X2)に合流する変化がほとんど起きていないということは、連鎖的な変化である(4-4c)の変化も起きていないだろうと予測することが出来る。しかし、A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/へ合流する語例数は、松原方言で 35 例、岡前方言で 34 例もあり、その変化が著しい。ここは、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が変化の主因であると考えるのが妥当であろう。

次に A 系列の基底 3 モーラ語で起きた(4-4b)の「山の後退」について説明する。(4-124b)と(4-125b)の灰色塗りの部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には X3 に集中すると考えられる A 系列の語が、松原方言の場合には祖語の C 型に対応する Z 型

に 5 例、岡前方言の場合には祖語の C 型に対応する Z 型に 4 例見られる。A 系列の語が A3(X3)にあり、変化しなかったと考えられる例が両方言共に 10 例と多数派ではあるが、この 10 例はすべて 2 モーラ目に特殊モーラを持つ語で、例外的な振る舞いをすると考えられる語例である。これについては以下の(4-138)で説明する。2 モーラ目に特殊モーラを持つ語例を除くと、両方言共に A3/*[○○○/が C3(Z3)/○[○○/になる(4-4b)の「山の後退」が起きていると考えられる。

今度は、C 系列の基底 2 モーラ語で起きた(4-4b)の「山の後退」について説明する((4-124b)と(4-125b))。基底 2 モーラの C 系列語を見ると、C2/*[○○/(基底形)が B2(Y2)/○[○/に合流する変化と考えられる Y2 の C 系列語は、松原方言で 29 例、岡前方言で 26 例ある。C2/[○○/(基底形)が B2/○[○/に合流する変化は、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》と、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》がともに C2/[○○/(基底形)が B2/○[○/への合流を予測する。しかし、松原方言と岡前方言では、(4-124b)と(4-125b)の基底 2 モーラの C 系列語の分布から、(4-4a)と(4-4b)のうちどちらが先に起こったかを予想することができる。(4-124b)と(4-125b)を見ると、C2 が A2(X2)に合流したと考えられる語例数は松原方言で 5 例、岡前方言で 8 例見られる。少数ではあるが、C 系列の語が X 型に見られるということは、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》の方が先に起こり、C2 の多くが A2 もしくは B2 に合流した後、C 系列全体に(4-4b)の「山の後退」が生じたと考えることができる。もし、(4-4b)が先に起きているなら、C2 が B2(Y2)の方に合流してしまい、A2(X2)に語例が観察されないと考えられるからである。

C 系列の基底 3 モーラ語の場合、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z3 に集中すると考えられる C 系列の語が、松原方言の場合には祖語の B 型に対応する Y 型に 27 例見られる。岡前方言でも、C 系列の語は Y 型に 24 例見られ、両方言共に Y 型に集中している。このような分布から C3/*○[○○/が B3(Y3)/○○[○/になる(4-4b)の「山の後退」が起きていると考えられる。それでは、ここまで説明した(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》により合流(中和)したと考えられる語例を(4-131)と(4-132)にまとめて示すことにする。

(4-131)

〈A2→B2〉	風	Y2	A 系列	ka[dzi	ka[dzinu	ka[dzikara	(松原)
〈A3→C3〉	東	Z3	A 系列	a[gari	a[garinu	a[garikara	(松原)
〈C2→B2〉	糸	Y2	C 系列	i[cju	i[cju\;nu	i[cju\;kara	(松原)
〈C3→B3〉	腰周り	Y3	C 系列	gama:[ku	gama:[kunu	gama:[kukara	(松原)
				/ gama[ku			

(4-132)

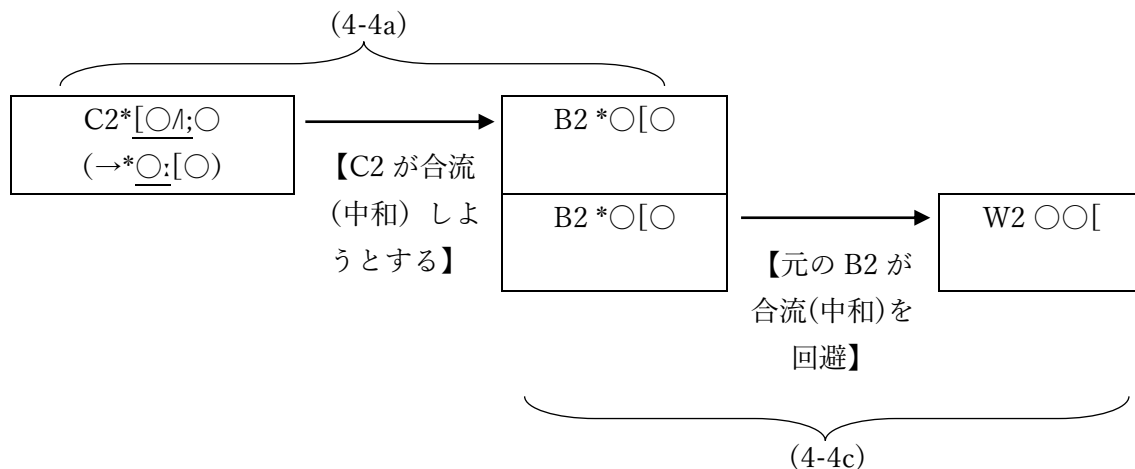
〈A2→B2〉	羽	Y2	A 系列	ha[ni	ha[ni:nu	ha[ni:kara	(岡前)
〈A3→C3〉	鼻血	Z3	A 系列	ha[na:ˆdzi	ha[na:ˆdzinu	ha[na:ˆdzikara	(岡前)
〈C2→B2〉	甕	Y2	C 系列	ka:[mi	ka:[minu	ka:[mikara	(岡前)
〈C3→B3〉	頭	Y3	C 系列	kara:[dzi	kara:[dzinu	kara:[dzikara /	(岡前)
						kara[dzikara	

続いて、(4-124b)と(4-125b)の基底 2 モーラ語の B 系列語のうち、二重線で囲んでいる部分について説明する。この二重線で囲んだ部分では(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「山の後退」》が生じていると考えられる。(4-124b)と(4-125b)の二重線で囲んでいる部分の語例数を確認すると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Y2 に集中すると考えられる B 系列の語が、松原方言の場合 W 型に 35 例見られ、岡前方言の場合 W 型に 33 例見られる。このような語例の分布から B2/*○[○/が W2/○○[/になる変化が(4-4c)によって生じたということが伺える。

松原方言と岡前方言では、(4-4c)の「核の後退」を引き起こすトリガーとなった変化として、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》より生じたと考えられる C2/*[○○/(基底形)の B2/*○[○/への合流(中和)と(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》より生じた A2/*[○○/の B2/*○[○/への合流(中和)が想定される。そして、松原方言と岡前方言の語例の分布から見て、両者のどちらにも可能性がある。

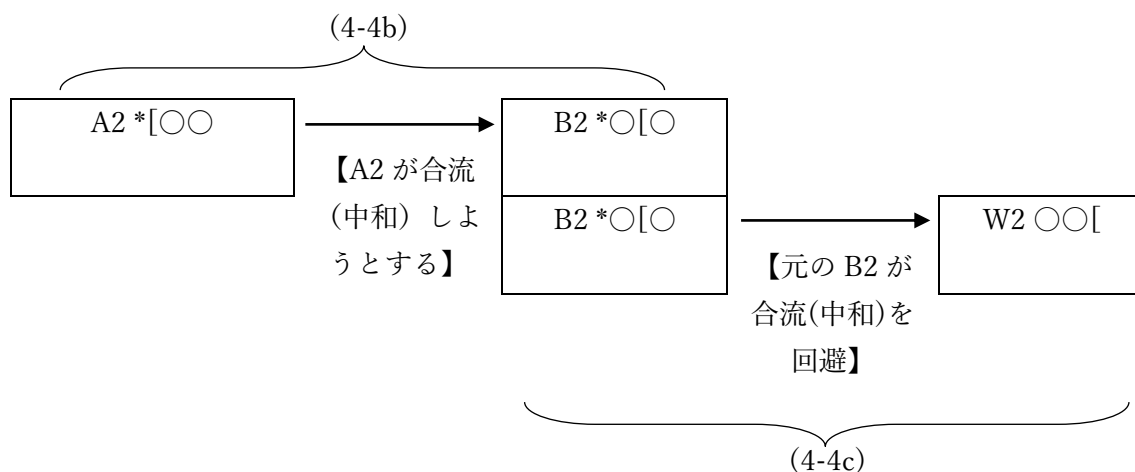
まず、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》より生じたと考えられる C2/*[○○/(基底形)の B2/*○[○/への合流(中和)が、B2/*○[○/が W2/○○[/になるトリガーとなったと考える場合の通時的な変遷過程を説明する。C2 が B2 に合流しようとする場合に、B2 は C2 との合流を回避し、1 モーラ分、核が後退する。その結果、C2 が B2 になり、元々の B2 は現在の徳之島諸方言における W2(“+3”)になるという、玉突き式の変化が起こる(4-133(=4-11))。

(4-133(=4-11))



次に、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》より生じた A2/*[○○/の B2/*○[○/への合流(中和)が B2/*○[○/が W2/○○[/になるトリガーとなったと考える場合の通時的な変遷過程を説明する。A2 が B2 に合流しようとする場合、元の B2 は A2 との合流を回避し、1 モーラ分、核が後退する。その結果、A2 が B2 になり、元の B2 は W2/○○[/になるという、玉突き式の変化が起こる(4-134(=4-13))。

(4-134(=4-13))



(4-135)と(4-136)は、(4-133)もしくは(4-134)のような変化により合流(中和)したと考えられる、A 系列の W2 の語例である。

(4-135)

雨	W2	B 系列	ami[;	ami:[nu	ami[:kara	(松原)
雲	W2	B 系列	?kumo[;	?kumo[:nu	?kumo[ka\ra	(松原)

(4-136)

花	W2	B 系列	hana[;	hana:[nu	hana[ka\ra	(岡前)
亀	W2	B 系列	kamī[;	kamī:[nu	kamī[ka\ra	(岡前)

ここで、注目すべきなのは、元々の B2 であった語から 1 モーラ分山が後退した結果、W 型(“+3”)という新たなアクセント型が生じたと考えられる点である。松原方言と岡前方言の W 型はアクセントのドメインを「文節」とし、前から数えて 3 番目のモーラに昇り核を持つアクセント型である。表層単独形は/○○[;/である。通時的に、W2 は B2*/○○/から変化したものであることを念頭に置くと、アクセントのドメインが「語」から「文節」に変わったことを意味する。

(4-137)に B2 から W2 への通時的変遷と、それに伴う、アクセントドメインの「語」から「文節」への変化過程を、B 系列の基底 2 モーラ語である「豆」を意味する語を例にして示す。各段階において、松原方言と岡前方言で観察される W2 の語例を太字にして一緒に示す。

(4-137)

	B2 /*○○/ →	W2 /○○[/
表層単独	*○○ →	○○[; mamī[; (松原) mamī[; (岡前)
1 モーラ 助詞付き	*○○△ →	×○○[;△ → ×○○ <u>;</u> △ → ○○[△ → ○○[△ mamī:[nu (松原) mamī:[nu (岡前)
2 モーラ 助詞付き	*○○△△ →	×○○[;△△ → ×○○ <u>;</u> △△ → ○○[△△ → ○○[△△ mamī[ka\ra (松原) mamī[ka\ra (岡前)
ドメイン	「語」	「語」 「文節」

W2 におけるドメインの「語」から「文節」への変化過程には、(4-4a)で説明した「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」が深く関係していると考えられる。W2 の表層単独形は/○○[;/である。現在の犬田布(當原)方言や花徳方言で観察されるような、/○○△[/というピッチパターンは、松原方言と岡前方言では観察されない。次に、1 モーラ助詞付きを例に、助詞付きのピッチパターンの変化について述べる。/○○[;/にそのまま、1 モーラ助詞が付く場合のピ

ッチパターンは/○○[△/である。この時点ではまだアクセントのドメインは「語」のみである。ここから、上記で説明した音声的傾向により、/○○[△/の特殊モーラを含む音節(下線部)が LL になり、×/○○[△/になる。語末の/;/は、/;/前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになり/○○[△/となる。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/は現れても、現れなくてもよい。以上の過程を経て、現在観察されるような、/○○[△/というピッチパターンになる。以上のような変化を経て、/○○[△/~○○[△/のピッチ上昇の位置は助詞にずれ込むことになり、アクセントのドメインは「文節」へと変化したと考えられる。

最後に基底 3 モーラ語のうちで 2 モーラ目に特殊モーラを持つ語例について説明する((4-124b)と(4-125b)の二重下線部分)。松原方言と岡前方言では、X3 の語例すべてが 2 モーラ目に特殊モーラを持つ。A 系列の X3 である 10 例と C 系列の X3 である 3 例で、A 系列の X3 と C 系列の X3 の所属語彙は松原方言と岡前方言で共通している。(4-138)に語例を示す。

(4-138)

a.	虹	X3	C 系列	nuRdzi	nuRdzinu	nuRdzikara	(松原)
	虹	X3	C 系列	noRdzi	noRdzinu	noRdzika\ra	(岡前)
	膝小僧	X3	C 系列	cjiNsi	cjiNsinu	cjiNsikara	(松原)
	膝小僧	X3	C 系列	tsiNsje	tsiNsjeu	tsiNsjekara	(岡前)
b.	扇・団扇	X3	A 系列	oR\gi	oR\ginu	oR\gikara	(松原)
	扇・団扇	X3	A 系列	o\Rgi	o\Rginu	o\Rgikara	(岡前)

このような語例が X3 にあることには、徳之島諸方言で広くみられる「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にする」という音声的傾向が影響しているものと考えられる。(4-138a)から説明することにする。(4-138a)の「虹」と「膝小僧」は元々 Z 型 (Z3) の単独形/○[R○/と/○[Q○/であったと考えられる。この単独形から上記の音声的傾向により、/R/と/Q/を含む語頭音節が HH で発音されるようになったと推定される例である。このような例の場合、/○[R○/と/○[Q○/の語が X 型に中和しても、Z3 には 2 モーラ目に/R/と/Q/を含まない語例も多数あるため、中和によってアクセント体系に含まれるアクセント型の数と内容(定義)が変わることはない。すなわち、アクセント体系の通時的変遷には直接影響するものではない。一方、(4-138b)の「扇・団扇」は、前述した(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》により A3/*[○○○/から C3/*○[○○/に合流する時に変化せず、残留したのと考えられる。なぜなら仮に A3/[haNmë/が C3×/ha[Nmë/になるとすれば音節内上昇が生じるからである。基本的に徳之島諸方言において音節内上昇は忌避されるものであり、その中でも語中における音節内上昇は、語末の音節内上昇より忌避される傾向が強い。

4.3.15 浅間方言アクセントの通時的変遷

浅間方言は天城町の北部に位置する集落である。浅間方言のアクセント体系はX型、V型、Y型を持つ3型アクセントであり、徳之島諸方言の中で唯一のV型(“+4”)を持つ方言である(3.8.1節を参照)。(4-139)は浅間方言のアクセント型における基底2モーラと基底3モーラまでの語例が、A系列、B系列、C系列のうちどの系列に属するかを数えた表である。3.1.3.2.2節で述べたように、浅間方言では基底1モーラ語が存在しない。

(4-139) 浅間方言

a.基底2モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	46	0	12	8
V2	2	51	9	5
Y2	1	4	24	3
Z2	θ	θ	θ	θ

b.基底3モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	19	0	3	5
V3	0	21	12	5
Y3	0	2	17	3
Z3	θ	θ	θ	θ

(4-139)を見ると、アクセント型は違えど、(4-21)でみた、徳之島祖語のアクセント体系が変化せずに現在の徳之島諸方言に至ったと仮定した時の語例の分布と、類似していることが分かる(4-140)。浅間方言のX型は祖語のA型、V型は祖語のB型に、Y型は祖語のZ型にそれぞれ対応している。本稿の仮説に従うと、浅間方言では祖語のA型(“+1”)がX型(“0”)へ、B型(“-1”)がV型(“+4”)へ、C型(“-2”)がY型(“-1”)へ変化したことになる。

(4-140(=4-21))

a.基底1モーラ語

	A1	B1	C1	不明
X1	✓			
Y1		✓		

b.基底2モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	✓			
Y2		✓		
Z2			✓	

c.基底3モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	✓			
Y3		✓		
Z3			✓	

祖語のA型(“+1”)からX型(“0”)へと変化するの、アクセントの弁別に寄与しないA型の語頭の昇り核が世代を下るうちに意識から薄れ、高起式であるという「式」の意識だ

けが残った結果であると解釈できる⁷⁴。これに関しては 4.2.2 節を参照してほしい。浅間方言で特に注目して論じるべきことは、B 型(“-1”)から V 型(“+4”)に、C 型(“-2”)から Y 型(“-1”)にアクセント型が変化するプロセスである。本稿では、B 型(“-1”)は、V 型(“+4”)に直接変化したのではなく、現在の徳之島諸方言の口群で見られる W 型(“+3”)を経て V 型になったと考える。C 型(“-2”)は、(4-4b)の「山の後退」の結果、Y 型(“-1”)に変化したと考える。(4-141)は、浅間方言におけるアクセントの通時的変遷のプロセスを図式(表)として表したものである⁷⁵。

(4-141)

a. 基底 2 モーラ語

	A2	B2	C2	不明
X2	✓			
Y2		↓	✓	
W2→V2		↓	↑	
Z2				

b. 基底 3 モーラ語

	A3	B3	C3	不明
X3	✓			
Y3		↓	✓	
Y3→V3		↓	↑	
Z3				

まず、(4-139)の語例の分布と語例数を見つつ、(4-141b)の太線で囲んだ部分について説明する。浅間方言の(4-141b)の太線で囲んだ部分の実際の語例数を(4-139)で確認する。徳之島祖語から変化がなかった場合には Z2 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の A 型に対応する X 型に 12 例、祖語の B 型に対応する Y 型に 24 例見られ、C2 が A2(X2)と B2(Y2)に合流(中和)したことが伺える。こういった変化は、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》が起きたためであると考えられる。4.2 節で述べたように、(4-4a)は、②音節内上昇を回避するために生じる変化である。(4-142)に示す語例は浅間方言の C 系列の基底 2 モーラ語の例であり、(4-4a)によりそれぞれ X 型(A 型)と Y 型(B 型)に中和(合流)したと考えられるものである。

(4-142)

袖	X2	C 系列	sjudī	sjudī\ɳnu	sjudī\ɳkara	(浅間・浅 C)
蚤	Y2	C 系列	nu:[mi	nu:[mi\ɳnu	nu:[mi\ɳkara	(浅間・浅 A)

(4-142)の「袖」は、C2/*[○A;○/の 1 音節目が HH になったことで A2(X2)になったと考えられる語例である。元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;は、/*[○;○/→/[○:○/~

⁷⁴ 本稿では、浅間方言だけではなくすべての徳之島諸方言において、祖語から現在の徳之島諸方言に至る過程のどこかでこのような変化があったと仮定する。

⁷⁵ 変化の様子を見やすく表示するために、(4-139)から Y 型と V 型の位置を逆転させている。

/[○○/の過程を踏んで短母音化したと考えられる。(4-142)の「蚤」は C2/*[○Λ;○/の 1 音節目が LL になったことで B2(Y2)になったと考えられる語例である。(4-142)の「袖」と同じく、元々あった 2 モーラ目の母音の伸び/;/は、/*○;[○/→/○:[○/~○[○/の過程を踏んで短母音化する(した)と考えられる。前述したように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/が現れても、現れなくてもよい。このような変化の結果、C2 の語は A2 もしくは B2 に合流(中和)したと考えられる。なお、C2 が A2 と B2 のどちらに多く合流するかは、方言によって様々な様相を見せるが、浅間方言では、A2(X2)より B2(Y2)に合流する割合が高い。

次に、(4-141)の灰色塗りの部分について説明する。ここは(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が生じたと考えられる部分である。(4-143)に(4-9)の表を改めて示し、(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》の内容を再確認する。(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が起きると、語頭モーラに昇り核を置く A 型の場合、A2/*[○○/は B2/*○[○/に、A3/*[○○○/は C3/*○[○○/に合流する。後ろから 2 番目のモーラに昇り核を置く C 型の場合、C2/*[○○/(基底形)は B2/*○[○/に、C3/*○[○○/は B3/*○[○/に合流する。

(4-143(=4-9))

a. A 型の「山の後退」

A1	A2	A3	→	A1	A2→B2	A3→C3
*[○	*[○○	*[○○○		*[○	*○[○	*○[○○

b. C 型の「山の後退」

C2	C3	→	C2→B2	C3→B3
*[○○ (表層単独 [○Λ;○)	*○[○○		*○[○ (表層単独 ○[○)	*○○[○

これを踏まえて浅間方言の A 系列語を見ると、浅間方言では A 型の「山の後退」が起きていないことが分かる。(4-4b)の「山の後退」が起きる前に A 型がすでに「高起式でアクセント核を持たない(“0”)」型になっており、C 型のみに(4-4b)の「山の後退」が起きたと解釈することができる。(4.2.2 節を参照)

次に C 系列の基底 2 モーラ語に起きた(4-4b)の「山の後退」について説明する(4-141a)。浅間方言では(4-139a)の基底 2 モーラの C 系列語の分布から、(4-4a)と(4-4b)のうちどちらが先に起こったかを予想することができる。C2/[○○/(基底形)が B2/○[○/に合流する変化に関しては、前述した(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》と(4-4b)の《A 型と C 型における「山の後退」》が共通して予測す

る内容である。一方で、(4-139)を見ると、基底 2 モーラの C 系列語は、A 型に対応する X 型に 12 例、祖語の B 型に対応する Y 型には 24 例見られる。C 系列の語が X 型にまとまった数で見られるということは、(4-4a)の《C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」》の方が先に起こり、C2 の多くが A2 もしくは B2 に合流した後、C 系列全体に(4-4b)の「山の後退」が生じたと考えられる。もし、(4-4b)が先に起きているなら、C2 が B2(Y2)の方に合流してしまい、A2(X2)にまとまった数の語例が観察されないと考えられるからである。

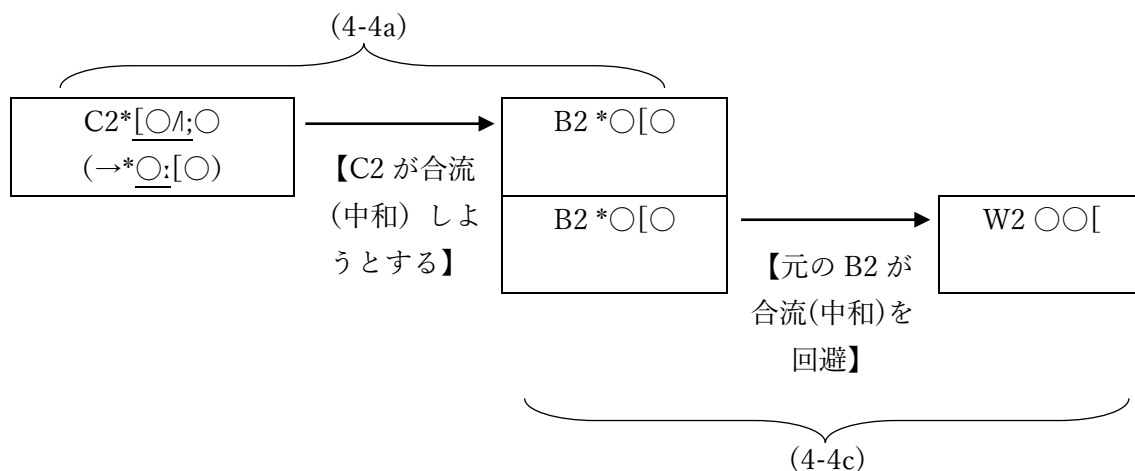
今度は、C 系列の基底 3 モーラ語に起きた(4-4b)の「山の後退」について説明する。(4-141b)の灰色塗りの部分を見ると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Z3 に集中すると考えられる C 系列の語が、祖語の B 型に対応する Y 型に 17 例、V 型に 12 例見られる。(4-146)で後述する(4-4c)の変化により V3 は Y3(B3)を経て成立するということを念頭において考えると、(C 系列の 32 例のうち) Y 型と V 型を合わせた 29 例で、C3/○[○○/が B3/○○[○/になる(4-4b)の「山の後退」が起きていると考えられる。(4-144)は、B3/○[○/に合流(中和)したと考えられる C 系列の Y3 と V3 の語例である。いずれも元は C3/○[○○/であったと考えられる。

(4-144)

情け	Y3	C 系列	nasa[kī	nasa[kī:nu	nasa[kīka\ra	(浅間・浅 B)
				/ nasa[kīnu		
ふんどし	Y3	C 系列	sjana:[gi	sjana:[gi\ngu	sjana:[gi\kara	(浅間・浅 A)
暦	V3	C 系列	?kujumi[;	?kujumi[nu	?kujumi[ka\ra	(浅間・浅)
命	V3	C 系列	inotsi[;	inotsi:[nu	inotsi[ka\ra	(浅間・浅)

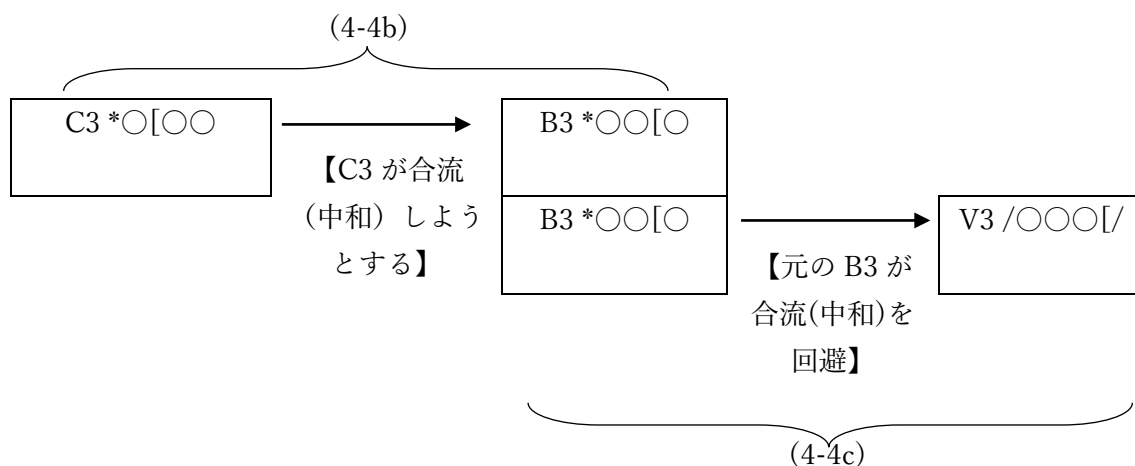
次に、(4-141)の B 系列のうち、二重線で囲んでいる部分について説明する。この二重線で囲んだ部分には(4-4c)の《型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」》が生じていると考えられる。まず、基底 2 モーラの B 系列語について説明する。(4-141a)の B 系列の二重線で囲んでいる部分の語例数を(4-139a)で確認すると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Y2 に集中すると考えられる B 系列の語が、V 型に 51 例見られる。このような語例の分布から B2 が V2 に合流したということが伺える。本節の冒頭で述べたように、浅間方言の B 型は V 型に直接変化したのではなく、現在の徳之島諸方言の口群で見られる W 型を経て V 型になったと考えられる。W 型が V 型になる理由に関しては後で述べることにし、まず B 型が W 型になる変化から説明する。浅間方言では(4-4a)もしくは、(4-4b)の変化により C2 が B2 に合流しようとする時、元の B2 は C2 との合流を回避し、1 モーラ分、核が後退したと考えられる (4-4c)。その結果、C2/*[○○/(基底形)が B2(Y2)/○[○/になり、元々の B2/*○[○/は W2/○○[/になるといふ、玉突き式の変化が起こる(4-145(=4-11))。

(4-145(=4-11))



続いて、基底 3 モーラの B 系列語について説明する。(4-141b)の B 系列の二重線で囲んでいる部分の語例数を(4-139b)で確認すると、徳之島祖語から変化がなかった場合には Y3 に集中すると考えられる B 系列の語が、V 型に 21 例見られる。このような語例の分布から B3 が V3 に変化したということが伺える。浅間では(4-4b)の変化により C3 が B3 に合流しようとする時、B3 が C3 との合流を回避し、1 モーラ分、核が後退したと考えられる (4c)。その結果、C3/*○[○○/が B3(Y3)/○○[○/になり、元々の B3/*○○[○/は V2/○○○[/になるという、玉突き式の変化が起こる(4-146(=4-16))。

(4-146(=4-16))



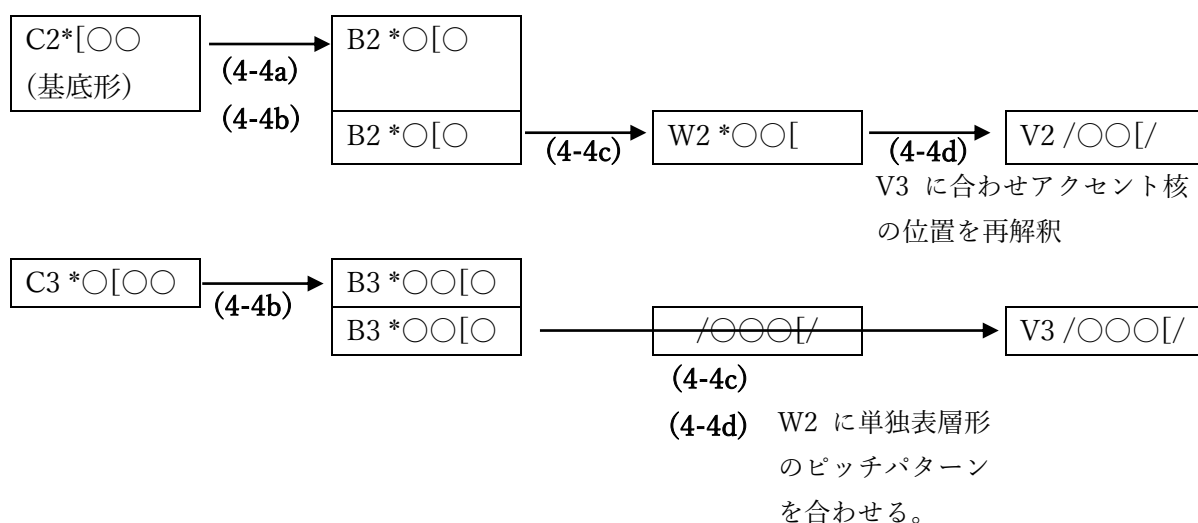
先に見た B2/*○[○/が W2/○○[/ (表層単独形は/○○[/)になる「核の後退」は多くの徳之島諸方言で見られる変化である一方、B3/*○○[○/が V3/○○○[/ (表層単独形は/○○○[/)になる「核の後退」は、浅間方言のみで見られる変化である。これには徳之島諸方言における/○[○/と/*○○[○/というピッチパターンの音声的な現れ方の差に関係

していると考えられる。4.2.3.2 節で述べたように、本稿では、W2 のピッチパターン(○○[;])が、B2 が W2 になる際に何の前提もなしにいきなり生じたものではなく、現在の手々や瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、伊仙方言などの Y2 で観察される、アクセント核(昇り核)の位置でピッチが上昇する際に、通常の 1 モーラ分の長さより音価が長くなるという音声的な揺れ(○○[○ ~ ○[○/])がその土台となり生じたと考える。つまり、他の型から B2 への中和が起きそうになった時に、そもそもは音声的な揺れに過ぎなかった/○○[○/と/○○[○/が、/○○[○/は B2(共時的には Y2)に、/○○[○/は W2(○○[;])に再解釈されることで、現在の徳之島諸方言における Y2 と W2 という別々のアクセント型として確立したと考えられる。一方、現在の徳之島諸方言の Y3 では、Y2 で見られるような音声的な揺れ(×○○[○ ~ ×○○[○/])が観察されない。これは B2(Y2)と異なり、他の型から B3(Y3)への中和が起きそうになったとしても/○○○○[;という新たなアクセント型を確立(実現)させるための音声的な土台が存在しなかったことを示唆する。そのため多くの方言においては、他の型から B3(Y3)への中和が起きるような場面では、型の合流(中和)を回避するための「核の後退」が起きず、合流が完了すると考えられる。

しかし、浅間方言では/○○○○[; (B3(Y3)) が/○○○○[;(V3)になる「核の後退」が現実には生じている。これは、(4-4d)の《同じアクセント型に所属する語彙が持つピッチパターンを同じようにしようとする「同調的な変化」》が関係していると考えられる。/○○○○[; (B3(Y3)) が/○○○○[;(V3)になる変化には、B2/○○[○/が W2/○○[;になる変化に同調して、語の単独表層形のピッチパターンを同じにしたいという動機があったと考えられる。B2 の語の単独表層形のピッチパターンが、2 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 3 モーラにしつつ、前から数えて 3 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するといったピッチパターン(W2/○○[;;)になったのだが、この音韻解釈は別にして極めて表面的に見れば語末音節内で上昇が起きるピッチパターンである。B3 の単独表層形でも B2 と同じような語末音節内で上昇が起きるピッチパターンを実現させるために、C3 が B3 に中和しようとしたときに 3 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 4 モーラにしつつ、前から数えて 4 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇するといったピッチパターン(/○○○○[;;)になったということではないか。

表層単独形の表面的なピッチパターンを一致させた W2/○○[;と/○○○○[;はもともと同じアクセント型であるから、これらのアクセント型の解釈を一致させようとする V 型(“+4”)という解釈になる。このように浅間方言では、同じアクセント型に所属する語彙のピッチパターンの類似性を維持(=同調)しようとする(4-4d)の「同調的な変化」が優先された結果、Y2 で見られるような音声的な揺れ(○○[○ ~ ×○○[○/])がないにもかかわらず、/○○○○[;という新たなアクセント型(浅間の基底 3 モーラ語における V 型)が生じたと考えられる。浅間方言で B 型(“-1”)から V 型(“+4”)になる過程をまとめたものが(4-147)である。

(4-147)



最後に、B 型(“-1”)が V 型(“+4”)になる過程でドメインが「語」から「文節」に変わる通時的変遷過程について説明する。浅間方言で B 系列語のドメインが「語」が「文節」に変わった時期は、B 系列の基底 2 モーラ語が/○○[:/のピッチパターンを持つようになり、基底 3 モーラ語が/○○○[:/のピッチパターンを持つようになった時点であると考えられる。このような、アクセントドメインの変化には、「特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向」が深く関係していると考えられるので以下で詳しく説明する。

基底 2 モーラ語におけるアクセントドメインの変化から説明していく。(4-148)に B2 から W2 を経て V2 になる通時的変遷と、それに伴う、アクセントドメインの「語」から「文節」への変化過程を、B 系列の基底 2 モーラ語である「島」を意味する語を例にして示す。各段階において、浅間方言で観察される V2 の語例を太字にして一緒に示す。

(4-148)

	B2/*○[○/ →	W2 /○○[/	V2 /○○[/
表層単独	*○[○ →	×○○[; →	○○/;[sīma/;[(浅 A,B,C)
1 モーラ 助詞付き	*○[○△ →	×○○[;△ → ×○○[;△ → ×○○[△ →	○○/△[sīma:/nu[(浅 A,B) sima/nu[(浅 C)
2 モーラ 助詞付き	*○[○△△ →	×○○[;△△ → ×○○[;△△ → ×○○[△△ →	○○△△[sīma:ra[(浅 A,B) simaka[ra (浅 C)
ドメイン	「語」	「語」	「文節」

まず、B2 から W2 になる時に生じたと考えられるアクセントドメインの「語」から「文節」への変化過程から見ていくことにする。B2 から(4-4c)の「核の後退」によって生じた W2 の表層単独形は/×○○[;/[のようなピッチパターンを持つ。表層単独形の/×○○[;/[にそのまま、1 モーラ助詞が付く場合のピッチパターンは/×○○[;△/[である。この時点ではまだアクセントのドメインは「語」のままである。ここから、上記で説明した特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HH もしくは LL)にするという音声的傾向により、/×○○[;△/[の特殊モーラを含む音節(下線部)が LL になり、/×○○[;△/[になる。語末の/;/は、/;/前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになる(×○○[;△△)。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/は現れても、現れなくてもよい。このような過程を踏み、W2 の 1 モーラ助詞付きのピッチパターンは/×○○[△/[~×○○[△/[になる。/×○○[;△/[にそのまま、2 モーラ助詞が付く場合のピッチパターンは/×○○[;△△/[である。1 モーラ助詞付きの場合と同じく、この時点ではまだアクセントのドメインは「語」のままである。ここから、上記で説明した音声的傾向により、/×○○[;△△/[の特殊モーラを含む音節(下線部)が LL になり、×/○○[;△△/[になる。語末の/;/は、/;/前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになる(×○○[;△△)。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/は現れても、現れなくてもよい。このような過程を踏み、W2 の 2 モーラ助詞付きのピッチパターンは/×○○[△△/[になる。以上のような変化を経て、W2 の助詞付きにおけるピッチ上昇の位置は助詞にずれ込むことになり、アクセントのドメインは「語」から「文節」へと変化すると考えられる。

他の徳之島諸方言と異なり、浅間方言ではこの状態から(4-4d)の「同調的变化」により W 型(“+3”)が V 型(“+4”)に再解釈される。W2 の表層単独形の場合、アクセントの実現に必要なモーラ数を補うために、2 モーラ目の母音を伸ばして、語の長さを 3 モーラにしつつ、前から数えて 3 モーラ目(長母音の後半)の前からピッチが上昇する(○○[;])。V2 になった時もアクセントの実現に必要なモーラ数が足りないのは W2 の時と同じである。V2 になったとしても、これ以上モーラ数を増やす方法がないので(2 モーラ分を伸ばして超重音節を作るとは忌避される)、W2 の時のピッチパターンをそのまま受け継ぐ(○○Λ[;])。W2 の 1 モーラ助詞付きの場合、「文節」の長さは 3 モーラであるので、前から数えて 3 番目のモーラである助詞の前でピッチが上昇するという解釈となる。しかし、(4-4d)の「同調的变化」により W 型(“+3”)が V 型(“+4”)になった時、V2 の 1 モーラ助詞付きではアクセントの実現に必要なモーラ数が足りなくなる。しかしながら、これ以上モーラ数を増やす方法がないので(助詞を 2 モーラにする変化は生じない)、W2 の時のピッチパターンをそのまま受け継ぐ(○○ΛΔ[;])。結果として、V2 に変化しても、表層単独形と 1 モーラ助詞付きのピッチパターンは W2 の時と同じになる。一方、2 モーラ助詞付きの場合では W 型(“+3”)が V 型(“+4”)になる変化に伴い、ピッチパターンが変化したと考えられる。W2 の 2 モーラ助詞付きの場合、「文節」の長さは 3 モーラであるので、前から数えて 3 番目のモーラである助詞の前でピッチが上昇する(○○[ΔΔ])。 (4-4d)の「同調的变化」により W 型(“+3”)が V 型(“+4”)になっても、アクセントの実現に必要なモーラ数が足りているので、V2 の 2 モーラ助詞付きの場合は前から数えて 4 番目のモーラである文節末モーラの前でピッチが上昇する(○○Δ[Δ])⁷⁶。

今度は、基底 3 モーラ語におけるアクセントドメインの変化について説明する。(4-149)に B3 から V3 になる通時的変遷と、それに伴うアクセントドメインの「語」から「文節」への変化過程を、B 系列の基底 3 モーラ語である「暦」を意味する語を例にして示す。各段階において、浅間方言で観察される V3 の語例を太字にして一緒に示す。

⁷⁶ 浅間方言で観察される V2 の実際ピッチパターンは、表層単独は/○○Λ[;]/、1 モーラ助詞付きは/○○ΛΔ[;]/、2 モーラ助詞付きは/○○Δ[Δ]/になる。本文で述べたように、徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/:/は現れても、現れなくてもよい。

(4-149)

	B3 /*○○[○/ →	V3 /○○○[/	
表層単独	*○○[○ →	○○○[; ----->	○○○[; ʔkujumi[; (浅 A,B,C)
1 モーラ 助詞付き	*○○[○△ →	×○○○[;△ → ×○○○[;△ →	○○○[△ → ○○○[△ ʔkujumi:[nu (浅 C) ʔkujumi[nu (浅 A,B)
2 モーラ 助詞付き	*○○[○△△ →	×○○○[;△△ → ×○○○[;△△ →	○○○[△△ → ○○○[△△ ʔkujumi[kaʎ:ra (浅 C) ʔkujumi[kaʎra (浅 A,B)
ドメイン	「語」	「語」	「文節」

B3 から(4-4c)の「核の後退」の結果として生じた V3 の、表層単独形は/○○○[;/のようなピッチパターンを持つ。次に、1 モーラ助詞付きのピッチパターンの変化について述べる。/○○○[;/にそのまま、1 モーラ助詞が付く場合のピッチパターンは/○○○[;△/である。この時点ではまだアクセントのドメインは「語」のままである。ここから、上記で説明した音声的傾向により、/○○○[;△/の特殊モーラを含む音節(下線部)が LL になり、×/○○○[;△/になる。語末の/;/は、/;/前でピッチが上昇しなくなったことによって/;/に認識されるようになる(○○○[;△)。徳之島諸方言において/;/はフリーバリエーションで現れるものであり、/;/は現れても、現れなくてもよい。以上の過程を踏み、現在の浅間方言で観察されるような、/○○○[;△/~○○○[△/というピッチパターンになる。2 モーラ助詞付きの場合も、1 モーラ助詞付きの場合と同じ過程を経て、現在の浅間方言で観察されるような、/○○○[;△△/~○○○[△△/というピッチパターンになると考えられる。以上のような変化を経て、V3 の助詞付きにおけるピッチ上昇の位置は助詞にずれ込むことになり、アクセントのドメインは「語」から「文節」へと変化したと考えられる。表層単独形のドメインの解釈もそれに合わせて「文節」に変化することになる。

4.4 通時的分析のまとめ

本章では、徳之島の 19 地点の名詞アクセント体系が、徳之島祖語の体系からどのような変遷過程を経て現在に至ったかに関して論じた。本節では、そのまとめとして、各方言においてどのような変化が起こったと考えられるかを、簡単に表で示すことにする。まず、(4-4)で述べた、通時的に徳之島諸方言に起こったと考えられる変化について今一度確認する(4-150)。

(4-150=(4-4)) 通時的に徳之島諸方言に起こったと考えられる変化

- a. C2 が A2 もしくは B2 に、B1 が A1 に合流するという「型の合流(中和)」

- b. A型とC型における「山の後退」(※付随的に「核の後退」をも引き起こす)
- c. 型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」
- d. 同じアクセント型に所属する語彙が持つピッチパターンを同じようにしようとする「同調的な変化」

(4-150=(4-4))の4つの変化のうち、どれが起きたと考えられるかを方言ごとにまとめた表が(4-151)である。各方言に起こったと考えられる変化は✓で示す。表中の「共時的分類」とは、各方言の名詞アクセント体系が共時的にどの群に属するかを示したものである。また、表の外側に()で示したものは、該当する方言が本稿の何節で記述されているかを示している。

(4-151)

	4-4a 型の合流	4-4b 山の後退	4-4c 核の後退	4-4d 同調変化	共時的 分類	
兼久	✓				イ1群	(4.3.1 節)
瀬滝	✓				イ1群	(4.3.1 節)
西阿木名	✓				イ1群	(4.3.1 節)
亀津	✓		✓		イ1群	(4.3.2 節)
山	✓		✓		イ1群	(4.3.3 節)
金見	✓	✓			イ1群	(4.3.4 節)
手々	✓	✓	✓		イ1群	(4.3.5 節)
轟木	✓	✓	✓		イ1群	(4.3.6 節)
阿権	✓	✓(C型のみ)			イ1群	(4.3.7 節)
面縄	✓	✓(C型のみ)	✓		イ1群	(4.3.8 節)
井之川	✓	✓	✓		イ3群	(4.3.9 節)
母間	✓		✓		イ3群	(4.3.10 節)
伊仙	✓	✓(C型のみ)	✓		イ2群	(4.3.11 節)
犬田布(當原)	✓	✓(C型のみ)	✓		ロ4群	(4.3.11 節)
与名間	✓	✓	✓		ロ1群	(4.3.12 節)
花徳	✓	✓	✓	✓?(A1)	ロ2群	(4.3.13 節)
松原	✓	✓	✓		ロ3群	(4.3.14 節)
岡前	✓	✓	✓		ロ3群	(4.3.14 節)
浅間	✓	✓(C型のみ)	✓	✓	ハ群	(4.3.15 節)

(4-151)を見ると、すべての徳之島諸方言で(4-4a)の変化が生じていることが分かる。ま

た、(4-4a)はすべての徳之島諸方言において一番最初に起こった変化⁷⁷であったと推測される。(4-4b)の「山の後退」は、阿権、面縄、伊仙、犬田布(當原)、浅間方言では C 型のように生じたと考えられる。また、金見、手々、轟木、井之川方言では、C 型より A 型で、「山の後退」が著しい。(4-4c)は多くの徳之島諸方言において生じたと考えられる。(4-4c)による「核の後退」は大きく A2/*[○○/が B2(Y2)/○[○/に変化するパターンと B2/*○[○/が W2/○○[/に変化するパターンの二つで現れる。ただし、花徳方言と浅間方言は他よりも少々複雑な変化を遂げていると考えられるので、注意が必要である。(4-4d)は浅間方言で著しいと考えられる変化である。同じく花徳方言の A 系列語の基底 1 モーラ語の変化にも関わっている可能性があるので表では✓の後に?を付けて記しておくことにする。

本章の冒頭で述べたように、徳之島諸方言のアクセント体系は基本的には各方言が、共通する祖方言(徳之島祖語)から、各方言内で自律的变化を積み重ねて個々に変遷を遂げた結果、現在のアクセント体系に至ったと考えられる。上記の表で同じような変化が起き、共時的に同じ群に分類される方言も(例えば、山方言と亀津方言)地理的に距離があるため、移住の歴史が記録されているなどしない限りは、徳之島祖語から現在の諸方言に至る間に新たな共通祖語を設定するのは難しい。つまり、徳之島では全体的に集落間での交流があまりなく、各方言が独立して変化していったことになる。実際、徳之島で本格的に県道が整備された時期が昭和に入ってからであることを考えると、納得もいく。また、金見の話者(金 B)から筆者が聞き取ったところでは、県道が整備されるまでは隣の山集落に行くためにも海岸線を歩いて移動するしかなく、1 年に 1 回行くかどうかであったとのことである。これなどは、集落間で活発に人の交流が始まったのはこの 100 年くらいの話であったろうと推測する根拠となる証言である。

ただし、母間方言と犬田布(當原)方言は言語接触を経験していて、それがアクセントにも反映されているのではないかという疑いが残る。母間の話者によると、母間は昔から人の出入りが激しかったとのことであった。また、犬田布の當原集落は伊仙集落からの移住であるので、移住した人々の方言(伊仙・犬田布(當原)祖語)と元々その地に住んでいた、犬田布の犬田布集落の方言(犬田布(犬田布)祖語)との言語接触が疑われる。母間方言と犬田布(當原)方言のアクセントの通時的変遷を見ると、特に B 系列の語例が本稿の分析では説明できない分布を見せることから、言語接触によるある意味イレギュラーな変化があったのではないかと推測している。しかし、母間についてはどことの言語接触か特定できず、犬田布(當原)については本稿の調査では犬田布の犬田布集落の調査を行っていないため確認ができない。これに関しては、今後の課題としたい。

⁷⁷ これは厳密には祖語で起こったというよりも、祖語を話す人々が各集落に分かれた後にそれぞれの方言で起きた変化を想定している。

第5章 結論

5.1 各章のまとめ

本稿では、まず第2章で徳之島諸方言の共時的なアクセント体系に関する先行研究を検討し、徳之島諸方言に散見される“母音の伸び”と“ピッチ下降”が各先行研究においてどのように扱われてきたかを確認した。また、通時論を扱った先行研究の中で本稿に関係しているものをいくつか取り上げた。具体的には、まず、本稿の調査で使用している松森(2012)の「系列別語彙」が提案された背景を振り返った。次に、C系列2音節名詞(本稿でいうZ2)に現れる“母音の伸び”に関する先行研究を、松森(2017)を中心にまとめた。最後に、本稿の第4章で推定する徳之島祖語の以前の段階にある北琉球祖語が、先行研究ではどのように再建されているかを確認した。

第3章では、本稿の調査に基づき、徳之島諸方言で観察される“母音の伸び”には3種類の異なる性質を持つ“母音の伸び”が存在することを述べた。具体的に言うと、徳之島諸方言に見られる“母音の伸び”は、基底から辞書的に存在する母音の伸び/R/、表層で単純な音声現象として生じる母音の伸び/;/、基底にあるアクセント情報に関して表層に生じたと考えられる母音の伸び/;/に分類することができ(3-5のa-c)、この3種類の母音の伸びを一括して同等に扱うことはできない性質のものであるとした。

母音の伸びを3種類に分類できたことから、フリーバリエーションで現れる(3-5b)の/;/をアクセントの計算から排除した上で、これまで調査がなされていない方言も含めた19方言の名詞アクセント体系の記述・分析を行った。その結果、調査した19方言の名詞アクセントは「モーラを数えの単位とする、昇り核を持つ3型、もしくは4型アクセント」の体系を持つことが明らかになった。また、徳之島諸方言の名詞アクセントを、大きくイ群、ロ群、ハ群に分類し、イ群はX型(“0”)、Y型(“-1”)、Z型(“-2”)の3型アクセント体系を持ち、ロ群はX型(“0”)、Y型(“-1”)、W型(+3)、Z型(“-2”)、ハ群の浅間方言はX型(“0”)、V型(+4)、Y型(“-1”)を持つとした。

基底にあるアクセント情報に関して表層に生じたと考えられる母音の伸び/;/については、まず、轟木方言の複合語の例から、Z2/[○A;○/の2モーラ目に出現する母音の伸びがX2/[○○/との中和を避けるために生じていることを示した。また、Y1/[○A;/の母音の伸び/;/に関してもX1/[○/との中和を避けるために生じたものであると述べた。

第4章では、まず共通する祖方言(徳之島祖語)のアクセント体系を立て、祖体系から各方言のアクセント体系に至る成立過程を描いた。各方言のアクセント体系の成立過程を見ると、基本的には各方言が、共通する祖方言(徳之島祖語)から、各方言内で自律的变化を積み重ねて個々に変遷を遂げた結果、現在のアクセント体系に至ったと考えられる。しかし、徳之島諸方言に起きたと考えられる変化は、C2がA2もしくはB2に、B1がA1に合流するという「型の合流(中和)」、A型とC型における「山の後退」、型の合流(中和)を回避するた

めに引き起こされたと考えられる「核の後退」、同じアクセント型に所属する語彙が持つピッチパターンを同じようにしようとする「同調的な変化」の4つ(4-4のa-d)にまとめられる。徳之島諸方言のアクセント体系や、その成立過程は方言によって多種多様な様相を見せるが、これはすべて一般性の高い4つの変化の組み合わせにより説明することができるということである。

そして、このような通時的変化が起きる土台として、共時的に徳之島諸方言で見られる二つの音声的傾向があることについても述べた。まず、徳之島諸方言において広く観察される、特殊モーラを含む音節の音節内上昇を避け、音節全体を同じ高さ(HHもしくはLL)にするという現象(音声的傾向)は、C2がA2もしくはB2に、B1がA1に合流するという「型の合流(中和)」(4-4a)を引き起こす直接的な原因になったと考えられる。また、手々や瀬滝、西阿木名、阿権、面縄、伊仙などのY2で観察される、アクセント核(昇り核)でピッチが上昇する際に、通常の1モーラ分の長さより音価が長くなる音声的な現象は、型の合流(中和)を回避するために引き起こされたと考えられる「核の後退」(4-4c)と関係しており、B2/*○[○/がW2/○○[:/になる音声的土台になったと考える。

また、このような通時的変遷過程でアクセントのドメインが「語」から「文節」に変わる現象について説明した。

5.2 残された課題

最後に、本稿の調査・分析が及ばなかった点を残された課題として挙げておくことにする。

まずは、第3章で述べた3種類の“母音の伸び”のうち、(3-5b)の表層で単純な音声現象として生じる母音の伸び/:/の出現パターンに関する問題である。これに関しては、(3-8)でピッチ変動に伴い現れるパターンと、ピッチ変動が無い場合の語末に/:/が現れるパターンが見られると簡略に説明しているが、まだ精密に出現位置を予測できるまでには至っておらず、個々の長母音について一つ一つ確認する必要がある。しかし、これに関して徳之島諸方言の中で唯一、金見方言のみ母音の伸びの出現位置予測に関して重要な手がかりを得ている。筆者が合同発表した小川・金(2019)の内容がそれである。この発表では、金見方言で人に名前で呼びかける場合に、(呼びかけ)イントネーションに伴って語(名前)の基底には存在しない音声的な伸び(長母音)が生じること、その位置は(3-8)の出現位置と共通しており、かつ、その音声的な伸びが生じる場所を語のアクセント(あるいはピッチパターン)から一般化できることを明らかにした。このような研究を他の方言でも行うことで、徳之島諸方言における/:/の出現傾向をより明確に予測できるようになると考える。

次に、言語接触が疑われる地域の調査である。第4章で、母間方言と犬田布(當原)方言のB系列語の語例について本稿の分析では説明できない部分があり、言語接触によるある意味イレギュラーな変化があったのではないかと推測している。このうち、母間に関してはどの方言と言語接触を起こしているか特定するのは難しいだろうが、犬田布(當原)方言の場合はおそらく、もともとの犬田布集落の方言である。犬田布(當原)方言との言語接触があった

と推測される犬田布(犬田布)方言のアクセントを調べることによって、犬田布(當原)方言がどのような影響を受けたか、または本稿では説明できなかった他の要因(例えば、B 系列語における語頭隆起)により、独自に変化したものかが明確になると思う。

最後に、複合語アクセントの調査である。本稿では、轟木方言と浅間方言の複合語アクセント規則を提示しており、この二つの方言で「高起 / 低起の式保存」が見られることを述べた。しかし、轟木方言と浅間方言の複合語アクセント規則の内容は、特に前部要素が低起式である場合に大きな差がある。他の徳之島諸方言においてどのような規則があるか興味深い部分である。また、外来語アクセントに関しては浅間方言、松原方言でしか調査されたものがないようなので、他の方言での調査が求められる。もちろん、名詞に限らず、動詞と形容詞のアクセントについても今後、総合的な記述が求められることは論を俟たない。

参考文献

- 橋尾直和(1988)「奄美徳之島山方言のアクセント—名詞アクセントを中心に—」『琉球の方言』13: 62-71 法政大学沖縄文化研究所.
- 服部四郎(1932)「『琉球語』と『国語』との音韻法則」『方言』2-7,8,10,12. 【服部四郎 1959『日本語の系統』296-361. 東京: 岩波書店. に再掲】
- 服部四郎(1958)「奄美群島の諸方言について—沖縄, 先島諸方言との比較—」『人類科学』XI. 【服部四郎 1959『日本語の系統』275-294. 東京: 岩波書店. に再掲】
- 服部四郎(1959)『日本語の系統』東京: 岩波書店.
- 服部四郎(1979)「日本祖語について・22(最終回)」『月刊言語』8-12: 100-114. 東京: 大修館書店.
- 早田輝洋(1995)「徳之島天城町松原と浅間の方言の名詞アクセント体系—単語声調方言の例として—」『琉球の方言』18・19 合併: 132-144. 法政大学沖縄文化研究所.
- 早田輝洋(1977)「生成アクセント論」大野晋・柴田武(編)『岩波講座日本語 5 音韻』323-360. 東京: 岩波書店.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智(1966)『琉球方言の総合的研究』東京: 明治書院.
- 上村孝二(1959)「奄美方言のアクセント—沖永良部島・徳之島の部—」『鹿児島大学文科報告』8: 1-17. 鹿児島大学文理学部.
- 金アリン(2015)「徳之島浅間方言の名詞アクセント」国立国語研究所 共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」研究発表会配布資料 於: 名古屋大学 2015 年 11 月.
- 金アリン(2017)「徳之島轟木方言の名詞アクセントと C 系列 2 音節名詞の長母音」第 271 回筑紫日本語研究会 於: 九州大学九重共同研修所 2017 年 7 月.
- 金田一春彦(1954)「東西両アクセントのちがいが出来るまで」『文学』22-8: 63-84. 【金田一 1975『日本の方言: アクセントの変遷とその実相』49-81. 東京: 教育出版. に「東西両アクセントの違いができるまで」として再掲】
- 金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究 原理と方法』東京: 塙書房.
- 金田一春彦(1977)「アクセントの分布と変遷」『岩波講座日本語 11 方言』東京: 岩波書店. 【金田一 2005『金田一春彦著作集 第八巻』536-585. 東京: 玉川大学出版部. に再掲】
- 窪蘭晴夫(1998)『語形成と音節構造』東京: くろしお出版.
- ローレンス・ウェイン・岡村隆博(2008)「徳之島浅間方言の俚言名詞アクセント資料」『琉球の方言』33: 173-180. 法政大学沖縄文化研究所.
- ローレンス・ウェイン(2009)「北琉球祖語の名詞音調—試論」『沖縄文化』43-2: 102-86. 沖縄文化協会.
- ローレンス・ウェイン(2015)「徳之島浅間方言の名詞音調について二題: 高起音調と指小語形の音調」『琉球の方言』40: 1-17. 法政大学沖縄文化研究所.

- ローレンス・ウェイン(2020)「徳之島浅間方言における(者・物)名詞の音調」『琉球の方言』44: 173-187. 法政大学沖縄文化研究所.
- Lawrence, W. P.(2016) Historical reanalysis in the Nakijin dialect noun accentuation system. *Cahiers de linguistique asie orientale: East Asian Languages and Linguistics*. 45-1: 1-25.
- 松森晶子(1996)「琉球における2音節語第4・5類の語頭長音節をめぐる諸問題—北琉球祖語のアクセント再建に向けて—」『平山輝男博士米寿記念論集—日本語研究諸領域の視点—』1130-1147. 東京: 明治書院.
- 松森晶子(1998)「琉球アクセントの歴史的形成過程—類別語彙2拍語の特異な合流の仕方を手がかりに—」『言語研究』114: 85-114. 日本語学会.
- 松森晶子(2000a)「琉球の多型アクセント体系についての一考察—琉球祖語における類別語彙3拍語の合流の仕方—」『国語学』51-1: 93-108. 国語学会.
- 松森晶子(2000b)「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から—」『音声研究』4-1: 61-71. 日本音声学会.
- 松森晶子(2009)「沖縄本島金武方言の体言アクセント型とその系列—『琉球調査用系列別語彙』の開発に向けて—」『日本女子大学紀要 文学部』58: 97-122. 日本女子大学文学部.
- 松森晶子(2010)「多良間島の3型アクセントと『系列別語彙』」上野善道(監修)『日本語研究の12章』490-503. 東京: 明治書院.
- 松森晶子(2012)「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」『音声研究』16: 30-40. 日本音声学会.
- 松森晶子(2017)「北琉球におけるC系列2音節名詞の語頭音節の長音化—その原因について考える—」『日本語の研究』13-1: 1-17. 日本語学会.
- 小川晋史・金アリン (2019)「徳之島金見(かなみ)方言のイントネーションと名前呼びかけ時に生じる長母音について」『対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法』研究発表会 於: 国立国語研究所 2019年5月.
- ペラール・トマ(2013)「日本列島の言語の多様性」田窪行則(編)『琉球列島の言語と文化: その記録と継承』81-92. 東京: くろしお出版.
- 崎村弘文(1981)「徳之島の方言(1)—伊仙町目手久方言の実態」『鹿児島大学文科報告』17-1: 1-19. 鹿児島大学教養部.
- 崎村弘文(1982)「徳之島の方言(2)—天城町松原方言の実態」『鹿児島大学文科報告』18-1: 1-26. 鹿児島大学教養部.
- 崎村弘文(1983)「徳之島の方言(3)—徳之島町亀徳方言の実態」『鹿児島大学文科報告』19-1: 1-17. 鹿児島大学教養部.
- 崎村弘文(2001)「徳之島松原方言の音調体系・再考—早田氏・上野氏の御批判に対して—」迫野虔徳(編)『筑紫語学論叢』1-10. 東京: 風間書房.
- 柴田武(1960)「徳之島の音調」『国語学』41: 14-27. 国語学会.
- 上野善道(1977)「徳之島浅間方言のアクセント(1)」『小松代融—教授退職・嶋稔教授退官

- 記念国語学論集』220-188. 岩手国語学会記念論集刊行会.
- 上野善道(1997)「徳之島松原方言のアクセント調査報告― 体言の部―」『言語と人間』創刊号：37-62. 言語人文学会.
- 上野善道(2000)「徳之島浅間方言の活用形アクセント資料」『琉球の方言』25：1-61. 法政大学沖縄文化研究所.
- 上野善道(2003)「徳之島浅間方言の複合動詞のアクセント」『琉球の方言』28：1-42. 法政大学沖縄文化研究所.
- 上野善道(2014)「徳之島浅間方言のアクセント資料 (1)」『国立国語研究所論集』8：141-175. 国立国語研究所.
- 上野善道(2015)「徳之島浅間方言のアクセント資料 (2)」『国立国語研究所論集』9：177-205. 国立国語研究所.
- 上野善道(2016)「徳之島浅間方言の名詞アクセント体系」田窪行則・ジョン ホイットマン・平子達也(編)『琉球諸語と古代日本語 日琉祖語の再建に向けて』209-234. 東京：くろしお出版.
- 上野善道(2017a)「徳之島浅間方言のアクセント資料 (3)」『国立国語研究所論集』12：139-161. 国立国語研究所.
- 上野善道(2017b)「徳之島浅間方言のアクセント資料 (4)」『国立国語研究所論集』13：209-242. 国立国語研究所.
- 上野善道(2017c)「徳之島浅間方言のアクセント資料 (5)」『国立国語研究所論集』14：293-322. 国立国語研究所.
- 上野善道(2018a)「徳之島浅間方言のアクセント資料 (6)」『琉球の方言』42：137-172. 法政大学沖縄文化研究所.
- 上野善道(2018b)「徳之島浅間方言のアクセント資料 (7)」『国立国語研究所論集』16：129-156. 国立国語研究所.
- Uwano, Zendo (2012) 'Three types of accent kernels in Japanese'. *Lingua*.122: 1415-1440.

謝辞

本稿を執筆するにあたり、多くの方々にご指導ご協力を賜りました。まず、方言調査に協力してくださった徳之島の話者の皆さま、そして徳之島の協力者の皆さま、個人情報であるため一人一人の名前を挙げることはできませんが、この場を借りて深く御礼申し上げます。また、高山倫明先生、青木博史先生、そして小川晋史先生からは多大なご指導を賜り、感謝の念に堪えません。ありがとうございました。最後に、長年にわたって経済的・精神的に支えとなってくれた家族に、特に執筆期間中に寂しい思いをさせてしまった娘に、心から感謝します。

徳之島諸方言の
名詞アクセントの記述的研究

金アリン

資料編

目次

目次	app. i
1. 提示項目.....	app.1
2. 使用記号.....	app.2
Appendix 1 音節表.....	app.3
Appendix 2 手々方言の名詞アクセント資料.....	app.7
Appendix 3 金見方言の名詞アクセント資料.....	app.13
Appendix 4 山方言の名詞アクセント資料.....	app.19
Appendix 5 轟木方言の名詞アクセント資料.....	app.24
Appendix 6 兼久方言の名詞アクセント資料.....	app.30
Appendix 7 瀬滝方言の名詞アクセント資料.....	app.36
Appendix 8 西阿木名方言の名詞アクセント資料.....	app.42
Appendix 9 阿権方言の名詞アクセント資料.....	app.48
Appendix 10 面縄方言の名詞アクセント資料.....	app.54
Appendix 11 亀津方言の名詞アクセント資料.....	app.60
Appendix 12 伊仙方言の名詞アクセント資料.....	app.66
Appendix 13 母間方言の名詞アクセント資料.....	app.72
Appendix 14 井之川方言の名詞アクセント資料.....	app.77
Appendix 15 与名間方言の名詞アクセント資料.....	app.83
Appendix 16 花徳方言の名詞アクセント資料.....	app.89
Appendix 17 松原方言の名詞アクセント資料.....	app.95
Appendix 18 岡前方言の名詞アクセント資料.....	app.101
Appendix 19 犬田布方言の名詞アクセント資料.....	app.107
Appendix 20 浅間方言の名詞アクセント資料.....	app.113

1. 提示項目

資料編のアクセント資料は、本稿の分析を反映しつつ、なるべく生の音声を復元できるようなデータの提示の仕方になるように努めている。まず、Appendix 1 から説明する。Appendix 1 は徳之島諸方言の音節表であり、本稿で使用している音素表記はすべてこれに従っている。また、Appendix 1 には本稿の例では出てきてないものの、徳之島に存在する(または、体系的に存在すると考えられる)音節も含まれている。

Appendix 2~20 は、各方言の名詞アクセント資料である。このデータは 2013 年 9 月から 2019 年 3 月までの著者自身の調査によって得られたもので、松森(2012)に収録されている「系列別語彙」約 250 語と関連語彙、および、それらに助詞を付けた時のアクセントである。Appendix 2~20 での各項目は以下のような順に並んでいる。

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列	語単独	1 モーラ 助詞付き	2 モーラ 助詞付き	3 モーラ 以上の 助詞付き	メモ
------	--------------	---	-----	----	-----	---------------	---------------	----------------------	----

まず、「ser.」は、各語例のシリアルナンバーを意味する。各方言で「ser.」が同じ数字である語は同語源であることを意味する。例えば、「系列別語彙」では髪という意味で記載されている /karadzi/ 形の語は、徳之島諸方言において、髪を指したり、頭を指したりと、方言によって具体的な意味が異なる。こういった場合、各方言で意味が違っていても、これらは同語源の語であるので「ser.」は 5 と、同じ番号が振られている。

「調査項目(意味)」は方言語彙の意味を、「型」は該当する語例の共時的なアクセント型を表す。「モーラ」は該当する語例の基底形が何モーラであるかを、「系列」は、該当する語例が、系列別語彙のどの系列に属するかを示す。その次の列からは方言語彙の単独形、1 モーラ助詞付き、2 モーラ助詞付き、3 モーラ以上の助詞付きの順で語例(アクセント情報含む)を示す。方言によっては 2 モーラ助詞付き、3 モーラ以上の助詞付きを調べていないことがあるので、その場合は、その列は示していない。最後に、「メモ」は複合語など、その語例に対する注記である。

2. 使用記号

以下は Appendix で使用する記号の一覧である。×と-以外の記号は本文中で用いたものと共通である。

使用記号	説明
[	アクセント核(昇り核)。アクセント核が置かれるモーラの直前に付して核の位置を示す。基本的には本記号の位置でピッチが上昇する。
∧	ピッチの上昇を表す。徳之島諸方言では、想定されるアクセント核の位置と実際にピッチが上昇する位置が、何らかの要因によってずれる場合がある。このような場合に、ピッチ上昇が観察される位置を表示するために使用する。
∨	ピッチの下降を表す。
:	徳之島諸方言に観察される長母音の後半部の中で、表層で単純な音声現象として生じるもの。
;	徳之島諸方言に観察される長母音の後半部の中で、基底にあるアクセント情報に関係して表層に生じたと考えられるもの。
^	調査の関係上/:/か/R/かが断定できない場合、:∧のように/:/の後ろにこの記号を付けた形で表示する。
×	×は、「系列別語彙」のリストにはない語例であるため、ser.が付けられない時に使用する。
-	「系列」の列で使用する場合は <u>系列不明</u> を意味する。また、語例の列で使った場合は、該当する語の、その列の項目のデータがないことを示す。
e.g. / e.g.	e.g.は語例を指す。同一語でピッチパターンがフリーバリエーションとして複数現れる場合、観察されたすべての語例を並べて記録する。その際、語例と語例の間に/を入れ区切りとする。

Appendix 1. 音節表

あ	い	う	え	お	いい	ええ
/a/	/i/	/u/	/e/	/o/	/i/	/ë/
[a]	[i]	[u]	[e]	[o]	[i]	[ə]~[ə]
か	き	く	け	こ	きい	けえ
/ka/	/ki/	/ku/	/ke/	/ko/	/kī/	/kē/
[ka]	[ki]	[ku]	[ke]	[ko]	[ki]	[kə]~[kə]
	‘き	‘く		‘こ		
	/ʔki/	/ʔku/		/ʔko/		
	[ʔki]	[ʔku]		[ʔko]		
が	ぎ	ぐ	げ	ご	ぎい	げえ
/ga/	/gi/	/gu/	/ge/	/go/	/gī/	/gē/
[ga]	[gi]	[gu]	[ge]	[go]	[gi]	[gə]~[gə]
さ	し	す	せ	そ	すい	せえ
/sa/	/si/	/su/	/se/	/so/	/sī/	/sē/
[sa]	[ʃi]	[su]	[se]	[so]	[si]	[sə]~[sə]
ざ	じ	ず	ぜ	ぞ	ずい	ぜえ
/za/	/dzi/	/zu/	/ze/	/zo/	/zī/	/zē/
[dza]~[za]	[dʒi]~[ʒi]	[dzu]~[zu]	[dze]~[ze]	[dzo]~[zo]	[dzi]~[zi]	[dzə]~[zə] ~[dzə]~[zə]
た	てい	とう	て	と	てい	てえ
/ta/	/ti/	/tu/	/te/	/to/	/tī/	/tē/
[ta]	[ti]	[tu]	[te]	[to]	[ti]	[tə]~[tə]
つあ		つ		つお	つい	つえ
/tsa/		/tsu/		/tso/	/tsī/	/tsē/
[tsa]		[tsu]		[tso]	[tsi]	[tsə]~[tsə]
‘た	‘てい	‘とう	‘て	‘と	‘てい	‘てえ
/ʔta/	/ʔti/	/ʔtu/	/ʔte/	/ʔto/	/ʔtī/	/ʔtē/
[ʔta]	[ʔti]	[ʔtu]	[ʔte]	[ʔto]	[ʔti]	[ʔtə]~[ʔtə]
だ	でい	どう	で	ど	でい	でえ
/da/	/di/	/du/	/de/	/do/	/dī/	/dē/
[da]	[di]	[du]	[de]	[do]	[di]	[də]~[də]
な	に	ぬ	ね	の	ぬい	ねえ
/na/	/ni/	/nu/	/ne/	/no/	/nī/	/nē/
[na]	[ni]	[nu]	[ne]	[no]	[ni]	[nə]~[nə]
‘な						

/ʔna/						
[ʔna]						
は	ひ	ふ	へ	ほ	ひい	へえ
/ha/	/hi/	/hu/	/he/	/ho/	/hĩ/	/hě/
[ha]	[çi]	[ɸu]	[he]	[ho]	[hi]	[hə]~[hə]
ふあ					ふい	ふえ
/hwa/					/hwĩ/	/hwě/
[ɸa]					[ɸi]	[ɸə]~[ɸə]
ば	び	ぶ	べ	ぼ	ぶい	べえ
/ba/	/bi/	/bu/	/be/	/bo/	/bĩ/	/bě/
[ba]	[bi]	[bu]	[be]	[bo]	[bi]	[bə]~[bə]
ぱ	ぴ	ぷ	ぺ	ぽ	ぷい	ぺえ
/pa/	/pi/	/pu/	/pe/	/po/	/pĩ/	/pě/
[pa]	[pi]	[pu]	[pe]	[po]	[pi]	[pə]~[pə]
ま	み	む	め	も	むい	めえ
/ma/	/mi/	/mu/	/me/	/mo/	/mĩ/	/mě/
[ma]	[mi]	[mu]	[me]	[mo]	[mi]	[mə]~[mə]
‘ま				‘も	‘む	
/ʔma/				/ʔmo/	/ʔmĩ/	
[ʔma]				[ʔmo]	[ʔmi]	
や	い	ゆ	いえ	よ	い	い
/ja/	/ji/	/ju/	/je/	/jo/	/jĩ/	/jě/
[ja]	[ji]	[ju]	[je]	[jo]	[ji]	[jə]~[jə]
‘や	‘い	‘ゆ	‘いえ	‘よ	‘い	‘い
/ʔja/	/ʔji/	/ʔju/	/ʔje/	/ʔjo/	/ʔjĩ/	/ʔjě/
[ʔja]	[ʔji]	[ʔju]	[ʔje]	[ʔjo]	[ʔji]	[ʔjə]~[ʔjə]
ら	り	る	れ	ろ	る	れ
/ra/	/ri/	/ru/	/re/	/ro/	/rĩ/	/rě/
[ra]	[ri]	[ru]	[re]	[ro]	[ri]	[rə]~[rə]
わ		を		う	う	う
/wa/		/wu/		/wo/	/wĩ/	/wě/
[wa]		[wu]		[wo]	[wi]	[wə]~[wə]
‘わ					‘う	‘う
/ʔwa/					/ʔwĩ/	/wě/
[ʔwa]					[ʔwi]	[wə]~[wə]
撥音 (ん)		長音 (ー)		促音 (っ)		
/N/		/R/		/Q/		

きや		きゆ		きよ		
/kja/		/kju/		/kjo/		
[kja]		[kju]		[kjo]		
‘きや		‘きゆ		‘きよ		
/ʔkja/		/ʔkju/		/ʔkjo/		
[ʔkja]		[ʔkju]		[ʔkjo]		
ぎや		ぎゆ		ぎよ		
/gja/		/gju/		/gjo/		
[gja]		[gju]		[gjo]		
くわ	くい		くえ	くお	くい	くえ
/kwa/	/kwi/		/kwe/	/kwo/	/kwĩ/	/kẽ/
[kwa]	[kwi]		[kwe]	[kwo]	[kwi]	[kwə]~[kwə]
‘くわ	‘くい		‘くえ	‘くお	‘くい	‘くえ
/ʔkwa/	/ʔkwi/		/ʔkwe/	/ʔkwo/	/ʔkwĩ/	/ʔkwẽ/
[ʔkwa]	[ʔkwi]		[ʔkwe]	[ʔkwo]	[ʔkwi]	[ʔkwə]~[ʔkwə]
ぐわ	ぐい	ぐう	ぐえ	ぐお	ぐい	ぐえ
/gwa/	/gwi/	/gwu/	/gwe/	/gwo/	/gwĩ/	/gwẽ/
[gwa]	[gwi]	[gwu]	[gwe]	[gwo]	[gwi]	[gwə]~[gwə]
しゃ		しゆ	しえ	しよ	しい	しえ
/sja/		/sju/	/sje/	/sjo/	/sjĩ/	/sjẽ/
[ʃa]		[ʃu]	[ʃe]	[ʃo]	[ʃi]	[ʃə]~[ʃə]
じゃ		じゆ	じえ	じよ	じい	じえ
/dza/		/dzu/	/dze/	/dzo/	/dzĩ/	/dzẽ/
[dʒa]		[dʒu]	[dʒe]	[dʒo]	[dʒi]	[dʒə]~[dʒə]
ちゃ	ち	ちゆ	ちえ	ちよ	ちい	ちえ
/cja/	/cji/	/cju/	/cje/	/cjo/	/cjĩ/	/cjẽ/
[tʃa]	[tʃi]	[tʃu]	[tʃe]	[tʃo]	[tʃi]	[tʃə]~[tʃə]
‘ちゃ	‘ち	‘ちゆ	‘ちえ	‘ちよ	‘ちい	‘ちえ
/ʔcja/	/ʔcji/	/ʔcju/	/ʔcje/	/ʔcjo/	/ʔcjĩ/	/ʔcjẽ/
[ʔtʃa]	[ʔtʃi]	[ʔtʃu]	[ʔtʃe]	[ʔtʃo]	[ʔtʃi]	[ʔtʃə]~[ʔtʃə]
にや		にゆ	にえ	によ	にい	にえ
/nja/		/nju/	/nje/	/njo/	/njĩ/	/njẽ/
[ɲa]		[ɲu]	[ɲe]	[ɲo]	[ɲi]	[ɲə]~[ɲə]
ひや		ひゆ		ひよ		
/hja/		/hju/		/hjo/		
[ça]		[çu]		[ço]		

びゃ		びゅ		びょ		
/bja/		/bju/		/bjo/		
[bja]		[bju]		[bjo]		
ぴゃ		ぴゅ		ぴょ		
/pja/		/pju/		/pjo/		
[pja]		[pju]		[pjo]		
みゃ		みゅ		みょ		
/mja/		/mju/		/mjo/		
[mja]		[mju]		[mjo]		
‘みゃ						
/ʔmja/						
[ʔmja]						
りゃ		りゅ		りょ		
/rja/		/rju/		/rjo/		
[rja]		[rju]		[rjo]		

Appendix 2. 手々方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-kara	メモ
22	血	X	1	A	ʔcji	ʔcji\ɳu / ʔcji:nu	ʔcji:kara	
23	帆	X	1	A	hu / hu:	hu:nu	hu:kara	
28	葉	X	1	A	ha	ha:nu	ha:ka\ra / ha:kara	
37	下	X	1	A	sju:ʌ	sju:ʌnu	sju:ʌkara	
81	蛸	X	1	B	to:	to:\ɳu	to:ka\ra	
95	魚	X	1	A	ʔju	ʔju:nu	ʔju:kara	
99	齒	X	1	B	ha:ʌ	ha:ʌnu	ha:ʌkar\va	
100	木	X	1	B	kī:ʌ	kī:ʌnu	kī:ʌka\ra	
110	人	X	1	A	ʔcju	ʔcju:nu	ʔcju:kara	
141	子	X	1	A	ʔkwa	ʔkwa:nu	ʔkwa:kara	
142	中	X	1	C	na	na\ɳu	na\ɳ:kara	
159	上	X	1	A	ʔwī	ʔwī:nu	ʔwī:kara	
164	手	X	1	B	tī:ʌ	tī:ʌ\ɳu	tī:ʌka\ra	
168	豚	X	1	C	ʔwa	ʔwa\ɳu	ʔwa\ɳ:kara	
221	穂	X	1	B	hu	hu:\ɳu	hu:\ɳkara	
233	前	X	1	C	mē	mē\ɳu	mē\ɳ:kara	
×	ざる	X	1	-	se / se\ɳ:ʌ	se\ɳ:ʌnu	se\ɳ:ʌkara	
1	垢	X	2	-	ha:\kī	ha\kīnu	ha\kīkara	
16	西	X	2	-	ni:\ɳi / ni\ɳi	nisinu	ni:\ɳikara	
19	右	X	2	A	mi\vgi	mi\vginu	mi\vgikara	
30	牙	X	2	A	ʔki:ʌba	ʔki:ʌbanu	ʔki:ʌbakara	
46	柱	X	2	C	ha:\ja	ha\janu	ha\jakara	
51	露	X	2	C	ʔcji\ju	ʔcji\junu	ʔcji\jukara	
54	舟	X	2	C	hu:ʌnī	hu:ʌnīnu	hu:ʌnīkara	
55	針	X	2	C	ha:\i	ha\inu	ha\ikara	
56	骨	X	2	C	hu\ɳī / hu:\ɳī	hu\ɳīnu	hu\ɳīkara	
77	下駄	X	2	-	ge:ʌ\ta	ge:ʌ\tanu	ge:ʌ\takara	
101	水桶・汲み桶	X	2	C	ta\ɳgu / ta\ɳgu	ta\ɳgunu	ta\ɳgukara	
126	影・陰	X	2	C	ka:\gī	ka\gīnu	ka\gīkara	
127	海	X	2	C	u\N	u\Nnu	u\Nkara	
140	甕	X	2	C	ka:\mī	ka\mīnu	ka\mīkara	
145	浜	X	2	C	ha:\ma	ha\manu	ha\makara	
148	梢・サトウキ ビの先端	X	2	C	sju\ra / sju:\ra	sju:\ranu	sju\rakara	
155	薪	X	2	-	to\N	to\Nnu	to\Nkara	
156	卵	X	2	C	ku\ga	ku\ganu	ku\gakara	
157	太陽	X	2	C	ti:\da	ti:\danu	ti\vdakara	
×	細い帯	X	2	-	ʔkju\ɳ:ʌi	ʔkju\ɳ:ʌinu	ʔkju\ɳ:ʌikara	
228	帯	X	2	C	u\bi / u\ɳbi	u\binu	u\vikara	
165	椀	X	2	-	wa\N	wa\Nnu	wa\Nkara	
172	目上の人・兄	X	2	C	si:\dza / si\ɳdza	si\ɳdzanu	si\ɳdzakara	
176	臼	X	2	C	u\ɳi / u:\ɳi	u\ɳīnu	u\ɳikara	
181	犬	X	2	B	i\N	i\Nnu	i\Nka\ra	
184	声	X	2	C	ku:\i / ku\ɳi	ku\inu	ku\vikara	
188	蚤	X	2	C	nu\N	nu\Nnu	nu\Nkara	
199	猿	X	2	C	sa\ru	sa\runu	sa\rukara	
210	砂糖	X	2	C	sa:ʌ\ta	sa:ʌ\tanu	sa:ʌ\takara	

213	とんぼ	X	2	-	hwě\\Rdza	hwě\\Rdzanu	hwě\\Rdzakara	
220	布団	X	2	C	u:\\du	u\\dunu	u\\dukara	
240	籠の一種	X	2	C	ti:^\ru	ti:^\runu	ti:^\rukara	
×	籠の一種(餅を入れる)	X	2	-	ha:^\ra	ha:^\ra	ha:^\ra	
4	箒	X	3	C	ho\\Rki	ho\\Rkinu	ho\\Rkikara	
6	鍬	X	3	-	toRgwě	toRgwě\\:nu	toRgwě\\:kara	
43	扇・団扇	X	3	C	o\\Rgi	o\\Rginu	o\\Rgikara	
49	麴	X	3	A	koRdzi	koRdzinu	koRdzikara	
×	包丁	X	3	-	hoR\\cja	hoR\\cjanu	hoR\\cjakara	
103	俵	X	3	B	toRra	toRranu	toRraka\\ra	
129	あおさ	X	3	C	oR\\sa	oR\\sanu	oR\\sakara	
171	息	X	3	C	iQ\\ki	iQ\\kinu	iQ\\kikara	
173	蓬	X	3	C	huQ\\tsĩ	huQ\\tsĩnu	huQ\\tsĩkara	
218	火	X	3	C	?maQ\\cji	?maQ\\cjinu	?maQ\\cjikara	
×	杵(餅つき用)	X	3	-	cjiQ\\cji	cjiQ\\cjinu	cjiQ\\cjikara	
247	一つ	X	3	C	?ti\\Rcji	?ti\\Rcjinu	-	
248	二つ	X	3	A	?taRcji	?taRcjinu	-	
249	三つ	X	3	A	miRcji	miRcjinu	-	
250	四つ	X	3	A	juRcji	juRcjinu	-	
252	六つ	X	3	A	muRcji	muRcjinu	-	
254	八つ	X	3	A	jaRcji	jaRcjinu	-	
255	九つ	X	3	-	kunucji	kunucjinu	-	
8	袋	X	4	C	huR\\kuru	huR\\kurunu	huR\\kurukara	
147	台所・母屋と独立した家屋	X	4	B	toRgura	toRgura\\nu	toRguraka\\ra	
192	暁	X	4	C	haRtu\\:ki / haRtu\\ki	haRtu\\kinu	haRtu\\kikara	
238	かまきり	X	6	C	?wiRsatoma\\i	?wiRsatoma\\inu	?wiRsatoma\\ikara	
72	貝	Y	1	B	[mja/;	[mja/;\\nu	[mja;/ka\\ra	
108	湯	Y	1	B	[ju/;	[ju/;\\nu	[ju/;\\kara	
170	目	Y	1	B	[mi/;	[mi/;\\nu	[mi/;ka\\ra	
193	尾	Y	1	A	[dzu/;	[dzu/;nu	[dzu/;kara	
224	家	Y	1	B	[ja/;	[ja/;\\nu	[ja/;kara	
2	種	Y	2	A	ta[nĩ / ta[nĩ/:	ta[nĩ\\nu	ta[nĩka\\ra	
3	丘	Y	2	A	mu[i	mu[inu	mu[ikara	
9	坂	Y	2	A	hi[ja	hi[janu	hi[jakara	
10	草履	Y	2	A	sa[ba	sa[banu	sa[bakara	
12	棘	Y	2	A	nĩ[gi	nĩ[ginu	nĩ[gikara	
14	着物	Y	2	B	?ki[N	?ki[N\\nu	?ki[Nkara	
17	にんにく	Y	2	A	hwĩ[ru	hwĩ[runu	hwĩ[rukara	
18	ほくろ	Y	2	A	a[dza	a[dzanu	a[dzakara	
25	飴	Y	2	A	a[mĩ	a[mĩnu	a[mĩkara	
31	風	Y	2	A	ka[dzi	ka[dzĩnu	ka[dzikara	
32	ソテツの実	Y	2	B	na[i	na[i\\nu	na[ika\\ra	
33	暇	Y	2	B	ma[du: / ma[du/:	ma[du:\\nu	ma[duka\\ra	
35	畠	Y	2	B	ha[ru: / ha[ru/:	ha[ru\\nu / ha[ru:\\nu	ha[ruka\\ra	
38	袖	Y	2	A	su[di	su[dinu	su[dikara	
39	羽	Y	2	A	ha[nĩ	ha[nĩnu	ha[nĩkara	
41	鹽	Y	2	C	ta[re	ta[re\\:nu	ta[re\\:kara	

47	星	Y	2	A	hu[si	hu[sinu	hu[sikara	
48	島	Y	2	B	si[ma / si[ma:	si[ma:\nu	si[maka\ra	
50	角	Y	2	B	cji[no: / cji[no/:	cji[no:\nu	cji[noka\ra	
52	畳	Y	2	A	ta[te	ta[tenu	ta[tekara	
53	波	Y	2	B	na[mi	na[mi:\nu / na[mi:\nu	na[mika\ra	
58	足	Y	2	B	si[ni:	si[ni:\nu	si[nika\ra	系列別語彙では「脛」の意味
61	鳥・鶏	Y	2	A	tu[i	tu[inu	tu[ikara	
62	花	Y	2	B	ha[na/:	ha[na:\nu	ha[naka\ra	
×	海で使う包丁	Y	2	-	si[ri:	si[ri:\nu	si[rika\ra	
64	夜	Y	2	B	ju[ru	ju[ru:\nu	ju[ru\kara / ju[ruka\ra	
67	蟻	Y	2	A	a[ni	a[ninu	a[nikara	
68	潮・海水	Y	2	B	u[su: / u[su/:	u[su:\nu / u[su:\nu	u[suka\ra	
69	腕	Y	2	-	u[di/:	u[di:\nu	u[dika\ra	
70	夫	Y	2	A	wu[tu	wu[tunu	wu[tukara	
73	北	Y	2	A	ni[si	ni[si:\nu	ni[sikara	
75	亀	Y	2	B	ka[mī / ka[mī/:	ka[mī:\nu	ka[mika\ra	
78	洞窟	Y	2	A	ga[ma	ga[manu	ga[makara	
80	(良い)匂い	Y	2	A	ka[dza	ka[dzanu	ka[dzakara	
80	(臭い)匂い	Y	2	-	ka[ba	ka[banu	ka[bakara	
83	土	Y	2	B	nī[cja / nī[cja/:	nī[cja:\nu	nī[cjaka\ra	
88	腹	Y	2	B	wa[ta/:	wa[ta:\nu	wa[taka\ra	
90	烏賊	Y	2	A	i[kja	i[kjanu	i[kjakara	
92	たんこぶ	Y	2	C	ga[bu: / ga[bu/:	ga[bu:\nu	ga[buka\ra	
93	石	Y	2	A	i[si	i[sinu	i[sikara	
94	南	Y	2	B	ha[i	ha[i:\nu	ha[ikara	
96	傷	Y	2	A	ki[dzi	ki[dzinu	ki[dzikara	
102	腰・背中・後ろ	Y	2	A	ku[si	ku[sinu	ku[sikara	
104	酒	Y	2	A	sa[kī	sa[kīnu	sa[kikara	
105	網	Y	2	B	a[mi/:	a[mi:\nu	a[mika\ra	
106	雨	Y	2	B	a[mī:	a[mī:\nu	a[mīka\ra	
×	竹	Y	2	-	ga[ra	ga[ranu	ga[rakara	
109	箱	Y	2	A	ha[ku	ha[kunu	ha[kukara	
111	雲	Y	2	B	ku[mu	ku[mu:\nu	ku[muka\ra	
112	鎌	Y	2	B	ka[ma / ka[ma:	ka[ma:\nu	ka[maka\ra	
113	色	Y	2	B	i[ru	i[ru:\nu	i[ruka\ra	
114	筆	Y	2	A	hu[di	hu[dinu	hu[dikara	
115	鼻	Y	2	A	ha[na	ha[nanu	ha[nakara	
117	水	Y	2	A	mī[dzi	mī[dzinu	mī[dzikara	
118	豆	Y	2	B	ma[mī / ma[mī/:	ma[mī:\nu	ma[mika\ra	
121	麦	Y	2	B	mu[gi	mu[gi:\nu	mu[gika\ra	
123	橋	Y	2	A	ha[si	ha[sinu	ha[sikara	
124	肩	Y	2	B	ka[ta / ka[ta/:	ka[ta:\nu	ka[taka\ra	
125	草	Y	2	B	ku[sa/:	ku[sa:\nu	ku[saka\ra	
133	朝	Y	2	-	a[sa	a[sa:\nu	a[saka\ra	
146	友	Y	2	A	du[si	du[sinu	du[sikara	

166	口	Y	2	A	ku[cji	ku[cjinu	ku[cjikara	
169	釘	Y	2	A	?ku[gi	?ku[ginu	?ku[gikara	
175	板	Y	2	B	i[cja / i[cjaʌ:	i[cja:\nu	i[cjaka\ra	
180	藁	Y	2	B	wa[ra / wa[ra:	wa[ra:\nu	wa[raka\ra	
182	傘・笠	Y	2	B	ka[sa / ka[saʌ:	ka[sa:\nu	ka[saka\ra	
183	米	Y	2	B	ku[mīʌ:	ku[mīnu	ku[mīka\ra	
185	汁	Y	2	B	si[ru:	si[ru:\nu	si[ruka\ra	
187	顔	Y	2	B	cji[raʌ:	cji[ra:\nu	cji[raka\ra	
190	山	Y	2	B	ja[ma	ja[ma:\nu	ja[maka\ra	
191	妻	Y	2	A	tu[dzi	tu[dzinu	tu[dzikara	
198	踵	Y	2	B	a[du / a[duʌ:	a[du:\nu	a[duka\ra	
200	耳	Y	2	B	mi[N	mi[N\nu	mi[Nka\ra	
201	味噌	Y	2	B	nī[sju: / nī[sjuʌ:	nī[sju:\nu	nī[sju:ka\ra / nī[sjuka\ra	
202	糠	Y	2	B	nu[ka	nu[ka:\nu	nu[kaka\ra	
203	鮫	Y	2	-	sa[mī	sa[mīnu	sa[mīkara	
204	サトウキビ	Y	2	B	wu[gi / wu[gi:	wu[gi:\nu	wu[gika\ra	
205	昨日	Y	2	C	?ki[njuʌ:	?ki[njuʌ:\nu	?ki[njuʌ:kara	
206	青年	Y	2	B	ne[seʌ:^	ne[seʌ:^nu	ne[seʌ:^kara	
208	臍	Y	2	A	hu[su	hu[sunu	hu[sukara	
216	牛	Y	2	A	u[si	u[sinu	u[sikara	
219	音	Y	2	A	u[tu	u[tunu	u[tukara	
223	舌	Y	2	B	si[ba:	si[ba\nu	si[baka\ra	
229	萱	Y	2	B	gī[ja / gī[jaʌ:	gī[ja:\nu	gī[jaka\ra	
230	去年	Y	2	B	ku[dzu	ku[dzuʌ:\nu	ku[dzuʌ:kara	
235	小葱	Y	2	B	bi[ja	bi[ja:\nu	bi[jaka\ra	系列別語彙では「韭」の意味
246	紙	Y	2	A	ka[bi	ka[binu	ka[bikara	
7	煙	Y	3	A	kību[si	kību[sī\nu	kību[sī\kara	
11	食料・主食	Y	3	A	haN[mē	haN[mēnu	haN[mēkara	
27	港	Y	3	-	mina[to	mina[tonu	mina[tokara	
29	蓆	Y	3	C	muQ[sju	muQ[sjuʌ:\nu	muQ[sjuʌ:kara	
36	畑	Y	3	C	haQ[te	haQ[teʌ:\nu	haQ[teʌ:kara	
40	枕	Y	3	B	maku[ra	maku[ra\nu	maku[raka\ra	
57	黄金	Y	3	A	kuga[nī	kuga[nī\nu	kuga[nīka\ra	
59	鼻血	Y	3	A	hana[dzi	hana[dzinu	hana[dzikara	
60	若い娘	Y	3	C	mēR[re	mēR[reʌ:\nu	mēR[reʌ:kara	
65	油	Y	3	B	abu[ra	abu[ra\nu	abu[raka\ra	
66	明日	Y	3	B	aQ[cja	aQ[cjaʌ:\nu	aQ[cjaʌ:kara	
69	腕	Y	3	B	kaN[nja	kaN[nja\nu	kaN[njaka\ra	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mi\nu	hasa[mika\ra	
76	櫛	Y	3	B	saQ[ki	saQ[ki\nu	saQ[kika\ra	
82	虹	Y	3	A	noR[dzi	noR[dzinu	noR[dzikara	
85	しゃもじ	Y	3	C	misi[ge	misi[geʌ:\nu	misi[geʌ:kara	
86	膝小僧	Y	3	A	cjiQ[si	cjiQ[sinu	cjiQ[sikara	
87	煤	Y	3	A	hwīgī[ru	hwīgī[runu	hwīgī[rukara	系列別語彙では「垢」の意味
89	ふくら脛	Y	3	B	kubī[ra	kubī[ra\nu	kubī[raka\ra	
119	暦	Y	3	B	kojo[mi	kojo[mi\nu	kojo[mika\ra	

120	命	Y	3	B	ino[cji	ino[cji\Nnu	ino[cjika\ra	
122	糸	Y	3	C	iQ[cju	iQ[cju\Nnu	iQ[cju\Nkara	
134	鱗・ふけ	Y	3	B	iQ[ki	iQ[ki\Nnu	iQ[kika\ra	
135	釜	Y	3	A	haga[ma	haga[manu	haga[makara	
143	空	Y	3	A	tiN[to	tiN[tonu	tiN[tokara	
150	今年	Y	3	-	kutu[si	kutu[sinu	kutu[sika\ra	
152	南京豆（落花 生）	Y	3	B	dzima[mĩ	dzima[mĩ\Nnu	dzima[mĩka\ra	
158	目下の人・弟	Y	3	B	uQ[tu	uQ[tu\Nnu	uQ[tuka\ra	
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[mi\Nnu	kaga[mika\ra	
195	男	Y	3	B	iN[gwa	iN[gwa\Nnu / iN[gwanu	iN[gwaka\ra	
196	竈	Y	3	A	kama[do	kama[donu	kama[dokara	
214	モッコ（運搬 網）	Y	3	-	moQ[ko / moQ[ko\:	moQ[ko\Nnu	moQ[ko\Nkara	
227	女	Y	3	B	ina[gu	ina[gu\Nnu	ina[guka\ra	
234	灸	Y	3	C	jaQ[cju / jaQ[cju\:	jaQ[cju\Nnu	jaQ[cju\Nkara	
237	顎	Y	3	C	utu[gě\:	utu[gě\Nnu	utu[gě\Nkara	
251	五つ	Y	3	B	icji[cji\:	icji[cji\Nnu	-	
253	七つ	Y	3	B	nana[cji\:	nana[cji\Nnu	-	
79	きのこ	Z	2	C	[na/;\ba	[na/;\banu	[na/;\bakara	
144	尻	Z	2	B	[ma/;\i	[ma/;\inu	[ma/;\ikara	
161	ひしゃく	Z	2	C	[nĩ/;\bu / nĩ\;\bu	[nĩ/;\bunu	[nĩ/;\bukara	
174	来年	Z	2	C	[ja/;\nĩ / ja\;\nĩ	[ja/;\nĩnu	[ja/;\nĩkara	
186	鍋	Z	2	C	[na/;\bĩ / na\;\bĩ	[na/;\bĩnu	[na/;\bĩkara	
231	鳥	Z	2	C	[ga/;\ra / ga\;\ra	[ga/;\ranu	[ga/;\rakara	
232	松	Z	2	C	[ma/;\cji	[ma/;\cjinu	[ma/;\cjikara	
244	バッタ	Z	2	C	[ga/;\ta	[ga/;\tanu	[ga/;\takara	
5	頭	Z	3	C	ka[ra\dzi / ka[ra\dzi	ka[ra\dzinu	ka[ra\dzikara	系列別語彙では「髪」 の意味
21	鋤	Z	3	B	i[dza\i	i[dza\inu	i[dza\ikara	
42	兎	Z	3	C	u[sa:^vgi	u[sa:^vginu	u[sa:^vgikara	
44	薬	Z	3	C	ku[su\i	ku[su\inu	ku[su\ikara	
45	情け	Z	3	C	na[sa:^vkĩ	na[sa:^vkĩnu	na[sa:^vkĩkara	
63	刀	Z	3	C	ka[ta\na	ka[ta\nanu	ka[ta\nakara	
194	かぼちゃ	Z	3	C	cji[bu\ru	cji[bu\runu / cji[bu\runu	cji[bu\rukara	系列別語彙では「頭」 の意味
91	水溜り・池	Z	3	B	ku[mu\i	ku[mu\inu	ku[mu\ikara	
98	左	Z	3	B	hi[dza\i	hi[dza\inu	hi[dza\ikara	
139	蚊	Z	3	C	ga[dza\N	ga[dza\Nnu	ga[dza\Nkara	
149	蛾	Z	3	B	ha[bĩ\ru	ha[bĩ\runu	ha[bĩ\rukara	系列別語彙では「蝶」 の意味。habĩrugwa 蛾 (+指小辞)
154	へちま	Z	3	B	na[bĩ\ra	na[bĩ\ranu	na[bĩ\rakara	
156	卵	Z	3	-	ta[ma\gu	ta[ma\gunu	ta[ma\gukara	
160	とさか・たて がみ	Z	3	C	ka[gaN	ka[gaNnu	ka[gaNka\ra	

167	ふんどし(女性用)	Z	3	C	sa[na:\gi / sa[na\gi	sa[na\ginu	sa[na\gikara	ʔcjiri[sanagi 男性用ふんどし (ʔcjiriは男性器)
178	虱	Z	3	C	si[jaN	si[jaN\Nu	si[jaNka\ra	
179	鰻	Z	3	C	u[na\gi	u[na:\ginu	u[na\gikara	
189	涎	Z	3	A	ju[dai	ju[dai\Nu	ju[daikara	
197	おでき	Z	3	C	nuQ\tu / nu[Q\tu	nu[Q\Tunu	nu[Q\Tukara	
211	蟬	Z	3	C	a[sa:\ha	a[sa:\hanu	a[sa:\hakara	
212	杖	Z	3	C	gu[sa\N	gu[sa\Nnu	gu[sa\Nkara	
215	みかん	Z	3	C	ʔku[ni\N	ʔku[ni\Nnu	ʔku[ni\Nkara	
222	やどかり	Z	3	C	a[ma\N	a[ma\Nnu	a[ma\Nkara	
226	苺	Z	3	C	i[cju\i	i[cju\inu	i[cju\ikara	
236	杵(棒状)	Z	3	C	a[dzi\N	a[dzi\Nnu	a[dzi\Nkara	
245	白髪	Z	3	C	si[ja:\gĩ	si[ja:\gĩnu	si[ja:\gĩkara	
26	鋸	Z	4	B	noR[gi	noR[gi\Nu	noR[gi\ra	
74	雷	Z	4	-	nai[gami	nai[gaminu	nai[gamikara	
97	夜中	Z	4	-	juna[sa\Na / juna[sa\Na	juna[sa\Nanu	juna[sa\Nakara	
136	雲丹	Z	4	C	ga/cji[Q\cji	ga/cji[Q\cjinu	ga/cji[Q\cjikara	
138	親子	Z	4	C	u/ja[Q\kwa	u/ja[Q\kwanu	u/ja[Q\kwakara	

Appendix 3. 金見方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-kara	メモ
22	血	X	1	A	ʔcji	ʔcji:\nu	ʔcji:kara	
28	葉	X	1	A	ha:	ha:\nu	ha:kara	
37	下	X	1	A	su	su:\nu	su:kara	
95	魚	X	1	A	ʔju	ʔju:\nu	ʔju:kara	
110	人	X	1	A	ʔcju	ʔcju:\nu	ʔcju:kara	
141	子	X	1	A	ʔkwa	ʔkwa:\nu	ʔkwa:kara	
159	上	X	1	A	wī	wī:\nu	wī:kara	
168	豚	X	1	C	ʔwa	ʔwa:\nu	ʔwa:\kara	
1	垢	X	2	A	a:\vkī	a:\vkīnu	a:\vkīkara	
3	丘	X	2	A	mui	muinu	muikara	
19	右	X	2	A	mī\vgi	mī\vginu	mī\vgikara	
51	露	X	2	C	ʔcji\j:ju	ʔcji\j:junu	ʔcji\j:jukara	mi:cijju 新しい露
54	舟	X	2	C	hu:^\ni	hu:^\ninu	hu:^\nikara	
127	海	X	2	C	u\N	u\Nnu	u\Nkara	
171	息	X	2	C	i\ki	i\kinu	i\kikara	
176	白	X	2	C	u:\si / usi	u:\sinu	u:\sikara	
218	火	X	2	C	ʔma:\tsī	ʔma:\tsīnu	ʔma:\tsikara	
228	帯	X	2	C	ʔkju:\bi	ʔkju:\binu	ʔkju:\bikara	
240	籠	X	2	C	ti:\ru	ti:\runu	ti:\rukara	
30	牙	X	2	A	ki:^\ba	ki:^\banu	ki:^\bakara	
8	袋(金A)	X	3	C	huQ\ko	huQ\konu	huQ\kokara	
11	ご飯	X	3	A	haNmē	haNmēnu	haNmēkara	
43	扇	X	3	C	oR\vgi	oR\vginu	oR\vgikara	
129	あおさ	X	3	C	oR\sa	oR\sanu	oR\sakara	
213	とんぼ	X	3	C	ē\RDa	ē\RDanu	ē\RDakara	
220	布団	X	3	C	u\RDu	u\RDunu	u\RDukara	
247	一つ	X	3	C	ʔtiR\cji	ʔtiR\cjinu	ʔtiR\cjikara	
248	二つ	X	3	A	ʔtaRcji	ʔtaRcjinu	ʔtaRcjikara	
249	三つ	X	3	A	miRcji	miRcjinu	miRcjikara	
250	四つ	X	3	A	juRcji	juRcjinu	juRcjikara	
252	六つ	X	3	A	muRcji	muRcjinu	muRcjikara	
254	八つ	X	3	A	jaRcji	jaRcjinu	jaRcjikara	
192	暁	X	4	C	aRtu\ki	aRtu\kinu	aRtu\kikara	
238	かまきり	X	5	-	iRsato\mai	iRsato\mainu	iRsato\maikara	
23	帆	Y	1	A	[hu/;	[hu/;\nu	[hu/;kara	
72	貝	Y	1	B	[mja/;	[mja/;\nu	[mja/;\kara	
82	蛸	Y	1	B	[to/;	[to/;\nu	[to/;kara	
99	齒	Y	1	B	[ha/;	[ha/;\nu	[ha/;\kara	mi:ba 新しい齒
100	木	Y	1	B	[ki/;	[ki/;\nu	[ki/;\kara	
107	竹	Y	1	A	[de/;	[de/;\nu	[de/;kara	
108	湯	Y	1	B	[ju/;	[ju/;\nu	[ju/;\kara	icjaju 熱い湯
116	桶	Y	1	C	[wi/;	[wi/;\nu	[wi/;\kara	
142	中	Y	1	C	[na/;	[na/;\nu	[na/;kara	
164	手	Y	1	B	[ti/;	[ti/;\nu	[ti/;\kara	
170	目	Y	1	B	[mi/;	[mi/;\nu	[mi/;\kara	
224	家	Y	1	B	[ja/;	[ja/;\nu	[ja/;\kara	
233	前	Y	1	C	[mē/;	[mē/;\nu	[mē/;\kara	

162	門	Y	1	B	[zjo/;	[zjo/;\nu	[zjo/;\kara	
193	尾	Y	1	A	[zju/;	[zju/;\nu	[zju/;\kara	
221	穂	Y	1	B	[hu/;	[hu/;\nu	[hu/;\kara	
2	種	Y	2	A	ta[nĩ	ta[nĩ:\nu	ta[nĩ\kara	
9	坂	Y	2	A	hi[ra	hi[ranu	hi[rakara	
10	草履	Y	2	A	sa[ba	sa[banu	sa[bakara	
12	棘	Y	2	A	N[gĩ	N[gĩnu	N[gĩkara	
13	涙	Y	2	B	na[da	na[da\nu	na[daka\ra	
14	着物	Y	2	B	ki[N	ki[N\nu	ki[Nka\ra	
16	西	Y	2	A	i[ri	i[rinu	i[rikara	
17	にんにく	Y	2	A	hwĩ[ru	hwĩ[runu	hwĩ[rukara	
18	ほくろ	Y	2	A	a[zja	a[zjanu	a[zjakara	
24	陸・里	Y	2	-	sa[to	sa[to:\nu	sa[to:\kara	
25	飴	Y	2	A	a[mĩ	a[mĩ:\nu	a[mĩkara	
31	風	Y	2	A	ka[dzĩ	ka[dzĩ:\nu	ka[dzĩ:kara	
32	ソテツの実	Y	2	B	na[i	na[i\nu	na[ika\ra	
33	暇(1)	Y	2	B	ma[du	ma[du:\nu	ma[duka\ra	
34	暇(2)	Y	2	-	hĩ[ma	hĩ[manu	hĩ:[makara	
35	畑・野原	Y	2	B	ha[ru	ha[ru\nu	ha[ruka\ra	
36	畑	Y	2	C	ha[te	ha[te\nu	ha[teka\ra	
38	袖	Y	2	A	su[di	su[di:\nu	su[di:kara	
39	羽	Y	2	A	ha[nĩ	ha[nĩ:\nu	ha[nikara	
41	鹽	Y	2	C	ta[re	ta[re\nu	ta[reka\ra	
47	星	Y	2	A	hu[si	hu[sinu	hu[sikara	
48	島	Y	2	B	si[ma	si[ma:\nu	si[ma\kara	
50	角	Y	2	B	cji[no:	cji[no\:\nu	cji[no\:\kara	a:dzino 赤い角
52	畳	Y	2	A	ta[te	ta[tenu	ta[tekara	
53	波	Y	2	B	na[N	na[N\nu	na[N\kara	
58	脛	Y	2	B	si[nĩ	si[nĩ:\nu	si[nĩ\kara	
61	鳥・鶏	Y	2	A	tu[i	tu[i:\nu	tu[ikara	
62	花	Y	2	B	ha[na	ha[nanu	ha[nakara	
64	夜	Y	2	B	ju[ru	ju[ru\nu	ju[ru\kara	
66	明日	Y	2	B	a[cja	a[cja:\nu	a[cja\kara	
67	蟻	Y	2	A	a[ni	a[ni:\nu	a[ni:kara	
68	潮・海水	Y	2	B	u[su	u[su:\nu	u[su\kara	
70	夫	Y	2	A	wu[tu	wu[tu:\nu	wu[tu:kara	
73	北	Y	2	A	ni[si	ni[sinu	ni[sikara	
75	亀	Y	2	B	ka[mĩ	ka[mĩ:\nu	ka[mĩ\kara	
79	洞窟	Y	2	A	ga[ma	ga[ma:\nu	ga[ma:kara	
81	匂い	Y	2	A	ka[zja	ka[zjanu	ka[zjakara	
84	土	Y	2	B	N[cja:	N[cja\:\nu	N[cja\kara	
89	腹	Y	2	B	wa[ta	wa[ta:\nu	wa[taka\ra	
×	ふくら脛	Y	2	-	mu[ku	mu[ku:\nu	mu[ku:kara	
90	鳥賊	Y	2	A	i[kja	i[kja:\nu	i[kja:kara	
91	水溜り・池	Y	2	B	i[kě	i[kě\nu	i[kě\kara	
92	たんこぶ	Y	2	C	ga[bu	ga[bu:\nu	ga[buka\ra	
93	石	Y	2	A	i[si	i[si:\nu	i[si:kara	
94	南	Y	2	B	ha[i	ha[i\nu	ha[i\kara	
96	傷	Y	2	A	ki[dzĩ	ki[dzĩnu	ki[dzĩkara	

102	腰・背中・後ろ	Y	2	A	ku[si	ku[si:nu	ku[si:kara	
104	酒	Y	2	A	sa[kī	sa[kī:nu	sa[kī:kara	
105	網	Y	2	B	a[mi	a[mi:Vnu	a[mikaV:ra	
106	雨	Y	2	B	a[mī	a[mī:Vnu	a[mī:Vkara	
109	箱	Y	2	A	ha[ku	ha[ku:nu	ha[ku:kara	
111	雲	Y	2	B	ku[mo:	ku[moV:nu	ku[moVkara	
112	鎌	Y	2	B	ka[ma	ka[ma:Vnu	ka[ma:Vkara	
113	色	Y	2	B	i[ru	i[ru:Vnu	i[ru:Vkara	
114	筆	Y	2	A	hu[di	hu[dinu	hu[dikara	
115	鼻	Y	2	A	ha[na	ha[nanu	ha[nakara	
117	水	Y	2	A	mī[dzi	mī[dzi:nu	mī[dzi:kara	
118	豆	Y	2	B	ma[mī	ma[mīV:nu	ma[mīV:kara	
121	麦	Y	2	B	mu[gi	mu[giVnu	mu[giVkara	
122	糸	Y	2	C	i[cju:	i[cjuV:nu	i[cjuV:kara	a: icju 赤い糸
123	橋	Y	2	A	ha[si	ha[sinu	ha[sikara	
124	肩	Y	2	B	ka[ta	ka[taV:nu	ka[taV:kara	
125	草	Y	2	B	ku[sa	ku[saVnu	ku[sakaVra	
133	朝	Y	2	-	a[sa	a[sa:Vnu	a[saka:Vra	
135	釜	Y	2	A	ka[ma	ka[manu	ka[makara	
146	友	Y	2	A	du[si	du[sinu	du[sikara	
153	肉	Y	2	B	si[si	si[si:Vnu	si[si:Vkara	
163	紐	Y	2	C	ji[ru	ji[ruVnu	ji[ruVkara	
166	口	Y	2	A	ku[cji	ku[cji:nu	ku[cji:kara	
169	釘	Y	2	A	ku[gi	ku[ginu	ku[gikara	
175	板	Y	2	B	i[cja	i[cja:Vnu	i[cja:Vkara	
180	藁	Y	2	B	wa[ra	wa[ranu	wa[rakara	
181	犬	Y	2	B	i[N	i[NVnu	i[NVkara	
182	傘・笠	Y	2	B	ka[sa	ka[sa:Vnu	ka[sa:Vkara	
183	米	Y	2	B	ku[mī	ku[mī:Vnu	ku[mī:Vkara	
185	汁	Y	2	B	si[ru	si[ruVnu	si[ruVkara	
187	顔	Y	2	B	cji[ra	cji[raVnu	cji[ra:Vkara	
190	山	Y	2	B	ja[ma:	ja[ma:Vnu	ja[maVkara	
191	妻	Y	2	A	tu[dzi	tu[dzi:nu	tu[dzi:kara	
198	踵	Y	2	B	a[du	a[duVnu	a[du:Vkara	
200	耳	Y	2	B	mi[N	mi[NVnu	mi[NVkara	
201	味噌	Y	2	B	N[sju	N[sju:Vnu	N[sju:Vkara	
202	糠	Y	2	B	nu[ka:	nu[kaVnu	nu[kaVkara	
203	鮫	Y	2	A	sa[ba	sa[ba:nu	sa[bakara	
204	サトウキビ	Y	2	B	u[gi	u[gi:Vnu	u[gikaVra	
205	昨日	Y	2	C	ki[nu	ki[nu:Vnu	ki[nu:Vkara	
206	青年	Y	2	B	nī[sē	nī[sē:Vnu	nī[sē:Vkara	
208	臍	Y	2	A	hu[sju	hu[sjunu	hu[sjukara	
209	子供	Y	2	C	wa[re	wa[reVnu	wa[reVkara	
216	牛	Y	2	A	u[si	u[sinu	u[sikara	
219	音	Y	2	A	u[tu	u[tu:nu	u[tu:kara	
223	舌	Y	2	B	si[ba	si[baVnu	si[baVkara	
229	萱	Y	2	B	gī[ja	gī[jaVnu	gī[jaVkara	
230	去年	Y	2	B	ku[zju	ku[zju:Vnu	ku[zju:Vkara	

234	灸	Y	2	C	ja[cju:	ja[cju\ːnu	ja[cjuː\kara	
235	韭	Y	2	B	bi[ra	bi[ra\ːnu	bi[ra\kara	
246	紙	Y	2	A	ka[bi	ka[biːnu	ka[biːkara	
6	鋏	Y	3	A	toR[gě	toR[gě\ːnu	toR[gě\ːkara	
40	枕	Y	3	B	maQ[kwa	maQ[kwa\ːnu	maQ[kwaː\kara	
60	若い娘	Y	3	C	měR[re	měR[renu	měR[rekara	
65	油	Y	3	B	aN[ba	aN[baː\ːnu	aN[ba\kara	
69	腕	Y	3	B	kai[na	kai[na\ːnu	kai[naː\kara	
71	鋏	Y	3	B	hasa[N	hasa[N\ːnu	hasa[N\kara	
76	櫛	Y	3	B	saR[ki	saR[kiː\ːnu	saR[kiː\kara	
78	下駄	Y	3	B	aN[zja	aN[zjaː\ːnu	aN[zjaː\kara	
86	しゃもじ	Y	3	C	misi[gě	misi[gě\ːnu	misi[gě\ːkara	
87	膝小僧	Y	3	A	cjiQ[sī	cjiQ[sīnu	cjiQ[sīkara	
103	俵	Y	3	B	toR[ra	toR[ra\ːnu	toR[raː\kara	
119	暦	Y	3	B	kuju[mi	kuju[mini	kuju[mikara	
120	命	Y	3	B	inu[ti	inu[tinu	inu[ti\kara	
134	鱗・ふけ	Y	3	B	iQ[kī	iQ[kī\ːnu	iQ[kī\kara	
137	(舟の) 櫂	Y	3	-	kai[gjo	kai[gjonu	kai[gjokara	
139	蚊	Y	3	C	gazja[N	gazja[N\ːnu	gazja[N\kara	
152	南京豆 (落花 生)	Y	3	B	dzima[mī	dzima[mī\ːnu	dzima[mīː\kara	
158	目下の人・弟	Y	3	B	uQ[tu	uQ[tu\ːnu	uQ[tuː\kara	
160	とさか	Y	3	C	kaga[N	kaga[N\ːnu	kaga[N\kara	
177	鏡	Y	3	B	kaga[N	kaga[N\ːnu	kaga[N\kara	
178	虱	Y	3	C	sira[N	sira[N\ːnu	sira[N\kara	
195	男	Y	3	B	jīN[ga	jīN[ganu	jīN[gakara	
212	杖	Y	3	C	gusa[N	gusa[N\ːnu	gusa[N\kara	
227	女	Y	3	B	wuna[gu	wuna[gu\ːnu	wuna[gu\kara	
237	顎	Y	3	C	utu[gě	utu[gě\ːnu	utu[gě\ːkara	
251	五つ	Y	3	B	icji[cji	icji[cji\ːnu	icji[cji\kara	
253	七つ	Y	3	B	nana[cji	nana[cji\ːnu	nana[cji\kara	
255	九つ	Y	3	-	kunu[cji	kunu[cji\ːnu	kunu[cji\kara	
26	鋸	Y	4	B	noRgi[ri	noRgi[riː\ːnu	noRgi[riː\kara	
147	台所・母屋と 独立した家屋	Y	4	B	toRgu[ra	toRgu[raː\ːnu	toRgu[raː\kara	
225	結婚	Y	4	-	jaRmu[cji	jaRmu[cjinu	jaRmu[cjikara	複合語? 家持
46	柱	Z	2	C	[ha/;Nja	[ha/;Njanu	[ha/;Njakara	
55	針	Z	2	C	[ha/;Ni	[ha/;Ninu	[ha/;Nikara	mi:bai 新しい針
56	骨	Z	2	C	[hu/;Nni	[hu/;Nninu	[hu/;Nnikara	
80	きのこ	Z	2	C	[na/;Vba	[na/;Vbanu	[na/;Vbakara	
88	煤	Z	2	C	[si/;Vsi	[si/;Vsinu	[si/;Vsikara	
126	影	Z	2	C	[ka/;Vga	[ka/;Vganu	[ka/;Vgakara	
128	陰	Z	2	C	[ka/;Vgi	[ka/;Vginu	[ka/;Vgikara	
132	かんざし	Z	2	C	[gi/;Vha	[gi/;Vhanu	[gi/;Vhakara	
140	甕	Z	2	C	[ka/;Vmī	[ka/;Vmīnu	[ka/;Vmīkara	
144	尻	Z	2	B	[ma/;Vi	[ma/;Vinu	[ma/;Vikara	
145	浜	Z	2	C	[ha/;Vma	[ha/;Vmanu	[ha/;Vmakara	
148	梢・サトウキ ビの先端	Z	2	C	[su/;Vra	[su/;Vranu	[su/;Vrakara	

151	ごちそう	Z	2	C	[su/;Vki	[su/;Vkinu	[su/;Vkikara	
155	薪	Z	2	-	[to/;VN	[to/;VNnu	[to/;VNkara	a:VdoN 赤い薪
156	卵	Z	2	C	[ku/;Vga	[ku/;Vganu	[ku/;Vgakara	kuga[naV:bi 卵鍋
157	太陽	Z	2	C	[ti/;Vda	[ti/;Vdanu	[ti/;Vdakara	tidaga[naV:si お天道様
161	ひしゃく	Z	2	C	[ni/;Vbu	[ni/;Vbunu	[ni/;Vbukara	
165	椀	Z	2	-	[gu/;Vki	[gu/;Vkinu	[gu/;Vkikara	
172	目上の人・兄	Z	2	C	[si/;Vda	[si/;Vdanu	[si/;Vdakara	
173	蓬	Z	2	C	[hu/;Vcji	[hu/;Vcjinu	[hu/;Vcjikara	
174	来年	Z	2	C	[ja/;Vni	[ja/;Vninu	[ja/;Vnikara	
184	声	Z	2	C	[ku/;Vi	[ku/;Vinu	[ku/;Vikara	
186	鍋	Z	2	C	[na/;Vbi	[na/;Vbinu	[na/;Vbikara	
188	蚤	Z	2	C	[nu/;VN	[nu/;VNnu	[nu/;VNkara	a:VnuN 赤い蚤
197	おでき	Z	2	C	[ni/;Vtu	[ni/;Vtunu	[ni/;Vtukara	
199	猿	Z	2	C	[sa/;Vru	[sa/;Vrunu	[sa/;Vrukara	
210	砂糖	Z	2	C	[sa/;Vta	[sa/;Vtanu	[sa/;Vtakara	
231	烏	Z	2	C	[ga/;Vra	[ga/;Vranu	[ga/;Vrakara	
232	松	Z	2	C	[ma/;Vcji	[ma/;Vcjinu	[ma/;Vcjikara	
4	箒	Z	3	C	ho[R\ki	ho[R\kinu	ho[R\kikara	
5	髪	Z	3	C	ka[raVdzi	ka[ra:Vdzinu	ka[ra:Vdzikara	
7	煙	Z	3	A	ki[bu:si	ki[bu:sinu	ki[bu:sikara	a:kibusi 赤い煙
8	袋(金B)	Z	3	C	hu[Q\ko	hu[Q\konu	hu[Q\kokara	
20	右	Z	3	A	ni[gi:ri	ni[giVrinu	ni[girikara	
21	鋤	Z	3	B	i[zjaVi	i[zjaVinu	i[zjaVikara	
27	港	Z	3	A	tu[mai	tu[mainu	tu[maikara	
29	蓆	Z	3	C	mu[Q\su	mu[Q\sunu	mu[Q\sukara	
42	兎	Z	3	C	u[sa:Vgi	u[sa:Vginu	u[sa:Vgikara	kuruusagi 黒兎 sijuusagi 白兎
44	薬	Z	3	C	ku[su:Vi	ku[su:Vinu	ku[su:Vikara	a:kusui 赤い薬
45	情け	Z	3	C	na[saVki	na[sa:Vkinu	na[sa:Vkikara	
49	麴・カビ	Z	3	A	ko[Rdzi	ko[Rdzinu	ko[Rdzikara	
57	黄金	Z	3	A	ku[ga:ni	ku[ga:ninu	ku[ga:nikara	mi:kugani 新しい黄金
59	鼻血	Z	3	A	ha[na:dzi	ha[na:dzinu	ha[na:dzikara	a:hanadzi 赤い鼻血
63	刀	Z	3	C	ka[taVna	ka[ta:Vnanu	ka[ta:Vnakara	
×	包丁	Z	3	-	ho[R\cja	ho[R\cjanu	ho[R\cjakara	
194	かぼちゃ	Z	3	C	cji[buVru	cji[bu:Vrunu	cji[bu:Vrukara	
83	虹	Z	3	A	no[Rdzi	no[Rdzinu	no[Rdzikara	
85	東	Z	3	A	a[ga:ri	a[garinu	a[ga:rikara	
98	左	Z	3	B	hi[zjaVi	hi[zjaVinu	hi[zjaVikara	
136	雲丹	Z	3	C	ga[cjiVcji	ga[cji:Vcjinu	ga[cji:Vcjikara	
143	空	Z	3	A	ti[Nto	ti[Ntonu	ti[Ntokara	
149	蝶	Z	3	B	ha[biVru	ha[bi:Vrunu	ha[bi:Vrukara	
150	今年	Z	3	-	ku[tu:si	ku[tu:sinu	ku[tu:sikara	
154	へちま	Z	3	B	na[bi:Vra	na[bi:Vranu	na[bi:Vrakara	
167	ふんどし	Z	3	C	sa[na:Vgi	sa[na:Vginu	sa[na:Vgikara	
179	鰻	Z	3	C	u[na:Vgi	u[naVginu	u[naVgikara	
189	涎	Z	3	A	ju[dai	ju[dainu	ju[daikara	
207	腰周り	Z	3	C	ga[ma:Vku	ga[ma:Vkunu	ga[ma:Vukara	
211	蟬	Z	3	C	a[sa:Vha	a[sa:Vhanu	a[sa:Vhakara	

215	みかん	Z	3	C	ku[nĩ\\N	ku[nĩ\\Nnu	ku[nĩ\\Nkara	
222	やどかり	Z	3	C	a[maN / a[ma\\N	a[ma\\Nnu	a[ma\\Nkara	
226	苺	Z	3	C	i[cju\\i	i[cju\\inu	i[cju\\ikara	
236	杵	Z	3	C	a[dzi\\N	a[dzi\\Nnu	a[dzi\\Nkara	
244	バッタ	Z	3	C	ga[Q\\ta	ga[Q\\tanu	ga[Q\\takara	
245	白髪	Z	3	C	si[ra\\gĩ	si[ra\\gĩnu	si[ra\\gĩkara	
74	雷	Z	4	B	kami[na\\ri	kami[na:\\rinu	kami[na:\\rikara	
97	夜中	Z	4	B	juna[sa:\\na	juna[sa\\:nanu	juna[sa\\:nakara	jĩ:junasana 良い夜中 (夜)
131	頭	Z	4	-	uQ[kaN	uQ[kaNnu	uQ[kaNkara	
138	親子	Z	4	C	uja[Q\\kwa	uja[Q\\kwanu	uja[Q\\kwakara	

Appendix 4. 山方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目(意味)	型	モーラ	系列		-ga	メモ
23	帆	X	1	A	hu:ˆ	hu:ˆga	
95	魚	X	1	A	ʔju:ˆ	ʔju:ˆga	
99	齒	X	1	B	ha:ˆ	ha:ˆ\ga	
100	木	X	1	B	kī	kī\ga	
233	前	X	1	C	mě	-	
107	竹(道具を作る)	X	1	A	de / de:	de:ga	
108	湯	X	1	B	ju:	ju:\ga	icaju 熱い湯
110	人	X	1	A	ʔcju	ʔcju:ga	
141	子	X	1	A	ʔkwa	ʔkwa:ga	
159	上	X	1	A	wī	wīga	
164	手	X	1	B	tī	tīga	
168	豚	X	1	C	ʔwa	ʔwa\ga	
193	尾	X	1	A	du	du:ga	
233	前	X	1	C	mě	mě:\ga	
×	ざる	X	1	-	se	-	
22	血	X	1	A	tsi:	tsi:\ga / tsi\ga	
28	葉	X	1	A	ha	ha\ga	
14	着物	X	2	B	kiN	kiN\ga	
30	牙	X	2	A	ki:ˆba	ki:ˆbaga	
46	柱	X	2	C	ha:ˆ\ja	ha:ˆ\jaga	
54	舟	X	2	C	hu:ˆ\ni	hu:ˆ\nīga	
55	針	X	2	C	hai	hai\ga	
94	南	X	2	B	hai	hai\ga	
56	骨	X	2	C	hu:\ni	hu\nīga	
61	鳥・鶏	X	2	A	tu\i / tui	tuiga	
72	貝	X	2	-	kai	kai\ga	
87	煤	X	2	C	su:ˆ\su	su:ˆ\suga	
123	橋	X	2	A	hasi	hasiga	
127	海	X	2	C	u\N	u\Nga	
128	影・陰	X	2	C	ka:ˆ\gē	ka:ˆ\gēga	
140	甕	X	2	C	ka:\mī / ka\mī	kamī\ga	
145	浜	X	2	C	ha:ˆ\ma	ha:ˆ\maga	
148	梢・サトウキビの先端	X	2	C	su:\ra	su:\raga	ugiNsura サトウキビの先端
155	薪	X	2	-	toN	to\Nga	
157	太陽	X	2	C	tī:\da / tīda	tī:ˆ\daga	
161	ひしゃく	X	2	C	nī:ˆ\bu	nī:ˆ\buga	
171	息	X	2	C	i:ˆ\ki	i:ˆ\kiga	
173	蓬	X	2	C	huR\tsi	huR\tsiga	
199	猿	X	2	C	sa:\ru / sa\ru	sa:\ruga	
200	耳	X	2	B	miN	mi\Nga / miN\ga	
218	火	X	2	C	ʔma:\tsi	ʔma\tsiga	
219	音	X	2	A	utu	utuga	
232	松	X	2	C	ma:ˆ\tsi	ma:ˆ\tsiga	
240	籠の一種	X	2	C	te\ru	te\ruga	inoderu 井之川の籠
4	箒	X	3	C	hoR\ki	hoR\kiga	
8	袋	X	3	C	haQ\ko	haQ\koga	

10	草履	X	3	A	dzoR\ri	dzoR\riga	
29	蓆	X	3	C	muQ\su	muQ\suga	
43	扇・団扇	X	3	C	oR\gi	oR\giga	
49	麴	X	3	A	koR\dzī	koR\dzīga	
59	鼻血	X	3	A	hanadzī	hanadzīga	
×	包丁	X	3	-	hoR\cja	hoR\cjaga	
129	あおさ	X	3	C	oR\sa	oR\saga	oR\sanu
143	空	X	3	A	tiNto	tiNtoga	
214	モッコ (運搬網)	X	3	-	moQ\ko	moQ\koga	
236	杵	X	3	C	tsīQ\tsī	tsīQ\tsīga	
×	井戸	X	3	-	tsīNgjo	-	
11	ご飯	X	3	A	haNmē	haNmēga	
247	一つ	X	3	C	?tiR\tsī	-	
248	二つ	X	3	A	?taRtsī	-	
249	三つ	X	3	A	miRtsī	-	
250	四つ	X	3	A	juRtsī	-	
252	六つ	X	3	A	muRtsī	-	
254	八つ	X	3	A	jaRtsī	-	
192	暁	X	4	C	aRtu\ki	aRtu\kiga	aRtu\kinu / aRtuki\nu
238	かまきり	X	5	C	ginoNkai	ginoNka\iga	
213	とんぼ	X	7	-	eRdaNbo\Rra	eRdaNbo\Rraga	
1	垢	Y	1	A	[ʔa/;	[ʔa/;ga	
37	下	Y	1	A	[su/;	[su/;ga	
81	蛸	Y	1	B	[to/;	[to/;ga	
137	櫓	Y	1	B	[jo/;	[jo/;ga	
142	中	Y	1	C	[na/;	[na/;ga	
170	目	Y	1	B	[mī/;	[mī/;ga	
221	穂	Y	1	B	[hu/;	-	inahu 稲穂
224	家	Y	1	B	[ja/;	[ja/;ga	[ja/;\nu
2	種	Y	2	A	ta[nī	ta[nī\ga	
3	丘	Y	2	A	mo[i	mo[iga	
6	鍬	Y	2	A	to:^[gē	to:^[gē\ga	
9	坂	Y	2	A	sa[ka	sa[kaga	
13	涙	Y	2	B	na[da	-	
16	西	Y	2	-	ni[si	ni[siga	
17	にんにく	Y	2	A	hwu[ru	hwu[ruga	
18	ほくろ	Y	2	A	a[da:^[	a[da:^[ga	
21	鋤	Y	2	-	su[ki	su[kiga	
25	飴	Y	2	A	a[mī	a[mī;ga	
31	風	Y	2	A	ka[dī	ka[dīga	
34	暇	Y	2	-	hi[ma	hi[maga	
36	畑	Y	2	C	ha[te	ha[tega	
38	袖	Y	2	A	su[dī	su[dīga	
39	羽	Y	2	A	ha[nī	ha[nīga	
×	カビ	Y	2	-	ka[bi	ka[biga	
41	鹽	Y	2	C	ta[re	tare[:\ga	
47	星	Y	2	A	hu[sī	hu[sīga	
48	島・集落	Y	2	B	sī[ma	sī[ma\ga	
50	角	Y	2	B	tsī[no	tsī[noga	

62	花	Y	2	B	ha[na	ha[naga	
64	夜	Y	2	B	ju[ru:	ju[ruga	
66	明日	Y	2	B	a[cja:ˆ	a[cja:ˆ\ga	
67	蟻	Y	2	A	a[ni	a[ni:ga	
69	腕	Y	2	-	u[di	u[di\ga	
70	夫	Y	2	A	u[tu	u[tuga	
75	亀	Y	2	B	ka[mī: / ka[mī	ka[mī:ga	
76	櫛	Y	2	B	ki[sī	-	
78	洞窟	Y	2	A	ga[ma	ga[maga	
80	匂い	Y	2	A	ka[da	ka[da:ga	
83	土	Y	2	B	nī[cja	nī[cja\ga	
84	東	Y	2	-	su[gja	su[gja:ga	
88	腹	Y	2	B	wa[ta	wa[ta:\ga	
90	烏賊	Y	2	A	i[kja	i[kjaga	
91	池	Y	2	-	i[ki / i[ki:	i[ki:\ga	
92	たんこぶ	Y	2	C	da[gu	da[gu:\ga	
93	石	Y	2	A	i[sī	i[sī:\ga	
96	傷	Y	2	A	ki[dzī	ki[dzīga	
97	夜中	Y	2	B	ju[na: / ju[na	ju[na:ga	
102	腰・後ろ	Y	2	A	ku[su	ku[suga	
104	酒	Y	2	A	sa[kī	sa[kīga	
105	網	Y	2	B	a[mi / a[mi:	a[mi:ga	
106	雨	Y	2	B	a[mī	a[mī:ga	
×	竹	Y	2	-	ga[ra	ga[raga	
109	箱	Y	2	A	ha[ku	ha[ku:\ga	
111	雲	Y	2	B	ku[mo	ku[moga	
112	鎌	Y	2	B	ka[ma / ka[ma:	ka[ma:ga	
113	色	Y	2	B	i[ru	i[ru\ga	
114	筆	Y	2	A	hu[di	hu[diga	
115	鼻	Y	2	A	ha[na	ha[na\ga	
116	桶	Y	2	C	wu[kī	wu[kī:\ga	
117	水	Y	2	A	mī[dzī	mī[dzīga	
118	豆	Y	2	B	ma[mī	ma[mī\ga	
121	麦	Y	2	B	mu[gi	mu[gi\ga	
122	糸	Y	2	C	i[tu	i[tu\ga	
124	肩	Y	2	B	ka[ta	ka[ta:\ga	
125	草	Y	2	B	ku[sa	ku[sa:\ga	
135	釜	Y	2	-	ka[ma	ka[maga	
144	尻	Y	2	B	ma[i	ma[i\ga	
153	肉	Y	2	B	sī[sī	sī[sīga	
169	釘	Y	2	A	ku[gi	ku[giga	
175	板	Y	2	B	i[ta:ˆ	i[ta:ˆ\ga	
180	藁	Y	2	B	wa[ra	wa[ra:\ga	
181	犬	Y	2	B	i[N	i[N\ga	
182	傘・笠	Y	2	B	ka[sa	ka[sa:\ga	
183	米	Y	2	B	ku[mī	ku[mī\ga	
184	声	Y	2	C	ku[i	ku[iga	
185	汁	Y	2	B	sī[ru	sī[ru\ga	
187	顔	Y	2	B	tsī[ra	tsī[ra\ga	

188	蚤	Y	2	C	nu[N	nu[N\ga	
190	山	Y	2	B	ja[ma	ja[ma:\ga	
191	妻	Y	2	A	tu[dzi	tu[dzi\ga	
198	踵	Y	2	B	a[du	a[du\ga	
201	味噌	Y	2	B	mi[su	mi[su\ga	
202	糠	Y	2	B	nu[ka	nu[ka:\ga	
203	鮫	Y	2	A	sa[ba	sa[baga	
204	サトウキビ	Y	2	B	wu[gi	wu[gi:\ga	
205	昨日	Y	2	C	ki[nu	ki[nu:\ga	
206	青年	Y	2	B	ni[se	ni[se\ga	
208	臍	Y	2	A	hu[su	hu[su\ga	
216	牛	Y	2	A	u[sĩ	u[sĩ\ga	
223	舌	Y	2	B	si[ta	si[ta\ga	
229	萱	Y	2	B	gi[ja	gi[ja\ga	
230	去年	Y	2	B	ku[du	ku[du\ga	
234	灸	Y	2	C	ja[cju	ja[cju\ga	
40	枕	Y	3	B	maQ[kwa	maQ[kwa\ga	
57	黄金	Y	3	A	kuga[nĩ	kuga[nĩga	
60	若い娘	Y	3	C	mēR[rē\:	mēR[rē\ga	
65	油	Y	3	B	aN[ba	aN[ba:\ga	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[miga	
77	下駄	Y	3	B	aN[dza	aN[dza\ga	
85	しゃもじ	Y	3	C	misĩ[ge	misĩ[ge\ga	
98	左	Y	3	B	sĩdza[i	sĩdza[iga	
103	俵	Y	3	B	toR[ra	toR[ra\ga	
119	暦	Y	3	B	kuju[mĩ	kuju[mĩ\ga	
120	命	Y	3	B	ino[cji	ino[cji\ga	
134	鱗	Y	3	B	iQ[ki	iQ[ki\ga	
150	今年	Y	3	-	kutu[sĩ	kutu[sĩ\ga	
152	南京豆（落花生）	Y	3	B	dzĩma[mĩ	dzĩma[mĩ\ga	
158	目下の人・弟	Y	3	B	uQ[tu	uQ[tu\ga	
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[miga	
195	男	Y	3	B	iN[ga	iN[ga\ga	
227	女	Y	3	B	una[gu	una[gu\ga	
196	竈	Y	3	A	kama[du	kama[du\ga	
237	顎	Y	3	C	utu[gē	utu[gē\ga	
×	台所	Y	3	-	sĩru[bĩ	sĩru[bĩ:\ga	sĩru[bĩ\gnu
251	五つ	Y	3	B	itsi[tsĩ	-	
253	七つ	Y	3	B	nana[tsĩ	-	
255	九つ	Y	3	-	kunu[tsĩ	-	
79	きのこ	Z	2	C	[na/;\ba	[na/;\baga	
174	来年	Z	2	C	[ja/;\ni	[ja/;\niga	
186	鍋	Z	2	C	[na/;\bĩ	[na/;\biga	
210	砂糖	Z	2	C	[sa/;\ta	[sa/;\taga	
231	烏	Z	2	C	[ga/;\ra	[ga/;\raga	
244	バッタ	Z	2	C	[ga/;\ta	[ga/;\taga	
5	髪	Z	3	C	ka[ra\:^dzi / ka[ra/:\^dzi	ka[ra\:^dzi / ka[ra/:\^dzi	
7	煙	Z	3	A	kĩ[bu\si	kĩ[bu\sigga	
20	右	Z	3	A	ni[giri	ni[giriga	

42	兎	Z	3	C	u[sɑ:ʌ̃gi	u[sɑ:ʌ̃giga	
44	薬	Z	3	C	ku[sui	ku[suĩga	
45	情け	Z	3	C	na[sɑ:ʌ̃kĩ	na[sɑ:ʌ̃kĩ̃ga	
82	虹	Z	3	A	no[Rdzi	no[Rdziga	
×	砂	Z	3	-	i[nagu	-	
101	汲み桶(井戸で使う)	Z	3	C	tu[gwaN	tu[gwaNga	
133	朝	Z	3	-	si[ka:̃ma	si[ka:̃maga	si[kamaNtana 朝まで
136	雲丹	Z	3	C	ga[tsĩtsĩ	ga[tsĩtsĩga	
139	蚊	Z	3	C	ga[dzaN	ga[dzaÑga	
149	蝶	Z	3	B	ha[bĩ:̃ru	na[bĩ:̃ruga	
154	へちま	Z	3	B	na[bĩ:ʌ̃ra	na[bĩ:ʌ̃raga	
156	卵	Z	3	-	ta[mãgu	ta[mãguga	
178	虱	Z	3	C	su[raN	su[raÑga	
179	鰻	Z	3	C	u[nãgi	u[nãgiga	
189	涎	Z	3	A	ju[dai	ju[daiga	
194	かぼちゃ	Z	3	C	tsĩ[bũ:ʌ̃ru	tsĩ[bũ:ʌ̃ruga	
207	腰周り	Z	3	C	ga[ma:̃ku	ga[mãkuga	
211	蟬	Z	3	C	a[sɑ:ʌ̃ha	a[sɑ:ʌ̃haga	
212	杖	Z	3	C	gu[saN	gu[saÑga	
220	布団	Z	3	C	hu[toN	hu[toNga	
222	やどかり	Z	3	C	a[maN	a[mãNga	
226	苺	Z	3	C	i[cjũbi	i[cjũbiga	
245	白髪	Z	3	C	si[ra:ʌ̃gĩ	su[ra:ʌ̃gĩga	
×	泉	Z	3	-	i[dzuN	-	
26	鋸	Z	4	B	noko[gĩri	noko[gĩrĩga	
131	頭	Z	4	-	uQ[kaN	uQ[kaNga	
138	親子	Z	4	C	u[jaQ̃kwa	u[jaQ̃kwaga	
147	台所・母屋と独立した家屋	Z	4	B	toR[guru	-	

Appendix 5. 轟木方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-ga	-kara	メモ
1	垢	X	1	-	a	-	a\ga	-	
22	血	X	1	A	ʔcji	-	ʔcjiga	-	
23	帆	X	1	A	hu:ʔ	hu:ʔ\ngu	hu:ʔ\ga	hu:ʔ\kara	
28	葉	X	1	A	ha	ha\ngu / ha\ngu	ha\ga	ha\kara	
32	実・果物	X	1	-	mi	-	mi:ga	-	
37	下	X	1	A	sja:ʔ	-	sja:ʔga	-	
72	貝	X	1	B	nja	-	nja:ga	-	
81	蛸(轟B)	X	1	B	to:ʔ	to:ʔ\ngu	to:ʔ\ga	to:ʔ\kara	
95	魚	X	1	A	ʔju	-	ʔjuga	-	
99	齒	X	1	B	ha:ʔ	-	ha:ʔ\ga	-	
100	木	X	1	B	kĩ\:/ kī	kĩ\ngu	kĩ\ga	kĩ\kara	
108	湯	X	1	B	ju	-	ju\ga	-	
110	人	X	1	C	ʔcju	ʔcju\ngu	ʔcju\ga	ʔcju\kara	
141	子	X	1	A	ʔkwa:ʔ	-	ʔkwa:ʔga	-	
142	中	X	1	C	na	-	naga	-	
×	あなた(目下に 対する呼称)	X	1	-	ʔja	-	ʔjaga	-	
159	上	X	1	A	ʔwĩ	-	ʔwĩga	-	
168	豚	X	1	C	ʔwa:ʔ	-	ʔwa:ʔga	-	
172	兄	X	1	-	mĩ:ʔ	-	mĩ:ʔ\ga	-	
233	前	X	1	C	mē	-	mēga	-	
×	ざる	X	1	-	sje	-	sjega	-	
8	袋	X	2	C	hu:\ku	-	hu:\kuga	-	a:huku 赤い袋
14	着物(轟B)	X	2	B	kiN	kiN\ngu	kiN\ga	kiN\kara	
46	柱(轟B)	X	2	C	ha\ra	ha\ranu	ha\raga	ha\rakara	
54	舟	X	2	C	hu:\nĩ / hunĩ	-	hu:\nĩga	-	
55	針	X	2	C	ha:\i / ha\i	-	ha:\iga	-	
56	骨	X	2	C	hu:\nĩ / hunĩ	-	hu:\nĩga	-	
127	海	X	2	C	uN	uN\ngu	uN\ga	uN\kara	
140	甕	X	2	C	kamĩ / ka\mĩ	ka\mĩnu	ka\mĩga	ka\mĩkara	
145	浜	X	2	C	ha:ʔ\ma	-	ha:ʔ\maga	-	
156	卵	X	2	C	ku:\ga / kuga	ku:\ganu/ku\ganu	ku:\gaga	ku:\gakara	
163	紐	X	2	-	ʔkju:\bĩ / ʔkju\bĩ	ʔkju:\bĩnu	ʔkju:\bĩga	ʔkju:\bĩkara	系列別語彙では 「帯」の意味
171	息	X	2	C	i\ki	i\kinu	i\kiga	i\kikara	
176	臼	X	2	C	ʔu\su	-	ʔu\suga	-	
218	火	X	2	C	ʔma\cji	ʔma\cjĩnu	ʔma\cjĩga	ʔma\cjĩkara	
220	布団	X	2	C	u:\du / u\du	-	u:\duga	-	
240	籠(轟B)	X	2	C	ti:\ru / ti\ru	ti:\runu	ti:\ruga	ti:\rukara	ʔkwa:tiru 小さい 籠
×	山の頂	X	2	-	cji\dzi	-	cji\dzĩga	-	
29	蓆(轟B)	X	3	C	muQsju	muQsjũnu	muQsjũga	muQsjũkara	
129	あおさ	X	3	C	oR\sa	oR\sanu	oR\saga	oR\sakara	
147	台所	X	3	-	ʔcjiR\ja	-	ʔcjiR\jaga	-	
213	とんぼ	X	3	C	eR\da	-	eR\daga	-	
247	一つ	X	3	C	ʔtiR\cji	-	ʔtiR\cjĩga	-	

248	二つ	X	3	A	ʔtaRcji	-	ʔta:cji ga	-	
255	九つ	X	3	-	kunucji	kunucji\ɳu	kunucjiga	kunucji\kara	
192	暁	X	4	C	aRtu\ki	aRtu\kinu	aRtu\kiga	aRtu\kikara	
238	かまきり	X	5	C	isituma\vi	isituma\inu	isituma\iga	isituma\ikara	
82	蛸(轟A)	Y	1	B	[to/;	-	[to/;ga	-	
107	竹	Y	1	A	[de/;	-	[de/;ga	-	ʔkwa:de 小さい竹
164	手	Y	1	B	[ti/;	[ti/;\nu	[ti/;\ga	[ti/;\kara	
170	目	Y	1	B	[mi/;	-	[mi/;\ga	-	
193	尾	Y	1	A	[du/;	-	[du/;ga	-	
221	穂	Y	1	B	[hu/;	-	[hu/;\ga	-	
224	家	Y	1	B	[ja/;	-	[ja/;ga / [ja/;\ga	-	
×	十	Y	1	-	[tu/;	-	[tu/;ga	-	
×	田	Y	1	-	[ta/;	-	[ta/;ga	-	
2	種	Y	2	A	ta[ni	-	ta[ni\ga	-	
9	坂	Y	2	A	hi[ra	-	hi[ra\ga	-	
10	草履	Y	2	A	sa[ba	-	sa[ba\ga	-	
12	棘	Y	2	-	tu[gĩ	-	tu[gĩ\ga	-	
13	涙	Y	2	B	na[da	na[da\ɳu	na[daga	na[daka\ra	
14	着物(轟A)	Y	2	B	ki[N	ki[N\ɳu	ki[N\ga	kiN[kara	
16	西	Y	2	A	i[ri	-	i[ri\ga	-	
17	にんにく	Y	2	A	hu[ru	-	hu[ru\ga	-	
18	青いあざ(ほくろ)	Y	2	A	a[dza	-	a[dza\ga	-	
25	飴	Y	2	A	a[mi	-	a[mi\ga	-	
30	牙	Y	2	A	ki[ba	-	ki[ba\ga	-	
31	風	Y	2	A	ka[di	-	ka[di\ga	-	
34	暇	Y	2	-	hi[ma	-	hi[maga	-	
35	畠	Y	2	B	ha[ru	-	ha[ruga	-	
38	袖	Y	2	A	su[dĩ	-	su[dĩ\ga	-	
39	羽	Y	2	A	ha[ni	-	ha[ni\ga	-	
47	星	Y	2	A	hu[si	-	hu[si\ga	-	
48	島	Y	2	B	si[ma	-	si[ma\ga	-	
50	角	Y	2	B	cji[nu	-	cji[nu\ga	-	
52	畳	Y	2	A	ta[tĩ	-	ta[tĩ\ga	-	
53	波	Y	2	B	na[mi	-	na[mi\ga	-	
58	脛	Y	2	B	su[ne	-	su[nega	-	
60	若い娘	Y	2	C	mẽ:[re	-	mẽ:[re\ga	-	ʔkwamëregwa 小さい娘 (+指小辞)
61	鳥・鶏	Y	2	A	tu[i	-	tu[i\ga	-	
62	花	Y	2	B	ha[na	-	ha[naga	-	
67	蟻	Y	2	A	a[ni	-	a[ni\ga	-	
69	腕	Y	2	-	u[di	-	u[diga	-	
70	夫	Y	2	A	wu[tu	-	wu[tuga	-	
73	北	Y	2	A	ni[si	-	ni[si\ga	-	
75	亀	Y	2	B	ka[mĩ	-	ka[miga	-	
76	櫛	Y	2	B	sa:[ki	-	sa:[kiga	-	sakigwa 櫛 (+指小辞)
78	洞窟	Y	2	A	ga[ma	-	ga[ma\ga	-	

80	匂い・香	Y	2	A	ka[dza	-	ka[dza\ga	-	
82	虹	Y	2	A	ni[dzi	-	ni[dziga	-	
83	土	Y	2	B	ni[cja	-	ni[cja\ga	-	
87	煤	Y	2	C	si[si	-	si[si\ga	-	
88	腹	Y	2	B	wa[ta	-	wa[ta\ga	-	
90	烏賊	Y	2	A	i[kja	-	i[kja\ga	-	
91	池	Y	2	B	i[gĩ	-	i[gĩ\ga	-	
93	石	Y	2	A	i[sĩ	-	i[sĩ\ga	-	
94	南	Y	2	B	ha[i	-	ha[iga	-	
96	傷	Y	2	A	ki[dzi	-	ki[dzi\ga	-	
102	腰・背中・後ろ	Y	2	A	ku[si	-	ku[siga	-	
104	酒	Y	2	A	sa[kĩ	-	sa[kĩga	-	
105	網	Y	2	B	a[mi	-	a[mi\ga	-	
106	雨	Y	2	B	a[mĩ	-	a[mĩ\ga	-	
109	箱	Y	2	A	ha[ku	-	ha[kuga	-	
111	雲	Y	2	B	ku[mo	-	ku[mo\ga	-	
112	鎌	Y	2	B	ka[ma	-	ka[ma\ga	-	
113	色	Y	2	B	i[ru	-	i[ru\ga	-	
114	筆	Y	2	A	hu[di	-	hu[di\ga	-	
115	鼻	Y	2	A	ha[na	-	ha[na\ga	-	
41	鹽・桶	Y	2	C	ta:[re\ / ta[re	-	ta:[re\ga	-	
117	水	Y	2	A	mĩ[dzi	-	mĩ[dziga	-	
118	豆	Y	2	B	ma[mĩ	-	ma[mĩ\ga	-	
121	麦	Y	2	B	mu[gi	-	mu[gi\ga	-	
123	橋	Y	2	A	ha[si	-	ha[si\ga	-	
124	肩	Y	2	B	ka[ta	-	ka[ta\ga	-	
125	草	Y	2	B	ku[sa	-	ku[sa\ga	-	
128	陰	Y	2	-	ka:[ta	-	ka:[ta\ga	-	tidakata 太陽でできた陰
135	釜	Y	2	A	ka[ma	-	ka[ma\ga	-	
146	友	Y	2	A	du[si	-	du[siga	-	
166	口	Y	2	A	ku[cji	-	ku[cji\ga	-	
169	釘	Y	2	A	ku[gi	-	ku[gi\ga	-	
175	板	Y	2	B	i[cja	-	i[cjaga	-	
180	藁	Y	2	B	wa[ra	-	wa[ra\ga	-	
181	犬	Y	2	B	i[N	iN[nu	-	-	
182	傘・笠	Y	2	B	ka[sa	-	ka[sa\ga	-	
183	米	Y	2	B	ku[mĩ	-	ku[mĩ\ga	-	
184	声	Y	2	C	ku[i	ku[inu	ku[i\ga	ku[ikara	
185	汁	Y	2	B	si[ru	-	si[ru\ga	-	
187	顔	Y	2	B	cji[ra	-	cji[ra\ga	-	
188	蚤	Y	2	C	nu[mi	nu[minu	-	-	
190	山	Y	2	B	ja[ma	-	ja[ma\ga	-	
191	妻	Y	2	A	tu[dzi	-	tu[dziga	-	
198	踵	Y	2	B	a[du	a[dunu	-	-	
200	耳	Y	2	B	mi[N	-	mi[N\ga / miN[ga	-	
201	味噌	Y	2	B	mi[sju	-	mi[sju\ga	-	

202	糠	Y	2	B	nu[ka	-	nu[ka\ga	-	
203	鮫	Y	2	A	sa[ba	-	sa[ba\ga	-	
204	サトウキビ	Y	2	B	u[gi	u[ginu	u[giga	u[gikara	
205	昨日	Y	2	C	ki:[nu / ki[nu	-	ki:[nu\ga	-	
206	青年	Y	2	B	nĩ[sje	-	nĩ[sje\ga	-	
208	臍	Y	2	A	hu[sju	-	hu[sju\ga	-	
209	子供	Y	2	C	wa:[re / wa[re	-	wa:[rega	-	
216	牛	Y	2	A	u[si	-	u[si:\ga	-	
219	音	Y	2	A	u[tu	-	u[tuga	-	
223	舌	Y	2	B	si[ba	-	si[ba\ga	-	
228	帯	Y	2	C	u[bi	-	u[biga	-	
229	萱	Y	2	B	gĩ[ja	-	gĩ[ja:\ga	-	
230	去年	Y	2	B	ku:[du / ku[du	-	ku:[duga	-	
235	韭	Y	2	B	bi[ra	bi[ranu	bi[ra\ga	bi[rakara	
×	霧	Y	2	-	ki[ri	-	ki[ri\ga	-	
×	匂い	Y	2	-	ka[ba	-	ka[ba\ga	-	
×	キビの花	Y	2	-	na[ba	-	na[ba\ga	-	
×	金	Y	2	-	ka[nĩ	-	ka[nĩ\ga	-	
×	味	Y	2	-	a[dzi	-	a[dzi\ga	-	
6	鋤	Y	3	-	toR[gě	-	toR[gě\ga	-	
6	鋤	Y	3	-	toN[gě	-	toN[gě\ga	-	
7	煙	Y	3	A	kĩbu[si	-	kĩbu[si\ga	-	
20	右	Y	3	A	nigi[ri	-	nigi[ri\ga	-	
29	蓆(轟A)	Y	3	C	muR[sju	-	muR[sjuga	-	
36	畑	Y	3	C	haQ[te	-	haQ[te\ga	-	
40	枕	Y	3	B	maQ[kwa	maQ[kwa\ngu	maQ[kwaga	maQ[kwaka\kra	
45	情け	Y	3	C	nasa:[ki / nasa[ki	-	nasa:[kĩga	-	
49	麴	Y	3	A	koR[dzi	-	koR[dziga	-	
59	鼻血	Y	3	A	hana[dzi	-	hana[dzi\ga	-	
64	夜	Y	3	B	juR[ru	-	juR[ru\ ga	-	
65	油	Y	3	B	aN[ba	-	aN[baga	-	
66	明日	Y	3	B	aQ[cja	-	aQ[cja\ga	-	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	-	hasa[miga	-	
77	下駄	Y	3	B	aN[dza	-	aN[dza\ga	-	
84	束	Y	3	A	aga[ri	-	aga[riga	-	
103	俵	Y	3	B	toR[ra	-	toR[raga	-	
119	暦	Y	3	B	kuju[mi	kuju[mi\ngu	kuju[mi\ga	kuju[mi\kara	
120	命	Y	3	B	inu[cji	inu[cji\ngu	inu[cji\ga	inu[cji\kara	
122	糸	Y	3	C	iQ[cju	-	iQ[cju\ga	-	
134	鱗・ふけ	Y	3	B	iQ[ki	-	iQ[ki\ga	-	
143	空	Y	3	A	teN[to	-	teN[toga	-	
150	今年	Y	3	-	kutu[si	-	kutu[si\ga	-	
152	南京豆(落花生)	Y	3	B	dzima[mĩ	-	dzima[mĩga	-	
×	たてがみ	Y	3	C	gaN[gi	-	gaN[gi\ga	-	
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	-	kaga[mi\ga	-	
189	涎	Y	3	A	juda[i	juda[inu	juda[iga	juda[ikara	
195	男	Y	3	B	iN[ga	iN[ga\ngu	iN[ga\ga	iN[ga\kara	
196	竈	Y	3	A	kama[du	kama[du\ngu	-	kama[du\kara	

214	モッコ (運搬網)	Y	3	B	muQ[kĩ	-	muQ[kĩ\ga	-	
227	女	Y	3	B	wuna[gu	-	wuna[gu\ga	-	
234	灸	Y	3	C	jaQ[cju	-	jaQ[cju\ga	-	
237	顎	Y	3	C	utu[gë	-	utu[gë\ga	-	
249	三つ	Y	3	A	miR[cji	-	miR[cjiga	-	
250	四つ	Y	3	A	juR[cji	-	juR[cji ga	-	
251	五つ	Y	3	B	icji[cji	-	icji[cjiga	-	
252	六つ	Y	3	A	muR[cji	-	muR[cjiga	-	
253	七つ	Y	3	B	nana[cji	-	nana[cjiga	-	
254	八つ	Y	3	A	jaR[cji	-	jaR[cjiga	-	
×	轟木の上の地域	Y	3	-	haN[dza	-	haN[dza\ga	-	
×	すすぎと似た藁草に使う草	Y	3	-	magi[ja	-	magi[ja\ga	-	
138	親子	Y	4	C	u[jaQ\kwa	-	u[jaQ\kwaga	-	
196	竈	Y	4	-	heQ[tsĩvi	-	heQ[tsĩviga	-	
46	柱(轟A)	Z	2	C	[ha/;\ra	[ha/;\ranu	[ha/;\raga	-	
79	きのこ	Z	2	C	[na/;\ba	[na/;\banu	[na/;\baga	[na/;\bakara	
126	影	Z	2	C	[ka/;\gĩ	[ka/;\gĩnu	[ka/;\gĩga	[ka/;\gĩkara	tidakagĩ 太陽でできた影
136	雲丹の一種	Z	2	C	[ju/;\ni	[ju/;\ninu	[ju/;\niga	[ju/;\nikara	
144	尻	Z	2	B	[ma/;\vi	[ma/;\vinu	[ma/;\viga	[ma/;\vikara	
148	梢・サトウキビの先端	Z	2	C	[sju/;\ra	[sju/;\ranu	[sju/;\raga	[sju/;\rakara	
157	太陽	Z	2	C	[ti/;\da	[ti/;\danu	[ti/;\daga	[ti/;\dakara	
161	ひしゃく	Z	2	C	[ni/;\bu	[ni/;\bunu	[ni/;\buga	[ni/;\bukara	
173	蓬	Z	2	C	[hu/;\cji	[hu/;\cjĩnu	[hu/;\cjiga	[hu/;\cjikara	
174	来年	Z	2	C	[ja/;\nĩ	[ja/;\nĩnu	[ja/;\nĩga	[ja/;\nĩkara	
186	鍋	Z	2	C	[na/;\bĩ	[na/;\bĩnu	[na/;\bĩga	[na/;\bĩkara	
199	猿	Z	2	C	[sja/;\ru	-	[sja/;\ru ga	-	
200	猿	Z	2	C	[sa/;\ru	[sa/;\ru nu	-	[sa/;\ru kara	
210	砂糖	Z	2	C	[sa/;\ta	[sa/;\tanu	[sa/;\taga	[sa/;\takara	
231	烏	Z	2	C	[ga/;\ra	[ga/;\ranu	[ga/;\raga	[ga/;\rakara	
232	松	Z	2	C	[ma/;\cji	[ma/;\cjĩnu	[ma/;\cjiga	[ma/;\cjikara	
240	籠(轟A)	Z	2	C	[ti/;\ru	[ti/;\runu	[ti/;\ruga	[ti/;\rukara	
244	バッタ	Z	2	C	[ga/;\ta	[ga/;\tanu	[ga/;\taga	[ga/;\takara	
×	塩	Z	2	-	[ma/;\sjũ	[ma/;\sjũnu	[ma/;\sjũga	[ma/;\sjũkara	
×	手が長くて赤い蛸	Z	2	-	[bu/;\sjã	-	[bu/;\sjãga	-	
5	髪	Z	3	C	ka[ra\dzi	ka[ra\dzĩnu	ka[ra\dziga	ka[ra\dzikara / ka[radzikara	
42	兎	Z	3	C	u[sa\gi	u[sa\gĩnu	u[sa\giga	u[sa\gikara	
44	薬	Z	3	C	ku[sju\vi	-	ku[sju\viga	-	
63	刀・包丁	Z	3	C	ka[ta\na	-	ka[ta\naga	-	
98	左	Z	3	B	si[dza\vi	-	si[dza\viga	-	
139	蚊	Z	3	C	ga[dzaN	-	ga[dzaNga	-	
149	蝶	Z	3	B	ha[bu:\ra / ha[bu\ra	-	ha[bu:\raga	-	

154	へちま	Z	3	B	na[bi\ra	na[bi\ranu	na[bi\raga	na[bi\rakara	
160	とさか	Z	3	-	ka[gaN	-	ka[gaN\ga	-	
167	ふんどし	Z	3	C	sana[:\gi / sa[na\gi	sa[na\ginu	sa[na\giga	sa[na\gikara	
178	虱	Z	3	C	si[raN	si[raN\inu	si[raN\ga	si[raN\kara	
179	鰻	Z	3	C	u[na:\^gi	-	u[na:\^giga	-	
197	おでき	Z	3	C	nī[bu:\tu / nī[bu\tu	-	nī[bu:\tuga	-	
211	蟬	Z	3	C	a[sa\ha	a[sa\hanu	a[sa\haga	a[sa\hakara	
212	杖	Z	3	C	bu[saN	-	bu[saNga	-	
215	みかん	Z	3	C	ku[niN	-	ku[niN\ga /ku[niNga	-	
222	やどかり	Z	3	C	a[maN	-	a[maNga	-	
226	苺	Z	3	C	i[cju:\bi	-	i[cju:\biga	-	
236	杵	Z	3	C	a[dziN	-	a[dziN\ga	-	
245	白髪	Z	3	C	si[ra:\gī	-	si[ra:\gīga	-	
×	ネズミ	Z	3	-	ni[dzi\mi	-	ni[dzi\miga	-	
×	カビ	Z	3	-	ka[bu\i	-	ka[bu\iga	-	
×	手が短くて赤い 蛸	Z	3	-	si[ga:\^i	-	si[ga:\^iga	-	
26	鋸	Z	4	B	njoR[giri	njoR[girinu	njoR[giri\ga	njoR[girika\ra	
74	雷	Z	4	B	kami[na:\ri / kami[na\ri	-	kami[na:\riga	-	
97	夜中	Z	4	-	juna[sa:\na/ juna[sa\na	juna[sa\nanu	juna[sa\naga	juna[sa\nakara	
131	頭	Z	4	-	oQ[kaN	-	oQ[kaNga	-	
133	朝	Z	4	C	situ[mī:\ti / situ[mī\ti	situ[mī\tinu	situ[mī\tiga	situ[mī\tikara	
×	漁に行くとき 使う小さいか ご	Z	5	-	obo[roN\ku	-	obo[roN\kuga	-	

Appendix 6. 兼久方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-kara	メモ
22	血	X	1	A	cji:˘	cji:˘\nu	cji:˘ka\ra	
23	帆	X	1	A	hu:˘	hu:˘\nu	hu:˘ka\ra	
28	葉	X	1	A	ha:˘	ha:˘nu	ha:˘kara	
×	暇	X	1	-	ma:˘	ma:˘nu	ma:˘kara	
37	下	X	1	A	sa:˘	sa:˘nu	sa:˘ka\ra	
72	貝	X	1	B	nja:˘	nja\˘:˘nu	nja\˘:˘kara	
94	南	X	1	B	hwē:˘	hwē:˘\nu	hwē:˘ka\ra	
95	魚	X	1	A	?ju:˘	?ju:˘\nu	?ju:˘ka\ra	
107	竹	X	1	A	dē:˘	dē:˘\nu	dē:˘ka\ra	
110	人	X	1	A	?cju:˘	?cju:˘\nu	?cju:˘ka\ra	
141	子	X	1	A	?kwa:˘	?kwa:˘\nu	?kwa:˘ka\ra	
142	中	X	1	C	na\˘:˘	na\˘:˘nu	na\˘:˘kara	
159	上	X	1	A	?wī:˘	?wī:˘\nu	?wī:˘ka\ra	
162	門	X	1	B	dzo\˘:˘	dzo\˘:˘nu	dzo\˘:˘kara	
168	豚	X	1	C	?wa	?wa\˘:nu	?wa\˘:kara	
193	尾	X	1	A	dzu:˘	dzu:˘\nu	dzu:˘ka\ra	
233	前	X	1	C	mē:˘	mē\˘:˘nu	mē\˘:˘kara	
×	ざる	X	1	-	se:˘	se\˘:˘nu	se\˘:˘kara	
3	丘	X	2	A	mui	muinu	muika\ra	
9	坂	X	2	A	sira	sira\˘nu	siraka\ra	
10	草履	X	2	A	saba	saba\˘nu	sabaka\ra	
16	西	X	2	A	iri	iri\˘nu	irika\ra	
17	にんにく	X	2	A	hwīru	hwīru\˘nu	hwīruka\ra	
18	ほくろ	X	2	A	adza	adza\˘nu	adza\˘kara	
19	右	X	2	A	mī\gi	migi\˘nu	mī\gikara	
25	飴	X	2	A	amī	amīnu	amikara	
30	牙	X	2	A	ki:\ba / ki\ba	ki:\banu	ki:\bakara	
31	風	X	2	A	ka\dzi	kadzi\˘nu	kadzika\ra	
38	袖	X	2	A	sjuri	sjuri\˘nu	sjurika\ra	
47	星	X	2	A	husi	husi\˘nu	husika\ra	
51	露	X	2	C	tsu\ju	tsu\junu	tsu\jukara	
54	舟	X	2	C	hu\ñi	hu\ñinu	hu\ñikara	
55	針	X	2	C	ha\i	ha\inu	ha\ikara	
56	骨	X	2	C	hu\ñi	hu\ñinu	hu\ñikara	
61	鳥・鶏	X	2	A	tui	tui\˘nu	tuika\ra	
72	貝	X	2	-	ka\i	ka\inu	ka\ikara	
73	北	X	2	A	nisi	nisi\˘nu	nisika\ra	
79	きのこ	X	2	C	na\ba	naba\˘nu	na\bakara	
80	匂い	X	2	A	kaba	kaba\˘nu	kabaka\ra	
84	東	X	2	-	sigja:	sigja:\˘nu	sigjaka\ra	
93	石	X	2	A	isi	isi\˘nu	isika\ra	
96	傷	X	2	A	kidzi	kidzi\˘nu	kidzika\ra	
101	水桶・汲み桶	X	2	C	ta\gu	ta\gunu	ta\gukara	
102	腰	X	2	A	kusi	kusi\˘nu	kusika\ra	
104	酒	X	2	A	sakī	sakī\˘nu	sakīka\ra	
109	箱	X	2	A	haku	haku\˘nu	hakuka\ra	
115	鼻	X	2	A	hana	hana:\˘nu	hanaka\ra	

117	水	X	2	A	mīdzi	mīdzi\ngu	mīdzika\ra	
123	橋	X	2	A	hasi	ha\sinu / hasi\ngu	hasi\vkara	
128	影・陰	X	2	C	ka\gī	ka\gīnu	ka\gikara	
127	海	X	2	C	uN	u\Nnu	u\Nkara	
143	空	X	2	A	tiN	ti\Nnu	ti\Nka\ra	
144	尻・後ろ	X	2	B	ma\ji	ma\jinu	ma\jikara	
145	浜	X	2	C	ha\ma	ha\manu	ha\makara	
148	サトウキビの 先端	X	2	C	sju\ra	sju\ranu / sjura\ngu	sju\rakara	
156	卵	X	2	C	ku\ga / ku\ga	ku\ganu	ku\gakara	
157	太陽	X	2	C	ti\ra	ti\ranu	ti\vakara	
165	椀	X	2	B	waN / wa\N	wa\Nnu	wa\Nkara	
169	釘	X	2	A	kugi	kugi\ngu	kugika\ra	
171	息	X	2	C	i\ki	i\kinu	i\kikara	
172	目上の人	X	2	C	si\da	si\danu	si\dakara	
173	蓬	X	2	C	hu\ci	hu\cinu	hu\cjkara	
175	板	X	2	B	icja	icja\ngu	icjaka\ra	
176	臼	X	2	C	u\si	u\sinu	u\sikara	
184	声	X	2	C	ku\i	ku\inu	ku\ikara	
186	鍋	X	2	C	na\bi	na\binu	na\bikara	
191	妻	X	2	A	tudzi:	tudzi\ngu	tudzika\ra	
199	猿	X	2	C	sa\ru	sa\runu	sa\rukara	
200	耳	X	2	B	miN	mi\Nnu	mi\Nka\ra	
203	鮫	X	2	A	saba	saba\ngu	sabaka\ra	
210	砂糖	X	2	C	sa\ta	sa\tanu	sa\takara	
216	牛	X	2	A	usi	usi\ngu	usika\ra	
219	音	X	2	A	utu	utu\ngu	utuka\ra	
220	布団	X	2	C	u\du	u\du	u\dukara	
232	松	X	2	C	ma\ci	ma\cinu	ma\cjkara	
240	籠の一種	X	2	C	ti\ru	ti\runu	ti\rukara	
246	紙	X	2	A	kabi	kabi\ngu	kabi\vkara / kabika\ra	
7	煙	X	3	A	kību\si	kību\sinu	kību\sikara	
8	袋	X	3	C	hu\kuru	hu\kurunu	hu\kurukara	
11	食料・主食	X	3	A	haNmē	haNmē\ngu	haNmēka\ra	
12	棘	X	3	A	jīNgī	jīNgī\ngu	jīNgī\vkara	
27	港	X	3	-	mina\tu	mina\gunu	mina\tukara	
49	麴・カビ	X	3	A	koR\dzi	koR\dzinu	koR\dzikara	
52	畳	X	3	A	tata\mī	tata\mī\ngu	tata\mīka\ra	
59	鼻血	X	3	A	hana\dzi	hanadzi\ngu	hanadzika\ra	
67	蟻	X	3	-	aN\dzō	aN\dzōnu	aN\dzōkara	
70	夫	X	3	A	wuQtu	wuQtu\ngu	wuQtuka\ra	
82	虹	X	3	A	noVRgi	noVRginu / noR\ginu	noR\gikara	
84	東	X	3	A	aga\ri	agari\ngu	agari\vkara	
86	膝小僧	X	3	A	cjiN\se	cjiNse\ngu	cjiNse:ka\ra	
135	釜	X	3	A	haga\ma	hagama\ngu	hagamaka\ra	
150	今年	X	3	-	kutu\si	kutu\sinu	kutu\sikara / kutusika\ra	
151	ごちそう	X	3	-	kwaR\ki	kwaR\kinu	kwaR\kikara	
189	涎	X	3	A	juda\i	judai\ngu	judaika\ra	

196	竈	X	3	A	kama\du	kama\dunu / kamadu \nu	kamaduka\ra	
208	臍	X	3	A	huQsju	huQsju\nu	huQsjuka\ra	
236	杵	X	3	C	cjiQ\cji	cjiQ\cjinu	cjiQ\cjikara	
248	二つ	X	3	A	?ta\Rcji	-	-	
249	三つ	X	3	A	mi\Rcji	-	-	
250	四つ	X	3	A	ju\Rcji	-	-	
252	六つ	X	3	A	mu\Rcji	-	-	
254	八つ	X	3	A	ja\Rcji	-	-	
130	頭	X	4	B	uQka\N	uQka\Nnu	uQka\Nkara	
1	垢	Y	1	-	[a/;	[a/;\nu	[a/;ka\ra	
81	蛸	Y	1	B	[to/;	[to/;\nu	[to/;ka\ra	
99	齒	Y	1	B	[ha/;	[ha/;nu	[ha/;kara	
100	木	Y	1	B	[ki/;	[ki/;nu	[ki/;kara	
116	桶	Y	1	C	[wi/;	[wi/;\nu	[wi/;\kara	
108	湯	Y	1	B	[ju/;	[ju/;\nu	[ju/;\ka\ra	
164	手	Y	1	B	[ti/;	[ti/;\nu	[ti/;\kara	
170	目	Y	1	B	[mi/;	[mi/;\nu	[mi/;ka\ra / [mi/;\ka\ra	
221	穂	Y	1	B	[hu/;	[hu/;\nu	[hu/;\ka\ra	
224	家	Y	1	B	[ja/;	[ja/;nu	[ja/;ka\ra	
2	種	Y	2	A	ta[ni	ta[ni\nu	ta[nika\ra	
13	涙	Y	2	B	na[da	na[da\nu	na[daka\ra	
14	着物	Y	2	B	ki[N	ki[N\nu	ki[Nka\ra	
32	ソテツの実	Y	2	B	na[i	na[inu	na[ikara	系列別語彙では 「実」の意味
33	暇	Y	2	B	ma[du	ma[dunu	ma[duka\ra	
35	畠	Y	2		ha[ru	ha[ru\nu	ha[ruka\ra	
36	畑	Y	2	C	ha[te	ha[te\nu	ha[teka\ra	
39	羽	Y	2	A	ha[ni	ha[ni\nu	ha[nika\ra	
41	鹽	Y	2	C	ta[re	ta[re\nu	ta[reka\ra	
46	柱	Y	2	C	ha[ra	ha[ra\nu	ha[raka\ra	
48	島	Y	2	B	si[ma	si[ma\nu	si[maka\ra	
50	角	Y	2	B	cji[no	cji[no\nu	cji[noka\ra	
53	波	Y	2	B	na[mi	na[mi\nu	na[mika\ra	
58	脛	Y	2	B	si[ni	si[ni\nu	si[nika\ra	
62	花	Y	2	B	ha[na	ha[na\nu	ha[naka\ra	
64	夜	Y	2	B	ju[ru:^	ju[ru\:^nu	ju[ru\:^kara	
66	明日	Y	2	B	a[cja:^	a[cja:^nu	a[cja:^kara	
67	蟻	Y	2	A	a[mi	a[mi\nu	a[mika\ra	
68	潮・海水	Y	2	B	u[sju	u[sju\nu	u[sjukara	
69	腕	Y	2	-	u[di	u[di\nu	u[dika\ra	
75	亀	Y	2	B	ka[mi	ka[mi\nu	ka[mika\ra	
78	洞窟	Y	2	A	ga[ma	ga[ma\nu	ga[maka\ra	
83	土	Y	2	B	N[cja	N[cja\nu	N[cjaka\ra	
87	煤	Y	2	C	su[su	su[su\nu	su[su\kara	
88	腹	Y	2	B	wa[ta	wa[ta\nu	wa[takara	
90	烏賊	Y	2	A	i[kja	i[kja\nu	i[kjaka\ra	
92	たんこぶ	Y	2	C	ga[bu	ga[bu\nu	ga[buka\ra	

105	網	Y	2	B	a[mi	a[mi\ngu	a[mika\ra	
106	雨	Y	2	B	a[mĩ	a[mĩ\ngu	a[mĩka\ra	
111	雲	Y	2	B	ku[mo:ˆ	ku[mo:ˆ\ngu	ku[mo:ˆkara	
112	鎌	Y	2	B	ka[ma:	ka[ma\ngu	ka[maka\ra	
113	色	Y	2	B	i[ru	i[ru\ngu	i[ruka\ra	
114	筆	Y	2	A	hu[de	hu[de\ngu	hu[de\kara	
118	豆	Y	2	B	ma[mĩ	ma[mĩ\ngu	ma[mika\ra	
121	麦	Y	2	B	mu[gi	mu[gi\ngu	mu[gi\kara / mu[gi\:	
122	糸	Y	2	C	i[cju\ˆ	i[cju\ˆnu	i[cju\ˆkara	
124	肩	Y	2	B	ka[ta	ka[ta\ngu	ka[takara	
125	草	Y	2	B	ku[sa	ku[sa\ngu	ku[saka\ra	
140	甕	Y	2	C	ka[mĩ	ka[mĩ\ngu	ka[mĩka\ra	
146	友	Y	2	A	du[si	du[si\ngu	du[sika\ra	
153	肉	Y	2	B	si[si	si[si\ngu	si[sika\ra	
166	口	Y	2	A	ku[cji	ku[cji\ngu	ku[cji\kara / ku[cjika\ra	
180	藁	Y	2	B	wa[ra	wa[ra\ngu	wa[rakara	
181	犬	Y	2	B	i[N	i[N\ngu	iN[ka\ra	
182	傘・笠	Y	2	B	ka[sa:	ka[sa\ngu	ka[saka\ra	
183	米	Y	2	B	ku[mĩ	ku[mĩ\ngu	ku[mĩka\ra	
185	汁	Y	2	B	si[ru	si[ru\ngu	si[ruka\ra	
187	顔	Y	2	B	cji[ra	cji[ra\ngu	cji[raka\ra	
188	蚤	Y	2	C	nu[mi	nu[mi\ngu	nu[mika\ra	
190	山	Y	2	B	ja[ma	ja[ma\ngu	ja[maka\ra	
198	踵	Y	2	B	a[du	a[du\ngu	a[duka\ra	
201	味噌	Y	2	B	mi[sju	mi[sju\ngu	mi[sjuka\ra	
202	糠	Y	2	B	nu[ka	nu[ka\ngu	nu[kaka\ra	
204	サトウキビ	Y	2	B	wu[gi	wu[gi\ngu	wu[gi\kara	
205	昨日	Y	2	C	ki[nu	ki[nu\ngu	ki[nu\kara	
206	青年	Y	2	B	ni[se	ni[se\ngu	ni[se\kara	
209	子供	Y	2	C	wa[re	wa[re\ngu	wa[re\kara	
211	蟬	Y	2	C	a[sa\:	a[sa\ngu	a[sa\kara	
223	舌	Y	2	B	si[ba	si[ba\ngu	si[baka\ra	
229	萱	Y	2	B	giː[ja	giː[ja\ngu	giː[jaka\ra	
230	去年	Y	2	B	ku[dzu	ku[dzu\ngu / ku[dzuː\ngu	ku[dzu\kara	
231	烏	Y	2	C	ga[ra	ga[ra\ngu	ga[ra\kara	
234	灸	Y	2	C	ja[cjo\ˆ	ja[cjo\ˆnu	ja[cjo\ˆkara	
235	韭	Y	2	B	bi[ra	bi[ra\ngu	bi[rakara	
6	鋤	Y	3	-	toR[gě	toR[gě\ngu	toR[gě\kara	
29	蓆	Y	3	C	muQ[sju\ˆ	muQ[sju\ˆnu	muQ[sju\ˆkara	
40	枕	Y	3	B	maQ[kwa	maQ[kwa\ngu	maQ[kwaka\ra	
45	情け	Y	3	C	nasa[kĩ	nasa[kĩ\ngu	nasa[kĩka\ra	
57	黄金	Y	3	A	kuga[ne	kuga[ne\ngu	kuga[neka\ra	
60	若い娘	Y	3	C	měR[rě	měR[rě\ngu	měR[rě\kara	
65	油	Y	3	B	aN[ba	aN[ba\ngu	aN[baka\ra	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mi\ngu	hasa[mika\ra	
76	櫛	Y	3	B	saR[ki	saR[ki\ngu	saR[kika\ra	

77	下駄	Y	3	B	aN[dza	aN[dza\ngu	aN[dzakara	
85	しゃもじ	Y	3	C	misi[ge	misi[ge\ngu	misi[ge\kara	
89	ふくら脛	Y	3	B	kubi[ra	kubi[ra\ngu	kubi[raka\ra	
103	俵	Y	3	B	toR[ra	toR[ra\ngu	toR[ra\kara	
119	暦	Y	3	B	kuju[mi	kuju[mi\ngu	kuju[mika\ra	
120	命	Y	3	B	inu[cji:	inu[cji\ngu	inu[cjika\ra	
134	鱗・ふけ	Y	3	B	iQ[ki	iQ[ki\ngu	iQ[kika\ra	
152	南京豆（落花生）	Y	3	B	dzima[mĩ	dzima[mĩ\ngu	dzima[mika\ra	
154	へちま	Y	3	B	nabi[ra	nabi[ra\ngu	nabi[raka\ra	
158	弟	Y	3	B	uQ[tu	uQ[tu\ngu	uQ[tuka\ra	
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[mi\ngu	kaga[mika\ra	
195	男	Y	3	B	jiN[ga	jiN[ganu	jiN[gakara	
214	モッコ（運搬網）	Y	3	B	muQ[ko	muQ[ko\ngu	muQ[ko\kara	
227	女	Y	3	B	wuna[gu	wuna[gu\ngu	wuna[guka\ra	
237	顎	Y	3	C	utu[gẽ	utu[gẽ\ngu	utu[gẽ\kara	
251	五つ	Y	3	B	icji[cji	-	-	
253	七つ	Y	3	B	nana[cji	-	-	
147	台所・母屋と独立した家屋	Y	4	B	toRgu[ra	toRgu[ra\ngu	toRgu[ra\kara	
255	九つ	Y	4	-	kuRnu[cji	-	-	
163	帯	Z	2	C	[kju/;\bĩ	[kju/;\bĩnu	[kju/;\bĩkara	
174	来年	Z	2	C	[ja/;\ni	[ja/;\ninu	[ja/;\nikara	
218	火	Z	2	C	[ma/;\vcji	[ma/;\vcjinu	[ma/;\vcjikara	
244	バッタ	Z	2	C	[ga/;\ta	[ga/;\tanu	[ga/;\takara	
4	箒	Z	3	C	ho[R\ki	ho[R\kinu / ho[Rkinu	ho[R\vikara / ho[Rkika\ra	
5	頭	Z	3	C	ka[ra\dzi	ka[ra\dzinu	ka[ra\dzikara	系列別語彙では「髪」の意味
21	鋤	Z	3	B	ju[dza\i	ju[dza\inu	ju[dza\ikara	
42	兎	Z	3	C	u[sa\gi	u[sa\ginu	u[sa\gikara	
43	扇・団扇	Z	3	C	o[R\gi	o[R\ginu	o[R\gikara	
44	薬	Z	3	C	ku[su\i	ku[su\inu	ku[su\ikara	
63	刀	Z	3	C	ka[ta\na	ka[ta\nanu	ka[ta\nakara	
×	包丁	Z	3	-	ho[R\cja	ho[R\cjanu	ho[R\cjakara	
194	かぼちゃ	Z	3	C	cji[bu\ru	cji[bu\runu	cji[bu\rukara	
98	左	Z	3	B	si[gja\i	si[gja\inu	si[gja\ikara	
129	あおさ	Z	3	C	o[R\sa	o[R\sanu	o[R\sakara	
136	雲丹	Z	3	C	ga[cji\vcji	ga[cjicji\ngu	ga[cji\vcjikara	
138	親子	Z	3	C	u[ja:^\kwa	u[ja:^\kwanu	u[ja:^\kwakara	
139	蚊	Z	3	C	ga[dza\N	ga[dza\Nnu	ga[dza\Nkara	
149	蝶	Z	3	B	ka[bi\ra	ka[bi\ranu	ka[biraka\ra	
160	とさか	Z	3	C	ka[ga\N	ka[ga\Nnu	ka[ga\Nkara / ka[ga\N\kara	
161	ひしゃく	Z	3	C	sa[ku\si	sa[ku\sinu	sa[ku\sikara	
167	ふんどし	Z	3	C	sa[na\gi	sa[na\ginu	sa[na\gikara	
178	虱	Z	3	C	si[na\N	si[na\Nnu	si[ra\Nkara	
179	鰻	Z	3	C	u[na\gi	u[na\ginu	u[na\gikara	

197	おでき	Z	3	C	ni[bu\tu	ni[bu\tunu	ni[bu\tukara	
212	杖	Z	3	C	gu[saN	gu[sa\Nnu	gu[sa\Nkara	
215	みかん	Z	3	C	ku[ni\N	ku[ni\Nnu	ku[ni\Nkara	
222	やどかり	Z	3	C	a[maN	a[ma\Nnu	a[ma\Nkara	
226	苺	Z	3	C	i[cju\bi	i[cju\binu	i[cju\bikara	
245	白髪	Z	3	C	si[ra\gĩ	si[ra\gĩnu	si[ra\gĩkara	
247	一つ	Z	3	C	?ti[R\cji	-	-	
26	鋸	Z	4	B	noR[gi\ri	noR[giri\vu	noR[girika\ra	
74	雷	Z	4	B	kami[nai	kami[nai\vu	kami[naika\ra	
91	水溜り・池	Z	4	B	kuN[mu\i	kuN[mu\inu	kuN[mu\ikara	
97	夜中	Z	4	B	juna[sa\na	juna[sa\vanu	juna[sa\vakara	
133	朝	Z	4	C	situ[mĩ\ti	situ[mĩ\tinu	situ[mĩ\tikara	
192	暁	Z	4	C	haR[tu\ki	haR[tu\kinu / haR[tuki\vu	haR[tu\vikara	
213	とんぼ	Z	4	C	hwëR[dza\ra	hwëR[dza\ranu	hwëR[dza\rakara	

Appendix 7. 瀬滝方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-kara	メモ
22	血	X	1	A	cji:˘	cji:˘\nu	cji:˘ka\ra	
23	帆	X	1	A	hu:˘	hu:˘\nu	hu:˘ka\ra	
28	葉	X	1	A	ha:˘	ha:˘\nu	ha:˘ka\ra	
37	下	X	1	A	sa:˘	sa:˘\nu	sa:˘ka\ra	
78	洞窟	X	1	-	?jo:˘	?jo:˘\nu	?jo:˘ka\ra	
95	魚	X	1	A	?ju:˘	?ju:˘\nu	?ju:˘ka\ra	
107	竹	X	1	A	de:˘	de:˘\nu	de:˘ka\ra	
110	人	X	1	A	?cju:˘	?cju:˘\nu	?cju:˘kara	
141	子	X	1	A	?kwa:	?kwa\vu	-	
142	中	X	1	C	na	na\vu	na\kara	
159	上	X	1	A	?wi:	?wi\vu	?wika\ra	
168	豚	X	1	C	?wa	?wa\vu / ?wanu	?wa\kara	
193	尾	X	1	A	dzu:˘	dzu:˘\nu	dzu:˘ka\ra	
221	穂	X	1	B	hu	-	-	
233	前	X	1	C	mē	mē\vu	mē\kara	
1	垢	X	2	-	a:˘\kī	a:˘\kīnu	a:˘\kīkara	
9	坂	X	2	A	sira	siranu	siraka\ra	
10	草履	X	2	A	saba	saba\vu	sabaka\ra	
16	西	X	2	A	iri	irinu	irika\ra	
17	にんにく	X	2	A	hwīru	hwīrunu	hwīruka\ra	
18	ほくろ	X	2	A	adza	adza\vu	adzaka\ra	
25	飴	X	2	A	amī	amī\vu	amika\ra	
31	風	X	2	A	kadzi	ka\dzinu	-	
31	風	X	2	A	kadze	-	ka\dzekara	
38	袖	X	2	A	sudi	sudinu / sudi\vu	sudika\ra	
39	羽	X	2	A	hani	haninu	hanika\ra	
46	柱	X	2	C	ha\ra	ha\ranu	ha\rakara	
47	星	X	2	A	husi	husinu	husika\ra	
51	露	X	2	C	tsu\ju	tsu\junu	tsu\jukara	
54	舟	X	2	C	hu\nī	hu\nīnu	hunīkara	
55	針	X	2	C	hai	ha\inu	haikara	
56	骨	X	2	C	hu\nī	hu\nīnu	hu\nikara	
61	鳥・鶏	X	2	A	tui	tui\vu	tuika\ra	
70	夫	X	2	A	wutu	wutu\vu	wutuka\ra	
72	貝	X	2	-	ka\i	ka\inu	ka\ikara	
73	北	X	2	A	nisi	nisi\vu	nisika\ra	nisi\kadze 北風
79	きのこ	X	2	C	na\ba	na\banu / naba\vu	na\bakara	
87	煤	X	2	C	susu	susunu	susukara	
93	石	X	2	A	isi	isi\vu	isika\ra	
96	傷	X	2	A	?kidzi	?kidzi\vu	?kidzika\ra	
101	水桶・汲み桶	X	2	-	ta\ru	ta\runu	ta\rukara	
102	腰	X	2	A	kusi	kusinu	kusika\ra	
104	酒	X	2	A	sakī	sakī\vu	sakīka\ra	
109	箱	X	2	A	haku	haku\vu	hakuka\ra	
114	筆	X	2	A	hudi	hudi\vu	-	
115	鼻	X	2	A	hana	hana\vu	hanaka\ra	
117	水	X	2	A	mīdzi	mīdzi\vu	mīdzika\ra	

123	橋	X	2	A	hasi	hasi\Nu	hasika\ra	
126	影・陰	X	2	C	ka\gĩ	ka\gĩnu / kagĩnu	ka\gĩkara	
127	海	X	2	C	u\N	u\Nnu	u\Nkara / uNkara	
140	甕	X	2	C	ka\mĩ	kamĩnu	kamĩkara	mĩdzi[gamĩ 水甕
144	尻・後ろ	X	2	B	ma\li	mainu	maikara / ma\vikara	
145	浜	X	2	C	ha\ma	ha\manu	ha\makara	
146	友	X	2	A	dusi	dusi\Nu	dusika\ra	
148	サトウキビの 先端	X	2	C	su\ra	su\ranu	su\rakara / surakara	
156	卵	X	2	C	ku:\ga	kuganu	ku\gakara	
157	太陽	X	2	C	ti\da	ti\danu	ti\dakara	
161	ひしゃく	X	2	C	nĩ\bu	nĩbunu	nĩ\bukara	
116	帯	X	2	-	o:^\bi	o:^\binu	o:^\bikara	
166	口	X	2	A	kucji	kucji\Nu	kucjika\ra	
169	釘	X	2	A	?kugi	?kugi\Nu	?kugika\ra	
171	息	X	2	C	i\ki	i\kinu	i\kikara	
172	目上の人	X	2	C	si\dza	si\dzanu	si\dzakara / sidzakara	
173	蓬	X	2	C	hu\cji	hu\cjinu	hu\cjikara	
176	白	X	2	C	u\si	u\sinu	u\sikara	
184	声	X	2	C	ku\i	ku\inu	ku\ikara / kuikara	
186	鍋	X	2	C	na\bi	na\bĩnu	na\bĩkara	
188	蚤	X	2	C	nu\mi	numinu	numikara	
191	妻	X	2	A	tudzi	tudzi\Nu	tudzika\ra	
199	猿	X	2	C	sa\ru	sa\runu	sa\rukara	
208	臍	X	2	A	husu	husu\Nu	husuka\ra	
210	砂糖	X	2	C	sa\ta	sa\tanu	sa\takara / satakara	
216	牛	X	2	A	usi	usi\Nu	usika\ra	
219	音	X	2	A	utu	utu\Nu	utuka\ra	
220	布団	X	2	C	u\du	u\dunu	u\dukara / udukara	
231	烏	X	2	C	ga\ra	ga\ranu	ga\rakara	
232	松	X	2	C	ma\cji	ma\cjinu	ma\cjikara	
236	杵	X	2	-	cji\cji	cji\cjinu	cji\cjikara	
240	籠の一種	X	2	C	ti\ru	ti\runu	ti\rukara	
246	紙	X	2	A	kabi	kabi\Nu	kabika\ra	
×	囲炉裏	X	2	-	dzi\ru	dzi\runu	dzi\rukara	dziru[ba\ta
7	煙	X	3	A	kĩbu\si	kĩbu\sinu / kĩbusinu	kĩbusika\ra	
8	袋	X	3	C	hu\kuru	hu\kurunu	hu\kurukara	
11	食料・主食	X	3	A	haNmě	haNmě\Nu	haNměka\ra	
20	右	X	3	A	nigi\ri	nigirinu	nigirika\ra	
27	港	X	3	-	mina\to	mina\tonu	minatoka\ra	
30	牙	X	3	-	ja\vdziba	ja\vdzibanu	ja\vdzibakara	
49	麴・カビ	X	3	A	koR\dzi	koR\dzinu	koRdzika\ra	
52	畳	X	3	A	tata\mĩ	tata\mĩ nu	tatamĩka\ra	
59	鼻血	X	3	A	hana\dzi	hana\dzi nu	-	
67	蟻	X	3	-	aNdzo	aNdzo\Nu / aNdzo: nu	aNdzoka\ra	
82	虹	X	3	A	noR\gi	noRginu	noRgika\ra	
84	東	X	3	A	aga\re	aga\renu	agareka\ra	kabu[i カビ
86	膝小僧	X	3	A	cjiNse	cjiNsenu	cjiNsekara	

135	釜	X	3	A	haga\ma	hagamanu	hagamaka\ra	
150	今年	X	3	-	kutu\si	kutusunu	kutusika\ra	
151	ごちそう	X	3	-	?kwaR\ki	?kwaRkinu	-	
189	涎	X	3	A	juda\vi	juda\inu	judaika\ra	
248	二つ	X	3	A	?taR\cji	-	-	
249	三つ	X	3	A	mi\Rcji	-	-	
250	四つ	X	3	A	ju\Rcji	-	-	
252	六つ	X	3	A	mu\Rcji	-	-	
254	八つ	X	3	A	ja\Rcji	-	-	
131	頭	X	4	-	uQkaN	uQkaNnu	uQkaNkara	古語
239	刺青	X	4	C	haNdzivki	haNdziki\ngu	-	
68	潮・海水	Y	1	B	[su/;	[su/;\ngu	[su;/ka\ra	
81	蛸	Y	1	B	[to/;	[to/;\ngu	[to;/ka\ra	
99	齒	Y	1	B	[ha/;	[ha/;\ngu	[ha;/ka\ra	
100	木	Y	1	B	[ki/;	[ki/;\ngu	[ki;/ka\ra	
108	湯	Y	1	B	[ju/;	[ju/;\ngu	[ju;/ka\ra	
164	手	Y	1	B	[ti/;	[ti/;\ngu	[ti;/kara	
170	目	Y	1	B	[mi/;	[mi/;\ngu	[mi;/ka\ra	
224	家	Y	1	B	[ja/;	[ja/;\ngu	[ja;/ka\ra	
2	種	Y	2	A	ta[ni/:	ta[ni/;\ngu	ta[ni/kara	
13	涙	Y	2	B	na[da/:	na[da\ngu	na[daka\ra	
14	着物	Y	2	B	ki[N	ki[Nnu	ki[Nka\ra	
32	実・果物	Y	2	B	na[i	na[i\ngu	na[ika\ra	
33	暇	Y	2	B	ma[du/:	ma[du/;\ngu	-	
35	畠	Y	2	B	ha[ru	ha[ru\ngu	ha[ruka\ra	
41	鹽	Y	2	C	ta[re / ta[re/:	ta[rengu / ta[re/;\ngu	ta[re/;\kara	
48	島	Y	2	B	si[ma	si[ma\ngu	si[maka\ra	
50	角	Y	2	B	cji[no/::^	cji[no/::^ngu	cji[no/::^kara	
53	波	Y	2	B	na[mi/:	na[mi/;\ngu	na[mi/ka\ra	
58	脛	Y	2	B	si[ni/:	si[ni/;\ngu	si[ni/ka\ra	
62	花	Y	2	B	ha[na / ha[na/:	ha[nanu / ha[na/;\ngu	ha[naka\ra	
69	腕	Y	2	-	u[di	u[di\ngu	u[di\kara	
75	亀	Y	2	B	ka[mi/:	ka[mi\ngu	ka[mika\ra	
83	土	Y	2	B	N[cja:	N[cja\ngu	N[cjaka\ra	
88	腹	Y	2	B	wa[ta	wa[tanu	wa[takara	
90	烏賊	Y	2	A	i[kja	i[kjanu	i[kjakara	
92	たんこぶ	Y	2	-	da[gu\:	da[gu\:\ngu	da[guka\ra	
94	南	Y	2	B	ha[i	ha[inu	ha[ika\ra	
106	雨	Y	2	B	a[mi / a[mi/:	a[mi\ngu	a[mika\ra	
111	雲	Y	2	B	ku[mo / ku[mo/:	ku[mo\ngu	ku[moka\ra	
113	色	Y	2	B	i[ru	i[ru\ngu	i[ru\kara	
118	豆	Y	2	B	ma[mi / ma[mi/:	ma[mi\ngu	ma[mika\ra	
121	麦	Y	2	B	mu[gi	mu[gi\ngu	mu[gika\ra	
124	肩	Y	2	B	ka[ta/:	ka[ta\ngu	ka[taka\ra	
125	草	Y	2	B	ku[sa / ku[sa/:	ku[sa\ngu	ku[saka\ra	
137	權	Y	2	-	ka[jo:	ka[jo\ngu	ka[jokara	
143	空	Y	2	-	so[ra:	so[ra\ngu	so[raka\tra	
153	肉(赤肉)	Y	2	B	si[si:	si[si\ngu	si[sika\ra	
175	板	Y	2	B	i[cja:	i[cja\ngu / i[cja\ngu	i[cjaka\ra	

180	藁	Y	2	B	wa[ra / wa[ra/:	wa[ra\ngu	wa[raka\ra	
181	犬	Y	2	B	i[N	i[N\ngu	i[Nka\ra	
182	傘・笠	Y	2	B	ka[sa: / ka[sa/:	ka[sa\ngu	ka[sakara	
183	米	Y	2	B	ku[mĩ	ku[mĩngu	ku[mĩka\ra	
185	汁	Y	2	B	si[ru / si[ru/:	si[ru\ngu	si[ruka\ra	
187	顔	Y	2	B	cji[ra:	cji[ra\ngu	cji[rakara	
190	山	Y	2	B	ja[ma	ja[manu	ja[makara	
198	踵	Y	2	B	a[du	a[du\ngu	a[duka\ra	
200	耳	Y	2	B	mi[N	mi[N\ngu	mi[Nka\ra / mi[N/ka\ra	
201	味噌	Y	2	B	mi[su	mi[su\ngu	mi[suka\ra	
202	糠	Y	2	B	nu[ka:	nu[ka\ngu	nu[kaka\ra	
204	サトウキビ	Y	2	B	wu[gi	wu[gi\ngu	wu[gika\ra	
205	昨日	Y	2	C	ki[nu	-	ki[nuka\ra	ki[nu\ja 昨日は
206	青年	Y	2	B	ne[se	ne[se\ngu	ne[se\kara	
209	子供	Y	2	C	wa[re	wa[re\ngu	wa[re\kara	
211	蟬	Y	2	C	a[dza:	a[dza\ngu	a[dza\kara	
223	舌	Y	2	B	si[ba	si[ba\ngu	si[baka\ra	
229	萱	Y	2	B	gĩ[ja:	gĩ[ja\ngu	gĩ[jaka\ra	
230	去年	Y	2	B	ku[dzu	ku[dzu\ngu	ku[dzuka\ra	
235	韭	Y	2	B	bi[ra	bi[ra\ngu	bi[raka\ra	
×	綱	Y	2	-	?cji[na	?cji[na\ngu	-	
6	鋤	Y	3	-	toR[gẽ	toR[gẽ\ngu	toR[gẽ\kara	
29	蓆	Y	3	C	muQ[su	muQ[su\ngu	muQ[su\kara	
36	畑	Y	3	C	haQ[te	haQ[te\ngu	haQ[te\kara	
40	枕	Y	3	B	maQ[kwa	maQ[kwa\ngu	maQ[kwaka\ra	
57	黄金	Y	3	A	kuga[nĩ	kuga[nĩ\ngu	kuga[nĩka\ra	
60	若い娘	Y	3	C	mẽR[re	mẽR[re\ngu	mẽR[re\kara	
64	夜	Y	3	B	juR[ru	juR[ru\ngu	juR[rukara / juR[ru\kara	
65	油	Y	3	B	abu[ra	abu[ra\ngu	abu[rakara	
66	明日	Y	3	B	aQ[cja	aQ[cja\ngu	a[cjaka\ra	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mi\ngu	hasa[mika\ra	
76	櫛	Y	3	B	saR[ki	saR[ki\ngu	saR[kika\ra	
77	下駄	Y	3	B	aN[dza	aN[dza\ngu	aN[dzaka\ra	
85	しゃもじ	Y	3	C	misi[ge	misi[ge\ngu	misi[ge\kara	
89	ふくら脛	Y	3	B	kubĩ[ra	kubĩ[ranu	kubĩ[rakara	
103	俵	Y	3	B	toR[ra	toR[ranu	toR[rakara	
119	暦	Y	3	B	kojo[mi	kojo[mi\ngu	kojo[mi\kara	
120	命	Y	3	B	inu[cji	inu[cji\ngu	inu[cjikara	
122	糸	Y	3	C	iQ[cju	iQ[cju\ngu	iQ[cju\kara	
132	かんざし	Y	3	C	biQ[ko	biQ[ko\ngu	biQ[ko\kara	
134	鱗・ふけ	Y	3	B	iQ[kĩ	iQ[kĩ\ngu	iQ[kĩkara	
136	雲丹	Y	3	C	gaQ[cji	gaQ[cji\ngu	gaQ[cjika\ra	
152	南京豆（落花生）	Y	3	B	dzima[mĩ	dzima[mĩngu	dzima[mĩka\ra	
158	弟	Y	3	B	uQ[tu	uQ[tu\ngu	uQ[tuka\ra	
195	男	Y	3	B	jiN[ga	jiN[ga\ngu	jiN[gaka\ra	
227	女	Y	3	B	wuna[gu	wuna[gu\ngu	wuna[guka\ra	

234	灸	Y	3	C	jaQ[cjo	jaQ[cjo\ngu	jaQ[cjo\kara	
237	顎	Y	3	C	utu[ge	utu[ge\ngu	utu[ge\kara	
251	五つ	Y	3	B	icji[cji	-	-	
253	七つ	Y	3	B	nana[cji	-	-	
163	紐	Z	2	C	[kju/;vbi	[kju/;vbinu	[kju/;vbikara	系列別語彙では 「帯」の意味
174	来年	Z	2	C	[ja/;vni	[ja/;vninu	[ja/;vnikara	
213	とんぼ	Z	2	-	[bi/;vtu	[bi/;vtunu	[bi/;vtukara	
218	火	Z	2	C	[ma/;vcji	[ma/;cjinu	[ma/;cjika\ra	
244	バツタ	Z	2	C	[ga/;vta	[ga/;vtanu	[ga/;takara	
×	ミミズ	Z	2	-	[mi/;vda	-	-	
4	箒	Z	3	C	ho[R\ki	ho[R\kinu	ho[R\kikara	
5	頭	Z	3	C	ka[ra:vdzi	ka[ra\vdzinu	ka[ra\vdzikara	系列別語彙では 「髪」の意味
12	棘	Z	3	A	ji[Ngĩ	ji[Ngĩ\ngu	ji[Ngĩ\kara	
21	鋤	Z	3	B	ju[dzai	ju[dzai\ngu	ju[dza\vikara	
42	兎	Z	3	C	u[sa\gi	u[sa\gi nu	u[sa\gi kara	
43	扇・団扇	Z	3	C	o[R\gi	o[R\ginu	o[R\gikara	
44	葉	Z	3	C	ku[su\i	ku[su\inu	ku[su\vikara	
45	情け	Z	3	C	na[sa:\ki	na[sa\kinu	na[sa:\kikara	
63	刀	Z	3	C	ka[ta\na	ka[ta\nanu	ka[ta\nakara	
×	包丁	Z	3	-	ho[R\cja	ho[R\cjanu	ho[Rcjakara	
194	かぼちゃ	Z	3	C	cji[bu:\ru	cji[bu\runu	cji[bu:\rukara	
80	匂い	Z	3	-	ku[sa\i	ku[sa\inu	-	
98	左	Z	3	B	si[dza\i	si[dza\inu	si[dza\vikara	
129	あおさ	Z	3	C	o[R\sa	o[R\sanu	o[R\sakara / o[Rsakara	
138	親子	Z	3	C	u[ja:\kwa	u[jakwanu	-	
139	蚊	Z	3	C	ga[dzaN	ga[dzaN\ngu	ga[dzaNkara	
149	蝶	Z	3	B	ka[bi\ru	ka[birunu	ka[birakara	
154	へちま	Z	3	B	na[bira	na[bira\ngu	na[biraka\ra	
155	薪	Z	3	C	ta[mu\N	ta[muNnu	ta[muNkara	
160	とさか	Z	3	C	ka[gaN	ka[gaNnu	ka[ga\Nkara	
167	ふんどし	Z	3	C	sa[na:\gi	sa[na\ginu	sa[na\gikara	
177	鏡	Z	3	B	ka[gami	ka[ga\minu	ka[ga\mikara	
178	虱	Z	3	C	si[naN	si[naN\ngu	si[naN\kara	
179	鰻	Z	3	C	u[na\gi	u[na\ginu	u[na\gikara	
197	おでき	Z	3	C	ni[bu:vtu	ni[bu\vtunu	ni[bu\vtukara	
207	腰周り	Z	3	C	ga[ma:\ku	ga[ma\kunu	ga[ma:\kukara	
212	杖	Z	3	C	gu[saN	gu[saNnu	gu[saNkara	
215	みかん	Z	3	C	ku[niN	ku[niNnu	ku[ni\Nkara	
222	やどかり	Z	3	C	a[maN	a[maN\ngu	a[maNka\ra	
226	苺	Z	3	C	i[cju:vbi	i[cju\binu	i[cju\vbikara	
245	白髪	Z	3	C	si[ra\gi	si[ra\ginu	si[ra\gikara	
247	一つ	Z	3	C	?ti[R\cji	-	-	
26	鋸	Z	4	B	noR[giri	noR[giri\ngu	noR[girika\ra	
74	雷	Z	4	B	kaN[nai	kaN[nai\ngu	kaN[nai\ra	
91	水溜り・池	Z	4	B	kuN[mu\i	kuN[mu\inu	kuN[mu\vikara	
97	夜中	Z	4	B	juna[sa\na	juna[sa\nanu	juna[sanakara	

133	朝	Z	4	C	siti[mĩ\\ti	siti[mĩ\\tinu	siti[mĩtika\\ra	
147	台所・母屋と 独立した家屋	Z	4	B	toR[gura	toR[gura\\nu	toR[guraka\\ra	
192	暁	Z	4	C	aR[tu\\ki	aR[tu\\kinu	aR[tukika\\ra	
255	九つ	Z	4	-	kuR[nu\\cji / kuR[nucji	-	-	

Appendix 8. 西阿木名方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-kara	メモ
22	血	X	1	A	ʔcji:ʌ	ʔcji:ʌ\ɲu	ʔcji:ʌ\kara	
23	帆	X	1	A	hu:ʌ	hu:ʌ\ɲu	hu:ʌ\kara	
28	葉	X	1	A	ha:ʌ	ha:ʌ\ɲu	ha:ʌ\kara	
37	下	X	1	A	sju:ʌ	sju:ʌ\ɲu	sju:ʌ\kara	
78	洞窟	X	1	A	ʔjo:ʌ	ʔjo:ʌ\ɲu	ʔjo:ʌ\kara	
95	魚	X	1	A	ʔju:ʌ	ʔju:ʌ\ɲu	ʔju:ʌ\kara	
107	笹	X	1	A	de:ʌ	de:ʌ\ɲu	de:ʌ\kara	系列別語彙では「竹」の意味。
110	人	X	1	A	ʔcju:ʌ	ʔcju:ʌ\ɲu	ʔcju:ʌ\kara	
141	子	X	1	A	ʔkwa:ʌ	ʔkwa:ʌ\ɲu	ʔkwa:ʌ\kara	
142	中	X	1	C	na\ʌ	na\ʌ\ɲu	na\ʌ\kara	
159	上	X	1	A	ʔwi:ʌ	ʔwi:ʌ\ɲu	ʔwi:ʌ\kara	
162	門(入口)	X	1	B	dzo:ʌ	dzo:ʌ\ɲu	dzo:ʌ\kara	
168	豚	X	1	C	ʔwa:ʌ	ʔwa:ʌ\ɲu	ʔwa:ʌ\kara	
193	尾	X	1	A	dzu:ʌ	dzu:ʌ\ɲu	dzu:ʌ\kara	
233	前	X	1	C	mē\ʌ	mē\ʌ\ɲu	mē\ʌ\kara	
×	ざる	X	1	-	se\ʌ	se\ʌ\ɲu	se\ʌ\kara	
×	十	X	1	-	tu:ʌ	tu:ʌ\ɲu	-	
3	丘	X	2	A	mui	mui\ɲu	muika\ra	
10	草履	X	2	A	saba	saba\ɲu	sabaka\ra	
15	西・北	X	2	-	nīsī	nīsī\ɲu	nīsika\ra	
17	にんにく	X	2	A	huru	huru\ɲu	huruka\ra	
18	ほくろ	X	2	A	adza	adza\ɲu	adzaka\ra	
19	右	X	2	A	mi\vgi	mi\vginu	mi\vgikara	
25	飴	X	2	A	amī	amī\ɲu	amika\ra	
30	牙	X	2	A	ki:\ba / ki\ba	ki:\banu	ki:\bakara	
31	風	X	2	A	kadze	kadze\ɲu	kadzeka\ra	
38	袖	X	2	A	sudi	sudi\ɲu	sudika\ra	
39	羽	X	2	A	hanī	hanī\ɲu	hanika\ra	
46	柱	X	2	C	ha\ra	ha\ranu	ha\rakara	
47	星	X	2	A	husī	husī\ɲu	husika\ra	
51	露	X	2	C	cji\ju	cji\junu	cji\jukara	
54	舟	X	2	C	hu\ni	hu\ni\ɲu	hu\nikara	
56	骨	X	2	C	hu\ni	hu\ni\ɲu	hu\nikara	
61	鳥・鶏	X	2	A	tui	tui\ɲu	tuika\ra	
67	蟻	X	2	A	aN	aN\ɲu	aNka\ra	
×	塩	X	2	-	ʔma\sju	ʔma\sjunu	ʔma\sjukara	
70	夫	X	2	A	wutu	wutu\ɲu	wutuka\ra	
73	北(西)	X	2	A	nisi	nisi\ɲu	nisika\ra	
79	きのこ	X	2	C	na\ba	na\banu	na\bakara	
80	匂い	X	2	A	kadza	kadza\ɲu	kadzaka\ra	
87	煤	X	2	C	si\si	si\sinu	si\sikara	家に付く煤を指す。
90	烏賊	X	2	A	ikja	ikja\ɲu	ikjaka\ra	
93	石	X	2	A	isi	isi\ɲu	isika\ra	
96	傷	X	2	A	kidzi	kidzi\ɲu	kidzika\ra	
101	水桶・汲み桶	X	2	-	ta\ru	ta\runu	ta\rukara	mīdzi[<i>daru</i> 水盥]
102	腰	X	2	A	kusi	kusi\ɲu	kusika\ra	

104	酒	X	2	A	saki	saki\Nnu	sakika\ra	
107	竹	X	2	-	gara	gara\Nnu	garaka\ra	
109	箱	X	2	A	haku	haku\Nnu	hakuka\ra	
114	筆	X	2	A	hudi	hudi\Nnu	hudika\ra	
115	鼻	X	2	A	hana	hana\Nnu	hanaka\ra	
117	水	X	2	A	mīdzi	mīdzi\Nnu	mīdzika\ra	
123	橋	X	2	A	hasi	hasi\Nnu	hasika\ra	
126	影・陰	X	2	C	ka\gī	ka\gīnu	ka\gīkara	
127	海	X	2	C	u\N	u\Nnu	u\Nkara	
140	甕	X	2	C	ka\mī	ka\mīnu	ka\mīkara	
144	尻・後ろ	X	2	B	ma\i	ma\inu	ma\ikara	
145	浜	X	2	C	ha\ma / ha\ma	ha\manu	ha\makara	
146	友	X	2	A	dusi	dusi\Nnu	dusika\ra	
148	梢・サトウキビの先端	X	2	C	su\ra	su\ranu	su\rakara	
156	卵	X	2	C	ku\ga	ku\ganu	ku\gakara	
157	太陽	X	2	C	ti\da	ti\danu	ti\dakara	
161	ひしゃく	X	2	C	nī\bu	nī\bunu	nī\bukara	
×	門	X	2	-	kadu	kadu\Nnu	kaduka\ra	
165	椀	X	2	-	wa\N	wa\Nnu	wa\Nkara	
166	口	X	2	A	kucji	kucji\Nnu	kucjika\ra	
169	釘	X	2	A	kugi	kugi\Nnu	kugika\ra	
171	息	X	2	C	i\ki	i\kinu	i\kikara	
172	目上の人	X	2	C	sī\da	sī\danu	sī\dakara	
173	蓬	X	2	C	hu\cjī	hu\cjīnu	hu\cjīkara	
176	臼	X	2	C	u\si	u\sinu	u\sikara	
184	声	X	2	C	ku\i	ku\inu	ku\ikara	
186	鍋	X	2	C	na\bi	na\binu	na\bikara	
188	蚤	X	2	C	nu\mi	nu\minu	nu\mikara	
191	妻	X	2	A	tudzi	tudzi\Nnu	tudzika\ra	
196	竈	X	2	-	kama	kama\Nnu	kamaka\ra	
199	猿	X	2	C	sa\ru	sa\runu	sa\rukara	
203	鮫	X	2	A	saba	saba\Nnu	sabaka\ra	
210	砂糖	X	2	C	sa\ta	sa\tanu	sa\takara	
216	牛	X	2	A	usi	usi\Nnu	usika\ra	
219	音	X	2	A	utu	utu\Nnu	utuka\ra	
220	布団	X	2	C	u\du	u\dunu	u\dukara	
231	烏	X	2	C	ga\ra	ga\ranu	ga\rakara	
232	松	X	2	C	ma\cji	ma\cjinu	ma\cjikara	
240	籠の一種	X	2	C	ti\ru	ti\runu	ti\rukara	
246	紙	X	2	A	kabi	kabi\Nnu	kabika\ra	
×	夫の父(2)	X	2	-	husju	-	-	
×	囲炉裏	X	2	-	dzi\ru	dzi\runu	dzi\rukara	
×	杵	X	2	-	cji\cji	cji\cjinu	cji\cjikara	
7	煙	X	3	A	kību\si	kību\sinu	kībusika\ra	
8	袋	X	3	C	huQ\ku	huQ\kunu	huQ\kukara	
11	食料・主食	X	3	A	haNmē / haNmē:	haNmē\Nnu	haNmē:ka\ra	
12	棘	X	3	A	nīNgī	nīNgī\Nnu	nīNgīka\ra	
27	港	X	3	-	mina\to	mina\tonu	minatoka\ra	

49	麴・カビ	X	3	A	koR\dzĩ	koR\dzĩnu	koRdzika\ra	
52	畳	X	3	A	tata\mĩ	tata\mĩnu	tatamĩka\ra	
59	鼻血	X	3	A	hana\dzĩ	hana\dzĩnu	hanadzika\ra	
82	虹	X	3	A	noR\dzĩ	noR\dzĩnu	noR\dzikara	
82	虹	X	3	A	noR\gi	noR\ginu	noR\gikara	
86	膝小僧	X	3	A	cjiN\si	cjiN\sinu	cjiN\sikara	
87	煤	X	3	A	hiNgu	hiNgu\ngu	hiNguka\ra	鍋の底の煤を指す。 系列別語彙では 「垢」の意。
135	釜	X	3	A	haga\ma	haga\manu	hagamaka\ra	
143	空	X	3	A	teNto	teNto\ngu	teNtoka\ra	
150	今年	X	3	-	kutu\si	kutu\sinu	kutusika\ra	
151	ごちそう	X	3	-	?kwaR\ki	?kwaR\kinu	?kwaR\kikara	
189	涎	X	3	A	juda\ji	juda\jĩnu	juda\jikara / judajika\ra	
208	臍	X	3	A	husju	husju\ngu	husjuka\ra	
244	バツタ	X	3	C	gaQ\ta	gaQ\tanu	gaQ\takara	
248	二つ	X	3	A	?taR\cji	?taRcji\ngu	-	
249	三つ	X	3	A	miR\cji	miRcji\ngu	-	
250	四つ	X	3	A	juR\cji	juRcji\ngu	-	
252	六つ	X	3	A	muR\cji	muRcjinu	-	
254	八つ	X	3	A	jaR\cji	jaR\cjinu	-	
×	夫の父(1)	X	3	-	huQsju	-	-	
×	鮫の一種	X	3	-	hwĩQ\tu	hwĩQ\tunu	hwĩQ\tukara	
239	刺青	X	4	-	iri\dzumi	iri\dzuminu	iridzumika\ra	
72	貝	Y	1	B	[mja/;	[mja/;\ngu	[mja;/ka\ra	
99	齒	Y	1	B	[ha/;	[ha/;\ngu	[ha;/ka\ra	
100	木	Y	1	B	[ki/;	[ki/;\ngu	[ki;/ka\ra	
108	湯	Y	1	B	[ju/;	[ju/;\ngu	[ju;/ka\ra	
164	手	Y	1	B	[ti/;	[ti/;\ngu	[ti;/ka\ra	
170	目	Y	1	B	[mĩ/;	[mĩ/;\ngu	[mĩ;/ka\ra	
221	穂	Y	1	B	[hu/;	[hu/;\ngu	[hu;/ka\ra	
224	家	Y	1	B	[ja/;	[ja/;\ngu	[ja;/kara	
2	種	Y	2	A	ta[nĩ:	ta[nĩnu / ta[nĩ;\ngu	ta[nĩ/ka\ra	
13	涙	Y	2	B	na[da / na[da/:	na[da\ngu / na[da/;\ngu	na[daka\ra / na[da/ka\ra	
14	着物	Y	2	A	ki[N	ki[N\ngu	ki[N/ka\ra	
33	暇	Y	2	B	ma[du / ma[du/:	ma[du\ngu	ma[du/ka\ra	
35	畠	Y	2	B	ha[ru:	ha[ru\ngu	ha[ru/ka\ra	
41	鹽	Y	2	C	ta[re: / ta[re\:	ta[re\ngu	ta[re:ka\ra / ta[re/ka\ra	
48	島	Y	2	B	si[ma: / si[ma/:	si[ma\ngu	si[ma/ka\ra	
50	角	Y	2	B	cji[no / cji[no/:	cji[no\ngu	cji[no/ka\ra	
53	波	Y	2	B	na[mi	na[mi\ngu / na[mi;\ngu	na[mi/ka\ra	
58	脛	Y	2	B	si[nĩ	si[nĩnu	si[nĩ/ka\ra	sini[ju\ka 足より
62	花	Y	2	B	ha[na / ha[na/:	ha[na\ngu / ha[na/;\ngu	ha[na/ka\ra	kjura[hanagwaきれいな花
64	夜	Y	2	B	ju[ru	ju[ru\ngu	ju[ru\kara	
75	亀	Y	2	B	ka[mĩ: / ka[mĩ/:	ka[mĩ\ngu	ka[mĩ/ka\ra	

81	蛸	Y	2	B	to[R	to[R\ɳu	to[R/ka\ra	hu:toR 大きい蛸 kwa: toRgwa 小さい蛸
83	土	Y	2	B	ni[cja / ni[cja/:	ni[cja:\ɳu	ni[cja/ka\ra	ni[cja[ga\ɳi 土瓶 ni[cja[juka 土より
84	東	Y	2	-	ku[cji	ku[cji\ɳu	ku[cji/ka\ra	
88	腹	Y	2	B	wa[ta / wa[ta/:	wa[ta:\ɳu / wa[ta/:\ɳu	wa[ta/ka\ra	
92	たんこぶ	Y	2	C	ga[bu	ga[bu:\ɳu	ga[bu/ka\ra / ga[buka\ra	
94	南	Y	2	B	ha[i	ha[i\ɳu	ha[i/ka\ra	
105	網	Y	2	B	a[mi	a[mi\ɳu	a[mi/ka\ra	
106	雨	Y	2	B	a[mĩ	a[mĩ\ɳu	a[mĩ/ka\ra	
111	雲	Y	2	B	ku[mo	ku[mo\ɳu	ku[mo/ka\ra	
112	鎌	Y	2	B	ka[ma / ka[ma/:	ka[ma\ɳu	ka[ma/ka\ra	
113	色	Y	2	B	i[ru	i[ruɳu	i[ru/ka\ra	
116	桶	Y	2	C	u[kĩʋ: / u[kĩ	u[kĩ\ɳu	u[kĩ/ka\ra	
118	豆	Y	2	B	ma[mĩ	ma[mĩ\ɳu	ma[mĩ/ka\ra	
121	麦	Y	2	B	mu[gi:	mu[gi\ɳu	mu[gi/ka\ra	
125	草	Y	2	B	ku[sa / ku[sa/:	ku[sa/:\ɳu	ku[sa/ka\ra	
137	櫓	Y	2	-	ka[jo	ka[jo\ɳu	ka[jo/ka\ra	
153	肉	Y	2	B	si[si	si[si\ɳu	si[si/ka\ra	wa:si 豚肉
175	板	Y	2	B	i[cja / i[cja/:	i[cja\ɳu	i[cja/ka\ra	
180	藁	Y	2	B	wa[ra / wa[ra/:	wa[ra:\ɳu	wa[ra/ka\ra	
181	犬	Y	2	B	i[N	i[N\ɳu	i[N/ka\ra	
182	傘・笠	Y	2	B	ka[sa/:	ka[sa:\ɳu	ka[sa/ka\ra	
183	米	Y	2	B	ku[mĩ / ku[mĩ/:	ku[mĩ\ɳu	ku[mĩ/ka\ra	
185	汁	Y	2	B	si[ru / si[ru:	si[ru:\ɳu	si[ru/ka\ra	
187	顔	Y	2	B	cji[ra:	cji[ra:\ɳu	cji[ra/ka\ra	
190	山	Y	2	B	ja[ma	ja[ma\ɳu	ja[ma/ka\ra	
198	踵	Y	2	B	a[du / a[du/:	a[du:\ɳu	a[du/ka\ra	
200	耳	Y	2	B	mi[N	mi[Nɳu / mi[N\ɳu	mi[N/ka\ra	
201	味噌	Y	2	B	mi[sju	mi[sju\ɳu	mi[sju/ka\ra	
202	糠	Y	2	B	nu[ka / nu[ka/:	nu[ka\ɳu	nu[ka/ka\ra	
204	サトウキビ	Y	2	B	wu[gi	wu[gi\ɳu	wu[gi/ka\ra	
205	昨日	Y	2	C	ki[nu	ki[nu:\ɳu	ki[nu:\kara	
206	青年	Y	2	B	nĩ[se/:^	nĩ[se:^\ɳu	nĩ[se:^\kara	
209	子供	Y	2	C	wa[re	wa[re\ɳu	wa[re/:\kara	
223	舌	Y	2	B	si[ba:	si[ba:\ɳu	si[ba/ka\ra	
229	萱	Y	2	B	gĩ[ja	gĩ[ja:\ɳu	gĩ[ja/ka\ra	gĩja[buki 萱草
230	去年	Y	2	B	ku[dzu	ku[dzu:\ɳu	ku[dzu:\kara	
235	韭	Y	2	B	bi[ra	bi[ra:\ɳu	bi[ra/ka\ra	
×	綱	Y	2	-	cji[na: / cji[na/:	cji[na/:\ɳu	cji[na/ka\ra	
6	鋤	Y	3	-	toR[gi	toR[gi\ɳu	toR[gi\kara	
29	蓆	Y	3	C	muQ[sjuʋ: / muQ[sju	muQ[sjuʋ:\ɳu	muQ[sjuʋ:\kara	a:\muQsju 赤い蓆 kuru[muQsju 黒い蓆
36	畑	Y	3	C	haQ[teʋ:^	haQ[teʋ:^ɳu	haQ[teʋ:^kara	haN[dziNbaQte サツ マイモ畑
40	枕	Y	3	B	maQ[kwa	maQ[kwa\ɳu	maQ[kwaka\ra	
45	情け	Y	3	C	nasa[kĩ	nasa[kĩ\ɳu	nasa[kĩka\ra	

60	若い娘	Y	3	C	mēR[re	mēR[re\ɲu	mēR[re\ɪ:kara	kjura[mēRre きれいな娘
65	油	Y	3	B	aN[ba	aN[ba\ɲu	aN[baka\ra	
66	明日	Y	3	B	aQ[cja	aQ[cja\ɲu	aQ[cja\ɪ:kara	
69	腕	Y	3	B	kai[na	kai[na\ɲu	kai[naka\ra	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mi\ɲu	hasa[mika\ra	
77	下駄	Y	3	B	aN[dza	aN[dza\ɲu	aN[dzaka\ra	
89	ふくら脛	Y	3	B	kuN[ba / kuN[ba\ɪ:	kuN[ba\ɲu	kuN[baka\ra	
103	俵	Y	3	B	toR[ra	toR[ra\ɲu	toR[raka\ra	
119	暦	Y	3	B	kuju[mi	kuju[mi\ɲu	kuju[mika\ra	
120	命	Y	3	B	inu[cji	inu[cji\ɲu	inu[cji\ɪkara	
122	糸	Y	3	C	iQ[cju	iQ[cju\ɲu	iQ[cju\ɪ:kara	
124	肩	Y	3	B	kaQ[ta	kaQ[ta\ɲu	kaQ[ta\ɪ:kara	
134	鱗・ふけ	Y	3	B	iQ[kī	iQ[kī\ɲu	iQ[kika\ra	
136	雲丹	Y	3	C	gacji[cji	gacji[cji\ɲu	gacji[cjika\ra	
139	蚊	Y	3	C	gadza[N / ga/dza[N	ga/dza[Nɲu	gadza[N/ka\ra	
152	南京豆 (落花生)	Y	3	B	dzima[mī	dzima[mī\ɲu	dzima[mika\ra	
154	へちま	Y	3	B	nabī[ra	nabī[ra\ɲu	nabī[raka\ra	
155	薪	Y	3	C	tamu[N	tamu[N\ɲu	tamu[N/ka\ra	
158	弟	Y	3	B	uQ[tu	uQ[tu\ɲu	uQ[tuka\ra	
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[mi\ɲu	kaga[mika\ra	
195	男	Y	3	B	jiN[ga	jiN[ga\ɲu	jiN[gaka\ra	
207	腰周り	Y	3	C	gama[ku	gama[ku\ɲu	gama[kuka\ra	腰より上の方
214	モッコ (運搬網)	Y	3	B	oR[da	oR[da\ɲu	oR[daka\ra	
226	苺	Y	3	C	icju[N / i/cju[N	icju[N\ɲu / i/cju[N\ɲu	i/cju[N\ɪkara	
227	女	Y	3	B	wuna[gu	wuna[gu\ɲu	wuna[guka\ra	
234	灸	Y	3	C	jaQ[cjo	jaQ[cjo\ɲu	jaQ[cjo\ɪ:kara	
236	杵	Y	3	C	adzi[N	a/dzi[N\ɲu	a/dzi[N\ɪkara	細長い。味噌をつく時使う。
237	顎	Y	3	C	utu[gē	utu[gē\ɲu	utu[gē\ɪ:kara	
241	籠の一種	Y	3	C	baQ[kē	baQ[kē\ɲu	baQ[kē\ɪkara	取った魚を入れる籠
251	五つ	Y	3	B	icji[cji	icji[cjinu	-	
253	七つ	Y	3	B	nana[cji	nana[cjinu	-	
1	垢	Z	2	-	[a/;ɸki	[a/;ɸkinu	[a/;ɸkikara	
55	針	Z	2	C	[ha/;ɸi	[ha/;ɸinu	[ha/;ɸikara	nu[ibai 縫い針 hu:ba ɸi 大きい針
228	帯	Z	2	C	[kju/;ɸbī	[kju/;ɸbīnu	[kju/;ɸbīkara	細い。男性用
174	来年	Z	2	C	[ja/;ɸni	[ja/;ɸninu	[ja/;ɸnikara	
218	火	Z	2	C	[ma/;ɸcji	[ma/;ɸcjinu	[ma/;ɸcjikara	
4	箒	Z	3	C	ho[Rɸki	ho[Rɸkinu	ho[Rɸkikara	
5	頭	Z	3	C	ka[ra:ʌɸdzī	ka[ra:ʌɸdzīnu	ka[ra:ʌɸdzikara	系列別語彙では「髪」の意味
21	鋤	Z	3	B	ji[dzai	ji[dzai\ɲu	ji[dzai\ɪkara	
42	兎	Z	3	C	u[sa:ɸgi / u[saɸgi	u[sa:ɸginu	u[saɸgikara	
43	扇・団扇	Z	3	C	o[Rɸgi	o[Rɸginu	o[Rɸgikara	
44	葉	Z	3	C	ku[sui / ku[suɸi	ku[sui\ɲu	ku[sui\ɪkara	

63	刀	Z	3	C	ka[ta:\na	ka[ta:\nanu	ka[tanaka\ra	
×	包丁	Z	3	-	ho[R\vcja	ho[R\vcjanu	ho[R\vcjakara	
76	櫛	Z	3	B	saR[ki / sa[R\ki	saR[kinu	sa[Rkika\ra	a:\saRki 赤い櫛 kuru[saR\ki 黒い櫛
194	かぼちゃ	Z	3	-	cji[bu:\ru / cji[bu\ru	cji[bu:\runu	cji[bu:\rukara	a:\vcjiburu 赤い苺
85	しゃもじ	Z	3	-	sja[ku:\^lsi	sja[ku:\^lsinu	sja[ku:\^lsikara	
91	水溜り・池	Z	3	B	ku[mu\i	ku[mui\vu	ku[muika\ra	
98	左	Z	3	B	hi[dza\ji	hi[dzaji\vu	hi[dzaji\kara	
129	あおさ	Z	3	C	o[R\sa	o[R\sanu	o[R\sakara	
149	蝶	Z	3	B	ha[bī:\ru	ha[bī\runu / ha[bīru\vu	ha[bī\rukara	
160	とさか	Z	3	C	ka[gaN	ka[gaN\vu	ka[ga\Nkara	
167	ふんどし	Z	3	C	sa[na:\vgi	sa[na:\vginu	sa[na\vgikara	
178	虱	Z	3	C	si[raN	si[raN\vu	si[ra\Nkara	
179	鰻	Z	3	C	u[na\vgi	u[na\vginu	u[na\vgikara	
197	おでき	Z	3	C	ni[bu:\tu	ni[bu:\tunu	ni[bu:\tukara	
211	蟬	Z	3	C	a[sa:\^lsa	a[sa:\^lsanu	a[sa:\^lsakara	
212	杖	Z	3	C	gu[saN	gu[saN\vu	gu[sa\Nkara	
213	とんぼ	Z	3	-	ka[ni\ba / ka[ni:\ba	ka[ni:\banu	ka[ni:\bakara	
215	みかん	Z	3	C	ku[niN	ku[niN\vu	ku[ni\Nkara	
222	やどかり	Z	3	C	a[maN	a[maN\vu	a[ma\Nkara	
245	白髪	Z	3	C	si[ra:\^vgi	si[ra:\^vginu	si[ra:\^vgikara	
247	一つ	Z	3	C	?ti[R\vcji	?ti[R\vcjinu	-	
255	九つ	Z	3	-	ku:[nucji / ku[nucji	ku[nucji\vu	-	
26	鋸	Z	4	B	noR[gi	noR[gi\vu	noR[gi\ra	
32	ソテツの実	Z	4	-	jaN[bu\i	jaN[bu\inu	jaN[bu\ikara	系列別語彙では 「実」の意味
74	雷	Z	4	B	kaN[nai	kaN[nai\vu	kaN[nai\ra	
97	夜中	Z	4	B	juna[sa\na	juna[sa\nanu	juna[sanaka\ra	
133	朝	Z	4	C	siti[mī\ti	siti[mī\tinu	siti[mī\तिकारा	
138	親子	Z	4	C	uja[Q\kwa / u/ja[Q\kwa	u/ja[Q\kwanu	uja[Q/kwaka\ra	
147	台所・母屋と 独立した家屋	Z	4	B	toR[gura	toR[gura\vu	toR[guraka\ra	
192	暁	Z	4	C	aR[tu\ki	aR[tu\kinu	aR[tu\kikara	
×	徳利	Z	4	-	tuQ[kui	-	-	tuQ[kuiga\mi 徳利瓶

Appendix 9. 阿権方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-kara	メモ
22	血	X	1	A	cji:˘	cji:˘\nu	cji:˘ka\ra	
23	帆	X	1	A	hu:˘	hu:˘\nu	hu:˘ka\ra	
28	葉	X	1	A	hwa:˘	hwa:˘\nu	hwa:˘ka\ra	
37	下	X	1	A	sja:˘	sja:˘\nu	sja:˘ka\ra	
95	魚	X	1	A	ʔju:˘	ʔju:˘\nu	ʔju:˘ka\ra	
116	桶	X	1	C	ʔwĩ\:	ʔwĩ\:\nu	ʔwĩ\:\kara	
107	竹	X	1	A	de:˘	de:˘\nu	de:˘ka\ra	
110	人	X	1	A	ʔcju:˘	ʔcju:˘\nu	ʔcju:˘ka\ra	
142	中	X	1	C	na\:	na\:\nu	na\:\kara	
159	上	X	1	A	wĩ:	wĩ\:\nu	wĩka\ra	
162	門	X	1	B	dzo\:	-	-	
168	豚	X	1	C	ʔwa\˘:	ʔwa\˘:\nu	ʔwa\˘:\kara	
×	兄	X	1	-	mĩ\˘:	mĩ\˘:\nu	mĩ\˘:\kara	
184	声	X	1	C	kwĩ\˘:	kwĩ\˘:\nu	kwĩ\˘:\kara	
193	尾	X	1	A	dzu:˘	dzu:˘\nu	dzu:˘ka\ra	
141	子	X	1	A	ʔkwa	ʔkwa\:\nu	ʔkwa:ka\ra	
233	前	X	1	C	mě\˘:	mě\˘:\nu	mě\˘:\kara	
×	ざる	X	1	-	se\˘:	se\˘:\nu	se\˘:\kara	
3	丘	X	2	A	muri	muri\:\nu	murika\ra	
8	袋	X	2	C	hu\ku	hu\kunu	hu\kukara	
9	坂	X	2	A	hira	hira\:\nu	hiraka\ra	
10	草履	X	2	A	saba	saba\:\nu	sabaka\ra	
12	(魚の)棘	X	2	A	nigi	nigi\:\nu	nigika\ra	
16	西	X	2	A	iri	iri\:\nu	irika\ra	
17	にんにく	X	2	A	huru:	huru\:\nu	huruka\ra	
18	あざ・ほくろ	X	2	A	adza:	adza\:\nu	adza:ka\ra	
25	飴	X	2	A	amĩ	amĩ\:\nu	amika\ra	
31	風	X	2	A	kadzĩ	kadzĩ\:\nu	kadzika\ra	
34	暇	X	2	-	hima	hima\:\nu	himaka\ra	
38	袖	X	2	A	sĩdi	sĩdi\:\nu	sĩdika\ra	
39	羽	X	2	A	hanĩ	hanĩ\:\nu	hanĩka\ra	
46	柱	X	2	C	ha\ɾja	ha\ɾjanu	ha\ɾjakara	
49	星	X	2	A	husi	husi\:\nu	husika\ra	
51	霧	X	2	C	tsu\ɟju	tsu\ɟjunu	tsu\ɟjukara	
54	舟	X	2	C	hu\ɳĩ	hu\ɳĩnu	hu\ɳĩkara	
55	針	X	2	C	ha\ɾri	ha\ɾrinu	ha\ɾrikara	
56	骨	X	2	C	hu\ɳĩ	hu\ɳĩnu	hu\ɳĩkara	
61	鳥・鶏	X	2	A	turi	turi\:\nu	turika\ra	
67	蟻	X	2	A	ari	ari\:\nu	arika\ra	
70	夫	X	2	A	wutu	wutu\:\nu	wutuka\ra	
78	洞窟	X	2	A	gama	gama\:\nu	gamaka\ra	
79	きのこ	X	2	C	na\ba	na\banu	na\bakara	
80	匂い	X	2	A	kadza	kadza\:\nu	kadzaka\ra	
87	煤	X	2	C	su\su	su\sunu	su\sukara	古語。今はhuNgu
90	烏賊	X	2	A	ika	ika\:\nu	ikaka\ra	
93	石	X	2	A	isi	isi\:\nu	isika\ra	
96	傷	X	2	A	kidzĩ	kidzĩ\:\nu	kidzĩka\ra	

102	腰・後ろ	X	2	A	kusi	kusi\Nu	kusika\ra	
104	酒	X	2	A	sakī	sakī\Nu	sakīka\ra	
107	竹	X	2	-	gara	gara\Nu	garaka\ra	
109	箱	X	2	A	haku	haku\Nu	hakuka\ra	
114	筆	X	2	A	hudi	hudi\Nu	hudika\ra	
115	鼻	X	2	A	hana	hana\Nu	hanaka\ra	
117	水	X	2	A	mīdzī	mīdzī\Nu	mīdzīka\ra	
123	橋	X	2	A	hasi	hasi\Nu	hasika\ra	
126	影	X	2	C	ka\gī	ka\gīnu	ka\gīkara	
127	海	X	2	C	uN / u\N	u\Nnu	u\Nkara	
140	甕	X	2	C	ka\mī	ka\mīnu	ka\mīkara	
143	空	X	2	-	teN	teN\Nu	teNka\ra	
144	尻	X	2	B	ma\ri	ma\rinu	ma\rikara	
145	浜	X	2	C	ha\ma	ha\manu	ha\makara	
146	友	X	2	A	dusi	dusi\Nu	dusika\ra	
148	梢・サトウキビの先端	X	2	C	su\ra	su\ranu	su\rakara	
156	卵	X	2	C	ku\lga	ku\lganu	ku\lgakara	
157	太陽	X	2	C	tī\da	tī\danu	tī\dakara	
166	口	X	2	A	kucji	kucji\Nu	kucjika\ra	
169	釘	X	2	A	kugi	kugi\Nu	kugika\ra	
171	息	X	2	C	i\ki	i\kinu	i\kikara	
172	目上の人・兄	X	2	C	sī\da	sī\danu	sī\dakara	
173	蓬	X	2	C	hu\tsī	hu\tsīnu	hu\tsīkara	
176	白	X	2	C	u\si	u\sinu	u\sikara	
186	鍋	X	2	C	na\bī	na\bīnu	na\bīkara	
188	蚤	X	2	C	nu\mi / nu\mi	nu\minu	nu\mikara	
191	妻	X	2	A	tudzi	tudzi\Nu	tudzika\ra	
196	竈	X	2	A	kama	kama\Nu	kamaka\ra	
199	猿	X	2	C	sa\ru	sa\runu	sa\rukara	
203	鮫	X	2	-	same	same\Nu	sameka\ra	
208	臍	X	2	A	husu	husu\Nu	husuka\ra	
210	砂糖	X	2	C	sa\ta	sa\tanu	sa\takara	
216	牛	X	2	A	usi	usi\Nu	usika\ra	
219	音	X	2	A	utu	utu\Nu	utuka\ra	
220	布団	X	2	C	u\du	u\dunu	u\dukara	
228	帯	X	2	-	u\bi	u\binu	u\bikara	
231	烏	X	2	C	ga\ra / [ga/;\ra	ga\ranu	ga\rakara	
232	松	X	2	C	ma\tsu / [ma/;\tsu	ma\tsu	ma\tsukara	
236	杵(餅つき用)	X	2	-	cji\cji	cji\cjinu	cji\cjikara	
240	籠の一種	X	2	C	ti\ru	ti\runu	ti\rukara	
×	箕	X	2	-	ha\ra	ha\ranu	ha\rakara	
246	紙	X	2	A	kami	kami\Nu	kamika\ra	
×	十	X	2	-	tuR	-	-	
1	垢	X	3	A	huNgu	huNgunu / huNgu\Nu	huNguka\ra	
7	煙	X	3	A	kibu\si	kibu\sinu	kibu\sikara	
11	食料・主食	X	3	A	haNmē	haNmē\Nu	haNmē:ka\ra	

19	右	X	3	A	niga\ri	niga\rinu	niga\rikara	
49	翅	X	3	A	koR\dzi	koR\dzinu	koR\dzikara	
52	畳	X	3	A	tata\mī	tata\mīnu	tata\mīkara	
57	黄金	X	3	A	hwa:^\ganī	hwa:^\ganīnu	hwa:^\ganīkara	
59	鼻血	X	3	A	hana\dzī	hana\dzīnu	hana\dzīkara	
82	虹	X	3	A	noR\gi	noR\ginu	noR\gikara	
84	東	X	3	A	agare	agare\nu	agareka\ra	
86	膝小僧	X	3	A	tsiN\si	tsiN\sinu	tsiN\sikara	
89	ふくら脛	X	3	B	KuNba	KuNba\vu	KuNbaka\ra	
135	釜	X	3	A	haga\ma	haga\manu	hagamaka\ra	
150	今年	X	3	-	kutu\si	kutu\sinu	kutusika\ra	
151	ごちそう	X	3	-	kwaQ\ki	kwaQ\kinu	kwaQ\kikara	
189	涎	X	3	A	juda\ri	juda\rinu	judarika\ra	
248	二つ	X	3	A	?taR\tsī	-	-	
249	三つ	X	3	A	miR\tsī	-	-	
250	四つ	X	3	A	juR\tsī	-	-	
252	六つ	X	3	A	muR\tsī	-	-	
254	八つ	X	3	A	jaR\tsī	-	-	
192	暁	X	4	C	aRtu\ki	aRtu\kinu	aRtu\kikara	
239	刺青	X	4	-	iri\dzīmī	iri\dzīmīnu	iri\dzīmīkara	
68	潮・海水	Y	1	B	[sju/;	[sju/;\nu	[sju;/ka\ra	
81	蛸	Y	1	B	[to/;	[to/;\nu	[to;/ka\ra	
99	齒	Y	1	B	[hwa/;	[hwa/;\nu	[hwa/;\kara / [hwa;/ka	
100	木	Y	1	B	[ki/;	[ki/;\nu	[ki/;ka\ra	
108	湯	Y	1	B	[ju/;	[ju/;\nu	[ju;/ka\ra	
164	手	Y	1	B	[ti/;	[ti/;\nu	[ti/;ka\ra	
170	目	Y	1	B	[mī/;	[mī/;\nu	[mī/;kara	
221	穂	Y	1	B	[hu/;	[hu/;\nu	[hu;/ka\ra	
224	家	Y	1	B	[ja/;	[ja/;\nu	[ja/;ka\ra	
2	種	Y	2	A	ta[nī	ta[nī\vu	ta[nī;ka\ra	
13	涙	Y	2	B	na[da	na[da\vu	na[daka\ra	
14	着物	Y	2	A	ki[N	ki[N\vu	ki[N/ka\ra	
32	実・果物	Y	2	B	na[ri	na[ri\vu	na[rika\ra	
35	皁	Y	2	B	ha[ru	ha[ru\vu	ha[ru;ka\ra	
36	畑	Y	2	C	ha[te / ha[te/:	ha[te\vu / ha[te/;\nu	ha[te/;\kara	
41	鹽	Y	2	C	ta[re/:	ta[re/;\nu	ta[re/;\kara	
48	島	Y	2	B	si[ma	si[ma\vu	si[maka\ra	
50	角	Y	2	B	tsi[nu / tsi[nu/:	tsi[nu/;\nu	tsi[nuka\ra	
53	波	Y	2	B	na[mi	na[mi\vu	na[mika\ra	
58	足	Y	2	B	si[nī	si[nī\vu	si[nī;ka\ra	
62	花	Y	2	B	ha[na / ha[na/:	ha[na/;\nu	ha[naka\ra	
64	夜	Y	2	B	ju[ru/:	ju[ru/;\nu	ju[ru/;\kara	
66	明日	Y	2	B	a[cja/:	a[cja/;\nu	a[cja/;\kara	
69	腕	Y	2	-	u[dī / u[dī/:	u[dī/;\nu	u[dī/;\kara	
75	亀	Y	2	B	ka[mī / ka[mī/:	ka[mī/;\nu	ka[mīka\ra	
83	土	Y	2	B	ni[cja/:	ni[cja/;\nu / ni[cja/;\nu	ni[cjaka\ra	

88	腹	Y	2	B	wa[ta / wa[ta/:	wa[ta\ngu / wa[ta/::nu	wa[taka\ra	
92	たんこぶ	Y	2	C	da[gu / da[gu/:	da[gu\ngu / da[gu/::nu	da[guka\ra	
94	南	Y	2	B	ha[i	ha[i\ngu	ha[ika\ra	
105	網	Y	2	B	a[mi / a[mi/:	a[mi\ngu / a[mi::gu	a[mika\ra	
106	雨	Y	2	B	a[mī / a[mī/:	a[mī\ngu	a[mika\ra	
111	雲	Y	2	B	ku[mu / ku[mu/:	ku[mu\ngu	ku[muka\ra	
112	鎌	Y	2	B	ka[ma	ka[ma\ngu	ka[ma:ka\ra	
113	色	Y	2	B	i[ru	i[ru\ngu	i[ru\::kara	
118	豆	Y	2	B	ma[mī / ma[mī/:	ma[mī::gu	ma[mika\ra	
121	麦	Y	2	B	mu[gi / mu[gi/:	mu[gi::gu / mu[gi/::nu	mu[gika\ra	
122	糸	Y	2	C	i[cju/:	i[cju/::gu	i[cju:ka\ra / i[cju/::ka\ra	
124	肩	Y	2	B	ka[ta / ka[ta/:	ka[ta/::gu	ka[ta::kara	
125	草	Y	2	B	ku[sa / ku[sa/:	ku[sa\ngu	ku[saka\ra	
128	陰	Y	2	-	ka[ta / ka[ta/:	ka[ta\ngu / ka[ta/::gu	ka[ta::kara	
137	(舟の) 櫂	Y	2	-	ka[i	ka[i/::gu	ka[ika\ra	
209	子供	Y	2	C	wa[re / wa[re/:	wa[re::gu / wa[re/::gu	wa[re\kara / wa[re/::kara	
153	猪	Y	2	B	si[si / si[si/:	si[si\ngu	si[sika\ra	系列別語彙では 「肉」の意味
155	薪	Y	2	-	to[N	to[N\ngu	to[Nka\ra	
165	椀	Y	2	-	wa[N	wa[N\ngu	wa[N\kara	
175	板	Y	2	B	i[cja / i[cja/:	i[cja::gu / i[cja/::gu	i[cjaka\ra	
180	藁	Y	2	B	wa[ra / wa[ra/:	wa[ra::gu / wa[ra/::gu	wa[raka\ra	
181	犬	Y	2	B	i[N	i[N\ngu	i[Nka\ra	
182	傘・笠	Y	2	B	ka[sa / ka[sa/:	ka[sa\ngu	ka[saka\ra	
183	米	Y	2	B	ku[mī	ku[mī\ngu	ku[mika\ra	
185	汁	Y	2	B	si[ru	si[ru\ngu	si[ruka\ra	
187	顔	Y	2	B	tsi[ra	tsi[ra\ngu	tsi[raka\ra	
×	鑿	Y	2	-	nu[mi / nu[mi/:	nu[mi\ngu	nu[mika\ra	
190	山	Y	2	B	ja[ma / ja[ma/:	ja[ma\ngu	ja[ma:ka\ra	
198	踵	Y	2	B	a[du/:	a[du\ngu	a[duka\ra	
200	耳	Y	2	B	mi[N	mi[N\ngu	mi[Nka\ra	
201	味噌	Y	2	B	mi[sju/:	mi[sju::gu	mi[sju:ka\ra	
202	糠	Y	2	B	nu[ka / nu[ka/:	nu[ka\ngu	nu[kaka\ra	
204	サトウキビ	Y	2	B	wu[gi / wu[gi/:	wu[gi\ngu	wu[gika\ra	
205	昨日	Y	2	C	ki[nu	ki[nu::gu	ki[nu/::ka\ra	
206	青年	Y	2	B	mi[se: / mi[se/:	mi[se/::gu	mi[se\kara	
223	舌	Y	2	B	su[ba / su[ba/:	su[ba\ngu / su[ba/::gu	su[baka\ra	
229	萱	Y	2	B	gī[ja / gī[ja/:	gī[ja\ngu	gī[jaka\ra	
230	去年	Y	2	B	ku[dzi\ / ku[dzi/:	ku[dzi::gu	ku[dzi\kara	
234	灸	Y	2	C	ja[tso: / ja[tso/:	ja[tso/::gu	ja[tso::kara	
235	韭	Y	2	B	bi[ra / bi[ra/:	bi[ra\ngu	bi[raka\ra	
247	一つ	Y	2	C	?ti[N\:	?ti[N\ngu	?ti[N\kara	
6	鍬	Y	3	-	toN[giwī	toN[giwī::nu	toN[giwī::kara	

29	蓆	Y	3	C	muQ[sju\:	muQ[sju\:\nu	muQ[sju\kara	
40	枕	Y	3	B	maQ[kwa	maQ[kwa\neu	maQ[kwaka\ra	
65	油	Y	3	B	aN[ba	aN[ba\neu	aN[baka\ra	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mi\neu	hasa[mika\ra	
76	櫛	Y	3	B	saR[ki	saR[ki\neu	saR[kika\ra	
77	下駄	Y	3	B	aN[dza	aN[dza\neu	aN[dzaka\ra	
85	しゃもじ	Y	3	C	misi[ge	misi[ge\:\nu	misi[ge\kara	
103	俵	Y	3	B	toR[ra	toR[ra\neu	toR[raka\ra	
119	暦	Y	3	B	kuju[mi	kuju[mi\neu	kuju[mika\ra	
120	命	Y	3	B	inu[cji	inu[cji\neu	inu[tsika\ra	
130	かんざし	Y	3	C	kasja[ti	kasja[ti\neu	kasja[tika\ra	
134	鱗・ふけ	Y	3	B	iQ[ki	iQ[ki\neu	iQ[kika\ra	
139	蚊	Y	3	C	gadza[N	gadza[N\neu	gadza[N\kara	
152	南京豆（落花 生）	Y	3	B	dzima[mĩ	dzima[mĩ\neu	dzima[mika\ra	
154	へちま	Y	3	B	nabi[ra	nabi[ranu	nabi[rakara	
158	目下の人・弟	Y	3	B	uQ[tu	uQ[tu\neu	uQ[tuka\ra	
160	とさか・たて がみ	Y	3	C	kaga[N	kaga[N\neu	kaga[N\kara	
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[mi\neu	kaga[mika\ra	
178	虱	Y	3	C	sira[N	sira[N\neu	sira[N\kara	
195	男	Y	3	B	jiN[ga	jiN[ga\neu	jiN[gaka\ra	
212	杖	Y	3	C	gusa[N	gusa[N\neu	gusa[N\kara	
214	モッコ（運搬 網）	Y	3	-	moQ[ko / moQ[ko\:	moQ[ko\:\nu	moQ[ko\kara	
215	みかん	Y	3	C	kuni[N	kuni[N\neu	kuni[N\kara	
222	やどかり	Y	3	C	ama[N	ama[N\neu	ama[N\kara	
227	女	Y	3	B	wuna[gu	wuna[gu\neu	wuna[guka\ra	
237	杵（味噌つき 用）	Y	3	C	adzi[N	adzi[N\neu	adzi[N\kara	
237	顎	Y	3	C	utu[gě	utu[gě\:\nu	utu[gěka\ra	
251	五つ	Y	3	B	itsĩ[tsĩ\:	itsĩ[tsĩ\:\nu	itsĩ[tsĩ\kara	
253	七つ	Y	3	B	nana[tsĩ	nana[tsĩ\:\nu	-	
255	九つ	Y	3	-	kunu[tsĩ	kunu[tsĩ\:\nu	-	
26	鋸	Y	4	B	noRgi[ri	noRgi[ri\neu	noRgi[rika\ra	
147	台所・母屋と 独立した家屋	Y	4	B	toRgu[ra	toRgu[ra\eu	toRgu[raka\ra	
226	苺	Y	4	C	iQcju[N	iQcju[N\neu	iQcju[N\kara	
13	（木の）棘	Z	2	-	[ju/;\ni	[ju/;\ninu	[ju/;\nikara	
136	雲丹の一種	Z	2	-	[ju/;\ni	[ju/;\ninu	[ju/;\nikara	
163	紐	Z	2	C	[ʔkju/;\bi	[ʔkju/;\binu	[ʔkju/;\bikara	系列別語彙では 「帯」の意味
174	来年	Z	2	C	[ja/;\nĩ	[ja/;\nĩnu	[ja/;\nikara	
213	とんぼ	Z	2	C	[wě/;\dza	[wě/;\dzanu	[wě/;\dzakara	
217	火	Z	2	C	[ʔma/;\tsĩ	[ʔma/;\tsĩnu	[ʔma/;\tsĩkara	
4	箒	Z	3	C	ho[R\ki	ho[R\kinu	ho[R\kikara	
5	髪・頭	Z	3	C	ka[ra\dzĩ	ka[ra\dzĩnu	ka[ra\dzĩkara	
21	鋤	Z	3	B	ju[dza\ri	ju[dza\rinu	ji[dza\rikara	
42	兎	Z	3	C	u[sa\gi	u[sa\ginu	u[sa\gikara	

43	扇・団扇	Z	3	C	o[R\ŋgi	o[R\ŋginu	o[R\ŋgikara	
44	薬	Z	3	C	ku[su\ri	ku[su\rinu	ku[su\rikara	
45	情け	Z	3	C	na[savki	na[savkinu	na[savkikara	
63	刀	Z	3	C	ka[ta\na	ka[ta\nanu	ka[ta\nakara	
×	包丁	Z	3	-	ho[R\vcja	ho[R\vcjanu	ho[R\vcjakara	
194	かぼちゃ	Z	3	C	tsi[bu\ru	tsi[bu\runu	tsi[bu\rukara	
91	池	Z	3	B	ku[mu\ri	ku[mu\rinu	ku[mu\rikara	
98	左	Z	3	B	hi[da\ri	hi[da\rinu	hi[da\rikara	
129	あおさ	Z	3	C	o[R\sa	o[R\sanu	o[R\sakara	
149	蝶	Z	3	B	ha[bi\ra	ha[bi\ranu	ha[bi\rakara	
167	ふんどし	Z	3	C	sa[na\gi	sa[na\ginu	sa[na\gikara	
179	鰻	Z	3	C	u[na:\gi	u[na/:\ginu	u[na/:\gikara	
197	おでき	Z	3	C	ni[bu\tu	ni[bu\tunu	ni[bu\tukara	
207	腰周り	Z	3	C	ga[ma\ku	ga[ma\kunu	ga[ma\kukara	
211	蟬	Z	3	C	a[sa:\sa	a[sa:\sanu	a[sa\sakara	
244	バッタ	Z	3	C	ga[Q\ta	ga[Q\tanu	ga[Q\takara	
245	白髪	Z	3	C	si[ra\gi	si[ra:\ginu	si[ra:\gikara	
74	雷	Z	4	B	kami[na\ri	kami[na\ri nu	kami[na\ri kara	
97	夜中	Z	4	-	juna[savna	juna[savnanu	juna[savnakara	
133	朝・暁	Z	4	C	sutu[mi\ti	sutu[mi\tinu	sutu[mi\tikara	
138	親子	Z	4	C	uja[Q\kwa / u/ja[Q\kwa	uja[Q\kwanu	uja[Q\kwakara / u/ja[Q\kwakara	

Appendix 10. 面縄方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-kara	メモ
22	血	X	1	A	cji:	cji:\nu	-	a:cji 赤い血
23	帆	X	1	A	hu:	hu:\nu	-	a:hu 赤い帆
28	葉	X	1	A	hwa:	hwa:\nu / hwanu	-	
37	下	X	1	A	sja:	sja:\nu	-	jaNsja 家の下
×	ざる	X	1	-	se:	senu	-	
78	洞窟	X	1	-	?jo	?jo:\nu	-	
95	魚	X	1	A	?ju / ?ju:	?junu	-	
116	桶(面A)	X	1	C	wĩ	wĩnu	-	
107	竹	X	1	A	de:	de:\nu	-	
110	人	X	1	A	cju:	cju:\nu / cju:\nu	cju:ka\ra	?kwa:cju 小さい人 u: cju 大きい人
141	子	X	1	A	?kwa	?kwa:\nu	-	
142	中	X	1	C	na / na:	na:\nu	-	
159	上	X	1	A	?wĩ:^	?wĩ:^nu	-	
162	門	X	1	B	dzo\:	dzo\:\nu	-	?kwa:dzo 小さい門
168	豚	X	1	C	?wa	?wanu	-	
184	声	X	1	C	kwĩ:	kwĩ:\nu	kwĩ\:\kara	
193	尾	X	1	A	dzu:^	dzu:^nu	-	
233	前	X	1	C	mě	měnu	-	
×	十	X	1	-	tu	-	-	
9	坂	X	2	A	hira	hiranu	-	
10	草履	X	2	A	saba	saba:\nu	-	
17	にんにく	X	2	A	hwiru	hwirunu	-	
18	ほくろ	X	2	A	adza	adza:\nu	-	
19	右	X	2	A	migi / mi\gi	migi:\nu	-	
29	蓆	X	2	C	musju / musju\:	musju:\nu	-	
30	牙	X	2	A	kiba	kiba:\nu	-	
33	暇	X	2	-	hima	hima:\nu	-	
38	袖	X	2	A	sudĩ	sudĩ:\nu	-	
46	柱	X	2	C	ha\ra	ha\rajanu	-	
47	星	X	2	A	husi	husi:\nu	-	
51	霧	X	2	-	kiri	kirinu	-	
54	舟	X	2	C	hu\ñĩ	hu\ñĩnu	-	
55	針	X	2	C	ha\ri / ha:\ri	ha\rinu	-	
56	骨	X	2	C	hu\ñĩ	hu\ñĩnu	hu\ñĩkara	
61	鳥・鶏	X	2	A	turi	turinu	-	
×	味	X	2	-	adzi	adzi:\nu	-	
66	明日	X	2	B	acja	acjanu	-	
67	蟻	X	2	A	ari	arinu	-	
69	腕	X	2	-	udi	udinu	-	
70	夫	X	2	A	wutu	wutunu / wutu:\nu	-	
72	貝	X	2	-	ka\li	ka\linu	-	
80	匂い	X	2	A	kaza	kaza:\nu	-	
87	煤	X	2	C	sĩ\si	sĩ\si\u	-	
90	烏賊	X	2	A	ikja	ikjanu	-	
96	傷	X	2	A	kidzi	kidzi:\nu / kidzi\u	kidzi\ka\ra	
102	腰	X	2	A	kusi	kusinu	-	

104	酒	X	2	A	sakī	sakīnu	-	
114	筆	X	2	A	hudi	hudinu	-	
115	鼻	X	2	A	hana	hana\ngu	hanaka\ra	
117	水	X	2	A	mīdzī	mīdzīnu	-	
123	橋	X	2	A	hasi	hasinu	-	
128	影	X	2	C	ka:\gī	ka\gīnu	-	
127	海	X	2	C	uN	uNnu	-	
135	釜	X	2	A	kama	kamanu	-	
137	櫓	X	2	B	ka\i	ka\inu	-	
140	甕	X	2	C	ka\mī	ka\mīnu	ka\mīkara	
145	浜	X	2	C	ha\ma	ha\manu	-	
146	友	X	2	A	dusi	dusinu	-	
148	サトウキビの 先端	X	2	C	su\ra / su:\ra	su\ranu	-	
156	卵	X	2	C	ku\ga	ku\ganu	-	
162	門	X	2	-	kadu	kadunu	-	
166	口	X	2	A	kucji	kucjīnu	-	
169	釘	X	2	A	kugi	kuginu	-	
171	息	X	2	C	i\ki	i\kinu	-	
172	目上の人・兄	X	2	C	sē\da	-	-	
173	蓬	X	2	C	hwi\tsī	hwi\tsīnu	-	
176	臼	X	2	C	u\si	u\sinu	-	
181	犬	X	2	B	ʔiN	ʔiNnu	-	
191	妻	X	2	A	tudzi	tudzinu	-	
196	竈	X	2	-	kama	kamanu	-	
199	猿	X	2	C	sa\ru / saru	sa\runu	-	
202	糠	X	2	B	nuka	nukanu	-	
208	臍	X	2	A	husu	husunu	-	
210	砂糖	X	2	C	sa\ta	sa\tanu	-	
216	牛	X	2	A	usi	usinu	-	
219	音	X	2	A	utu	utunu	-	
220	布団	X	2	C	wu\di	wu\dinu	-	
228	帯	X	2	C	kju\bi	kju\binu	-	
×	蚊帳	X	2	-	kaja	kajanu	-	
235	韭	X	2	B	bira	biranu	-	
240	籠の一種	X	2	C	tī\ru	tī\runu	-	
7	煙	X	3	A	kību\si	kību\sinu	kību\sikara	
8	袋	X	3	C	huQ\ku	huQ\kunu	huQ\kukara	
12	棘	X	3	A	jiNgi	jiNgi\ngu	jiNgika\ra	
27	港	X	3	-	minato	minatonu	-	
49	麴・カビ	X	3	A	koR\dzi	koR\zinu	-	
52	畳	X	3	A	tata:\mī	tata\mīnu	-	
59	鼻血	X	3	A	hana\dzi	hana\dzinu	-	
82	虹	X	3	A	noR\gi	noR\ginu	-	
189	涎	X	3	A	juda\ri	juda\rinu	-	
206	青年	X	3	B	miQse	miQse\:\nu	-	
213	とんぼ	X	3	-	uQsja	uQsjanu	-	
230	去年	X	3	B	kuRzu:	kuRzunu	-	
248	二つ	X	3	A	taR\tsī	-	-	

249	三つ	X	3	A	miR\tsi	-	-	
250	四つ	X	3	A	juR\tsi	-	-	
252	六つ	X	3	A	muR\tsi	-	-	
254	八つ	X	3	A	jaR\tsi	-	-	
×	おととい	X	3	-	uQti	uQtinu	-	
131	頭	X	4	-	uQkaN / uQ\kaN	uQkaNnu / uQ\kaNnu	uQ\kaNkara	
1	垢	Y	1	-	[a/;	[a/;\nu	-	mi:a 新しい垢
68	潮	Y	1	-	[sju/;	[sju/;\nu / [sju/;\nu	[sju/;ka\ra	u:sju 大潮
164	手	Y	1	B	[ti/;	[ti/;\nu	-	?kwa:ti 小さい手
81	蛸	Y	1	B	[to/;	[to/;\nu	[to/;ka\ra	a:to 赤い蛸
99	齒	Y	1	B	[hwa/;	[hwa/;\nu / [hwa/\nu	[hwa/;ka\ra / [hwa;/ka\ra	siruhwa 白い齒
100	木	Y	1	B	[ki/;	[ki/;\nu	-	u:ki 大きい木
116	桶(面B)	Y	1	C	[wi/;	[wi/;\nu	[wi/;ka\ra	mi:wī 新しい桶
108	湯	Y	1	B	[ju/;	[ju/;\nu	-	mi:ju 新しいお湯
170	目	Y	1	B	[mi/;	[mi/;\nu	-	a:mi 赤い目
221	穂	Y	1	B	[hu/;	[hu/;\nu	-	mi:hu 新しい穂
223	舌	Y	1	B	[sja/;	[sja/;\nu	-	a:sja 赤い舌
2	種	Y	2	A	ta[ni	ta[ni\nu	ta[nika\ra	
13	涙	Y	2	B	na[da / na[da/:	na[da\nu	na[daka\ra	
14	着物	Y	2	B	ki[N	ki[N\nu / ki[Nnu	ki[N\kara	
48	島	Y	2	B	si[ma	si[ma\nu	-	
25	飴	Y	2	A	a[mi	a[mi\nu	a[mika\ra	
31	風	Y	2	A	ka[dzi	ka[dzi\nu	-	
32	ソテツの実	Y	2	B	na[ri	na[ri\nu	na[rika\ra	系列別語彙では 「実・果物」の意味
39	羽	Y	2	A	ha[ni	ha[ni\nu	-	
41	鹽	Y	2	C	ta[re / ta:[re	ta:[re\nu	-	
50	角	Y	2	B	tsi[nu / tsi[nu/:	tsi[nunu	-	
53	波	Y	2	B	na[mi	na[mi\nu	-	
58	脛	Y	2	B	si[ni / si[ni/:	si[ni\nu	-	
60	若い娘	Y	2	C	mē[re	mē[re\nu	-	
62	花	Y	2	B	ha[na/:	ha[na\nu / ha[na/:\nu	ha[na:\kara / ha[na/:\ka\ra	
64	夜	Y	2	B	ju[ru	ju[runu	-	
75	亀	Y	2	B	ka[mi	ka[mi\nu	ka[mika\ra	
76	櫛	Y	2	B	sa:[ki	sa[ki\nu	-	
83	土	Y	2	B	nit[sa/:	ni[cja/\nu	-	
88	腹	Y	2	B	wa[ta	wa[ta\nu	-	
×	池	Y	2	-	i[ki / i[ki/:	i[ki\nu / i[ki/:\nu	i[kika\ra	
92	たんこぶ	Y	2	C	ga[bu	ga[bu\nu	-	
93	石	Y	2	A	i[si	i[si\nu	-	
105	網	Y	2	B	a[mi/:	a[mi/\nu	-	
106	雨	Y	2	B	a[mi/:	a[mi/\nu / amī/:\nu	a[mi/:\kara	
107	竹	Y	2	-	ga[ra	ga[ra\nu	-	
109	箱	Y	2	A	hu[ku	hu[ku\nu	hu[kuka\ra	
111	雲	Y	2	B	ku[mu	ku[mu\nu	-	
112	鎌	Y	2	B	ka[ma/:	ka[ma/\nu	-	

113	色	Y	2	B	i:^[ru	i:^[ru\^nu	-	
118	豆	Y	2	B	ma[mĩ	ma[mĩ\^nu	-	
121	麦	Y	2	B	mu[gi / mu[gi/:	mu[gi\^nu	-	
125	草	Y	2	B	ku[sa/:	ku[sa\^nu / ku[sa/:\	-	
×	雲丹の一種	Y	2	-	u[nĩ	u[nĩnu	-	
153	肉	Y	2	B	si[si/:	si[si/\^nu	-	
157	太陽	Y	2	C	ti[da/:	ti[da/\^nu	-	
158	目下の人	Y	2	B	u[tu	u[tunu	-	
163	紐	Y	2	C	ji:[ru\:	ji:[ru\^nu	-	
175	板	Y	2	B	i[cja/:	i[cja/\^nu	-	
180	藁	Y	2	B	wa[ra/:	wa[ra/\^nu	-	
182	傘・笠	Y	2	B	ka[sa/:	ka[sa/\^nu	-	
183	米	Y	2	B	ku[mĩ / ku[mĩ/:	ku[mĩnu	-	
185	汁	Y	2	B	si[ru / si[ru/:	si[ru\^nu	si[ruka\^ra	
187	顔(面)	Y	2	B	tsi[ra	tsi[ra\^nu / tsi[ra:\^nu	tsi[raka\^ra	
190	山	Y	2	B	ja[ma/:	ja[ma/\^nu	-	
198	踵	Y	2	B	a[du	a[du\^nu	-	
200	耳	Y	2	B	mi[N	mi[Nnu	-	
201	味噌	Y	2	B	mi[sju	mi[sju\^nu	-	
204	サトウキビ	Y	2	B	wu[gi	wu[gi\^nu	-	
205	昨日	Y	2	C	ki:[nu / ki[nu	ki:[nu\^nu	-	
211	蟬	Y	2	-	dzi:[ja	dzi:[ja\^nu	-	
229	萱	Y	2	B	gĩ[ja/:	gĩ[ja/\^nu	-	
247	一つ	Y	2	C	ti[N	-	-	
×	神	Y	2	-	ka[mi	-	-	
11	食料・主食	Y	3	-	uba[N	uba[Nnu	-	
36	畑	Y	3	C	haQ[te	haQ[te\^nu	-	
40	枕	Y	3	B	maQ[kwa	maQ[kwa\^nu	maQ[kwaka\^ra	
42	兎(面A)	Y	3	C	usa[gi	usa[gi\^nu	usa[gi\^kara	
43	扇・団扇	Y	3	C	oR[gi	oR[gi\^nu	-	
44	薬	Y	3	C	kusu[ri	kusu[ri\^nu	-	
45	情け	Y	3	C	nasa[kĩ	nasa[kĩ\^nu	-	
57	黄金	Y	3	A	kuga[nĩ	kuga[nĩnu	-	
65	油	Y	3	B	aN[ba	aN[ba\^nu	-	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mi\^nu	-	
77	下駄	Y	3	B	aN[dza	aN[dza\^nu	-	
85	しゃもじ	Y	3	C	misi[ge	misi[ge\^nu	misi[ge\^kara	
89	ふくら脛	Y	3	B	kubĩ[ra	kubĩ[ra\^nu	-	
103	俵	Y	3	B	toR[ra	toR[ra\^nu	-	
119	暦	Y	3	B	kuju:[mi	kuju:[mi\^nu	-	
120	命	Y	3	B	inu[cji	inu[cji\^nu	-	
122	糸	Y	3	C	iQ[cju	iQ[cju\^nu	-	
124	肩	Y	3	B	kaQ[ta	kaQ[ta\^nu	-	
134	鱗・ふけ	Y	3	B	iQ[ki	iQ[ki\^nu	-	
139	蚊	Y	3	C	gaza[N	gaza[N\^nu	-	
152	南京豆(落花生)	Y	3	B	dzima[mĩ	dzima[mĩnu	-	
154	へちま	Y	3	B	nabĩ[ra	nabĩ[ra\^nu	-	
160	とさか	Y	3	-	kaga[N	kaga[N\^nu	-	

177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[mi\ngu	-	
178	虱	Y	3	C	sira[N	sira[N\ngu	-	
195	男	Y	3	B	jiN[ga	jiN[ga\ngu	jiN[gakara\ra	
215	みかん	Y	3	C	kuni[N	kuni[N\ngu	-	
222	やどかり	Y	3	-	tsiN[ja	tsiN[janu	-	
226	苺	Y	3	C	icju[N	icju[N\ngu	-	
227	女	Y	3	B	wana[gu	wana[gu\ngu	-	
234	灸	Y	3	C	jaQ[tjo	jaQ[tjo\ngu	-	
236	杵	Y	3	C	azi[N	azi[N\ngu	-	
237	顎	Y	3	C	utu[gë	utu[gë\ngu	-	
251	五つ	Y	3	B	itsi[tsi	-	-	
253	七つ	Y	3	B	nana[tsi	-	-	
147	台所・母屋と 独立した家屋 (面A)	Y	4	B	toRgu[ra	toRgu[ra\ngu	toRgu[ra\kara	
255	九つ	Y	4	-	kuRnu[tsi	-	-	
144	尻	Z	2	B	[ma/;vri / [ma/;ri	[ma/;ri\ngu	[ma/;ri\kara	a:\mari (猿の)赤い尻
161	ひしゃく	Z	2	C	[ni/;\bu	[ni/;\bunu	[ni/;\bukara	a:\nibu 赤いひしゃく
174	来年	Z	2	C	[ja/;^\ni	[ja/;^\ninu	-	
186	鍋	Z	2	C	[na/;bi / [na/;\bi	[na/;\binu	[na/;bi\kara	sisi[na\bi 肉鍋 naba[na:\bi きのこ鍋 mi:\nabi新しい鍋
188	蚤	Z	2	C	[nu/;\mi	[nu/;\minu	[nu/;\mikara	a:numi 赤い蚤
218	火	Z	2	C	[?ma/;\tsi	[?ma/;^\tsinu	[?ma/;^\tsikara	
231	烏	Z	2	C	[ga/;\ra	[ga/;ra\ngu	[ga/;ra\kara	a:\gara 赤い烏 kuru[ga:\ra 黒い烏
232	松	Z	2	C	[ma/;\tsi	[ma/;\tsinu	[ma/;\tsikara	a:matsi 赤い松
244	バッタ	Z	2	C	[ga/;\ta	[ga/;\tanu	[ga/;\takara	a:gata 赤いバッタ
×	塩	Z	2	-	[ma/;\sju	[ma/;\sjunu	[ma/;\sjukara	a:masju 赤い塩
4	箒	Z	3	C	ho[R\ki	ho[Rki\ngu	-	
5	髪	Z	3	A	ka[ra;\dzi	ka[radzi\ngu	-	
42	兎(面B)	Z	3	C	u[sa\gi	u[sa\ginu	u[sa\gikara	
×	包丁	Z	3	-	ho[R\cja	ho[R\cjanu	ho[R\cjakara	
63	刀	Z	3	C	ka[ta\na	ka[ta\nanu	ka[ta\nakara	
194	かぼちゃ	Z	3	C	tsi[bu\ru / tsi[bu:\ru	tsi[bu\runu	tsi[bu\rukara	
91	水溜り	Z	3	B	ku[mu\ri	ku[mu\rinu	-	
98	左	Z	3	B	hi[dza\ri	hi[dza\rinu	-	
129	あおさ	Z	3	C	o[R\sa	o[R\sanu	-	
149	蝶	Z	3	B	ka[bi\ra	ka[bi\ranu	-	
150	今年	Z	3	-	ku[tu\si	ku[tu\sinu	-	
167	ふんどし	Z	3	C	sa[na\gi	sa[na\ginu	sa[nagika\ra	
179	鰻	Z	3	C	u[na\gi	u[na\ginu	-	
×	いろり	Z	3	-	i[dzu\ri	i[dzu\rinu	-	
197	おでき	Z	3	C	ni[bu:\tu	ni[bu\tnunu	-	
212	杖	Z	3	C	gu[sjaN	gu[sjaN\ngu	-	
245	白髪	Z	3	C	si[ra\gi / si[ragi	si[raginu	si[ragi\kara	
6	鍬	Z	4	-	toR[giw\N / toR[giw\N	toR[giw\Nnu	-	
26	鋸	Z	4	B	noR[gi	noR[gi\ngu	noR[gi\ra	

74	雷	Z	4	B	kaN[nari	kaN[nari\ngu	kaN[narika\gra	
97	夜中	Z	4	-	juna[sa\gna	juna[sa\gnanu	juna[sa\gnakara	
133	朝	Z	4	C	sutu[mĩ\gti	sutu[mĩ\gtinu	sutu[mĩ\gtikara	
138	親子	Z	4	C	u/ja[Q\kwa	u/ja[Q\kwanu	u/ja[Q\kwakara	
147	台所・母屋と 独立した家屋 (面B)	Z	4	B	toR[gura	toR[gura\ngu	toR[guraka\gra	
151	ごちそう	Z	4	-	turi[mu\cji	turi[mu\cjinu	-	
192	暁	Z	4	C	aR[tu\ki	aR[tu\kinu	aR[tu\kikara	
×	3日前	Z	4	-	juwa[na\ti	juwa[na:\gtinu	-	

Appendix 11. 亀津方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-kara	メモ
22	血	X	1	A	ʔcji / ʔcji:	ʔcji:nu	ʔcji:kara	aQkacji 赤い血
23	帆	X	1	A	hu / hu:	hunu	hu:kara	
28	葉	X	1	A	ha: / ha	ha:nu	ha:kara	
32	実・果物	X	1	-	mi / mi:	mi:nu	mi:kara	aQkami 赤い実
37	下	X	1	A	sja: / sja	sja:nu	sja:kara	
72	貝	X	1	B	nja:	nja:nu	nja:kara	maitugaranja 細長い 巻貝
×	ざる	X	1	-	se:	se:nu	se:kara	garase 竹ざる
81	蛸	X	1	B	to	to:\nu	to:\kara	
95	魚	X	1	A	ʔju	ʔju:nu	ʔju:kara	
99	歯	X	1	B	ha:	ha:nu	ha:kara	kiNba 金歯
107	竹	X	1	A	de:	de:nu	de:\kara	hute:de 太い竹
110	人	X	1	A	ʔcju	ʔcju:nu	ʔcju:kara	
141	子	X	1	A	ʔkwa	ʔkwa:nu	ʔkwa:kara	
159	上	X	1	A	wī	wīnu	wīkara	
164	手	X	1	B	ti:	ti:\nu	ti:\kara	
168	豚	X	1	C	ʔwa:	ʔwa:\nu	ʔwa:\kara	kuruwa 黒豚
170	目	X	1	B	mī	mī\nu	mī:\kara	
×	兄	X	1	-	mī	mī:\nu	mī:\kara	
221	穂	X	1	B	hu / hu:	hu:nu	hu:kara	
233	前	X	1	C	mē	mē\nu	mē\kara	
1	垢	X	2	-	a\ki	a\kinu	a\kikara	
11	食料・主食	X	2	-	mi\si	mi\sinu	mi\sikara	
14	着物	X	2	B	kiN	kiN\nu / kiN\inu	kiNkara	
19	右	X	2	A	mi\gi	mi\ginu	mi\gikara	
29	蓆	X	2	C	mu\sj	mu\sjunu	mu\sjukara	
46	柱	X	2	C	ha:\ra	ha:\ranu	ha:\rakara	tuNbara 家の真ん中 の柱 hutehara 太い柱
54	舟	X	2	C	hu\ni	hu\nīnu	hu\nīkara	
55	針	X	2	C	ha\i	ha\inu	ha\ikara	
56	骨	X	2	C	hu\ni	hu\nīnu	hu\nīkara	
240	籠・ざるの一 種	X	2	C	ti:\ru	ti\runu	ti\rukara	
126	影	X	2	C	ka\gi	ka\gīnu	ka\gīkara	
127	海	X	2	C	uN	uN\nu	uN\kara	
137	(舟の) 櫂	X	2	-	ka\i	ka\inu	ka\ikara	
140	甕	X	2	C	ka\mi	ka\mīnu	ka\mīkara	
144	尻	X	2	B	ma\i / ma\i:	ma\inu	ma\ikara	
145	浜	X	2	C	ha:\ma	ha\manu / ha:\manu	ha:\makara	
148	梢・サトウキ ビの先端	X	2	C	sju:\ra	sju:\ranu	sju\rakara	
156	卵	X	2	C	kuga / ku:\ga	ku\ganu	ku\gakara	
157	太陽	X	2	C	ti\da / ti:da	ti\danu	ti\dakara	
161	ひしゃく	X	2	C	nī\bu	nī\bunu	nī\bukara	
163	紐	X	2	-	ʔkju\bi	ʔkju\binu	-	系列別語彙では 「帯」の意味
171	息	X	2	C	i:\ki / i\ki	i\kinu	i\kikara	

172	目上の人・兄	X	2	C	si:\da	si:\danu	si:\dakara	
176	白	X	2	C	u\si	u\sinu	u\sikara	
181	犬	X	2	B	iN	iN\neu	iN\kara	
184	声	X	2	C	ku\i	ku\inu	ku\ikara	
186	鍋	X	2	C	na\bi	na:\binu	na:\bikara	
188	蚤	X	2	C	nu:\mi	nu:\minu	nu:\mikara	kuru[nu\mi 黒蚤
199	猿	X	2	C	sa\ru / sa:\ru	sa\runu	sa\rukara	
200	耳	X	2	B	miN	miN\neu	miN\kara	
210	砂糖	X	2	C	sa:\ta	sa:\tanu	sa:\takara	kurusata 黒砂糖
220	布団	X	2	C	u\du	u\duinu	u\dukara	
228	帯	X	2	-	u:\bi	u:\binu	u:\bikara	a:ubi 赤帯
×	十	X	2	-	tuR	tuRnu	tuRkara	
4	箒	X	3	C	hoR\ki	hoR\kinu / hoRki\neu	hoR\kikara	
8	袋	X	3	C	huQ\ku	huQ\kunu	huQ\kukara	
11	食料・主食	X	3	A	haNmē	haNmēnu	haNmēkara	
12	棘	X	3	A	iNgī	iNgīnu	iNgīkara	
49	麴	X	3	A	koRdzi	koRdzinu	koRdzikara	
43	扇・団扇	X	3	C	oR\gi	oR\ginunu	oR\gikara	
57	黄金	X	3	A	kuganī	kuganīnu	kuganīkara	
×	包丁	X	3	-	hoR\cja	hoR\cjanu	hoR\cjakara	
65	油	X	3	B	aNba	aNba\neu	aNba\kara	
77	下駄	X	3	B	aNdza	aNdza\neu	aNdza\kara	
129	あおさ	X	3	C	oR\sa	oR\sanu	oR\sakara	
134	鱗・ふけ	X	3	B	iQki	iQki\neu	iQki\kara	
143	空	X	3	A	teNto	teNtonu	teNtokara	
150	今年	X	3	-	kutusi	kutusinu	kutusikara	
151	ごちそう	X	3	C	kwaQki	kwaQkinu	kwaQkikara	
158	目下の人・弟	X	3	B	uQtu	uQtunu	uQtukara	
173	蓬	X	3	C	huR\tsi	huR\tsinu	huR\tsikara	
217	火	X	3	C	?maR\tsi	?maR\tsinu	?maR\tsikara	
244	バッタ	X	3	C	gaQ\ta	gaQ\tanu	gaQ\takara	
247	一つ	X	3	C	?tiRtsi	?tiR\tsinu	?tiR\tsikara	
248	二つ	X	3	A	?taRtsi	?taRtsinu	?taRtsikara	
249	三つ	X	3	A	miRtsi	miRtsinu	miRtsikara	
250	四つ	X	3	A	juRtsi	juRtsinu	juRtsikara	
252	六つ	X	3	A	muRtsi	muRtsinu	muRtsikara	
254	八つ	X	3	A	jaRtsi	jaRtsinu	jaRtsikara	
192	暁	X	4	C	aRtu\ki	aRtu\kinu	aRtu\kikara	
213	とんぼ	X	4	-	eRda\ma	eRda\manu	eRda\makara	
238	かまきり	X	6	-	iRsaduma\i	iRsaduma\inu	iRsaduma\ikara	
100	木	Y	1	B	[ki/;	[ki/;\neu	[ki/;\kara	
108	湯	Y	1	B	[ju/;	[ju/;\neu	[ju/;\kara	
142	中	Y	1	C	[nja/;	[nja/;\neu	[nja/;\kara	
193	尾	Y	1	A	[du/;	[du/;\neu	[du/;\kara	
224	家	Y	1	B	[ja/;	[ja/;\neu	[ja/;\kara	
2	種	Y	2	A	ta[ni	ta[ni\neu	ta[ni\kara	
3	丘	Y	2	A	mu[i	mu\inu	mu\ikara	
9	坂	Y	2	A	si[ra	si[ranu	si[rakara	

10	草履	Y	2	A	sa[ba	sa[banu	sa[bakara	
13	涙	Y	2	B	na[da	na[da\neu	na[da\kara	
16	西	Y	2	A	ji[ri	ji[rinu	ji[rikara	
17	にんにく	Y	2	A	hu[ru	hu[runu	hu[rukara	
18	あざ・ほくろ	Y	2	-	a[dza	a[dzanu	a[dzakara	
24	陸	Y	2	-	ri[ku	ri[kunu	ri[ku:kara	
25	飴	Y	2	A	a[mī	a[mīnu	a[mīkara	
26	鋸	Y	2	B	no[ko	no[ko\neu	no[ko\kara	
36	畑	Y	2	C	ha[te	ha[te\neu	ha[te\kara	
30	牙	Y	2	A	ki[ba	ki[ba\neu	ki[ba\kara	
31	風	Y	2	A	ka[di	ka[dinu	ka[dikara	
34	暇	Y	2	-	hi[ma	hi[manu	hi[makara	
38	袖	Y	2	A	sju[di	sju[dinu	sju[dikara	
39	羽	Y	2	A	ha[nī	ha[nīnu	ha[nīkara	
41	鹽	Y	2	C	ta[re	ta[re\neu	ta[re\kara	
49	星	Y	2	A	hu[si	hu[sinu	hu[sikara	
48	島	Y	2	B	si[ma	si[ma\neu	si[ma\kara	
50	角	Y	2	B	tsi[no	tsi[no\neu	tsi[no\kara	
×	霧	Y	2	-	ki[ri	ki[rinu	ki[rikara	
53	波	Y	2	B	na[mi	na[mi\neu	na[mi\kara	
58	足	Y	2	B	si[nī	si[nīnu	si[nīkara	系列別語彙では「脛」の意味
61	鳥・鶏	Y	2	A	tu[i	tu[inu	tu[ikara	
62	花	Y	2	B	ha[na	ha[na\neu	ha[na\kara	
×	味	Y	2	-	a[dzī	a[dzīnu	a[dzīkara	
64	夜	Y	2	B	ju[ru /ju:ru	ju[ru\neu	ju[ru\kara	
66	明日	Y	2	B	a[cja	a[cja\neu	a[cja\kara	
67	蟻	Y	2	A	a[mi	a[mi\neu	a[mi\kara	
68	潮・海水	Y	2	B	u[sju	u[sju\neu	u[sju\kara	
69	腕	Y	2	-	u[di	u[di\neu	u[di\kara	
70	夫	Y	2	A	wu[tu	wu[tunu	wu[tukara	
73	北	Y	2	A	nī[sī	nī[sīnu	nī[sīkara	
75	亀	Y	2	B	ka[mī	ka[mīnu	ka[mīkara	
78	洞窟	Y	2	A	ga[ma	ga[manu	ga[makara	
80	匂い	Y	2	A	ka[da	ka[danu	ka[dakara	
87	煤	Y	2	C	sī[sī	sī[sīnu	sī[sīkara	
88	腹	Y	2	B	wa[ta	wa[ta\neu	wa[ta\kara	
90	烏賊	Y	2	A	i[kja	i[kjanu	i[kjakara	
91	池	Y	2	-	i[kī	i[kīnu	i[kī\kara	
92	たんこぶ	Y	2	C	ga[bu	ga[bu\neu	ga[bu\kara	
93	石	Y	2	A	i[sī	i[sīnu	i[sīkara	
94	南	Y	2	B	ha[i	ha[inu	ha[i\kara	
96	傷	Y	2	A	ki[dzī	ki[dzīnu	ki[dzīkara	
102	腰・後ろ	Y	2	A	ku[si	ku[sinu	ku[sikara	
104	酒	Y	2	A	sa[kī	sa[kīnu	sa[kīkara	
105	網	Y	2	B	a[mi	a[mi\neu	a[mi\kara	
106	雨	Y	2	B	a[mī	a[mī\neu	a[mī\kara	
107	竹	Y	2	-	ga[ra	ga[ranu	ga[rakara	
109	箱	Y	2	A	ha[ku	ha[kunu	ha[kukara	

111	雲	Y	2	B	ku[mo	ku[monu	ku[mokara	
112	鎌	Y	2	B	ka[ma	ka[manu	ka[makara	
113	色	Y	2	B	i[ru	i[ru\neu	i[rukara	
114	筆	Y	2	A	hu[di	hu[dinu	hu[dikara	
115	鼻	Y	2	A	ha[na	ha[nanu	ha[na\kara	
117	水	Y	2	A	mi[dzi	mi[dzinu	mi[dzikara	
118	豆	Y	2	B	ma[mi	ma[mi\neu	ma[mi\kara	
121	麦	Y	2	B	mu[gi	mu[gi\neu	mu[gi\kara	
122	糸	Y	2	C	i[cju	i[cju\neu	i[cju\kara	
123	橋	Y	2	A	ha[si	ha[sinu	ha[sikara	
124	肩	Y	2	B	ka[ta	ka[ta\neu	ka[ta\kara	
125	草	Y	2	B	ku[sa	ku[sa\neu	ku[sa\kara	
135	釜	Y	2	-	ka[ma	ka[manu	ka[makara	
146	友	Y	2	A	du[si	du[sinu	du[sikara	
153	肉	Y	2	B	si[si	si[sinu	si[sikara	
166	口	Y	2	A	ku[tsi	ku[tsinu	ku[tsikara	
169	釘	Y	2	A	ku[gi	ku[ginu	ku[gikara	
175	板	Y	2	B	i[cja	i[cja\neu	i[cja\kara	
180	藁	Y	2	B	wa[ra	wa[ra\neu	wa[ra\kara	
182	傘・笠	Y	2	B	ka[sa	ka[sa\neu	ka[sa\kara	
183	米	Y	2	B	ku[mi	ku[mi\neu	ku[mi\kara	
185	汁	Y	2	B	si[ru	si[ru\neu	si[ru\kara	
187	顔	Y	2	B	cji[ra	cji[ra\neu	cji[ra\kara	
×	味	Y	2	-	a[dzi	a[dzinu	a[dzikara	
190	山	Y	2	B	ja[ma	ja[ma\neu	ja[ma\kara	
191	妻	Y	2	A	tu[dzi	tu[dzinu	tu[dzikara	
196	竈	Y	2	-	dzi[ru	dzi[runu	dzi[rukara	
196	竈	Y	2	-	ka[ma	ka[manu	ka[makara	
198	踵	Y	2	B	a[du	a[dunu	a[dukara	
201	味噌	Y	2	B	mi[sju	mi[sju\neu	mi[sju\kara	
202	糠	Y	2	B	nu[ka	nu[ka\neu	nu[ka\kara	
203	鮫	Y	2	A	sa[ba	sa[banu	sa[bakara	
204	サトウキビ	Y	2	B	u[gi	u[gi\neu	u[gi\kara	
205	昨日	Y	2	C	ki[nu	ki[nu\neu	ki[nu\kara	
206	青年	Y	2	B	ni[sje	ni[sje\neu	ni[sje\kara	
208	臍	Y	2	A	hu[sju	hu[sjunu	hu[sjukara	
216	牛	Y	2	A	u[si	u[sinu	u[sikara	
219	音	Y	2	A	u[tu	u[tunu	u[tukara	
223	舌	Y	2	B	si[bja	si[bja\neu	si[bja\kara	
229	萱	Y	2	B	ka[ja	ka[janu	ka[jakara	
230	去年	Y	2	B	ku[du	ku[du\neu	ku[du\kara	
231	烏	Y	2	C	ga:[ra	ga:[ranu	ga:[rakara	hutegara 太い竹
234	灸	Y	2	C	ja[cjo	ja[cjo\neu	ja[cjo\kara	
235	韭	Y	2	B	ni[ra	ni[ra\neu	ni[ra\kara	
236	杵	Y	2	C	tsi[tsi	tsi[tsinu	tsi[tsikara	
246	紙	Y	2	A	ka[mi	ka[mini	ka[mikara	
6	鋤	Y	3	-	tuN[ge	tuN[ge\neu	tuN[gekara	
45	情け	Y	3	C	nasa[ki	nasa[ki\neu	nasa[ki\kara	
59	鼻血	Y	3	A	hana[dzi	ha[nadzinu	ha[nadzikara	

60	若い娘	Y	3	C	mĕR[re	mĕR[re\ngu	mĕR[re\vkara	
69	腕	Y	3	B	kai[na	kai[nanu	kai[nakara	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mi\ngu	hasa[mi\vkara	
76	櫛	Y	3	B	saR[ki	saR[ki\ngu	saR[ki\vkara	
83	土	Y	3	B	niN[cja	niN[cja\ngu	niN[cja\vkara	
85	しゃもじ	Y	3	C	misi[gĕ	misi[gĕ\ngu	misi[gĕ\vkara	
103	俵	Y	3	B	toR[ra	toR[ra\ngu	toR[ra\vkara	
119	暦	Y	3	B	kuju[mi	kuju[mi\ngu	kuju[mi\vkara	
120	命	Y	3	B	ino[cji / ino:[cji	ino[cji\ngu	ino[cji\vkara	
152	南京豆（落花生）	Y	3	B	dzima[mĩ	dzima[mĩ\ngu	dzima[mĩ\vkara	
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[mi\ngu	kaga[mi\vkara	
195	男	Y	3	B	iN[ga	iN[ga\ngu	iN[ga\vkara	
207	腰周り	Y	3	C	gama[ku	gama[ku\ngu	gama[ku\vkara	
214	モッコ（運搬網）	Y	3	-	moQ[ko	moQ[ko\ngu	moQ[ko\ngu	
227	女	Y	3	B	una[gu	una[gu\ngu	una[gu\vkara	
237	顎	Y	3	C	utu[gĕ	utu[gĕngu	utu[gĕkara	
251	五つ	Y	3	B	itsĩ[tsĩ	itsĩ[tsĩ\ngu	itsĩ[tsĩ\vkara	
253	七つ	Y	3	B	nana[tsĩ	nana[tsĩ\ngu	nana[tsĩ\vkara	
255	九つ	Y	3	-	kunu[tsĩ	kunu[tsĩ\ngu	kunu[tsĩ\vkara	
147	台所・母屋と独立した家屋	Y	4	B	toRgu[ra	toRgu[ra\ngu	toRgu[ra\vkara	
136	雲丹の一種	Z	2	-	[ju/;\ni	[ju/;\ninu	[ju/;\nikara	?kwa:jani 小さい雲丹
174	来年	Z	2	C	[ja/;^\ni	[ja/;^\ninu	[ja/;^\nikara	
232	松	Z	2	C	[ma/;\tsu / ma:\tsu	[ma/;\tsunu / :tsu\ngu	ma [ma/;\tsukara	
5	髪	Z	3	A	ka[ra\vdzi	ka[ra\vdzinu	ka[ra\vdzikara	
7	煙	Z	3	A	kĩ[busi	kĩ[businu	kĩ[busikara	
42	兎	Z	3	C	u[sa\vgi	u[sa\vginu	u[sa\vgikara	
44	薬	Z	3	C	ku[sju\vi	ku[sju\vinu	ku[sju\vikara	
52	畳	Z	3	A	ta[tamĩ	ta[tamĩnu	ta[tamĩkara	
63	刀	Z	3	C	ka[ta\na	ka[ta\nganu	ka[ta\ngakara	
194	かぼちゃ	Z	3	C	cji[bu\vu	cji[bu\vrinu	cji[bu\vrakara	系列別語彙では「頭」の意味
84	東	Z	3	A	a[gai	a[gainu	a[gaikara	
86	膝小僧	Z	3	-	ma[gai	ma[gainu	ma[gaikara	
98	左	Z	3	B	si[dza\vi	si[dza\vinu	si[dza\vikara	
136	雲丹の一種	Z	3	C	ga[cji\vcji	ga[cji\vcjinu	ga[cji\vcjikara	
139	蚊	Z	3	C	ga[dzaN	ga[dza\Nngu	ga[dza\Nvkara	
149	蝶	Z	3	B	ha[bi\va	ha[bĩranu	ha[bĩrakara	
154	へちま	Z	3	B	na[bi\va	na[bi\vanu	na[bi\vrakara	
160	とさか・たてがみ	Z	3	C	ka[gaN	ka[ga\Nngu	ka[ga\Nkara / ka[ga\Nvkara	
167	ふんどし	Z	3	C	sa[na\vgi	sa[na\vginu	sa[na\vgikara	
178	虱	Z	3	C	si[raN	si[ra\Nngu	si[ra\Nvkara	
179	鰻	Z	3	C	u[na\vgi	u[na\vginu	u[na\vgikara	
189	涎	Z	3	A	ju[dai	ju[dainu	ju[daikara	
197	おでき	Z	3	C	nĩ[bu\vu	nĩ[bu\vtunu	nĩ[bu\vtukara	

211	蟬	Z	3	C	a[sjaʋsja	a[sjaʋsjanu	a[sjaʋsjakara	
212	杖	Z	3	C	gu[saN	gu[saʋNnu	gu[saʋNkara	
215	みかん	Z	3	C	ku[niN	ku[niʋNnu	ku[niʋNkara	
222	やどかり	Z	3	C	a[maN	a[maʋNnu	a[maʋNkara	
226	苺	Z	3	C	i[cjuʋbi	i[cjuʋbinu	i[cjuʋbikara	
245	白髪	Z	3	C	si[raʋgĩ	si[raʋgĩnu	si[raʋgĩkara	
40	枕	Z	4	B	maQ[kwaN	maQ[kwaʋNnu	maQ[kwaʋNkara	
74	雷	Z	4	B	kami[naʋri	kami[naʋrinu	kami[naʋrikara	
97	夜中	Z	4	-	juna[saʋna	juna[saʋnanu	juna[saʋnakara	
131	頭・顔	Z	4	B	uQ[kaN	uQ[kaNnu	uQ[kaNkara	
133	朝	Z	4	C	sutu[mĩʋti	sutu[mĩʋtinu	sutu[mĩʋtikara	
138	親子	Z	4	C	u/ʃa[Qʋkwa	u/ʃa[Qʋkwanu	u/ʃa[Qʋkwakara	
155	薪	Z	4	C	taR[muN	taR[muʋNnu	taR[muʋNkara	
×	背中	Z	5	-	kusina[gaʋi	kusinaga[iʋnu	kusinaga[iʋkara	複合語？

Appendix 12. 伊仙方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-kara	メモ
22	血	X	1	A	ʔcji:	ʔcji\ɲnu / ʔcji:\ɲnu		
28	葉	X	1	A	hwa:	hwa:\ɲnu		a:bwa 赤い葉
37	下	X	1	A	su:ʔ	su:ʔ\ɲnu		
×	ざる	X	1	-	se / se:	se\ɲnu		mi:se 新しいざる
×	岩	X	1	-	ʔjo:ʔ	ʔjo:ʔ\ɲnu		
95	魚	X	1	A	ʔju	ʔju\ɲnu	ʔjuka\ɲra	
101	桶	X	1	-	ʔwĩ	ʔwĩ\ɲnu		
110	人	X	1	A	cju:ʔ	cju:ʔ\ɲnu		
141	子	X	1	A	ʔkwa / ʔkwa:	ʔkwa\ɲnu	ʔkwaka\ɲra	
142	中	X	1	C	na\ɲ:	na\ɲ:\ɲnu	na\ɲ:kara	maNna 真ん中
159	上	X	1	A	ʔwĩ / ʔwĩ:	ʔwĩ:\ɲnu		
162	門	X	1	B	dzo	dzo\ɲnu		
168	豚	X	1	C	ʔwa / ʔwa\ɲ:	ʔwa\ɲ:\ɲnu	ʔwa:\ɲkara	
172	目上の人・兄	X	1	C	mĩ	mĩ\ɲnu	mĩ\ɲ:kara	
184	声	X	1	C	kwĩ	kwĩ\ɲnu		
193	尾	X	1	A	dzu:	dzu:\ɲnu		ʔkwa:dzu 小さい尾
233	前	X	1	C	mě	mě\ɲnu		
9	坂	X	2	A	hira	hira\ɲnu		
10	草履	X	2	A	saba	saba\ɲnu		
12	棘	X	2	A	nĩgi	nĩgi\ɲnu		
16	西	X	2	A	iri	irinu		iriNte 西まで
17	にんにく	X	2	A	hwĩru	hwĩru\ɲnu		
18	ほくろ	X	2	A	adza	adzanu / adza\ɲnu		
19	右	X	2	A	mi\ɲgi	mi\ɲginu		
21	鋤	X	2	-	suki	suki\ɲnu		
30	牙	X	2	A	ʔki\ɲba	ʔki\ɲbanu		
31	風	X	2	A	kadzĩ	kadzĩ\ɲnu	kadzika\ɲra	
34	暇	X	2	-	hima	hima\ɲnu		
39	羽	X	2	A	hanĩ	hanĩ\ɲnu	hanika\ɲra	
50	カビ	X	2	-	kabi	kabi\ɲnu		
46	柱	X	2	C	ha\ɲrja	ha\ɲrjanu		
47	星	X	2	A	husi	husi\ɲnu	husika\ɲra	
×	霧	X	2	C	kiri	kiri\ɲnu		
53	波	X	2	B	nami	naminu		
54	舟	X	2	C	hu\ɲnĩ	hu\ɲnĩnu		
55	針	X	2	C	ha\ɲri	ha\ɲrinu		
56	骨	X	2	C	hu\ɲnĩ	hu\ɲnĩnu		
×	味	X	2	B	adzi	adzi\ɲnu		
67	蟻	X	2	A	ari	ari\ɲnu		
72	貝	X	2	-	ka\ɲi	ka\ɲinu		
80	匂い	X	2	A	kaza	kaza\ɲnu		
87	煤	X	2	C	sĩ\ɲsĩ	sĩ\ɲsĩnu		
90	烏賊	X	2	A	ikja	ikja\ɲnu		
96	傷	X	2	A	kidzĩ	kidzĩ\ɲnu		
104	酒	X	2	A	sakĩ	sakĩ\ɲnu		
115	鼻	X	2	A	hana	hana\ɲnu		
117	水	X	2	A	mizĩ	mizĩ\ɲnu		

126	影	X	2	C	ka\gĩ	ka\gĩnu		
127	海	X	2	C	u\N	u\Nnu		
135	釜	X	2	A	kama	kama\ngu		
137	權	X	2	-	ka\i	ka\inu		
145	浜	X	2	C	ha\ma	ha\manu		
148	サトウキビの 先端	X	2	C	su\ra	su\ranu		
156	卵	X	2	C	ku\ga	ku\ganu		
157	太陽	X	2	C	tĩ\da	tĩ\danu	tĩ\dakara	
166	口	X	2	A	kucji	kucji\ngu		
169	釘	X	2	A	?kugi	?kugi\ngu		
171	息	X	2	C	i\ki	i\kinu		
173	蓬	X	2	C	hu\tsĩ	hu\tsĩnu		
176	白	X	2	C	u\si	u\sinu		
191	妻	X	2	A	tudzi	tudzi\ngu		
199	猿	X	2	C	sa\ru	sa\runu		
203	鮫	X	2	-	hu\ka	hu\kanu		
203	鮫	X	2	A	saba	saba\ngu		sabaN ?ju 鮫 (鮫の魚)
208	臍	X	2	A	husu	husu\ngu	husuka\ra	
210	砂糖	X	2	C	sa\ta	sa\tanu / sa\':tanu	sa\takara	
219	音	X	2	A	utu	utu\ngu		
220	布団	X	2	C	u\du	u\dungu	u\dukara	
×	十	X	2	-	tuR	tuR\ngu		
1	垢	X	3	A	hwi\ngu	hwi\ngunu		
7	煙	X	3	A	kĩbu\si	kĩbu\sinu	kĩbu\sikara	
7	煙	X	3	A	kĩbu\sjá	kĩbu\sjanu		
×	ご飯	X	3	-	ubaN	ubaNnu		
27	港	X	3	-	mina\to	mina\tonu		
49	麴	X	3	A	koR\dzi	koR\dzinu		
52	畳	X	3	A	tata\mĩ	tatamĩ\ngu	tatamĩka\ra	
59	鼻血	X	3	A	hana\dzi	hana\dzinu		
82	虹	X	3	A	noR\dzi	noR\dzinu		
84	東	X	3	A	agare	agare\ngu	agareka\ra	
86	膝小僧	X	3	A	cjiN\si	cjiN\sinu		
129	あおさ	X	3	C	oRsa	oRsa\ngu		
143	空	X	3	A	teNto	teNto\':nu		
150	今年	X	3	-	kutu\si	kutu\sinu	kutu\sikara / kutusika\ra	
151	ごちそう	X	3	C	?kwaR\ki	?kwaR\kinu		
189	涎	X	3	A	juda\ri	juda\rinu	judarika\ra	
248	二つ	X	3	A	taR\tsĩ	taR\tsĩnu		
249	三つ	X	3	A	miR\tsĩ	miR\tsĩnu		
250	四つ	X	3	A	juR\tsĩ	juR\tsĩnu		
252	六つ	X	3	A	muR\tsĩ	muR\tsĩnu		
254	八つ	X	3	A	jaR\tsĩ	jaR\tsĩnu		
131	頭・顔	X	4	B	uQka\N	uQka\Nnu		
255	九つ	X	4	B	kuRnutsĩ	kuRnutsĩnu	kuRnutsikara	
1	垢	Y	1	-	[a/;	[a;/nu		
23	帆	Y	1	A	[hu/;	[hu;\nu / hu/;\nu		

68	潮・海水	Y	1	-	[sju/;	[sju;/nu		
81	蛸	Y	1	B	[to/;	[to;/nu	[to;/kara	a:do 赤い蛸
99	齒	Y	1	B	[hwa/;	[hwa;/nu		
100	木	Y	1	B	[ki/;	[ki;/nu	[ki;/kara	?kwa:ki 小さい木 cf. ?kwa:gi 桑の木
107	竹	Y	1	A	[de/;	[de;/nu		a:de 赤い竹
108	湯	Y	1	B	[ju/;	[ju;/nu		
164	手	Y	1	B	[ti/;	[ti;/nu		
170	目	Y	1	B	[mi/;	[mi;/nu	[mi;/ka\ra	?kwa:\mi 小さい目
221	穂	Y	1	B	[hu/;	[hu;/nu		
223	舌	Y	1	B	[sja/;	[sja;/nu		
224	家	Y	1	B	[ja/;			
2	種	Y	2	A	ta[ni	ta[ninu		
13	涙	Y	2	B	na[da / na[da/:	na[danu	na[daka\ra	
14	着物	Y	2	B	ki[N	ki[N/nnu	ki[N/ka\ra	
48	島	Y	2	B	si[ma	si[manu		
25	飴	Y	2	A	a[mī	a[mī\ngu		
38	袖	Y	2	A	su[di	su[di\ngu		
50	角	Y	2	B	tsi[nu	tsi[nunu		
58	脛	Y	2	B	si[ni	si[ni\ngu		
60	若い娘	Y	2	C	mē:[re	mē:[re\ngu		?kwa:mēre 小さい娘
61	鳥・鶏	Y	2	A	tu[ri	tu[ri\ngu		
62	花	Y	2	B	ha[na / ha[na/:	ha[nanu\:		
69	腕	Y	2	-	u[di	u[dinu		
70	夫	Y	2	A	wu[tu	wu[tu\ngu		
75	亀	Y	2	B	ka[mī	ka[mī\ngu		
79	きのこ	Y	2	C	na:[ba	na:[ba\ngu		mi:naba 新しいきのこ
83	土	Y	2	B	ni[cja	ni[cjanu	ni[cjakara	
88	腹	Y	2	B	wa[ta	wa[tanu	wa[taka\ra	
91	水溜り・池	Y	2	-	i[ki / i[ki/:	i[kinu		
92	たんこぶ	Y	2	C	ga[bu	ga[bunu		
93	石	Y	2	A	i[si	i[sinu		
94	南	Y	2	B	ha[i	ha[inu		
102	腰・背中・後ろ	Y	2	A	ku[si	ku[si\ngu		
105	網	Y	2	B	a[mi	a[mi\ngu		
106	雨	Y	2	B	a[mī	a[mīnu	a[mīka\ra	
109	箱	Y	2	A	ha[ku	ha[ku\ngu		
111	雲	Y	2	B	ku[mu	ku[mu\ngu		
112	鎌	Y	2	B	ka[ma	ka[manu		
113	色	Y	2	B	ji[ru / ji:[ru	ji[ru\ngu		a:iru 赤色
114	筆	Y	2	A	hu[di	hu[di\ngu		
118	豆	Y	2	B	ma[mī	ma[mīnu	ma[mīka\ra	
121	麦	Y	2	B	mu[gi:	mu[ginu		
123	橋	Y	2	A	ha[si	ha[si\ngu		
125	草	Y	2	B	ku[sa	ku[sa\ngu		
136	雲丹の一種	Y	2	-	ju:[ni	ju:[ni\ngu		?kwa:juni 小さい雲丹
140	甕	Y	2	C	ka[mī	ka[mīnu		

144	尻	Y	2	B	ma:[ri	ma:[ri\ngu		?kwa:mari 小さい尻
146	友	Y	2	A	du[si	du[si\ngu		
153	肉	Y	2	B	si[si / si[si/:	si[sinu	si[sikara	
155	薪	Y	2	-	to[N	to[N\ngu / to[Nnu\:	to[Nkara	
161	ひしゃく	Y	2	C	n̄i:[bu	n̄i:[bu\ngu		?kwa:nibu 小さいひしゃく
163	紐	Y	2	C	ji:^[ru\	ji:^[ru\ngu		
165	椀	Y	2	B	u:[di	u[di\ngu		
175	板	Y	2	B	i[cja / i[cja/:	i[cjanu		
180	藁	Y	2	B	wa[ra	wa[ranu		
181	犬	Y	2	B	i[N	i[N\ngu		
182	傘・笠	Y	2	B	ka[sa	ka[sanu		
183	米	Y	2	B	ku[m̄i	ku[m̄inu		
185	汁	Y	2	B	si[ru	si[runu	si[ruka\ra	
186	鍋	Y	2	C	na:[b̄i	na:[b̄i\ngu		mi:nab̄i 新しい鍋 gunjanab̄i 小さい鍋
187	顔(面)	Y	2	B	tsi[ra:	tsi[ranu		
188	蚤	Y	2	C	nu:[mi	nu:[mi\ngu		?kwa:numi 小さい蚤 gunjanumi 小さい蚤
×	味	Y	2	B	a[dzi	a[dzinu		
190	山	Y	2	B	ja[ma	ja[ma\ngu		
198	踵	Y	2	B	a[du	a[dunu		
200	耳	Y	2	B	mi[N	mi[N\ngu	mi[N/ka\ra	
201	味噌	Y	2	B	mi[sju	mi[sjunu		
202	糠	Y	2	B	nu[ka / nu[ka/:	nu[kanu	nu[ka\kara	
204	サトウキビ	Y	2	B	wu[gi	wu[ginu		
205	昨日	Y	2	C	ki[nu / ki:[nu	ki[nu\ngu:nu		
209	子供	Y	2	C	wa:[re	wa:[re\ngu:nu		?kwa:ware 小さい子供 gunjaware 小さい子供
216	牛	Y	2	A	u[si	u[si\ngu		
228	帯(女性用)	Y	2	-	u:[b̄i	u:[b̄i\ngu		?kwa:ubi 小さい帯 mi:ubi 新しい帯
229	萱	Y	2	B	ka[ja	ka[ja\ngu		
231	鳥	Y	2	C	ga:[ra	ga:[ra\ngu		gunjagara 小さい鳥
235	韭	Y	2	B	bi[ra	bi[ranu		
4	箒	Y	3	C	hoR[ki	hoR[ki\ngu		
6	鍬	Y	3	-	toN[ḡi	toN[ḡi\ngu:nu		toN[ḡi\nga
8	袋	Y	3	C	huku[ro\:	huku[ro\ngu		
36	畑	Y	3	B	haQ[te	haQ[te\ngu:nu		
29	蓆	Y	3	C	muQ[sju	muQ[sju\ngu		
40	枕	Y	3	B	maQ[kwa	maQ[kwa\ngu		
41	盥	Y	3	C	taR[re	taR[re\ngu:nu		
42	兎	Y	3	C	usa[gi	usa[gi\ngu	usa[gi\kara	
43	扇・団扇	Y	3	C	oR[gi	oR[gi\ngu		
44	薬	Y	3	C	kusu[ri	kusu[ri\ngu		
45	情け	Y	3	C	nasa[k̄i	nasa[k̄i\ngu		
57	黄金	Y	3	A	kuga[n̄i	kuga[n̄i\ngu		
63	刀	Y	3	C	kata[na	kata[na\ngu	kata[naka\ra	

64	夜	Y	3	B	juR[ru	juR[ru\ngu		
65	油	Y	3	B	aN[ba	am[ba\ngu		
66	明日	Y	3	B	aQ[cja	aQ[cja\ngu		
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mi\ngu		
76	櫛	Y	3	B	saR[ki	saR[ki\ngu		
194	かぼちゃ	Y	3	C	tsibu[ru	tsibu[ru\ngu		
77	下駄	Y	3	B	aN[dza	aN[dza\ngu		
85	しゃもじ	Y	3	C	misi[ge	misi[ge\ngu		
98	左	Y	3	B	hidza[ri	hidza[ri\ngu		
103	俵	Y	3	B	toR[ra	toR[ra\ngu		
119	暦	Y	3	B	kuju[mi	kuju[mi\ngu	kuju[mika\kra	
120	命	Y	3	B	inu[cji	inu[cji\ngu		
122	糸	Y	3	C	iQ[cju	iQ[cju\ngu		
124	肩	Y	3	B	kaQ[ta	kaQ[ta\ngu		
134	鱗・ふけ	Y	3	B	iQ[ki	iQ[ki\ngu		
138	親子	Y	3	C	uja[kwa	uja[kwa\ngu	uja[kwa\kra	
139	蚊	Y	3	C	gadza[N	gadza[N\ngu / gadza[N/ngu	ga/dza[Nka\kra / gadza[Nka\kra	
149	蝶	Y	3	B	kabi[ra	kabi[ra\ngu		
152	南京豆（落花 生）	Y	3	B	dzima[mĩ	dzima[mĩ\ngu		
154	へちま	Y	3	B	nabi[ra	nabi[ra\ngu		
158	目下の人	Y	3	B	uQ[tu	uQ[tu\ngu		
160	とさか・たて がみ	Y	3	-	ka/ga[N	ka/ga[N\ngu	kaga[N/ka\kra	
167	ふんどし	Y	3	C	sana[gi	sana[gi\ngu		
174	来年	Y	3	C	jaR[nĩ	jaR[nĩ\ngu		
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[mi\ngu		
178	虱	Y	3	C	sira[N	sira[N\ngu	sira[N\kra	
179	鰻	Y	3	C	una[gi	una[gi\ngu		
195	男	Y	3	B	iN[ga	iN[ga\ngu		
×	囲炉裏	Y	3	-	idzi[ru	idzi[ru\ngu		
197	おでき	Y	3	C	nĩbu[tu	nĩbu[tu\ngu		
206	青年	Y	3	B	miQ[se	miQ[se\ngu		
211	蟬	Y	3	C	asja[sja	asja[sja\ngu		
212	杖	Y	3	C	gusja[N	gusja[N\ngu		
213	とんぼ	Y	3	-	usja[mja	usja[mja\ngu		
214	モッコ（運搬 網）	Y	3	B	oR[da	oR[da\ngu		
215	みかん	Y	3	C	?ku/ni[N	?ku/ni[N\ngu / ?kuni[N/ngu		
218	火	Y	3	C	?maR[tsĩ	?maR[tsĩ\ngu		
222	やどかり	Y	3	C	tsĩN[nja	tsĩN[nja\ngu		
226	苳	Y	3	C	icju[N	icju[N\ngu	icju[N/ka\kra	
227	女	Y	3	B	una[gu	una[gu\ngu	una[guka\kra	
228	帯(男性用)・ 紐	Y	2	C	kju:[bĩ	kju:[bĩ\ngu		?kwa:kjubi 小さい帯 mi:kjubi 新しい帯
230	去年	Y	3	B	kuR[dzu	kuR[dzu\ngu	kuR[dzu\kra	
232	松	Y	3	C	maQ[tsĩ	maQ[tsĩ\ngu		

234	灸	Y	3	C	jaQ[cjo	jaQ[cjo\ɳu		
236	杵	Y	3	C	adzi[N	adziN[ɳu		
237	顎	Y	3	C	utu[gë	utu[gë\ɳu		
244	バツタ	Y	3	C	gaQ[ta	gaQ[ta\ɳu		
245	白髪	Y	3	C	sira[gï	sira[gïɳu		
247	一つ	Y	3	C	?tiR[tsï	?tiR[tsï\ɳu		
251	五つ	Y	3	B	itsï[tsï	itsï[tsï\ɳu		
253	七つ	Y	3	B	nana[tsï	nana[tsïɳu		
26	鋸	Y	4	B	noRgi[ri	noRgi[ri\ɳu	noRgi[rika\ɳra	
74	雷	Y	4	B	kaNna[ri	kaNna[ri\ɳu	kaNna[rika\ɳra	
132	かんざし	Y	4	-	kaNdza[sï	kaNdza[sï\ɳu		
147	台所・母屋と 独立した家屋	Y	4	B	toRgu[ra	toRgu[ra\ɳu	toRgu[raka\ɳra	
89	ふくら脛	Z	4	-	mumu[gu\ɳri	mumu[gu\ɳrinu	mumu[gu\ɳrikara	
97	夜中	Z	4	-	juna[sa\ɳna	juna[sa\ɳnanu	juna[sa\ɳnakara	
133	朝	Z	4	C	sïti[mï\ɳti	sïti[mï\ɳtinu	sïti[mï\ɳtikara	
192	暁	Z	4	C	aR[tu\ɳki	aR[tu\ɳkinu	aR[tu\ɳkikara	
238	かまきり	Z	4	C	iQ[sja\ɳti	iQ[sja\ɳtinu	iQ[sja\ɳtikara	

Appendix 13. 母間方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-kara	メモ
1	垢	X	1	-	a:	a:\nu / anu	akara	
22	血	X	1	A	cji: / cji	cji:nu / cjinu	cjika\ra	
28	葉	X	1	A	ha: / ha	ha\vu	ha\kara	
32	実・果物	X	1	-	mi	mi:nu	mi:\kara	
37	下	X	1	A	sa:	sa:nu	-	
72	貝	X	1	B	nja:	nja:\nu	-	a:nja 赤い貝
81	蛸	X	1	B	to: / to	to:\nu	-	
95	魚	X	1	A	?ju	?ju:nu	-	
99	齒	X	1	B	ha	ha\vu	-	
100	木	X	1	B	kī	kī\vu	kī\kara	
107	竹	X	1	A	de: / de	de\vu	de\kara	
108	湯	X	1	B	ju: / ju	ju:\nu	ju\kara	
110	人	X	1	A	cju:	cjunu	cju:kara	
141	子	X	1	A	?kwa	?kwa:nu	?kwa:kara	
142	中	X	1	C	na	na:\nu	na:kara	
164	手	X	1	B	tī	tī\vu	tī\kara	
168	豚	X	1	C	?wa	?wa\vu	?wa\kara	
170	目	X	1	B	mī	mī\vu	mī:ka\ra	
193	尾	X	1	A	du: / du	du:\nu	du:ka\ra	
221	穂	X	1	B	hu: / hu	hu:\nu	hu\kara	
224	家	X	1	B	ja: / ja	ja\vu	ja:ka\ra	
233	前	X	1	C	mē	mē\vu	mē\kara	
8	袋	X	2	C	hu\ku	hu\kunu / hukunu	-	
9	坂	X	2	A	hira	hiranu	-	
10	草履	X	2	A	saba	sabanu	-	
14	着物	X	2	B	kiN	kiNnu	-	
17	にんにく	X	2	A	hī:ru	hī:runu	-	kuruhīru 黒にんにく
20	右	X	2	A	mī\gi	mī\ginu	-	
23	帆	X	2	A	huR	huR\vu	huR\kara	
29	蓆	X	2	C	mu:\sju	mu:\sjunu	-	kurumusju 黒い蓆
30	牙	X	2	A	ki\ba	ki\banu / kibanu	-	
31	風	X	2	A	ka\dzī	kadzīnu	-	
34	暇	X	2	-	hima	himanu	-	
53	波	X	2	B	nami	naminu / nami\vu	-	
54	舟	X	2	C	hu\ñī	hu\ñīnu	-	
55	針	X	2	C	ha\ri	ha\rinu	-	
56	骨	X	2	C	hu\ñī	hu\ñīnu	hu\ñīkara	
58	足	X	2	B	sini	sininu	-	系列別語彙では「脛」の意味
61	鳥・鶏	X	2	A	tui	tuinu	-	
62	花	X	2	B	hana	hananu	-	
64	夜	X	2	B	juru	juru\vu	-	
66	明日	X	2	B	acja	acja\vu	-	
67	蟻	X	2	A	ani / a:\ñi	aninu	-	
68	潮・海水	X	2	B	usju	usju\vu	-	
70	夫	X	2	A	wutu	wutunu	-	
75	亀	X	2	B	kamī	kamī\vu	-	

79	きのこ	X	2	C	na\ba	na\banu	-	
80	匂い	X	2	A	kada	kadanu	-	
83	土	X	2	B	micja:	micja\ngu	-	
87	煤	X	2	C	su\su	su\sgunu	-	
88	腹	X	2	B	wata / wata:	watanu	-	
94	南	X	2	B	hai	hainu	-	
102	腰・後ろ	X	2	A	kusi	kusinu	-	
115	鼻	X	2	A	hana	hana\ngu	-	
118	豆	X	2	B	mamĩ	mamĩ\ngu	-	
123	橋	X	2	A	hasi	hasinu	-	
124	肩	X	2	B	kata	kata\ngu	-	
126	影	X	2	C	ka\gĩ	ka\gĩnu	-	
127	海	X	2	C	uN	uN\ngu	-	
135	釜	X	2	-	kama	kamanu / kama\ngu	-	
140	甕	X	2	C	ka\mĩ	ka\mĩnu	-	
144	尻	X	2	B	ma\li	ma\linu	-	
145	浜	X	2	C	ha\ma	ha\manu	-	
148	梢・サトウキビの先端	X	2	C	sju\ra	sju\ranu	-	
151	ごちそう	X	2	C	sju\ki	sju\kinu	-	
155	薪	X	2	-	taN	taN\ngu	-	
156	卵	X	2	C	ku\ga	ku\ganu	-	
157	太陽	X	2	C	ti\da	ti\danu	-	
160	とさか・たてがみ	X	2	-	?kjaN	?kjaN\ngu	-	
161	ひしゃく	X	2	C	ni\bu	ni\bunu	-	
228	紐	X	2	C	?ki\bi	?ki\binu	-	系列別語彙では「帯」の意味
166	口	X	2	A	kucji	kucjinu	-	
169	釘	X	2	A	kugi	kugi\ngu	-	
171	息	X	2	C	i\ki	i\kinu	-	
172	目上の人・兄	X	2	C	si\da	si\danu	-	
173	蓬	X	2	C	hu\cji	hu\cjinu	-	
174	来年	X	2	C	ja\ni	ja\ninu	-	
176	臼	X	2	C	u\si	u\sinu	-	
183	米	X	2	B	kumĩ	kumĩ\ngu	-	
184	声	X	2	C	ku\li	ku\linu	-	
185	汁	X	2	B	siru	siru\ngu	-	
186	鍋	X	2	C	na\bi	na\bĩnu	-	
187	顔	X	2	B	cjira	cjira\ngu	-	
188	蚤	X	2	C	nu\mi	nu\minu	-	
190	山	X	2	B	jama	jama\ngu	-	
191	妻	X	2	A	tudzi	tudzi\ngu / tudzinu	-	
196	竈	X	2	-	dzi\ru	dzi\runu	-	
199	猿	X	2	C	sa\ru	sa\runu	-	
200	耳	X	2	B	miN	miN\ngu	-	
201	味噌	X	2	B	misju	misju:nu	-	
203	鮫	X	2	-	samĩ	samĩnu	-	
204	サトウキビ	X	2	B	ugi	uginu	-	

205	昨日	X	2	C	kinu	kinu\ngu	-	
209	子供	X	2	C	were	were\ngu	-	
210	砂糖	X	2	C	sa\ta	sa\tanu	-	
216	牛	X	2	A	usi	usinu	-	
218	火	X	2	C	?ma\cji	?ma\cjinu	-	
220	布団	X	2	C	u\ru	u\runu	-	
228	帯	X	2	-	u\bi	u\binu	-	
230	去年	X	2	B	kuru	kuru\ngu	-	
231	鳥	X	2	C	ga\ra	ga\ranu	-	
232	松	X	2	C	ma\cji	ma\cjinu	-	
240	籠の一種	X	2	C	ti\ru	ti\runu	-	
4	箒	X	3	C	hoR\ki	hoR\kinu	hoR\kikara	
7	煙	X	3	A	kibu\si	kibu\sinu / kibusin	kibusikara	
11	食料・主食	X	3	-	ubaN	ubaN\ngu	-	
42	兎	X	3	C	usagi	usaginu	usa\gikara	
43	扇・団扇	X	3	C	o\Rgi	o\Rginu	-	
52	畳	X	3	A	tatamī	tatamīnu	-	
59	鼻血	X	3	A	hanadzi	hanadzinu	-	
63	刀	X	3	C	kata\na	kata\nanu	-	
77	下駄	X	3	B	aNdza	aNdza\ngu	-	
120	命	X	3	B	inucji / inu\cji	inu\cjinu	-	
129	あおさ	X	3	C	oR\sa	oR\sanu	-	
134	鱗・ふけ	X	3	B	iQki	iQki\ngu	-	
143	空	X	3	A	tiNto	tiNto\ngu	-	
153	肉	X	3	-	masisi	masisinu	-	複合語? 真肉
158	目下の人・弟	X	3	B	uQ\tu	uQ\tunu	-	
178	虱	X	3	C	siraN	siraN\ngu	siraN\kara	
195	男	X	3	B	iNga	iNga\ngu	iNga\ra	
215	みかん	X	3	C	kuniN	kuniNnu	-	
226	苺	X	3	C	icju\bi	icju\binu	-	
244	バッタ	X	3	C	gaQ\ta	gaQ\tanu	-	
247	一つ	X	3	C	?tiQ\cji	-	-	
248	二つ	X	3	A	?taQ\cji	-	-	
249	三つ	X	3	A	miQ\cji	-	-	
250	四つ	X	3	A	juQ\cji	-	-	
252	六つ	X	3	A	muQcji	-	-	
254	八つ	X	3	A	jaQ\cji	-	-	
26	鋸	X	4	B	noRgiri	noRgiri\ngu	-	
86	膝小僧	X	4	-	cjiRsiN	cjiRsiN\ngu	-	
131	頭	X	4	-	uQkaN	uQkaN\ngu	uQkaNkara	
138	親子	X	4	C	ujaQ\kwa	ujaQ\kwanu	-	
147	台所・母屋と 独立した家屋	X	4	B	toRgura	toRgura\ngu	toRgura\kara	
162	門	X	4	-	moNgura	moNgura\ngu	-	複合語?
192	暁	X	4	C	aQtu\ki	aQtu\kinu	-	
198	踵	X	4	-	arusi\dzi	arusi\dzinu	-	
213	とんぼ	X	4	C	eRraN	eRraN\ngu	eRraN\kara	
238	かまきり	X	6	-	iQsatuba\i	iQsatuba\inu	-	
2	種	Y	2	A	ta[nī	ta[nī\ngu	ta[nīkara	

12	棘	Y	2	A	ni[gĩ	ni[gĩnu	-	
13	涙	Y	2	B	na[da	na[danu	na[daka\\ra	
18	ほくろ	Y	2	A	a[ra	a[ra\\nu	-	
25	飴	Y	2	A	a[mĩ	a[mĩ\\nu	-	
36	畑	Y	2	C	ha[te	ha[tenu	-	
38	袖	Y	2	A	sju[ri	sju[rinu	-	
39	羽	Y	2	A	ha[nĩ	ha[nĩnu	-	
41	鹽	Y	2	C	ta[re:	ta[re\\nu	-	
47	星	Y	2	A	hu[si	hu[si\\nu	-	
48	島	Y	2	B	si[ma	si[ma\\nu	-	
50	角	Y	2	B	cji[nu	cji[nu\\nu	-	
×	露	Y	2	-	ki[ri	ki[ri\\nu	-	
	たんこぶ	Y	2	C	ga[bu	ga[bu\\nu	-	
93	石	Y	2	A	i[si	i[sinu	-	
96	傷	Y	2	A	ki[dzĩ	ki[dzĩnu	-	
104	酒	Y	2	A	sa[kĩ	sa[kĩ\\nu	-	
105	網	Y	2	B	a[mi	a[mini	-	
106	雨	Y	2	B	a[mĩ	a[mĩnu	-	
109	箱	Y	2	A	ha[ku	ha[kunu	-	
111	雲	Y	2	B	ku[mo	ku[mo\\nu	-	
112	鎌	Y	2	B	ka[ma	ka[ma\\nu	-	
113	色	Y	2	B	i[ru	i[ru\\nu	-	
114	筆	Y	2	A	hu[ri	hu[ri\\nu	-	
117	水	Y	2	A	mĩ[dzĩ	mĩ[dzĩnu	-	
121	麦	Y	2	B	mu[gi	mu[gi\\nu	-	
122	糸	Y	2	C	i[tu	i[tu\\nu	-	
125	草	Y	2	B	ku[sa	ku[sa\\nu	-	
146	友	Y	2	A	du[si	du[sinu	du[sikara	
175	板	Y	2	B	i[cja	i[cjanu	i[cjaka\\ra	
180	藁	Y	2	B	wa[ra	wa[ra\\nu	-	
202	糠	Y	2	B	nu[ka	nu[ka\\nu	-	
206	青年	Y	2	B	mi[sje	mi[sje\\nu	-	
208	臍	Y	2	A	hu[sju	hu[sju:\\nu	-	
219	音	Y	2	A	u[tu	u[tu\\nu	-	
223	舌	Y	2	B	si[bja:	si[bjanu	-	
229	萱	Y	2	B	gĩ[ja	gĩ[ja\\nu	-	
234	灸	Y	2	C	ja[cju	ja[cju\\nu	-	
235	韭	Y	2	B	bi[ra	bi[ra\\nu	-	
237	顎	Y	2	-	a[gu	a[gu\\nu	-	
6	鋤	Y	3	-	toR[gẽ	toR[gẽ\\nu	-	
27	港	Y	3	-	mina[tu	mina[tu	-	
40	枕	Y	3	B	maQ[kwa	maQ[kwa	-	
46	柱	Y	3	-	hasi[ra	hasi[ra\\nu	-	
49	麴・カビ	Y	3	A	koR[dzi	koR[dzinu	-	
60	若い娘	Y	3	C	mẽR[re	mẽR[re\\nu	mẽR[re\\kara	
65	油	Y	3	B	aN[ba	aN[ba\\nu	-	
69	腕	Y	3	B	kai[na	kai[na\\nu	-	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mi\\nu	-	
74	雷	Y	3	-	ure[i	ure[i\\nu	-	

76	櫛	Y	3	B	saQ[ki	saQ[ki\Nnu	-	
85	しゃもじ	Y	3	C	misi[ge	misi[ge\Nnu	-	
103	俵	Y	3	B	toR[ra	toR[ra\Nnu	toR[ra\kara	
119	暦	Y	3	B	kuju[mi	kuju[mi\Nnu	kuju[mi\kara	
150	今年	Y	3	-	kutu[si	kutu[si\Nnu	-	
152	南京豆（落花 生）	Y	3	B	dzima[mĩ	dzima[mĩ\Nnu	-	
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[mi\Nnu	-	
189	涎	Y	3	A	juda[i	juda[inu	-	
251	五つ	Y	3	B	icji[cji	-	-	
253	七つ	Y	3	B	nana[cji	-	-	
255	九つ	Y	3	-	kunu[cji	-	-	
5	髪	Z	3	C	ka[ra\dzi	ka[ra\dzinu	ka[ra\dzikara	
44	薬	Z	3	C	ku[sjui	ku[sju\inu	-	
45	情け	Z	3	C	na[sa\ki	na[sa\ki\inu	-	
98	左	Z	3	B	si[dza:\i	si[dza\inu	-	
136	雲丹	Z	3	C	ga[cji\cji	ga[cji\cjinu	-	
139	蚊	Z	3	C	ga[dzaN	ga[dza\Nnu	ga[dza\Nkara	
149	蝶	Z	3	B	ha[bi\ru	ha[bi\runu / ha[bi\ru\inu	ha[bi\rukara	
154	へちま	Z	3	B	na[bi\ra	na[bi\ranu	-	
167	ふんどし	Z	3	C	sa[na\gi	sa[na\ginu	-	
179	鰻	Z	3	C	u[na\gi	u[na\ginu	-	
197	おでき	Z	3	C	ni[bu\tu	ni[bu\tunu	-	
207	腰周り	Z	3	C	ga[ma\ku	ga[ma\kunu	-	
211	蟬	Z	3	C	a[sa\va	a[sa\vanu	-	
212	杖	Z	3	C	gu[saN	gu[saN\inu	-	
222	やどかり	Z	3	C	a[maN	a[maNnu	-	
227	女	Z	3	B	u[na\gu	u[na\gunu	u[naguka\ra	
245	白髪	Z	3	C	si[ra\gi	si[ra\gi\inu	si[ra\gikara	
133	朝	Z	4	C	situ[mĩ\ti	situ[mĩ\tinu	situ[mĩ\tikara	
97	夜中	Z	5	-	junaN[sa\ra	junaN[sa\ranu	-	

Appendix 14. 井之川方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-kara	メモ
22	血	X	1	A	cji:	cji\Nu / cji:nu	cji:kara	
23	帆	X	1	A	hu: / hu	hu:nu	hu:kara	
28	葉	X	1	A	ha:	ha\Nu / ha\Nu	ha:kara	
32	実・果物	X	1	-	mi	mi:nu	mi:kara	
37	下	X	1	A	sja: / sja	sja\Nu	sja:kara	
72	貝(小さい)	X	1	B	nja	nja\Nu	nja\kara	
81	蛸	X	1	B	to:	to\Nu / to\Nu	to\kara	
95	魚	X	1	A	?ju	?ju:nu	?ju:kara	
99	歯	X	1	B	ha	ha\Nu	ha\kara	
100	木	X	1	B	kī	kī\Nu	kī:kara	
107	竹	X	1	A	de:	de:nu	de:kara	hutede 太い竹
108	湯	X	1	B	ju	ju\Nu	ju\kara	
110	人	X	1	A	?cju	?cju:nu	?cju:kara	
141	子	X	1	A	?kwa	?kwanu	-	
142	中	X	1	C	na:	na:nu	na:kara	
159	上	X	1	A	?wī	?wīnu	?wī:kara	
162	門(家の入口)	X	1	B	dzo:	-	-	
164	手	X	1	B	tī	tī\Nu	tī:ka\ra	
168	豚	X	1	C	?wa	?wa\Nu	?wa\kara	
170	目	X	1	B	mī	mī\Nu	mī:ka\ra	
193	尾	X	1	A	du:^	du:^nu	du:^kara	
221	穂	X	1	B	hu	hu\Nu	hu\kara	
224	家	X	1	B	ja	ja\Nu	ja:ka\ra	
233	前	X	1	C	mē:^	mē:^nu	mē:^kara	
×	ざる	X	1	-	se:^	se:^nu	se:^kara	
×	十	X	1	-	tu	tu:nu	-	
1	垢	X	2	-	a\ki	a\kiNu	a\ki:kara	
14	着物	X	2	B	?kiN	?kiN\Nu	?kiNka\ra	
30	牙	X	2	A	ki\ba	ki\banu	ki\ba:kara	
46	柱	X	2	C	ha\ra	ha\ranu	ha\ra:kara	
54	舟	X	2	C	hu\nī	hu\nīnu	hu\nī:kara	
55	針	X	2	C	ha\ri	ha\rinu	ha\ri:kara / harika\ra	
56	骨	X	2	C	hu\nī	hu\nīnu	hu\nī:kara	
58	脛	X	2	-	ha\gi	ha\ginu	ha\gi:kara	
×	貝(大きい)	X	2	-	ka\i	ka\inu	ka\i:kara	
79	きのこ	X	2	C	na\ba	na\banu	na\ba:kara	
87	煤	X	2	C	si\si	sisinu / si\sinu	si\si:kara	
126	陰	X	2	-	ka\gī	ka\gīnu	ka\gī:kara	
127	海	X	2	C	uN	uN\Nu	uN\kara	
140	甕	X	2	C	ka\mī	ka\mīnu	ka\mī:kara	
143	空	X	2	-	teN	teNnu	teN:kara	
144	尻	X	2	B	ma\ri	ma\rinu	ma\ri:kara	
145	浜	X	2	C	ha\ma	ha\manu	ha\ma:kara	
148	サトウキビの 先端	X	2	C	sju\ra	sju\ranu	sju\ra:kara	
151	ごちそう	X	2	C	sju\ki	sju\kiNu	sju\ki:kara	

157	太陽	X	2	C	ti\da	ti\danu	ti\dakara	
161	ひしゃく	X	2	C	ni\bu	ni\bunu	ni\bukara	
228	帯	X	2	C	kju\bi	kju\binu	kju\bikara	
165	椀	X	2	-	gu\ki	gu\kinu	gu\kikara	
171	息	X	2	C	i\ki	i\kinu	i\kikara	
172	目上の人	X	2	C	si\da	si\danu	si\dakara	
173	蓬	X	2	C	hu:\cji / hu\cji	hu\cjinu	hu:\cjikara	
174	来年	X	2	C	ja\ni	ja\ninu	ja\nikara	
176	白	X	2	C	u\si	u\sinu	u\sikara	
181	犬	X	2	B	iN	i\Nnu	iNkara / i\Nkara	
184	声	X	2	C	ku\i	ku\inu	ku\ikara	
186	鍋	X	2	C	na\bi	na\bīnu	na\bikara	
188	蚤	X	2	C	nu\mi	nu\minu	nu\mikara	
199	猿	X	2	C	sa\ru	sa\runu	sa\rukara	
200	耳	X	2	B	mi\N / miN	mi\Nnu	mi\Nkara	
210	砂糖	X	2	C	sa\ta	sa\tanu	sa\takara	
211	蟬	X	2	-	cji\ja	cji\janu	cji\jakara	
229	萱	X	2	-	dzi\ki	dzi\ki nu	dzi\ki kara	
231	烏	X	2	C	ga\ra	ga\ranu	ga\rakara	
232	松	X	2	C	ma\cji	ma\cjinu	ma\cjikara	
240	籠の一種	X	2	C	ti\ru	ti\runu	ti\rukara	
244	バッタ	X	2	C	ga\ta	ga\tanu	ga\takara	
×	囲炉裏	X	2	-	dzi\ru	dzi\runu	dzi\rukara	
4	箒	X	3	C	hoR\ki	hoR\kinu	hoR\kikara	
8	袋	X	3	C	huQ\ku	huQ\kunu	huQ\kukara	
11	食料・主食	X	3	A	haNmē	haNmēnu	haNmēkara	
29	蓆	X	3	C	muQ\sj	muQ\sjunu	muQ\sjukara	
43	扇	X	3	C	oR\gi	oR\ginu	oR\gikara	
49	カビ・麴	X	3	A	koRdzi	koRdzinu	koRdzikara	
×	包丁	X	3	-	hoR\cja	hoR\cjanu	hoR\cjakara	
65	油	X	3	B	aNba	aNba\vu	aNbaka\ra	
76	櫛	X	3	B	saRki	saRkinu	saRkikara	
77	下駄	X	3	B	aNdza	aNdza\vu	aNdzaka\ra	
82	虹	X	3	A	noRgi	noRginu	noRgikara	
129	あおさ	X	3	C	oR\sa	oR\sanu	oR\sakara	
214	モッコ	X	3	-	muQ\ku	muQ\kunu	muQ\kukara	
218	火	X	3	C	?maQ\cji	?maQ\cjinu	?maQ\cjikara	
247	一つ	X	3	C	?tiR\cji	?tiR\cjinu	-	
247	二つ	X	3	A	?taR\cji	?taR\cjinu	-	
247	三つ	X	3	A	miR\cji	miR\cjinu	-	
247	四つ	X	3	A	juR\cji	juR\cjinu	-	
247	六つ	X	3	A	muRcji	muRcjinu	-	
247	八つ	X	3	A	jaRcji	jaR\cjinu	-	
133	朝(暁)	X	4	C	aRtu\ki	aRtu\kinu	aRtu\kikara	
213	とんぼ	X	4	C	eRda\ma	eRda\manu	eRda\makara	
238	かまきり	X	9	-	iQsjudamaiQ\taN	iQsjudamaiQ\taNnu	iQsjudamaiQ\taNkara	
2	種	Y	2	A	ta[ni	ta[ninu	ta[nika\ra	
9	坂	Y	2	A	si[ra	si[ranu	si[rakara	

10	草履	Y	2	A	sa[ba	sa[banu	sa[bakara	
12	棘	Y	2	A	ni[gi	ni[ginu	ni[gikara	
13	涙	Y	2	B	na[da	na[da\neu	na[daka\ra	
16	西	Y	2	A	i[ri	i[rinu	i[rika\ra / i[rikara	
17	にんにく	Y	2	A	hwi[ru	hwi[runu	hwi[rukara	
18	ほくろ	Y	2	A	a[da	a[da\neu	a[daka\ra	
25	飴	Y	2	A	a[mī	a[mīnu	a[mīkara	
31	風	Y	2	A	ka[di	ka[dinu	ka[dikara	
34	暇	Y	2	-	hi[ma	hi[ma\neu	hi[makara	
36	畑	Y	2	C	ha[te	ha[te\neu	ha[teka\ra	
38	袖	Y	2	A	sju[di	sju[dinu	sju[dikara	
39	羽	Y	2	A	ha[nī	ha[nīnu	ha[nīkara	
41	鹽	Y	2	C	ta[re	ta[re\neu	ta[reka\ra	
47	星	Y	2	A	hu[si	hu[sinu	hu[sikara	
48	島	Y	2	B	si[ma	si[ma\neu	si[maka\ra	
50	角	Y	2	B	cji[no	cji[nonu / cji[no\neu	cji[noka\ra	
×	霧	Y	2	-	ki[ri	ki[rinu	ki[rikara	
53	波	Y	2	B	na[mi	na[mi\neu	na[mika\ra	
61	鳥・鶏	Y	2	A	tu[ri	tu[rinu	tu[rikara	
62	花	Y	2	B	ha[na	ha[na\neu	ha[naka\ra	
64	夜	Y	2	B	ju[ru	ju[ru\neu	ju[ruka\ra	
66	明日	Y	2	B	a[cja	a[cja\neu	a[cjaka\ra	
67	蟻	Y	2	A	a[nī	a[nīnu	a[nīkara	
68	潮・海水	Y	2	B	u[sju	u[sju\neu	u[sjuka\ra	
70	夫	Y	2	A	wu[tu	wu[tunu	wu[tukara	
73	北	Y	2	A	ni[si	ni[si\neu	ni[sika\ra	
78	洞窟(海の洞穴)	Y	2	A	ga[ma	ga[manu	ga[makara	
×	洞窟	Y	2	-	a[bu	a[bunu	a[bukara	
×	サンゴ礁	Y	2	-	na[ba	na[banu	na[bakara	
80	匂い	Y	2	A	ka[da	ka[danu	ka[dakara	
83	土	Y	2	B	ni[cja	ni[cja\neu	ni[cjaka\ra	
88	腹	Y	2	B	wa[ta	wa[tanu	wa[taka\ra	
×	ふくら脛	Y	2	B	cji[tu	cji[tu\neu	cji[tuka\ra	
90	烏賊	Y	2	A	i[kja	i[kjanu	i[kjakara	
91	池	Y	2	-	i[ki	i[ki\neu	i[kika\ra	
92	たんこぶ	Y	2	C	ga[bu	ga[bu\neu	ga[buka\ra	
93	石	Y	2	A	i[si	i[sinu	i[sikara	
94	南	Y	2	B	ha[i	ha[i\neu	-	
96	傷	Y	2	A	ki[dzi	ki[dzinu	ki[dzikara	
102	腰・後ろ	Y	2	A	ku[si	ku[sinu	ku[sikara	
104	酒	Y	2	A	sa[kī	sa[kīnu	sa[kīkara	
105	網	Y	2	B	a[mi	a[mi\neu	a[mika\ra	
106	雨	Y	2	B	a[mī	a[mī\neu	a[mīka\ra	
×	竹	Y	2	-	ga[ra	ga[ranu	ga[rakara	
109	箱	Y	2	A	ha[ku	ha[kunu	ha[kukara	
111	雲	Y	2	B	ku[mo	ku[mo\neu	ku[moka\ra	
112	鎌	Y	2	B	ka[ma	ka[ma\neu	ka[maka\ra	
113	色	Y	2	B	i[ru	i[ru\neu	i[ruka\ra / i[rukara	

114	筆	Y	2	A	hu[di	hu[dinu	hu[dikara	
115	鼻	Y	2	A	ha[na	ha[nanu	ha[nakara	
117	水	Y	2	A	mi[dzi	mi[dzinu	mi[dzikara	
118	豆	Y	2	B	ma[mĩ	ma[mĩ\\nu	ma[mika\\ra	
121	麦	Y	2	B	mu[gi	mu[gi\\nu	mu[gika\\ra	
122	糸	Y	2	C	i[tu	i[tu\\nu	i[tuka\\ra	
123	橋	Y	2	A	ha[si	ha[sinu	ha[sikara	
124	肩	Y	2	B	ka[ta	ka[ta\\nu	ka[taka\\ra	
125	草	Y	2	B	ku[sa	ku[sa\\nu	ku[saka\\ra	
137	權	Y	2	-	ka[i	ka[i\\nu	ka[ika\\ra	
146	友	Y	2	A	du[si	du[sinu	du[sikara	
163	紐	Y	2	C	ji[ru	ji[ru\\nu	ji[ruka\\ra / ji[rukara	
166	口	Y	2	A	ku[cji	ku[cjinu	ku[cjikara	
169	釘	Y	2	A	ku[gi	ku[ginu	ku[gikara	
175	板	Y	2	B	i[cja	i[cja\\nu	i[cja\\kara	
180	藁	Y	2	B	wa[ra	wa[ra\\nu	wa[ra\\kara	
182	傘・笠	Y	2	B	ka[sa	ka[sa\\nu	ka[saka\\ra	
183	米	Y	2	B	ku[mĩ	ku[mĩ\\nu	ku[mika\\ra	
185	汁	Y	2	B	si[ru	si[ru\\nu	si[ruka\\ra	
187	顔(面)	Y	2	B	cji[ra	cji[ra\\nu	cji[raka\\ra	
190	山	Y	2	B	ja[ma	ja[ma\\nu	ja[maka\\ra	
191	妻	Y	2	A	tu[dzi	tu[dzinu	tu[dzikara	
196	竈	Y	2	-	ka[ma	ka[manu	ka[makara / ka[maka\\ra	
198	踵	Y	2	B	a[du	a[du\\nu	a[duka\\ra	
201	味噌	Y	2	B	mi[sju	mi[sju\\nu	mi[sju\\kara	
202	糠	Y	2	B	nu[ka	nu[ka\\nu	nu[kaka\\ra	
203	鮫	Y	2	A	sa[ba	sa[banu	sa[bakara	
204	サトウキビ	Y	2	B	u[gi	u[gi\\nu	u[gika\\ra	
205	昨日	Y	2	C	ki[nu	ki[nu\\nu / ki[nu:\\nu	ki[nuka\\ra	
206	青年	Y	2	B	mi[sje	mi[sje\\nu	mi[sjeka\\ra	
208	臍	Y	2	A	hu[sju	hu[sju:nu	hu[sjukara	
216	牛	Y	2	A	u[si	u[sinu	u[sikara	
219	音	Y	2	A	u[tu	u[tunu	u[tukara	
223	舌	Y	2	B	si[bja	si[bja\\nu	si[bjaka\\ra	
230	去年	Y	2	B	hu[du	hu[du\\nu	hu[duka\\ra	
234	灸	Y	2	C	ja[cju	ja[cju\\nu	ja[cju\\kara	
235	韭	Y	2	B	bi[ra	bi[ra\\nu	bi[ra\\kara	
×	肝・心	Y	2	-	ki[mu	ki[munu	ki[mukara	
6	鋤	Y	3	-	toR[gě	toR[gě\\nu	toR[gě\\kara	
7	煙	Y	3	A	kibu[si	kibu[sinu	kibu[sikara	
40	枕	Y	3	B	maQ[kwa	maQ[kwa\\nu	maQ[kwaka\\ra	
×	団扇	Y	3	-	ucji[wa	ucji[wa\\nu	ucji[waka\\ra	
59	鼻血	Y	3	A	hana[dzi	hana[dzinu	hana[dzikara	
60	若い娘	Y	3	C	měR[re	měR[renu	měR[rekara	
69	腕	Y	3	B	kai[na	kai[na\\nu	kai[naka\\ra	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mini	hasa[mikara	
85	しゃもじ	Y	3	C	misi[ge	misi[ge\\nu	misi[geka\\ra	
103	俵	Y	3	B	toR[ra	toR[ra\\nu	toR[raka\\ra	

119	暦	Y	3	B	kuju[mi	kuju[mi\ngu	kuju[mika\ra	
120	命	Y	3	B	ino[cji	ino[cji\ngu	ino[cjika\ra	
134	鱗・ふけ	Y	3	B	iQ[ki	iQ[kinu	iQ[kikara	
152	落花生	Y	3	B	dzima[mĩ	dzima[mĩ\ngu	dzima[mika\ra	
158	目下の人・弟	Y	3	B	uQ[tu	uQ[tu\ngu	uQ[tuka\ra	
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[mi\ngu	kaga[mika\ra	
195	男	Y	3	B	jiN[ga	jiN[ga\ngu	jiN[gaka\ra	
227	女	Y	3	B	una[gu	una[gu\ngu	una[gu\kara	
237	顎	Y	3	C	utu[gě	utu[gě\ngu	utu[gěka\ra	
247	五つ	Y	3	B	icji[cji\:	icji[cjinu	-	
247	七つ	Y	3	B	nana[cji	nana[cjinu	-	
5	髪	Z	3	C	ka[ra\ldzi	ka[ra\ldzinu	ka[ra\ldzikara	
20	右	Z	3	A	ni[gi	ni[ginu	ni[gi	
21	鋤	Z	3	B	ju[da\ri	ju[da\rinu	ju[da\rikara	
27	港	Z	3	A	tu[mari	tu[marinu	noR[gi	
42	兎	Z	3	C	u[sa\gi	u[sa\ginu	u[sa\gikara	
44	葉	Z	3	C	ku[su\ri	ku[su\rinu	ku[su\rikara	
45	情け	Z	3	C	na[sa\ki	na[sa\kinu	na[sa\kikara	
52	畳	Z	3	A	ta[ta\mi	ta[tamĩnu	ta[tamĩkara	
57	黄金	Z	3	A	ku[gañi	ku[gañinu	ku[gañikara	
63	刀	Z	3	C	ka[ta\na	ka[ta\nanu	ka[ta\nakara	
75	亀	Z	3	B	ka[mĩN	ka[mĩN\ngu	ka[mĩNka\ra	
194	かぼちゃ(頭)	Z	3	C	cji[bu\ru	-	-	
84	東	Z	3	A	a[ga\re	a[ga\renu	a[gareka\ra	
86	膝小僧(足の関節)	Z	3	-	ma[gari	ma[garinu	ma[garikara	
98	左	Z	3	B	si[gja\ri	si[gja\rinu	si[gja\rikara	
136	雲丹	Z	3	C	ga[cji\cji / ga[cjicji	ga[cjicji\ngu	ga[cji\cjikara	
139	蚊	Z	3	C	ga[dzaN	ga[dzaN\ngu	ga[dzaNka\ra	
149	蝶	Z	3	B	ha[bi\ru	ha[bi\runu	ha[bi\rukara	
150	今年	Z	3	-	ku[tu\si	ku[tusinu	ku[tusikara	
154	へちま	Z	3	B	na[bi\ra	na[bi\ranu	na[bi\rakara	
155	薪	Z	3	C	ta[muN	ta[muN\ngu	ta[muNka\ra	
156	卵	Z	3	-	ta[ma\gu	ta[ma\gunu	ta[ma\gukara	
160	とさか	Z	3	-	ka[gaN	ka[gaN\ngu	-	
167	ふんどし	Z	3	C	sa[na\gi	sa[na\ginu	sa[na\gikara	
178	虱	Z	3	C	si[raN	si[raN\ngu	si[raN\kara	
179	鰻	Z	3	C	u[na\gi	u[na\ginu	u[na\gikara	
189	涎	Z	3	A	ju[dari	ju[darinu	ju[darikara	
197	おでき	Z	3	C	nĩ[bu\tu	nĩ[bu\vtunu	nĩ[bu\vtukara	
207	腰周り	Z	3	C	ga[ma\ku	ga[ma\kunu	ga[ma\kukara	
212	杖	Z	3	C	gu[saN	gu[saN\ngu	gu[saN\kara	
215	みかん	Z	3	C	ku[niN	ku[niN\ngu	ku[niNka\ra	
220	布団	Z	3	-	hu[toN	hu[toNnu	hu[toNkara	
222	やどかり	Z	3	C	a[maN	a[maN\ngu	a[maN\kara	
226	苺	Z	3	C	i[cju\bi	i[cju\binu	i[cju\bikara	
236	杵	Z	3	C	a[dziN	a[dziN\ngu	a[dziN\kara	
245	白髪	Z	3	C	si[ra\gi	si[ra\ginu	si[ra\gikara	
153	肉	Z	3	-	ma[sisi	ma[sisinu	ma[sisikara	

247	九つ	Z	3	-	ku[nucji	ku[nucjinu	-	
26	鋸	Z	4	B	noR[gi ri	noR[ginu / noR[gi ri \\nu	noR[gi ri \\nu	
131	頭	Z	4	-	uQ[kaN	uQ[kaNnu	uQ[kaNkara	
138	親子	Z	4	C	u/ja[Q\\kwa	u/ja[Q\\kwanu	u/ja[Q\\kwakara	
147	台所・母屋と 独立した家屋	Z	4	B	toR[gura	toR[gura\\nu	toR[gura \\nu	
97	夜中	Z	5	-	junaN[sa\\na	junaN[sa\\nanu	junaN[sa\\nakara	

Appendix 15. 与名間方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-kara	メモ
22	血	X	1	A	cji:˘	cji:˘nu / cji:˘nu	cji:˘kara	
23	帆	X	1	A	hu:˘	hu:˘nu	hu:˘kara	
28	葉	X	1	A	ha:˘	ha:˘nu	ha:˘kara	
37	下	X	1	A	sju:˘	sju:˘nu	sju:˘kara	
94	南	X	1	B	hwě:	hwě:nu	hwěka\ra	
95	魚	X	1	A	?ju	?ju:nu	?ju:kara	
99	齒	X	1	B	ha:˘	ha:˘nu	ha:˘ka\ra	
107	竹	X	1	A	de:˘	de:˘nu	de:˘kara	
110	人	X	1	A	?cju	?cju:nu	?cjuNkara	?cjuNkara Nが入る
141	子	X	1	A	?kwa:˘	?kwa:˘nu	?kwa:˘kara	
142	中	X	1	C	na\˘	na\˘nu	na\˘kara	
159	上	X	1	A	?wī:˘	?wī:˘nu	?wī:˘kara	
162	門	X	1	B	dzo\˘	dzo\˘nu	dzo\˘kara	
168	豚	X	1	C	?wa\˘	?wa\˘nu	?wa\˘kara	
193	尾	X	1	A	dzu:˘	dzu:˘nu	dzu:˘kara	
221	穂	X	1	B	hu: / hu	hu:nu	hu:kara	
233	前	X	1	C	mě\˘	mě\˘nu	mě\˘kara	
×	ざる	X	1	-	se\˘	se\˘nu	se\˘kara	
1	垢	X	2	-	ha:˘\kī	ha:˘\kīnu	ha:˘\kīkara	
30	牙	X	2	A	ki\ba / ki:ba	ki:banu	ki:bakara	
46	柱	X	2	C	ha\˘ja	ha\˘janu	ha:˘\jakara	
51	露	X	2	C	cji:\ju / cji\ju	cji\junu	cji\jukara	
54	舟	X	2	C	hu\˘nī	hu\˘nīnu	hu\˘nīkara	
55	針	X	2	C	ha\i	ha\inu	ha\ikara	
56	骨	X	2	C	hu\˘nī	hu\˘nīnu	hu\˘nīkara	
×	箸	X	2	-	ha:˘\si	ha:˘\sinu	ha:˘\sikara	
127	海	X	2	C	u\N	u\Nnu	u\Nkara	
228	帯(細い)	X	2	C	?kju\˘bi	?kju\˘binu	?kju\˘bikara	
228	帯	X	2	-	u\˘bi	u\˘binu	u\˘bikara	
171	息	X	2	C	i:˘\ki	i:˘\kinu	i:˘\kikara	
173	蓬	X	2	C	hu:˘\cji	hu:˘\cjinu	hu:˘\cjikara	
176	白	X	2	C	u:˘\si	u:˘\sinu	u:˘\sikara	
218	火	X	2	C	?ma:˘\cji	?ma:˘\cjinu	?ma:˘\cjikara	
220	布団	X	2	C	u\˘du	u\˘dunu	u\˘dukara	
×	十	X	2	-	tuR	tuRnu	-	
4	箸	X	3	C	hoR\ki	hoR\kinu	hoR\kikara	
11	食料・主食	X	3	A	haNmě	haNměnu	haNměkara	
43	扇・団扇	X	3	C	oR\gi	oR\ginu	oR\gikara	
49	麴	X	3	A	koRdzi	koRdzinu	koRdzikara	
82	虹	X	3	A	noRdzi	noRdzinu	noRdzikara	
86	膝小僧	X	3	A	cjiNsi	cjiNsinu	cjiNsikara	古語
129	あおさ	X	3	C	oR\sa	oR\sanu	oR\sakara	
247	一つ	X	3	C	?tiR\cji	?tiR\cjinu	-	
248	二つ	X	3	A	?taRcji	?taRcjinu	-	
249	三つ	X	3	A	miRcji	miRcjinu	-	
250	四つ	X	3	A	juRcji	juRcjinu	-	
252	六つ	X	3	A	muRcji	muRcjinu	-	

254	八つ	X	3	A	jaRcji	jaRcjinu	-	
8	袋	X	4	C	huQ\kuru	huQ\kurunu	huQ\kurukara	
26	鋸	X	4	B	noRgiri	noRgiri:\nu	noRgirika\ra	
74	雷	X	4	B	kaminari	kaminarinu	kaminarikara	
147	台所・母屋と 独立した家屋	X	4	B	toRgura	toRgura:\nu	toRguraka\ra	
192	朝	X	4	C	haRtu:\ki	haRtu:\kinu	haRtu:\kikara	暁・夜明け ju:[hwě
213	とんぼ	X	4	C	eRdza\N	eRdza\Nnu	eRdza\Nkara	
255	九つ	X	4	-	kuRnucji	kuRnucji:\nu	-	
238	かまきり	X	6	-	eRdzatoma\i	eRdzatoma\inu	eRdzatoma\ikara	
68	潮・海水	Y	1	B	[sju/;	[sju/;\nu	[sju/ka\ra	
81	蛸	Y	1	B	[to/;	[to/;\nu	[to;/ka\ra	
100	木	Y	1	B	[ki/;	[ki/;\nu	[ki;/ka\ra	
108	湯	Y	1	B	[ju/;	[ju/;\nu	[ju;/ka\ra	
164	手	Y	1	B	[ti/;	[ti/;\nu	[ti;/ka\ra	
170	目・穴	Y	1	B	[mī/;	[mī/;\nu	[mī;/ka\ra	cf. mī\ 兄
224	家	Y	1	B	[ja/;	[ja/;\nu	[ja;/ka\ra	
9	坂	Y	2	A	hi[ra:ˆ	hi[ra:ˆnu	hi[ra:ˆkara	
10	草履	Y	2	A	sa[ba	sa[ba:nu	sa[ba:kara	
12	棘	Y	2	A	ni[gi	ni[gi:nu	ni[gi:kara	
14	着物	Y	2	B	ki[N	ki[N\Nu	ki[N/ka\ra	
16	西	Y	2	A	i[ri	i[ri:nu	i[ri:kara	
17	にんにく	Y	2	A	hwī[ru	hwī[ru:nu	hwī[ru:kara	
18	ほくろ	Y	2	A	a[dza:ˆ	a[dza:ˆnu	a[dza:ˆkara	
25	飴	Y	2	A	a[mī:ˆ	a[mī:ˆnu	a[mī:ˆkara	
31	風・後ろ	Y	2	A	ka[dzi	ka[dzi:nu	ka[dzi:kara	
32	ソテツの実	Y	2	B	na[i	na[i\nu	na[i\kara	
36	畑	Y	2	C	ha[te	ha[te\:\nu	ha[te\:\kara	特定の場所。誰かの 畑。
38	袖	Y	2	A	sju[di	sju[di:nu	sju[di:kara	
39	羽	Y	2	A	ha[nī	ha[nī:nu	ha[nī:kara	
47	星	Y	2	A	hu[si	hu[si:nu	hu[si:kara	
52	畳	Y	2	A	ta[te	ta[te:\nu	ta[te\kara	
61	鳥・鶏	Y	2	A	tu[i	tu[inu	tu[ikara	
64	夜	Y	2	B	ju[ru\:\ˆ	ju[ru\:\ˆ\nu	ju[ru\:\ˆkara	
67	蟻	Y	2	A	a[ni:ˆ	a[ni:ˆnu	a[ni:ˆkara	
69	腕	Y	2	B	u[dī\:\ˆ	u[dī\:\ˆnu	u[dī\:\ˆkara	
70	夫	Y	2	A	wu[tu:ˆ	wu[tu:ˆnu	wu[tu:ˆkara	
72	貝	Y	2	-	ka[i	ka[i\nu	ka[i\kara	
73	北	Y	2	A	ni[si	ni[si:nu	ni[si:kara	
78	洞窟（がま）	Y	2	A	ga[ma:ˆ	ga[ma:ˆnu	ga[ma:ˆkara	
×	匂い	Y	2	-	ka[ba:ˆ	ka[ba:ˆnu	ka[ba:ˆkara	
90	烏賊	Y	2	A	i[kja	i[kja:nu	i[kja:kara	
96	傷	Y	2	A	ki[dzi	ki[dzi:nu	ki[dzi:kara	
102	腰	Y	2	A	ku[si	ku[si:nu	ku[si:kara	
104	酒	Y	2	A	sa[kī:ˆ	sa[kī:ˆnu	sa[kī:ˆkara	
109	箱	Y	2	A	ha[ku: / ha[ku	ha[ku:nu	ha[ku:kara	
114	筆	Y	2	A	hu[di / hu[di:	hu[di:nu	hu[di:kara	
115	鼻	Y	2	A	ha[na:ˆ	ha[na:ˆnu	ha[na:ˆkara	

117	水	Y	2	A	mĩ[dzi	mĩ[dzi:nu	mĩ[dzikara	
123	橋・端	Y	2	A	ha[si	ha[si:nu	ha[si:kara	
144	尻・後(時間)	Y	2	B	ma[i	ma[i\\nu	ma[i\\kara	cf. ka[dzi 後ろ(空間)
146	友	Y	2	A	du[si:ˆ	du[si:ˆnu	du[si:ˆkara	
155	薪	Y	2	C	to[N	to[N\\nu	to[Nka\\ra	
163	紐	Y	2	C	i[ru\\:ˆ	i[ru\\:ˆnu	i[ru\\:ˆkara	ha:iru 赤い紐
165	腕	Y	2	-	wa[N	wa[Nnu	wa[N\\kara	
×	私	Y	2	-	wa[N	wa[Nnu	wa[N/ka\\ra	
166	口	Y	2	A	ku[cji:ˆ	ku[cji:ˆnu	ku[cji:ˆkara	
169	釘	Y	2	A	ku[gi / ku[gi:	ku[gi:nu	ku[gi:kara	
181	犬	Y	2	B	i[N	i[Nnu	i[N/ka\\:ra	
184	声・首	Y	2	C	ku[i	ku[inu	ku[ikara	
188	蚤	Y	2	C	nu[N	nu[N\\nu	nu[N\\kara	
191	妻	Y	2	A	tu[dzi:ˆ	tu[dzi:ˆnu	tu[dzi:ˆkara	
200	耳	Y	2	B	mi[N	mi[N\\nu	mi[N/ka\\:ra	
202	糠	Y	2	B	nu[ka:	nu[ka:\\nu	nuka[ka\\:ra	
203	鮫	Y	2	-	sa[mĩ:ˆ	sa[mĩ:ˆnu	sa[mĩ: kara	
205	昨日	Y	2	C	ki[nu	ki[nu\\:nu	ki[nu\\:kara	
206	青年	Y	2	B	ni[se	ni[se\\:nu	ni[se\\:kara	
208	臍	Y	2	A	hu[sju:ˆ	hu[sju:ˆnu	hu[sju:ˆkara	
209	子供	Y	2	C	wa[re\\:ˆ	wa[re\\:ˆnu	wa[re\\:ˆkara	
216	牛	Y	2	A	u[si / u[si:	u[si:nu	u[si:kara	
219	音	Y	2	A	u[tu:ˆ	u[tu:ˆnu	u[tu:ˆkara	
230	去年	Y	2	B	ku[dzu\\:ˆ	ku[dzu\\:ˆnu	ku[dzu\\:ˆkara	
234	灸	Y	2	C	ja[cjo\\:ˆ	ja[cjo\\:ˆnu	ja[cjo\\:ˆkara	
246	紙	Y	2	A	ka[bi:ˆ	ka[bi:ˆnu	ka[bi:ˆkara	
6	鍬	Y	3	-	toR[gi\\:	toR[gi\\:nu / toR[gi\\nu	toR[gi\\:kara	ha:toRgi: 赤い鍬 toR[gi\\nu ha: 鍬の刃
21	鋤	Y	3	B	idza[i	idza[i\\nu	idza[i\\kara	
40	枕	Y	3	B	maku[ra	maku[ra:\\nu	maku[raka\\:ra	
41	鹽	Y	3	C	tara[i	tara[i\\nu	tara[i\\kara	
44	薬	Y	3	C	kusju[i	kusju[i\\nu	kusju[i\\kara	
60	若い娘	Y	3	C	mēR[re\\:ˆ	mēR[re\\:ˆnu	mēR[re\\:ˆkara	
65	油	Y	3	B	abu[ra	abu[ra:\\nu	abu[raka\\:ra	
66	明日	Y	3	B	aQ[cja\\:ˆ	aQ[cja\\:ˆnu	aQ[cja\\:ˆkara	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mi:\\nu	hasa[mika\\:ra	
77	下駄	Y	3	-	asi[ra:ˆ	asi[ra:ˆ\\nu	asi[raka\\:ra	
85	しゃもじ	Y	3	C	misi[ge\\:ˆ	misi[ge\\:ˆnu	misi[ge\\:ˆkara	
89	ふくら脛	Y	3	B	kubu[ra	kubu[ra:nu	kubu[raka\\:ra	
91	水溜り・池	Y	3	B	kumu[i	kumu[i\\nu	kumu[i\\kara	
98	左	Y	3	B	sidza[i	sidza[i\\nu	sidza[i\\kara	
119	暦	Y	3	B	kojo[mi	kojo[mi:\\nu	kojo[mika\\:ra	
120	命	Y	3	B	inu[cji:ˆ	inu[cji\\:ˆnu	inu[cjika\\:ˆra	
122	糸	Y	3	C	iQ[cju\\:ˆ	iQ[cju\\:ˆnu	iQ[cju\\:ˆkara	
134	鱗	Y	3	B	iQ[ki: / iQ[ki	iQ[ki:\\nu	iQ[kika\\:ra	
139	蚊	Y	3	C	gadza[N	gadza[N\\nu	gadza[N\\kara	
152	南京豆(落花生)	Y	3	B	dzima[mĩ:	dzima[mĩ:\\nu	dzima[mika\\:ra	
158	弟・妹	Y	3	B	uQ[tu:	uQ[tu:\\nu	uQ[tuka\\:ra	

160	とさか・箱め がね	Y	3	C	kaga[N	kaga[N\ɳu	kaga[N\kara	
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[mi:\ɳu	kaga[mika\ra	
178	虱	Y	3	C	sira[N	sira[N\ɳu	sira[Nka\ra	
212	杖	Y	3	C	gusa[N	gusa[N\ɳu	gusa[N\kara	
214	モッコ (運搬 網)	Y	3	-	muQ[ko	muQ[ko\:\ɳu	muQ[ko\:\kara	
215	みかん	Y	3	C	kuni[N	kuni[N\ɳu	kuni[N\kara	
222	やどかり	Y	3	C	ama[N	ama[N\ɳu	ama[N\kara	
226	苺	Y	3	C	icju[N	icju[N\ɳu	icju[N\kara	
227	女	Y	3	B	wuna[gu:	wuna[gu:\ɳu	wuna[guka\ra	
×	蕐	Y	3	-	kibi[ra	kibi[ra:\ɳu	kibi[raka\ra	
236	杵(棒状の物)	Y	3	C	adzi[N	adzi[N\ɳu	adzi[N\kara	
237	顎	Y	3	C	utu[gẽ\:^	utu[gẽ\:\^ɳu	utu[gẽ\:\^kara	
251	五つ	Y	3	B	icji[cji	icji[cji\:\ɳu	-	
253	七つ	Y	3	B	nana:[cji	nana:[cji\:\ɳu	-	
2	種	W	2	A	tani[;	tani[;\ɳu	tani[ka\ra	
13	涙	W	2	B	nada[;	nada[;\ɳu	nada[ka\ra	nada[juVika 涙より / nada[niVN 涙も
33	暇	W	2	B	madu[;	madu[;\ɳu	madu[ka\ra	
35	畠	W	2	B	haru[;	haru[;\ɳu	haru[ka\ra / haru[ka\ra	広々と広がった畠(農 耕地帯)
48	島	W	2	B	sima[;	sima[;\ɳu	sima[ka\ra / sima[ka\ra	sima[juVika 島よりも
×	カビ	W	2	-	kabi[;	kabi[;\ɳu	kabi[ka\ra	
50	角	W	2	B	cjino[;	cjino[;\ɳu	cjino[ka\ra	
53	波	W	2	B	nami[;	nami[;\ɳu	nami[ka\ra	
58	足	W	2	B	sini[;	sini[;\ɳu	sini[ka\ra	系列別語彙では 「脛」
62	花	W	2	B	hana[;	hana[;\ɳu	hana[ka\ra	
75	亀	W	2	B	kamĩ[;	kamĩ[;\ɳu	kamĩ[ka\ra	
83	土	W	2	B	micja[;	micja[;\ɳu	micja[ka\ra	
88	腹	W	2	B	wata[;	wata[;\ɳu	wata[ka\ra	
92	たんこぶ	W	2	C	gabu[;	gabu[;\ɳu	gabu[ka\ra	
105	網	W	2	B	ami[;	ami[;\ɳu	ami[ka\ra	
106	雨	W	2	B	amĩ[;	amĩ[;\ɳu	amĩ[ka\ra	
111	雲	W	2	B	kumo[;	kumo[;\ɳu	kumo[ka\ra	
112	鎌	W	2	B	kama[;	kama[;\ɳu	kama[ka\ra	
113	色	W	2	B	iru[;	iru[;\ɳu	iru[ka\ra	
118	豆	W	2	B	mamĩ[;	mamĩ[;\ɳu	mamĩ[ka\ra	
121	麦	W	2	B	mugi[;	mugi[;\ɳu	mugi[ka\ra	
124	肩	W	2	B	kata[;	kata[;\ɳu	kata[ka\ra	
125	草	W	2	B	kusa[;	kusa[;\ɳu	kusa[ka\ra	
137	櫓	W	2	B	joho[;	joho[;\ɳu	joho[ka\ra	
175	板	W	2	B	icja[;	icja[;\ɳu	icja[ka\ra	
180	藁	W	2	B	wara[;	wara[;\ɳu	wara[ka\ra	
182	傘・笠	W	2	B	kasa[;	kasa[;\ɳu	kasa[ka\ra	
183	米	W	2	B	kumĩ[;	kumĩ[;\ɳu	kumĩ[ka\ra	
185	汁	W	2	B	siru[;	siru[;\ɳu	siru[ka\ra	

187	顔	W	2	B	cjira[;	cjira[;\nu	cjira[ka\ra	
190	山	W	2	B	jama[;	jama[;\nu	jama[ka\ra	
198	踵	W	2	B	adu[;	adu[;\nu	adu[ka\ra	
201	味噌	W	2	B	misju[;	misju[;\nu	misju[ka\ra	
204	サトウキビ	W	2	B	wugi[;	wugi[;\nu	wugi[ka\ra	
223	舌	W	2	B	siba[;	siba[;\nu	siba[ka\ra	
229	萱	W	2	B	gija[;	gija[;\nu	gija[ka\ra	
235	小葱	W	2	B	bira[;	bira[;\nu	bira[ka\ra	系列別語彙では 「韭」の意味
79	しいたけ	Z	2	C	[na/;\ba	[na/;\banu	[na/;\bakara	
101	水桶・汲み桶	Z	2	C	[ta/;\gu	[ta/;\gunu	[ta/;\gukara	
116	桶	Z	2	-	[ta/;\gu	[ta/;\gunu	[ta/;\gukara	
128	影・陰	Z	2	C	[ka/;\gi	[ka/;\ginu	[ka/;\gikara	
140	甕	Z	2	C	[ka/;\mi	[ka/;\minu	[ka/;\mikara	
145	浜	Z	2	C	[ha/;\ma	[ha/;\manu	[ha/;\makara	
148	サトウキビの 先端・梢	Z	2	C	[sju/;\ra	[sju/;\ranu	[sju/;\rakara	
156	卵	Z	2	C	[ku/;\ga	[ku/;\ganu	[ku/;\gakara	
157	太陽	Z	2	C	[ti/;\da	[ti/;\danu	[ti/;\dakara	
161	ひしゃく	Z	2	C	[ni/;\bu	[ni/;\bunu	[ni/;\bukara	
172	目上の人	Z	2	C	[si/;\dza	[si/;\dzanu	[si/;\dzakara	
174	来年	Z	2	C	[ja/;\ni	[ja/;\ninu	[ja/;\nikara	
186	鍋	Z	2	C	[na/;\bi	[na/;\binu	[na/;\bikara	
199	猿	Z	2	C	[sa/;\ru	[sa/;\runu	[sa/;\rukara	
210	砂糖	Z	2	C	[sa/;\ta	[sa/;\tanu	[sa/;\takara	
231	烏	Z	2	C	[ga/;\ra	[ga/;\ranu	[ga/;\rakara	
232	松	Z	2	C	[ma/;\cji	[ma/;\cjinu	[ma/;\cjikara	
240	籠の一種	Z	2	C	[ti/;\ru	[ti/;\runu	[ti/;\rukara	
5	頭	Z	3	C	ka[ra:^dzĩ	ka[ra:^dzĩnu	ka[ra:^dzikara	ka[ra\dzi bu:cjiku 髪
7	煙	Z	3	A	kĩ[bu:^si	kĩ[bu:^sinu	kĩ[bu:^sikara	
20	右	Z	3	A	ni[gi:^ri	ni[gi:^rinu	ni[gi:^rikara	
27	港	Z	3	A	mi[na:^to	mi[na:^tonu	mi[na:^tokara	
29	蓆	Z	3	C	mu[Q\sjũ	mu[Q\sjũnu	mu[Q\sjũkara	
42	兎	Z	3	C	u[sa:\gi / u[sa\gi	u[sa:\ginu	u[sa:\gikara	
45	情け	Z	3	C	na[sa:\kĩ	na[sa:\kĩnu	na[sa:\kikara	
57	黄金	Z	3	A	ku[ga:^ni	ku[ga:^ninu	ku[ga:^nikara	kugani[ma\ga 黄金 (のように大事な)孫
59	鼻血	Z	3	A	ha[na:dzi / ha[nadzi	ha[na:dzinu	ha[na:dzikara	
63	刀・包丁	Z	3	C	ka[ta:^\na	ka[ta:^\nanu	ka[ta:^\nakara	
76	櫛	Z	3	B	sa[Rki	sa[Rki;\nu	sa[Rkika\ra	kurusaRki 黒い櫛 ha: saRki 赤い櫛
194	かぼちゃ	Z	3	C	cji[bu:^\ru	cji[bu:^\runu	cji[bu:^\rukara	
84	東	Z	3	A	a[ga:^ri	a[ga:^rinu	a[ga:^rikara	
86	膝小僧(新)	Z	3	-	ma[gai	ma[gainu	ma[gaikara	
87	煤	Z	3	A	hu[gu:^ru	hu[gu:^runu	hu[gu:^rukara	系列別語彙では 「垢」の意味
103	俵	Z	3	B	to[Rra	to[Rra;\nu	to[Rraka\ra	
135	釜	Z	3	A	ha[ga:^ma	ha[ga:^manu	ha[ga:^makara	
136	雲丹	Z	3	C	ga[cji:^\cji	ga[cji:^\cjinu	ga[cji:^\cjikara	

143	空	Z	3	A	te[Nto	te[Ntonu	te[Ntokara	
149	蛾	Z	3	B	ha[bī:ⁿru	ha[bī:ⁿrunu	ha[bī:ⁿrukara	系列別語彙では 「蝶」の意味
150	今年	Z	3	-	ku[tu:ⁿsi	ku[tu:ⁿsinu	ku[tu:ⁿsikara	
154	へちま	Z	3	B	na[bī:ⁿra	na[bī:ⁿranu	na[bī:ⁿrakara	
156	卵	Z	3	-	ta[ma:ⁿgu	ta[ma:ⁿgunu	ta[ma:ⁿgukara	
167	ふんどし	Z	3	C	sa[na:ⁿgi	sa[na:ⁿginu	sa[na:ⁿgikara	
179	鰻	Z	3	C	u[na:ⁿgi / u[naⁿgi	u[na:ⁿginu	u[na:ⁿgikara	
189	涎	Z	3	A	ju[daⁿi	ju[dainu	ju[daikara	
195	男	Z	3	C	ji[Nga	ji[Ngaⁿnu	ji[Ngakaⁿra	
196	竈	Z	3	A	ka[mado / ka[ma:do	ka[ma:donu	ka[madokara	
197	おでき	Z	3	C	ni[bu:ⁿtu	ni[bu:ⁿtunu	ni[bu:ⁿtukara	
207	腰周り	Z	3	C	ga[ma:ⁿku	ga[ma:ⁿkunu	ga[ma:ⁿkukara	
211	蟬	Z	3	C	a[sa:ⁿha	a[sa:ⁿhanu	a[sa:ⁿhakara	
244	バッタ	Z	3	C	ga[Qⁿta	ga[Qⁿtanu	ga[Qⁿtakara	
245	白髪	Z	3	C	si[ra:ⁿgī	si[ra:ⁿgīnu	si[ra:ⁿgīkara	
97	夜中	Z	4	B	juna[sa:ⁿna	juna[sa:ⁿnanu	juna[sa:ⁿnakara	
133	朝	Z	4	C	situ[mī:ⁿti	situ[mī:ⁿtinu	situ[mī:ⁿtikara	
138	親子	Z	4	C	u/ja[Qⁿkwa	u/ja[Qⁿkwanu	u/ja[Qⁿkwakara	

Appendix 16. 花徳方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モー ラ	系列		-nu	-kara	-gadi	-juka	メモ
1	垢	X	1	-	ʔa:	ʔa:\nu	-	ʔa:\gadi	-	mi:a 新しい垢
22	血	X	1	A	cji:	cji:\nu	-	cji:\gadi	-	kurucji 黒い血
95	魚	X	1	A	ʔju	ʔjunu	-	-	ʔju:ju\ka	
110	人	X	1	A	ʔcju	ʔcju:\nu	-	-	ʔcjujuka	
141	子	X	1	A	ʔkwa	ʔkwanu	-	-	ʔkwaju\ka	
142	中	X	1	C	na	na:\nu	-	-	na:\juka	
159	上	X	1	A	ʔwī	ʔwīnu	-	ʔwīga\di	ʔwīju\ka	
162	門	X	1	B	dzo:	dzo:\nu	-	-	dzo:\juka	
168	豚	X	1	C	ʔwa	ʔwa:\nu / ʔwa:\nu	ʔwa:\kara	ʔwa:\gadi	ʔwa:\juka / ʔwa:\juka	
172	兄	X	1	-	mī	mī\nu	-	-	mī\juka	
233	前	X	1	C	mē	mē:\nu	-	-	mē:\juka	
×	ざる	X	1	-	sjē / sjē:	sjē\nu / sjē:\nu	sjē\kara	sjē\gadi	sjē\juka	
54	舟	X	2	C	hu\nī	hu\nīnu	-	hu\nīgadi	-	
55	針	X	2	C	hai / ha\i	ha\inu	-	ha\igadi	-	
56	骨	X	2	C	hu\nī	hu\nīnu	-	hu\nīgadi	-	
72	貝	X	2	-	kai	kai\nu	-	kai\gadi	-	
82	虹	X	2	A	ni\dzi	ni\dzinu	-	-	ni\dzijuka	
×	境	X	2	-	sakē	sakēnu	sakēkara	-	-	
128	影・陰	X	2	C	ka\gī	ka\gīnu	-	-	ka\gījuka	
127	海	X	2	C	uN	uN\nu / uNnu	-	-	uNjuka	
×	囲炉裏	X	2	-	dzi:\ru	dzi:\runu	-	-	dzi:\rujuka	dzi:\ruNba 囲 炉裏も
137	(舟の) 櫂	X	2	-	ka\i	ka\inu	-	-	ka\ijuka	
140	甕	X	2	C	ka:\mī	ka:\mīnu	-	-	ka:\mījuka	midzigamī 水 甕 miNgamī 取っ手(耳)付 きの甕
144	尻	X	2	B	ma\i	ma\inu	-	-	ma\ijuka	
145	浜	X	2	C	ha\ma	ha\manu	-	-	ha\majuka	
148	梢・サトウキ ビの先端	X	2	C	sju:\ra	sju:\ranu	-	-	sju:\rajuka	ugiNsjura サト ウキビの先端
155	薪	X	2	-	toN	toN\nu	-	-	toN\juka	
156	卵	X	2	C	ku\ga / ku:\ga	ku\ganu / ku:\ganu	ku:\gakara	ku:\gagadi	ku\gajuka / ku:\gajuka	
161	ひしゃく	X	2	C	nī:\bu	nī:\bunu	-	-	nī:\bujuka	
163	紐	X	2	C	kju\bi	kju\binu	-	-	kju\bijuka	
171	息	X	2	C	i\ki	i\kinu	i\kikara	i\kigadi	i\kijuka	
176	白	X	2	C	ʔu\si	ʔu\sinu	-	-	ʔu\sijuka	
181	犬	X	2	B	iN	iN\nu	-	iNga\di	iNju\ka	
184	声	X	2	C	kui	ku\inu / kuinu	-	-	ku\ijuka	
186	鍋	X	2	C	na\bi	na\binu	-	-	na\bijuka	
188	蚤	X	2	C	nu\mi	nu\minu	-	-	nu\mijuka	
199	猿	X	2	C	sa\ru	sa\runu	-	-	sa\rujuka	
200	耳	X	2	B	miN	miN\nu	-	-	miNju\ka	

210	砂糖	X	2	C	sa:ʋta	sa:ʋtanu	-	-	sa:ʋtajuka	satagamī 砂糖 甕
213	とんぼ	X	2	C	jē:ʋda	jē:ʋdanu	-	-	jē:ʋdajuka	a:jēda 赤とん
218	火	X	2	C	ʔma:ʋcʃi	ʔma:ʋcʃinu	-	-	ʔma:ʋcʃijuka	a:macʃi 赤松
220	布団	X	2	C	u:ʋdu	u:ʋdunu	-	-	u:ʋdujuka	a:udu 赤い布団
231	烏	X	2	C	ga:ʋra	ga:ʋranu	-	-	ga:ʋrajuka	ʔkwa:ʋgara 烏
232	松	X	2	C	ma:ʋcʃi	ma:ʋcʃinu	-	-	ma:ʋcʃijuka	a:macʃi 赤松
240	籠の一種	X	2	C	tiʋru	tiʋrunu	-	-	tiʋrujuka	
4	箒	X	3	C	hoRʋki	hoRʋkinu	-	hoRʋkigadi	-	kubaboRki ヤ シ箒 / dēboRki 竹箒
8	袋	X	3	C	huQʋku	huQʋkunu	-	huQʋkugadi	-	
43	扇・団扇	X	3	C	oRʋgi	oRʋginu	-	oRʋgigadi	-	
78	洞窟	X	3	-	juNmī	juNmīʋnu	-	juNmīgaʋdi	-	
129	あおさ	X	3	C	oRʋsa	oRʋsanu	oRʋsakara	oRʋsagadi	oRʋsajuka	
151	ごちそう	X	3	C	sjuRʋkī	sjuRʋkīnu	-	-	sjuRʋkījuka	
244	バッタ	X	3	C	gaQʋta	gaQʋtanu	gaQʋtakara	gaQʋtagadi	gaQʋtajuka	
247	一つ	X	3	C	tiRʋcʃi	-	-	-	-	
248	二つ	X	3	A	taRcʃi	-	-	-	-	
249	三つ	X	3	A	miRcʃi	-	-	-	-	
250	四つ	X	3	A	juRcʃi	-	-	-	-	
252	六つ	X	3	A	muRcʃi	-	-	-	-	
254	八つ	X	3	A	jaRcʃi	-	-	-	-	
192	暁	X	4	C	aRtuʋki	aRtuʋkinu	aRtukikaʋra	aRtukigaʋdi	aRtuʋkijuka	
238	かまきり	X	6	C	iRsatobaʋi	iRsatobaʋinu	-	-	iRsatobaʋijuka	
23	帆	Y	1	A	[hu/;	[hu;/nu	[hu;/kaʋra	[hu;/gaʋdi	[hu;/juʋka	
28	葉	Y	1	A	[ha/;	[ha;/nu	-	[ha;/gaʋdi	-	a:ha 赤い葉 kuruha 黒い葉
37	下	Y	1	A	[sju/;	[sju;/nu	[sju;/kaʋra	[sju;/gaʋdi	[sju;/juʋka	jukasja 床下
81	蛸	Y	1	B	[to/;	[to;/nu	[to;/kaʋra	[to;/gaʋdi	[to;/juʋka	kurudo 黒い蛸
99	齒	Y	1	B	[ha/;	[ha;/nu	[ha;/kaʋra	[ha;/gaʋdi	[ha;/juʋka	
100	木	Y	1	B	[ki/;	[ki/;/nu	[ki;/kaʋra	[ki;/gaʋdi	[ki;/juʋka	a:gī 赤い木 ? kwa:gī 桑の木
107	竹	Y	1	A	[dē/;	[dē;/nu	[dē;/kaʋra	[dē;/gaʋdi	[dē;/juʋka	a:de 赤い竹
108	湯	Y	1	B	[ju/;	[ju/;/nu	-	-	[ju/;/juka	icjaju 熱い湯
164	手	Y	1	B	[ti/;	[ti/;/nu	-	-	[ti/;/juka	tīmai 手舞
170	目	Y	1	B	[mi/;	[mi/;/nu	-	-	[mi/;/juka	a:mī 赤い目
193	尾	Y	1	A	[du/;	[du/;/nu	-	-	[du/;/juʋka	kurudu 黒い尻
221	穂	Y	1	B	[hu/;	[hu/;/nu	-	-	[hu/;/juʋka	a:hu 赤い穂
224	家	Y	1	B	[ja/;	[ja/;/nu	-	-	[ja/;/juʋka	janusi 家主 iriNja 西にあ る家
229	萱	Y	1	B	[gja/;	[gja/;/nu	-	-	[gja/;/juʋka	kurugja 黒い萱
13	涙	Y	2	B	na[da:	na[daʋnu	-	na[dagaʋdi	-	
14	着物	Y	2	B	ki[N	ki[Nʋnu	-	ki[N/gaʋdi	-	
17	にんにく	Y	2	A	hu[ru	hu[ruʋnu	-	hu[rugaʋdi	-	
18	ほくろ	Y	2	A	a[da / a[da/;	a[daʋnu / a[da:ʋnu	a[dakaʋra	a[dagaʋdi	a[dajuʋka	
24	飴	Y	2	A	a[mī	a[mīʋnu	-	a[mī/gaʋdi	-	

41	盥	Y	2	C	ta:[rē	ta:[rē\ɲu	-	ta:[rēga\ɖi	-	mǐdzǐda[rē 水盥
48	島	Y	2	B	si[ma / si[ma/:	si[ma\ɲu	si[maka\ɲra	si[maga\ɖi	si[maju\ɤka	
50	角	Y	2	B	cji[no	cji[no\ɲu	-	cji[no:ga\ɖi	-	
×	霧	Y	2	-	ki[ri	ki[ri\ɲu	-	ki[ri:ga\ɖi	-	
53	波	Y	2	B	na[mi	na[mi:\ɲu	-	na[miga\ɖi	-	
58	脛	Y	2	B	si[nī	si[nī\ɲu	-	si[nīga\ɖi	-	
60	若い娘	Y	2	C	mē:[rē	mē:[rē\ɲu	-	mē:[rēga\ɖi	-	?kwa\mēregwa 小さい娘(-gwa 指小辞)
62	花	Y	2	B	ha[na	ha[na\ɲu	-	ha[naga\ɖi	-	
64	夜	Y	2	B	ju:[ru	ju:[ru\ɲu	-	ju:[ruga\ɖi	-	juruasibi 夜遊び
76	櫛	Y	2	B	sa:[ki	sa:[ki\ɲu	-	sa:[ki\gadi	-	a:saki 赤い櫛
83	土	Y	2	B	N[cja:	N[cja\ɲu	-	-	N[cjaju\ɤka	
91	水溜り・池	Y	2	-	i[ki	i[ki\ɲu	-	-	i[kiju\ɤka	
103	俵	Y	2	B	to:^[ra	to:^[ra\ɲu	-	-	to:^[raju\ɤka	
105	網	Y	2	B	a[mi	a[mi\ɲu	-	a[miga\ɖi	a[miju\ɤka	
106	雨	Y	2	B	a[mī	a[mī\ɲu	-	-	a[miju\ɤka	
112	鎌	Y	2	B	ka[ma	ka[ma\ɲu	-	-	ka[maju\ɤka	
113	色	Y	2	B	i[ru	i[ru\ɲu	-	-	i[ruju\ɤka	
114	筆	Y	2	A	hu[de	hu[de\ɲu	-	-	hu[deju\ɤka	
115	鼻	Y	2	A	ha[na	ha[na\ɲu	ha[naka\ɲra	ha[naga\ɖi	ha[najuka	
116	桶	Y	2	C	u[kī	u[kī\ɲu	-	-	u[kiju\ɤka	
118	豆	Y	2	B	ma[mī	ma[mī\ɲu	-	-	ma[miju\ɤka / ma[mī/ju\ɤka	
121	麦	Y	2	B	mu[gi	mu[gi\ɲu	-	-	mu[giju\ɤka / mu[gi/ju\ɤka	
124	肩	Y	2	B	ka[ta	ka[ta\ɲu	-	-	ka[taju\ɤka	
125	草	Y	2	B	ku[sa	ku[sa\ɲu	-	ku[saga\ɖi	ku[saju\ɤka / ku[sa/ju\ɤka	
153	肉	Y	2	B	si[si	si[si\ɲu	-	-	si[siju\ɤka	
169	釘	Y	2	A	ku[gi	ku[gi\ɲu	-	-	ku[giju\ɤka	
175	板	Y	2	B	i[cja	i[cja\ɲu	-	-	i[cjaju\ɤka	
180	藁	Y	2	B	wa[ra	wa[ra\ɲu	-	wa[raga\ɖi	wa[raju\ɤka	
182	傘・笠	Y	2	B	ka[sa	ka[sa\ɲu	-	-	ka[saju\ɤka	
183	米	Y	2	B	ku[mī	ku[mī\ɲu	-	ku[mīga\ɖi	ku[miju\ɤka	
185	汁	Y	2	B	si[ru	si[ru\ɲu	-	-	si[ruju\ɤka	
187	顔	Y	2	B	cji[ra	cji[ra\ɲu	-	-	cji[raju\ɤka	
×	味	Y	2	-	a[dzi	a[dzi\ɲu	-	-	a[dziju\ɤka	
190	山	Y	2	B	ja[ma	ja[ma\ɲu	-	-	ja[maju\ɤka	
198	踵	Y	2	B	a[du	a[du\ɲu	-	-	a[duju\ɤka	
201	味噌	Y	2	B	i[sju	i[sju\ɲu	-	-	i[sjujuka	
202	糠	Y	2	B	nu[ka	nu[ka\ɲu	-	nu[kaga\ɖi	nu[kaju\ɤka	
203	鮫	Y	2	A	sa[ba	sa[banu	-	-	sa[baju\ɤka	
204	サトウキビ	Y	2	B	u[gi	u[gi\ɲu	-	-	u[giju\ɤka	
205	昨日	Y	2	C	ki:[nu	ki:[nu\ɲu	-	-	ki:[nu\ɤjuka	kinukju: 昨日 今日
208	臍	Y	2	A	ku[sju	ku[sju\ɲu	-	-	ku[sjuju\ɤka	

209	子供	Y	2	C	wa:[re	wa:[re\ɲu	-	-	wa:[re\ɲjuka	wareNgwaNkja 子供たち(子供 + -gwa(指小 辞) + -kja(複数 形))
216	牛	Y	2	A	u[si	u[si:\ɲu	-	-	u[si/\ju\ka	
219	音	Y	2	A	u[tu	u[tu\ɲu	-	-	u[tu/\ju\ka	
223	舌	Y	2	B	si[ba	si[ba\ɲu	-	-	si[ba/\ju\ka	
230	去年	Y	2	B	ku:[du	ku:[du\ɲu	ku[du\kara / ku:[du\l:kara	-	ku:[du\ju\ka	
234	灸	Y	2	C	ja:[cju	ja:[cju\ɲu	-	-	ja:[cju\ɲjuka	hu:jacju 大きい 灸
235	韭	Y	2	B	bi[ra	bi[ra\ɲu	-	-	bi[ra/\ju\ka	
×	十	Y	2	-	tu[R	-	-	-	-	
6	鋤	Y	3	A	toN[gě	toN[gě\ɲu	-	toN[gě\gadi	-	
7	煙	Y	3	A	kibu[si	kibu[sinu	-	kibu[sigadi	-	
11	食料・主食	Y	3	A	haN[mě	haN[mě\ɲu	-	haN[měga\di	-	
20	右	Y	3	A	nigi[ri	nigi[rinu	nigi[rika\ra	nigi[riga\di	nigi[riju\ka	
27	港	Y	3	-	mina[tu	mina[tunu	-	mina[tugadi	-	
29	蓆	Y	3	C	muQ[sju	muQ[sju\ɲu	-	muQ[sjuga\di	-	
36	畑	Y	3	C	haQ[tī	haQ[tī\ɲu	-	haQ[tī\gadi	-	
40	枕	Y	3	B	maQ[kwa	maQ[kwa\ɲu	-	maQ[kwaga:\ di	-	
49	麴	Y	3	A	koR[dzi	koR[dzinu	-	koR[dzigadi	-	
57	黄金	Y	3	A	kuga[mī	kuga[mī\ɲu	-	kuga[mīga\di	-	
59	鼻血	Y	3	A	hana[dzi	hana[dzinu	-	hana[dziga\di	-	
65	油	Y	3	B	aN[ba	aN[ba\ɲu	-	aN[baga\di	-	
66	明日	Y	3	B	aQ[cja	aQ[cja\ɲu	aQ[cjaka\ra	aQ[cjagadi	aQ[cjajuka	
69	腕	Y	3	B	kai[na	kai[na\ɲu	-	kai[naga\di	-	
158	弟	Y	3	B	uQ[tu	uQ[tu:\ɲu	-	uQ[tuga\di	uQ[tuju\ka	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mi\ɲu	hasa[mika\ra	hasa[miga\di	hasa[miju\ka	
77	下駄	Y	3	B	aN[dza	aN[dza\ɲu	-	aN[dzaga\di	-	
84	東	Y	3	A	aga[re	aga[re\ɲu	-	-	aga[reju\ka	
85	しゃもじ	Y	3	C	misi[ge	misi[genu	-	-	misi[geju\ka	
89	ふくら脛	Y	3	B	kuN[ba	kuN[ba\ɲu	-	-	kuN[baju\ka	
119	暦	Y	3	B	kuju[mi	kuju[mi\ɲu	-	-	kuju[miju\ka	
120	命	Y	3	B	inu[cji	inu[cji\ɲu	-	-	inu[cjiu\ka	
122	糸	Y	3	C	iQ[cju	iQ[cju\ɲu	-	-	iQ[cjuju\ka	
134	鱗・ふけ	Y	3	B	iQ[ki		-	-	iQ[ki\ɲjuka	
143	空	Y	3	A	teN[to	teN[tonu	-	-	teN[toju\ka	
150	今年	Y	3	-	kutu[si	kutu[sinu	-	-	kutu[siju\ka	
152	南京豆(落花 生)	Y	3	B	dzima[mī	dzima[mī\ɲu	-	-	dzima[mīju\ka	
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[mi\ɲu	-	kaga[miga:\di	kaga[miju\ka	
189	涎	Y	3	A	juda[i	juda[inu	-	-	juda[iju\ka	
195	男	Y	3	B	iN[ga	iN[ga\ɲu	-	-	iN[gaju\ka	
206	青年	Y	3	B	miQ[sjě	miQ[sjě\ɲu	-	-	miQ[sjě\ɲjuka	
207	腰周り	Y	3	C	gama[ku	gama[ku\ɲu	gama[kuka\ra	gama[kuga\di	gama[kuju\ka	

214	モッコ (運搬網)	Y	3	-	moQ[ko	moQ[ko\ɲu	-	-	moQ[ko\juka	
227	女	Y	3	B	una[gu	una[gu\ɲu	-	-	una[guju\ka	
237	顎	Y	3	C	utu[gě	utu[gě\ɲu	-	-	utu[gě\juka	
251	五つ	Y	3	B	icji[cji	-	-	-	-	
253	七つ	Y	3	B	nana[cji	-	-	-	-	
255	九つ	Y	3	-	kunu[cji	-	-	-	-	
3	丘	W	2	A	mu/i[	mui[ɲu	-	mui[gadi	-	
9	坂	W	2	A	si/ra[	sira[ɲu	-	sira[ga\di	-	
10	草履	W	2	A	sa/ba[/ saba[;	saba[ɲu	saba[ka\ra	saba[ga\di	saba[ju\ka	
12	棘	W	2	A	i/gi[	igi[ɲu	igi[ka\ra	igi[ga\di	igi[ju\ka	
16	西	W	2	A	i/ri[	iri[ɲu	-	iri[ga\di	-	
30	風	W	2	A	ka/dzi[/ kadzi[;	kadzi[ɲu	-	kadzi:[gadi	-	
31	暇	W	2	B	hi/ma[	hima[ɲu	-	hima[gadi	-	
38	袖	W	2	A	sju/di[	sjudi[ɲu	-	sjudi[gadi	-	
39	羽	W	2	A	ha/nĩ[	hanĩ[ɲu	-	hanĩ[gadi	-	
47	星	W	2	A	husi[;	husi[ɲu	-	husi[gadi	-	
52	畳	W	2	A	ta/tě[	tatě[ɲu	-	tatě[gadi	-	
70	夫	W	2	A	utu[;	utu[ɲu	-	utu[gadi	-	
73	北	W	2	A	ni/si[	nisi[ɲu	-	nisi[gadi	-	
75	亀	W	2	B	ka/mĩ[	kamĩ[ɲu	-	kamĩ[gadi	-	
80	匂い	W	2	A	ka/ba[	kaba[ɲu	-	kaba[gadi	-	
87	煤	W	2	C	si/si[/ sisi[;	sisi[ɲu	-	sisi[ga\di	sisi[ju\ka	
90	烏賊	W	2	A	i/kja[/ ikja[;	ikja[ɲu	-	-	ikja[ju\ka	
92	たんこぶ	W	2	C	ga/bu[	gabu[ɲu	gabu[kara	gabu[ga\di	gabu[ju\ka	
93	石	W	2	A	i/si[	isi[ɲu	isi[kara	isi[ga\di	isi[ju\ka	
94	南	W	2	B	ha/i[	hai[ɲu	-	-	hai[ju\ka	
96	傷	W	2	A	ki/dzi[	kidzi[ɲu	-	-	kidzi[ju\ka	
104	酒	W	2	A	sa/ki[	saki[ɲu	saki[ka\ra	saki[ga\di	saki[ju\ka	
×	竹(小さい)	W	2	-	ga/ra[	gara[ɲu	gara[ka\ɲu	gara[ga\di	gara[ju\ka	
109	箱	W	2	A	ha/ku[	haku[ɲu	-	-	haku[ju\ka	
111	雲	W	2	B	ku/mu[	kumu[ɲu	-	-	kumu[ju\ka	
117	水	W	2	A	mĩ/dzi[	mĩdzi[ɲu	-	-	mĩdzi[juka	
123	橋	W	2	A	ha/si[	hasi[ɲu	-	-	hasi[ju\ka	
135	釜	W	2	-	kama[; / ka/ma[	kama[ɲu	-	kama[ga\di	kama[ju\ka	
146	友	W	2	A	du/si[	dusi[ɲu	-	-	dusi[ju\ka	
166	口	W	2	A	ku/cji[	kucji[ɲu	-	-	kucji[ju\ka	
191	妻	W	2	A	tu/dzi[	tudzi[ɲu	-	-	tudzi[ju\ka	
46	柱	Z	2	C	[ha/; \ra	[ha/; \ranu	-	[ha/; \ragadi	-	
79	きのこ	Z	2	C	[na/; \ba	[na/; \banu	-	-	-	naba[dzi\ru きのこ汁
×	雲丹(食べられない)	Z	2	-	[ju/; \nĩ	[ju/; \nĩnu	[ju/; \nĩkara	-	[ju/; \nĩjuka	?kwajunigwa 小さい雲丹 (gwaは指小
173	蓬	Z	2	C	[hu/; \cjji	[hu/; \cjjinu	-	-	[hu/; \cjji juka	
174	来年	Z	2	C	[ja/; \ne	[ja/; \nenu	-	-	[ja/; \nejuka	
5	頭・髪	Z	3	C	ka[ra\dzi	ka[ra\dzinu	ka[ra\dzikara	ka[ra\dzigadi	-	

×	カビ	Z	3	-	ka[bui	ka[buinu	-	ka[bui\gadi / ka[buiga\di	ka[buijuka	
42	兎	Z	3	C	u[savgi	u[savgi nu	-	u[savgigadi	-	
44	薬	Z	3	C	ku[sju\i	ku[sjui\nu	-	ku[sjui\gadi	-	
45	情け	Z	3	C	na[savki	na[savkinu	-	na[savki\ga:\di	-	
×	包丁	Z	3	-	ho[R\cja	ho[R\cjanu	-	ho[R\cjagadi	-	
63	刀	Z	3	C	ka[ta\na	ka[tana\vu	-	ka[ta\vagadi	-	
98	左	Z	3	B	si[dza\i	si[dzavnu	si[dzaikara	si[dzaigadi	si[dzaijuka	
133	朝	Z	3	-	si[ka\ma	si[ka\manu	-	-	si[ka\majuka	
136	雲丹	Z	3	C	ga[cji\cji / ga[cji:\cji	ga[cji\cjinu	-	ga[cji\cjigadi	ga[cji\cjijuka	
139	蚊	Z	3	C	ga[dzaN	ga[dzaN\vu	-	-	ga[dzaN\juka	
149	蝶	Z	3	B	ha[bivra	ha[bivranu	-	-	ha[bivrajuka	
154	へちま	Z	3	B	na[bivra	na[bivranu	-	-	na[bivrajuka	
160	とさか・たて がみ	Z	3	C	ka[gaN	ka[gaN\vu	-	-	ka[gaN\juka	
178	虱	Z	3	C	si[raN	si[raN\vu	-	-	si[raN\juka	
179	鰻	Z	3	C	u[navgi	u[navginu	-	-	u[navgijuka	
197	おでき	Z	3	C	ni[bu\vu	ni[bu\vtunu	-	-	ni[bu\vtujuka	
211	蟬	Z	3	C	a[savha	a[savhanu	-	-	a[savhajuka	
212	杖	Z	3	C	bu[saN	bu[saN\vu	-	-	bu[saN\juka	
215	みかん	Z	3	C	ku[niN	ku[niN\vu	-	-	ku[niN\juka	
222	やどかり	Z	3	C	a[maN	a[maN\vu	-	-	a[maN\juka	
226	苺	Z	3	C	i[cju\bi	i[cju\binu	i[cju\vbikara	i[cju\vbigadi	i[cju\vbijuka	
236	杵(棒・味噌つ き)	Z	3	C	a[dziN	a[dziN\vu	a[dziN\vkara	a[dziN\vgadi	a[dziN\juka	
245	白髪	Z	3	C	si[ra\gi	si[ra\ginu	-	-	si[ra\gijuka	
26	鋸	Z	4	B	noR[gi	noR[gi\vu	-	noR[giriga\di	-	
97	夜中	Z	4	-	juna[savna	juna[savnanu	juna[sanaka\ra	juna[sanaga\di / juna[sanaju\ka		
131	頭	Z	4	-	oQ[kaN	oQ[kaN\vu	oQ[kaNka\ra	oQ[kaN\gadi	oQ[kaNju\ka	
138	親子	Z	4	C	u[jaQ\kwa	u[jaQ\kwanu	-	-	u[jaQ\kwajuka	
147	台所・母屋と 独立した家屋	Z	4	B	toR[gura	toR[guranu	toR[guraka\ra	toR[guraga\di	toR[guraju\ka	
167	ふんどし	Z	4	-	cjiri[daN	cjiri[daNnu	cjiri[daNka\ra	cjiri[daNga\di	cjiri[daNju\ka	
239	刺青 (はじ ち)	Z	4	-	iri[dzimi	iri[dzimi\vu	-	-	iri[dzimi\ju\ka	

Appendix 17. 松原方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-kara	メモ
22	血	X	1	A	ʔcji	ʔcjinu / ʔcji\Nu	ʔcjikara	
23	帆	X	1	A	hu:ʔ	hu:ʔnu	hu:ʔkara	
28	葉	X	1	A	ha:ʔ	ha:ʔnu	ha:ʔkara	
37	下	X	1	A	sa:ʔ	sa:ʔnu	sa:ʔkara	
95	魚	X	1	A	ʔju:ʔ	ʔju:ʔnu	ʔju:ʔkara	
107	竹	X	1	A	dē:ʔ	dē:ʔnu	dē:ʔkara	
110	人	X	1	A	ʔcju	ʔcju:nu	ʔcju:kara	
116	桶	X	1	C	wi\ʔ	wi\ʔnu	wi\ʔkara	
141	子	X	1	A	ʔkwa:ʔ	ʔkwa:ʔnu	ʔkwa:ʔkara	
142	中	X	1	C	na\ʔ	na\ʔnu	na\ʔkara	
159	上	X	1	A	ʔwi	ʔwi:nu	ʔwi:kara	
168	豚	X	1	C	ʔwa:ʔ	ʔwa\ʔnu	ʔwa\ʔkara	
172	目上の人・兄	X	1	-	mi\ʔ	mi\ʔnu	mi\ʔkara	
193	尾	X	1	A	dzu:ʔ	dzu:ʔnu	dzu:ʔkara	
221	穂	X	1	B	hu:ʔ	hu:ʔnu	hu:ʔkara	
233	前	X	1	C	mē\ʔ	mē\ʔnu	mē\ʔkara	
×	ざる	X	1	-	se\ʔ	se\ʔnu	se\ʔkara	
×	十	X	1	-	tu:ʔ	tu:ʔnu	tu:ʔkara	
3	丘	X	2	A	mui	muinu	muikara	
21	鋤	X	2	-	ʔma\ʔga	ʔma\ʔganu	ʔma\ʔgakara	
×	霧	X	2	-	kiri	kiri:nu	kirikara	
×	灰	X	2	-	hai	hainu	haikara	
127	海	X	2	C	u\N	u\Nnu	u\Nkara	
163	紐	X	2	-	kju\ʔbi	kju\ʔbinu	kju\ʔbikara	
171	息	X	2	C	i:ʔki	i:ʔkinu	i:ʔkikara	
176	白	X	2	C	usi	usinu	usikara	
217	火	X	2	C	ʔma:ʔcji	ʔma:ʔcjinu	ʔma:ʔcjikara	
220	布団	X	2	C	u\ʔdu	u\ʔdunu	u\ʔdukara	
236	杵	X	2	-	cji:ʔcji	cji:ʔcjinu	cji:ʔcjikara	
11	食料・主食	X	3	A	haNmē	haNmēnu	-	
43	扇・団扇	X	3	C	oR\gi	oR\ginu	oR\gikara	
49	麴	X	3	A	koRdzi	koRdzinu	koRdzikara	
82	虹	X	3	A	nuRdzi	nuRdzinu	nuRdzikara	
86	膝小僧	X	3	A	cjiNsi	cjiNsinu	cjiNsikara	
129	あおさ	X	3	C	oRsa	oRsanu	oRsakara	
143	空	X	3	A	teNto	teNtonu	teNtokara	
247	一つ	X	3	C	ʔtiRcji	ʔtiRcjinu	ʔtiRcjikara	
248	二つ	X	3	A	ʔtaRcji	ʔtaRcjinu	ʔtaRcji kara	
249	三つ	X	3	A	miRcji	miRcjinu	miRcjikara	
250	四つ	X	3	A	juRcji	juRcjinu	juRcjikara	
252	六つ	X	3	A	muRcji	muRcjinu	muRcjikara	
254	八つ	X	3	A	jaRcji	jaRcjinu	jaRcjikara	
×	九つ	X	4	-	kuRnucji	kuRnucjinu	kuRnucjikara	
238	かまきり	X	5	-	kjogiN\bai	kjogiN\bainu	kjogiN\baikara	
213	とんぼ	X	6	-	ʔedzaNbo\Ra	ʔedzaNbo\ranu	ʔedzaNbo\rakara	
1	垢	Y	1	-	[ha/;	[ha;/nu	[ha;/ka\ra	
72	貝	Y	1	B	[mja/;	[mja;/nu	[mja;/ka\ra	

81	蛸	Y	1	B	[to/;	[to;/nu	[to;/kara	
94	南	Y	1	B	[hwě/;	[hwě/nu	[hwě/ka\ra	
99	齒	Y	1	B	[ha/;	[ha;/nu	[ha;/ka\ra	
100	木	Y	1	B	[kī/;	[kī;/nu	[kī;/ka\ra	
108	湯	Y	1	B	[ju/;	[ju;/nu	[ju;/kara	
164	手	Y	1	B	[ti/;	[ti;/nu	[ti;/kara	
170	目	Y	1	B	[mī/;	[mī;/nu	[mī;/kara	
224	家	Y	1	B	[ja/;	[ja;/nu	[ja;/ka\ra	
9	坂	Y	2	A	si[ra	si[ranu	-	
10	草履	Y	2	A	sa[ba	sa[banu	-	
12	棘	Y	2	A	nī[gi	nī[ginu	nī[gi:kara	
14	着物	Y	2	B	ki[N	ki[N/nu	ki[N/ka\ra	
16	西	Y	2	A	i[ri	i[rinu	i[ri:kara	
17	にんにく	Y	2	A	hwī[ru	hwī[runu	hwī[rukara	
18	ほくろ	Y	2	A	a[dza	a[dzanu	a[dzakara	
25	飴	Y	2	A	a[mī	a[mī:nu	a[mī:kara	
27	港	Y	2	-	mja:^[tu	mja:^[tunu	mja:^[tukara	
31	風	Y	2	A	ka[dzi	ka[dzinu	ka[dzikara	
34	暇	Y	2	-	si[ma	si[manu	si[makara	
36	畑	Y	2	C	ha[te	ha[tenu	ha[tekara	
38	袖	Y	2	A	sju[dī	sju[dīnu	sju[dīkara	
39	羽	Y	2	A	ha[nī	ha[nīnu	ha[nīkara	
41	鹽	Y	2	C	ta[re\:^	ta[re\:^nu	ta[re\:^kara	
46	柱	Y	2	C	ha:^[ja	ha:^[janu	ha:^[jakara	na:ba:ja 大黒柱
47	星	Y	2	A	hu[si	hu[si:nu	hu[si:kara	
52	畳	Y	2	A	ta[te	ta[tenu	ta[tekara	
54	舟	Y	2	C	hu:^[nī	hu:^[nīnu	hu:^[nīkara	
55	針	Y	2	C	ha[i	ha[i/nu	ha[i/kara	
56	骨	Y	2	C	hu:^[nī	hu:^[nīnu	hu:^[nīkara	
64	夜	Y	2	B	ju[ru\:^	ju[ru\:^nu	ju[ru\:^kara	
66	明日	Y	2	B	a[cja\:	a[cja\::nu	a[cja\::ra	
69	腕	Y	2	-	u[di	u[di:\nu	-	
70	夫	Y	2	A	wu[tu	wu[tu:nu	wu[tukara	
73	北	Y	2	A	ni[si	ni[si:nu	ni[sikara	
78	洞窟	Y	2	A	ga[ma	ga[ma:nu	ga[ma:kara	
79	きのこ	Y	2	C	na:^[ba	na:^[banu	na:^[bakara	
80	匂い	Y	2	A	ka[ba	ka[ba:\nu	ka[bakara	
87	煤	Y	2	C	si:^[si	si:^[sinu	si:^[sikara	
90	烏賊	Y	2	A	i[kja	i[kja:nu	i[kjakara	
93	石	Y	2	A	i[si	i[sinu	i[sikara	
96	傷	Y	2	A	?ki[dzi	?ki[dzi:nu	?ki[dzikara	
103	俵	Y	2	B	to:^[ra	to:^[ranu	to:^[ra\kara	
104	酒	Y	2	A	sa[kī	sa[kī:nu	sa[kī:kara	
107	竹	Y	2	-	ga[ra	ga[ranu	ga[rakara	
109	箱	Y	2	A	ha[ku	ha[ku:nu	ha[ku:kara	
114	筆	Y	2	A	hu[di	hu[di:nu	hu[dikara	
115	鼻	Y	2	A	ha[na	ha[nanu	ha[nakara	
117	水	Y	2	A	mī[dzi	mī[dzinu	mī[dzi:kara	
122	糸	Y	2	C	i[cju	i[cju\::nu	i[cju\::kara	

123	橋	Y	2	A	ha[si	ha[sinu	ha[sikara	
126	影・陰	Y	2	C	ka:^[gĩ	ka:^[gĩnu	ka:^[gĩkara	
135	釜	Y	2	-	ka[ma	ka[manu	ka[ma:kara	
140	甕	Y	2	C	ka:^[mĩ	ka:^[mĩnu	ka:^[mĩkara	
144	尻	Y	2	B	ma[i	ma[i/nu	ma[i/kara	
145	浜	Y	2	C	ha:^[ma	ha:^[manu	ha:^[makara	
146	友	Y	2	A	du[si	du[sinu	du[sikara	
148	梢・サトウキ ビの先端	Y	2	C	sju:^[ra	sju:^[ranu	sju:^[rakara	
151	ごちそう	Y	2	C	sju:^[kĩ	sju:^[kĩnu	sju:^[kĩkara	
155	薪	Y	2	-	to[N	to[N/nu	to[N/kara	
156	卵	Y	2	C	ku:^[ga	ku:^[ganu	ku:^[gakara	
161	ひしゃく	Y	2	C	nĩ:^[bu	nĩ:^[bunu	nĩ:^[bukara	
162	門	Y	2	-	ka[du	ka[du:nu	ka[dukara	角?
162	門	Y	2	-	ja:^[du	ja:^[dunu	ja:^[dukara	
165	椀	Y	2	-	gu:^[ki	gu:^[kinu	gu:^[kikara	
166	口	Y	2	A	ku[cji	ku[cji:nu	ku[cji:kara	
169	釘	Y	2	A	?ku[gi	?ku[ginu	?ku[gikara	
173	蓬	Y	2	C	hu:^[cji	hu:^[cji:nu	hu:^[cjikara	
174	来年	Y	2	C	ja:^[nĩ	ja:^[nĩnu	ja:^[nikara	
181	犬	Y	2	B	i[N	i[N/nu	i[N/ka\\:ra	
184	声	Y	2	C	ku[i	ku[i/nu	ku[i/kara	
186	鍋	Y	2	C	na:^[bĩ	na:^[bĩnu	na:^[bĩkara	
188	蚤	Y	2	C	nu[N	nu[N/nu	nu[N/kara	
×	味	Y	2	-	a[dzi	a[dzinu	a[dzikara	
189	涎	Y	2	A	ju[dai	ju[dainu	ju[daikara	
191	妻	Y	2	A	tu[dzi	tu[dzinu	tu[dzikara	
×	囲炉裏	Y	2	A	dzi:^[ru	dzi:^[runu	dzi:^[rukara	
199	猿	Y	2	C	sa:^[ru	sa:^[runu	sa:^[rukara	
200	耳	Y	2	B	mi[N	mi[N/nu	mi[N/ka\\:ra	
203	鮫	Y	2	A	sa[ba	sa[ba:nu	sa[bakara	
205	昨日	Y	2	C	?ki[nu	?ki[nu:\\nu	?ki[nu\\:kara	
206	青年	Y	2	B	nĩ[sje\\:^[	nĩ[sje\\:^[nu	nĩ[sje\\:^[kara	
208	臍	Y	2	A	hu[sju	hu[sjunu	hu[sjukara	
209	子供	Y	2	C	wa[re\\:^[	wa[re\\:^[nu	wa[re\\:^[kara	
210	砂糖	Y	2	C	sa:^[ta	sa:^[tanu	sa:^[takara	
216	牛	Y	2	A	u[si	u[sinu	u[sikara	
219	音	Y	2	A	u[tu	u[tu:^[nu	u[tu:^[kara	
230	去年	Y	2	B	ku[dzu\\:^[	ku[dzu\\:nu	ku[dzu\\:kara	
231	烏	Y	2	C	ga:^[ra	ga:^[ranu	ga:^[rakara	
232	松	Y	2	C	ma:^[cji	ma:^[cji:nu	ma:^[cjikara	
234	灸	Y	2	C	ja[cju\\:^[	ja[cju\\:^[nu	ja[cju\\:^[kara	
240	籠の一種	Y	2	C	ti:^[ru	ti:^[runu	ti:^[rukara	
4	箒	Y	3	C	hoR[ki	hoR[kinu	-	
5	髪・頭	Y	3	C	kara:^[dzi	kara:^[dzinu	-	
6	鍬	Y	3	-	toR[gĩ\\:^[	toR[gĩ\\:nu	-	
29	蓆	Y	3	C	muQ[sju	muQ[sjunu	muQ[sjukara	
30	牙	Y	3	-	jadzi[ba	jadzi[ba:nu	jadzi[bakara	やいば?
40	枕	Y	3	B	maku[ra	maku[ranu	maku[rakara	

42	兎	Y	3	C	usa:^[gi	usa:^[ginu	usa:^[gikara	
44	薬	Y	3	C	kusju[i	kusju[inu	kusju[ikara	
45	情け	Y	3	C	nasa:[kī	nasa:[kīnu	nasa[kīkara	
60	若い娘	Y	3	C	mēR[rē	mē:[rē\̄nu	mē:[rē\̄:kara	
63	刀・包丁	Y	3	C	kata[na	kata[nanu	kata[nakara	
65	油	Y	3	B	abu[ra	abu[ra:nu	abu[raka\̄:ra	
69	腕	Y	3	B	kai[na	kai[nanu	kai[na\̄kara	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mini	hasa[mi\̄kara	
76	櫛	Y	3	B	saR[ki	sa:[kinu	sa:[ki\̄kara	
194	かぼちゃ	Y	3	C	cjiburu[: / cjibu:[ru	cjibu:[runu	cjibu[ru\̄:kara	系列別語彙では「頭」の意味
77	下駄	Y	3	B	asi[ra	asi[ra:nu	asi[raka\̄:ra	
85	しゃもじ	Y	3	C	misi[ge	misi[ge\̄:nu	misi[ge\̄:kara	
89	ふくら脛	Y	3	B	kubu[ra	kubu[ra:nu	kubu[ra\̄kara	
91	水溜り・池	Y	3	B	kumu[i	kumu[i/nu	kumu[i/kara	
98	左	Y	3	B	sidza[i	sidza[i/nu	sidza[i/kara	
119	暦	Y	3	B	kuju[mi	kuju[mini	kuju[mi\̄kara	
120	命	Y	3	B	inu[cji	inu[cji:nu	inu[cji\̄kara	
134	鱗・ふけ	Y	3	B	iQ[ki	iQ[kinu	iQ[kika\̄:ra	
136	雲丹	Y	3	C	gacji:^[cji	gacji:^[cjinu	gacji:^[cjikara	
138	親子	Y	3	C	?jaQ[kwa	?jaQ[kwanu	?jaQ[kwakara	
139	蚊	Y	3	C	gadza[N	gadza[N/nu	gadza[N/kara	
149	蝶	Y	3	B	habī:[ra	habī:[ranu	habī[rakara	
152	南京豆（落花生）	Y	3	B	dzima[mī	dzima[mīnu	dzima[mika\̄:ra	
154	へちま	Y	3	B	nabī:^[ra	nabī:^[ranu	nabī:^[rakara	
158	目下の人・弟	Y	3	B	?uQ[tu	?uQ[tunu	?uQ[tu\̄kara	
160	とさか	Y	3	-	kaga[N	kaga[N/nu	kaga[N/kara	
167	ふんどし	Y	3	C	sana:^[gi	sana:^[ginu	sana:^[gikara	
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[mini	kaga[mi\̄kara	
178	虱	Y	3	C	sira[N	sira[N/nu	sira[N/kara	
179	鰻	Y	3	C	una:^[gi	una:^[ginu	una:^[gikara	
195	男	Y	3	B	iN[ga	iN[ga:nu	iN[ga\̄ka:ra	
197	おでき、できもの	Y	3	C	nību:^[tu	nību:^[tunu	nību:^[tukara	
207	腰周り	Y	3	C	gama:[ku / gama[ku	gama:[kunu	gama:[kukara	
211	蟬	Y	3	C	asa:^[ha	asa:^[hanu	asa:^[hakara	
212	杖	Y	3	C	gusa[N	gusa[N/nu	gusa[N/kara	
214	モッコ（運搬網）	Y	3	-	moQ[ko	moQ[ko\̄:nu	moQ[ko\̄:kara	
215	みかん	Y	3	C	?kunī[N	?kunī[N/nu	?kunī[N/kara	
222	やどかり	Y	3	C	ama[N	ama[N/nu	ama[N/kara	
226	苺	Y	3	C	?icju[N	?icju[N/nu	?icju[N/kara	
227	女	Y	3	B	wuna[gu	wuna[gunu	wuna[guka\̄:ra	
236	杵	Y	3	C	adzi[N	adzi[N/nu	adzi[N/kara	
237	顎	Y	3	C	utu[gē	utu[gē\̄:nu	utu[gē\̄:kara	
244	バツタ	Y	3	C	gaQ[ta	gaQ[tanu	gaQ[takara	
245	白髪	Y	3	C	sira:^[gī	sira:^[gīnu	sira:^[gikara	
251	五つ	Y	3	B	icji[cji	icji[cjinu	icji[cji\̄kara	

253	七つ	Y	3	B	nana[cji	nana[cjinu	nana[cji\kara	
2	種	W	2	A	ta/nĩ[	tani[nu	tani[ka\ra	
13	涙	W	2	A	nada[;	nada:[nu	-	
26	鋸	W	2	B	noko[;	noko:[nu	noko[ka\ra	
33	暇	W	2	B	madu[;	madu[nu	madu[ka\ra	
48	島	W	2	B	sima[;	sima[nu	sima[ka\ra	
50	角	W	2	B	cjino[;	cjino:[nu /cjino[nu	cjino[ka\ra	
53	波	W	2	B	nami[;	nami:[nu	nami[ka\ra	
58	脛	W	2	B	sini[;	sini:[nu	sini[ka\ra	
62	花	W	2	B	hana[;	hana:[nu	hana[ka\ra	
68	潮・海水	W	2	B	?usju[;	?usju:[nu	?usju[ka\ra	
75	亀	W	2	B	kamĩ[;	kamĩ[nu	-	
83	土	W	2	B	nĩcja[;	nĩcja:[nu	nĩcja[ka\ra	
92	たんこぶ	W	2	C	gahu[;	gahu:[nu	gahu[ka\ra	
105	網	W	2	B	ami[;	ami:[nu	ami[ka\ra	
106	雨	W	2	B	amĩ[;	amĩ:[nu	amĩ[:kara	
111	雲	W	2	B	?kumo[;	?kumo:[nu	?kumo[ka\ra	
112	鎌	W	2	B	kama[;	kama:[nu	kama[kara	
113	色	W	2	B	iru[;	iru:[nu	iru[ka\ra	
118	豆	W	2	B	mamĩ[;	mamĩ:[nu	mamĩ[ka\ra	
121	麦	W	2	B	mugi[;	mugi:[nu	mugi[ka\ra	
124	肩	W	2	B	kata[;	kata:[nu	kata[ka\ra	
125	草	W	2	B	kusa[;	kusa:[nu	kusa[:kara	
137	(舟の) 櫂	W	2	B	joho[;	joho:[nu	joho[ka\ra	
153	肉	W	2	B	sisi[;	sisi:[nu	sisi[ka\ra	
175	板	W	2	B	icja[;	icja:[nu	icja[ka\ra	
180	藁	W	2	B	wara[;	wara:[nu	wara[ka\ra	
182	傘・笠	W	2	B	kasa[;	kasa:[nu	kasa[ka\ra	
183	米	W	2	B	?kumĩ[;	?kumĩ:[nu	?kumĩ[ka\ra	
185	汁	W	2	B	siru[;	siru:[nu	siru[ka\ra	
187	顔	W	2	B	cjira[;	cjira:[nu	cjira[ka\ra	
190	山	W	2	B	jama[;	jama:[nu	jama[ka\ra	
198	踵	W	2	B	?adu[;	?adu:[nu	?adu[ka\ra	
201	味噌	W	2	B	misju[;	misju:[nu	misju[ka\ra	
202	糠	W	2	B	nuka[;	nuka:[nu	nuka[ka\ra	
204	サトウキビ	W	2	B	wugi[;	wugi[nu	wugi[ka\ra	
223	舌	W	2	B	siba[;	siba[nu	siba[ka\ra	
229	萱	W	2	B	gĩa[;	gĩa[nu	gĩa[kara	
235	韭	W	2	B	bira[;	bira[nu	bira[ka\ra	
7	煙	Z	3	A	kĩ[busi	kĩ[businu	-	
20	右	Z	3	A	nĩ[gi:ri	nĩ[girinu	nĩ[gi:rikara	
27	港	Z	3	-	mi[nato	mi[natonu	mi[natokara	
57	黄金	Z	3	A	ku[ga:^nĩ	ku[ga:^nĩnu	ku[ga:^nĩkara	
59	鼻血	Z	3	A	ha[na:^dzi	ha[na:^dzinu	ha[na:^dzikara	
84	東	Z	3	A	a[gari	a[garinu	a[garikara	
150	今年	Z	3	-	ku[tusi / ku[tu\si	ku[tusinu	ku[tu:sikara	
8	袋	Z	4	C	huQ[kuru	huQ[kurunu	-	
97	夜中	Z	4	B	juna[sav:^na	juna[sav:^nanu	juna[sav:^nakara	
133	朝	Z	4	C	situ[mĩti	situ[mĩtinu	situ[mĩtika\ra	

147	台所・母屋と 独立した家屋	Z	4	B	toR[gura	toR[guranu	toR[guraka\ra	
192	暁	Z	4	C	haR[ʔtu:ki	haR[ʔtukinu	haR[ʔtukika\ra	

Appendix 18. 岡前方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-nu	-kara	メモ
1	垢	X	1	-	a:˘	a:˘nu	a:˘kara	
22	血	X	1	A	ʔcji:˘	ʔcji:˘nu	ʔcji:˘kara	
23	帆	X	1	A	hu:˘	hu:˘nu	hu:˘kara	
28	葉	X	1	A	ha: / ha	ha:nu	ha:kara	
37	下	X	1	A	sju:˘	sju:˘ nu	sju:˘ kara	
95	魚	X	1	A	ʔju:˘	ʔju:˘nu	ʔju:˘kara	
107	竹	X	1	A	de:˘	de:˘nu	de:˘kara	
110	人	X	1	A	ʔcju:˘	ʔcju:˘nu	ʔcju:˘kara	
116	桶	X	1	C	ʔwĩʋ:˘	ʔwĩʋ:˘nu	ʔwĩʋ:˘kara	
141	子	X	1	A	ʔkwa:˘	ʔkwa:˘nu	ʔkwa:˘kara	
142	中	X	1	C	naʋ:˘	naʋ:˘nu	naʋ:˘kara	
159	上	X	1	A	ʔwĩ:˘	ʔwĩ:˘nu	ʔwĩ:˘kara	
168	豚	X	1	C	ʔwaʋ:˘	ʔwaʋ:˘nu	ʔwaʋ:˘kara	
193	尾	X	1	A	dzu:˘	dzu:˘nu	dzu:˘kara	
233	前	X	1	C	měʋ:˘	měʋ:˘nu	měʋ:˘kara	
×	ざる	X	1	-	sjeʋ:˘	sjeʋ:˘nu	sjeʋ:˘kara	
3	丘	X	2	A	mui	muinu	muikara	
19	右	X	2	A	miʋgi	miʋginu	miʋgikara	
51	露	X	2	C	tsĩʋju	tsĩʋjunu	tsĩʋjukara	
61	鳥・鶏	X	2	A	tui	tuinu	tuikara	
127	海	X	2	C	uʋN	uʋNnu	uʋNkara	
163	紐	X	2	-	kjuʋ:˘bĩ	kjuʋ:˘bĩnu	kjuʋ:˘bĩkara	
228	帯	X	2	C	oʋ:˘bi	oʋ:˘binu	oʋ:˘bikara	
171	息	X	2	C	i:˘ki	i:˘kinu	i:˘kikara	
173	蓬	X	2	C	hu:˘cʃi	hu:˘cʃinu	hu:˘cʃikara	
176	白	X	2	C	u:˘sĩ	u:˘sĩnu	u:˘sĩkara	
203	鮫	X	2	-	saʋme	saʋmenu	saʋmekara	
218	火	X	2	C	ʔma:˘tsĩ	ʔma:˘tsĩnu	ʔma:˘tsĩkara	
220	布団	X	2	C	uʋ:˘du	uʋ:˘dunu	uʋ:˘dukara	
11	食料・主食	X	3	A	haNmě	haNměnu	haNměkara	
43	扇・団扇	X	3	C	oʋRgi	oʋRginu	oʋRgikara	
49	麴・カビ	X	3	A	koRdzi	koRdzinu	koRdzikara	
82	虹	X	3	A	noRdzi	noRdzinu	noRdzikaʋ:ra	
86	膝小僧	X	3	A	tsĩNsje	tsĩNsjenu	tsĩNsjekara	
129	あおさ	X	3	C	oRsa	oRsanu	oRsakara	
143	空	X	3	A	teNto:	teNto:nu	teNtokara	
151	ごちそう	X	3	-	ʔkwaRki	ʔkwaRkinu	ʔkwaRkikara	
247	一つ	X	3	C	ʔtiRtsĩ	-	-	
248	二つ	X	3	A	ʔtaRtsĩ	-	-	
249	三つ	X	3	A	miRtsĩ	-	-	
250	四つ	X	3	A	juRtsĩ	-	-	
252	六つ	X	3	A	muRtsĩ	-	-	
254	八つ	X	3	A	jaRtsĩ	-	-	
×	九つ	X	3	-	kuRnutsĩ	-	-	
238	かまきり	X	6	-	iRsitubaʋi	iRsitubaʋinu	iRsitubaʋikara	
215	とんぼ	X	7	-	ʔjuRdzaNboʋRra	ʔjuRdzaNboʋRranu	ʔjuRdzaNboʋRrakara	
68	潮・海水	Y	1	-	[sju/;	[sju:/nu	[sju:/kara	

81	蛸	Y	1	B	[to/;	[to;/nu	[to;/ka\ra	
94	南	Y	1	B	[hwẽ/;	[hwẽ;/nu	[hwẽ;/ka\ra	
99	齒	Y	1	B	[ha/;	[ha;/nu	[ha;/kara	
100	木	Y	1	B	[kĩ/;	[kĩ;/nu	[kĩ;/kara	
108	湯	Y	1	B	[ju/;	[ju;/nu	[ju;/ka\ra	
164	手	Y	1	B	[ti/;	[ti;/nu	[ti;/ka\ra	
170	目	Y	1	B	[mĩ/;	[mĩ;/nu	[mĩ;/ka\ra	
224	家	Y	1	B	[ja/;	[ja;/nu	[ja;/ka\ra	
9	坂	Y	2	A	si[ra	si[ra:nu	si[ra:kara	
10	草履	Y	2	A	sa[ba / sa[ba:	sa[ba:nu	sa[ba:kara	
14	着物	Y	2	B	ki[N	ki[N/nu	ki[N/ka\ra	
16	西	Y	2	A	i[ri	i[ri:nu	i[ri:kara	
17	にんにく	Y	2	A	hu[ru	hu[ru:nu	hu[ru:kara	
18	ほくろ	Y	2	A	a[dza:ˆ	a[dza:ˆnu	a[dza:ˆkara	
25	飴	Y	2	A	a[mĩ	a[mĩ:nu	a[mĩ:kara	
29	蓆	Y	2	C	mu[sju\ˆ	mu[sju\ˆnu	mu[sju\ˆkara	
31	風	Y	2	A	ka[dzi	ka[dzi:nu	ka[dzi:kara	
32	ソテツの実	Y	2	B	na[i	na[i/nu	na[i/kara	
36	畑	Y	2	C	ha[te / ha[te\ˆ	ha[te\ˆnu	ha[te\ˆkara	
38	袖	Y	2	A	sju[dĩ	sju[dĩ:nu	sju[dĩ:kara	
39	羽	Y	2	A	ha[nĩ	ha[nĩ:nu	ha[nĩ:kara	
41	鹽	Y	2	C	?ta[re\ˆ	?ta[re\ˆnu	?ta[re\ˆkara	
47	星	Y	2	A	hu[si	hu[sinu	hu[si:kara	
52	畳	Y	2	A	ta[te:ˆ	ta[te:ˆnu	ta[te:ˆkara	
53	波	Y	2	B	na[mi:	na[mini	na[mika\ˆra	
54	舟	Y	2	C	hu:[nĩ	hu:[nĩnu	hu:[nĩkara	
55	針	Y	2	C	ha[i	ha[i/nu	ha[i/kara	
56	骨	Y	2	C	hu:[nĩ	hu:[nĩnu	hu:[nĩkara	
64	夜	Y	2	B	ju:[ru / ju[ru\ˆ	ju[ru\ˆnu	ju:[ru\ˆkara	
66	明日	Y	2	B	a[cja\ˆ / a[cja	a[cja\ˆnu	a[cja\ˆkara / a[cja\ˆkara	
67	蟻	Y	2	A	a[mi	a[mi:nu	a[mi:kara	
69	腕	Y	2	-	u[dĩ\ˆ	u[dĩ\ˆnu	u[dĩ\ˆkara	
70	夫	Y	2	A	hu[tu	hu[tu:nu	hu[tu:kara	
72	貝	Y	2	B	ka[i	ka[i/nu	ka[i/kara	
73	北	Y	2	A	ni[si	ni[si:nu	ni[si:kara	
78	洞窟	Y	2	A	ga[ma	ga[ma:nu	ga[ma:kara	
79	きのこ	Y	2	C	na:ˆ[ba	na:ˆ[banu	na:ˆ[bakara	
80	匂い	Y	2	A	ka[dza: / ka[dza	ka[dza:nu	ka[dza:kara	
87	煤	Y	2	C	su:ˆ[su	su:ˆ[sunu	su:ˆ[sukara	
90	烏賊	Y	2	A	i[kja	i[kja:nu	i[kja:kara	
93	石	Y	2	A	i[si	i[si:nu	i[si:kara	
96	傷	Y	2	A	ki[dzĩ	ki[dzĩ:nu	ki[dzĩ:kara	
102	腰	Y	2	A	ku[si	ku[si:nu	ku[si:kara	
104	酒	Y	2	A	sa[kĩ	sa[kĩ:nu	sa[kĩ:kara	
109	箱	Y	2	A	ha[ku:ˆ	ha[ku:ˆnu	ha[ku:ˆkara	
114	筆	Y	2	A	hu[di	hu[di:nu	hu[di:kara	
115	鼻	Y	2	A	ha[na	ha[na:nu	ha[na:kara	
117	水	Y	2	A	mĩ[dzĩ	mĩ[dzĩnu	mĩ[dzĩkara	

123	橋	Y	2	A	ha[si	ha[si:nu	ha[si:kara	
128	影・陰	Y	2	C	ka:^[gĩ	ka:^[gĩnu	ka:^[gĩkara	
140	甕	Y	2	C	ka:[mĩ	ka:[mĩnu	ka:[mĩkara	midzĩgamĩ 水甕
144	尻・後ろ	Y	2	B	ma[i	ma[i/nu	ma[i/kara	
145	浜	Y	2	C	ha:^[ma	ha:^[manu	ha:^[makara	
146	友	Y	2	A	du[sĩ	du[sĩ:nu	du[sĩ:kara	
148	梢・サトウキビの先端	Y	2	C	sju:^[ra	sju:^[ranu	sju:^[raka\\:ra	
155	薪	Y	2	-	to[N	to[N/nu	to[N/kara	
157	太陽	Y	2	C	ti:^[da	ti:^[danu	ti:^[dakara	
161	ひしゃく	Y	2	C	nĩ:^[bu	nĩ:^[bunu	nĩ:^[bukara	
162	門	Y	2	-	ka[du	ka[du:nu	ka[du:kara	
165	椀	Y	2	-	wa[N	wa[N/nu	wa[N/kara	
166	口	Y	2	A	ku[cji	ku[cji:nu	ku[cji:kara	
169	釘	Y	2	A	ku[gi	ku[gi:nu	ku[gi:kara	
172	目上の人	Y	2	C	sji:^[dza	sji:^[dzanu	sji:^[dzakara	
174	来年	Y	2	C	ja:^[nĩ	ja:^[nĩnu	ja:^[nĩka\\:ra	
181	犬	Y	2	B	i[N	i[N/nu	i[N/ka\\ra	
184	声	Y	2	C	ku[i	ku[i/nu	ku[i/kara	
186	鍋	Y	2	C	na:^[bĩ	na:^[bĩnu	na:^[bĩkara	
188	蚤	Y	2	C	nu:^[mi	nu:^[minu	nu:^[mikara	
191	妻	Y	2	A	tu[dzĩ	tu[dzĩ:nu	tu[dzĩ:kara	
199	猿	Y	2	C	sa:^[ru	sa:^[runu	sa:^[rukara	
200	耳	Y	2	B	mi[N	mi[N/nu	mi[N/kara	
205	昨日	Y	2	C	ki[nu\\:	ki[nu\\:nu	ki[nuka\\ra	
208	臍	Y	2	A	hu[sju	hu[sju:nu	hu[sju:kara	
209	子供	Y	2	C	wa[re	wa[re\\:nu	wa[re\\:kara	
210	砂糖	Y	2	C	sa:^[ta	sa:^[tanu	sa:^[takara	
216	牛	Y	2	A	u[si:^[	u[si:^[nu	u[si:^[kara	
219	音	Y	2	A	u[tu	u[tu:nu	u[tu:kara	
230	去年	Y	2	B	ku[dzu\\:	ku[dzu\\:nu	ku[dzuka\\:ra	
232	松	Y	2	C	ma:^[tsĩ	ma:^[tsĩnu	ma:^[tsĩkara	
234	灸	Y	2	C	ja[cju\\:^[	ja[cju\\:^[nu	ja[cju\\:^[kara	
240	籠の一種	Y	2	C	?ti:^[ru	?ti:^[runu	?ti:^[rukara	
246	紙	Y	2	A	ka[bi:^[	ka[bi:^[nu	ka[bi:^[kara	
4	箒	Y	3	C	hoR[ki	hoR[kinu	hoR[kikara	
5	頭	Y	3	C	kara:[dzĩ	kara:[dzĩnu	kara:[dzĩkara / kara[dzĩkara	
6	鋤	Y	3	-	toR[gwĩ\\:^[	toR[gwĩ\\:^[nu	toR[gwĩ\\:^[kara	
12	棘	Y	3	A	hiN[gi	hiN[gĩnu	hiN[gĩka\\ra	
21	鋤	Y	3	B	idza[i	idza[i/nu	idza[i/kara	
30	牙	Y	3	-	jadzi[ba	jadzi[ba:nu	jadzi[baka\\ra	
40	枕	Y	3	B	maku[ra	maku[ra:nu	maku[raka\\:ra	
42	兎	Y	3	C	usa:[gi	usa:[gĩnu	usa[gĩka\\ra	
44	薬	Y	3	C	?kusju[i	?kusju[i/nu	?kusju[i/kara	
45	情け	Y	3	C	nasa:[ki	nasa:[kĩnu	nasa[kĩka\\:ra	
46	柱	Y	3	-	hasi[ra	hasi[ra:nu	hasi[raka\\:ra	
57	黄金	Y	3	A	kuga[nĩ	kuga[nĩ:nu	kuga[nĩka\\:ra	
60	若い娘	Y	3	C	mēR[rē\\:^[	mēR[rē\\:^[nu	mēR[rē\\:^[kara	

63	刀	Y	3	C	kata[na / kata:[na	kata[nanu	kata[nakara	
65	油	Y	3	B	aN[ba	aN[ba:nu	aN[baka\ra	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mi:nu	hasa[mika\ra	
76	櫛	Y	3	B	saR[ki	saR[kinu	saR[kika\ra	
194	かぼちゃ	Y	3	-	tsibu:^[ru	tsibu:^[runu	tsibu:^[rukara	
77	下駄	Y	3	B	aN[dza	aN[dza:nu	aN[dzaka\ra	
85	しゃもじ	Y	3	-	misi[ge\:^	misi[ge\:^nu	misi[ge\:^kara	
91	水溜り・池	Y	3	B	kumu[i	kumu[i/nu	kumu[i/kara	
98	左	Y	3	B	sidza[i	sidza[i/nu	sidza[i/kara	
103	俵	Y	3	B	toR[ra	toR[ra:nu	toR[raka\ra	
119	暦	Y	3	B	kojo[mi	kojo[mini	kojo[mika\ra	
120	命	Y	3	B	ino[cji	ino[cji:nu	ino[cjika\ra	
122	糸	Y	3	C	iQ[cju\:^	iQ[cju\:^nu	iQ[cju\:^kara	
134	鱗・ふけ	Y	3	B	iQ[ki	iQ[ki:nu	iQ[kika\ra	
136	雲丹	Y	3	C	gatsi:[tsi / gatsi:[tsi	gatsi:[tsinu	gatsi:[tsikara	
139	蚊	Y	3	C	gadza[N	gadza[N/nu	gadza[N/kara	
149	蝶	Y	3	B	habu[ra	habu[ranu	habu[raka\ra	
152	南京豆（落花生）	Y	3	B	dzima[mĩ	dzima[mĩ:nu	dzima[mika\ra	
154	へちま	Y	3	B	nabi:[ra	nabi:[ranu	nabi[rakara	
156	卵	Y	3	-	tama:[gu / tama[gu	tama:[gunu	tama:[gukara	
158	弟	Y	3	B	uQ[tu	uQ[tu:nu	uQ[tuka\ra	
167	ふんどし	Y	3	C	sana:[gi	sana:[ginu	sana[gikara	
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[mi:nu	kaga[mika\ra	
178	虱	Y	3	C	sira[N	sira[N/nu	sira[N/kara	
179	鰻	Y	3	C	una:[gi / una[gi	una:[ginu	una[gika\ra	
195	男	Y	3	B	hiN[ga	hiN[ga:nu	hiN[gaka\ra	
196	竈	Y	3	-	kama[do	kama[do:nu	kama[doka\ra	
197	おでき	Y	3	C	nibu:^[tu	nibu:^[tunu	nibu:^[tukara	
207	腰周り	Y	3	C	gama[ku / gama:[ku	gama:[kunu	gama:[kukara	
211	蟬	Y	3	C	asa:[ha	asa:[hanu	asa[hakara	
212	杖	Y	3	C	gusa[N	gusa[N/nu	gusa[N/kara	
214	モッコ （運搬網）	Y	3	-	moQ[ko\:^	moQ[ko\:^nu	moQ[ko\:^kara	
215	みかん	Y	3	C	kuni[N	kuni[N/nu	kuni[N/kara	
222	やどかり	Y	3	C	ama[N	ama[N/nu	ama[Nkara / ama[N/kara	
226	苺	Y	3	C	icju[N	icju[N/nu	icju[N/kara	
227	女	Y	3	B	huna[gu	huna[gu:nu	huna[guka\ra	
231	烏	Y	3	C	gara:[su / gara[su	gara:[sunu	gara:[sukara	
237	顎	Y	3	C	utu[gẽ	utu[gẽ\ra:nu	utu[gẽ\ra:kara	
244	バッタ	Y	3	C	gaQ[ta	gaQ[tanu	gaQ[ta:ka\ra	
245	白髪	Y	3	C	sira:^[gi	sira:^[ginu	sira:^[gikara	
251	五つ	Y	3	B	itsi[tsi	itsi[tsinu	itsi[tsikara	
253	七つ	Y	3	B	nana[tsi	nana[tsinu	nana[tsikara	
138	親子	Y	4	C	ujaQ[kwa	ujaQ[kwanu	ujaQ[kwaka\ra	
2	種	W	2	A	tani[;	tani:[nu	tani:[ka\ra	taniN[ba 種も tani[ka \raNba種からも
13	涙	W	2	B	nada[;	nada:[nu	nada[ka\ra	

33	暇	W	2	B	madu[;	madu:[nu	madu[ka\ra	
35	畠	W	2	B	haru[;	haru:[nu	haru[ka\ra	
48	島	W	2	B	sima[;	sima:[nu	sima[ka\ra	
50	角	W	2	B	tsino[;	tsino:[nu	tsino[ka\ra	
58	脛	W	2	B	sini[;	sini:[nu	sini[ka\ra	
62	花	W	2	B	hana[;	hana:[nu	hana[ka\ra	
75	亀	W	2	B	kami[;	kami:[nu	kami[ka\ra	
83	土	W	2	B	nicja[;	nicja:[nu	nicja[ka\ra	
88	腹	W	2	B	wata[;	wata:[nu	wata[ka\ra	
92	たんこぶ	W	2	C	gahu[;	gahu:[nu	gahu[ka\ra	
105	網	W	2	B	ami[;	ami:[nu	ami[kara	
106	雨	W	2	B	ami[;	ami:[nu	ami[ka\ra	
111	雲	W	2	B	kumo[;	kumo:[nu	kumo[ka\ra	
112	鎌	W	2	B	kama[;	kama:[nu	kama[ka\ra	
113	色	W	2	B	iru[;	iru:[nu	iru[ka\ra	
118	豆	W	2	B	mami[;	mami:[nu	mami[ka\ra	
121	麦	W	2	B	mugi[;	mugi:[nu	mugi[ka\ra	
124	肩	W	2	B	kata[;	kata:[nu	kata[ka\ra	
125	草	W	2	B	kusa[;	kusa:[nu	kusa[ka\ra	
175	板	W	2	B	ita[;	ita:[nu	ita[ka\ra / ita[ka\ra	
180	藁	W	2	B	wara[;	wara:[nu	wara[ka\ra	
182	傘・笠	W	2	B	kasa[;	kasa:[nu	kasa[ka\ra	
183	米	W	2	B	kumi[;	kumi:[nu	kumi[ka\ra	
185	汁	W	2	B	siru[;	siru:[nu	siru[ka\ra	
187	顔	W	2	B	tsira[;	tsira:[nu	tsira[ka\ra	
190	山	W	2	B	jama[;	jama:[nu	jama[ka\ra	
198	踵	W	2	B	adu[;	adu:[nu	adu[ka\ra	
201	味噌	W	2	B	misju[;	misju:[nu	misju[ka\ra	
202	糠	W	2	B	nuka[;	nuka:[nu	nuka[ka\ra	
204	サトウキビ	W	2	B	hugi[;	hugi:[nu	hugi:[kara/hugi[kara	
223	舌	W	2	B	siba[;	siba:[nu	siba[ka\ra	
229	萱	W	2	B	gija[;	gija:[nu	gija[ka\ra	
235	小葱	W	2	B	bira[;	bira:[nu	bira[ka\ra	系列別語彙では「韭」の意味
7	煙	Z	3	A	ki[bu:^si	ki[bu:^sinu	ki[bu:^sikara	
27	港	Z	3	-	mi[na:to / mi[nato	mi[na:tonu	mi[na:tokara	
59	鼻血	Z	3	A	ha[na:^dzi	ha[na:^dzinu	ha[na:^dzikara	
84	東	Z	3	-	a[ga:^ri	a[ga:^rinu	a[ga:^rikara	
135	釜	Z	3	A	ha[ga:^ma	ha[ga:^manu	ha[ga:^makara	
150	今年	Z	3	-	ku[tusi	ku[tu:sinu	ku[tusika\ra	
160	とさか	Z	3	C	ka[gaN	ka[gaNnu	ka[gaNkara	
189	涎	Z	3	A	ju:[dai	ju:[dainu	ju[daikara	
236	杵	Z	3	C	a[dziN	a[dziNnu	a[dziNkara	
8	袋	Z	4	C	huQ[kuru	huQ[kurunu	huQ[kuruka\ra	
26	鋸	Z	4	B	noR[giri	noR[girinu	noR[girika\ra	
74	雷	Z	4	B	kami[nari	kami[nari:nu	kami[narika\ra	
97	夜中	Z	4	B	juna[sa\na	juna[sa\nanu	juna[sanaka\ra	
133	朝	Z	4	C	siiti[mii:ti	siiti[mii:tinu	siiti[mitika\ra	

147	台所・母屋と 独立した家屋	Z	4	B	toR[gura	toR[gura:nu	toR[guraka\l:ra	
192	暁	Z	4	C	haR[tu:ki	haR[tukinu	haR[tukika\l:ra	

Appendix 19. 犬田布方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	型	モーラ	系列		-ga	-nu	-kara	メモ
1	垢	X	1	A	ʔa:˘	ʔa:˘ga	ʔa:˘nu	ʔa:˘kara	
22	血	X	1	A	cji:˘	cji:˘\ga	-	cji:˘ka\ra	
23	帆	X	1	A	hwu:˘	hwu:˘\ga	-	hwu:˘ka\ra	
28	葉	X	1	A	hwa:˘	hwa:˘\ga	-	hwa:˘ka\ra	
37	下	X	1	-	su:˘	su:˘\ga	-	su:˘ka\ra	
37	下	X	1	A	sju:˘	sju:˘\ga	-	sju:˘ka\ra	
×	ざる	X	1	-	sje\l:˘	sje\l:˘ga	-	sje\l:˘kara	
95	魚	X	1	A	ʔju:	ʔju:\ga	-	ʔju:ka\ra	a:ju 赤魚
116	桶	X	1	C	wī:˘	wī\l:˘ga	-	wī\l:˘ kara	
107	竹(細くてしなやかな竹)	X	1	A	de: / de\l:	de:\ga	-	de:ka\ra	
110	人	X	1	A	ʔcju:	ʔcju:ga	-	ʔcjuka\ra	
141	子	X	1	A	ʔkwa / ʔkwa:	ʔkwa\ga	-	ʔkwaka\ra	
142	中	X	1	C	na\l:˘	na\l:˘ga	-	na\l:˘kara	
159	上	X	1	A	wī	wī\ga	-	wī:\kara	
162	門	X	1	B	dzo\l:˘	dzo\l:˘ga	-	dzo\l:˘kara	
168	豚	X	1	C	ʔwa	ʔwa\ga	-	ʔwa\l:kara	
184	声	X	1	C	kwī\l:˘	kwī\l:˘ga	-	kwī\l:˘kara	
193	尾	X	1	A	dzu:	dzu:\ga / dzu\ga	-	dzuka\ra	
×	帆	X	1	-	hu:˘	-	-	-	
233	前	X	1	C	mē\l: / mē	mē\l:ga	-	mē\l:kara	
3	丘	X	2	-	cjidzi	cjidzi\ga	-	cjidzika\ra	
9	坂	X	2	A	hira	hira\ga	-	hiraka\ra	
10	草履	X	2	A	saba	sabaga	-	sabaka\ra	
18	ほくろ	X	2	A	adza	adza\ga	-	adzaka\ra	
25	飴	X	2	A	amī	amī\ga	-	amīka\ra	
30	牙	X	2	A	ki\ba	ki\baga	-	ki\bakara	
31	風	X	2	A	kadzī	kadzī\ga	kadzī\nu	kadzīka\ra	
32	実・果物	X	2	B	nari	nariga	-	narika\ra	
33	暇	X	2	B	madu	maduga	madunu	maduka\ra	
38	袖	X	2	A	sudi	sudiga / sudi\ga	-	sudika\ra	
39	羽	X	2	A	hanī	hanīga	-	hanīka\ra	
46	柱	X	2	C	ha\vrja	ha\vrjaga	-	ha\vrjakara	
47	星	X	2	A	husi	husiga / husi\ga	-	husika\ra	
50	角	X	2	B	tsīnu	dziN[ga	-	tsīnuka\ra	
×	霧	X	2	-	kiri	kiri\ga / kiriga	-	kirikara / kirika\ra	
53	波	X	2	B	nami	namiga	-	namikara / namika\ra	
54	舟	X	2	C	hu\vnī	hu\vnīga	-	hu\vnīkara	
55	針	X	2	C	ha\vrī	ha\vrīga	-	ha\vrīkara	
56	骨	X	2	C	hu\vnī	hu\vnīga	-	hu\vnīkara	
58	脛・足	X	2	B	sīnī	sīnīga	-	sīnīka\ra	
61	鳥・鶏	X	2	A	turi	turiga	-	turika\ra	
67	蟻	X	2	A	ani	aniga	-	ani\kara	
70	夫	X	2	A	wutu	wutuga	-	wutukara / wutuka\ra	

72	貝	X	2	-	ka\i	ka\iga	-	ka\ikara	
×	たからがい	X	2	-	sibi	sibiga	-	sibika\ra	
240	籠の一種	X	2	C	ti\ru	ti\rua	-	ti\rukara	
76	櫛(細かい)	X	2	-	kusi	kusiga	-	kusika\ra	
78	洞窟	X	2	A	gama	gamaga	-	gamaka\ra	
80	匂い	X	2	A	kaza	kaza\ga	-	kazaka\ra	
×	香り	X	2	-	kaba	kaba\ga	-	kabaka\ra	
87	煤	X	2	C	sīsī	sīsī\ga	-	sīsī\kara	
90	烏賊	X	2	A	ikja	ikjaga	-	ikjaka\ra	
93	石	X	2	A	isi	isi\ga	-	isika\ra	
96	傷	X	2	A	kidzi	kidzi\ga	-	kidzika\ra	
102	腰・背中・後ろ	X	2	A	kusi	kusi\ga	-	kusika\ra	
104	酒	X	2	A	sakī	sakī\ga	-	sakīka\ra	
105	網	X	2	B	ami	amiga	-	amika\ra	
106	雨	X	2	B	amī	amīga	-	amika\ra	
×	竹(普通の竹)	X	2	-	gara	gara\ga	-	garaka\ra	
109	箱	X	2	A	haku	haku\ga	-	hakuka\ra	
114	筆	X	2	A	hudi	-	-	-	
115	鼻	X	2	A	hana	hana\ga	-	hanaka\ra	
117	水	X	2	A	mīdzi	mīdzi\ga	-	mīdzika\ra	
121	麦	X	2	B	mugi	mugiga	-	mugikara	
123	橋	X	2	A	hasi	hasi\ga	-	hasika\ra	
128	影	X	2	C	ka\gī	ka\gīga	-	ka\gīkara	
127	海	X	2	C	u\N	u\Nga	-	u\Nkara	
135	釜	X	2	-	kama	kama\ga	-	kamaka\ra	
140	甕	X	2	C	ka\mī	ka\mīga	-	ka\mīkara	
143	空	X	2	-	tīN	tīN\ga	-	tīNka\ra	
145	浜	X	2	C	ha\ma	ha\maga	-	ha\makara	
146	友	X	2	A	dusi	dusi\ga	-	dusika\ra	
×	今日	X	2	-	kju\R	kju\Rga	-	kju\Rkara	
205	昨日	X	2	C	ki\Nu / kinu\:	kinu\:ga	-	kinu\kara	
156	卵	X	2	C	ku\ga	ku\gaga	-	ku\gakara	
157	太陽	X	2	C	tī\da	tī\daga	-	tī\dakara	
158	目下の人・弟	X	2	-	ura	ura\ga	-	uraka\ra	
166	口	X	2	A	kucji	kucji\ga	-	kucjika\ra	
169	釘	X	2	A	?kugi	?kugi\ga	-	?kugika\ra	
171	息	X	2	C	i\ki	i\kiga	-	i\kikara	
172	目上の人・兄	X	2	-	u\ri	u\riga	-	u\rikara	
173	蓬	X	2	C	hu\tsī	hu\tsīga	-	hu\tsīkara	
176	白	X	2	C	u\si	u\si\ga	-	u\si\kara	
181	犬	X	2	B	?iN	?iN\ga	-	?iNkara	
187	顔	X	2	B	tsīra	tsīraga	-	tsīraka\ra	
×	味	X	2	-	adze	adze\ga	-	adze:ka\ra	
191	妻	X	2	A	tudzi	tudzi\ga	-	tudzika\ra	
199	猿	X	2	C	sa\ru	sa\rua	-	sa\rukara	
203	鮫	X	2	A	saba	saba\ga	-	sabaka\ra	
204	サトウキビ	X	2	B	ugi	ugiga	-	ugika\ra	

208	臍	X	2	A	husu	husu\ga	-	husuka\ra	
210	砂糖	X	2	C	sa\ta	sa\taga	-	sa\takara	
216	牛	X	2	A	usi	usi\ga	-	usika\ra	
219	音	X	2	A	utu	utu\ga	-	utuka\ra	
220	布団	X	2	C	u\du	u\duga	-	u\dukara	
×	嫁	X	2	-	jumĩ	jumĩ\ga	-	jumika\ra	
×	十	X	2	-	tuR	tuRga	-	-	
73	北	X	2	A	nisi	nisi\ga	-	nisika\ra	
×	昼	X	2	-	hiru	hiru\ga	-	hiruka\ra	
4	箒	X	3	C	hoRki	hoRki\ga	-	hoRkikara	
7	煙	X	3	A	kĩbu\si	kĩbu\sigā	-	kĩbusika\ra	
8	袋	X	3	C	huQ\ku	huQ\kuga / huQku\ga	-	huQ\kukara	
11	食料・主食	X	3	A	haNmē	haNmē\ga	-	haNmēka\ra	
12	棘	X	3	A	jiNgi	jiNgi\ga	-	jiNgika\ra	
20	右	X	3	A	nĩgi\ri	nĩgi\riga	-	nĩgirika\ra	
27	港	X	3	-	mina\tu	mina\tuga	-	minatuka\ra	
49	麴・カビ	X	3	A	koRdzi / koR\dzi	koR\dziga	-	koR\dzikara	
40	枕	X	3	B	maQkwa	maQkwa\ga	-	maQkwaka\ra	
52	畳	X	3	A	tata\mĩ	tata\mĩga	tata\mĩnu	tatamika\ra	
59	鼻血	X	3	A	hanadzi	hanadziga	-	hanadzika\ra	
×	包丁	X	3	-	hoRcja	hoRcja\ga	-	hoRcja\kara	
66	明日	X	3	B	aQcja	aQcja\ga	-	aQcja\kara	
82	虹	X	3	A	noRgi	noRgiga	-	noRgikara	
86	膝小僧	X	3	A	cjiNsĩ	cjiNsĩ\ga	-	cjiNsĩka\ra	
122	糸	X	3	C	iQcju\	iQcju\ga	-	iQcju\kara	
150	今年	X	3	-	kutu\si	kutu\sigā	-	kutusika\ra	
160	たてがみ	X	3	C	ka\Ngi	ka\Ngiga	-	ka\Ngikara	
167	ふんどし	X	3	-	mawa\si / mawasi	mawa\sigā	-	mawa\sikara	
189	涎	X	3	A	judari	judariga	-	judarikara	
248	二つ	X	3	A	?taRtsĩ	?taRtsĩga	-	-	
249	三つ	X	3	A	miRtsĩ	miRtsĩga	-	-	
250	四つ	X	3	A	juRtsĩ	juRtsĩga	-	-	
252	六つ	X	3	A	muRtsĩ	muRtsĩga	-	-	
254	八つ	X	3	A	jaRtsĩ	jaRtsĩga	-	-	
×	頭	X	4	-	uQkaN	uQka\Nga	-	uQkaNka\ra	
147	台所・母屋と 独立した家屋	X	4	B	toRgura	toRgura\ga	-	toRgura\ka\ra	
238	かまきり	X	6	-	iQsjatuma\ju	iQsjatuma\juga	-	iQsjatuma\jukara	
68	潮	Y	1	-	[sju/;	[sju;/ga	-	[sju;/ka\ra	
164	手	Y	1	B	[ti/;	[ti/ga	-	[ti;/ka\ra	
81	蛸	Y	1	B	[to/;	[to/ga	-	[to;/ka\ra	
99	歯	Y	1	B	[hwa/;	-	-	-	
100	木	Y	1	B	[ki/;	[ki;/ga	[ki;/nu / [ki/nu	[ki;/ka\ra	a:gĩ 赤木
108	湯	Y	1	B	[ju/;	[ju;/ga	-	[ju;/kara	jĩ:ju 良い湯
170	目	Y	1	B	[mi/;	[mi/ga	-	[mi;/ka\ra	
221	穂	Y	1	B	[hu/;	[hu/ga	-	[hu;/ka\ra	
224	家	Y	1	B	[ja/;	[ja;/ga	-	[ja;/ka\ra	

41	鹽	Y	2	C	ta:[re / ta[re	ta:[re\ga	-	ta:[re\kara	mīdzidare 水鹽
64	夜	Y	2	B	ju:[ru	ju:[ru\ga	-	ju:[ru\kara	acjajuru 明日の夜
×	塩	Y	2	-	ma:[sju	ma:[sju\ga	-	ma:[sju\kara	a:masju 赤潮
188	蚤	Y	2	C	nu:[mi	nu:[mi\ga	-	nu:[mi\kara	?kwa:numi 小さい蚤
79	きのこ	Y	2	C	na:[ba	na:[ba\ga	-	na:[baka\ra	?kwa:naba 小さいきのこ
113	色	Y	2	B	i:[ru\:	i:[ru\ga	-	i:[ru\kara	a:iru 赤色
118	豆	Y	2	B	ma[mī	ma[mīga	-	ma[mīka\ra	
125	草	Y	2	B	ku[sal:	ku[saga	-	ku[saka\ra	
137	(舟の) 櫂	Y	2	B	ē[ku	ē:[ku\ga	-	ē:[ku\kara	
144	尻	Y	2	B	ma:[ri	ma:[ri\ga	-	ma:[ri\kara	maritaNba お尻回り
230	去年	Y	2	B	ku[dzu	ku[dzu\ga	-	ku[dzu\kara	
153	肉	Y	2	B	si[si	si[siga	-	si[sika\ra	
161	ひしゃく	Y	2	C	nī:[bu	nī:[bu\ga / nī[bu\ga	-	nī:[buka\ra	
186	鍋	Y	2	C	na:[bī	na:[bī\ga	-	na:[bī\kara	?kwa:nabī 小さい鍋
198	踵	Y	2	B	a[du	a[duga	-	a[dukara	
201	味噌	Y	2	B	mi[sju\:	mi[sju\ga	-	mi[sjuka\ra	
202	糠	Y	2	B	nu[ka\:	nu[kaga	-	nu[kaka\ra	
209	子供	Y	2	C	wa:[re	wa:[re\ga	-	wa:[re\kara	?kwa:ware 小さい子供
218	火	Y	2	C	?ma[tsī	?ma[tsī\ga	-	?ma[tsī\kara	
231	烏	Y	2	C	ga:[ra / ga[ra	ga:[ra\ga	-	ga:[ra\kara	
232	松	Y	2	C	ma:[tsī	ma:[tsī\ga	-	ma:[tsī\kara	a:matsī 赤松
235	韭	Y	2	B	bi[ra	bi[raga	-	bi[raka\ra	
94	南	Y	2	B	ha[i	ha[iga	-	ha[ika\ra	
6	鋤	Y	3	-	toN[gwī	toN[gwī\ga	-	toN[gwī\kara	
36	畑	Y	3	C	haQ[te\:/ haQ[te	haQ[te\ga	haQ[te\ngu / haQ[te\gu	haQ[te\kara	
29	蓆	Y	3	C	muQ[sju	muQ[sju\ga	-	muQ[sju\kara	
42	兎	Y	3	C	usa:[gi	usa:[gi\ga	-	usa:[gi\kara	
43	扇・団扇	Y	3	C	oR[gi	oR[gi\ga	-	oR[gi\kara	
44	薬	Y	3	C	kusu[ri	kusu[ri\ga	-	kusu[ri\kara	
45	情け	Y	3	C	nasa[kī	nasa[kī\ga	-	nasa[kī\kara	
63	刀	Y	3	C	kata[na	kata[na\ga	-	kata[na\kara	
65	油	Y	3	B	aN[ba	aN[ba\ga	-	aN[bakara	
69	腕	Y	3	B	kai[na	kai[na\ga	-	kai[naka\ra	
71	鋏	Y	3	B	hasa[mi	hasa[mi\ga	-	hasa[mika\ra	
×	アワビ	Y	3	-	ana[gu	ana[gu\ga	-	ana[guka\ra	
×	稲光	Y	3	-	hwīdi[ri	hwīdi[ri\ga	-	hwīdi[rika\ra	
76	櫛	Y	3	B	saR[ki	saR[ki\ga	-	saR[kika\ra	
178	虱	Y	3	C	sira[N	sira[N\ga	-	sira[N\kara	
194	かぼちゃ・頭 1	Y	3	C	tsību[ru	tsību[ru\ga	-	tsību[ru\kara	
4	頭2	Y	3	C	kara[dzī	kara[dzī\ga	-	kara[dzī\kara	
77	下駄	Y	3	B	aN[dza	aN[dza\ga	-	aN[dzaka\ra	

83	土	Y	3	B	jiN[cja	jiN[cjaga	jiN[cjanu	jiN[cjaka\ra	
85	しゃもじ	Y	3	C	misi[ge	misi[gega / misi[ge\ga	-	misi[geka\ra	
89	ふくら脛	Y	3	B	kuN[ba	kuN[ba\ga	-	kuN[ba\kara	
98	左	Y	3	-	hidza[ri	hidza[ri\ga	-	hidza[ri\kara	
103	俵	Y	3	B	toR[ra	toR[ra\ga	-	toR[raka\ra	
163	紐	Y	3	C	jiR[ru	jiR[ru\ga	-	jiR[ru\kara	
119	暦	Y	3	B	kuju[mi	kuju[mi\ga	-	kuju[mika\ra	
120	命	Y	3	B	inu[cji	inu[cji\ga	-	inu[cjika\ra	
124	肩	Y	3	B	kaQ[ta\:	kaQ[ta\ga	-	kaQ[ta\kara	
129	あおさ	Y	3	C	oR[sa	oR[sa\ga	-	oR[sa\kara	
134	鱗・ふけ	Y	3	B	iQ[ki	iQ[ki\ga	-	iQ[kika\ra	
136	雲丹の一種	Y	3	-	juR[ni	juR[ni\ga	-	juR[ni\kara	
139	蚊	Y	3	C	gadza[N	gadza[N\ga	-	gadza[N\ka\ra	
179	蝶	Y	3	B	kabi[ra	kabi[ra\ga	-	kabi[ra\kara	
174	来年	Y	3	C	jaR[ni	jaR[ni\ga	-	jaR[ni\kara	
151	ごちそう	Y	3	-	maka[ne	maka[ne\ga	-	maka[ne\kara	
152	南京豆（落花 生）	Y	3	B	dzima[mī	dzima[mī\ga	-	dzima[mika\ra	
154	へちま	Y	3	B	nabi[ra	nabi[ra\ga	nabi[ra\ngu	nabi[raka\ra	
160	とさか	Y	3	-	kaga[N	kaga[N\ga	-	kaga[N\ka\ra	
177	鏡	Y	3	B	kaga[mi	kaga[mi\ga	-	kaga[mika\ra	
179	鰻	Y	3	C	una[gi	una[gi\ga	-	una[gi\kara	
195	男	Y	3	B	jiN[ga	jiN[ga\ga	-	jiN[gaka\ra	
197	おでき	Y	3	C	nibu[tu	nibu[tu\ga / nibu:[tu\ga	nibu[tu\ngu	nibu[tu\kara	
207	腰周り	Y	3	C	gama[ku	gama[ku\ga	-	gama[ku\kara	
211	蟬	Y	3	C	asja[sja	asja[sja\ga	-	asja[sja\kara	
212	杖	Y	3	C	gusja[N	gusja[N\ga	-	gusja[N\ka\ra	
213	とんぼ	Y	3	-	usja:[mja	usja:[mja\ga	-	usja[mja\kara	
214	モッコ（運搬 網）	Y	3	-	muQ[ko	muQ[ko\ga	-	muQ[ko\kara	
215	みかん	Y	3	C	kuni[N	kuni[N\ga	-	kuni[N\kara	
222	やどかり	Y	3	C	ama[N	ama[N\ga	-	ama[N\ka\ra	
226	苺	Y	3	C	icju[N	icju[N\ga	-	icju[N\ka\ra	
227	女	Y	3	B	wuna[gu	wuna[gu\ga	-	wuna[guka\ra	
228	帯	Y	3	C	kjuR[bī	kjuR[bī\ga	-	kjuR[bī\kara	
234	灸	Y	3	C	jaQ[cjo	jaQ[cjo\ga	-	jaQ[cjo\kara	
236	杵	Y	3	C	adzi[N	adzi[N\ga	-	adzi[N\ka\ra	
237	顎	Y	3	C	utu[gē	utu[gē\ga	-	utu[gē\kara	
244	バッタ	Y	3	C	gaR[ta	gaR[ta\ga	-	gaR[ta\kara	
245	白髪	Y	3	C	sira[gī	sira[gī\ga	-	sira[gī\kara	
251	五つ	Y	3	B	itsī[tsī	itsī[tsīga	-	-	
253	七つ	Y	3	B	nana[tsī	nana[tsīga	-	-	
×	午前	Y	3	-	sīka[ma	sīka[ma\ga	-	sīka[ma\kara	
×	まさかり	Y	3	-	juR[ki	juR[ki\ga	-	juR[ki\kara	
26	鋸	Y	4	B	noRgi[ri	noRgi[ri\ga	noRgi[ri\ngu	noRgi[rika\ra	
74	雷	Y	4	B	kaNna[ri	kaNna[ri\ga	kaNna[ri\ngu	kaNna[rika\ra	
132	かんざし	Y	4	-	kaQsja[ti	kaQsja[ti\ga	-	kaQsja[tika\ra	

138	親子	Y	4	C	ujaQ[kwa	ujaQ[kwa\ga	-	ujaQ[kwa\kara	
239	刺青	Y	4	C	haNdzi[ki	haNdzi[ki\ga	-	haNdzi[kika\ra	
255	九つ	Y	4	-	kuRnu[tsi	kuRnu[tsiga	-	-	
14	着物	W	2	B	ki/N[	kiN[ga	kiN[nu	kiN[kara	
24	陸	W	2	A	dzi/N[	dziN[ga	-	dziN[kara	
155	薪	W	2	-	to/N[	toN[ga	-	toN[kara	
2	種	W	2	A	ta/nĩ[	tani[ga	-	tani[ka\ra	
13	涙	W	2	B	na/da[	nada[ga	nada[nu	nada[ka\ra	
21	鋤	W	2	B	sĩ/ki[	siki[ga	-	siki[ka\ra	
48	島	W	2	B	si/ma[	sima[ga	sima[nu	sima[ka\ra	
62	花	W	2	B	ha/na[/ hana[;	hana[ga	hana[nu	hana[ka\ra	
68	潮	W	2	B	u/sju[	usju[ga	-	usju[ka\ra	
×	夜光貝	W	2	-	ka/i[	kai[ga	-	kai[kara	
75	亀	W	2	B	ka/mĩ[/ kami[;	kami[ga	-	kami[ka\ra	
88	腹	W	2	B	wa/ta[/ wata[;	wata[ga	-	wata[ka\ra	
×	腿	W	2	-	mu/mu[/ mumu[;	mumu[ga	-	mumu[ka\ra	
×	池	W	2	-	i/ki[	iki[ga	-	iki[ka\ra	
92	たんこぶ	W	2	C	ga/bu[	gabu[ga	-	gabu[ka\ra	
111	雲	W	2	B	ku/mu[	kumu[ga	-	kumu[ka\ra	
112	鎌	W	2	B	ka/ma[	kama[ga	-	kama[ka\ra	
175	板	W	2	B	i/cja[	icja:[ga	-	icja[ka\ra	
180	藁	W	2	B	wa/ra[	wara[ga	-	wara[kara	
182	傘・笠	W	2	B	kasa[;	kasa:[ga	-	kasa[ka\ra	
183	米	W	2	B	ku/mĩ[	kumĩ[ga	-	kumĩ[ka\ra	
185	汁	W	2	B	si/ru[	siru[ga	-	siru[ka\ra	
190	山	W	2	B	ja/ma[	jama[ga	-	jama[ka\ra	
200	耳	W	2	B	mi/N[	miN[ga	-	miN[kara	
223	舌	W	2	B	su/ba[	suba[ga	-	suba[ka\ra	
229	萱	W	2	B	gĩ/ja[	gĩa[ga	-	gĩa[kara	
247	一つ	W	2	C	?ti/N[	?tiN[ga	-	-	
133	朝	Z	4	C	sĩtu[mĩ\ti	sĩtu[mĩ\tiga	sĩtu[mĩ\tinu	sĩtu[mĩ\tikara	
192	暁	Z	4	C	aR[tu\ki	aR[tu\kiga	aR[tu\kinu	aR[tu\kikara	
97	夜中	Z	4	-	juna[sa\na	juna[sa\naga	juna[sa\nanu	juna[sa\nakara	
×	午後	Z	4	-	jusu[ku\ri	jusu[ku\riga	jusu[ku\rinu	jusu[ku\rikara	

Appendix 20. 浅間方言の名詞アクセント資料

ser.	調査項目 (意味)	話者	型	モーラ	系列		-nu	-kara	-karaNba	メモ
1	垢	浅A	X	2	-	aR	aR\̃nu	-	-	
1	垢	浅B	X	2	-	aR	aR\̃nu	aRka\̃ra	-	
9	坂	浅A	X	2	A	sīra: / sīra	sīra:\̃nu	sīraka\̃:ra	-	
9	坂	浅B	X	2	A	sīra	sīra:\̃nu	sīraka\̃:ra	-	
10	草履	浅A	X	2	A	sjaɸa:	sjaɸa:\̃nu	sjaɸaka\̃:ra	-	
10	草履	浅B	X	2	A	sjaɸa:	sjaɸa\̃:nu	sjaɸaka\̃:ra	-	
12	棘	浅A	X	2	A	Ngī:	Ngī:\̃nu	Ngika\̃:ra	-	
12	棘	浅B	X	2	A	Ngī	Ngī\̃nu	Ngī\̃kara / Ngīkara	-	
16	西	浅A	X	2	A	irī:	irī:\̃nu	irika\̃:ra	-	
16	西	浅B	X	2	A	irī	irī\̃:nu	irika\̃:ra	-	
17	にんにくの葉	浅A	X	2	A	hwīru:	hwīru:\̃nu	hwīruka\̃:ra	-	hwīruNgabu にん にく
17	にんにくの葉	浅B	X	2	A	hwīru	hwī\̃runu	hwīruka\̃:ra	-	
18	ほくろ	浅A	X	2	A	adza:	adza:\̃nu	adzaka\̃:ra	-	
18	ほくろ	浅B	X	2	A	adza:	adza:\̃nu	adzaka\̃ra	-	
22	血	浅A	X	2	A	?tsīR	?tsīR\̃nu	?tsīRka\̃:ra	-	
22	血	浅B	X	2	A	?cjiR	?cjiR\̃nu	?cjiRka\̃:ra	-	
22	血	浅C	X	2	A	?cjiR	?cji\̃Rnu	?cji\̃Rkara	-	
23	帆	浅A	X	2	A	huR	huR\̃nu	huRka\̃:ra	-	
23	帆	浅B	X	2	A	huR	huR\̃nu	huRka\̃:ra	-	
23	帆	浅C	X	2	A	huR	hu\̃Rnu	hu\̃Rkara	-	
25	飴	浅A	X	2	A	amī:	amī:\̃nu	amika\̃:ra	-	
25	飴	浅B	X	2	A	amī:	amī\̃:nu	amika\̃ra	-	
28	葉	浅A	X	2	A	haR	haR\̃nu	haRka\̃:ra	-	
28	葉	浅B	X	2	A	haR	haR\̃nu	haRka\̃:ra	-	
31	風	浅A	X	2	A	kadzī:	kadzī:\̃nu	kadzīka\̃:ra	-	
31	風	浅B	X	2	A	kadzī:	kadzī:\̃nu	kadzīka\̃:ra	-	
34	暇	浅A	X	2	-	hwīma:	hwīma:\̃nu	-	-	
34	暇	浅B	X	2	-	hīma	hīma\̃:nu	hīmaka\̃:ra	-	
37	下	浅A	X	2	A	sjuR	sjuR\̃nu	sjuRka\̃:ra	-	
37	下	浅B	X	2	A	sjuR	sjuR\̃nu	sjuRka\̃ra	-	
38	袖	浅A	X	2	A	sjudī:	sjudī:\̃nu	sjudīka\̃:ra	-	
38	袖	浅B	X	2	A	sjudī	sjudī\̃:nu	sjudīka\̃:ra	-	
38	袖	浅C	X	2	A	sjudī	sjudī:\̃nu	sjudī\̃:kara	-	
39	羽	浅A	X	2	A	hanī:	hanī:\̃nu	hanika\̃:ra	-	
39	羽	浅B	X	2	A	hanī	hanī\̃nu	hanīka\̃:ra	hanīkara\̃Nba / hanīkara\̃Nba	
39	羽	浅C	X	2	A	hanī	hanī\̃nu	hanī\̃kara	-	
47	星	浅A	X	2	A	husī:	husī:\̃nu	husika\̃:ra	-	
47	星	浅B	X	2	A	husī	husī\̃nu	husika\̃:ra	husika\̃:raNba	
47	星	浅C	X	2	A	husi:	husi\̃nu	husi\̃kara	-	
51	露	浅A	X	2	C	?tsī:\̃ju	?tsī:\̃junu	?tsī:\̃jukara	?tsī:\̃jukaraNba	
52	畳	浅A	X	2	A	tatē:	tatē:\̃nu	tatēka\̃:ra	-	
52	畳	浅B	X	2	A	tate	tate\̃:nu	tateka\̃ra	tateka\̃:raNba	
52	畳	浅C	X	2	A	tatē:	tatē:\̃nu	tatē\̃kara	-	
61	鳥・鶏	浅A	X	2	A	tui	tui\̃nu	tui\̃kara	tui\̃karaNba	

67	蟻	浅A	X	2	A	ani:	ani\ぬ	anika\ら	anika\らNba	
70	夫	浅A	X	2	A	wutu:	wutu\ぬ	wutuka\ら	-	
70	夫	浅B	X	2	A	wutu: / wutu	wutu\ぬ	wutuka\ら	wutuka\らNba	
70	夫	浅C	X	2	A	wutu	wutu\ぬ	wutu\kara	-	
73	北	浅A	X	2	A	nīsi:	nīsi\ぬ	nīsika\ら	-	
73	北	浅B	X	2	-	nīsī	nīsī\ぬ	nīsika\ら	-	
78	洞窟	浅A	X	2	-	?joR	?jo\Rnu	?jo\Rkara	-	
80	匂い	浅A	X	2	A	kadza:	kadza\ぬ	-	-	
80	匂い	浅B	X	2	A	kadza:	kadza\ぬ	kadza\ka\ら	-	
×	肘	浅B	X	2	-	hwīdzī	hwīdzī\ぬ	hwīdzīka\ら	-	
90	烏賊	浅A	X	2	A	ikja:	ikja\ぬ	ikjaka\ら	-	
90	烏賊	浅B	X	2	A	ikja:	ikja\ぬ	ikjaka\ら	-	
93	石	浅A	X	2	A	isī:	isī\ぬ	isīka\ら	-	
93	石	浅B	X	2	A	isī:	isī\ぬ	isī\ka\ら	-	
95	魚	浅A	X	2	A	?juR	?juR\ぬ	?juRka\ら	-	
95	魚	浅B	X	2	A	?juR	?ju\Rnu	?juRka\ら	-	
95	魚	浅C	X	2	A	?juR / ?juVR	?ju\Rnu	?ju\Rkara	-	
96	傷	浅A	X	2	A	?kidzi:	?kidzi\ぬ	?kidzika\ら	-	
96	傷	浅B	X	2	A	kidzī	kidzī\ぬ	kidzīka\ら	-	
104	酒	浅A	X	2	A	sjakī:	sjakī\ぬ	sjakīka\ら	-	
104	酒	浅B	X	2	A	sjakī	sjakī\ぬ	sjakīka\ら	-	
107	竹	浅A	X	2	A	dēR	dēR\ぬ	dēR\kara	-	
107	竹	浅B	X	2	A	dēR	dēR\ぬ	dēR\kara	dē\karaNba	
109	箱	浅A	X	2	A	haku:	haku\ぬ	hakuka\ら	-	
109	箱	浅B	X	2	A	haku	haku\ぬ	haku\ka\ら / hakuka\ら	-	
110	人	浅A	X	2	A	?cjuR	?cjuR\ぬ	?cjuNka\ら	-	?cjuRka\らではなく、?cju <u>N</u> ka\らになる。理由は不明
110	人	浅B	X	2	A	?cjuR	?cjuR\ぬ	?cjuRka\ら	?cju\ka\らNba	
110	人	浅C	X	2	A	?cjuR	?cjuR\ぬ	?cjuR\kara	-	
114	筆	浅A	X	2	A	hudī:	hudī\ぬ	hudīka\ら	-	
114	筆	浅B	X	2	A	hudī	hudī\ぬ	hudī\kara / hudīka\ら	-	
115	鼻	浅A	X	2	A	hana:	hana\ぬ	hanaka\ら	-	
115	鼻	浅B	X	2	A	hana	hananu	hanaka\ら	-	
116	桶	浅A	X	2	C	wīR	wīR\ぬ	wīRka\ら	-	
116	桶	浅B	X	2	C	wiR	wiR\ぬ	wiR\kara	-	
117	水	浅A	X	2	A	mīdzī:	mīdzī\ぬ	mīdzīka\ら	-	
117	水	浅B	X	2	A	mīdzī:	mīdzī\ぬ	mīdzīka\ら	-	
123	橋	浅A	X	2	A	hasī:	hasī\ぬ	hasīka\ら	-	
123	橋	浅B	X	2	A	hasī:	hasī\ぬ	hasīka\ら	-	
127	海	浅A	X	2	C	uN	uN\ぬ	uN\kara	-	
127	海	浅B	X	2	C	uN / uVN	uVNnu	uVNkara	uN\karaNba	
127	海	浅C	X	2	C	uN	uVNnu	uN\kara	-	
135	釜	浅A	X	2	-	kama:	kama\ぬ	kamaka\ら	-	
141	子	浅A	X	2	A	?kwaR	?kwaR\ぬ	?kwaRka\ら	-	
141	子	浅B	X	2	A	?kwaR	?kwaR\ぬ	?kwaRka\ら	-	

142	中	浅A	X	2	C	naR	naR\ngu	naR\kara	-	
142	中	浅B	X	2	C	naR	naVRnu	naR\kara	-	
143	空	浅A	X	2	-	tiN	tiN\ngu	tiNka\ra	-	
143	空	浅B	X	2	-	tiN	tiN\ngu	tiNka\ra	-	
146	友	浅A	X	2	A	duši:	duši\ngu	dušika\ra	-	
146	友	浅B	X	2	A	duši	duši\ngu	dušika\ra	-	
159	上	浅A	X	2	A	?wiR	?wiR\ngu	?wiRka\ra	-	
159	上	浅B	X	2	A	?wiR	?wiVRnu	?wiRka\ra	-	
166	口	浅A	X	2	A	kutsi:	kutsi\ngu	kutsika\ra	-	
166	口	浅B	X	2	A	kutsi	kutsi\ngu	kutsika\ra	-	
168	豚	浅A	X	2	C	?waR	?waR\ngu	?waRka\ra	-	
168	豚	浅B	X	2	C	?waR	?waVRnu	?waR\kara	-	
169	釘	浅A	X	2	A	?kugi:	?kugi\ngu	?kugika\ra	-	
169	釘	浅B	X	2	A	?kugi	?kugi\ngu	?kugika\ra	-	
171	息	浅A	X	2	C	iV:ki	iV:kinu	iV:kikara	-	
171	息	浅B	X	2	C	iV:ki	iV:kinu	iV:kikara	-	
176	白	浅A	X	2	C	u:Vsī	u:Vsīnu	u:Vsīkara	-	
176	白	浅B	X	2	C	usi:	usi\ngu	usika\ra	-	
×	味	浅A	X	2	-	adzī:	adzī\ngu	adzika\ra	-	
189	涎	浅A	X	2	A	judai	judai\ngu	judaika\ra	-	
189	涎	浅B	X	2	A	judai	judai\ngu	judaika\ra	-	
191	妻	浅A	X	2	A	tudzī:	tudzī\ngu	tudzika\ra	-	
191	妻	浅B	X	2	A	tudzī	tudzī\ngu	tudzika\ra	-	
193	尾	浅A	X	2	A	dzuR	dzuR\ngu	dzuR\kara	-	
193	尾	浅B	X	2	A	dzuR	dzuVRnu	dzuRka\ra	-	
203	鮫	浅A	X	2	A	sjaba:	sjaba\ngu	sjabaka\ra	-	
203	鮫	浅B	X	2	A	saba	saba\ngu	sabaka\ra	-	
208	臍	浅A	X	2	A	husju:	husju\ngu	husjuka\ra	-	
208	臍	浅B	X	2	A	husju	husju\ngu	husjuka\ra	husjuka\raNba	
216	牛	浅A	X	2	A	usi:	usi\ngu	usika\ra	-	
218	火	浅A	X	2	C	?ma:\tsī	?ma:\tsīnu	?ma:\tsīkara	-	
218	火	浅B	X	2	C	?maV:tsī / ?ma:	?ma:\tsīnu	?ma:\tsīkara	-	
219	音	浅A	X	2	A	utu:	utu\ngu	utuka\ra	-	
219	音	浅B	X	2	A	utu	utu\ngu	utuka\ra	-	
220	布団	浅A	X	2	C	u:Vdu	u:Vdunu	uV:dukara	-	
220	布団	浅B	X	2	C	u:Vdu	u:Vdunu	u:Vdukara	-	
228	帶	浅A	X	2	C	?kju:\vbī	?kju:\vbīnu	?kju:\vbīkara	?kju:\vbīkaraNba	
233	前	浅A	X	2	C	mēR	mēR\ngu	mēR\kara	-	
233	前	浅B	X	2	C	mēR	mēR\ngu	mēR\kara	-	
236	杵	浅B	X	2	C	tsī:\tsī	tsī:\tsīnu	tsī:\tsīkara	-	
×	ざる	浅A	X	2	-	sjēR	sjēR\ngu	sjēR\kara	-	
×	ざる	浅B	X	2	-	sjēR	sjēVRnu	sjēR\kara / sjēVRkara	-	
246	紙	浅A	X	2	A	kabi:	kabi\ngu	kabika\ra	kabika\raNba	
246	紙	浅B	X	2	A	kabi:	kabi\ngu	kabika\ra	-	
×	十	浅A	X	2	-	tuR	tuR\ngu	-	-	
3	丘	浅A	X	3	A	mui	mui\ngu	mui\kara	-	
3	丘	浅B	X	3	A	mui	mui\ngu	muika\ra	-	
7	煙	浅A	X	3	A	kību:\sī	kību:\sīnu	-	-	

7	煙	浅B	X	3	A	kibu:Vsī	kibu:Vsīnu	kibu:Vsīkara	-	
7	煙	浅C	X	3	A	kibu\si	kibu\sinu	kibu\sikara	-	
11	食料	浅A	X	3	A	haN\mē	haN\mēnu	-	-	
11	食料・主食	浅B	X	3	A	ha\Nmē	ha\Nmēnu	haNmēka\ra	-	
20	右	浅A	X	3	A	nīgi:\rī	nīgi:\rīnu	nīgi:\rīkara	-	
20	右	浅B	X	3	A	nīgi\:\rī	nīgi\:\rīnu	nīgi\rika\ra	-	
27	港	浅A	X	3	-	mina:^\to	mina:^\tonu	mina:^\tokara	-	
27	港	浅B	X	3	A	tumai	tumai\ngu	tumaika\ra	-	
30	牙	浅A	X	3	A	?ki:\ba	?ki:\banu	?ki:\bakara	-	
30	牙	浅B	X	3	A	?ki\ba	?ki\banu	?ki\bakara	-	
49	翅	浅A	X	3	A	ko\Rdzī	ko\Rdzīnu	ko\Rdzīkara	-	
49	翅	浅B	X	3	A	ko\Rdzi	ko\Rdzinu	ko\Rdzika:ra	-	
43	扇・団扇	浅A	X	3	C	o\Rgi	o\Rginu	o\Rgikara	-	
43	扇・団扇	浅B	X	3	C	o\Rgi	o\Rginu	o\Rgikara	-	
57	黄金	浅A	X	3	A	kuga:\nī	kuga:\nīnu	-	-	
57	黄金	浅B	X	3	A	kuga\ñī	kuga\ñīnu	kuganika:\ra	kuga\nikaraN\ba	
57	黄金	浅C	X	3	A	kuga:\nī	kuga\ñīnu	kuganika\ra	-	
59	鼻血	浅A	X	3	A	hana:\dzī	hana:\dzīnu	hanadzika\ra	-	
59	鼻血	浅B	X	3	A	hana:\dzi	hana:\dzinu	hana:\dzikara	hana:\	
59	鼻血	浅C	X	3	A	hana\dzī	hana\dzīnu	hanadzika\ra	-	
67	蟻	浅A	X	3	-	aN\dzō	aN\dzōnu	aN\dzokara	aN\dzokaraNba	
82	虹	浅A	X	3	A	no\Rdzi	no\Rdzīnu	no\Rdzīkara	-	
82	虹	浅B	X	3	A	no\Rdzi	no\Rdzinu	no\Rdzikara	no\RdzikaraNba	
84	東	浅A	X	3	A	aga:\ri	aga:\rinu	agarika\ra	-	
84	東	浅B	X	3	A	aga\ri / aga:\ri	aga\rinu	agarika:\ra	agarika\raNba	
84	東	浅C	X	3	A	aga\ri	aga\rinu	agarika\ra	-	
86	膝小僧	浅A	X	3	A	tsī\Nsjā	tsī\Nsjānu	tsī\Nsjakara	-	
86	膝小僧	浅B	X	3	A	tsī\Nsjā	tsī\Nsjānu	tsī\Nsjakara / tsī\Nsjaka\ra	-	
87	煤	浅A	X	3	A	hwī\Ngo	hwī\Ngonu	hwī\Ngokara	-	松森語彙では 「垢」
87	煤	浅B	X	3	A	hwī\Ngo	hwī\Ngonu	hwī\Ngokara	-	松森語彙では 「垢」
129	あおさ	浅A	X	3	C	oR\sjā	oR\sjānu	oR\sjakara	-	
129	あおさ	浅B	X	3	C	oR\sa	oR\sanu	oR\sakara	-	
135	釜	浅A	X	3	A	haga:\ma	haga:\manu	haga:\makara	-	
135	釜	浅B	X	3	A	haga\ma	haga\manu	hagamaka\ra	-	
150	今年	浅A	X	3	-	kutu:Vsī	kutu:Vsīnu	kutu:Vsīka:ra / kutusika\ra	-	
150	今年	浅B	X	3	-	kutu:Vsī	kutu:Vsīnu	kutusika\ra	-	
211	蟬	浅A	X	3	-	tsī:\ja	tsī:\jānu	tsī:\jakara	-	
247	一つ	浅A	X	3	C	?tī\Rtsī	?tī\Rtsīnu	-	-	
248	二つ	浅A	X	3	A	?ta\RTsī	?ta\tsīnu	-	-	
249	三つ	浅A	X	3	A	mi\RTsī	mi\tsīnu	-	-	
250	四つ	浅A	X	3	A	ju\RTsī	ju\tsīnu	-	-	
252	六つ	浅A	X	3	A	mu\RTsī	mu\tsīnu	-	-	
254	八つ	浅A	X	3	A	ja\RTsī	ja\tsīnu	-	-	
255	九つ	浅A	X	3	-	kuRnutsī:	kuRnutsī:\nu	-	-	
74	雷	浅A	X	4	-	nai\kami	nai\kaminu	nai\kamikara	-	

213	とんぼ	浅A	X	5	-	eRdzaVRra	eRdzaVRranu	eRdzaVRakara	-	
238	かまきり	浅A	X	6	-	keRsjatobai	keRsjatobaiVnu	keRsjatobaiVkara	-	
2	種	浅A	V	2	A	tani/;/[	tani:/nu[	tanika:[ra	-	
2	種	浅B	V	2	A	tani/;/[	tani:/nu[	tanika:[ra	-	
13	涙	浅A	V	2	B	nada/;/[	nada:/nu[	nadaka:[ra	-	
13	涙	浅B	V	2	B	nada/;/[	nada:/nu[	nadaka:[ra	-	
14	着物	浅A	V	2	A	?kiN/[	?kiN/nu[	?kiNka:[ra	-	
14	着物	浅B	V	2	A	?kiN/[	?kiN/nu[	?kiNka:[ra	-	
33	暇 (古い)	浅A	V	2	B	madu/;/[	madu:/nu[	maduka:[ra	-	
36	畑	浅A	V	2	C	hatē/;/[	hatē:/nu[	hatēka:[ra	-	
36	畑	浅B	V	2	C	hatē/;/[	hatē:/nu[	hatēka:[ra	-	
35	畠	浅A	V	2	B	haru/;/[	haru:/nu[	haruka:[ra	haruka:[raNVba	
35	畠	浅B	V	2	B	haru/;/[	haru:/nu[	haruka:[ra	-	畑がある地域一帯 harusigjuV:tu 畠仕事
48	島	浅A	V	2	B	sima/;/[	sima:/nu[	simaka:[ra	simaka:[raNVba	
48	島	浅B	V	2	B	sima/;/[	sima:/nu[	simaka:[ra	-	
48	島	浅C	V	2	B	sima/;/[	sima:/nu[	simaka:[ra	-	
50	角	浅A	V	2	B	tsino/;/[	tsino:/nu[	tsinoka:[ra	-	
50	角	浅B	V	2	B	tsino/;/[	tsino:/nu[	tsinoka:[ra	-	
53	波	浅A	V	2	B	nami/;/[	nami:/nu[	namika:[ra	-	
53	波	浅B	V	2	B	nami/;/[	nami:/nu[	namika:[ra	-	
55	針	浅B	V	2	C	ha/i[	hai/nu[	haika:[ra	-	
58	脛	浅A	V	2	B	sini/;/[	sini:/nu[	sinika:[ra	-	
58	脛	浅B	V	2	B	sini/;/[	sini:/nu[	sinika:[ra	sinika:[raVNba	
62	花	浅A	V	2	B	hana/;/[	hana:/nu[	hanaka:[ra	-	
62	花	浅B	V	2	B	hana/;/[	hana:/nu[	hanaka:[ra / hanaka:[ra	hanaka:[raNVba	
64	夜	浅A	V	2	B	juru/;/[	juru:/nu[	juruka:[ra	-	
64	夜	浅B	V	2	B	juru/;/[	juru:/nu[	juruka:[ra	juruka:[raNVba	
66	明日	浅A	V	2	B	acja/;/[	acja:/nu[	acjaka:[ra	acjaka:[raNVba	
66	明日	浅B	V	2	B	acja/;/[	acja:/nu[	acjaka:[ra / acjaka:[ra	acjaka:[raVNba	
68	潮・海水	浅A	V	2	B	usju/;/[	usju:/nu[	usjuka:[ra	-	
68	潮・海水	浅B	V	2	B	usju/;/[	usju:/nu[	usju:ka:[ra	-	usjumi:[dzi 海水
69	腕	浅A	V	2	-	udi/;/[	udi:/nu[	udika:[ra	-	
69	腕	浅B	V	2	-	udi/;/[	udi:/nu[	udika:[ra	-	
72	貝	浅A	V	2	B	mja/R[	mjaR/nu[	mjaRka:[ra	-	
72	貝	浅B	V	2	B	mja/R[	mjaR/nu[	mjaRka:[ra	-	
75	亀	浅A	V	2	B	kami/;/[	kami:/nu[	kamika:[ra	-	
75	亀	浅B	V	2	B	kami/;/[	kami:/nu[	kamika:[ra	-	
75	亀	浅C	V	2	B	kami/;/[	kami:/nu[	kamika:[ra	-	
76	櫛	浅A	V	2	-	kusi/;/[	kusi:/nu[	kusika:[ra	-	
81	蛸	浅A	V	2	B	to/R[	toR/nu[	toRka:[ra	-	
81	蛸	浅B	V	2	B	to/R[	toR/nu[	toRka:[ra	-	
81	蛸	浅C	V	2	B	to/R[	toR/nu[	toRka:[ra	-	
83	土	浅A	V	2	B	Ncja/;/[	Ncja:/nu[	Ncjaka:[ra	-	
83	土	浅B	V	2	B	Ncja/;/[	Ncja:/nu[	Ncjaka:[ra	-	
92	たんこぶ	浅A	V	2	C	gahu/;/[	gahu:/nu[	gahuka:[ra	-	gabu/;/[でも良い

92	たんこぶ	浅B	V	2	C	gabu/;[	gabu:/nu[	gabuka:[ra	-	
94	南	浅A	V	2	B	hwë/R[	hwëR/nu[	hwëRka:[ra	-	
94	南	浅B	V	2	B	hwë/R[	hwëR/nu[	hwëRka:[ra	-	
99	齒	浅A	V	2	B	ha/R[	haR/nu[	haRka:[ra	-	
99	齒	浅B	V	2	B	ha/R[	haR/nu[	haRka:[ra	-	
100	木	浅A	V	2	B	kî/R[	kîR/nu[	kîRka:[ra	-	
100	木	浅B	V	2	B	kî/R[	kîR/nu[	kîRka[ra	kî:ka[ra\Nba	
100	木	浅C	V	2	B	kî/R[	kîR/nu[	kîRka[ra	-	
105	網	浅A	V	2	B	ami/;[	ami:/nu[	amika:[ra	-	
105	網	浅B	V	2	B	ami/;[	ami:/nu[	amika:[ra	-	
106	雨	浅A	V	2	B	amî/;[	amî:/nu[	amîka:[ra	-	
106	雨	浅B	V	2	B	amî/;[	amî:/nu[	amîka:[ra	-	
108	湯	浅A	V	2	B	ju/R[	juR/nu[	juRka:[ra	-	
108	湯	浅B	V	2	B	ju/R[	juR/nu[	juRka[ra	ju:ka[ra\Nba	
111	雲	浅A	V	2	B	?kumo/;[	?kumo:/nu[	?kumoka:[ra	-	
111	雲	浅B	V	2	B	kumo/;[	kumo:/nu[	kumoka:[ra	-	
112	鎌	浅A	V	2	B	kama/;[	kama:/nu[	kamaka:[ra	-	
112	鎌	浅B	V	2	B	kama/;[	kama:/nu[	kamaka:[ra	-	
113	色	浅A	V	2	B	iru/;[	iru:/nu[	iruka:[ra	-	
113	色	浅B	V	2	B	iru/;[	iru:/nu[	iruka:[ra	-	
118	豆	浅A	V	2	B	mamî/;[	mamî:/nu[	mamîka:[ra	-	
118	豆	浅B	V	2	B	mamî/;[	mamî:/nu[	mamîka:[ra	-	
121	麦	浅A	V	2	B	mugi/;[	mugi:/nu[	mugika:[ra	-	
121	麦	浅B	V	2	B	mugi/;[	mugi:/nu[	mugika:[ra	-	
122	糸	浅A	V	2	C	icju/;[	icju:/nu[	icjuka:[ra	-	
122	糸	浅A	V	2	C	itu/;[	itu:/nu[	ituka:[ra	-	
122	糸	浅B	V	2	C	itu/;[	itu:/nu[	ituka:[ra	-	
124	肩	浅A	V	2	B	kata/;[	kata:/nu[	kataka:[ra	-	
124	肩	浅B	V	2	B	kata/;[	kata:/nu[	kataka:[ra	-	
125	草	浅A	V	2	B	kusja/;[	kusja:/nu[	kusjaka:[ra	-	
125	草	浅B	V	2	B	kusja/;[	kusja:/nu[	kusjaka:[ra	-	
153	肉	浅A	V	2	B	sîsî/;[	sîsî:/nu[	sîsîka:[ra	-	masî\Vsî / masî:Vsî 赤肉 (真肉?)
153	肉	浅B	V	2	B	sîsî/;[	sîsî:/nu[	sîsîka:[ra	-	
155	薪	浅B	V	2	-	to/N[	toN/nu[	toNka:[ra	-	
163	紐	浅A	V	2	C	iru/;[	iru:/nu[	iruka:[ra	-	
163	紐	浅B	V	2	-	himo/;[	himo:/nu[	himoka:[ra	-	
164	手	浅A	V	2	B	tî/R[	tîR/nu[	tîRka:[ra	-	
164	手	浅B	V	2	B	tî/R[	tîR/nu[	tîRka:[ra	-	
165	腕	浅B	V	2	-	wa/N[	waN/nu[	waNka[ra	-	
170	目	浅A	V	2	B	mî/R[	mîR/nu[	mîRka:[ra	-	
170	目	浅B	V	2	B	mî/R[	mîR/nu[	mîRka:[ra	-	
175	板	浅A	V	2	B	icja/;[	icja:/nu[	icjaka:[ra	-	
175	板	浅B	V	2	B	icja/;[	icja:/nu[	icjaka:[ra	-	icjaka[bî 板壁
180	藁	浅A	V	2	B	wara/;[	wara:/nu[	waraka:[ra	-	
180	藁	浅B	V	2	B	wara/;[	wara:/nu[	waraka:[ra	-	
181	犬	浅A	V	2	B	i/N[	iN/nu[	iNka:[ra	-	
181	犬	浅B	V	2	B	i/N[	iN/nu[	iNka:[ra	-	
182	傘・笠	浅A	V	2	B	kasja/;[	kasja:/nu[	kasjaka:[ra	-	

182	傘・笠	浅B	V	2	B	kasja/;	kasja:/nu	kasjaka:[ra	-	
183	米	浅A	V	2	B	kumī/;	kumī:/nu	kumika:[ra	-	
183	米	浅B	V	2	B	kumī/;	kumī:/nu	kumika:[ra	-	
184	声	浅A	V	2	C	ku/i	kui/nu	kuika:[ra	-	
184	声	浅B	V	2	C	ku/i	kui/nu	kuika:[ra	-	
185	汁	浅A	V	2	B	sīru/;	sīru:/nu	sīruka:[ra	-	
185	汁	浅B	V	2	B	sīru/;	sīru:/nu	sīruka:[ra	-	
187	顔(面)	浅A	V	2	B	tsīra/;	tsīra:/nu	tsīraka:[ra	-	
187	顔(面)	浅B	V	2	B	tsīra/;	tsīra:/nu	tsīraka:[ra	-	
190	山	浅A	V	2	B	jama/;	jama:/nu	jamaka:[ra	-	
190	山	浅B	V	2	B	jama/;	jama:/nu	jamaka:[ra	-	
198	踵	浅A	V	2	B	adu/;	adu:/nu	aduka:[ra	-	
198	踵	浅B	V	2	B	adu/;	adu:/nu	aduka:[ra	-	
200	耳	浅A	V	2	B	mi/N	miN/nu	miNka:[ra	-	
200	耳	浅B	V	2	B	mi/N	miN/nu	miNka:[ra	miNka:[ra\Nba	
201	味噌	浅A	V	2	B	misju/;	misju:/nu	misjuka:[ra	-	
201	味噌	浅B	V	2	B	misju/;	misju:/nu	misjuka:[ra	-	
202	糠	浅A	V	2	B	nuka/;	nuka:/nu	nukaka:[ra	-	
202	糠	浅B	V	2	B	nuka/;	nuka:/nu	nukaka:[ra	-	
204	サトウキビ	浅A	V	2	B	wugi/;	wugi:/nu	wugika:[ra	-	
204	サトウキビ	浅B	V	2	B	wugi/;	wugi:/nu	wugika:[ra	-	
205	昨日	浅A	V	2	C	?kinu/;	?kinu:/nu	?kinuka:[ra	-	
205	昨日	浅B	V	2	C	?kinu/;	?kinu:/nu	?kinuka:[ra	-	
206	青年	浅A	V	2	B	nēsje/;	nēsje:/nu	nēsjeka:[ra	-	
206	青年	浅B	V	2	B	nēsje/;	nēsje:/nu	nēsje:ka:[ra	-	
209	子供	浅A	V	2	C	warē/;	warē:/nu	warēka:[ra	-	
209	子供	浅B	V	2	C	warē/;	warē:/nu	warēka:[ra	-	
221	穂	浅A	V	2	B	hu/R	huR/nu	huRka:[ra	-	
221	穂	浅B	V	2	B	hu/R	huR/nu	huRka:[ra	-	
223	舌	浅A	V	2	B	sība/;	sība:/nu	sībaka:[ra	-	
223	舌	浅B	V	2	B	sība/;	sība:/nu	sībaka:[ra	-	
224	家	浅A	V	2	B	ja/R	jaR/nu	jaRka:[ra	-	
224	家	浅B	V	2	B	ja/R	jaR/nu	jaRka:[ra	-	
229	萱	浅A	V	2	B	gīja/;	gīja:/nu	gījaka:[ra	-	
229	萱	浅B	V	2	B	gīja/;	gīja:/nu	gījaka:[ra	-	gījabu[ki 萱茸き
230	去年	浅A	V	2	B	kudzu/;	kudzu:/nu	kudzuka:[ra	-	
230	去年	浅B	V	2	B	kudzu/;	kudzu:/nu	kudzuka:[ra	-	
234	灸	浅A	V	2	C	jacjo/;	jacjo:/nu	jacjoka:[ra	-	
234	灸	浅B	V	2	C	jacjo/;	jacjo:/nu	jacjoka:[ra	-	
235	小葱	浅A	V	2	B	bira/;	bira:/nu	biraka:[ra	-	松森語彙では「韭」
235	小葱	浅B	V	2	B	bira/;	bira:/nu	biraka:[ra	-	
6	鋤	浅A	V	3	-	toRgwē;	toRgwē:nu	toRgwē:[ka\ra	-	
6	鋤	浅B	V	3	-	toRgwē;	toRgwē:nu	toRgwē:[ka\ra	-	
6	鋤	浅C	V	3	-	toRgwē;	toRgwē:nu	toRgwē:[ka\ra	-	
21	鋤	浅A	V	3	B	jidza/i	jidzai:nu	jidzai:[ka\ra	-	
21	鋤	浅B	V	3	B	jidza/i	jidzai:nu	jidzai:[ka\ra	-	
40	枕	浅A	V	3	B	maQkwa;	maQkwa:nu	maQkwa:[ka\ra	-	
40	枕	浅B	V	3	B	maQkwa;	maQkwa:nu	maQkwa:[ka\ra	-	

44	薬	浅A	V	3	C	kusju/i[	kusjui[nu	kusjui[ka\ra	-	
44	薬	浅B	V	3	C	kusju/i[	kusjui[nu	kusjui[ka\ra	-	
60	若い娘	浅A	V	3	C	mëRrë[;	mëRrë:[nu	mëRrë[ka\ra	-	
60	若い娘	浅B	V	3	C	mëRrë[;	mëRrë:[nu	mëRrë[ka\ra	-	
65	油	浅A	V	3	B	aNba[;	aNba:[nu	aNba[ka\ra	-	
65	油	浅B	V	3	B	aNba[;	aNba:[nu	aNba[ka\ra	-	
65	油	浅C	V	3	B	aNba[;	aNba[nu	aNba[ka\ra	-	
69	腕	浅B	V	3	B	kaina[;	kaina:[nu	kaina[ka\ra	-	
71	鋏	浅A	V	3	B	hasjami[;	hasjami:[nu	hasjami[ka\ra	-	hasjamiN[ba
71	鋏	浅B	V	3	B	hasjami[;	hasjami:[nu	hasjami[ka\ra	-	
76	櫛	浅A	V	3	B	sjaRki[;	sjaRki:[nu	sjaRki[ka\ra	-	
76	櫛	浅B	V	3	B	sjaRki[;	sjaRki:[nu	sjaRki[ka\ra	-	
77	下駄	浅A	V	3	B	aNdza[;	aNdza:[nu	aNdza[ka\ra	-	
77	下駄	浅B	V	3	B	aNdza[;	aNdza:[nu	aNdza[ka\ra	-	
85	しゃもじ	浅B	V	3	-	misige[;	misige:[nu	misige[ka\ra	misige[ka\raNba	
89	ふくら脛	浅A	V	3	B	kuNba[;	kuNba:[nu	kuNba[ka\ra	-	kuNbaN[ba
89	ふくら脛	浅B	V	3	B	kuNba[;	kuNba:[nu	kuNba[ka\ra	-	
91	水溜り・池	浅A	V	3	B	kumu/i[	kumui[nu	kumui[ka\ra	-	
91	水溜り・池	浅B	V	3	B	kumu/i[	kumui[nu	kumui[ka\ra	-	
98	左	浅A	V	3	B	sïdza/i[	sïdzai[nu	sïdzai[ka\ra	-	
98	左	浅B	V	3	B	sïdza/i[	sïdzai[nu	sïdzai[ka\ra	-	
98	左	浅C	V	3	B	sïdza/i[	sïdzai[nu	-	-	
103	俵	浅A	V	3	B	toRra[;	toRra:[nu	toRra[ka\ra	-	
119	暦	浅A	V	3	B	?kujumi[;	?kujumi:[nu	?kujumi[ka\ra	-	
119	暦	浅B	V	3	B	?kujumi[;	?kujumi:[nu	?kujumi[ka\ra	?kujumi[ka\raNba	
119	暦	浅C	V	3	B	?kujumi[;	?kujumi[nu	?kujumi[ka\ra	-	
120	命	浅A	V	3	B	inotsï[;	inotsï:[nu	inotsï[ka\ra	-	inotsïN[ba
120	命	浅B	V	3	B	inutsï[;	inutsï:[nu	inutsï[ka\ra	inutsï[ka\raNba	
120	命	浅C	V	3	B	inotsï[;	inotsï[nu	inotsï[ka\ra	-	
134	鱗・ふけ	浅A	V	3	B	iQki[;	iQki:[nu	iQki[ka\ra	-	
134	鱗・ふけ	浅B	V	3	B	iQki[;	iQki:[nu	iQki[ka\ra	-	
139	蚊	浅A	V	3	C	gadza/N[	gadzaN[nu	gadzaN[kara	-	
139	蚊	浅B	V	3	C	gadza/N[	gadzaN[nu	gadzaN[ka\ra	-	
152	南京豆（落花生）	浅A	V	3	B	dzimamï[;	dzimamï:[nu	dzimamï[ka\ra	-	dzimamïN[ba
152	南京豆（落花生）	浅B	V	3	B	dzimamï[;	dzimamï:[nu	dzimamï[ka\ra	-	
152	南京豆（落花生）	浅C	V	3	B	dzimamï[;	dzimamï:[nu	dzimamï[ka\ra	-	
158	目下の人・弟	浅A	V	3	B	uQtu[;	uQtu:[nu	uQtu[ka\ra	-	
158	目下の人・弟	浅B	V	3	B	uQtu[;	uQtu:[nu	uQtu[ka\ra	-	
160	とさか	浅A	V	3	C	kaga/N[	kagaN[nu	kagaN[ka\ra	-	
160	とさか	浅B	V	3	C	kaga/N[	kagaN[nu	kagaN[ka\ra	-	
177	鏡	浅A	V	3	B	kagami[;	kagami:[nu	kagami[ka\ra	-	kagamiN[ba
177	鏡	浅B	V	3	B	kagami[;	kagami:[nu	kagami[ka\ra	kagami[ka\raNba	
178	虱	浅A	V	3	C	sïna/N[	sïnaN[nu	sïnaN[ka\ra	-	
178	虱	浅B	V	3	C	sïna/N[	sïnaN[nu	sïnaN[ka\ra	-	

195	男	浅A	V	3	B	jiNga[;	jiNga:[nu	jiNga[ka\ra	-	
195	男	浅B	V	3	B	jiNga[;	jiNga:[nu	jiNga[ka\ra	jiNga[ka\raNba	
212	杖	浅A	V	3	C	busja/N[	busjaN[nu	busjaN[ka\ra	-	
212	杖	浅B	V	3	C	busja/N[	busjaN[nu	busjaN[ka\ra	-	
212	杖	浅B	V	3	C	gusja/N[	gusjaN[nu	gusjaN[ka\ra	-	
215	みかん	浅A	V	3	C	?kuni/N[	?kuniN[nu	?kuniN[ka\ra	-	
215	みかん	浅B	V	3	C	?kuni/N[	?kuniN[nu	?kuniN[ka\ra	-	
222	やどかり	浅A	V	3	C	ama/N[	amaN[nu	amaN[ka\ra	-	
222	やどかり	浅B	V	3	C	ama/N[	amaN[nu	amaN[ka\ra	-	
226	苺	浅A	V	3	C	icju/N[	icjuN[nu	icjuN[ka\ra	-	
226	苺	浅B	V	3	C	icju/N[	icjuN[nu	icjuN[ka\ra	-	
227	女	浅A	V	3	B	wunagu[;	wunagu:[nu	wunagu[ka\ra	-	
227	女	浅B	V	3	B	wunagu[;	wunagu:[nu	wunagu[ka\ra	-	
236	杵	浅A	V	3	C	adzi/N[	adziN[nu	adziN[ka\ra	-	
236	杵	浅B	V	3	C	adzi/N[	adziN[nu	adziN[ka\ra	-	
237	顎	浅A	V	3	C	utugē[;	utugē:[nu	utugē[ka\ra	-	utugēN[ba
237	顎	浅B	V	3	C	utugē[;	utugē:[nu	utugē[ka\ra	-	
241	籠の一種	浅A	V	3	C	baQkē[;	baQkē:[nu	baQkē[ka\ra	-	魚を入れる籠
251	五つ	浅A	V	3	B	itsitsi[;	itsitsi:[nu	-	-	
253	七つ	浅A	V	3	B	nanatsi[;	nanatsi:[nu	-	-	
26	鋸	浅A	V	4	B	noRgi:[ri	noRgi:[ri\vu	noRgi:[ri\kara	-	
26	鋸	浅B	V	4	B	noRgi[ri	noRgi[ri\vu	noRgi[ri\kara	noRgi[ri\karaNba	
26	鋸	浅C	V	4	B	noRgi[ri	noRgi[ri\vu	noRgi[rika\ra	-	
74	雷	浅C	V	4	B	kamina[ri	kamina[ri\vu	kamina[ri\kara	-	
97	夜中	浅A	V	4	-	junasja:[na	junasja:[na\vu	junasja:[na\kara	-	
97	夜中	浅B	V	4	-	junasa:[na	junasa:[na\vu	junasa:[na\kara	junasa:[na\karaNba	
97	夜中	浅C	V	4	-	junasa:[na	junasa:[na\vu	junasa[naka\ra	-	
133	朝	浅A	V	4	C	situmi:[ti	situmi:[ti\vu	situmi:[ti\kara	-	
133	朝	浅B	V	4	C	situmi:[ti	situmi:[ti\vu	situmi:[ti\kara / situmi[ti\kara	situmi:[ti\karaNba	
133	朝	浅C	V	4	C	situmi:[ti / situmi[ti	situmi[ti\vu	situmi[ti\kara	-	
138	親子	浅A	V	4	C	ujaQ[kwa	ujaQ[kwa\vu	ujaQ[kwa\kara	-	
138	親子	浅B	V	4	C	ujaQ[kwa	ujaQ[kwa\vu	ujaQ[kwa\kara	ujaQ[kwa\karaNba	
138	親子	浅C	V	4	C	ujaQ[kwa	ujaQ[kwa\vu	ujaQ[kwa\kara	-	
147	台所・母屋と独立した家屋	浅A	V	4	B	toRgu[ra:	toRgu[ra:\vu	toRgura[ka\ra	-	toRgu[raNba
147	台所・母屋と独立した家屋	浅B	V	4	B	toRgu[ra	toRgu[ra\vu	toRgu[ra\kara	toRgu[ra\karaNba	
147	台所・母屋と独立した家屋	浅C	V	4	B	toRgu[ra	toRgu[ra\vu	toRgu[raka\ra	-	
192	暁	浅A	V	4	C	haRtu:[ki	haRtu:[ki\vu	haRtu:[ki\kara	-	
192	暁	浅B	V	4	C	haRtu:[ki / haRtu[ki	haRtu[ki\vu	haRtu[ki\kara	haRtu[ki\karaNba	
192	暁	浅C	V	4	C	haRtu[ki	haRtu[ki\vu	haRtu[kika\ra	-	
203	鮫	浅B	Y	2	A	hu:[ka	hu:[ka\vu	hu:[ka\kara	-	

155	薪	浅A	Y	2	-	to[N	to[N/nu	to[N/ka\ra	-	
32	ソテツの実	浅A	Y	2	B	na[i	na[i/nu	na[i/ka\ra	na[i/ka\raNba	苗も同じく na[i
46	柱	浅A	Y	2	C	ha:[ra	ha:[ra\ngu	ha:[ra\kara	-	
46	柱	浅B	Y	2	C	ha:[ra	ha:[ra\ngu	ha:[ra\kara	ha:[ra\karaNba	ha:\hara 赤い柱
46	柱	浅C	Y	2	C	ha:[ra	ha:[ra\ngu	ha:[ra\kara	-	
54	舟	浅A	Y	2	C	hu:[ni	hu:[ni\ngu	hu:[ni\kara	-	
54	舟	浅B	Y	2	C	hu:[ni	hu:[ni\ngu	hu:[ni\kara	hu:[ni\karaNba	ha:\hunī 赤い舟 kuruhu:[ni 黒い舟
54	舟	浅C	Y	2	C	hu:[ni	hu:[ni\ngu	hu:[ni\kara	-	
55	針	浅A	Y	2	C	ha[i	ha[i/nu	ha[i/ka\ra	-	
56	骨	浅A	Y	2	C	hu:[ni	hu:[ni\ngu	hu:[ni\kara	-	
56	骨	浅B	Y	2	C	hu:[ni	hu:[ni\ngu	hu:[ni\kara	hu:[ni\karaNba	
79	きのこ	浅A	Y	2	C	na:[ba	na:[ba\ngu	na:[ba\kara	-	
79	きのこ	浅B	Y	2	C	na:[ba	na:[ba\ngu	na:[ba\kara	na:[ba\karaNba	ha:\naba 赤いき のこ kuruna:[ba 黒いきのこ
79	きのこ	浅C	Y	2	C	na:[ba	na:[ba\ngu	na:[ba\kara	-	
101	水桶	浅B	Y	2	C	ta:[gu	ta:[gu\ngu	ta:[gu\kara	ta:[gu\karaNba	ha:\tagu 赤い水 桶 kuruta:[gu 黒 い水桶
108	湯	浅C	Y	2	B	ju[R	ju[R/nu	ju[Rkara	-	
126	影	浅A	Y	2	C	ka:[gi	ka:[gi\ngu	ka:[gi\kara	-	
126	影	浅B	Y	2	C	ka:[gi	ka:[gi\ngu	ka:[gi\kara	ka:[gi\karaNba	
128	陰	浅A	Y	2	C	ka:[ta	ka:[ta\ngu	ka:[ta\kara	-	
140	甕	浅A	Y	2	C	ka:[mi	ka:[mi\ngu	ka:[mi\kara	-	
140	甕	浅B	Y	2	C	ka:[mi	ka:[mi\ngu	ka:[mi\kara	ka:[mi\karaNba	ha:\gamī 赤い甕 kuruga:[mi 黒い 甕
144	尻	浅A	Y	2	B	ma[i	ma[i/nu	ma[i/ka\ra	-	
144	尻	浅B	Y	2	B	ma[i	ma[i/nu	ma[i/ka\ra	ma[i/ka\raNba	
144	尻	浅C	Y	2	B	ma[i	ma[i/nu	ma[i/ka\ra	-	
145	浜	浅A	Y	2	C	ha:[ma	ha:[ma\ngu	ha:[ma\kara	-	
145	浜	浅B	Y	2	C	ha:[ma	ha:[ma\ngu	ha:[ma\kara	ha:[ma\karaNba	?kiniN[ba\ma / ?kiniN[ba\ma 喜 念浜
×	囲炉裏	浅A	Y	2	-	dzi:[ru	dzi:[ru\ngu	dzi:[ru\kara	-	
×	囲炉裏	浅B	Y	2	-	dzi:[ru	dzi:[ru\ngu	dzi:[ru\kara	dzi:[ru\karaNba	
148	梢	浅A	Y	2	C	sju:[ra	sju:[ra\ngu	sju:[ra\kara	-	
148	サトウキビの 先端	浅B	Y	2	C	sju:[ra	sju:[ra\ngu	sju:[ra\kara	sju:[ra\karaNba	
156	卵	浅A	Y	2	C	ku:[ga	ku:[ga\ngu	ku:[ga\kara	-	
156	卵	浅B	Y	2	C	ku:[ga	ku:[ga\ngu	ku:[ga\kara	ku:[ga\karaNba	ha:\kuga 赤い卵 kuruku:[ga 黒い 卵
156	卵	浅C	Y	2	C	ku:[ga	ku:[ga\ngu	ku:[ga\kara	-	
157	太陽	浅A	Y	2	C	ti:[da	ti:[da\ngu	ti:[da\kara	ti:[da\karaNba	
161	ひしゃく	浅A	Y	2	C	ni:[bu	ni:[bu\ngu	ni:[bu\kara	-	

161	ひしゃく	浅B	Y	2	C	nī:[bu	nī:[bu\ɲu	nī:[bu\kara	nī:[bu\karaNba	ha:\nību 赤いひしゃく kurunī:[bu 黒いひしゃく kuganī[ni:\ɲbu 黄金ひしゃく
165	椀	浅A	Y	2	-	wa[N	wa[N/\nu	wa[N/\ka\ra	-	
172	目上の人	浅A	Y	2	C	sji:[da	sji:[da\ɲu	sji:[da\kara	-	
172	目上の人	浅B	Y	2	C	sī:[da	sī:[da\ɲu	sī:[da\kara	sī:[da\karaNba	
173	蓬	浅A	Y	2	C	hu:[tsī	hu:[tsī\ɲu	hu:[tsī\kara	-	
173	蓬	浅B	Y	2	C	hu:[tsī	hu:[tsī\ɲu	hu:[tsī\kara	hu:[tsī\karaNba	ha:\hutsī 赤い蓬 kuruhu:[tsī 黒い蓬
173	蓬	浅C	Y	2	C	hu:[tsī	hu:[tsī\ɲu	hu:[tsī\kara	-	
174	来年	浅A	Y	2	C	ja:[nī	ja:[nī\ɲu	ja:[nī\kara	-	
174	来年	浅B	Y	2	C	ja:[nī	ja:[nī\ɲu	ja:[nī\kara / ja:nī[ka\ra / ja:nī[ka\ra	ja:[nī\karaNba	
181	犬	浅C	Y	2	B	i[N	i[N/\nu	i[Nkara	-	
186	鍋	浅A	Y	2	C	na:[bī	na:[bī\ɲu	na:[bī\kara	-	
186	鍋	浅B	Y	2	C	na:[bī	na:[bī\ɲu	na:[bī\kara	na:[bī\karaNba	ha:\nabī 赤い鍋 kuruna:[bī 黒い鍋
188	蚤	浅A	Y	2	C	nu:[mi	nu:[mi\ɲu	nu:[mi\kara	-	
188	蚤	浅B	Y	2	C	nu:[mi	nu:[mi\ɲu	nu:[mi\kara	nu:[mi\karaNba	ha:\numi 赤い蚤 kurunu:[mi 黒い蚤
199	猿	浅A	Y	2	C	sja:[ru	sja:[ru\ɲu	sja:[ru\kara	-	
199	猿	浅B	Y	2	C	sja:[ru	sja:[ru\ɲu	sja:[ru\kara	sja:[ru\karaNba	ha:\sjaru 赤い猿 kurusja:[ru 黒い猿
210	砂糖	浅A	Y	2	C	sja:[ta	sja:[ta\ɲu	sja:[ta\kara	-	
210	砂糖	浅B	Y	2	C	sja:[ta	sja:[ta\ɲu	sja:[ta\kara	sja:[ta\karaNba	ha:\dzata 赤い砂糖 kurudza:[ta 黒い砂糖
232	松	浅A	Y	2	C	ma:[tsī	ma:[tsī\ɲu	ma:[tsī\kara	-	
232	松	浅B	Y	2	C	ma:[tsī	ma:[tsī\ɲu	ma:[tsī\kara	ma:[tsī\karaNba	ha:\matsī 赤い松 kuruma:[tsī\ 黒い松
240	籠の一種	浅A	Y	2	C	tī:[ru	tī:[ru\ɲu	tī:[ru\kara	-	
240	籠の一種	浅B	Y	2	C	tī:[ru	tī:[ru\ɲu	tī:[ru\kara	tī:[ru\karaNba	ha:\tīru 赤い籠 kurutī:[ru 黒い籠
244	バツタ	浅A	Y	2	C	ga:[ta	ga:[ta\ɲu	ga:[ta\kara	-	
244	バツタ	浅B	Y	2	C	ga:[ta	ga:[ta\ɲu	ga:[ta\kara	ga:[ta\karaNba	ha:\gata 赤いバツタ kuruga:[ta 黒いバツタ
4	箒	浅A	Y	3	C	hoR[ki	hoR[ki\ɲu	hoR[ki\kara	-	
4	箒	浅B	Y	3	C	hoR[ki	hoR[ki\ɲu	hoR[ki\kara	hoR[ki\karaNba	
5	髪・頭	浅A	Y	3	C	kara:[dzi	kara:[dzi\ɲu	kara:[dzi\kara / kara[dzi\kara	-	

5	髪・頭	浅B	Y	3	C	kara:[dzi / kara[dzi	kara[dzi\ngu	kara:[dzi\vkara	kara:[dzi\vkaraNba	kara[dzi\ngu ki 髪 の毛 ha:\vkaradzī 赤い髪
8	袋	浅A	Y	3	C	huQ[ku	huQ[ku\ngu	huQ[ku\vkara	-	
8	袋	浅B	Y	3	C	huQ[ku	huQ[ku\ngu	huQ[ku\vkara	huQ[ku\vkaraNba	
8	袋	浅C	Y	3	C	huQ[ku	huQ[ku\ngu	huQ[ku\vkara	-	
29	蓆	浅A	Y	3	C	muQ[sju	muQ[sju\ngu	muQ[sju\vkara	-	
29	蓆	浅B	Y	3	C	muQ[sju	muQ[sju\ngu	muQ[sju\vkara	muQ[sju\vkaraNba	
42	兎	浅A	Y	3	C	usja:[gi	usja:[gi\ngu	usja:[gi\vkara	-	ha:\vusjagi 赤い兎 kuruu[sja:\vgi 黒 い兎
42	兎	浅B	Y	3	C	usja:[gi / usja[gi	usja:[gi\ngu	usja:[gi\vkara	usja:[gi\vkaraNba	ha:\vusjagi 赤い兎 kuruu[sja:\vgi 黒 い兎
44	葉	浅C	Y	3	C	kusju[i	kusju[ingu	kusju[i\vkara	-	
45	情け	浅A	Y	3	C	nasja:[kī	nasja:[kī\ngu	nasja:[kī\vkara	-	
45	情け	浅B	Y	3	C	nasa[kī	nasa[kī:ngu / nasa[kīngu	nasa[kika\ra	nasa[kika\raNba	
63	刀	浅B	Y	3	C	kata:[na / kata[na	kata[na\ngu	kata:[na\vkara	-	
63	刀	浅C	Y	3	C	kata:[na	kata[na\ngu	kata:[na\vkara	kata:[na\vkaraNba	ha:\vgatana 赤い 刀 kuruga[ta:\vna 黒い刀
194	かぼちゃ類の 総称	浅A	Y	3	C	cjibu:[ru	cjibu:[ru\ngu	cjibu:[ru\vkara	-	
194	かぼちゃ類の 総称	浅B	Y	3	C	tsibu:[ru	tsibu:[ru\ngu	tsibu:[ru\vkara	tsibu:[ru\vkaraNba	ha:\vtsīburu 赤い かぼちゃ kurutsi [bu:\vru 黒いかぼ ちゃ
85	しゃもじ	浅A	Y	3	-	sjaku:[sī	sjaku:[sī\ngu	sjaku:[sī\vkara	-	
136	雲丹	浅A	Y	3	C	gatsi:[tsī	gatsi:[tsī\ngu	gatsi:[tsī\vkara	-	
136	雲丹	浅B	Y	3	C	gatsi:[tsī	gatsi:[tsī\ngu	gatsi:[tsī\vkara	gatsi:[tsī\vkaraNba	ha:\vgatsisiti 赤い 雲丹 kuruga[tsi:\v tsī 黒い雲丹
136	雲丹	浅C	Y	3	C	gatsi[tsī	gatsi[tsī\ngu	gatsi[tsī\vkara	-	
139	蚊	浅C	Y	3	C	gadza[N	gadzaN[ngu	gadza[N\vkara	-	
149	蝶・蛾	浅A	Y	3	B	habi:[ru	habi:[ru\ngu	habi:[ru\vkara	-	
149	蝶・蛾	浅B	Y	3	B	habi:[ru	habi:[ru\ngu	habi:[ru\vkara	habi:[ru\vkaraNba	ha:\vhabīru 赤い 蝶 kuruha[bī:\vru 黒い蝶
149	蝶・蛾	浅C	Y	3	B	habi[ru	habi[ru\ngu	habi[ru\vkara	-	
154	へちま	浅A	Y	3	B	nabi:[ra	nabi:[ra\ngu	nabi:[ra\vkara	-	
154	へちま	浅B	Y	3	B	nabi:[ra / nabī [ra	nabi:[ranu	nabi:[ra\vkara	nabi:[ra\vkaraNba	ha:\vnabīra 赤い へちま kuruna[bī :\vra 黒いへちま
154	へちま	浅C	Y	3	B	nabi[ra / nabī:	nabi:[ranu	nabi[ra\vkara	-	
156	卵	浅A	Y	3	-	tama:[gu	tama:[gu\ngu	tama:[gu\vkara	-	

156	卵	浅B	Y	3	-	tama:[gu	tama:[gu\ngu	tama:[gu\vkara	tama:[gu\vkaraNba	
156	卵	浅C	Y	3	-	tama:[gu	tama:[gu\ngu	tama:[gu\vkara	-	
167	ふんどし	浅A	Y	3	C	sjana:[gi	sjana:[gi\ngu	sjana:[gi\vkara	-	
167	ふんどし	浅B	Y	3	C	sana:[gi	sana:[gi\ngu	sana:[gi\vkara	sana:[gi\vkaraNba	ha:\sanagi 赤い ふんどし kurusa[na:\gi 黒 いふんどし
179	鰻	浅A	Y	3	C	una:[gi	una:[gi\ngu	una:[gi\vkara	-	
179	鰻	浅B	Y	3	C	una:[gi	una:[gi\ngu	una:[gi\vkara	una:[gi\vkaraNba	ha:\unagi 赤い鰻 kuruu[na:\gi 黒 い鰻
197	おでき	浅A	Y	3	C	nibu:[tu	nibu:[tu\ngu	nibu:[tu\vkara	-	
197	おでき	浅B	Y	3	C	nibu:[tu	nibu:[tu\ngu	nibu:[tu\vkara	nibu:[tu\vkaraNba	ha:\nibutu 赤い おでき kurun[bu :\tu 黒いおでき
197	おでき	浅C	Y	3	C	nibu:[tu / nibu:[tu	nibu:[tunu	nibu:[tu\vkara	-	
207	腰周り	浅A	Y	3	C	gama:[ku	gama:[ku\ngu	gama:[ku\vkara	-	
207	腰周り	浅B	Y	3	C	gama:[ku	gama:[ku\ngu	gama:[ku\vkara	gama:[ku\vkaraNba	
214	モッコ (運搬網)	浅A	Y	3	-	moQ[ko	moQ[ko\ngu	moQ[ko\vkara	-	
231	烏	浅A	Y	3	C	gara:[si	gara:[si\ngu	gara:[si\vkara	-	
231	烏	浅B	Y	3	C	ga:[ra	ga:[ra\ngu	ga:[ra\vkara	ga:[ra\vkaraNba	ha:\gara 赤い烏 kuruga:[ra 黒い 烏
245	白髪	浅A	Y	3	C	sira:[gi	sira:[gi\ngu	sira:[gi\vkara	-	
245	白髪	浅B	Y	3	C	sira:[gi	sira:[gi\ngu	sira:[gi\vkara	sira:[gi\vkaraNba / sira:[gi\vkaraNba	siragimaNdziN 白髪がたくさん あること